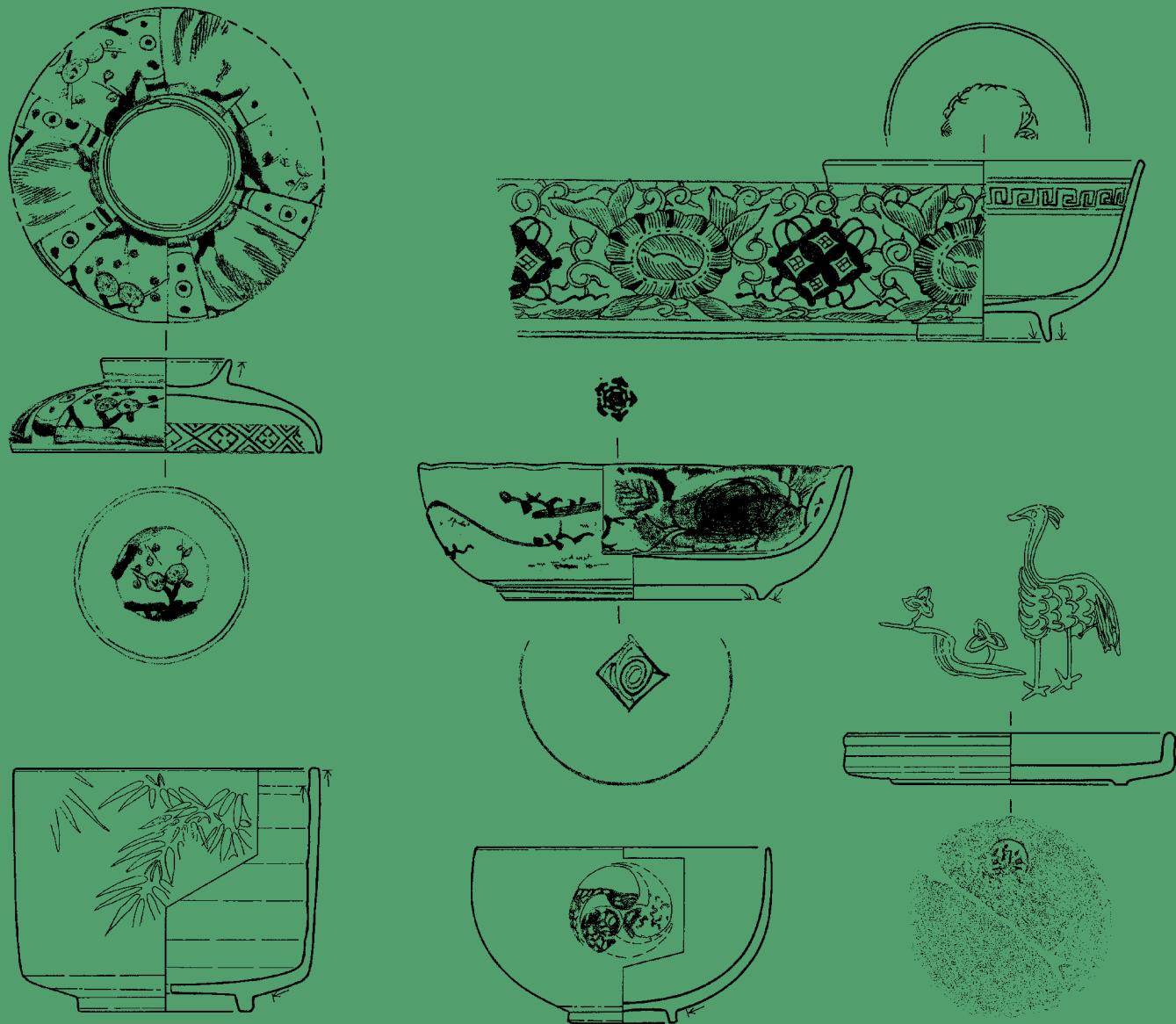


# 首里城跡

－東のアザナ地区発掘調査報告書－



2004年（平成16）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 首里城跡

－東のアザナ地区発掘調査報告書－

2004年（平成16）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

## 序

本報告書は 1993 年度（平成 5）から翌 1994 年度（平成 6）の 2 カ年にわたって実施した首里城跡東のアザナ地区の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査は沖縄県教育委員会文化課が実施し、沖縄県立埋蔵文化財センターの開所に伴って、資料の整理作業を当埋蔵文化財センターが行い、この度報告書を刊行することとなりました。

1986 年度（昭和 61）から首里城跡の復元整備事業が着手され、1992 年度（平成 4）には正殿、北殿、南殿、奉神門等が復元されて以降、首里城周辺の整備も引き続いて行われ、首里城公園として供用されています。

今回はその整備事業の一環として、東のアザナ地区の発掘調査を実施しました。調査対象区域は首里城跡の内郭の東端、かつて「東のアザナ」「寝廟殿」「白銀門」などの建造物があった場所であります。「寝廟殿」は首里城の中でも国王の位牌を祀る場所、また国王薨去時には遺体を仮安置すると言った場所で、「白銀門」は寝廟殿へ至る石門でした。また、「東のアザナ」は首里城の中で最も高い位置につくられた物見台でした。

これらの構造物や石積み等は去る大戦並びにその後の旧琉球大学整備において大きく破壊を受け、その厳密な位置や規模については長らく不明でありました。

今回の調査では「東のアザナ」の周りを巡らしていた石積みの根石等は把握できたものの、「寝廟殿」「白銀門」は破壊が著しく、痕跡すら確認できない状況がありました。調査に伴って膨大な陶磁器類をはじめとする多種多様な出土品が得られました。

これらの成果をまとめた本報告書が、沖縄における王国時代の歴史や首里城の様相を知る上で貴重な資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深めることにもつながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や資料整理を行うにあたってご指導賜りました諸先生方をはじめ、調査にご協力頂きました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

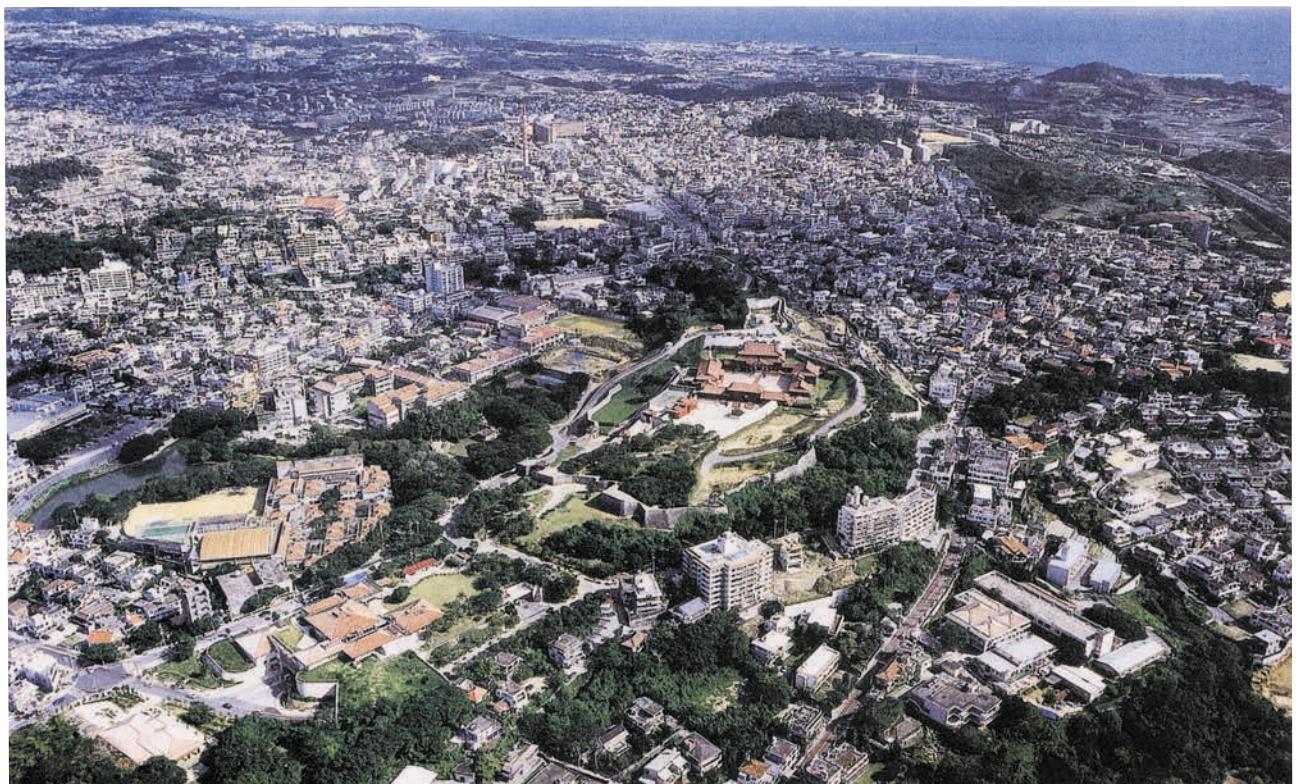
2004 年（平成 16）3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 安里 嗣淳



上空から見た首里城跡(沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所1995)



南西上空から見た首里城跡(沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所1995)



検出された南側石積み(南東より)



完掘後の状況(西より)



検出された南側石積み(南より)



検出された美福門に至る階段及び方形状石囲い(南より)



出土遺物

卷首図版 4

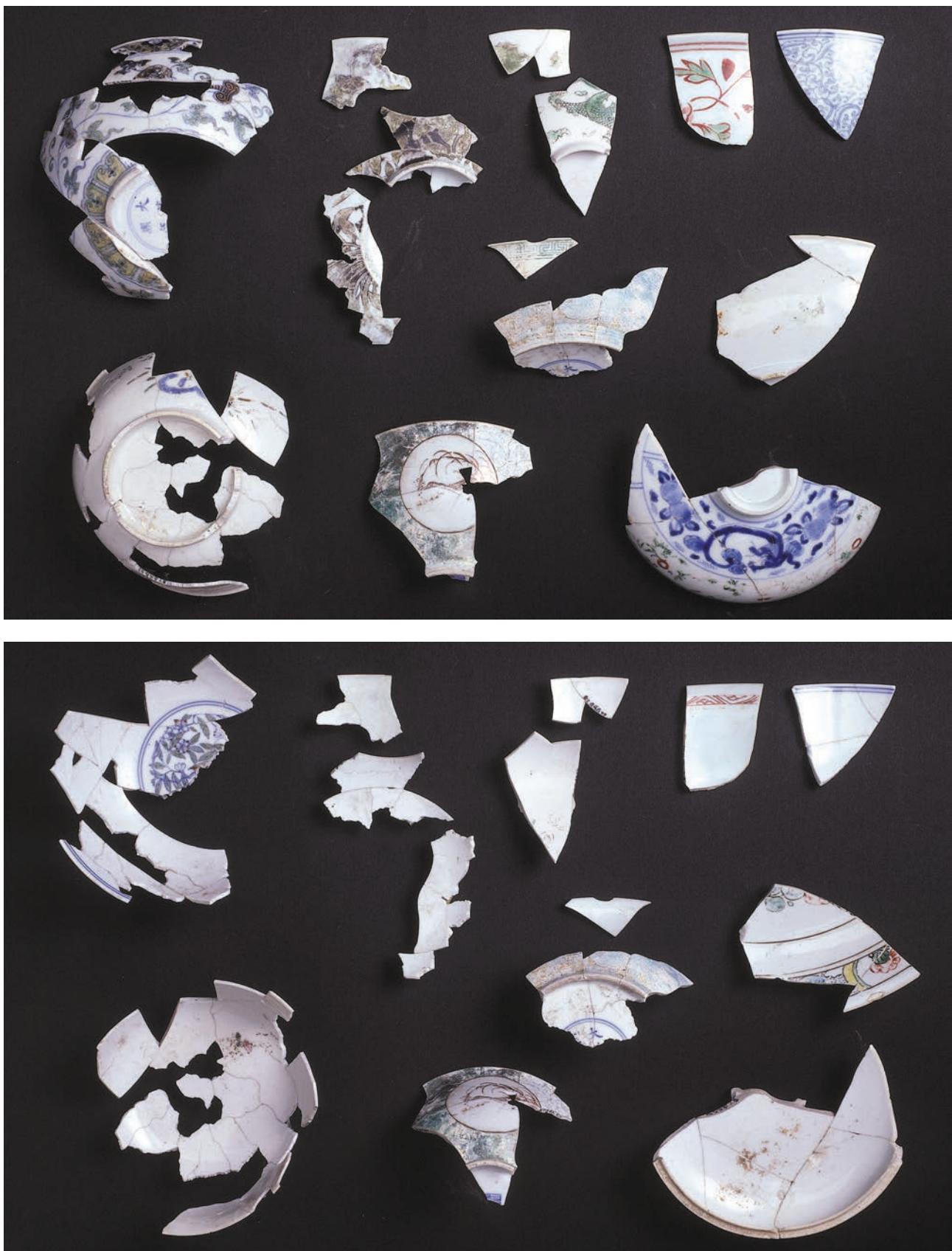


青磁



中国産染付

巻首図版 5



中国産色絵

卷首図版 6

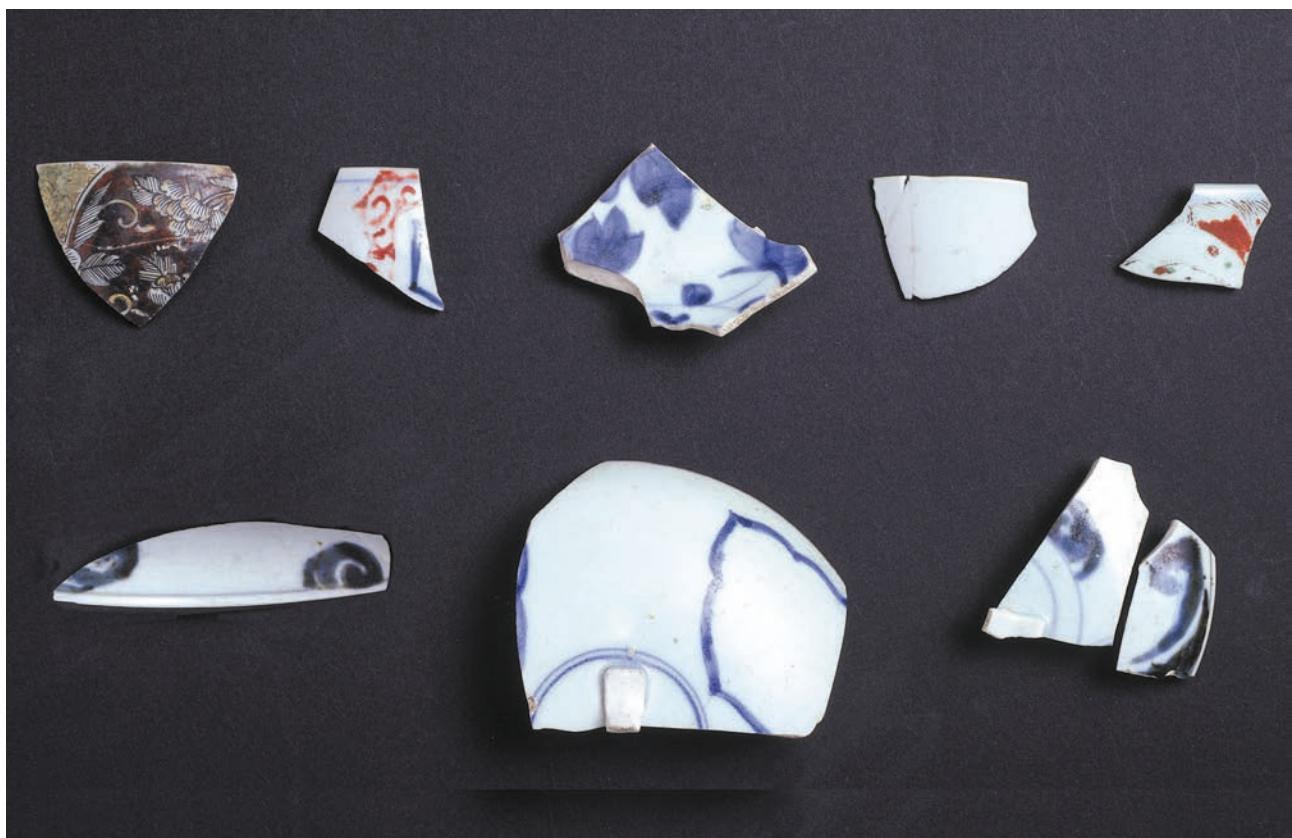


その他の輸入陶磁器



他の輸入陶磁器

卷首図版 8



本土産磁器



本土産陶器

卷首図版 9



本土産陶器

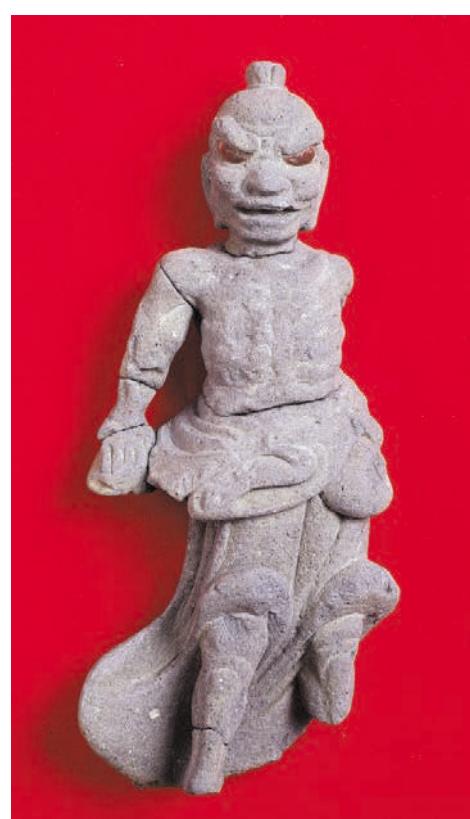
卷首図版10



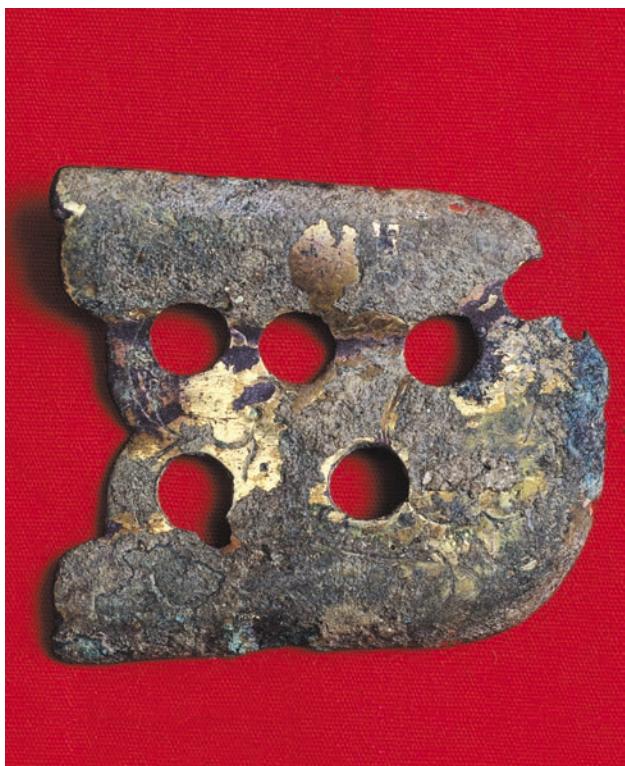
褐釉陶器



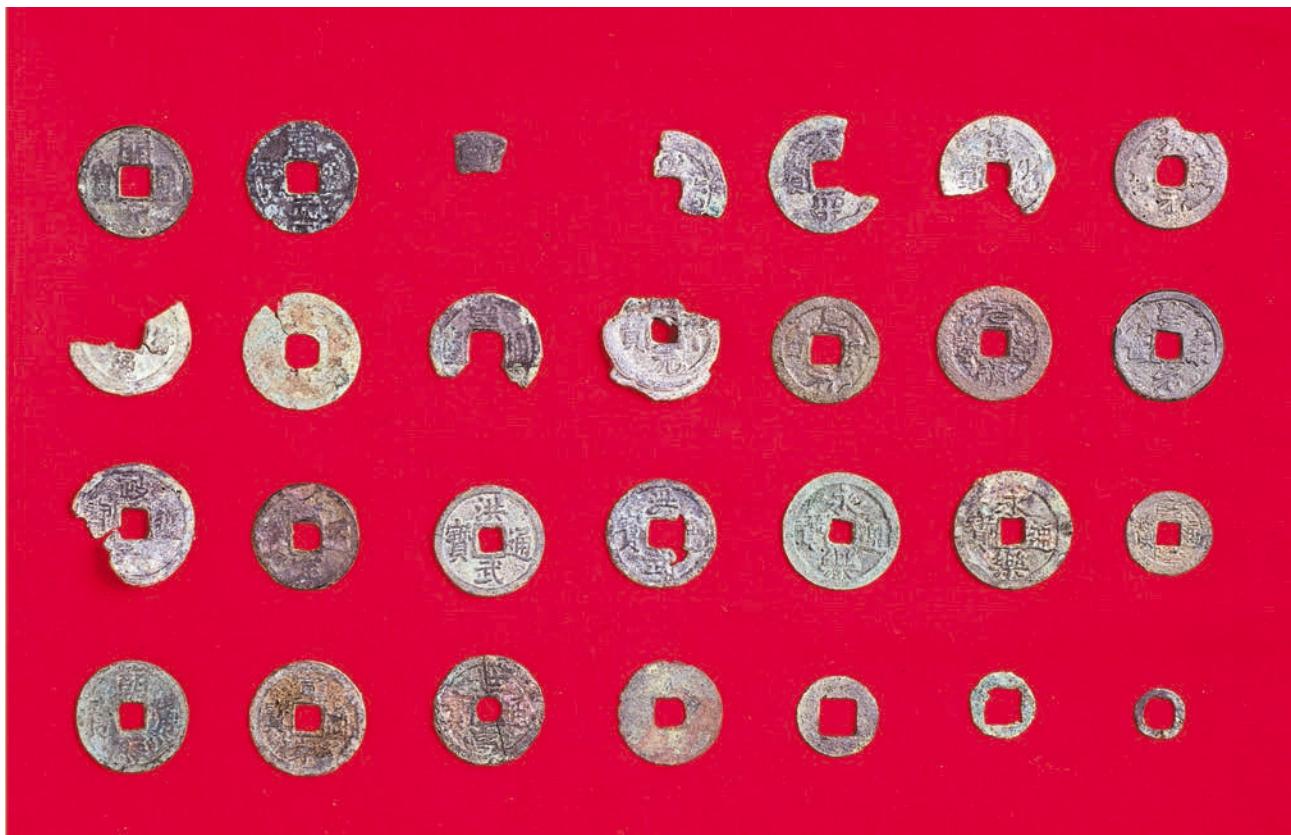
沖縄産施釉陶器



石造金剛力士像



金属製品：飾り金具　右同　X線写真



錢貨

卷首図版12

## 例　　言

1. 本書は1994年度(平成5)から1995年度(平成6)に実施した、東のアザナの遺構確認にかかる発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は文化庁の補助事業として1994年度(平成5)から1995年度(平成6)までは沖縄県教育委員会文化課が実施した。
3. 資料整理作業は、1994年度(平成5)から1995年度(平成6)までは沖縄県教育委員会文化課が、平成15年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
4. 本書に使用した1/25000地形図は国土地理院発行の資料によった。
5. 本書に表した高度値は海拔高である。
6. 資料整理にあたり、下記の方々には各遺物の同定をお願いした。記して謝意を表したい。

(五十音順)

陶磁器　家田　淳一　氏（佐賀県立博物館学芸係長）  
堀内　秀樹　氏（東京大学埋蔵文化財調査室助手）  
金沢　陽　氏（出光美術館学芸員）  
矢島　律子　氏（町田市立博物館学芸員）

金属製品　久保　智康　氏（京都国立博物館工芸室室長）

石　　器　神谷　厚昭　氏（前　真和志高等学校）

貝　　類　名波　　純　氏（湯の生態史研究会会員）

獸　　骨　渡辺　　誠　氏（名古屋大学大学院文学研究科教授）

人　　骨　土肥　直美　氏（琉球大学医学部助教授）

7. 本書の編集は比嘉優子の協力を得て盛本勲、山本正昭が行った。

校正：盛本勲・山本正昭・比嘉優子・照屋利子

8. 各章の執筆は下記のように分担した。

盛本　勲　　第1章、第3章、第4章、第5章第18・19・24～26節、第6章  
山本　正昭　　第2章、第5章第1～8・12・16・17節  
比嘉　優子　　第5章第9～11・13・20～23節  
上原　　靜　　第5章第14・15節

9. 本書に記載された写真は盛本勲が、出土遺物は後藤典子、光島香の撮影によるものである。
10. 本書に掲載した東のアザナに関する写真、実測図などの記録は全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管してある。
11. 発掘調査・資料整理などの調査体制については第1章の第2節で記した。

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しゅりじょうあと
書 名	首里城跡
副 書 名	東のアザナ地区発掘調査報告書
卷 次	
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第20集
編 著 者 名	盛本勲・山本正昭・比嘉優子・上原靜
編 集 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 Tel 098-835-8752
発行年月日	西暦2004年(平成16)3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ''	東経 ° / ''	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゅりじょうあと 首里城跡	おきなわけん なはし 沖縄県那覇市 しゅりとうのくらちょう 首里当蔵町	那覇市 472018		26°	127°	1993.10 ~ "94. 9	約700m <sup>2</sup>	国営公園整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡	都市公園	グスク時代 ～ 近世	石積み 石敷 石段 その他	青 磁 白 磁 染 付 本土産陶磁器 沖縄産無釉陶器 沖縄産施釉陶器 その他の輸入陶磁器 褐釉陶器 瓦質土器 陶質土器 カムイヤキ 土 器 土製品 瓦 埠 円盤状製品 玉 類 貝製品 骨製品 錢 貨 金属製品 石 器 石造製品	<p>当該地区は、首里城跡の東方の遠望台として機能していた郭であるとともに、郭内には国王が死去した際、本葬を行うまでも死体を仮安置した寝廟殿等の施設が在った場所である。</p> <p>調査の結果、郭を囲繞していた石積みの一部等が検出されたものの、郭内に配されていた施設に関連する遺構は、旧琉球大学の整備等によって大きく破壊を受け、全貌が判然としなかつた。</p> <p>出土品は多種、多量に及び、中国産をはじめとして、朝鮮、本土や東南アジア産などが含まれる。その中でも県内で3例目にあたるミャンマー産や中国産の「大清康熙年製」銘入りの紅釉碗、鶴型水注、白地鉄絵、ベトナム産染付等の希少価値の高い資料が含まれる。これに伴って、本土産も多種あるが、特徴的なものとして、楽焼が認められ、五代「宗入」の作品に類似する。陶磁器以外の資料としては、金属製品等があげられよう。</p>

# 目 次

序

卷首図版

例言

報告書抄録

<b>第1章 調査に至る経緯</b>	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査及び資料整理等の体制	1
<b>第2章 遺跡の位置と環境</b>	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
<b>第3章 調査の概要</b>	11
第1節 調査地域	11
第2節 調査区の設定と調査の概要	11
<b>第4章 検出遺構</b>	14
<b>第5章 出土遺物</b>	19
第1節 青磁	19
第2節 白磁	39
第3節 染付	45
第4節 色絵	59
第5節 褐釉陶器	64
第6節 その他の輸入陶磁器	72
第7節 本土産陶磁器	80
第8節 沖縄産施釉陶器	91
第9節 沖縄産無釉陶器	101
第10節 陶質土器	107
第11節 瓦質土器	111
第12節 土器	114
第13節 土製品	114
第14節 屋瓦	116
第15節 塚	134
第16節 金属製品	139
第17節 銭貨	143
第18節 貝製品	149
第19節 骨製品	151
第20節 玉類	152
第21節 煙管	152
第22節 石器	153
第23節 石造製品	153
第24節 円盤状製品	156
第25節 貝類遺存体	158
第26節 脊椎動物遺存体	162
<b>第6章 結語</b>	168
遺構全体図(添付)	

## 図目次

第 1 図	沖縄本島の位置図	4
第 2 図	首里城跡の位置図と周辺の遺跡	5
第 3 図	首里那覇之図	7
第 4 図	首里城図	7
第 5 図	首里古地図	8
第 6 図	首里城平面図及び調査区位置図	9
第 7 図	旧首里城図	10
第 8 図	グリッド配置図	12
第 9 図	階段部分平面図・断面図	15
第10図	穴状遺構平面図・断面図	17
第11図	青磁(1)	32
第12図	青磁(2)	33
第13図	青磁(3)	34
第14図	青磁(4)	35
第15図	青磁(5)	36
第16図	青磁(6)	37
第17図	青磁(7)	38
第18図	白磁(1)	43
第19図	白磁(2)	44
第20図	染付(1)	52
第21図	染付(2)	53
第22図	染付(3)	54
第23図	染付(4)	55
第24図	染付(5)	56
第25図	染付(6)	57
第26図	染付(7)	58
第27図	色絵(1)	62
第28図	色絵(2) 素三彩	63
第29図	褐釉陶器(1) 中国産	68
第30図	褐釉陶器(2) 中国産	69
第31図	褐釉陶器(3) 中国産	70
第32図	褐釉陶器(4) タイ・ミャンマー産	71
第33図	他の輸入陶磁器(1)	77
第34図	他の輸入陶磁器(2)	78
第35図	他の輸入陶磁器(3)	79
第36図	本土産陶磁器(1)	87
第37図	本土産陶磁器(2)	88
第38図	本土産陶磁器(3)	89
第39図	本土産陶磁器(4)	90
第40図	沖縄産施釉陶器(1)	99
第41図	沖縄産施釉陶器(2)	100

第42図	沖縄産無釉陶器(1)	105
第43図	沖縄産無釉陶器(2)	106
第44図	陶質土器	110
第45図	瓦質土器	113
第46図	土器・土製品	115
第47図	高麗系瓦: 平瓦	117
第48図	大和系瓦: 軒平瓦・丸瓦・平瓦・雁振	118
第49図	明朝系瓦: 軒丸瓦(1)	122
第50図	明朝系瓦: 軒丸瓦(2)	123
第51図	明朝系瓦: 軒平瓦	125
第52図	明朝系瓦: 丸瓦・平瓦	126
第53図	明朝系瓦: 丸瓦・平瓦・飾り瓦・その他	127
第54図	明朝系瓦: 丸瓦(役瓦)	128
第55図	役瓦	130
第56図	埠(1)	136
第57図	埠(2)	137
第58図	埠(3)	138
第59図	金属製品(1)	141
第60図	金属製品(2)	142
第61図	錢貨	148
第62図	貝製品	150
第63図	玉類	152
第64図	骨製品・煙管・石器	154
第65図	石造製品	155
第66図	円盤状製品	157

## 附図

- 1 東のアザナ検出遺構等平面図
- 2 石積み遺構立面図

## 表目次

第 1 表	青磁碗出土状況一覧	20
第 2 表	青磁皿出土状況一覧	21
第 3 表	青磁盤出土状況一覧	21
第 4 表	青磁鉢・瓶出土状況一覧	22
第 5 表	青磁壺・蓋物・瓶or壺・器種不明 出土状況一覧	22
第 6 表	青磁観察一覧(1)	23
第 7 表	青磁観察一覧(2)	24
第 8 表	青磁観察一覧(3)	25
第 9 表	青磁観察一覧(4)	26
第10表	青磁観察一覧(5)	27
第11表	青磁観察一覧(6)	28

第12表	青磁観察一覧 (7) .....	29	第55表	高麗系瓦出土状況一覧 .....	119
第13表	青磁観察一覧 (8) .....	30	第56表	大和系瓦出土状況一覧 .....	119
第14表	青磁観察一覧 (9) .....	31	第57表	近世大和瓦出土状況一覧 .....	130
第15表	白磁観察一覧 (1) .....	39	第58表	明朝系：丸瓦(役瓦)出土状況一覧 .....	131
第16表	白磁観察一覧 (2) .....	40	第59表	明朝系：軒瓦出土状況一覧 .....	131
第17表	白磁観察一覧 (3) .....	41	第60表	明朝系丸瓦の焼成(色調)別分類状況 一覧 .....	132
第18表	白磁出土状況一覧 .....	42	第61表	明朝系平瓦の焼成(色調)別分類状況 一覧 .....	133
第19表	染付出土状況一覧 .....	46	第62表	埠出土状況一覧 .....	135
第20表	染付観察一覧 (1) .....	47	第63表	錢貨法量観察一覧 (1) .....	143
第21表	染付観察一覧 (2) .....	48	第64表	錢貨法量観察一覧 (2) .....	144
第22表	染付観察一覧 (3) .....	49	第65表	錢貨法量観察一覧 (3) .....	145
第23表	染付観察一覧 (4) .....	50	第66表	錢貨法量観察一覧 (4) .....	146
第24表	染付観察一覧 (5) .....	51	第67表	錢貨法量観察一覧 (5) .....	147
第25表	色絵出土状況一覧 .....	59	第68表	貝製品法量一覧 .....	149
第26表	色絵観察一覧 (1) .....	60	第69表	螺蓋製敲打器類別出土状況一覧 .....	149
第27表	色絵観察一覧 (2) .....	61	第70表	玉類観察一覧 .....	152
第28表	褐釉陶器(中国・タイ・ミャンマー産) 出土状況一覧 .....	67	第71表	煙管観察一覧 .....	152
第29表	その他の輸入陶磁器出土状況一覧 .....	74	第72表	石器観察一覧 .....	153
第30表	タイ産半練土器出土状況一覧 .....	74	第73表	円盤状製品観察一覧 .....	156
第31表	その他の輸入陶磁器観察一覧 (1) .....	75	第74表	貝類出土状況一覧(巻貝) .....	160
第32表	その他の輸入陶磁器観察一覧 (2) .....	76	第75表	貝類出土状況一覧(二枚貝) .....	161
第33表	本土産青磁・染付出土状況一覧 .....	81	第76表	有孔ヤコウガイ集計表 .....	161
第34表	本土産白磁・染付出土状況一覧 .....	81	第77表	魚類出土状況一覧 .....	163
第35表	本土産陶器出土状況一覧 .....	81	第78表	ウミガメ出土状況一覧 .....	164
第36表	本土産色絵出土状況一覧 .....	81	第79表	ニワトリ出土状況一覧 .....	164
第37表	本土産陶磁器観察一覧 (1) .....	83	第80表	イヌ出土状況一覧 .....	165
第38表	本土産陶磁器観察一覧 (2) .....	84	第81表	ネコ出土状況一覧 .....	165
第39表	本土産陶磁器観察一覧 (3) .....	85	第82表	ジュゴン出土状況一覧 .....	165
第40表	本土産陶磁器観察一覧 (4) .....	86	第83表	ウマ出土状況一覧 .....	165
第41表	沖縄産施釉陶器出土状況一覧 .....	93	第84表	ブタ歯出土状況一覧 .....	165
第42表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (1) .....	95	第85表	ブタ出土状況一覧 .....	166
第43表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (2) .....	96	第86表	ウシ出土状況一覧 .....	167
第44表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (3) .....	97	第87表	ウシ歯出土状況一覧 .....	167
第45表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (4) .....	98	第88表	ヤギ出土状況一覧 .....	167
第46表	沖縄産無釉陶器出土状況一覧 .....	102	第89表	首里城関係主要年表 (1) .....	250
第47表	沖縄産無釉陶器観察一覧 (1) .....	103	第90表	首里城関係主要年表 (2) .....	251
第48表	沖縄産無釉陶器観察一覧 (2) .....	104			
第49表	陶質土器出土状況一覧 .....	107			
第50表	陶質土器観察一覧 (1) .....	108			
第51表	陶質土器観察一覧 (2) .....	109			
第52表	瓦質土器出土状況一覧 .....	111			
第53表	瓦質土器観察一覧 .....	112			
第54表	土器出土状況一覧 .....	114			

## 図版目次

図版1	参考資料:ミャンマー産褐釉陶器	71	図版42	沖縄産無釉陶器(1)	210
図版2	役瓦	130	図版43	沖縄産無釉陶器(2)	211
図版3	骨製品	151	図版44	沖縄産無釉陶器(3)	212
図版4	玉類	152	図版45	沖縄産無釉陶器(4)	213
図版5	遺構検出状況(1)	173	図版46	陶質土器(1)	214
図版6	遺構検出状況(2)	174	図版47	陶質土器(2)	215
図版7	遺構検出状況(3)	175	図版48	瓦質土器	216
図版8	遺構検出状況(4)	176	図版49	土器・土製品	217
図版9	遺構検出状況(5)	177	図版50	高麗系瓦:平瓦	218
図版10	遺構検出状況(6)	178	図版51	大和系瓦:丸軒平瓦,丸瓦,平瓦,雁振瓦	219
図版11	青磁(1)	179	図版52	明朝系瓦:軒丸瓦	220
図版12	青磁(2)	180	図版53	明朝系瓦:軒平瓦,丸瓦,平瓦	221
図版13	青磁(3)	181	図版54	明朝系瓦:丸瓦,平瓦,飾り瓦,その他	222
図版14	青磁(4)	182	図版55	明朝系瓦:丸瓦(役瓦)	223
図版15	青磁(5)	183	図版56	埠(1)	224
図版16	青磁(6)	184	図版57	埠(2)	225
図版17	青磁(7)	185	図版58	埠(3)	226
図版18	白磁	186	図版59	金属製品(1)	227
図版19	染付(1)	187	図版60	金属製品(2)	228
図版20	染付(2)	188	図版61	錢貨	229
図版21	染付(3)	189	図版62	貝製品(1)	230
図版22	染付(4)	190	図版63	貝製品(2)・有孔ヤコウ貝	231
図版23	染付(5)	191	図版64	煙管・石器	232
図版24	染付(6)	192	図版65	石造製品	233
図版25	染付(7)	193	図版66	円盤状製品	234
図版26	色絵(1)	194	図版67	貝類遺存体:卷貝(1)	235
図版27	色絵(2)・素三彩	195	図版68	貝類遺存体:卷貝(2)	236
図版28	褐釉陶器(1)中国産	196	図版69	貝類遺存体:二枚貝	237
図版29	褐釉陶器(2)中国産	197	図版70	骨(1)サカナ	238
図版30	褐釉陶器(3)中国・タイ・ミャンマー産	198	図版71	骨(2)上:ウミガメ・ニワトリ 下:イヌ・ネコ	239
図版31	その他の輸入陶磁器(1)	199	図版72	骨(3)上:イルカ・ジュゴン 下:ブタ・ヤギ	240
図版32	その他の輸入陶磁器(2)	200	図版73	骨(4)上:ウマ 下:ウシ	241
図版33	本土産陶磁器(1)	201	図版74	骨(5)ウシ	242
図版34	本土産陶磁器(2)	202	図版75	骨(6)ウシ	243
図版35	本土産陶磁器(3)	203	図版76	骨(7)ブタ	244
図版36	本土産陶磁器(4)	204	図版77	切裁痕のある骨 ブタ・ウシ	245
図版37	本土産陶磁器(5)	205	図版78	参考資料(1)	246
図版38	沖縄産施釉陶器(1)	206	図版79	参考資料(2)	247
図版39	沖縄産施釉陶器(2)	207	図版80	参考資料(3)	248
図版40	沖縄産施釉陶器(3)	208	図版81	参考資料(4)	249
図版41	沖縄産施釉陶器(4)	209			

## 第1章 調査に至る経緯

### 第1節 調査に至る経緯

国指定史跡:首里城跡は、1986年(昭和61)の閣議決定により、内郭4.2haが建設省所管の「ロ号国営公園」に指定され、国の都市公園整備事業(国営沖縄記念公園首里城地区)で復元整備されることが決定するとともに、城郭外側の区域の約17.8haを県営公園として整備することが府議決定された。これを受け、首里城公園の整備が都市計画決定し、都市公園としての首里城公園の整備が具体化するとともに、年次的に整備事業が進められている。

これまでに、内郭地区の国営公園部分は正殿、南殿・番所、北殿、奉神門、御庭、下御庭、系図座、用物座、二階殿等の整備が完了し、都市公園あるいはその管理施設等として機能している。

一方、城郭外側の県営公園地区も国営公園(内郭)地区と併行して、年次的に整備が進められ、これまでに龍潭エリア、上之毛エリア、首里杜館エリア、公園管理センター、守礼門及び繼世門周辺地区等の整備が完了し、国営公園の補助公園あるいは付帯設備等として機能している。

国営公園側としては、次地区の整備計画として、内郭地区東端部に位置する東のアザナ(物見的な施設)と、その中に在していた寝廟殿等の整備を計画していることから、かかる地区的遺構調査を実施して欲しい旨を県教育委員会(所管:文化課)に要望してきた。

県教育委員会(所管:文化課)としては、当該地域は国指定首里城跡の指定地内にあることから、国(文化庁)への現状変更許可の手続きが必要であるとともに、工事着手前に遺構調査すなわち埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨の回答を行った。

そして、発掘調査の実施以前に、これを必要とする範囲を明確にするための範囲確認調査を実施するとともに、1993~“94年(平成5~6)度事業として、沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所より沖縄県教育委員会(所管:文化課)が予算の委託を受けて、遺構確認調査を目的とした発掘調査を実施することになった。

### 第2節 発掘調査及び資料整理等の体制

発掘調査から資料整理及び報告書作成に至る間の体制は、下記の通りである。

なお、委託者との協議により、上記したように発掘調査業務は1993~“94年(平成5~6)度事業として実施し、資料整理及び報告書作成は2003(平成15)年度事業として実施した。

事業主体者 嘉陽正幸(沖縄県教育委員会教育長、1993~“94年度)

山内 彰( 同 上、2003年度 )

事業 総括 糸数兼治(沖縄県教育委員会文化課課長、1993年度)

西平守勝( 同 上、1994年度)

日越国昭（ 同 上 、2003年度）  
安里嗣淳（沖縄県立埋蔵文化財センター、2003年度）  
上原 靜（沖縄県教育委員会文化課史跡整備係長、1993～“94年度）  
島袋 洋（ 同 上 記念物係長、2003年度）  
盛本 勲（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長、2003年度）

事業 事務 川満一成（沖縄県教育庁文化課課長補佐、1993年度）  
新垣末子（ 同 上 、1994年度）  
大村光仁（ 同 上 管理係長、1993年度）  
比屋根正治（ 同 上 、1994年度）  
新垣和子（ 同 上 管理係主査、1993年度）  
伊波盛治（ “ “ 主事、1993年度）  
上地泰順（沖縄県教育庁文化課課長補佐、2003年度）  
宮国 栄（ 同 上 文化係主幹兼文化係長、2003年度）  
富里貴子（ 同 上 主事、2003年度）  
安富祖英紀（沖縄県立埋蔵文化財センター副所長兼庶務課長、2003年度）  
西江幸枝（沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主任、2003年度）

調査及び資料整理指導 渡辺 誠（名古屋大学文学部教授、1994年度・考古学）  
家田淳一（佐賀県立博物館学芸係長、2003年度・考古学：近世陶磁史）  
金子浩昌（東京国立博物館特別研究員、2003年度・動物考古学）  
神谷厚昭（前県立真和志高等学校教諭、2003年度・地質学）  
久保智康（京都国立博物館工芸室長、2003年度・工芸史）  
名和 純（潟の生態史研究会会員、2003年度・生態史）  
堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室助手、2003年度・考古学：中国陶磁史）  
真栄平房敬（那覇市文化財審議会委員、2003年度・郷土史家）  
矢島律子（町田市立博物館学芸員、2003年度・美術史：東南アジア陶磁器史）  
土肥直美（琉球大学医学部助教授、2003年度）  
発掘 担当 盛本 勲（沖縄県教育委員会文化課史跡整備係主任、1993～“94年度）

発掘調査員 矢沢秀雄（沖縄県教育委員会文化課嘱託調査員、1993年度）  
比嘉優子（ 同 上 、1993～“94年度）

資料 整理 山本正昭（沖縄県立埋蔵文化財センター専門員、2003年度）

比嘉優子（沖縄県教育委員会文化課調査嘱託員、1994～‘95年度）

同 上（沖縄県立埋蔵文化財センター調査嘱託員、2003年度）

仲地和美（同 上、2003年度）

発掘調査作業員（五十音順）

稻福フミ子・幸地ヨシ子・呉屋正一・呉屋光子・小橋川幸子・小橋川恵子・小波津夏子・国吉睦子・島袋稔・島袋文子・島袋美子・玉城富子・玉城信子・仲里ハル子・山畠キミ。

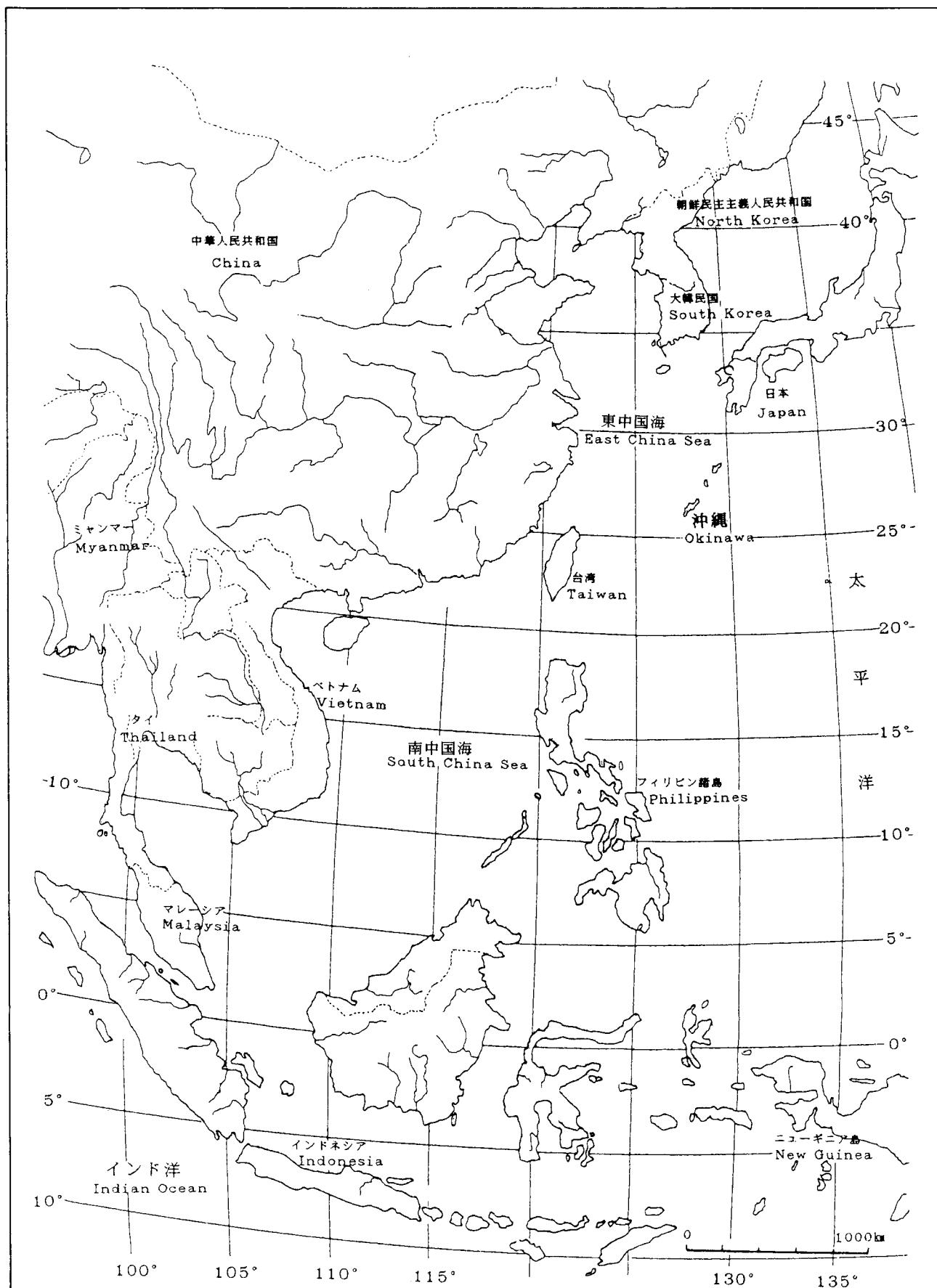
資料整理作業員（五十音順）

新垣ゆかり・安座間美津子・安和千代子・上原園子・金城礼子・源河秀子・当山慶子・外間瞳（以上、1994年度）。

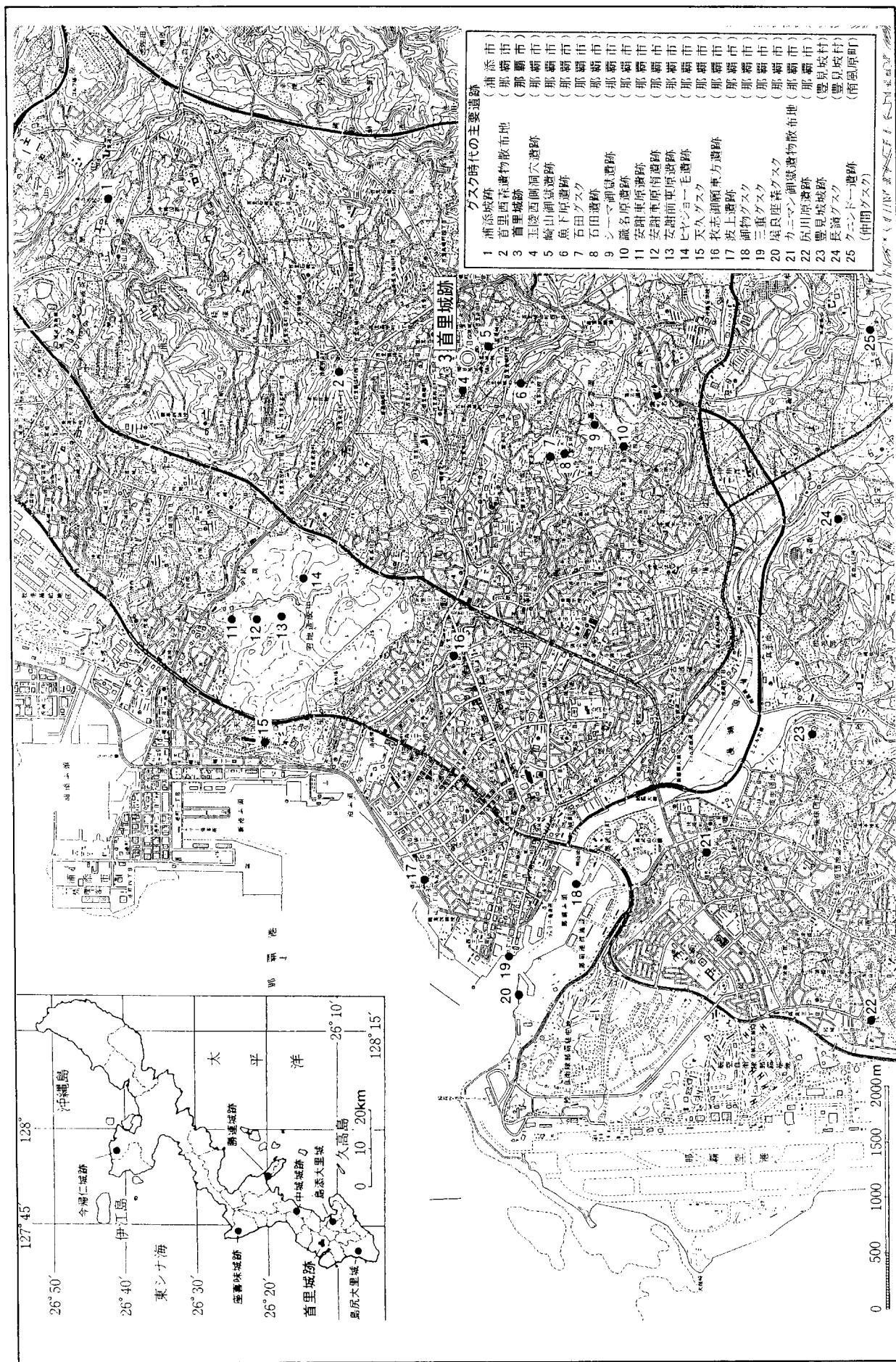
赤嶺雅子・新垣ますみ・新川貢・池原直美・大村由美子・光嶋香・国場のりえ・後藤典子・瑞慶覧尚美・玉寄智恵子・玉城恵美利・玉城勝雄・知念咲希・仲本志乃・饒平名淳子・譜久里昌代・山城麻美子（以上、2003年度）。

資料整理作業主体の協力者（五十音順）

阿部直子・上原園子・岡村綾子・金城克子・城間千鶴子・照屋利子・仲宗根三枝子・比嘉洋子・藤田奈穂美・外間瞳。



第1図 沖縄本島の位置図



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

首里城跡の所在する那覇市は沖縄県における県庁所在地であるとともに人口30万人を越える県内第一の都市である。市の面積は38.63km<sup>2</sup>で人口密度は7,722人/km<sup>2</sup>と県内で最も人口が密集した地域となっている(那覇市役所2001)。

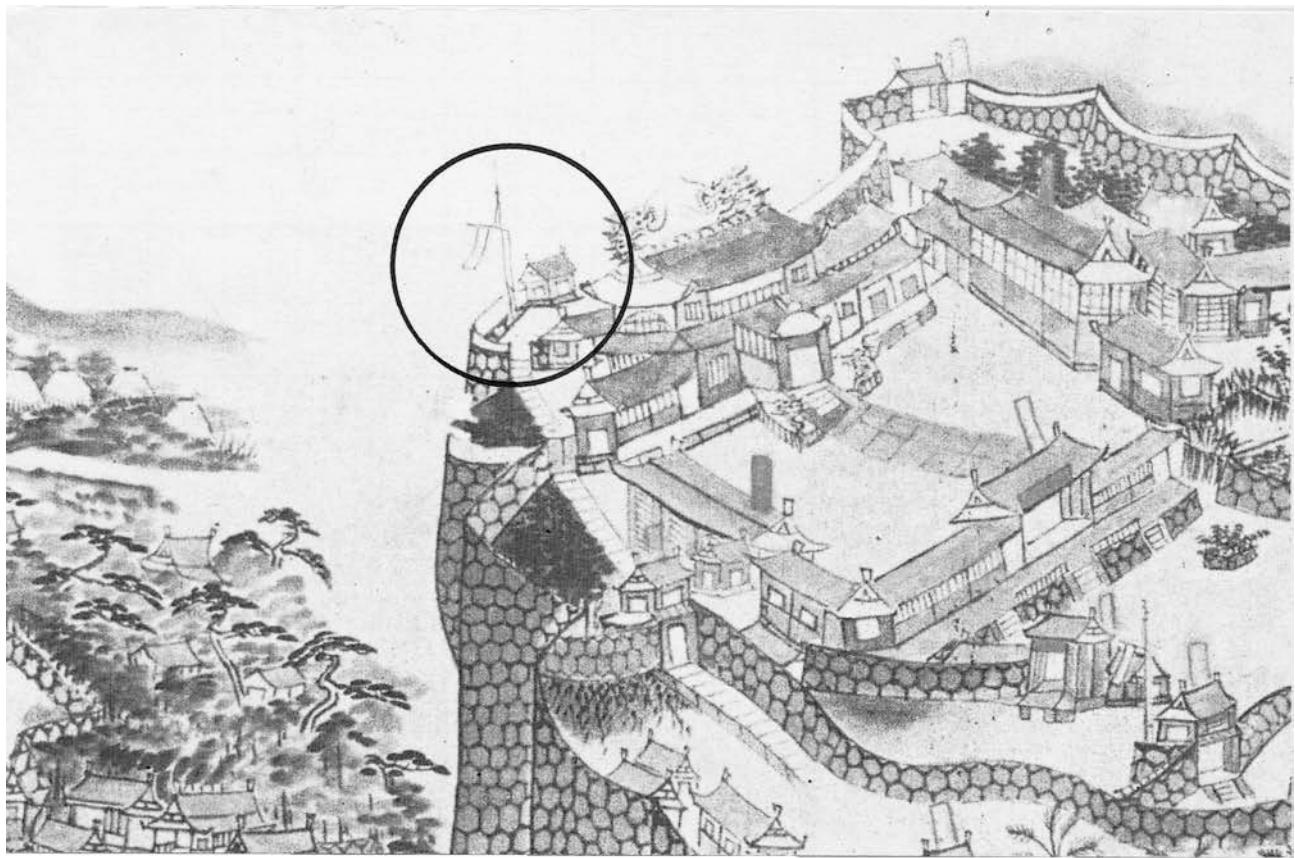
首里城跡は那覇市街北東部の琉球石灰岩から形成される台地に位置している。その台地は「首里台地」と呼称され、北側の城西小学校から円覚寺跡にかけては島尻層群(砂岩)そして、首里城南側は島尻層群(泥岩)に一部、挟まれて東西に広がる琉球石灰岩台地である。首里台地は北方に標高100～200mの末吉山から虎頭山、弁が嶽に至る丘陵を頂き、南方に金城川が流れる凹地、さらには識名丘陵、東方は南風原町との境界を流れるナゲーラ川、西方は真嘉比川に囲まれ、他地域とは隔絶されている。このような自然の障壁に囲まれた首里台地の最高部には首里城跡が築かれ、その東側には上の毛が、西側には天界寺や玉陵、安国寺が漸次下っていくような形で配置されている。近代から現代にかけて周辺は大幅な改変がなされ、とくに去る沖縄戦においては城内の建物はほぼ全壊し、その跡地に琉球大学が設置されるに至った。この琉球大学設置によって東のアザナ周辺が切り崩され、旧地形は残していない。

### 第2節 歴史的環境

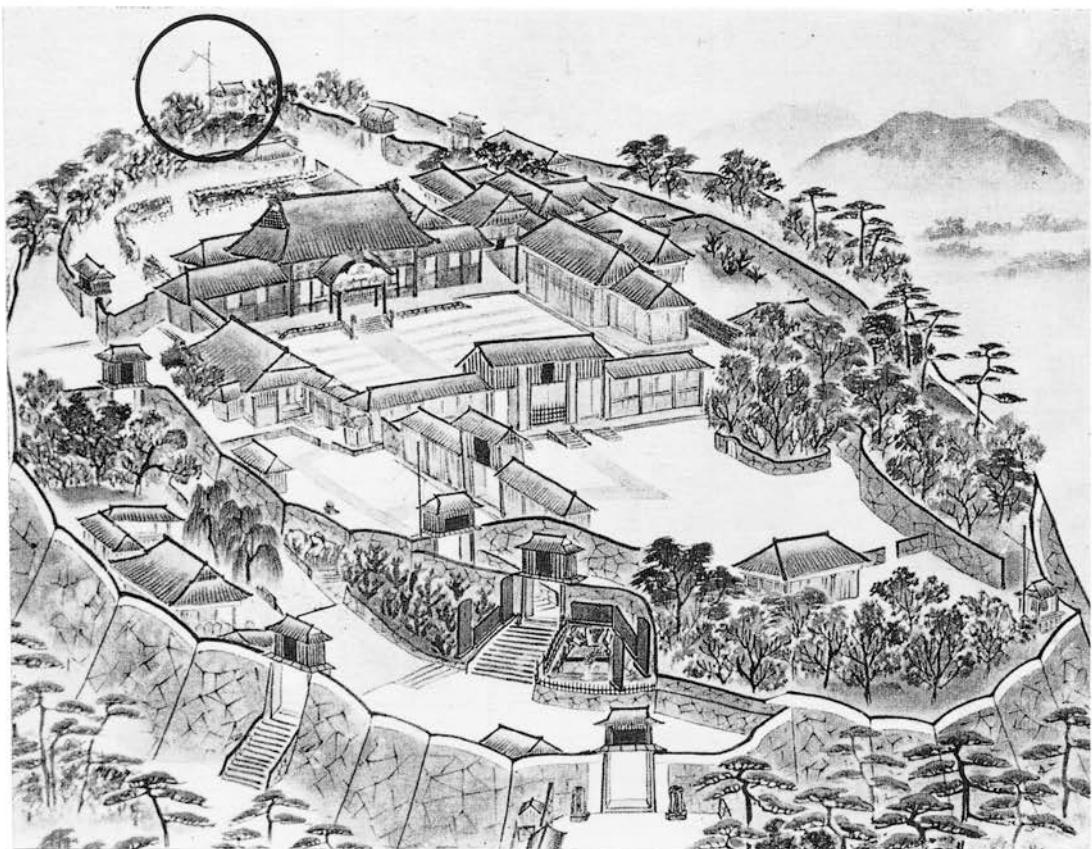
グスクの築城年および城主等についての詳細については判然としない部分もあるが、現存する沖縄最古の金石文である「安国山樹華木碑記」(宣徳2年1427年)に尚巴志王により城外に龍潭と称する人工池を掘って、安国山を築き、樹木や華木を植えて城域を整備したとの記録があることから、尚巴志王代則ち、15世紀前半には王宮としての基本的な構造や縄張りはほぼ確立していたであろうとされる。

その後、15世紀後半から16世紀前半にかけて北西部に歓会門や久慶門を設けたり、東南側の城郭石垣を二重に構築し、継世門を設けるなど城内外の拡張や整備等を経て、最終的な城全貌が出来上がったものとされる。城域は東南約400m、南北270m、面積4.2haのグスクの中では最大規模を有する。全長1,080mの外郭には歓会門、久慶門、木曳門、継世門の4つの門が、内郭には瑞泉門、漏刻門、広福門、奉神門、右掖門、左掖門、淑順門、美福門、白銀門と9つの門が配置される。城外と城内、そして内郭と外郭を視覚的に仕切る石積みは切石を用い、高さは約6～10m前後を有する。創建当初の範囲は内郭と云われ、正殿、南殿、北殿、御庭、首里森御嶽、真玉森御嶽といった主要な施設が集中する。とくに正殿は「百浦添御殿」と称され、高さ16.36m、床面積1,355m<sup>2</sup>と県内最大の木造建造物であった。正殿の東側には世誇殿、世添殿、女官居室等から構成される「御内原」が隣接し、さらに東側には今回の調査区に相当する、東のアザナ・寝廟殿・白銀門が配置されていた。これらの建造物は去る沖縄戦で焼失し、また戦後ににおける琉球大学設置の際にも遺構が破壊された。

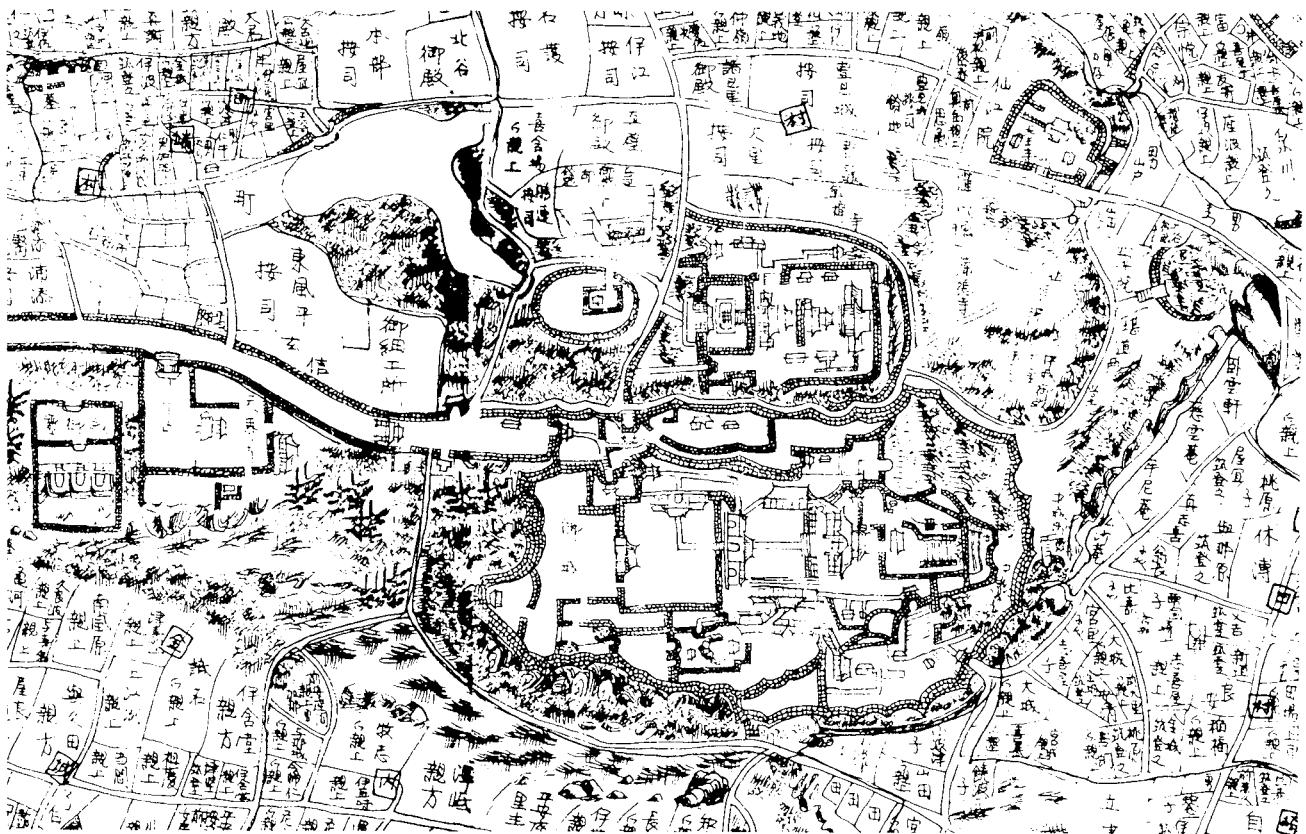
東のアザナはかつて御内原の東側に配置された物見台として機能しており、約6mの石積みを立ち上げて上面に2つの小空間を創り出す。その面積は北側の空間で2坪ほど、南側の空間で5坪ほどであったとされ、床面は石敷きで内部に段差があった(真栄平1997)。南側には昇降するための石段が取り付いており、両脇には石積みが立ち上げられ、幅約2mの通路となっている(図版80)。石段は35段あり(国営沖縄記念公園事務所1995)、それを下つてすぐ北側の石門を潜ると寝廟殿へ、そのまま西へ直進すると美福門へ至る。別名「高阿佐那」と呼称され、首里城内西端の西のアザナと対を成す。首里城内で最も高い場所に立地しており、北は読谷方面、南は島尻一帯、西は那覇市街、東



第3図 首里那霸之図（部分：円内は東のアザナ 沖縄総合事務局開発建設部ほか1986旧首里城関係写真資料集）



第4図 首里城図（部分：円内は東のアザナ 沖縄総合事務局開発建設部ほか1986旧首里城関係写真資料集）



第5図 首里古地図(一部改変 国営沖縄記念公園事務所 1995 国営沖縄記念公園首里城地図計画・設計の記録)

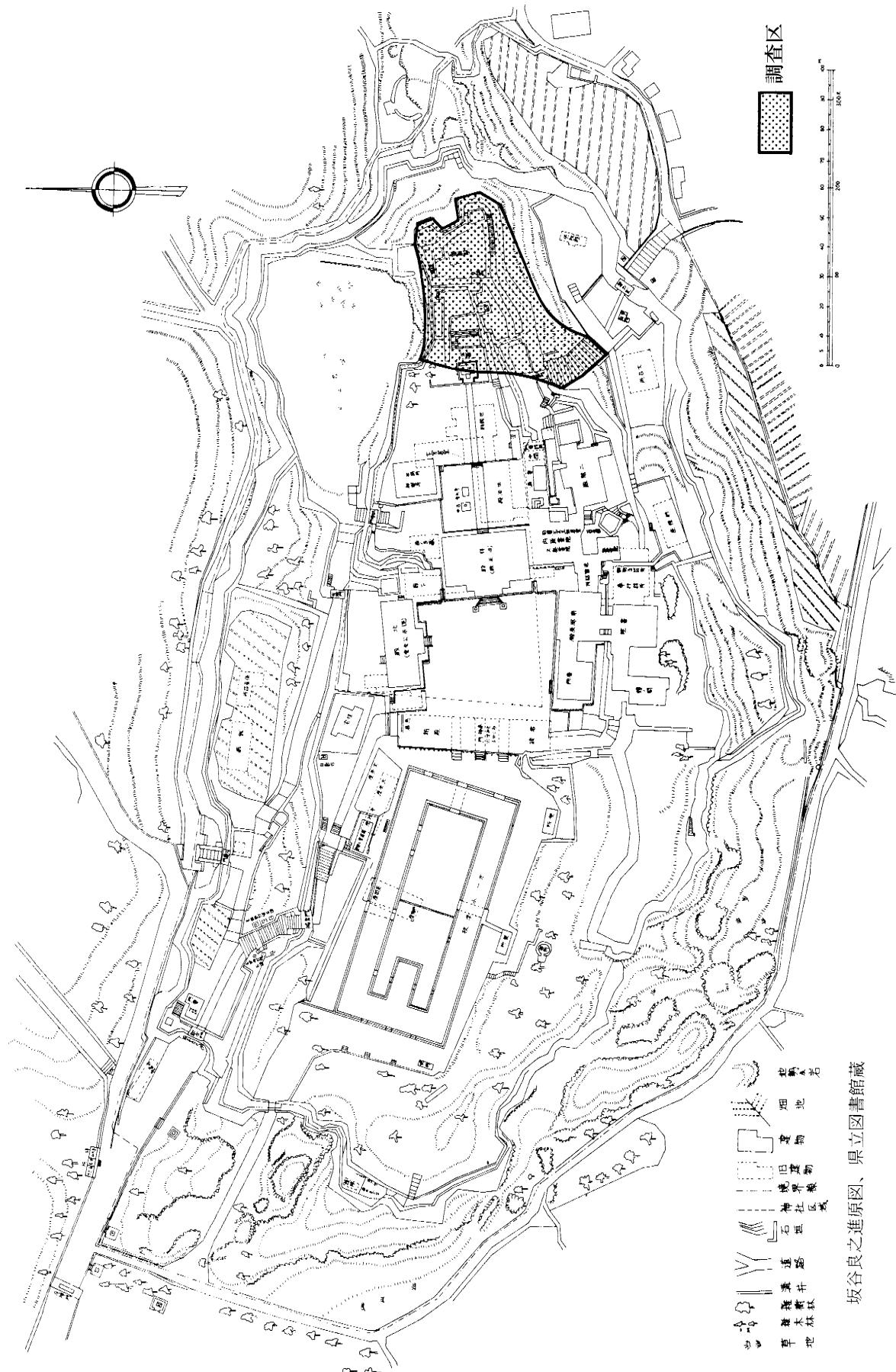
は中城湾を望むことができる。かつて、東のアザナの上には平屋の建物と旗が立てられていたことが絵図資料から窺える(第3・4図)。また東のアザナへ至る通路は南北両端に石段が設けられていたことも絵図資料から解することができ(図版81)、後に通路は南側の石段のみに改変させられたことが窺われる。『球陽』の「城内の禁制を定む」の項では「番人の外無くして高阿佐那に往来するを許さず」と厳しく立ち入りを制限している。

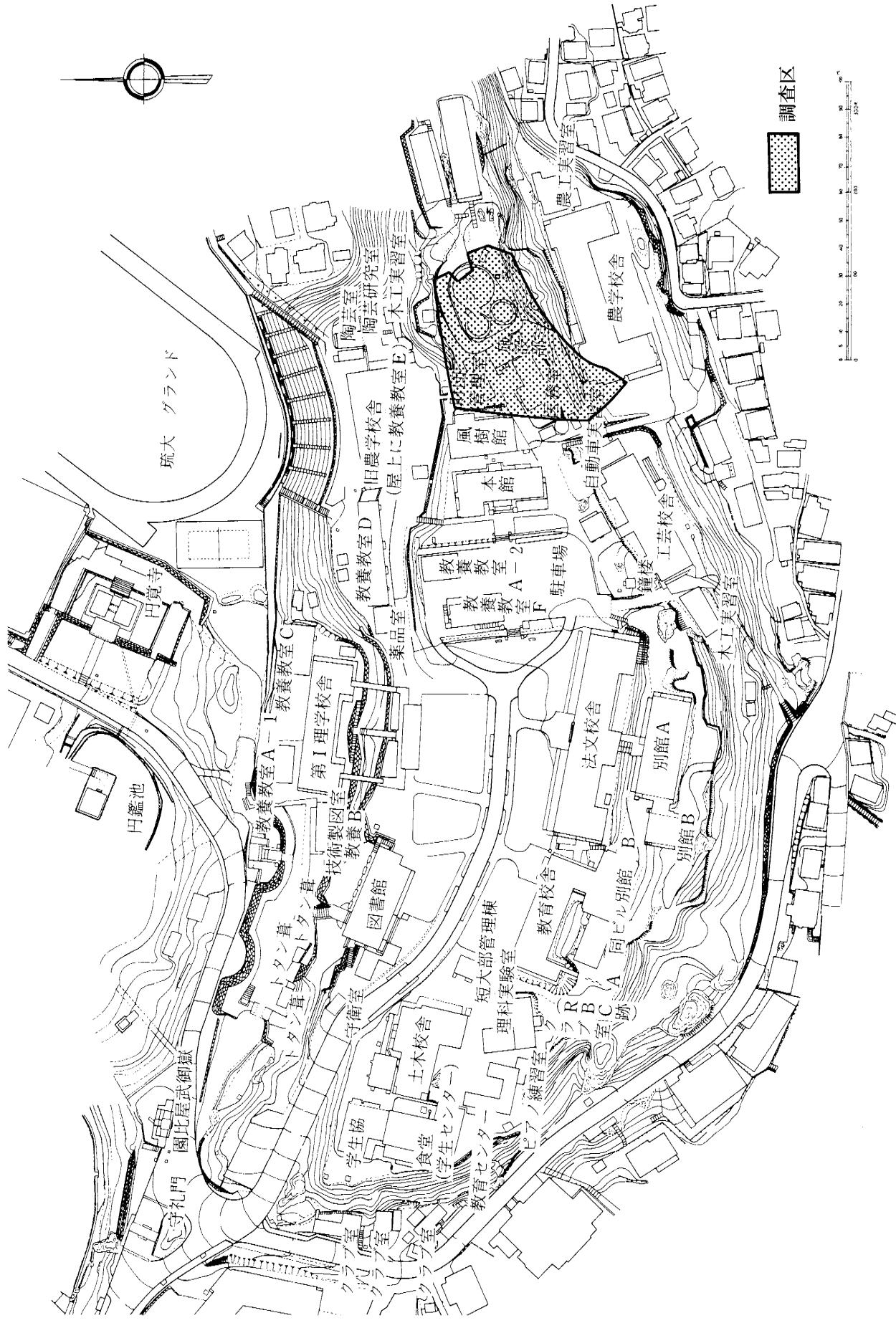
御内原と寝廟殿との間が石積みで仕切られ、その間を往来するための石門を白銀門と呼称していた。切石を用いた布積みでアーチ門をつくり、その上に入母屋造りの石屋根を載せる。石屋根の勾配は緩く、その下に白銀門の文字が縦書きで刻まれる。外側、則ち御内原側の間口は1.5m、内側、寝廟殿側の間口は1.8m、奥行きは1.85mである。御内原からは石畳が白銀門に向かって延び、寝廟殿まで続く。創建年代は不明であるが1700年前後に成立したとされる『首里古地図』(第5図)に描かれていることから18世紀初頭以前に現地点に存在していたと言える。昭和8(1933)年に旧国宝に指定される(図版78・79)。

寝廟殿は白銀門と東のアザナに囲まれた中央に国王の神位を奉祀する建物である。俗に「ウチンビューウドゥン」と呼ばれ、国王が死去した際に靈棺を葬礼まで仮安置する場所である。日常は先王たちの位牌が安置され、王妃や王夫人たちが、それぞれの王女を伴って、毎朝参拝焼香していた(久手堅2000)。1756年に創建したとあり、当初は東西約6m、南北約7.17mで、1845年に東西約9.27m、南北約9.4mと拡張されている。廢藩置県後に中城御殿に移築されている(又吉1993)。建築形態については史料が皆無で不明である。

これらの建造物は去る沖縄戦で焼失し、また戦後における琉球大学設置の際にも遺構が破壊された。戦後から復帰後にかけては貯水タンクが2基設置され、1984年(昭和59)に琉球大学が移転し、「口号国営公園」に指定、国の都市公園整備事業(国営沖縄記念公園首里城地区)で復元整備することが閣議決定されて以降は順次、首里城公園として整備が進められている。

第6図 首里城平面図（昭和6年頃）及び調査区位置図





第7図 旧首里城図(旧琉球大学校舎配置図)

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査地域

発掘調査を実施した地点は、首里城跡の正殿、南殿・番所、北殿、奉神門などの城の中心的な建物群が位置する背後の東端部に突き出た「東のアザナ」郭(方名:アガリヌアザナ)を中心とした部分である。

第1章でも述べたように、調査の契機は国営沖縄記念公園首里城地区整備として1986年(昭和61)から継続して実施している事業の一環で、今回は「東のアザナ」地区整備に係る事前の遺構調査であった。そのため、「東のアザナ」郭のほぼ全域と郭西端部に近接して設置されていた美福門に至る階段の一部などが対象範囲となっていた。

第2章でも述べているように、古絵図や古写真などによると、対象地には内郭石積みが東西に延びるとともに、南側石積みには階段が附設され、この階段を登りきった頂部は平場となっており、物見的な施設(遠望台)となっていたことが判る。当該部は城内でも城壁を積み上げて最も高くしたことで「高アザナ」、または城の東端に在することから「東のアザナ」とも呼ばれ、東は知念崎や勝連半島、南は八重瀬岳から糸満界隈、北は遠く伊是名、伊平屋、西は粟国、渡名喜の島々まで、文字通り 360 度の雄大な眺望が開ける施設であったようである(久手堅 2001)。

そして、「東のアザナ」郭の内部には、寝廟殿(別名:御寝廟御殿・方名:ウチンビュウウドゥン)と称された、歴代の国王などが死去した際、本葬を行う前に遺体を納めて仮安置した小郭が設けられていた。この小郭は石積みで仕切られ、その入り口部分には白銀門(方名:シラカニウジョウ)と称された、総石門造りの拱門(アーチ)構造をなし、拱門(アーチ)部分の上部を一段と高くして、その上に石造入母屋造の屋根を冠し拱門(アーチ)部には縦位に白銀門と刻印された門が設置されていた。

このように、調査対象地には「東のアザナ」郭を取り囲む石積みと、それに取り付いていた階段、さらには寝廟殿、白銀門等、比較的重要な施設が配されていた場所であった。

調査地点の地籍と対象面積は、下記の通りである。

那覇市首里当蔵町三丁目1番 約700m<sup>2</sup>

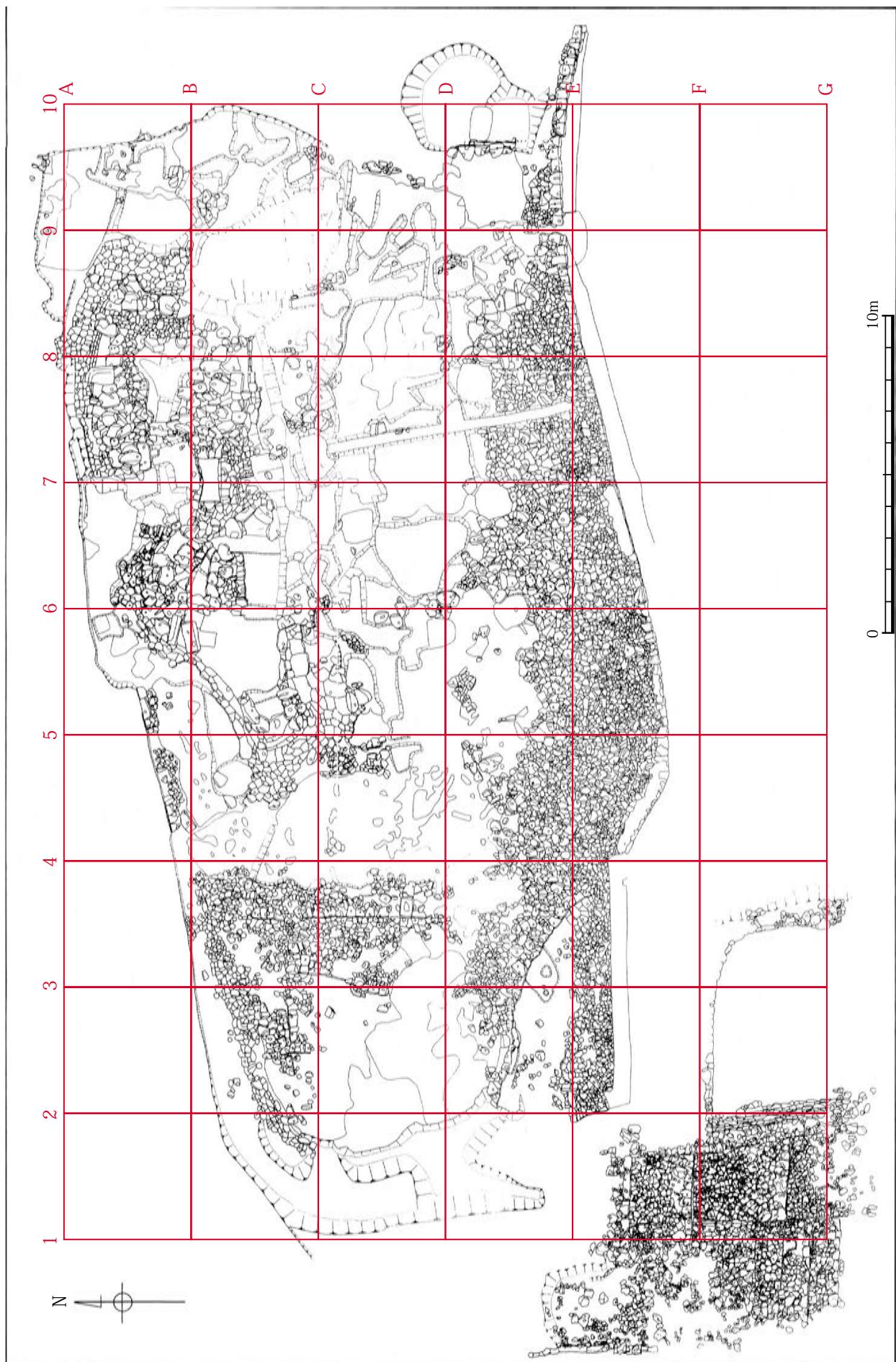
発掘作業は、1993年(平成5)10月5日より着手し、翌”94年(平成6)9月26日までの約12ヶ月間にわたって行った。

対象地一帯は、1984年(昭和 59)に旧琉球大学が宜野湾市・西原町・中城村の 1 市 1 町 1 村に跨る新キャンパスへの移転が完了した以降は荒蕪地と化し、調査着手時にはススキやチガヤなどの雑草が繁茂した状態にあった。

このようなことから、作業はまず手始めに重機(バックホー)によるこれらの除去から着手した。

### 第2節 調査区の設定と調査の概要

グリッド(スクエア)設定は、対象地のほぼ中央部付近を南北の 5 ラインとし、その中央部に位置する箇所を D 列とした、4 × 4 m の方眼を対象地全域に組んだ。この基準とした南北ラインは、いわ



第8図 グリッド配置図

ば任意の方向である。このことから、真南北より $10^{\circ}$ ばかり西に振れているが、調査の便宜上、北東方向を「北」と称し、本書の記述の中でもそれを使用している。

グリッドは南北にA～G列、東西に1～10列を設定し、各グリッド（スクエア）はこれらのアルファベットと算用数字を組み合わせて用いることにした。そして、各グリッドの示準は北西隅の交点で示した。

その後、基本的な堆積土層を把握するために、対象地の中央部付近にて十字に、東西及び南北端部にて、各々の方向に幅2mのサブトレンチを設定し、土層の堆積状況などの確認調査を行った。

結果、調査対象地には旧琉球大学の移転直前まで設置されていた旧琉球大学と那覇市の貯水タンクの建設の際に、基盤となっている琉球石灰岩まで削り取られていたことが判った。

しかし、南北両端は斜面地となっており、この斜面部の一部から当該郭を囲繞している石積みと、その中込め（裏込め）石と見られる栗石が検出されたことから、調査の主眼はその検出と把握に置かれた。

調査対象地の全体的な状況としては、基盤の琉球石灰岩が東西方向の中央部付近で盛り上がり、南北両側に緩傾斜をなして下がって行く馬の背状の地形を呈していたことから、堆積土層も地形に準拠した状況でのあり方をなしてた。

そして、周辺部にのみ僅かに残存していた表土層はバックホーにより除去したが、約8割以上を占めている、琉球石灰岩の岩盤は人力作業で実施せざるを得なかつた。

全体的な作業としては、廃土置き場が南側の崖下部と東側の調査対象地外にしか確保できなかつたため、常に中央部付近を先行して進め、それから周辺部へと進めて行った。

## 第4章 検出遺構

検出された遺構には、「東のアザナ」郭の石積み遺構、美福門への接続階段、石敷遺構、穴状遺構、隅丸方形形状石積み遺構などがある。

これらの遺構の周辺部より種々の遺物が出土しているが、明確に遺構の時期を把握できるものは皆無であるとともに、周辺より得られた遺物も時期的なバラツキが大きく、出土遺物による遺構の構築年代等の把握は不可能であった。

以下に、これらの概要を記す。

### 1.「東のアザナ」郭の石積み遺構

東端部の南北両側に突出部(馬面・雉)を有し、略コ字状に延びている「東のアザナ」郭の石積み遺構は、東西ライン方向の南北の石積みは残存していたものの、突出部(馬面・雉)を有する箇所については根石まで除去され、全く残っていなかった。

残存石積み遺構の南側ラインは、E-4～5グリッドあたりにかけて外側に向けて斜位に迫り出した形状をなすが、5ライン手前で折れて緩やかな傾斜をもってD-9グリッド方向へ延びて行き、東西ラインに併行してD～10グリッド方向へ延びて行く形状を呈している。そして、北側ラインはB-5グリッドあたりまで残存しておらず、それより西方は根石まで破壊を受け、残存していなかった。形状はB-8グリッドを頂点とした極めて緩やかな勾配を呈した弧状となっていた。

南北両ラインとも残存部分は、外側のみの片面積みで、内側には中込め(裏込め)としての拳大から小児の頭大ほどの栗石が充填されていたが、内側ラインの石積みの根石は1石も残存していなかった。

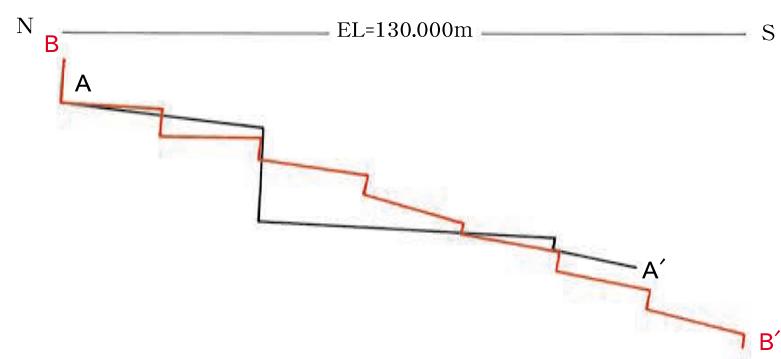
古絵図や古写真等からする限り、石積みは両面積みとなっていることから、検出された石積みは基盤が傾斜地をなしていた部分の地ごしらえとしての基礎に充たる部分で、片面積みによる石積みを行い、内部に栗石を充填して平坦面を作成した後、両面積みの高石積みを行っていたことが伺える。

残存石積みの形態は、附図2に示した実測図や写真からも判るように、基本的には切り石による布積みであるが、個々の石の形状や大きさなどは一定していない。個々の石の形状は、その多くが略方形状のものが主体をなすが、横長の略長方形状のものなども混じっている。

積み方は、目地が通っていないものがあるかと思えば、芋積み的な積み方があつたりするなど、全体として堅牢というよりも稚拙という感を受ける。

### 2.美福門への接続階段

美福門への接続階段は、琉球独特の階段構造である「橙道形式」をなすとともに、蹴上げ高、踏幅が異なる左右二段構造の形状をなす。そして、左右両階段は蹴上げ高、踏幅が異なるだけでなく、築造法においても若干差異が見られる。



第9図 階段部分平面図・断面図

すなわち、各段を構築する際、美福門へ向かって左側階段は平坦に整形した板状石を立石にして構築しているのに対し、右側階段では控えと相場を有す略五角形状に加工した石を積み上げて構築していることである。後者は、どちらかと言えば石積みなどの構築手法と同様である。

残存部分の規模は、左側階段が約7段分が検出され、平均的な蹴上げ高が20cm、踏幅が95cmを測る。右側階段は、約2段分が検出され、蹴上げ高及び踏幅が一定しておらず、検出されたものの下段(最も南側)部分は蹴上げ高が13cm、踏幅が2.9m、次段は蹴上げ高96cm、踏幅が1.9mを測る。

この左右の蹴上げ高や踏幅の異なる二段構造をなす階段は、首里城跡内では他所に例を見ないが、規模などは若干異なるものの、中城城跡の追手門を入って南の郭へ上がっていく階段に見られる。

### 3. 石敷遺構

調査区の西寄りのC・D—3グリッドあたりを中心とした箇所で検出されたものである。D—3グリッドの中央東側寄りの部分に残存長約5.6m程の縁石状の片面積みの石列を南北に縦走させ、その西側に幅約1.7m幅の亀甲状などの不定形の板状石を敷き並べて石畳状に仕上げたものである。

残存部分が限定されていることから、全体的なプランの把握が不可能であり、性格などについては判然としなかった。

### 4. 穴状遺構

C・D—5～7グリッドにて検出されたものである。基盤の琉球石灰岩下に、横位に蛇行して延びる自然洞穴を利用し、壁面の一部に片面積みの石積みを行ったものである。

当該遺構は、各所において天井部分が崩落し、平面形状が不定形をなすいくつかの穴状を呈していた。そして、これらの崩落した不定形状の箇所で断面図を作成したが、断面形状や深さは一定していない。

遺構の構築目的、帰属時期等については、判然としない。

### 5. 隅丸方形状石積み遺構

美福門への接続階段の東側に接したG—2・3グリッドにて検出されたものである。拳大前後の比較的小振りの石材を片面積みによって石積みを行い、隅丸方形状に積み上げたものである。

その規模は、東西5.6mを測るが、南北については完掘しておらず、不明である。

当該遺構の性格などについては判然としないが、古絵図(図版81)には、一帯に御嶽の表現が見られるが、あるいはそれにあたるものかも知れない。



第10図 穴状遺構平面図・断面図

## 第5章 出土遺物

出土遺物は輸入陶磁器(中国産:青磁、白磁、染付、瑠璃釉、紅釉、釉裏紅染付、青磁染付、鉄釉染付、色絵、彩釉陶器、銅綠釉、褐釉陶器、無釉陶器、白地鉄絵、黒釉陶器、タイ産:褐釉陶器、半練土器、ベトナム産:染付、ミヤンマー産:褐釉陶器、朝鮮産:高麗青磁)、国産陶磁器(肥前系染付、色絵、銅綠釉、印判手、関西系陶器、薩摩產陶器、瀬戸・美濃系印判手銅版転写、クロム青磁)、沖縄產陶器(無釉陶器、施釉陶器、陶質土器、瓦質土器)、南島須恵器(カムイヤキ)、土器、土製品、屋瓦、博、金属製品、錢貨、貝製品、骨製品、玉類、煙管、石器、石製品、石造製品、円盤状製品、貝類遺存体、節足・脊椎動物遺存体などが出土した。特筆すべき遺物として移入品(薩摩產)の可能性が高い石像(金剛力士像)、樂焼五代「宗入」(1691~1708年)の銘款入りの皿などが挙げられる。また、去る沖縄戦当時のものと考えられる人骨(成人女性2体の一部分)が出土している。

### 第1節 青磁

ここでは115点を報告する。器種としては碗、皿、盤、鉢、壺、瓶、蓋、杯がある。全形が窺えるのは碗、皿といった小型製品でそれ以外は小片で確認されている。以下にその概要を述べ、詳細は観察表でまとめる。

#### 碗(第11,12,13図1~48)

口縁部から胴部にかけての資料では無文と有文に大別することができる。無文は口縁部形態により玉縁状となるものと外反となるものの2つに細分することができる。有文は主に鎬蓮弁と無鎬蓮弁、線刻細蓮弁、雷文帯が見られ、他に文様の全体構成は不明であるが片切彫りで描かれた文様が見られる。

底部資料に関しては内底面が無文であるものと有文であるものが見られる。有文のものでは印花文、菊花文、草文、捻子花文、人物像がある。

#### 皿(第14図49~75)

口縁部近くで「く」の字状に折れる口折皿と腰部で折れる腰折皿、口縁部が玉縁状となる玉縁口縁皿、口縁部が直口する直口皿、上面觀が輪花となる菊花形皿、上面觀が八角となる八角皿と6つに大別することができる。口折皿は鎬蓮弁、幅の広い無鎬蓮弁、幅の狭い蓮弁が見られる。腰折皿は内底面に界線が見られる程度で全体的に文様は描かれない。玉縁口縁皿も文様は圈線、界線以外はほとんど見られない。直口皿は幅広の蓮弁文、菊花形皿は沈線、八角皿は雷文や雲文が見られる。

#### 盤(第15,16図76~97)

口縁部形態が外反し、口縁端部で上方へ折上げる鍔縁盤、口縁部が玉縁状となる玉縁口縁盤、上面觀が稜花となる稜花盤の3つに大別することができる。鍔縁盤は内体面に幅広の蓮弁文を配するものと縦位の丸彫りで蓮弁文を表現するものの2つに細分することができる。玉縁口縁盤は内体面に蓮弁文、唐草文、雲文、圈線と多様な文様が見られる。稜花盤は鍔上面に口縁部の稜花形態に沿って沈線を描き、外体面に雲文や蓮弁文を配するといったように全体的に文様が描かれる。

### 鉢(第17図98,99)

何れも直口口縁で口唇部を丸く収める。また内外面共に文様が見られる。文様は口縁部外面直下に波状文、と雷文帶、内体面には片切彫りで描かれた文様が見られる。

### 杯(第17図100)

底部が碁笥底となる小振りの杯。文様は見られず、内底面に回転笠削り痕が見られる。

### 瓶(第17図101,102,104,106,108)

器壁が薄く口縁部が外反するもの(101)から器壁が厚く口縁部が直口するもの(102)高台は低く「ハ」の字状に開くもの(104)とその形態は多様である。口縁部資料を見る限りでは文様は見られないが、胴部には文様を配する。

### 壺(第17図103,105,107)

底部の形態から酒会壺となるもの(105)から胴上部に貼り付け文様が見られるもの(103)さらに胴部が丸味を帶び、文様が見られるものがある(107)。なお、壺か瓶か判別が付かない資料の詳細については観察表に譲る。

### 蓋(第17図109～115)

酒会壺の蓋と思われるもの(109,110)や端部が「く」の字状に折れるもの(114)、また「ハ」の字状に開くもの(115)が

第1 表 青磁碗出土状況一覧

分類 出土地	口縁～底部		口縁						胴部			底部					合計	
	蓮弁文	無文	蓮弁文	弦文	唐草文	雲文	横草文 (福広江縁文)	壓押し (人形手)	無文	蓮弁文	唐草文	型押し	無文	蓮弁文 +スタンプ	唐草文	スタンプ	スカップ 内底 輪はぎ	無文 内底 輪はぎ
1 美福門			5						2	6	5					3	1	35
2 洞穴内																1		1
3 南カベ下			4		1	7			6	7	3	1	16	1				46
4 北カベ				1													1	2
5 トレス内													1				1	2
6 C-10																		1
7 E-10													1					1
8 F-4								1	2	2			4					9
9 F-7													1					1
10 F-9					1								1					2
11 F-10		1		1					1	2			7					12
12 G-5 造成層								1	1	2			5					9
13 G-6								2	3				5			1		11
14 G-7													6					6
15 G-8		1			1								2					4
16 H-5									1									1
17 H-6 洞穴内		1							1				2	1		1	1	7
18 H-8													2					2
19 I-4									1	1	1	1						4
20 I-6		3							2	5			5			2		17
21 I-7									1				3					4
22 I-8									2	1			4	1				8
23 I-9									1	1			2					4
24 東南部	1	7	1	2				3	102	22	6	6	142	4	1	8	1	315
25 東南部北側	1	1	1	1				2	2			5						13
26 東南部西側		5	2					1	26	15	4	1	40			3	1	101
27 東南部西端								2	1			2						5
28 東南部東側		1	1					6	5	1	1	14					2	31
29 東西階				2				11	3	1	1	15					1	34
30 東南北穴									1			3						4
31 東南かへ排									1			1						2
32 造成層	25	1	3	4	1			38	33	7	1	56	4			1	14	1 189
33 表土		2			1			6	6						1	1	2	19
34 表採		2		1	1			3	1		21	2					31	
合 計	1	1	57	5	12	15	3	8	217	122	26	12	378	14	1	1	21	2 933

第2表 青磁皿出土状況一覧

分類 出土地	口縁～底部				口縁部						胴部			底部			合計	
	蓮弁文	稜花	八角	無文	蓮弁文	唐草	稜花	菊花	沈線	有文	無文	鎬蓮弁文 十刻花文	有文 不明	無文	有文	無文	無文 内底 釉はぎ	
1 美福門							1	1				4			1		2	9
2 南カベ下	1			1	1		1					3	1	1		2		11
3 北カベ				1														1
4 F-4											1		1					2
5 F-7											1							1
6 F-10									1						1			2
7 G-5造成層											1	1						2
8 G-6														1		1		2
9 G-7				1							1							2
10 H-5										1								1
11 I-6							3								1	1		5
12 I-8																1		1
13 東南部	1		1	7		1		1	1	6			1	4		9	1	33
14 東南部北側													1					1
15 東南部西側				1	3				1		1		1			4		11
16 東南部東側				1	2				1		2				1	2		9
17 東西階													1					1
18 造成層					8	2	3	1		3	8		2	1		2		30
19 表土						2					1	4				1		8
20 表採		1	1															2
合計	1	2	1	6	23	3	9	1	4	7	33	1	8	9	1	24	1	134

第3表 青磁盤出土状況一覧

分類 出土地	口縁部				胴部				底部				合計
	蓮弁文	唐草文	稜花	無文	蓮弁文	蓮弁文	草花文	印花文	印花+ 蓮弁文	有文	無文		
1 美福門	2					1				1	1		5
2 洞穴内	1												1
3 南カベ下	1				1	1			1				4
4 E-9			1										1
5 F-10	1									1	2		4
6 G-5造成層						3							3
7 G-7						1					1		2
8 G-9	1				1								2
9 H-5	1												1
10 H-8	1												1
11 I-4	1												1
12 I-7		1											1
13 I-8									1				1
14 東南部	17			1	12					4	2		36
15 東南部北側					2					1			3
16 東南部西側	6	2			3					4	3		18
17 東南部西端								1	1				3
18 東南部東側					2								1
19 東西階	5				2				1	3	1		12
20 造成層	2	1	7	1	4	1				2			18
21 表土	2										2		4
22 表採					1		1						2
合計	41	4	8	2	33	2	1	2	3	16	14		126

第4表 青磁鉢・瓶出土状況一覧

分類 出土地	鉢				瓶				合計
	口縁部		胴部		口縁部	底部	胴部		
	唐草文	無文	蓮弁文	草花文	無文	無文	凸蒂文	草花文	無文
1 美福門					1				1 2
2 南力ベ下		1							1
3 東南部北側			1						1
4 東南部西側							1		1
5 東南部東側			1		1			1	3
6 東西階					1				1
7 造成層				1					1
8 表土						1			1
9 表採		1							1
合 計	2	2	1	1	2	1	1	1	12

第5表 青磁壺・蓋物・瓶 or 壺・器種不明出土状況一覧

分類 出 土 地	壺								蓋物		瓶or壺				器種 不明 合 計	胴部 合 計	
	身			蓋					蓋		胴部						
	胴部		底部	縁部		甲部		項部 (つまみ)	甲部 (かかり)	縁部		有文	有文	有文 不明	無文	有文	無文
	貼花	刻花	蓮弁	有文	無文	有文	無文	有文	—	有文	無文	蓮弁	草花文	—	—	刻花	—
1 美福門						1					1	1	2		1	1	7
2 南力ベ下				1							1						2
3 F-4													1				1 2
4 G-6												1					1
5 I-8					1									1			2
6 東南部		1		1		4			1			1	2				10
7 東南部北側					1	1											2
8 東南部西側																	1 1
9 東南部東側				1													1
10 東西階									1				1				2
11 造成層	1		1	1		1	1	1	1		1	3	4		1	1	16
12 表土												1					1
13 表採					1		2										3
合 計	1	1	1	5	2	9	1	1	2	1	1	8	10	1	2	1	3 50

第6表 青磁觀察一覧( 1 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第11図 図版11 1	鎬蓮弁文 碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡と黒色粒子が僅かに見られる。	16.0 — —	やや白味がかかった緑色の失透釉。	口唇部が尖り口縁は僅かに外反する。弁先の尖る幅の広い鎬蓮弁文を施す。胴部は僅かに膨らみを有する。	東南部
第11図 図版11 2	無鎬蓮弁 文碗	口～底	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	17.6 7.9 7.3	明緑色の失透釉。	無鎬蓮弁文を外体面に施す外反碗。底部から口縁部までは膨らみを有しながら移行する。片切彫りの蓮弁文の上部に陰圈線が一条見られる。釉は内外面共に厚く施され、高台内面下部まで施釉される。畠付は水平。	東南部
第11図 図版11 3	無鎬蓮弁 文碗	口～胴	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が僅かに見られる。	14.0 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	口縁部が玉線状となる直口碗。外面には三条の陰圈線とその下部に無鎬の蓮弁が施される。釉は口唇部を除いて内外面に厚く施される。	表土
第11図 図版11 4	無鎬蓮弁 文碗	口	灰白色の微粒子で黒色粒子、気泡が多く見られる。	18.0 — —	明緑色の透明釉。	口縁部が玉線状となる無鎬蓮弁文碗。裏面には片切彫りの文様が見られる。釉は内外面共に厚く施される。	造成層
第11図 図版11 5	無鎬蓮弁 文碗	口～胴	青灰白色の微粒子で白色粒子を含む。	14.0 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	無鎬蓮弁文を外面に配する直口碗。表面には片切彫りの文様が見られる。口唇部は舌状となる。内外面共に釉は厚く施され、器表には被熱した痕跡が見られる。	南カベ下
第11図 図版11 6	無鎬蓮弁 文碗	口	灰白色の微粒子で細かな気泡が多く見られる。	13.8 — —	明緑色の失透釉。	口縁部が外反する無鎬蓮弁文碗。文様は磁胎への刻みが浅いため明瞭ではない。内外面ともに厚く施釉。	南カベ下
第11図 図版11 7	線刻細蓮 弁文碗	口～胴	灰白色の微粒子。	15.0 — —	明緑色の透明釉。	直口碗。線刻細蓮弁の弁間と弁先は対応するが弁間線が弁先から突き出る。内底面に界線が見られる。	南カベ下
第11図 図版11 8	線刻細蓮 弁文碗	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。大きい気泡も見られる。	13.0 — —	灰オリーブ色の透明釉。	直口碗で口唇部は丸味を帯びる。外体面に見られる蓮弁文の弁先と弁間は対応していない。内外面共に釉は厚く施されるが口縁部は薄くなる。	表採
第11図 図版11 9	線刻細蓮 弁文碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が見られる。中には大きい気泡が見られる。	10.7 — —	オリーブ灰色の透明釉。	直口碗で口唇部はやや平坦となる。弁先と弁間は対応していない。施釉は雑で一部、露胎となる。	造成層
第11図 図版11 10	線刻細蓮 弁文碗	口～底	灰白色のやや粗い粒子で白・黒色粒子が見られる。	12.3 6.8 4.3	浅黄色の失透釉。	直口碗で高台径は小さく、畠付は尖る。線刻細蓮弁で弁間のみ見られる。口縁部外側には釉垂れが見られる。外底面と高台内面の一部のみ露胎。器表にはあばたが多く見られる。	H-6 洞穴内
第11図 図版11 11	線刻細蓮 弁文碗	口～胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が多く見られる。	14.0 — —	白みがかった緑色の失透釉。	外体面は線刻細蓮弁の弁先と弁間が離れ、その間に陰圈線が1条配される。内体面は口縁部直下に円弧を連続させた文様が見られる。	表土
第11図 図版11 12	鎬蓮弁文 碗	胴～底	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	— — 7.4	明緑色のやや透明度を有する釉。	鎬蓮弁文が外体面に見られる。内底面には線描きで草文が見られる。高台は「ハ」の字状に開く。釉は高台の内面と外底面の境まで施される。外底面は蛇の目釉剥ぎされる。	造成層 洞穴内
第11図 図版11 13	鎬蓮弁文 碗	底	黄白色の微粒子で細かな気泡が多く見られる。	— — 5.1	黄味がかった緑色の失透釉。	高台は低く、外底面下部は斜めに面取りされる。外面には鎬蓮弁文が施される。内底面にも文様が見られる。	南カベ下
第11図 図版11 14	鎬蓮弁文 碗	胴～底	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が見られる。	— — 6.6	明緑色の失透釉。	鎬蓮弁文が外体面に見られる。内底面には草文か。高台は「ハ」の字状に開く。釉は高台の内面と外底面の境まで施される。外底面は蛇の目釉剥ぎされる。	東南部
第11図 図版11 15	鎬蓮弁文 碗	胴～底	灰白色の微粒子で白色粒子が見られる。	— — 6.0	明緑色のやや透明度を有する釉。	鎬を有する蓮弁を配する碗底部。釉は高台内面下部まで施される。内外面共に釉は厚く施される。粗い貫入が内外面共に見られる。	美福門

第7表 青磁観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第11図 図版11 16	碗	胴～底	灰白色の微粒子で大きい気泡が見られる。	— 6.0	オリーブ灰色の透明釉。	外体面には蓮弁文の下部と思われる縱位の沈線が見られる。内底面には界線と印花文が見られる。外底面は雜であるが蛇の目釉剥ぎがなされる。	造成層
第11図 図版11 17	碗	底	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が見られる。	— 4.2	オリーブ灰色の失透釉。	外体面には蓮弁の下部が見られる。内底面には界線の中に筒状のものを持った人物像の印刻文が見られる。釉は高台内面下部まで施される。	造成層
第11図 図版11 18	碗	底	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。白色砂粒も見られる。	— 5.5	オリーブ灰色の透明釉。	外体面には蓮弁の下部が見られる。内底面には印刻の文様が見られるが不明瞭。施釉は雜で所々、露胎となる。高台内面途中まで施釉される。畳付には砂粒が溶着する。	I-8
第11図 図版11 19	無鎬蓮弁文碗	底	灰白色の微粒子で、黒色粒子が多く見られる。白色粒子も僅かに見られる。	— 5.8	青緑色の失透釉。	外体面には蓮弁の下部が見られる。内底面には印刻の文様が見られるが不明瞭。高台の幅は厚く、外底面には砂粒が付着する。内底面の釉は雜に釉剥ぎされる。	東南部
第12図 図版12 20	雷文帶碗	口～胴	灰白色の微粒子で白色砂粒が見られる。	— — —	明緑色の失透釉。	中心部で逆回転する雷文で、下端線は各雷文、共通する。外体面には刻花文か。内体面には片切彫りの草花文が見られる。	南カベ下
第12図 図版12 21	雷文帶碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡、黒色粒子が僅かに見られる。	12.2 — —	明緑色の失透釉。	中心で、逆回転しない雷文。下端線は雷文相互で共通する。外体面にも片切彫りの文様が見られるが小片のため、全体構成は不明。	南カベ下
第12図 図版12 22	雷文帶碗	口	灰白色の微粒子で白色粒子が見られる。	— — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	口縁部内外面直下に雷文が見られる。外面のものは櫛描きで、内面は片切彫りで描かれるが不明瞭。内外面共に細かい貫入が見られる。	南カベ下
第12図 図版12 23	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	15.6 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	口縁部は緩やかに外反する。片切彫りと櫛描きの文様が見られる。口縁部内面下部に陽圏線が一条見られる。	東南部西側
第12図 図版12 24	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	16.8 — —	明緑色の失透釉。	やや厚手の外反碗。外体面にラマ式蓮弁文、内体面には刻花文か。内外面共に釉を厚く施す。	南カベ下
第12図 図版12 25	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。	19.6 — —	明緑色の透明釉。	口縁部外面直下に3条の圏線が配され、それを画する様に斜線が先の線を切る。外体面にも沈線が見られるが文様の全体構成は不明。内体面には片切彫りと櫛描き文を組み合わせた文様が見られる。内外面共に釉は厚く施されるが、口唇部のみ薄くなる。	東南部東側
第12図 図版12 26	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が多く見られる。	24.0 — —	明緑色の透明釉。	口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁部から胴下部にかけて陰圏線が5条見られる。内体面には片切彫りの文様が見られるが全体構成は不明。	東南部
第12図 図版12 27	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が多く見られる。	18.3 — —	明緑色の透明釉。	口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁部から胴下部にかけて陰圏線が5条見られる。内体面には片切彫りの文様が見られるが全体構成は不明。	北カベ
第12図 図版12 28	玉縁口縁碗	口～胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。	17.2 — —	明緑色の失透釉。	口縁部が玉縁状に肥厚する。口縁部外面下部に沈線が一条見られる。口縁部内面下部には円弧を連続させた横位文が見られ、その下部は刻花文か。	美福門
第12図 図版12 29	玉縁口縁碗	口～胴	灰色のやや粗い粒子。白・黒色粒子、気泡が見られる。	15.2 — —	明緑色の透明釉。	内体面に陽刻で描かれた草花文が見られる。器表には砂粒が溶着する。内外面共に粗い貫入が見られる。	東南部

第8表 青磁観察一覧(3)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第12図 図版12 30	玉縁口縁 碗	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	16.7 — —	明緑色の失透釉。	内体面に陽刻の文様が見られるが、文様構成は不明。口唇部のみ釉は薄く施される。内外面共に細かい貫入が見られる。	東南部
第12図 図版12 31	碗	胴～底	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。	— — 7.0	明緑色の透明釉。	内底面に印花文が見られる。外体面には片切彫りで描かれた牡丹唐草文が見られる。釉は高台内面下部まで施される。施釉は雑で一部露胎となる。内底面には回転籠削り痕が明瞭に残る。	東南部
第12図 図版12 32	碗	胴～底	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — 4.9	明緑色の失透釉。	高台は高く、内割りは浅い。内底面には崩れた捻子花文が見られる。器表には砂粒が溶着する。	表土
第12図 図版12 33	碗	胴～底	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。黒色粒子も僅かに見られる。	— — 6.7	オリーブ色の透明釉。	高台は方柱状となり、胴部は膨らみを有する。畳付けは水平で、外底面は蛇の目釉剥ぎされる。内底面には界線の中に菊花と草文が見られる。	洞穴内
第12図 図版12 34	碗	胴～底	灰色の微粒子で白色粒子、気泡が見られる。	— — 4.9	明緑色のやや透明度を有する釉。	高台の造りは雑で畳付の幅は一定ではない。内底面に印花文が見られる。釉は雑に施され、一部露胎となる。	表土
第13図 図版13 35	玉縁口縁 碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	14.8 — —	灰オリーブ色の透明釉。	口縁部は若干、肥厚して玉縁状となる。口縁部外面直下に陰圈線が一条見られる。内外面共に釉は厚く施されるが口唇部のみ薄くなる。	造成層
第13図 図版13 36	玉縁口縁 碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	— — —	明緑色の透明釉。	口縁部は若干、肥厚して玉縁状となる。外面の口縁部直下には幅広の界線、そしてその下部に細い界線が見られる。内外面共に粗い貫入が見られる。	表採
第13図 図版13 37	玉縁口縁 碗	口～底	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。白色砂粒も僅かに見られる。	15.1 7.4 6.1	明緑色の失透釉。	口縁部が玉縁状に肥厚する。釉葉は高台外面まで施され、内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。内底面の施釉は雑で露胎となる部分も見られる。	東南部
第13図 図版13 38	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。一部に大きい気泡が見られる。	18.6 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	口縁部は緩やかに外反する。外体面には陰圈線が見られるが一部不明瞭となる。外体面には回転籠削り痕が見られる。	東西階
第13図 図版13 39	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が見られる。	16.4 — —	白みがかった明緑色の透明釉。	口縁部直下で「く」の字状に折れる外反碗。口縁部外面直下に陽圈線が一条見られる。全体的に器壁は薄い。	東南部西側
第13図 図版13 40	外反碗	口～胴	灰白色のやや粗い粒子。白・黒色粒子が僅かに見られる。	15.7 — —	灰オリーブ色の透明釉。	口唇部が平坦となる外反碗。外体面には回転籠削り痕が見られる。	東南部
第13図 図版13 41	外反碗	口～胴	灰色の微粒子で気泡、白色砂粒が僅かに見られる。	15.8 — —	灰オリーブ色の失透釉。	口唇部は舌状となる。胴部から口縁部へは膨らみを有しながら移行する。外体面には回転籠削り痕が見られる。	東南部
第13図 図版13 42	玉縁口縁 碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡、白色粒子が僅かに見られる。	18.4 — —	オリーブ灰色のやや透明度を有する釉。	口縁部は扁平な玉縁状となる。器表にはあばたが僅かに見られる。	東南部
第13図 図版13 43	玉縁口縁 碗	口～胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が多く見られる。気泡も見られる。	17.6 — —	白みがかった明緑色の透明釉。	口縁部は扁平な玉縁状となる。口縁部外面直下には陽圈線が一条見られる。釉は内外面共に薄く均一に施される。	東南部
第13図 図版13 44	碗	底	黄橙色の微粒子で白色粒子、気泡が見られる。黒色粒子も僅かに見られる。	— — 7.0	明緑色の失透釉。	高台の内割りは浅く、畳付は水平。胴部の立ち上がり方から大振りの碗と推測される。釉は畠付まで施され、内底面は円形状に搔き取られる、露胎の部分に印花文が見られる。外底面には回転籠削り痕が見られる。	東南部西側

第9表 青磁観察一覧(4)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第13図 図版13 45	碗	胴～底	灰白色のやや粗い粒子で白色粒子、気泡が見られる。	— — 5.0	明緑色の失透釉。	高台は低く、高台外面下部は斜めに面取られる。内底面には回転窓削り痕が見られる。釉は高台外面下部まで施され、畳付から露胎となる。	東南部
第13図 図版13 46	碗	胴～底	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が僅かに見られる。	— — 4.2	浅黄色の透明釉。	型作りの碗底部。内底面には煤が付着する。畳付のみ露胎で、ほぼ全釉される。内外面共に細かい貫入が見られる。	北城壁
第13図 図版13 47	碗	胴～底	灰白色の微粒子で気泡、黒色の粗い粒子が多く見られる。白色砂粒が僅かに見られる。	— — 4.8	灰オリーブ色の失透釉。	高台は低く、内割りは浅い。畳付は水平であるが幅は一定ではない。外面は露胎となる。高台の断面形は台形状となる。いわゆる泉州窯系磁器と呼ばれる一群。細かい貫入が不明瞭ながら見られる。	表土
第13図 図版13 48	碗	胴～底	灰白色の微粒子で気泡、黒色の粗い粒子が多く見られる。白色砂粒が僅かに見られる。	— — 5.4	明緑色の失透釉。	器形は47のような泉州窯系磁器と呼ばれる一群と類似する。しかし、釉が明緑色となる点のみ泉州窯系磁器とは異なる。	東南部西側
第14図 図版14 49	皿	胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が僅かに見られる。	— — —	明緑色の失透釉。	外面には鎬蓮弁文、内面には櫛描き文が見られる。釉は内外面共にやや厚く施される。	南カベ下
第14図 図版14 50	口折皿	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — —	白みがかった明緑色の透明釉。	外体面に鎬蓮弁文が見られる。口縁部が水平となり、内面の屈曲部に明確な稜が見られる。内外面共に細かい貫入が見られる。	東南部東側
第14図 図版14 51	口折皿	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が多く見られる。気泡も見られる。	11.2 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	外体面に幅広の蓮弁が見られる。明確な鎬は見受けられないが、弁の中心部が盛り上がる。内面の屈曲部に明確な稜が見られる。	造成層
第14図 図版14 52	口折皿	口～胴	灰白色の微粒子で白色粒子が見られる。	11.8 — —	灰オリーブ色のやや透明度を有する釉。	口縁部は緩やかに外反する。外体面に蓮弁文が見られるが、その表現は雑である。外面器表に凹凸が見られる。釉は内外面共に厚く施される。	表土
第14図 図版14 53	口折皿	口～胴	灰色の微粒子で気泡、白色粒子が見られる。	13.2 — —	オリーブ灰色の失透釉。	不明瞭ながら丸彫りで鋸歯状に描かれた蓮弁文が外体面に見られる。口唇部にはあばたが見られる。	東南部
第14図 図版14 54	口折皿	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	13.2 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	片切彫りで描かれた蓮弁文が外体面に見られる。釉は内外面共に厚く施され、口縁部近くで薄くなる。内面に粗い貫入が見られる。	造成層
第14図 図版14 55	口折皿	口～胴	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が多く見られる。	11.6 — —	暗オリーブ色の失透釉。	幅の狭い蓮弁を外体面に、密に配する。釉は内外面共に厚く施され、口唇部のみ薄くなる。	造成層
第14図 図版14 56	直口皿	口～底	灰白色の微粒子で褐・白色粒子、気泡が見られる。	8.5 2.55 4.4	明緑色の失透釉。	口縁部が直口する小型の皿。外体面には幅広の蓮弁文、内体面には縦位の沈線を密に配する。内底面には崩れた花文が見られる。外底面は略円形状に釉剥ぎされる。	南カベ下
第14図 図版14 57	口折皿	口～胴	灰白色の微粒子で白色粒子・気泡が多く見られる。	17.0 — —	灰オリーブ色のやや透明度を有する釉。	内体面に籠描きで唐草文が見られる。釉は内外面共に厚く施されるが口唇部のみ薄くなる。	造成層
第14図 図版14 58	腰折皿	口～胴	灰白色の微粒子で褐・白色粒子が見られる。	13.6 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	腰部が「く」の字状に屈曲する外反碗で、口唇部は舌状となる。内外体面に片切彫りで唐草文を描く。釉は口唇部のみ薄く施される。	美福門
第14図 図版14 59	口折皿	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	13.2 — —	明緑色の失透釉。	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は舌状となる。内体面には片切彫りの文様が見られるが、全体構成は不明。	造成層

第10表 青磁觀察一覧( 5 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第14図 図版14 60	八角皿	口～底	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。白色砂粒も僅かながら見られる。	14.8 3.6 7.2	明緑色のやや透明度を有する釉。	腰部が「く」の字状に屈曲し、明瞭な稜線が見られる。口縁部は外反する。内体面には中心で回転が逆になる雷文がありその下部には2本の縦位線で画し、その内部に雲文を配する。内底面には界線とその中に草花文か。釉は外底面のみ円形状に搔き取られる。	表採
第14図 図版14 61	輪花皿	口～底	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	10.8 3.8 5.6	明緑色のやや透明度を有する釉。	口唇部には挿りが見られる。腰部が折れて口縁部は外反する。内体面には片切彫りの文様が見られるが全体構成は不明。高台は低く、体部との境で釉は厚くなる。	東南部
第14図 図版14 62	腰折皿	口～底	灰白色のやや粗い粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	11.5 3.8 6.6	明緑色のやや透明度を有する釉。	腰部は緩やかに折れて口縁部は外反する。外底面の釉は円形状に搔き取られる。高台は一部露胎となる。高台内面と体部との境に砂粒が溶着する。	東南部東側
第14図 図版14 63	腰折皿	口～底	灰色の微粒子で気泡が多く見られる。白色粒子も見られる。	12.0 2.85 6.0	外面は灰オリーブ色、内面はオリーブ黄色の失透釉。	口唇部は舌状となる外反皿。外底面の器表には凹凸が見られる。あばたも僅かに見られる。	東南部
第14図 図版14 64	腰折皿	口～胴	灰白色の微粒子で白色粒子、大きい気泡が見られる。	12.4 — —	明緑色の失透釉。	腰部外面に陰圈線が2条、内面には1条見られる。口唇部のみ釉は薄く施される。	F-10
第14図 図版14 65	玉縁口縁皿	口～底	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	11.8 4.2 6.4	明緑色の失透釉。	口縁部が僅かに玉縁状に肥厚する。器表にはあばたが見られる。高台は「ハ」の字状に開く。高台外面には釉垂れが見られる。外底面は円形状に釉剥ぎされる。	東南部西側
第14図 図版14 66	腰折皿	口～胴	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が見られる。	11.0 — —	灰オリーブ色の失透釉。	腰部外面には2条の陰圈線が見られる。また、内底面には界線が1条見られる。口縁部外面直下には砂粒が溶着する。	東南部東側
第14図 図版14 67	玉縁口縁皿	口～底	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	12.4 3.75 7.0	明緑色の失透釉。	口縁部が玉縁状に肥厚する。高台断面は方柱状となり、釉は高台内面まで施される。外底面は蛇の目釉剥ぎされている。内外面共に粗い貫入が見られる。	南カベ下
第14図 図版14 68	腰折皿	口～胴	灰白色の微粒子で大きい気泡が見られる。	— —	明緑色の透明釉。	口縁部が僅かに外反する。外体面には回転箇削り痕が見られる。釉は均等に施されるが一部露胎となる。	東南部東側
第14図 図版14 69	玉縁口縁皿	口～底	灰白色のやや粗い粒子で褐・白色粒子が見られる。	13.9 3.45 9.0	白みがかった明緑色の失透釉。	口縁部が僅かに玉縁状に肥厚する。釉は外底面は円形状に搔き取られ、外底面は露胎となる。疊付も一部露胎となる。	北城壁
第14図 図版14 70	直口口縁皿	口～胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子、気泡が僅かに見られる。	11.4 — —	白みがかった明緑色の透明釉。	口唇部が舌状となる直口口縁皿。口縁部内面直下に僅かに段を有する。内外面共に釉は薄く施される。外表面は胴下部から露胎となる。	造成層
第14図 図版14 71	直口口縁皿	口～胴	灰白色の微粒子で大きい気泡が見られる。	7.6 — —	明緑色の透明釉。	口縁部内面直下に陰圈線が一条見られる。内外面共に細かい貫入が見られる。	東南部西側

第11表 青磁観察一覧( 6 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第14図 図版14 72	皿	底	白色の微粒子で黒色 粒子が見られる。	— — 10.8	明緑色の透明 釉。	高台は低く、器壁は全体的に薄い。胴部は緩やかに立ち上がる。全釉され畠付のみ露胎となる。	美福門
第14図 図版14 73	皿	胴～底	灰白色の微粒子で黒 色粒子、気泡が多く見 られる。	— — 6.2	明緑色の失透 釉。	高台の断面形は三角形状となる。釉は外底面のみ円 形状に搔き取られる。内外面共に細かい貫入が見ら れる。	東南部東 側
第14図 図版14 74	菊花形皿	口～胴	灰白色の微粒子で氣 泡が見られる。	13.0 — —	白みがかった 明緑色の透明 釉。	菊花形の成形皿である。外面には口縁部の抉りに対 応して縦位の沈線が見られる。内外面共に細かい貫 入が見られる。	造成層
第14図 図版14 75	皿	胴～底	灰白色の微粒子で白・ 黒粒子が見られる。	— — 7.8	オリーブ灰色 のやや透明度 を有する釉。	高台は低く断面形は方柱状となる。釉は内底面は円 形状に搔き取られ、外底面は露胎となる。畠付の施 釉は雑で一部露胎となる。	東南部
第15図 図版15 76	鍔縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で白 色粒子・気泡が見られ る。	— — —	明緑色の透明 釉。	鍔を平坦に仕上げた盤で、外体面には片切彫りで文 様が描かれる。鍔上面と内体面には牡丹唐草文か。 鍔下面には陰圈線が見られる。	I—7
第15図 図版15 77	稜花盤	口～胴	灰白色の微粒子で氣 泡が僅かに見られる。	— — —	明緑色の透明 釉。	鍔を平坦に仕上げた稜花盤で、鍔上面には3本単位 と単体の籠描きで鍔端に沿うように稜花を描く。内体 面には雲文が見られる。また、幅広の蓮弁文が内外 体面共に見られる。外面のみやや粗い貫入が見られ る。	造成層
第15図 図版15 78	稜花盤	口～胴	灰色のやや粗い粒子。 白色粒子・気泡が見ら れる。	— — —	暗オリーブ色 のやや透明度 を有する釉。	鍔を平坦に仕上げた稜花盤。鍔上面に籠描きで鍔端 に沿うように稜花を描く。内体面に幅広の蓮弁文を配 する。外面に粗い貫入が見られる。	造成層
第15図 図版15 79	鍔縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で白 色粒子が見られる。	— — —	明緑色のやや 透明度を有す る釉。	鍔端部を上方へ僅かに撮み上げる。鍔端部には陰 圈線が一条見られる。外体面には幅広の蓮弁文が見 られる。	H—5
第15図 図版15 80	鍔縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で氣 泡が僅かに見られる。	— — —	灰オリーブ色 の透明釉。	鍔端部を上方へ僅かに撮み上げる。外体面上部に 幅広の陰圈線が一条見られる。内体面には波状の沈 線が一条見られる。鍔端部の内面屈曲部に釉が溜ま る。	東南部西 側
第15図 図版15 81	鍔縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で氣 泡が見られる。	— — —	白味がかった 緑色の透明 釉。	鍔端部を上方へ僅かに撮み上げる。内体面には幅 広の蓮弁文が配される。内外面共に細かい貫入が見 られる。	美福門
第15図 図版15 82	鍔縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で氣 泡が見られる。	22.1 — —	灰オリーブ色 の失透釉。	鍔端部を上方へ僅かに撮み上げる。全体的に器壁 は薄く、胴部の立ち上がりは緩やかである。内体面に は丸彫りの蓮弁文が描かれる。	美福門

第12表 青磁觀察一覧( 7 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第15図 図版15 83	鍔縁盤	口～胴	浅黄色の微粒子で白色粒子、大きい気泡が見られる。	24.4 — —	オリーブ黄色の失透釉。	鍔端部を上方へ撮み上げる。内体面には丸彫りで蓮弁文が描かれる。蓮弁の幅や形は区々である。内外面共に細かい貫入が見られる。	東西階
第15図 図版15 84	鍔縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で白色砂粒が僅かに見られる。	— — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	鍔端部を上方へ撮み上げる。内体面には幅広の蓮弁文が見られる。内面の体部と鍔部との境には稜線を明瞭に見ることができる。釉は撮み上げ部分のみ薄く施される。	G-9
第15図 図版15 85	鍔縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で褐色・黒色粒子が僅かに見られる。	25.8 — —	明緑色の透明釉。	鍔端部を上方へ撮み上げる。内体面には丸彫りで描かれた蓮弁文が見られる。一部、弁先が二股になる蓮弁が見られる。外面には鍔と体部との境に幅広の陰圏線が一条見られる。	東南部
第15図 図版15 86	玉縁口縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	— — —	白みがかった明緑色の透明釉。	口縁部が玉縁状となる直口盤。内体面に丸彫りで蓮弁文を描く。また口縁部内外面直下に陰圏線が一条見られる。内外面共に粗い貫入が見られる。	東西階
第15図 図版15 87	玉縁口縁盤	口～胴	灰色の微粒子で大きい気泡が見られる。黒色粒子も僅かに見られる。	— — —	灰オリーブ色の透明釉。	口縁部が玉縁状となる直口盤。口縁部外面直下に陽圏線が一条見られる。内体面に唐草文か。内外面共に細かい貫入が見られる。	東南部西側
第15図 図版15 88	玉縁口縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子・気泡が見られる。	23.4 — —	オリーブ色の透明釉。	口縁部が玉縁状となる直口盤。内底面には界線が見られる。釉は内外面共に厚く施され、口唇部のみ薄くなる。器表にはあばたが見られる。	東南部
第15図 図版15 89	玉縁口縁盤	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子・気泡が僅かに見られる。	42.8 — —	明緑色の透明釉。	口縁部が玉縁状となる直口盤。口縁部外面直下に陰圏線が一条、内体面には片切彫りで雲文が描かれる。口縁部内面には砂粒が溶着する。	造成層
第16図 図版16 90	盤	胴～底	灰白色の微粒子で気泡が見られる。黒色粒子も僅かに見られる。	— — 10.8	浅黄色の失透釉。	高台の断面形は台形状となる。内底面と外底面には印花文が見られる。全釉されるが施釉は全体的に雑である。	I-8
第16図 図版16 91	盤	胴～底	灰白色の微粒子で白色粒子と気泡が僅かに見られる。	— — —	明緑色の透明釉。	高台は低く、内傾する。内体面と内底面には界線と籠彫りの蓮弁文が配される。	カベ下
第16図 図版16 92	盤	胴～底	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — 27.0	灰オリーブ色のやや透明度を有する釉。	高台は低く、高台外面下部を斜めに面取る。外体面には籠彫りと丸彫りで描かれた文様が見られる。内底面の器表には凹凸が見られる。内外面共に細かい貫入が見られる。	表採
第16図 図版16 93	盤	胴～底	灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が見られる。	— — 14.8	オリーブ黄色の失透釉。	高台は低く、高台外面下部を斜めに面取る。畠付は尖る。内外体面に籠彫りの蓮弁文が配される。内底面には印刻の草花文か。外底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	東西階

第13表 青磁觀察一覧( 8 )

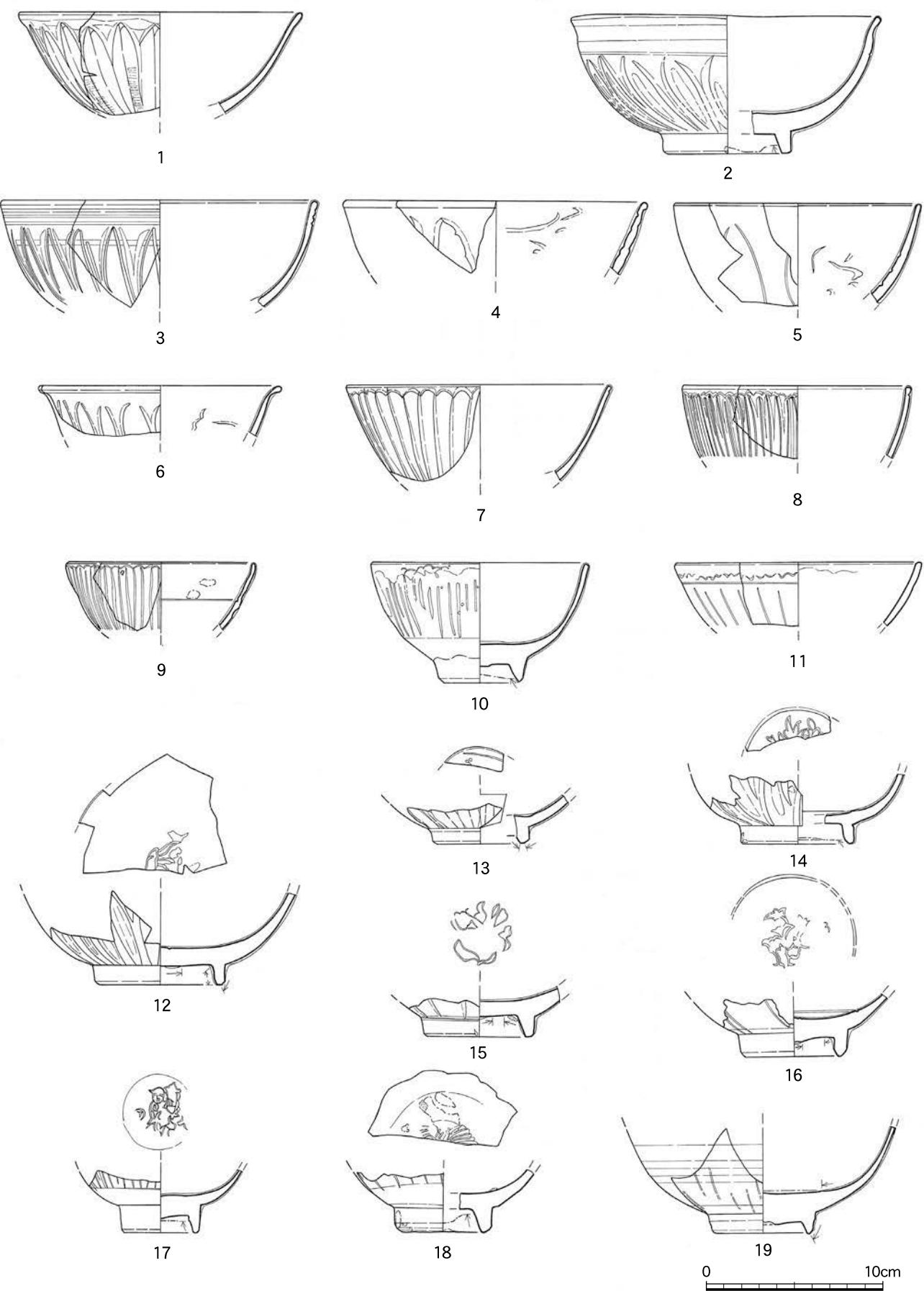
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第16図 図版16 94	盤	胴～底	浅黄色の微粒子で白・ 黒色粒子、気泡が見ら れる。	— — 8.4	オリーブ色の 透明釉。	高台は低く、高台の断面形は三角形状となる。外体 面には幅広の蓮弁文が配される。内底面には回転籠 削り痕が見られる。内外面共に細かい貫入が見られ る。釉は外底面と高台内面の一部は露胎となる。	造成層
第16図 図版16 95	盤	胴～底	灰白色の微粒子で気 泡、白色粒子が僅かに 見られる。	— — 7.75	灰オリーブ色 の失透釉。	高台の断面形は台形状となる。内体面には幅の狭い 蓮弁文が見られ、内底面には草花文が見られるが不 明瞭である。釉は高台内面まで施され、外底面は露 胎となる。内底面には回転籠削り痕が残る。	南カベ下
第16図 図版16 96	盤	胴～底	灰白色の微粒子で白・ 黒色粒子、気泡が見ら れる。	— — 9.9	青緑色の失透 釉。	内体面には丸彫りで蓮弁文が描かれ、外底面には草 花文が見られる。内体面と外体面との境には幅広の 界線が見られる。外体面の下部には2条の陰圈線が 見られる。釉は雑に施され、外体面は一部露胎とな る。外底面は蛇の目状に釉剥ぎされるが、完全には 剥がれていない。	東南部西 側
第16図 図版16 97	盤	胴～底	灰白色の微粒子で気 泡が見られる。白色粒 子も僅かに見られる。	— — 13.8	灰オリーブ色 の失透釉。	高台は幅広く低い、内底面の内割りは浅い。内外面 どもの釉を厚く施し、粗い貫入が見られる。	東南部西 側
第17図 図版17 98	鉢	口～胴	灰白色の微粒子で黒 色粒子、気泡が僅かに 見られる。	— — —	明緑色の透明 釉。	内体面には片切彫りで文様が描かれる。外面の口縁 部直下には丸彫りと片切彫りで描かれた帶文が見ら れる。	表採
第17図 図版17 99	鉢	口～胴	灰白色の微粒子で白 色粒子が多く見られ る。白色のかなり粗い 粒子も僅かに見られ る。	— — —	明緑色の透明 釉。	口縁部外面直下に雷文が見られる。雷文相互を上下 部の沈線に連結させる雷文帶である。内体面には片 切彫りで描かれた文様が見られる。外面のみ細かい 貫入が見られる。	南カベ下
第17図 図版17 100	杯	胴～底	浅黄橙色の微粒子で 白色微粒子を多く含 む。	— — 3.2	オリーブ黄色 の失透釉。	底部は碁笥底となる。釉は胴下部まで外面は施され る。内底面には回転籠削り痕が見られる。	G-7
第17図 図版17 101	瓶	口～頸	灰白色の微粒子で白・ 黒色粒子が見られる。	8.6 — —	明緑色のやや 透明度を有する 釉。	口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は丸味を帶 び、釉は薄く施される。	東南部東 側
第17図 図版17 102	瓶	口～頸	灰白色の微粒子で気 泡が多く見られる。	— — —	明緑色の失透 釉。	口縁部が直口する瓶で口唇部は玉縁状となる。内外 面共に粗い貫入が見られる。	美福門
第17図 図版17 103	壺	胴	灰白色の微粒子で気 泡が多く見られる。白 色粒子も僅かに見られ る。	— — —	明緑色の透明 釉。	貼り付け文様が見られ、その際から横位の沈線が2 条見られる。内外面共に細かい貫入が見られる。	造成層
第17図 図版17 104	瓶	底	灰白色の微粒子で気 泡が見られる。	— — 5.3	白みがかった 明緑色の透明 釉。	高台は低く、豊付の幅は広い。釉は高台外面下部ま で施される。外底面は露胎となる。内底面中央はや や盛り上がる。	表土
第17図 図版17 105	壺	底	灰白色の微粒子で気 泡が見られる。黑色粒 子も僅かに見られる。	— — —	明緑色の失透 釉。	酒会壺の底部で、外面には錦蓮弁文を配する。底部 は落とし底で胴部との境には砂粒が溶着する。豊付 のみ露胎となり、他は全釉される。内外面共に粗い貫 入がみられる。	表土

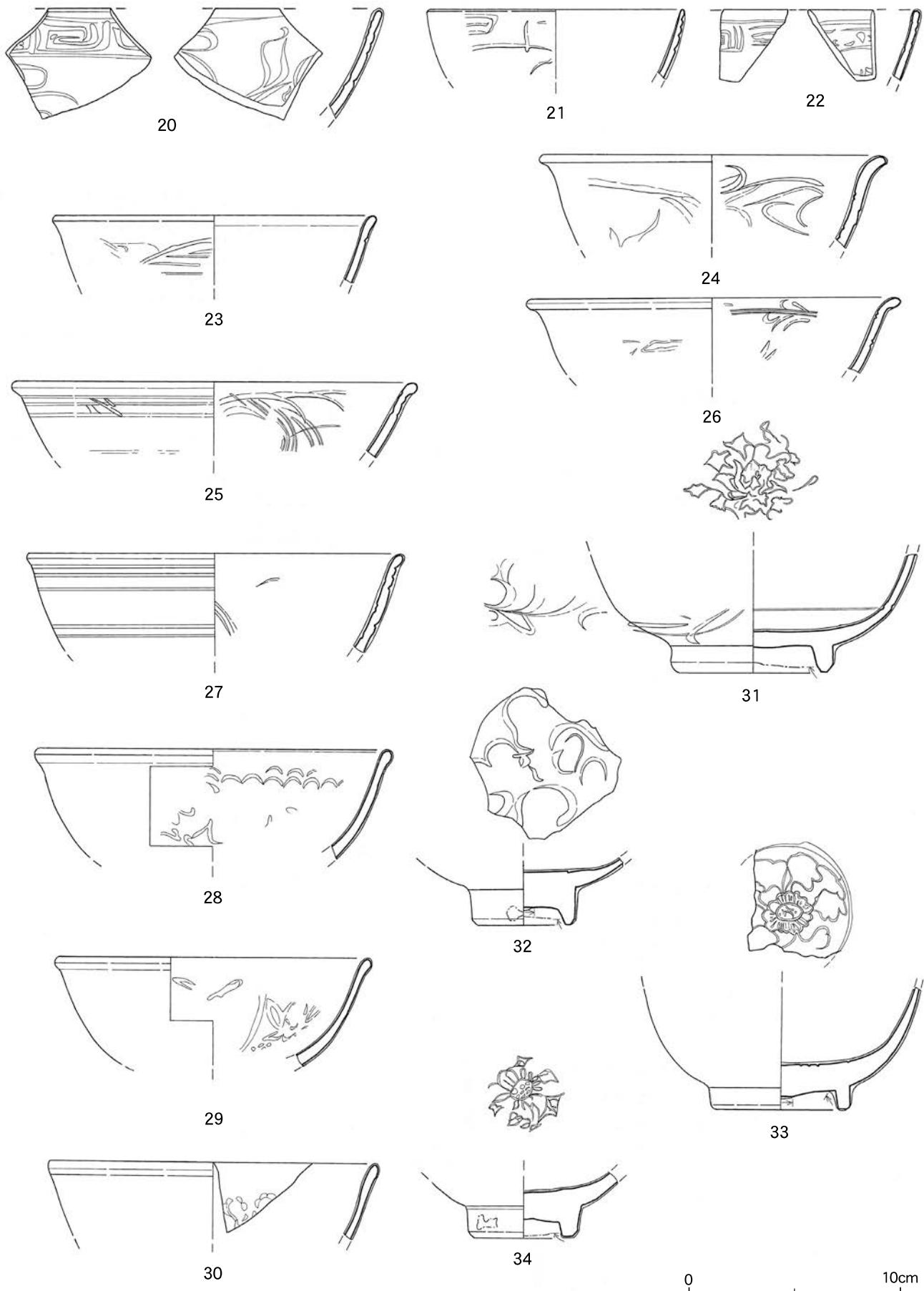
第14表 青磁觀察一覧( 9 )

単位:cm

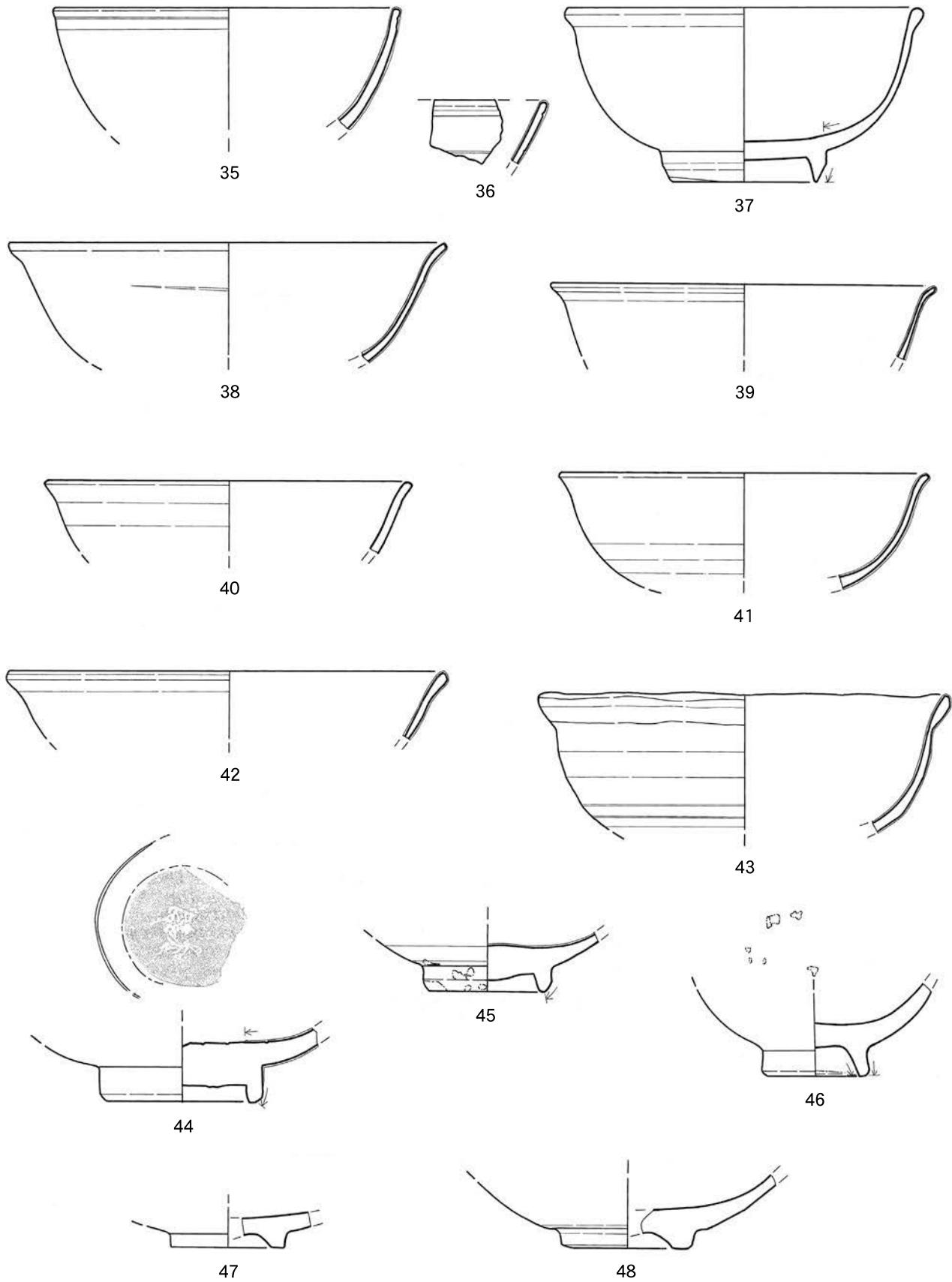
挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	釉色	器形・文様などの特徴	出土地
第17図 図版17 106	壺・瓶か	胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	— — —	明緑色の透明釉。	外面に丸彫りの規矩内に櫛描きの文様が見られる。 外面のみ粗い貫入が見られる。	造成層
第17図 図版17 107	壺	胴	灰白色の微粒子で褐・黒色粒子が見られる。	— — —	明緑色の透明釉。	甲部に横位と縦位に区画された中に櫛描きと片切彫りで構成された文様が見られる。	東南部
第17図 図版17 108	壺・瓶か	胴	灰白色の微粒子で黒色粒子が多くみられる。白色粒子も僅かに見られる。	— — —	外面は明緑色の透明釉。内面は青白色の透明釉。	縦位と横位の櫛描の沈線で構成された文様が外体面に見られる。釉は内外共に薄く施される。	東南部
第17図 図版17 109	蓋	端	灰白色の微粒子で気泡、黒色粒子が見られる。	— — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	鍔端部は若干、反りが見られる。蓋甲頂周辺の器壁は薄い。蓋甲下周には片切彫りの花唐草文が見られる。釉は裏面が鍔下面から身受け部分が露胎となる。	造成層
第17図 図版17 110	蓋	端	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	鍔端部は上方へ反り、身受けは内傾する。蓋甲部には蓮弁文の一部と思われる丸彫りで描かれた文様が見られる。また、界線もその下部に1条見ることができる。鍔下面と身受けの一部は露胎で他は全釉される。	東南部
第17図 図版17 111	蓋	甲頂	灰白色の微粒子で気泡が見られる。白色粒子も僅かに見られる。	— — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	蓋の甲頂部で撮みの一部が見られる。撮みは露胎で獅子の腰と後ろ足の一部と思われる。この撮みを中心にして界線が見られる。甲部の釉は厚く施され、裏面は露胎となる。	造成層
第17図 図版17 112	蓋	甲頂～端	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。黒色砂粒も僅かに見られる。	— — —	白みがかった明緑色の透明釉。	蓋甲頂周辺には鎬蓮弁文が見られる。釉薬は甲部に厚く施され、裏面には鍔下面以外には透明釉が薄く施される。	美福門
第17図 図版17 113	蓋	甲頂	灰白色の微粒子で気泡が見られる。黒色粒子も僅かに見られる。	— — —	明緑色の透明釉。	頂部へ向かって徐々に器壁が厚くなる。蓋甲頂周辺には牡丹唐草文か。裏面の器表には凹凸が見られる。	東南部
第17図 図版17 114	蓋	端	灰白色の微粒子で大きい気泡が見られる。	— — —	オリーブ灰色のやや透明度を有する釉。	端部は「へ」の字状に屈曲する。甲下周には斜位の沈線を交差させる文様が見られる。裏面は露胎となる。	造成層
第17図 図版17 115	蓋	端	灰白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	13.8 — —	明緑色のやや透明度を有する釉。	端部は「ハ」の字状に開く。釉は甲部が厚く施され、裏面は鉄釉を施す。	美福門



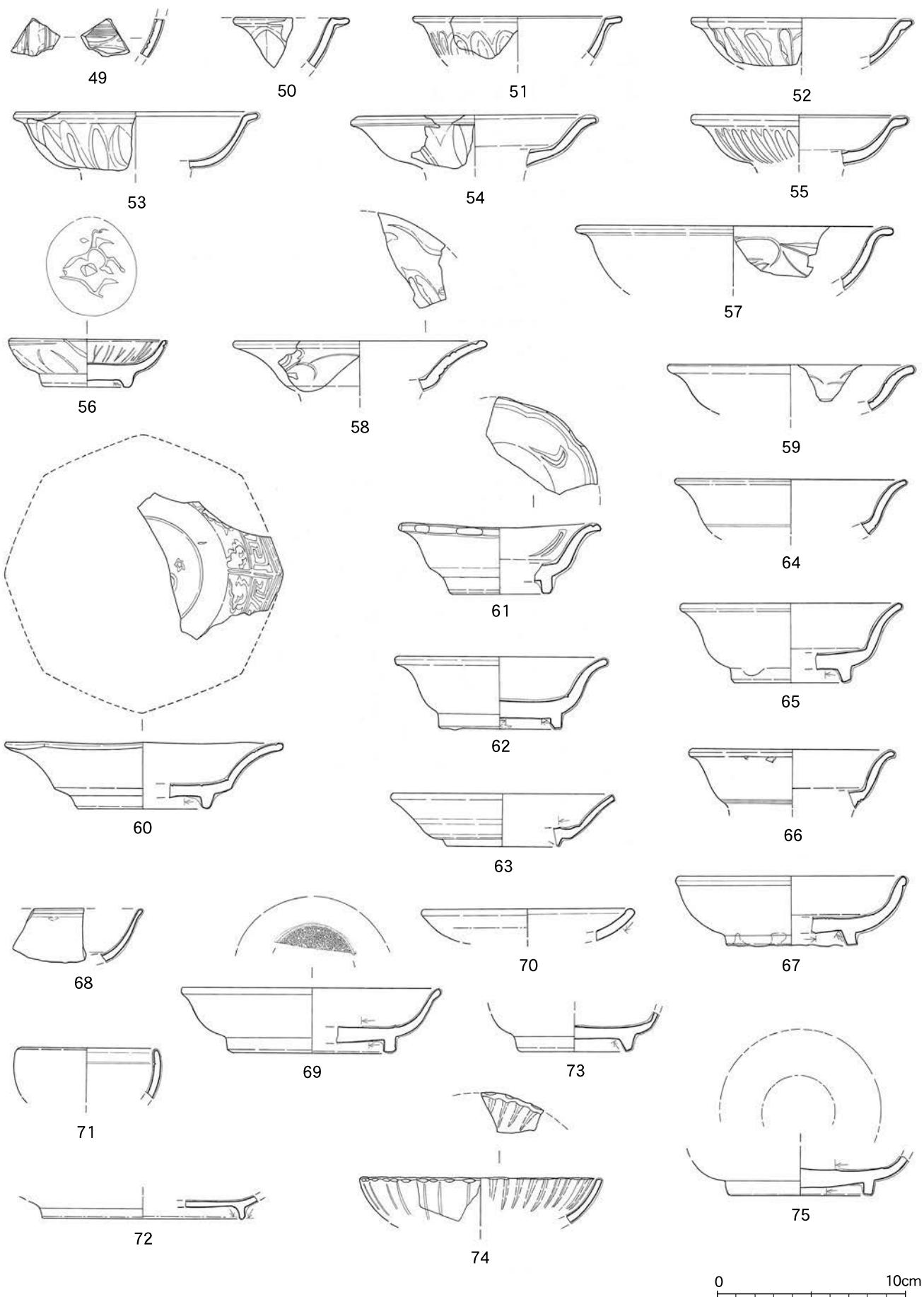
第11図 青磁（1）碗



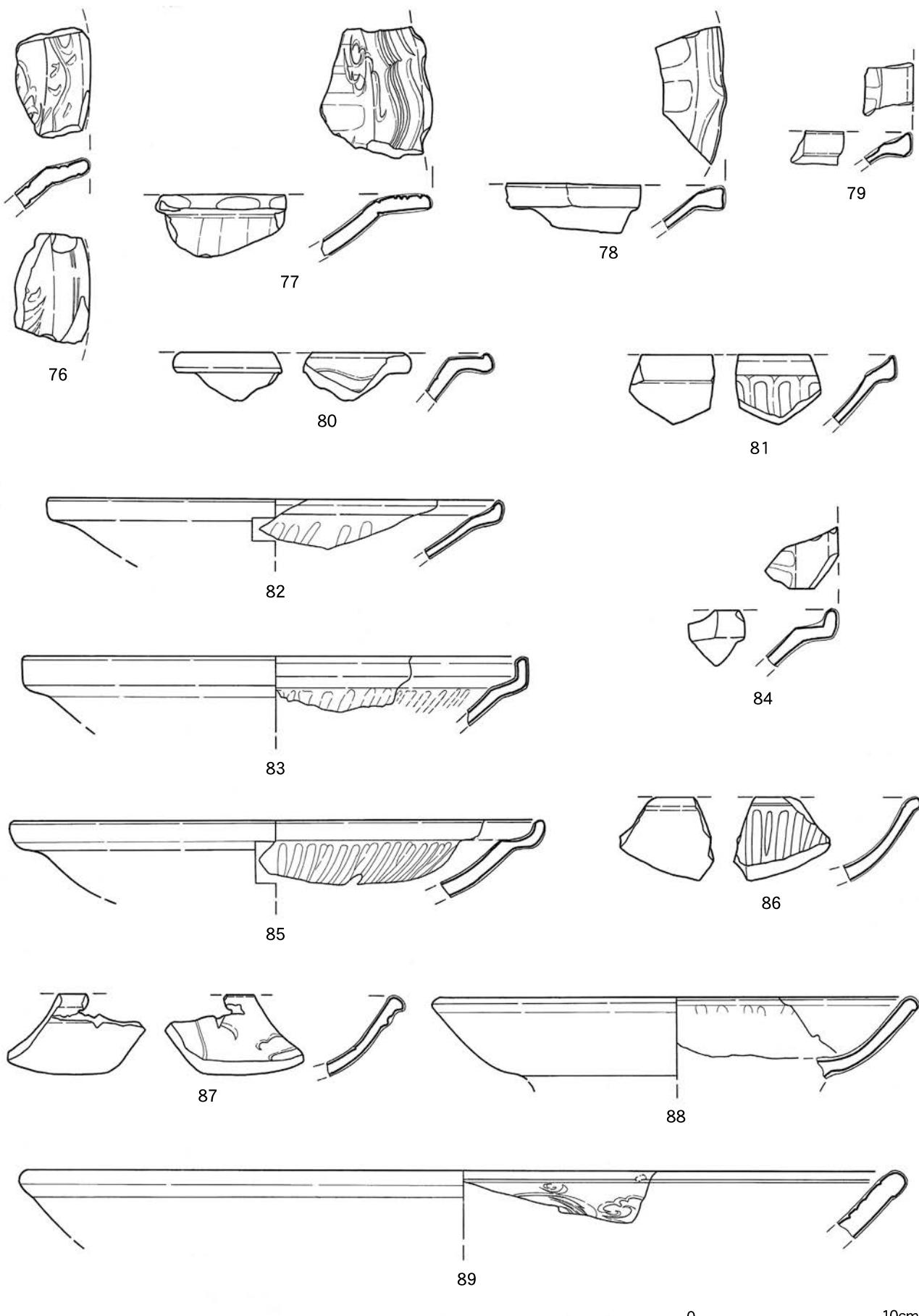
第12図 青磁（2）碗



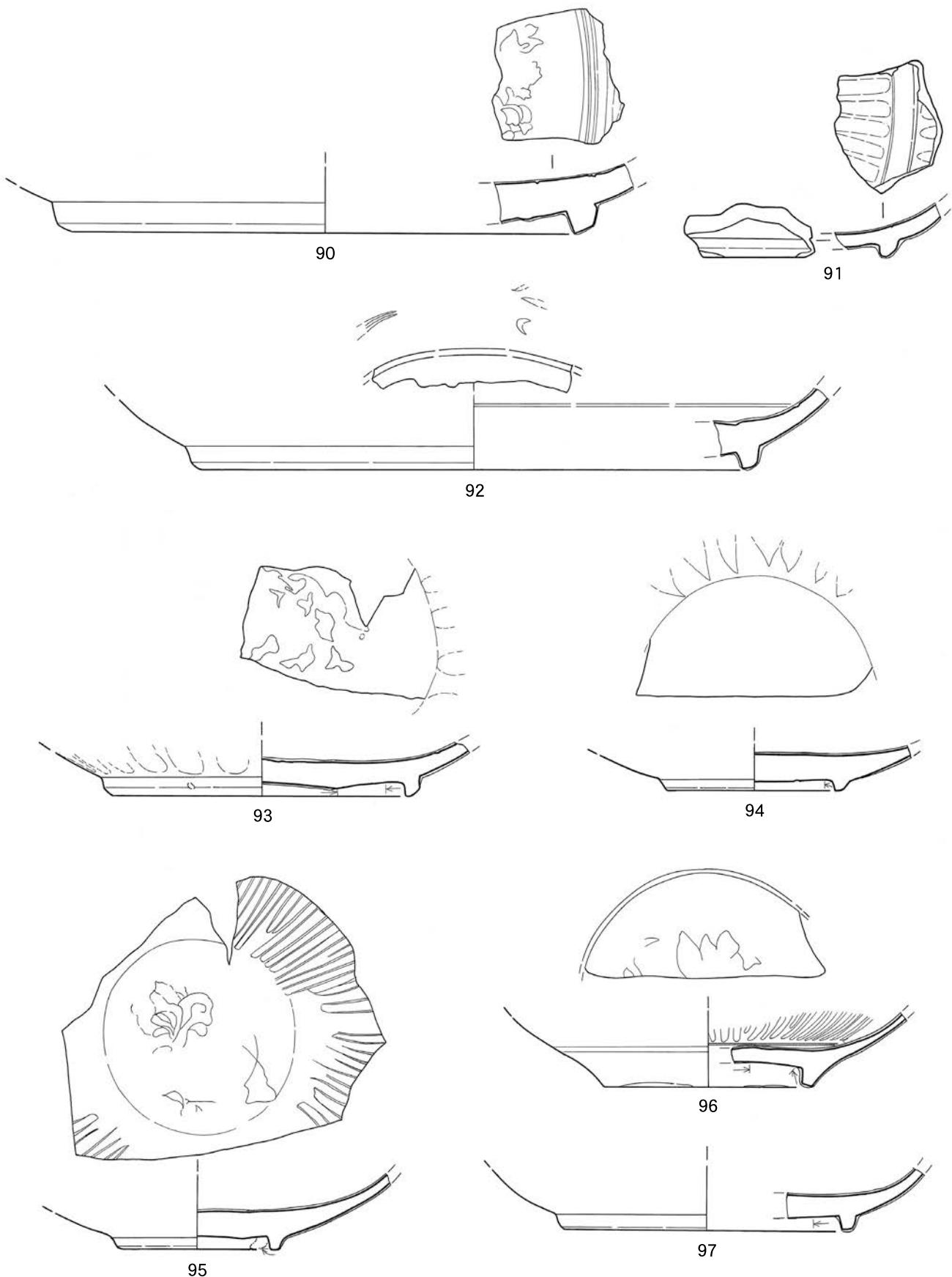
第13図 青磁（3）碗



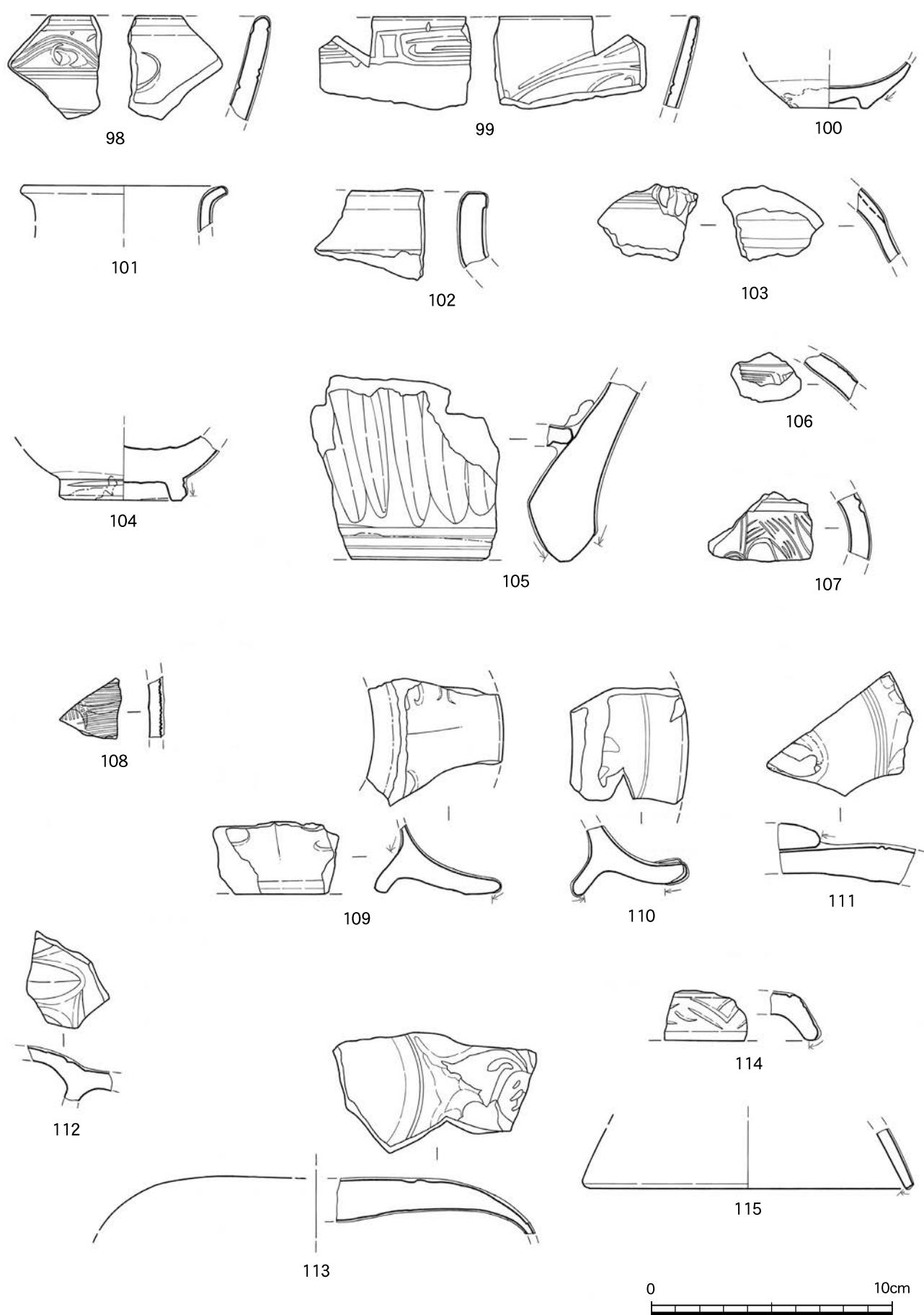
第14図 青磁（4）皿



第15図 青磁（5）盤



第16図 青磁（6）盤



第17図 青磁(7) 鉢 98,99 杯 100 瓶 101,102,104 壺 103,105,107 壺or瓶 106,108  
蓋 109~115

## 第2節 白磁

ここでは29点を報告する。器種としては碗、皿、杯、瓶、壺、鉢、水滴、把手、急須がある。碗が最も多く、次に皿、杯、瓶、鉢、水滴、把手と続く。以下にその概要を述べ、詳細は観察表でまとめる。

### 碗(第18,19図1～12)

口縁部資料においては口縁部が外反するものと直口するものに大別することができる。外反の度合いは4のようにやや急なものから、5のように緩いものまである。1, 3のように口縁部直下に横ナデをして外反させるものも見られる。直口するものに関しては6, 7, 9のように胴部がやや膨らみを有するものから8のように直線状となるものも見られる。底部資料は内底面に文様が見られるものを1点図化する。高台は低く、畠付は広く水平となる。内割りは浅い。小碗は1点のみ図化する。直口口縁で内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる(12)。

### 杯(第19図13,14)

13,14共に器壁は薄く、口縁部が外反する。13は畠付が露胎となり、14は口唇部が露胎となる。

### 皿(第19図15～22)

口縁部資料においては口縁部が外反するものと直口するものに大別することができる。外反するものでは15のように腰部が折れる腰折皿が見られるが、16,17,19は腰部まで残っていないため外反皿の詳細は解らない。また18のように口縁部が波状となるものも見られる。底部資料は何れも高台が低く、内割りが浅い。そして、外面胴下部は露胎となり内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。

### 瓶・鉢・把手・水滴(第19図26～29)

瓶は26の底部資料1点のみ図化する。高台は低く、外面下部は斜めに面取られる。畠付は水平で胴部は膨らみを有する。鉢は27の底部資料1点のみ図化する。把手は28の1点のみ図化する。身の部分に留めるための孔が2つ見られる。水滴は29の方形のそれを1点のみ図化する。上面に孔が一つ開けられる。

第15表 白磁観察一覧( 1 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	施釉	器形・文様などの特徴	出土地
第18図 図版18 1	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で 気泡が多く見られる。	16.0 — —	内外面ともに薄く 施釉。口唇部の釉 は禿げる。	口縁部直下の横ナデにより外反する。器表 にはあばたが見られる。外面には回転箇削り 痕が残る。	造成層
第18図 図版18 2	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で 黒色粒子が多く見 られる。	12.3 — —	内外面ともに薄く 施釉。	口縁部は一端、内側にすぼまり口縁部直下 で外反する。口唇部は舌状となる。	表土
第18図 図版18 3	外反碗	口～胴	灰白色の微粒子で 気泡が見られる。	17.2 — —	内外面ともに薄く 施釉。外表面下部 は露胎。	口縁部直下の横ナデにより外反する。口唇 部は舌状となる。	東南部
第18図 図版18 4	外反碗	口～胴	白色の微粒子で白 色の粗粒子が多く 見られる。	14.2 — —	内外面ともに薄く 施釉。	口縁部は緩やかに外反し、口唇部直下に段 を有する。内面器表には白色粗粒子が浮き 上がりつおり触感はざらつく。	造成層

第16表 白磁観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	施釉	器形・文様などの特徴	出土地
第18図 図版18 5	外反碗	口～胴	白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	— — —	内外面ともに薄く施釉。	口縁部は緩やかに外反する。口唇部は舌状となる。内外面ともに粗い貫入が見られる。	東西部
第18図 図版18 6	直口碗	口～胴	灰白色の微粒子で白・黒色粒子、気泡が見られる。	12.2 — —	内外面ともに薄く施釉。	胴部は膨らみながら口縁部へ移行する。直口口縁で口唇部は舌状となる。器壁は薄い。内外面ともに細かい貫入が見られる。	造成層
第18図 図版18 7	直口碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	10.0 — —	内外面ともに薄く施釉、口唇部の釉は禿げる。	直口口縁で口唇部は舌状となる。内外面ともに細かい貫入が見られる。	東南部 西側
第18図 図版18 8	直口碗	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	14.2 — —	内外面ともにやや厚く施釉。口唇部の釉は薄くなる。	直口口縁で口唇部は玉縁状となる。胴部は直縁状となり、膨らみは見られない。	H-6
第18図 図版18 9	直口碗	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子、砂粒、気泡が見られる。	— — —	内外面ともに薄く施釉。	直口口縁で器壁は厚い。器表にはあばたが見られる。胴部はやや膨らみを有する。	東南部
第18図 図版18 10	碗	底	淡黄色の微粒子で気泡が多く見られる。黒色砂粒は僅かに見られる。	— — 6.0	内外面ともに薄く施釉。	高台は低く、内割りは浅い。畠付は水平となる。内底面には線彫りで簡略化された花文が見られる。	東南部 東側
第18図 図版18 11	碗	胴	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — —	内面は薄く施釉。外面は胴下部までは施釉されるがそれより下部は露胎。	内底面に陰圏線と印刻の草文が見られる。	東南部
第19図 図版18 12	小碗	口～底	灰白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。	10.0 4.1 4.0	内面は内底面のみ釉を輪状に搔き取る。外面は全釉される。	口縁部は直口し、器壁は薄い。高台のつくりは雑で、畠付の幅は一定していない。口縁部には煤が付着する。内底面に砂粒が多く付着する。	造成層
第19図 図版18 13	杯	口～底	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	8.2 4.0 3.0	内外面ともに薄く施釉。	口縁部は緩やかに外反する。高台は「ハ」の字状に開く。畠付のみ露胎となる。内面口唇部を横線で縁取る。	美福門
第19図 図版18 14	杯	口～胴	灰白色の微粒子。	8.9 — —	内外面ともに薄く施釉。口唇部は露胎となる。	胴部は直線状となり口縁部直下で外反する。内体面には回転籠削り痕が見られる。	東南部 西端
第19図 図版18 15	腰折皿	口～胴	灰白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	11.0 — —	内外面ともに薄く施釉。	腰部で緩やかに折れ、口縁部は外反する。内体面下部には界線が1条見られる。器表にはあばたが見られる。	造成層
第19図 図版18 16	外反皿	口～胴	白色の微粒子で黒色粒子が多く見られる。	11.0 — —	内外面ともに薄く施釉。	口縁部は波状となる。口縁部外面直下に僅かに段が見られる。外面に貫入が僅かに見られる。	東南部 西端
第19図 図版18 17	外反皿	口～胴	白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。	10.4 — —	内外面ともに薄く施釉。	胴部あたりで緩やかに折れて外反する。口唇部は舌状となる。器壁はやや厚手。	東南部
第19図 図版18 18	外反皿	口～胴	白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。	— — —	内外面ともに薄く施釉。	口唇部は水平となり、口縁部が波状となる。内面には2本単位の斜め位の沈線が2カ所見られる。内外面共に細かい貫入が見られる。	東南部

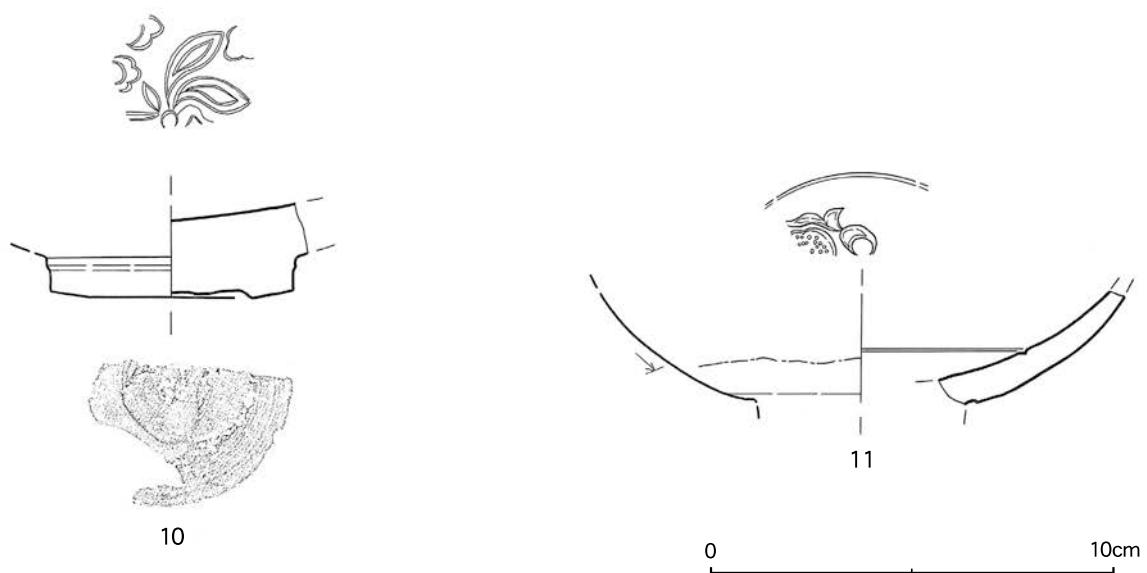
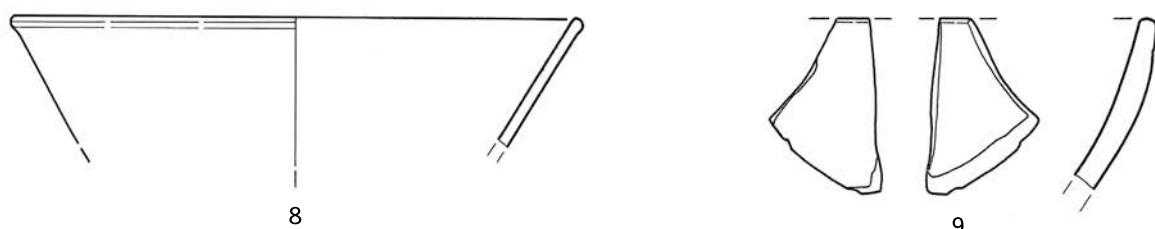
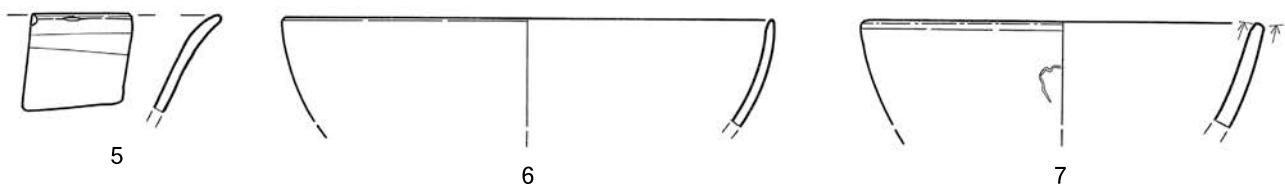
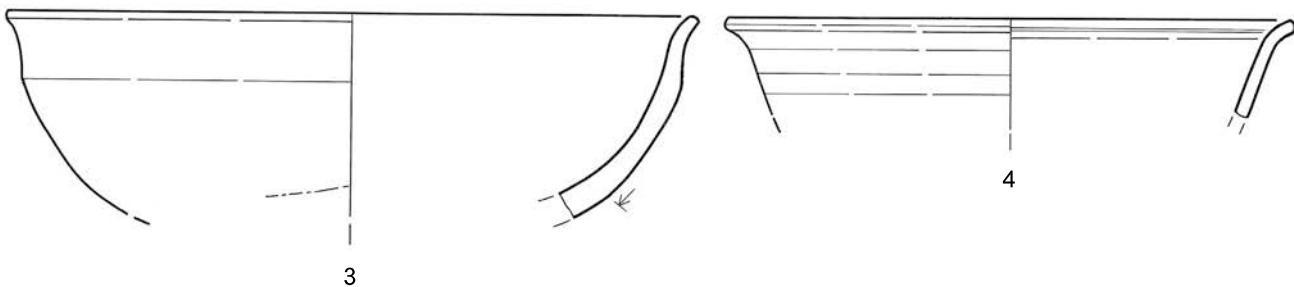
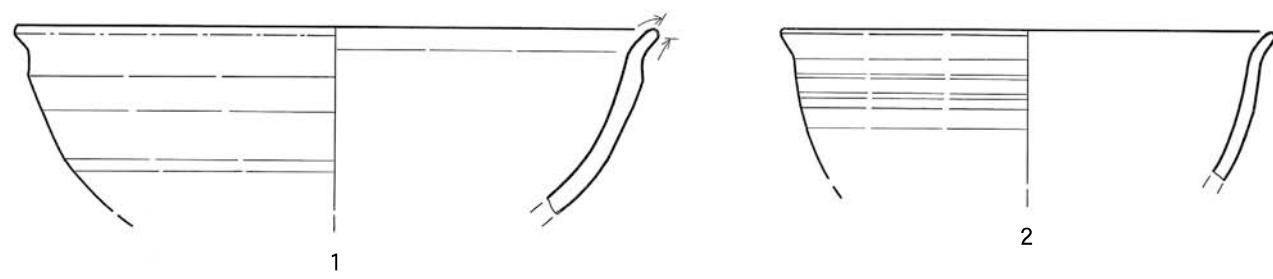
第17表 白磁観察一覧( 3 )

単位:cm

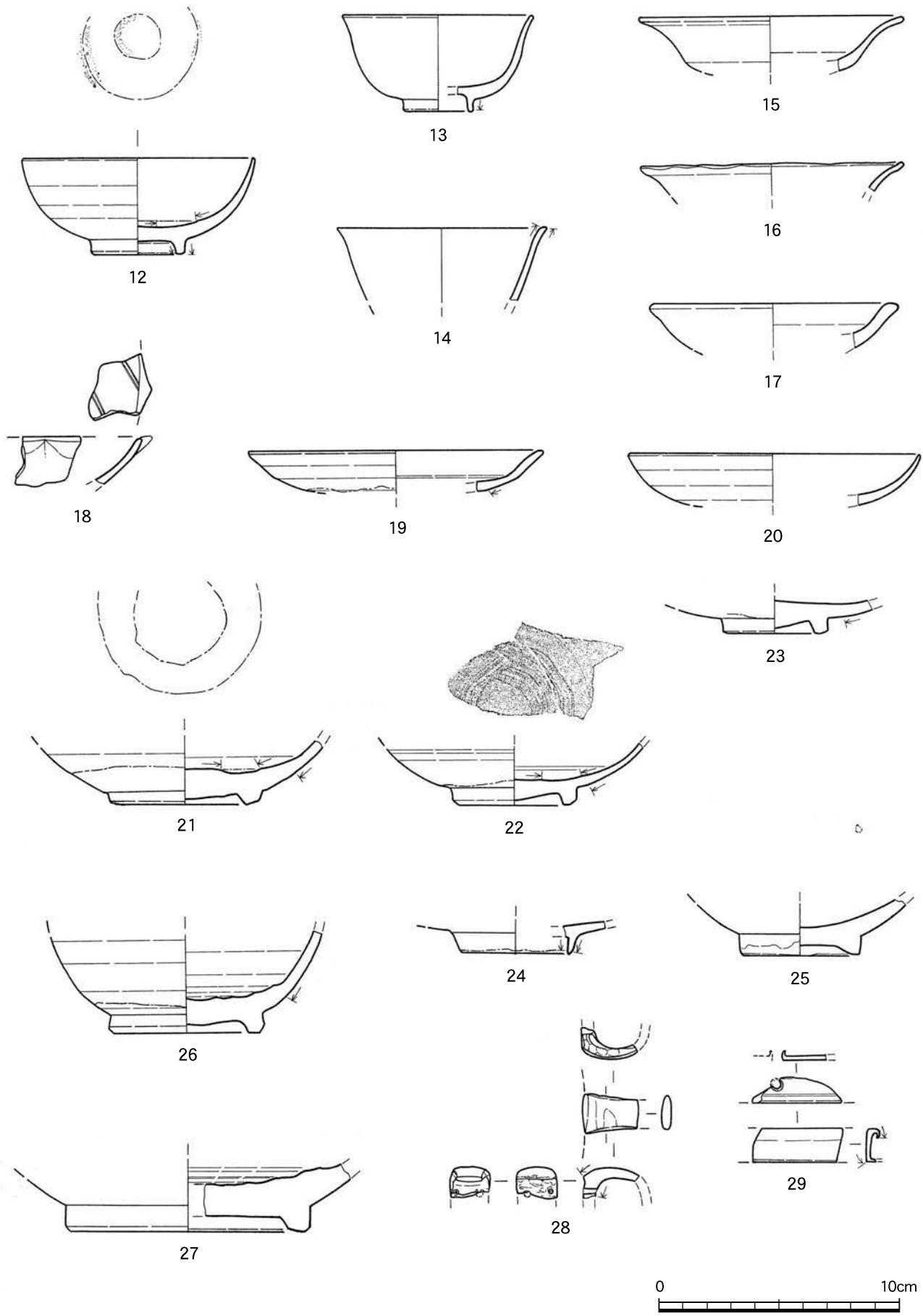
挿図番号 図版番号	器種 分類	部位	素地	口径 器高 高台径	施釉	器形・文様などの特徴	出土地
第19図 図版18 19	外反皿	口～胴	白色の微粒子で白・黒色粒子、気泡が見られる。	12.6 — —	内外面共に施釉、外面胴下部から露胎となる。	腰部は折れ、口縁部は緩やかに外反する。内底面と胴部との境には陽圏線が1条見られる。器表にはあばたが僅かに見られる。	造成層
第19図 図版18 20	直口皿	口～胴	白色の微粒子で白・黒色粒子、気泡が見られる。	12.2 — —	内外面ともに薄く施釉。	胴部は緩やかに膨らみを有しながら、口縁部へ移行する。口唇部は舌状となる。	東南部
第19図 図版18 21	皿	底	白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — 6.4	内外面ともに薄く施釉。外面胴下部より露胎。内底面は輪状に搔き取る。	高台は低く、畠付は幅があり、水平となる。高台外面下部は斜めに面取る。外面胴部は回転籠削り痕が見られる。内体面には陰圏線が1条見られる。	東西部 西側
第19図 図版18 22	皿	底	白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	— — 5.3	内外面ともに薄く施釉。外面胴下部より露胎となる。内底面は雄ながら輪状に搔き取られる。	高台は低く、外面下部は斜めに面取る。畠付は水平となるが幅は狭い。内外面共に細かい貫入が見られる。	南カベ下
第19図 図版18 23	皿	底	白色の微粒子で気泡が多く見られる。白色砂粒が僅かに見られる。	— — 4.4	内外面共に薄く施釉。外面胴部は露胎となる。	高台は低く、畠付は水平となる。内底面中央はやや盛り上がる。	東南部 西側
第19図 図版18 24	皿	底	白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — 4.6	内外面共に薄く施釉。高台下部から畠付にかけて露胎となる。	高台は低く、内傾する。器壁は薄く、胴部への立ち上がりは緩やかとなる。	南カベ下
第19図 図版18 25	皿	底	白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	— — 4.9	内外面共に薄く全釉される。高台周辺に溶着物が見られる。内底面には砂粒が溶着する。	高台は低く、外底面も僅かに抉られる。細かい貫入が内外面共に見られる。	造成層
第19図 図版18 26	瓶	底	白色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — 6.6	内外面共に薄く施釉。外面胴下部は露胎となる。	高台は低く、厚みを有する。畠付は水平で、底部から胴部へはふくらみを有しながら移行する。内外面共に回転籠削り痕が見られる。	造成層
第19図 図版18 27	鉢	底	灰白色の微粒子で黒色粒子、大きい気泡が見られる。	— — 10.4	胴下部から高台までは露胎となる。	高台は低く、畠付は水平となる。内底面には横ナデ痕が明瞭に見られる。	表土
第19図 図版18 28	把手		白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	—	薄く施釉される。	身との接続部に金属の鋸が付着することから、把手のみ磁器の金属杯であった可能性が指摘できる。	表採
第19図 図版18 29	水滴		白色の微粒子。	—	外面のみ薄く施釉される。	器壁が薄い、箱形の水滴。円形の孔が見られる。	美福門

第18表 白磁出土状況一覧

出土地	器種 分類	碗			小碗			皿			瓶			鉢			杯			把手			水滴			急須			合計
		口縁 部	胸部	底部	口縁 部	胸部	底部	口~ 底	胸部	底部	口~ 底	胸部	底部	口縁 部	胸部	底部	口縁 部	胸部	底部	口縁 部	不明	口~ 底	口縁 部	底部	底	口縁 部	底	1	25
1 美福門	碗(ヒロースカタイ)				1	3	5	1	1	2	1									1	1							3	
2 南力ベ下																												1	
3 F-8		1																										1	
4 F-10		1																										1	
5 H-5																												1	
6 H-6		1																										1	
7 H-8																												1	
8 I-7																												1	
9 I-8																												2	
10 東南部		5	6	1	4	1		1	4	5	1																29		
11 東南部西側		3	4	1	2	2						1	2	1													1	17	
12 東南部西端		1	1									1																4	
13 東南部東側		1				1	1																					3	
14 東西階		1				2						2	1															7	
15 東西部			1																									1	
16 東南北穴																												1	
17 造成層		2	1	4	2	3		1	1	4	12	6	3	3													46		
18 表土		1		1	1					2	1																10		
19 表採																												4	
合計		13	15	4	11	11	9	5	5	2	2	14	24	15	2	6	3	1	1	4	1	1	1	1	1	1	158		



第18図 白磁（1）碗



第19図 白磁（2）小碗 12 杯 13,14 皿 15~25 瓶 26 鉢 27 把手 28 水滴 29

### 第3節 染付

ここでは68点を報告する。器種としては碗、皿、鉢、杯、瓶、蓋がある。碗が最も多く、次に皿、蓋、杯、鉢、瓶と続く。以下にその概要を述べ、詳細は観察表でまとめる。

#### 碗(第20,21,22図1～36)

口縁部資料から直口となるものと外反するものに大別することができる。外反するものは唐草文や花文が多く見られる。直口するものは波中竜文や華唐草文、藻魚文、仙芝祝寿文、雲文、八卦文、波涛文、八弁花文といった文様が見られる。また外反碗の中にはコニニヤク印判が配されるものも見られる。底部資料は高台が高く、直に立ち上がるるものと高台が高く「ハ」の字状に開くもの、そして高台は低く断面形が三角形状となるものと3つに大別することができる。畳付は尖るものが多く見られる。

#### 皿(第23,24図37～51)

口縁部資料から直口となるものと外反するものに大別することができる。直口口縁となるものは高台が低く、断面形が三角形状となる。40,46のように外反口縁となるものは高台が低く、断面形が三角形状となるもの、41,50のように高台が低く畳付が水平となるもの、37のように高台が高くなるものに大別することができる。文様は雲文、竜文、双魚文、虬竜文、宝文、唐草文、蓮池文、樹下人物文、雲鳥文が見られる。底部資料は高台が低く、断面形が三角形状となるもの、高台が低く畳付が水平となるもの、高台が高くなるものの3つに大別することができる。

#### 鉢(第25図52～54)

口縁部資料2点、底部資料1点をここで報告する。口縁部資料は共に緩く外反し、外体面に文様を配する。52は内面胴下部は露胎となる。底部資料は内底面が蛇の目釉剥ぎされ、高台下部は露胎となる。

#### 盤(第25図55)

底部資料1点をここで報告する。高台は低く、畳付は水平となる。胴部への立ち上がりは緩く、器壁は厚い。吳須は深い藍色で、内底面全体に文様を配する。元様式の染付と考えられる。

#### 杯(第26図56～62)

器高の低い56～58と器高が高く胴長となる59,60の2つに大別することができる。59を除いて口縁部は全て外反する。外体面には文様が見られ、とりわけ59と60は内面にも文様を配する。底部資料は畳付が広く、胴部へは緩やかに立ち上がる61と畳付は尖り、胴部への立ち上がりが急な62がある。

#### 瓶(第26図63)

底部資料1点をここで報告する。高台は低く、胴部への立ち上がりは緩やか。文様は外体面に見られるが小片のため全体構成は不明。

#### 蓋(第26図64～68)

鍔の付く64～66と鍔の付かない67,68の2つに大別することができる。何れも甲部には蓮弁文や十字花文、七弁花

文、青海波文、七宝繋ぎ文が配される。64は撮みが付き、67,68は撮みが付かない。

第19表 染付 出土状況一覧

器種 出土地	碗				小碗				皿				鉢				瓶		壺	盤	杯			蓋もの		器種不明			合計
	口~ 底部	口縁 部	胴部	底部	口~ 底部	口縁 部	胴部	底部	口~ 底部	口縁 部	胴部	底部	口縁 部	胴部	底部	口~ 底部	口縁 部	底部	縁~ 頂部	縁 部	口縁 部	胴部	底部						
1 美福門	1	4	7	8			1	1		2		2	1	1					1	1	1					31			
2 洞穴内																				1						1			
3 南カベ下		4	2	2		1				1	1							1	1	1	1				16				
4 北カベ		1																								1			
5 C-10			1																	1						2			
6 F-7																		1								1			
G-5																										1			
7 造成層		1																								1			
8 G-6		1	1							1																3			
9 G-7		1		1																						2			
10 H-5																					1					1			
11 H-6		1	1	1																						4			
H-6																										5			
12 洞穴内		1	1							1								1								1			
13 I-6											1															1			
14 I-7				1																						1			
15 I-8		4	2															1	1							8			
16 I-9		1																1								2			
17 東南部		2	16	5					1	1				1	1	2		1	1					2	1	34			
東南部																										2			
18 北側																		1								15			
東南部																										6			
19 西側		3	7	1		1									1	1			1							4			
東南部																		2								5			
20 西端		1	1	2																						23			
東南部																										1			
21 東側		2	1	1																						4			
東西階				1	2									1			1								5				
22 東南北穴		1	3	7	1		1		1	1			2	1					1		1		2	1	23				
東南																										2			
24 か^排		1	1																							3			
造成層		2	68	66	26	2	8	3	3	4	5	7	15	3	5	1	3		1	1			3	3	3	232			
26 表土		11	9	7				2		1		2	2					2	3						1	40			
27 表採		2	6	1		1			1	2	1						1								15				
合計		7	116	126	56	3	11	4	8	9	13	9	24	9	14	2	6	2	6	1	1	4	2	3	2	71	94	458	

第20表 染付観察一覧( 1 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第20図 図版19 1	碗	口～胴	白色の微粒子。	15.2 — —	口縁部内外面には界線、胴部に宝相華唐草文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	造成層
第20図 図版19 2	碗	口～胴	白色の微粒子。	10.4 — —	口縁外面下部から胴部にかけて華唐草文、さらにその下部にも文様が見られるが全体構成は不明。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	南かべ下
第20図 図版19 3	碗	底	白色の微粒子。	— — 4.0	外体面にはアラベスク文様、内底面には2条の界線と線描きの文様が中央に見られる。	粗い貫入が見られる。器表にはあばたのような凹凸が見られる。疊付のみ露胎。	造成層
第20図 図版19 4	碗	口～底	白色の微粒子。	15.0 7.6 5.8	口縁部内外面には界線、そして口縁内面直下には帯状の唐草文が見られる。また胴部外面上には宝相華唐草文、底部近くにはラマ式蓮弁が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎となる。貫入は見られない。	東南部 美福門
第20図 図版19 5	碗	口～胴	白色の微粒子。	14.0 — —	外体面に蓮華唐草文、口縁内面下部には2条一組の界線で隠された中に華唐草文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	造成層
第20図 図版19 6	碗	底	白色の微粒子。	— — 4.6	内底面、外面胴下部、高台に界線、間線が見られる。	内底面には釉は薄く、高台と胴部の接続部はやや釉が厚くなる。細かい貫入が内外面共に見られる。	造成層
第20図 図版19 7	碗	口～胴	白色の微粒子。	11.4 — —	口縁部内外面と内底面近くに2条一組の界線、胴部外面には蔓状の植物の文様が描かれる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	造成層
第20図 図版19 8	碗	口～胴	白色の微粒子で、黒色粒子が多く見られる。	10.0 — —	外体面には唐草文を口縁部内外面直下には界線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。器壁は薄く口唇部は舌状となる。貫入は見られない。	造成層
第20図 図版19 9	碗	底	白色の微粒子で、気泡が多く見られる。	— — 5.6	内底面中央に花文が見られる。八弁花文か。	やや透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎となる。施釉は雑である。	東南東西側
第20図 図版19 10	碗	口～底	白色の微粒子で白色砂粒が見られる。	15.2 6.4 7.1	外体面には華唐草文と波中竜文を組み合わせ、その下部には簡略化された蓮弁文を密に配する。内面には内底面近くに2条一組の界線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	東南東西側
第20図 図版19 11	碗	胴～底	白色の微粒子。	— — 4.9	器壁、高台は薄い小振りな碗。外体面には菊唐草文か。胴下部には矢印状の蓮弁文が見られる。外底面には2条の界線内に花詰めの銘款が見られる。内底面には草花文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎となる。貫入は見られない。	造成層
第20図 図版19 12	碗	口～底	白色の微粒子で、黒色粒子が多く見られる。	10.0 4.7 3.8	口縁内外面下部には2条一組の圈線、外体面には簡略化された華唐草文が見られる。内底面には界線の中に草花文を配する。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎となる。細かい貫入が胴下部に、粗い貫入が胴上部に見られる。	造成層
第20図 図版19 13	碗	底	白色の微粒子。	— — 5.1	高台外面には2条の界線が見られる。外底面には圈線の中に「同」の字が描かれる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎となる。内外面共に細かい貫入が見られる。	造成層
第21図 図版20 14	碗	口～底	白色の微粒子。	9.0 4.9 4.2	外体面には藻魚文が見られる。内面には口縁下部と胴下部に2条一組の界線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。器壁は薄く口唇部は舌状となる。貫入は見られない。	造成層
第21図 図版20 15	碗	口～胴	白色の微粒子。	9.4 — —	外表面口縁直下に2条の圈線、外体面に華唐草文と如意頭繫文か。内面は無文。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。器壁は薄く口唇部は舌状となる。貫入は見られない。器表には僅かにあばたが見られる。	東南北穴

第21表 染付観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第21図 図版20 16	碗	口～底	白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	9.4 4.8 4.4	内外体面には仙芝祝寿文が見られる。内底面には花文が配される。外底面には「化」と「年」の文字が見られる。	輪花碗で透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。豊付は尖る。貫入は見られない。	造成層
第21図 図版20 17	碗	胴～底	白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	— — 4.2	内外体面には仙芝祝寿文が見られる。内底面には花文が配される。外底面には2条の界線とその中に「大明化年製」の文字が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。呉須はやや濁る。	造成層
第21図 図版20 18	碗	胴～底	白色の微粒子で白色の粗粒子が見られる。	— — 4.7	内外底面に2条一組の界線とその中央に文様が見られるが全体構成は不明。高台上部に圈線が3条見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	造成層
第21図 図版20 19	碗	口～底	白色の微粒子で黒色の粗粒子が見られる。	13.1 6.8 7.0	口縁部は舌状となる。直行で内外体面には竜文と雲文が、外底面には魚文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く全釉する。貫入は見られない。呉須は暗めで滲む。	造成層
第21図 図版20 20	碗	口～胴	白色の微粒子。	12.2 — —	口縁内外面下部には2条一組の圈線、外体面には麒麟文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	造成層
第21図 図版20 21	碗	底	白色の微粒子で白・黒色の砂粒が見られる	— — 6.0	外体面下部には圈線が1条見られる。内底面には界線の中に团竜が配される。	やや不透明の釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。器表にはあばたが見られる。	表土
第21図 図版20 22	碗	胴～底	白色の微粒子で白色の砂粒が見られる。	— — 5.0	内底面には界線の中に牡丹唐草文が、外底面には2条の界線内に草魚文が見られる。高台外面には2条の圈線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	造成層
第21図 図版20 23	碗	胴～底	白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	— — 3.6	小振りな碗で外体面には樹木、草、葉が描かれる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。内面に粗い貫入が見られる。	美福門
第21図 図版20 24	碗	口～胴	白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	13.3 — —	口縁部内外面直下には圈線が見られる。外体面には雲文が見られるが文様の全体構成は不明。	透明度を有する釉を内面には薄く、外側はやや厚く施される。貫入は見られない。	東南部 西端
第22図 図版21 25	碗	口～胴	白色の微粒子で白色の砂粒・粗粒子が見られる。	14.8 — —	口縁部内面直下には圈線が1条そして内底面には界線が2条、外体面には草文が見られる。	透明度を有する釉を内外面にやや厚く施される。貫入は見られない。	東南北穴
第22図 図版21 26	碗	口～胴	白色のやや粗い粒子。	12.8 — —	外体面には梅花散らし文が、その下部には簡略化された蓮弁文が見られる。内面は界線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共にやや厚く施す。貫入は内外面共に見られる。	造成層
第22図 図版21 27	碗	口～胴	白色の微粒子。	8.8 — —	胴部の立ち上がりが急な小振りな碗か。口縁部内外面直下に2条一組の界線が見られる。外体面には華唐草文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	造成層
第22図 図版21 28	碗	口～胴	白色の微粒子。	8.2 — —	小片のため文様の全体構成は不明。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。内面のみやや粗い貫入が見られる。	造成層
第22図 図版21 29	碗	口～底	白色の微粒子で気泡が見られる。	12.2 5.6 5.2	外体面には華唐草を象った丸文と高台並びに口縁直下に圈線、外底面には文字が見られる。内面には口縁部直下に圈線、内底面には界線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	東南北穴
第22図 図版21 30	碗	胴～底	白色の微粒子で白・黒色粒子、気泡が見られる。	— — 5.5	高台は高くかつ厚く造られる。外体面には草文がその下部には簡略化された蓮弁文が見られる。内底面には界線と斑点状の文様が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。器表にはあばたが見られる。	美福門
第22図 図版21 31	碗	胴～底	白色の微粒子で褐色粒子、気泡が見られる。	— — 7.4	胴下部に簡略化された蓮弁文が高台には圈線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。豊付のみ露胎となる。貫入は見られない。豊付には砂粒が溶着する。	造成層

第22表 染付観察一覧(3)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第22図 図版21 32	碗	口～底	白色の微粒子。	15.8 6.9 6.2	外体面には鳳凰をデフォルメした丸文と花文をT字状に象った草花文が交互に見られる。内底面には2条一組の界線内に十字花文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。疊付のみ露胎となる。貫入は見られない。	造成層
第22図 図版21 33	碗	口～底	白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	14.0 6.9 5.4	口縁部外面直下には圈線、内面直下には四方轍文、外体面には鳥、雲、八卦、その下部には波涛文が見られる。内底面には界線、波涛文と中央に八弁花文が見られる。全て型紙刷りである。外底面には「大清嘉慶年製」の銘款が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。疊付のみ露胎となる。貫入は見られない。	造成層
第22図 図版21 34	碗	口～胴	白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	10.2 — —	外体面には圈線と梵字文、内面には圈線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。細かい貫入が内外面共に見られる。	造成層
第22図 図版21 35	碗	口～底	やや粗い白色の微粒子で、大きい気泡が見られる。	13.7 5.8 6.9	外体面にコンニャク印判の文様が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。内底面は蛇の目釉剥ぎが見られ、高台下部から疊付にかけて露胎となる。貫入は見られない。	造成層
第22図 図版21 36	碗	口～胴	白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	14.0 — —	外体面には筆描きの山水文か。	やや不透明の釉を内外面に薄く施す。外面は胴下部、内面は内底面が露胎となる。貫入は見られない。	造成層
第23図 図版22 37	皿	口～底	白色の微粒子。	16.2 4.6 7.2	口縁部外面直下に2条一組の圈線、外体面に雲文、高台には2条の圈線。口縁部外面直下に白抜きの雷文、内底面に雲文と魚文若しくは竜文か。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	東南部
第23図 図版22 38	皿	底	白色の微粒子。	— — 11.4	外底面には2条の界線内に双魚文、内底面には白抜きの2匹の虬龍が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	造成層
第23図 図版22 39	皿	底	白色の微粒子。	— — 5.8	高台は尖る。外体面には草文、外底面には界線が2条見られる。内底面には唐草文と宝文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	造成層
第23図 図版22 40	皿	口～底	白色の微粒子。	16.2 2.9 9.0	高台は尖る。外体面には草文、外底面には界線が2条見られる。内底面には唐草文と宝文が見られる。	やや不透明の釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	造成層
第23図 図版22 41	皿	口～底	白色の微粒子。	16.4 3.2 9.8	高台は尖る。外体面には草文、外底面には界線が2条見られる。内底面には唐草文と宝文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	造成層
第23図 図版22 42	皿	胴～底	白色の微粒子で黒色粒子が僅かに見られる。	— — 5.4	内底面には松葉か。小片のため全体構成は不明。内底面には2条の界線。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。内外面に細かい貫入が見られる。	造成層
第23図 図版22 43	皿	底	白色の微粒子で気泡が見られる。	— — 11.2	高台外面に2条の界線、内底面には園亭図が見られる。	透明度を有する釉を内外共に薄く施す。高台に溶着物が見られる。	造成層
第23図 図版22 44	皿	底	浅黄橙色の微粒子で気泡が多く見られる。	— — 14.0	内底面に蓮池文か。呉須は薄く不明瞭となる。	不透明の釉薬を内外面共に薄く施す。高台内側には大粒の砂粒が付着する。外底面中央のみ露胎となる。	造成層
第24図 図版23 45	皿	口～底	白色の微粒子。	10.8 2.5 7.1	内体面に文様が見られるが全体構成は不明。	やや不透明の釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	H-6 洞穴内
第24図 図版23 46	皿	口～底	白色の微粒子。	20.6 3.5 11.2	外体面には草文と内底面には線描きの文様が見られる。雲鳥文と思われる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。外面に細かい貫入、内面に粗い貫入が見られる。	造成層

第23表 染付観察一覧(4)

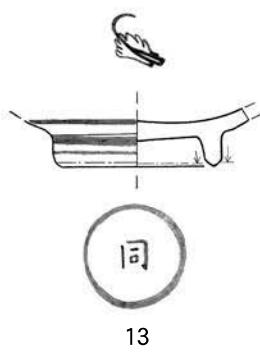
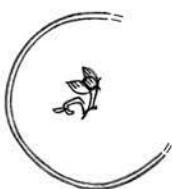
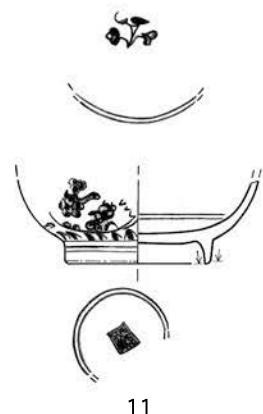
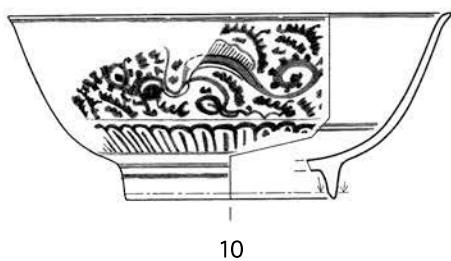
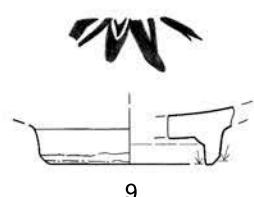
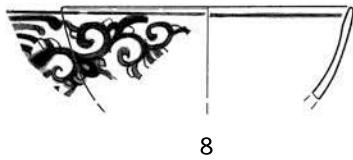
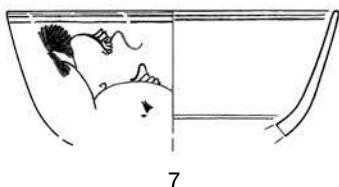
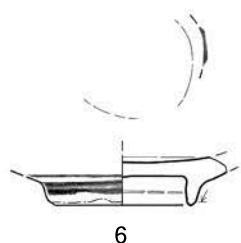
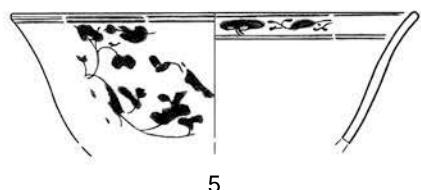
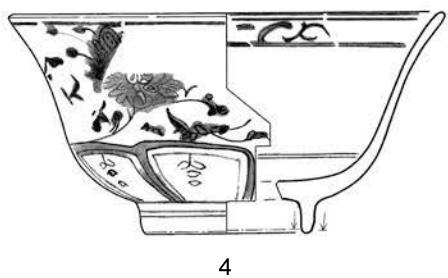
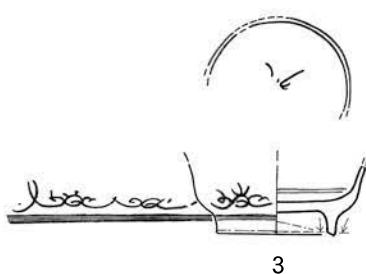
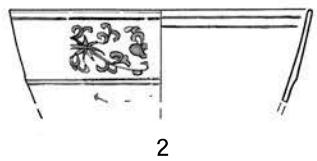
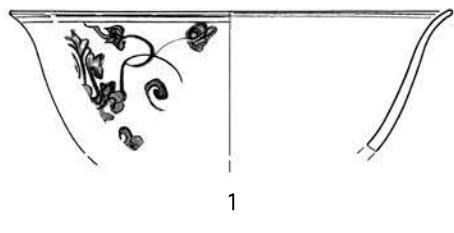
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第24図 図版23 47	皿	胴～底	白色の微粒子。	— — 6.8	外体面には2条の界線と内底面には鋸歯状の文様、雲文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。疊付のみ露胎となる。貫入は見られない。	美福門
第24図 図版23 48	皿	口～胴	白色の微粒子。	9.6 — —	小振りな内彎皿。内外面には雲文か。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	東西階
第24図 図版23 49	皿	口～底	白色のやや粗い粒子で気泡が僅かに見られる。	9.6 2.0 6.4	口縁内面下部に2条一組の圈線と内底面に字款が見られる。	透明度を有する釉を内外面共にやや厚く施す。高台下部のみ露胎。貫入は見られない。	造成層
第24図 図版23 50	皿	口～底	白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	16.4 3.2～ 3.3 9.4	外底面には2条の界線内に「和美」の2文字。内底面には樹下人物文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	東南北穴
第24図 図版23 51	皿	口～底	白色の微粒子。	16.2 3.7～ 3.9 10.2	外体面には圈線、外底面には界線と銘款、内体面と外底面には竜文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台下部のみ露胎となる。貫入は内底面のみ露胎となる。	造成層
第25図 図版24 52	鉢	口～胴	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	28.0 — —	外体面に文様が見られるが全体構成は不明。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。内底面の一部は露胎となる。粗い貫入が内外面共に見られる。	造成層
第25図 図版24 53	鉢	口～胴	白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	29.0 — —	外体面に文様が見られるが全体構成は不明。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。粗い貫入が内外面共に見られる。	造成層
第25図 図版24 54	鉢	胴～底	白色の微粒子で気泡が見られる。	— — 13.4	外体面に文様が見られるが全体構成は不明。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。内底面は蛇の目釉剥ががなされる。粗い貫入が内外面共に見られる。	造成層
第25図 図版24 55	盤	胴～底	白色の微粒子。	— — 25.7	外面胴下部にはラマ式蓮弁文、内体面には草花文内底面には瓜文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。高台外面下部から外底面にかけて露胎。貫入は見られない。	南かべ下
第26図 図版25 56	杯	口～底	白色の微粒子で、白色砂粒が僅かに見られる。	4.2 2.45 2.1	外体面に梵字を横位に2列並べる。内底面には界線と中央にも文様が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。疊付から内底面にかけて露胎となる。貫入は見られない。	東南北穴
第26図 図版25 57	杯	口～胴	やや粗い白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	6.6 — —	外体面に雲、獸、斜線が描かれる。内面は口縁直下に圈線のみ見られる。	透明度を有する釉を内外面共にやや厚く施す。貫入は見られない。	H-6 洞穴内
第26図 図版25 58	杯	口～胴	白色の微粒子。	6.6 — —	外体面に文様が見られるが小片のため全体構成は不明。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。口唇部には褐釉が施される。貫入は見られない。	南かべ下
第26図 図版25 59	杯	口～胴	白色の微粒子で大きい気泡が見られる。	8.0 — —	口縁部外面直下に雷文帯、外体面は円内に「寿」「福」の字を描く祥瑞文が見られる。口縁部内面直下には四方擗文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	美福門
第26図 図版25 60	杯	口～胴	白色の微粒子。	7.8 — —	口縁部外面直下に2条一組の界線、外体面には花文が見られる。内面には擗文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。口唇部に錆釉が見られる。貫入は見られない。	G-5造成層
第26図 図版25 61	杯	胴～底	白色の微粒子。	— — 4.4	外体面に文様が見られる。胴下部には圈線。	やや不透明の釉を内外面に薄く施す。疊付は露胎となる。貫入は見られない。	南かべ下
第26図 図版25 62	杯	胴～底	白色の微粒子。	— — 3.2	胴下部に2条一組の圈線が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に薄く施す。貫入は見られない。	造成層

第24表 染付観察一覧( 5 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第26図 図版25 63	瓶	底	白色の微粒子 で気泡が多く見 られる。	— — 7.2	外面胴下部から高台にかけて縦位の文様が 見られる。	透明度を有する釉を内外面共に 薄く施す。豊付のみ露胎。貫入 は見られない。	造成層
第26図 図版25 64	蓋	甲頂～ 端	白色の微粒子。	外径7.6 内径5.6 器高 2.25	円柱状の撮みで外面には界線とその間に唐 草文を配する。	透明度を有する釉を内外面共に 薄く施す。裏面は露胎。貫入は 見られない。	美福門
第26図 図版25 65	蓋	甲頂～ 端	白色の微粒子 で黒色粒子、気 泡が見られる。	外径8.0 内径5.6	外面に界線と下向きの蓮弁文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に 薄く施す。裏面とかかりの下部は 露胎。貫入は見られない。	東南部 北側
第26図 図版25 66	蓋	端	白色の微粒子 で黒色粒子が 見られる。	外径 11.2 内径 10.2	外面に界線と草文か。	透明度を有する釉を内外面共に 薄く施す。かかりの下部以外は全 釉される。	C-10
第26図 図版25 67	蓋	甲頂～ 端	白色の微粒子 で大きい気泡が 見られる。	外径 9.2 器高 3.3	外面に七宝繋ぎ文と青海波文を交互に配す る。蓋頂には七弁花文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に 薄く施す。端部以外は全釉され る。	洞穴内
第26図 図版25 68	蓋	甲頂～ 端	白色の微粒子 で大きい気泡が 見られる。	外径8.9 内径9.1 器高 2.75	側面には下向きの蓮弁文と圈線、甲頂には2 条一組の界線の中に十字花文が見られる。	透明度を有する釉を内外面共に 薄く施す。端部以外は全釉され る。	東南北穴



0 10cm

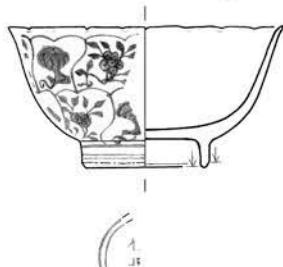
第20図 染付（1）碗



14



15



16



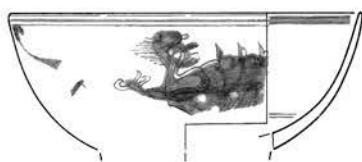
17



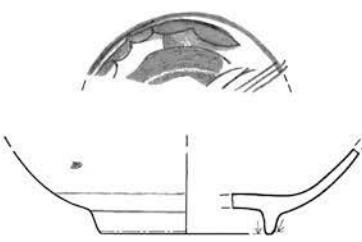
18



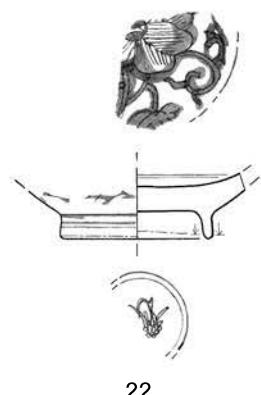
19



20



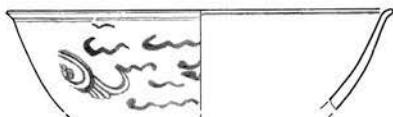
21



22



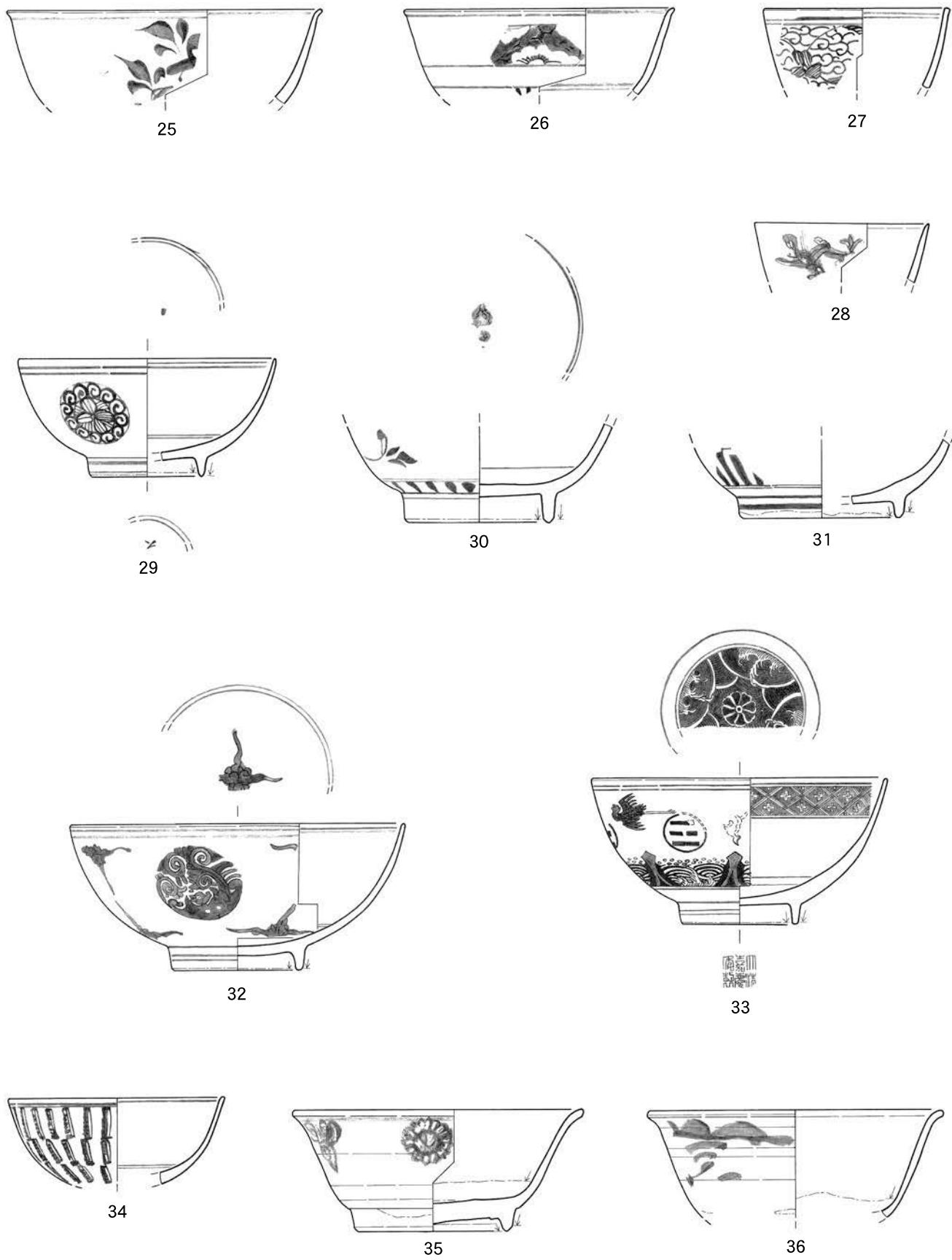
23



24

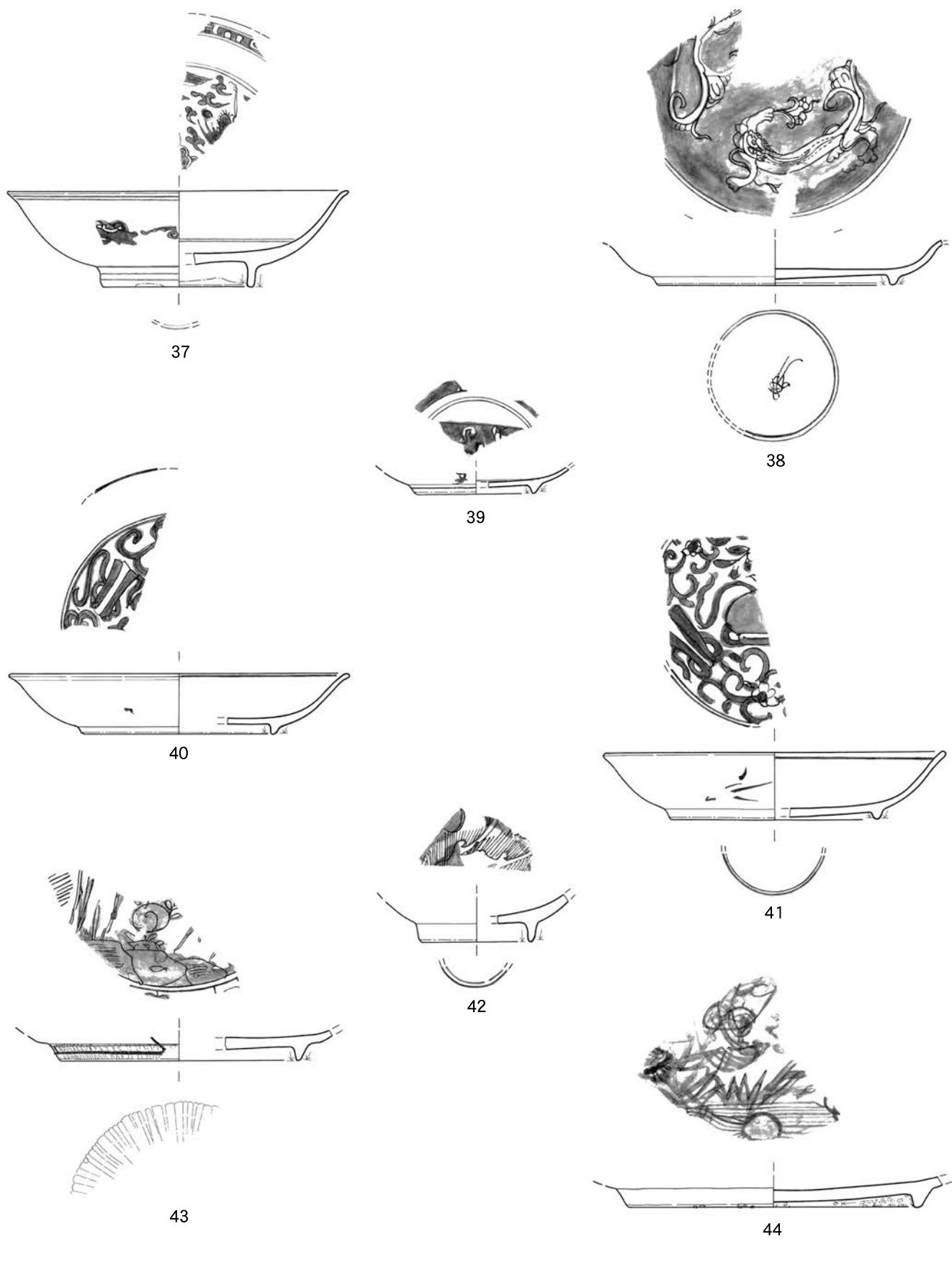
0 10cm

第21図 染付（2）碗

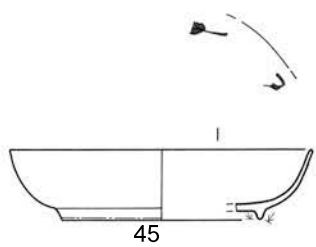


0 10cm

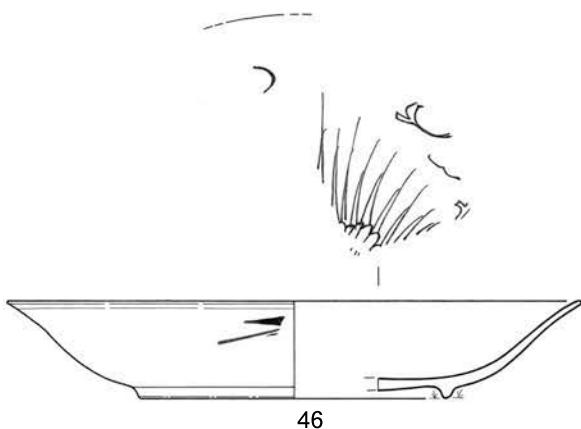
第22図 染付（3）碗



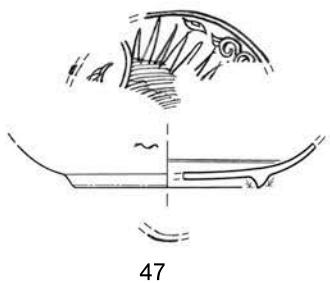
第23図 染付（4）皿



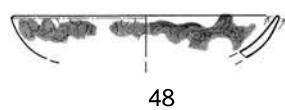
45



46



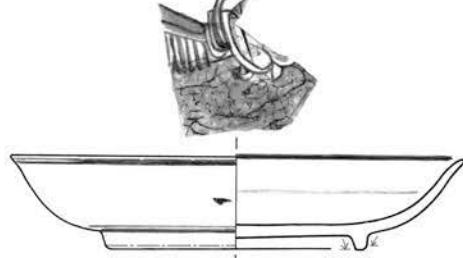
47



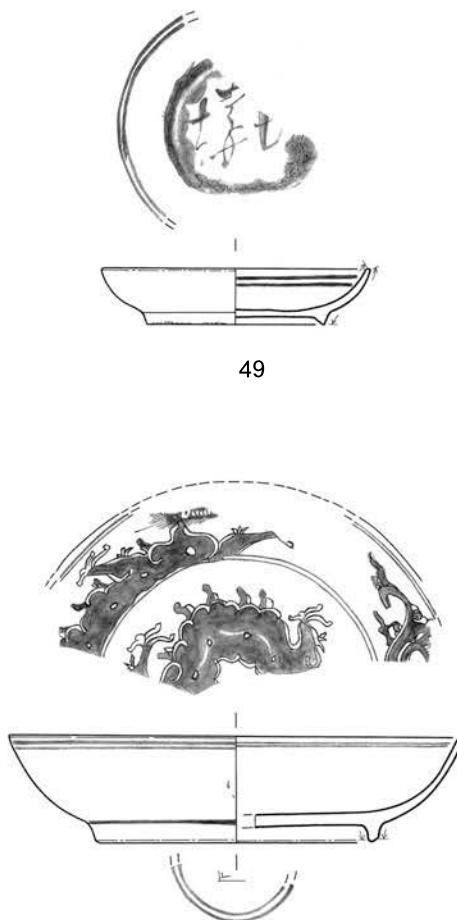
48



49



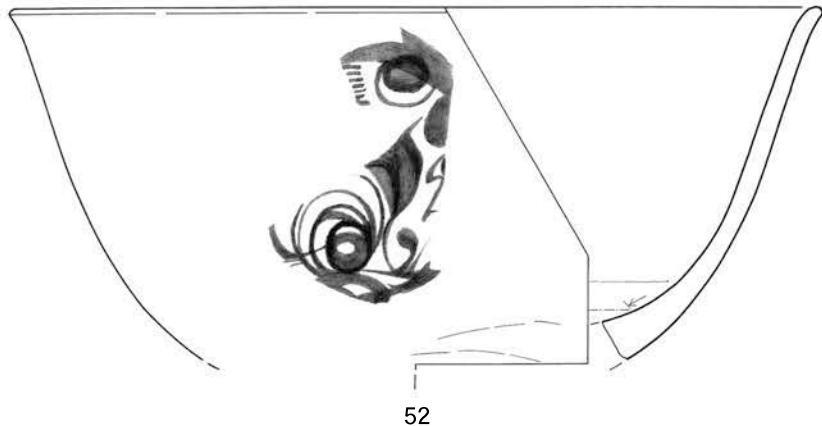
50



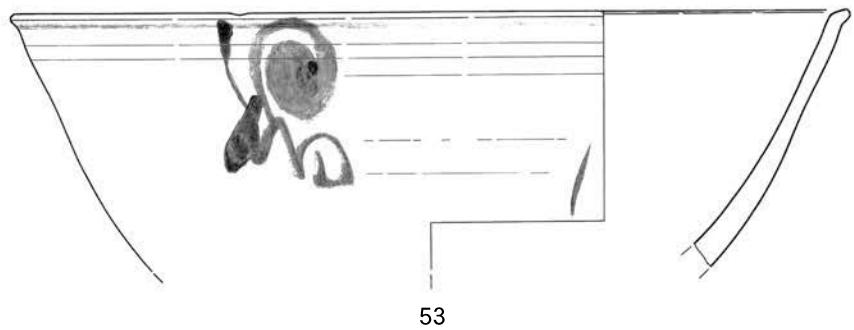
51

0 10cm

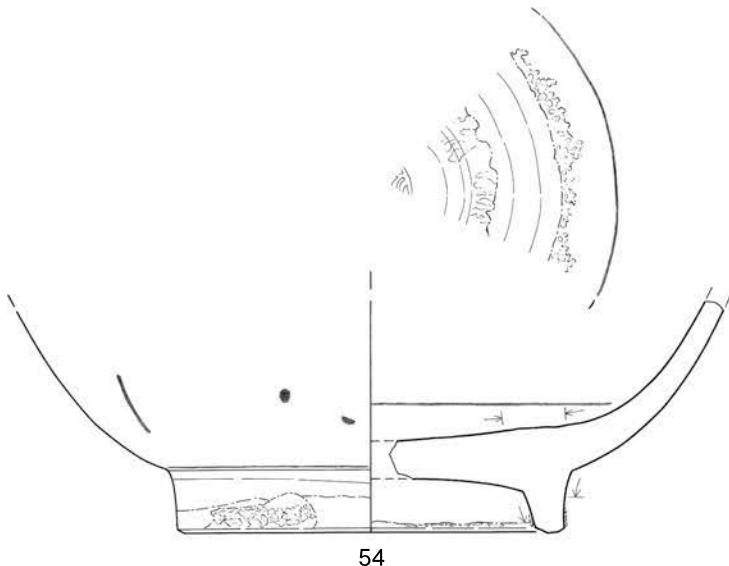
第24図 染付（5）皿



52



53



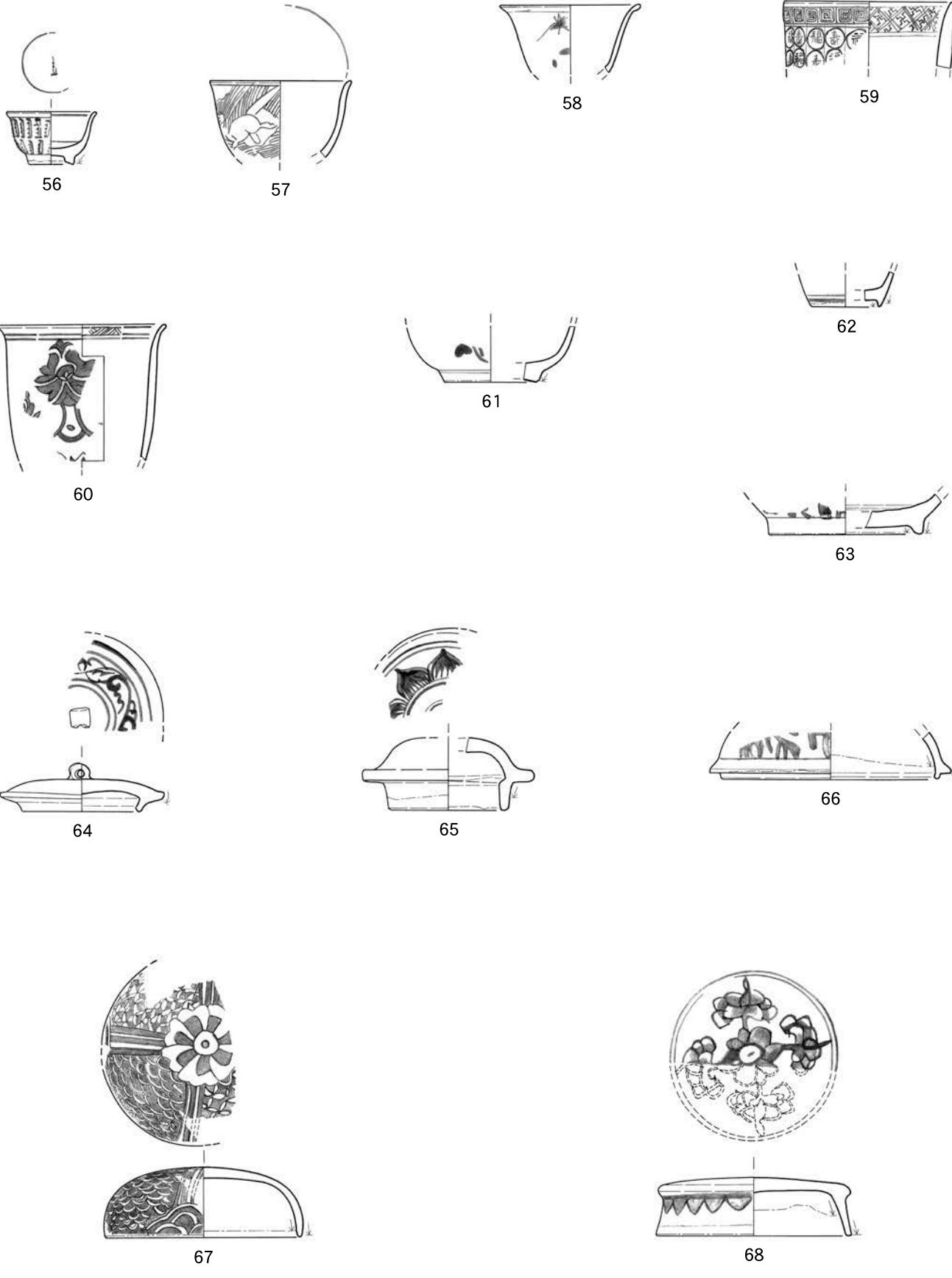
54



55

0 10cm

第25図 染付 (6) 鉢 52~54 盤 55



第26図 染付 (7) 杯 56~62 瓶 63 蓋 64~68

## 第4節 色絵

ここでは16点を報告する。器種としては碗、皿、杯、蓋がある。出土量としては碗が最も多く、次に皿、蓋と続く。釉下に呉須で絵付けした後、釉上に多色で絵付けするものや全て文様は釉上に絵付けするもの、そして単色を外面全体に上絵付けするものと多様である。以下にその概要を述べ、詳細は観察表でまとめる。

### 碗(第27,28図1~11)

口縁部が外反するものと直口するものの2つに大別することができる。外反するものは口縁部直下から緩やかに立ち上がる。全て器壁は薄く、6のようにやや大振りのものも見られる。また高台は高く、直に立ち上がる。なお3, 4は釉下に呉須で文様の輪郭を描き、その釉上から上絵付けをするといった豆彩である。口縁部が直口するものはほぼ直線上に胴上部は立ち上がる。8のように腰部で折れるものも見られる。2点確認されているが何れも小振りな碗である。碗の底部資料は3点確認されている。何れも高台径は小さく10のように高台が直に立ち上がるものと9, 11のように「ハ」の字状に開くものに大別することができる。文様は唐草文、ラマ式蓮弁文、蓮池文、竜文、雲文、牡丹唐草文、蝙蝠文が見られる。

### 杯(第28図12)

高台径が小さく、底部から胴部へ急な立ち上がりを見せる杯が1点確認されている。高台は「ハ」の字状に開き、器壁は全体的に薄い。胴下部は膨らみを有するが、胴上部から直線上に開く。

### 皿(第28図13,15,16)

何れも口縁部が外反する。13のように口径が広く器高が低いもの、15,16のように口径が狭く、器高が高いものとやや器形が異なるものが見られる。また13のように多色で上絵付けを施しているものから、15,16のように外面を線刻で文様を描き、翡翠色の上絵1色のみ施すものと多様である。これらの資料は釉を内外面共に薄く施し、疊付は露胎となる。15,16は素三彩である。

### 蓋(第28図14)

全形を窺うことのできる資料が1点確認される。端部が三角形状となり、底辺がやや窪み身受けとなる。身受けの部分は露胎となり、砂粒が付着する。また、上面觀が環状となる撮みが甲頂部に付く。文様構成は釉下に呉須で絵付けをしたものと、その下部に釉上に多色で絵付けをするといったものとなっている。

第25表 色絵出土状況一覧

出土地	器種	碗				皿				杯				蓋	器種不明	合計
		口~底	口縁部	胴部	底部	口~底	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部			
1 美福門			1	9	2	1	1	1	1	2	1					19
2 洞穴内			1													1
3 東南部										1						1
4 東南北穴					1			1								2
5 造成層		5	4	12	7		1		1	3	1	1	1			36
6 表採												1		1		2
合 計		5	6	21	10	1	2	2	2	6	2	2	1	1		61

第26表 色絵観察一覧(1)

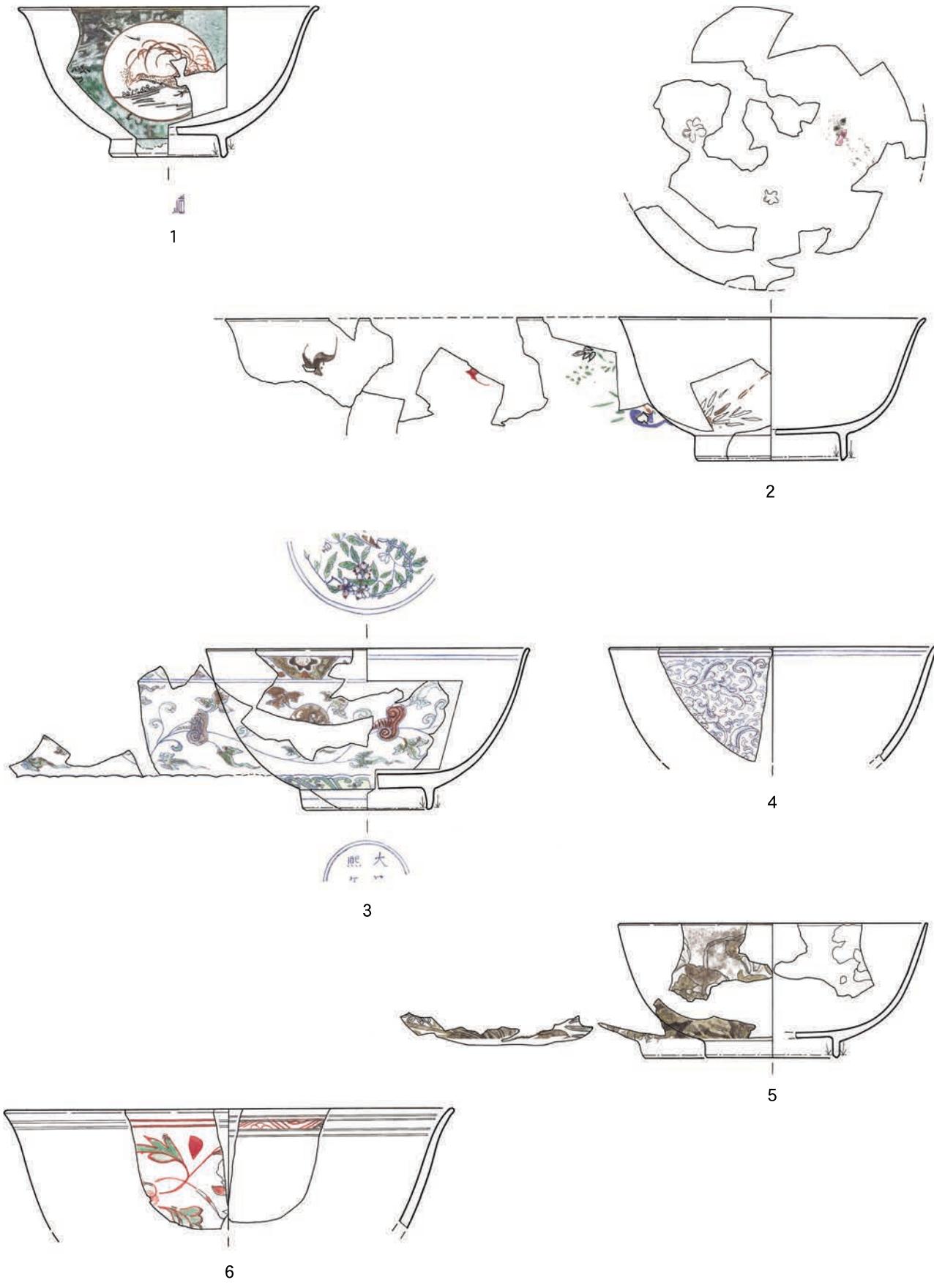
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第27図 図版26 1	碗	口～底	白色の 微粒子。	14.1 6.9 5.6	薄手の外反碗。外体面には円内に水面と水鳥、葦を上絵で描く。また蝙蝠文も見られる。外底面に銘款が見られる。	外面には緑釉で内面は透明釉を薄く施す。高台下部のみ露胎となる。	造成層
第27図 図版26 2	碗	口～底	白色の 微粒子。	14.3 6.6～6.7 7.1	薄手の外反碗。高台は高くつくる。外体面には笛等を上絵付けする。内底面にも上絵付けされた文様が見られる。	内外面共に透明釉を薄く施す。粗い貫入が胴下部から底部にかけて見られる。	造成層
第27図 図版26 3	碗	口～底	白色の 微粒子。	15.3 7.5 6.2	口縁部外面直下には半梅花を配した帶文が見られる。薄手の直口碗。外体面には華唐草文が見られる。釉下に呉須で縁取りした後に花部のみ上絵付けされる。その下部にはラマ式蓮弁文が配される。外底面には「大清康熙年製」の銘が見られる。内底面には草花文が見られる。	内外面共に透明釉を薄く施す。畳付のみ露胎となる。	造成層
第27図 図版26 4	碗	口～胴	白色の 微粒子。	15.4 — —	薄手の直口碗。外体面には華唐草文が全体的に見られる。内面は口縁部直下に2条の界線のみ。	内外面共に透明釉を薄く施す。	美福門
第27図 図版26 5	碗	口～底	白色の 微粒子。	14.7 6.3 6.4	薄手の直口碗。外体面には蓮池文が見られるが2次的に火を受けているため不明瞭。	内外面共に透明釉を薄く施す。高台下部のみ露胎となる。	造成層
第27図 図版26 6	碗	口～胴	白色の 微粒子 で気泡 が見ら れる。	21.2 — —	外反碗。外体面に紅彩で華唐草文を施す。内面には上部に帯状の略化した波涛文が見られる。	内外面共に透明釉を薄く施す。草花の輪郭には紅彩、草内部は青緑色の上絵が施される。	洞穴内
第28図 図版27 7	碗	口～胴	白色の 微粒子。	12.1 — —	薄手の直口碗。外体面には竜文が見られる。	内外面共に透明釉を薄く施す。竜文には緑色の上絵付けが施される。	造成層
第28図 図版27 8	碗	口～胴	白色の 微粒子 で黒色 粒子が 多く見ら れる。	11.0 — —	薄手の直口碗。外体面の文様は剥落が著しく不明。	全般的に茶褐色の上絵が施され、一部、明緑色の上絵が見られる。内面には透明釉が見られる。	造成層
第28図 図版27 9	碗	胴～底	白色の 微粒子。	— — 3.5	小振りな碗で高台径は小さい。外体面には蛸唐草文、外底面には銘款が見られる。	内面と外底面には透明釉が薄く施される。外体面には黄釉が施されるが剥落が著しい。	造成層
第28図 図版27 10	碗	胴～底	白色の 微粒子。	— — 5.0	高台は薄く内傾する。外体面には竜と雲文、外底面には「咸豐年製」の銘款が見られる。内底面には唐草文が見られる。	内外面共に透明釉を薄く施す。高台下部より露胎となる。	美福門
第28図 図版27 11	碗	胴～底	白色の 微粒子 で黒色 粒子が 見られ る。	— — 4.7	高台外面下部に縦位の蓮弁文が略化した文様が見られる。外体面には草文が見られる。	内外面共に透明釉を薄く施す。草文は明緑色で縦位文は青色で上絵付けされる。高台下部より露胎となる。	造成層

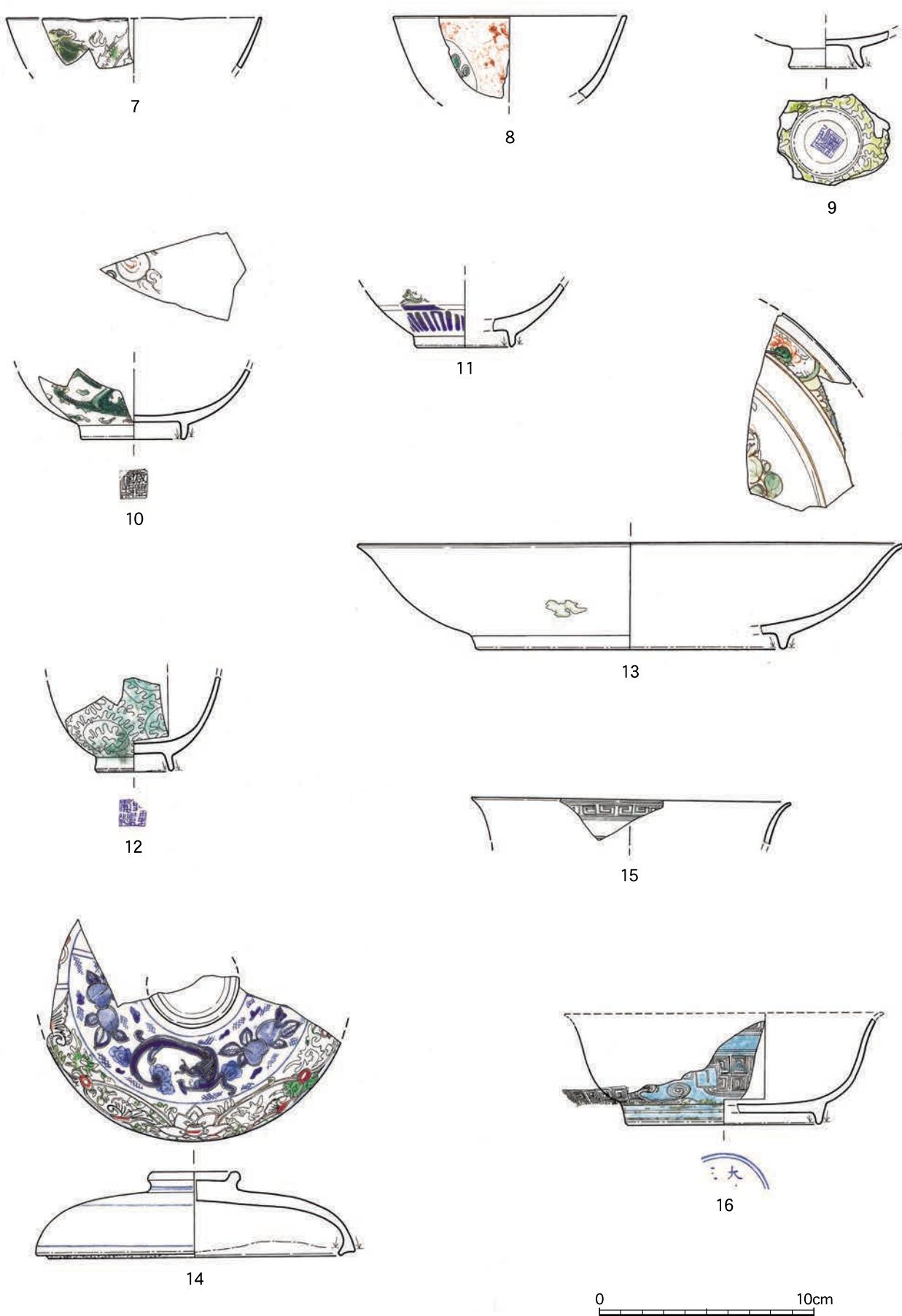
第27表 色絵観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	素地	口径 器高 高台径	器形・成形・文様等の特徴	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第28図 図版27 12	杯	胴～底	白色の 微粒子 で黒色 粒子が 見られ る。	— — 3.7	小振りな杯。外体面には蛸唐草文が全体的に見られる。外底面には銘款が見られる。	内面と外底面に透明釉を薄く施す。外体面には翡翠釉が全体的に施される。高台下部より露胎となる。	造成層
第28図 図版27 13	皿	口～底	白色の 微粒 子。	26.0 5.05 14.9	薄手の外反皿。内体面には草花文と雲文を配した帯文が、内底面には草花文が見られる。外体面にも文様が見られるが、上絵付けが剥落しており不明瞭。	内外面共に透明釉を薄く施す。高台下部より露胎となる。	美福門
第28図 図版27 14	蓋	甲～端	白色の 微粒子 で黒色 粒子が 見られ る。	外径15.2 内径14.0 高さ4.05	撮みは低く、中央が壅む。眞須で描かれた虹龍と桃、雲文を配置した帯文が見られ、その下部に牡丹唐草文が上絵付けで描かれる、身受けの部分には砂粒が付着する。	内外面共に透明釉を薄く施す。	造成層
第28図 図版27 15	皿	口	白色の 微粒 子。	15.1 — —	素三彩。薄手の外反碗。口縁部外面直下に中心部で逆回転させる連続した雷文帯が見られる。	内外面共に透明釉を薄く施す。雷文帯部分は翡翠釉が施される。	造成層
第28図 図版27 16	皿	口～底	白色の 微粒 子。	(15.1) (5.25) 9.3	素三彩。薄手の外反碗。外体面に線刻で雷文と雲文を全体的に描く。高台外面にも線刻で圈線を描く。外体面には界線内に「大」の銘が見られる。	内面と外底面には透明釉が薄く施される。外体面には翡翠釉が施されるが剥落が著しい。高台下部は露胎となる。	造成層



第27図 色絵（1）碗



第28図 色絵（2）碗 7~11 杯 12 皿 13 蓋 14 素三彩 15,16

## 第5節 褐釉陶器

出土した褐釉陶器の器種は大半が壺であった。中国産とタイ・ミャンマー産に産地を分けることができ、ここではまず中国産から報告していく。

### 中国産褐釉陶器

中国産褐釉陶器は残りの良好なもの30点をここで取り上げる。その大きさや形は多種多様であり、本節においてはまず小型壺、大型壺の2タイプに便宜的に分けた。その後、口縁部や底部の形態から更に細分を行った。ここではその細分類に則した形で順に報告していく。

小型壺(第30,31図11～15,23～26)

口縁部並びに器壁が1cmを越えないもの。口縁部は玉縁状に肥厚するものが多く、底部はくびれるものと、直に立ち上がるものが見られる。素地はやや粗いものが多く、白色砂粒や気泡が見られるものもある。口縁部は5点、底部は3点、把手付き胴部1点を以下、記す。

第30図・図版29-11:口縁部が玉縁状に肥厚する。透明釉で素地は赤黒色のやや粗い粒子で白色砂粒が多く見られる。東南部出土。口径:12.35cm

第30図・図版29-12:口縁部が玉縁状に肥厚する。釉は剥落し、器色は灰白色。素地は灰白色の微粒子で気泡、白色砂粒が多く見られる。口径は12.5cm。造成層出土。

第30図・図版29-13:口縁部が玉縁状に肥厚する。やや扁平に肥厚する点で前の2点とは異なる。器色はオリーブ色で透明釉が内外面共に施される。素地は褐色の微粒子で白・黒色粒子、気泡が多く見られる。東南階出土。

第30図・図版29-14:口縁部が玉縁状に肥厚する。器色は褐色で素地は灰白色の微粒子で透明釉が内外面共に施される。頸部内面には釉垂れが見られる。素地は白・黒色の粗粒子、砂粒が多く見られる。口径は10.7cm。南カベ下出土。

第30図・図版29-15:口縁部が玉縁状に肥厚し、口唇部が平坦になる。口唇部には目跡の砂粒が付着している。器色はオリーブ色で透明釉が内外面共に施される。素地は黄灰色の微粒子で気泡が見られる。口径は15.8cm。表土層出土。

第31図・図版29-23:底部。直に胴部へと立ち上がる。器色はにぶい橙色で暗オリーブ褐色の釉が胴下部まで施される。素地は灰白色のやや粗い粒子で白色砂粒が多く見られる。底径は9.3cm。東南部出土。

第31図・図版29-24:底部。ほぼ直に胴部へと立ち上がるがやや膨らみを有する。オリーブ褐色の釉が胴下部まで施される。素地は灰白色のやや粗い粒子で白・黒色粒子が見られる。底径は5.9cm。南カベ下出土。

第31図・図版29-25:底部。底部近くでくびれる。外底面は盛り上がる。暗オリーブ色の釉が内外面共に薄く施される。素地は明黄褐色の微粒子で白色砂粒が見られる。底径は8.1cm。南カベ下出土。

第31図・図版30-26:胴部。把手が肩部に付く。暗灰黄色の釉をやや厚く施す。オリーブ黒色の釉が外面に薄く施される。内面の器色は灰黄色。素地は灰黄色の微粒子で白色砂粒、気泡が見られる。東西階東南部出土。

大型壺(第29・30図1～10)

口縁部並びに器壁が1cmを越えるもの。口縁部は4つに分類することができ、底部も2つに分類することができる。口縁部は10点、底部は7点を以下に記す。

## 口縁部 I 類

第30図・図版28-9,29-10に見られるように口縁端部が外側に張り出しその先端がやや尖り気味になる。胴上部はナデ肩となる。9は褐灰色の釉を外面のみ薄く施すが、10は内外面共に施している。素地は両資料共にやや粗く、白色の粗粒子が多く見られる。9の口径は17.5cm、10の口径は19.2cm。9,10美福門地区出土。

## 口縁部 II 類

第29図・図版28-1に見られるように口唇部が水平となる。口縁端部が外側に張り出し、内面もやや張り出す。また頸部には段が見られる。内外面共に灰オリーブ色の釉を厚く施している。釉内には気泡が多く見られる。素地は浅黄色のやや粗い粒子で白色の粗粒子が見られる。口径は18.8cm。表土層。

## 口縁部 III 類

口縁端部が外側に張り出し、内面もやや張り出す。頸部も明瞭につくり出しており、胴上部はいかり肩となる。

第29図・図版28-2は頸部に明瞭な段をつくり圈線とする。オリーブ黒色の釉を内外面共に薄く施す。素地は浅黄色のやや粗い粒子で白色砂粒、気泡が見られる。口径は16.2cm。造成層出土。

第29図・図版28-3は口縁部は貼り付けがなされる。暗オリーブ色の釉を内外面共に薄く施す。素地は灰色の微粒子で白色砂粒、気泡が見られる。口径は22.95cm。造成層出土。

第29図・図版28-4は口縁部は貼り付けがなされる。また頸部には段が見られる。外面はオリーブ黒色の釉、内面はオリーブ色の釉が薄く施される。素地は灰白色のやや粗い粒子で気泡、白色砂粒が見られる。口径は22.0cm。造成層出土。

第29図・図版28-5は頸部に段が見られ、かなり肩が張る。胴上部には目跡が等間隔に見られる。オリーブ黒色の釉を内外面共に薄く施す。素地は灰白色の微粒子で白・黒色粒子で、気泡が見られる。白色砂粒も僅かに見られる。口径は21.95cm。H-6洞穴内出土。

## 口縁部 IV 類

口縁部はIII類とほぼ同じだが、頸部は明瞭につくり出していない。口唇部は広く、胴部はいかり肩となる。

第29図・図版28-6は口縁部が玉縁状に肥厚し、口唇部は水平で露胎となる。やや小振りな壺でオリーブ黒色の釉を外面に薄く施す。内面は口縁部近くまで施釉され、頸部以下は露胎となる。口径21.0cm。I-6出土。

第30図・図版28-7は頸部が緩やかとなり、肩部との屈曲部が不明瞭。暗オリーブ褐色の釉を内外面共に薄く施す。素地は灰黄色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。口径は21.3cm。表土層出土。

第30図・図版28-8は頸部が緩やかとなり、肩部との屈曲部が不明瞭。素地は浅黄色のやや粗い粒子で白・黒色の粗粒子が見られる。口径は25.15cm。造成層出土。

## 底部 I 類

底部近くでくびれる。胴部へはほぼ直線状に立ち上がり、底部は盛り上がる。回転成形痕が明瞭に見られる。

第30図・図版29-16は僅かにくびれが見られる。緑灰色の釉を外面のみ薄く施す。内面は露胎となる。素地はやや粗く褐色の粗粒子と白色砂粒が多く見られる。底径は19.0cm。美福門地区出土。

第30図・図版29-17はくびれが明瞭に見られる。胴部へは直線状に立ち上がり、底部には目跡が残る。オリーブ黒色の釉を内外面共に薄く施す。素地は灰白色の微粒子で気泡、白色粒子が多く見られる。白色砂粒も僅かに見られる。底径は16.8cm。造成層出土。

第31図・図版29-18は胴部へ直線状に立ち上がり、底部には目跡が残る。胴内面下部の器表は剥落が著しい。黒褐色の釉を内外面共に施す、内外底面は露胎となる。素地は底径は16.0cm。南カベ下出土。

第31図・図版29-19は底部近くでくびれ、胴部へは直線状に立ち上がる。暗オリーブ色の釉を内外面共に薄く施す。素地は灰白色の微粒子で白色粒子、気泡が僅かに見られる。底径は11.1cm。造成層出土。

第31図・図版29-20は僅かにくびれが見られる。底部は盛り上がり、胴部へは外側へ反るように移行する。底部には目跡が残る。暗灰黄色の釉を内外面共に薄く施す。素地は灰黄色のやや粗い粒子で白・褐色の砂粒、そして気泡が見られる。底径は15.0cm。造成層出土。

## 底部II類

底部でくびれはほとんど見られない。胴部へはほぼ直線状に立ち上がり、底部は盛り上がる。回転成形痕が明瞭に見られる。

第31図・図版29-21は僅かに見られるがほとんど底部から直線状に胴部へ立ち上がる。底部には目跡が残る。オリーブ黒色の釉を内外面共に薄く施す。素地は灰白色の微粒子で白色砂粒が多く見られる。気泡も僅かに見られる。底径は12.1cm。I-6グリッド出土。

第31図・図版29-22はくびれは見られない。底部は極めて薄くつくられている。素地は灰色のやや粗い粒子で白色粒子が多く見られる。気泡も僅かに見られる。美福門地区出土。

## 把手(第31図27~30)

3点が完形で出土しており、何れも壺の肩部に付くものである。第31図27が最も大きいが第31図28や29が標準的な把手の大きさとなっている。把手の断面形は橢円形で、29のように沈線を横位に2条、施すものも見られる。27,28の裏面は露胎となる。第31図30は急須の把手か。筒状の製品で一部、内面に釉が施される。27は造成層出土、28,29は東南部出土、30は造成層出土。

## タイ・ミャンマー産褐釉陶器

タイ・ミャンマー産は残りの良好なもの6点をここで取り上げる。中国産と比べて出土量は少なく、外反壺、くびれのない底部と特徴はほぼ一致している。31~35まではタイ産、36はミャンマー産。ここでは口縁部3点、底部2点を報告する。

第32図・図版30-31は口縁部が外反する壺で端部が上方へ立ち上がる。また下方へも突出する。口縁部直下には目跡が等間隔で見られる。オリーブ黒色の釉が直部的に、内外面に薄く施される。明褐色の微粒子で褐色の粗粒子が多く見られる。口径は20.5cm。I-9グリッド出土。

第32図・図版30-32は口縁部が玉縁状となり、端部は若干、上方へ立ち上がる。内面は口縁上部にオリーブ色の釉が、外面は口縁の一部、頸部より下方にオリーブ黒色の釉が薄く施される。素地はオリーブ黄色のやや粗い粒子で白・褐色の粗粒子が見られる。口径は18.0cm。南カベ下出土。

第32図・図版30-33は口縁部が玉縁状となり、端部は若干、上方へ立ち上がる。内面は口縁上部にオリーブ色の釉が、頸部より下方に暗オリーブ色の釉が薄く施される。素地はにぶい橙色のやや粗い粒子で白・黒・褐色の粗粒子が見られる。口径は19.25cm。I-8グリッド出土。

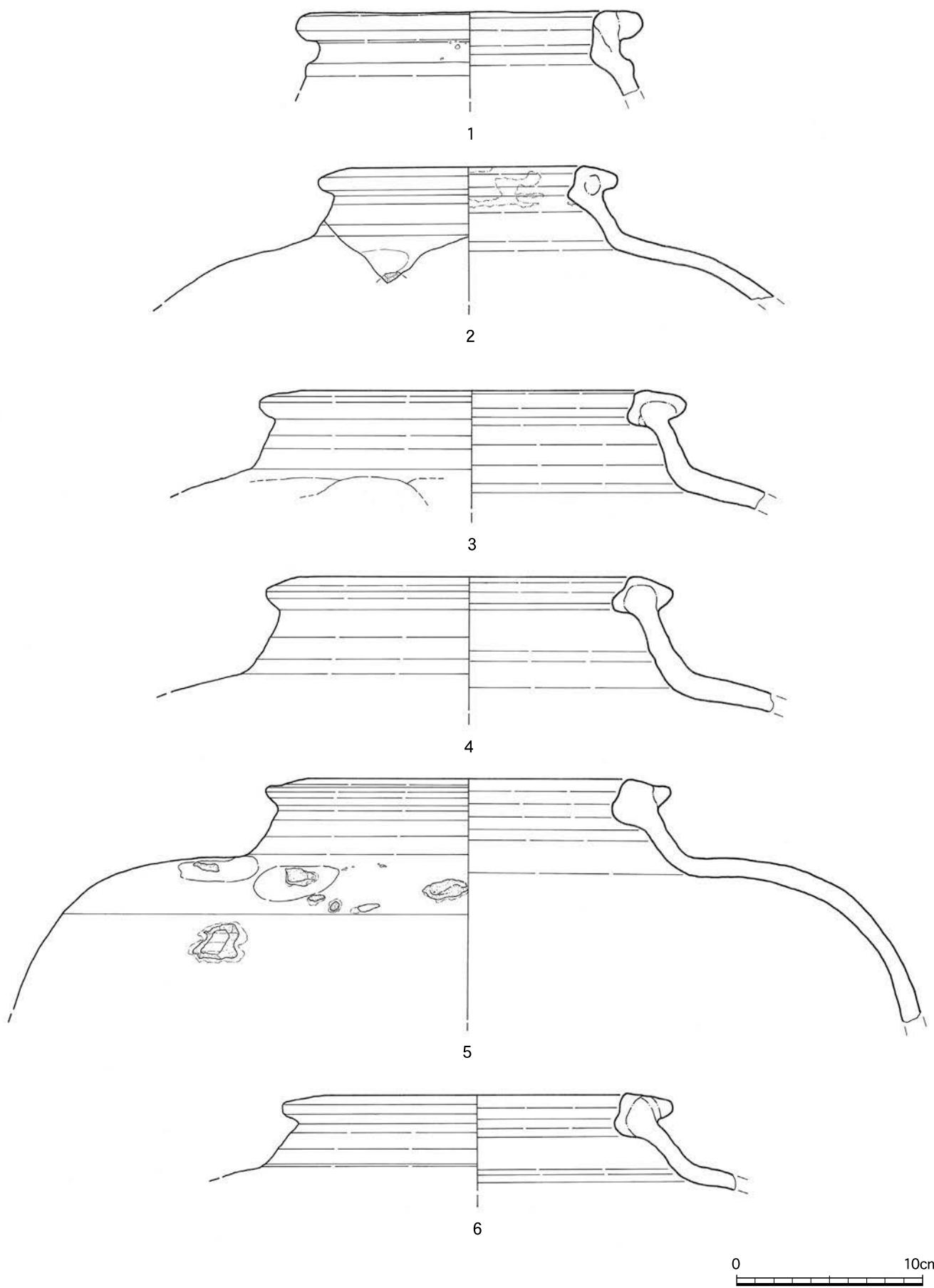
第32図・図版30-34は底部で胴部へ直線状に立ち上がる。底部は盛り上がらず、平坦となる。胴下部には継ぎ目が見られる。にぶい橙色の釉を外面に施す。素地は赤灰色の粗い粒子で白・黒色砂粒が多く見られる。底径は19.5cm。美福門地区出土。

第32図・図版30-35は底部で胴部へ直線状に立ち上がる。底部は盛り上がらず、平坦となる。素地はにぶい赤橙色で褐色の粗粒子が見られる。底径は25.6cm。洞穴内出土。

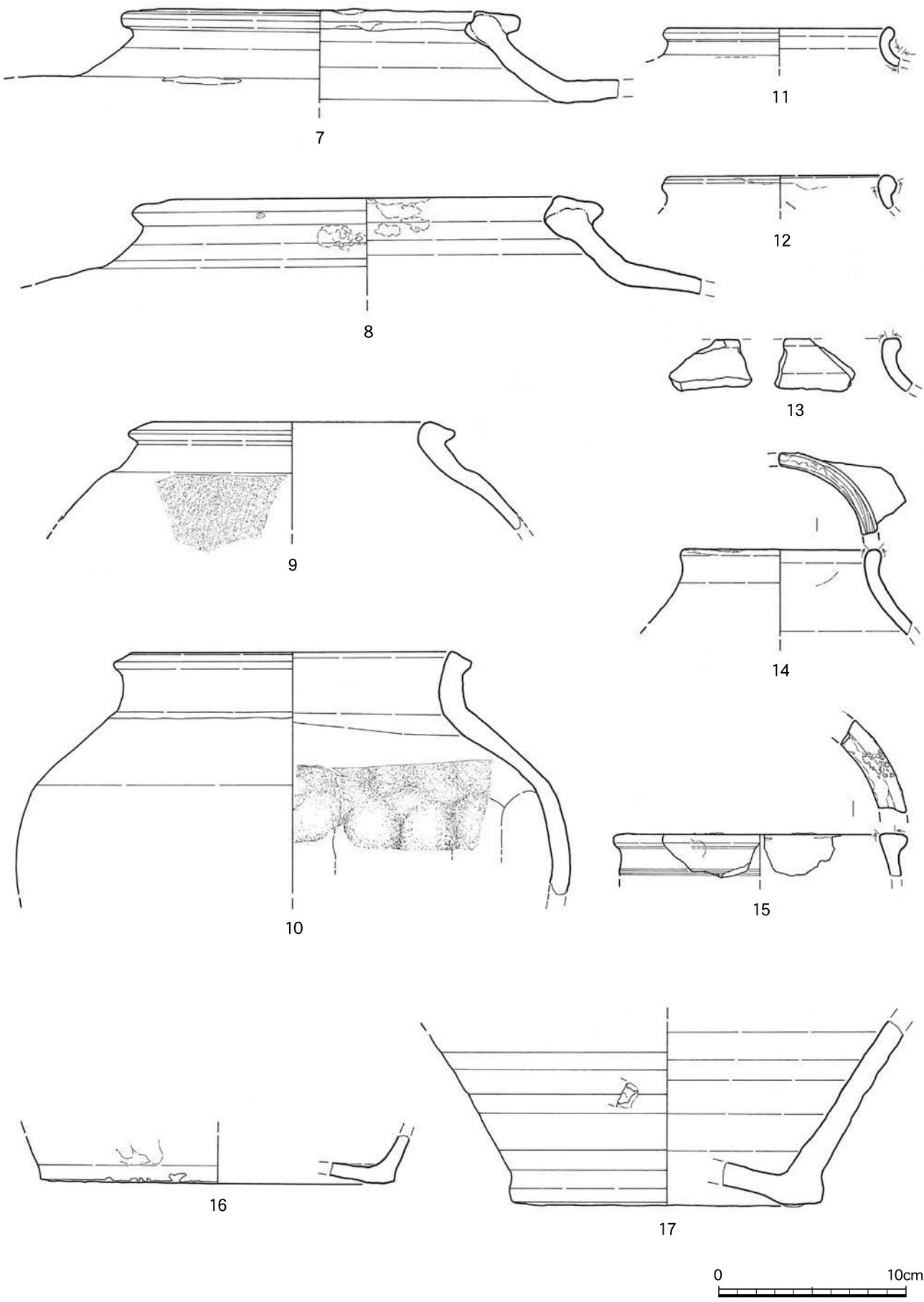
第32図・図版30-36は口縁部。ミャンマー産の褐釉陶器。口唇部にオリーブ黄色の釉が施された円形の突起を列状に並べる。口縁部は玉縁状に肥厚する。素地は灰白色の微粒子で白・黒色の粗粒子、気泡が見られる。造成層出土。

第28表 褐釉陶器(中国・タイ・ミャンマー産) 出土状況一覧

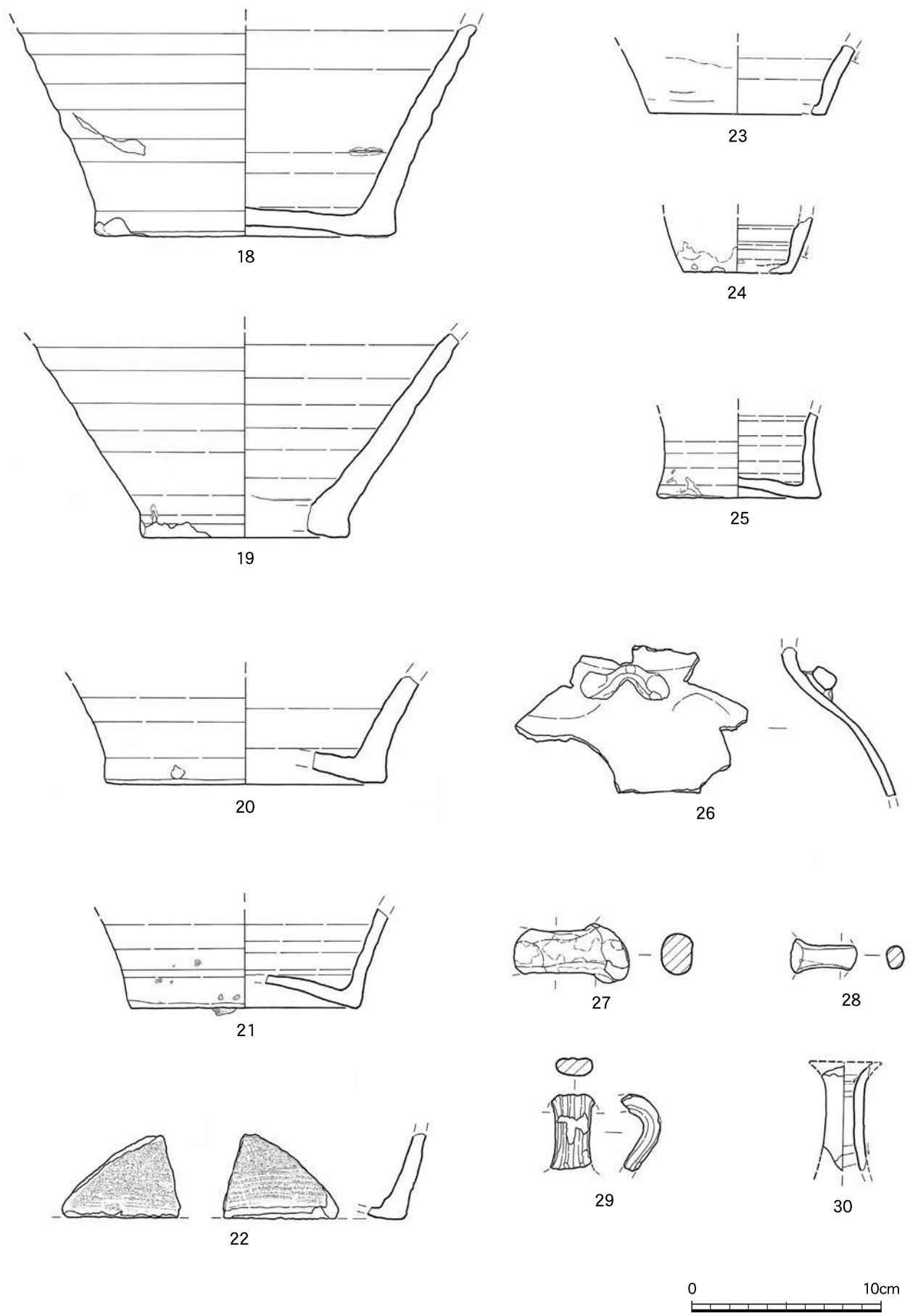
出土地	産地 器種	中國産												タイ産				タイor中國产地不明			ミャンマー 産				
		大壺				小壺				瓶	鉢		不明	壺				壺							
		口縁部	頸部	胴部	底部	耳	口縁部	頸部	胴部	底部	胴部	口縁部	底部	底部	耳	頸部	胴部	底部	口縁部						
1 美福門		7	2	141	4				15							30	2		3		204				
2 洞穴内				7	1											6		1			15				
3 南カベ下		4	13	416	8				8						7	3	105	7	2	1	18	592			
4 北カベ				7					2													9			
5 トレ内				39					1						1	1	17					59			
6 C-10		1		11													7					19			
7 D-8				1																		1			
8 D-10			1	17											2		4			1		25			
9 E-4				2																		2			
10 E-8				8												3						11			
11 E-9				11								1					2					14			
12 E-10				6													1			1		8			
13 F-4				1																		1			
14 F-6				3													1					4			
15 F-7				6																		6			
16 F-8				2												2						4			
17 F-9				1												4						5			
18 F-10				15	1											1			1			18			
19 G-5造成層				19					2							4			2			27			
20 G-6				30												8						38			
21 G-7				6					2							2						10			
22 G-8				2												1						3			
23 H-5				16												2						18			
24 H-6		1	1	27											1	16			2			48			
25 H-6洞穴内		3	1	45	1		1	1	1						2	12	1		1			69			
26 H-8			1	29												6						36			
27 I-3				3												1						4			
28 I-4			1	3	1											1	1		1			8			
29 I-6		7	6	717	2	1			7						2	3	212	3	1	31	1		993		
30 I-7		1	4	51		1									1		41	2	2				103		
31 I-8		8	9	343	4				5						5	9	104	1	1	1	39	3		532	
32 I-9				75											1	1	9				3			89	
33 東南部		6	6	260	2	1		1	41						1	1	1	1	57	2		4			385
34 東南部北側			2	71					1	1						1	17							93	
35 東南部西側		3	1	106	1	1		2	20				1			1	39	1		1				177	
36 東南部西端				1					2															3	
37 東南部東側		1		27					6								11							45	
38 東西南		1		33	2				12						1		4				2			55	
39 東南北穴				22					1							6								29	
40 東南北穴排				16																					16
41 造成層		64	74	4,763	53	3	3	2	103	2	1	1			34	45	877	14	3	144	15	1	6,202		
42 表土		16	7	383	10				15			1			4	11	124			34				605	
43 表採								1									4			2				7	
合計		123	129	7,742	90	7	5	6	244	3	1	4	2	1	62	76	1,737	38	10	2	286	23	1	10,592	



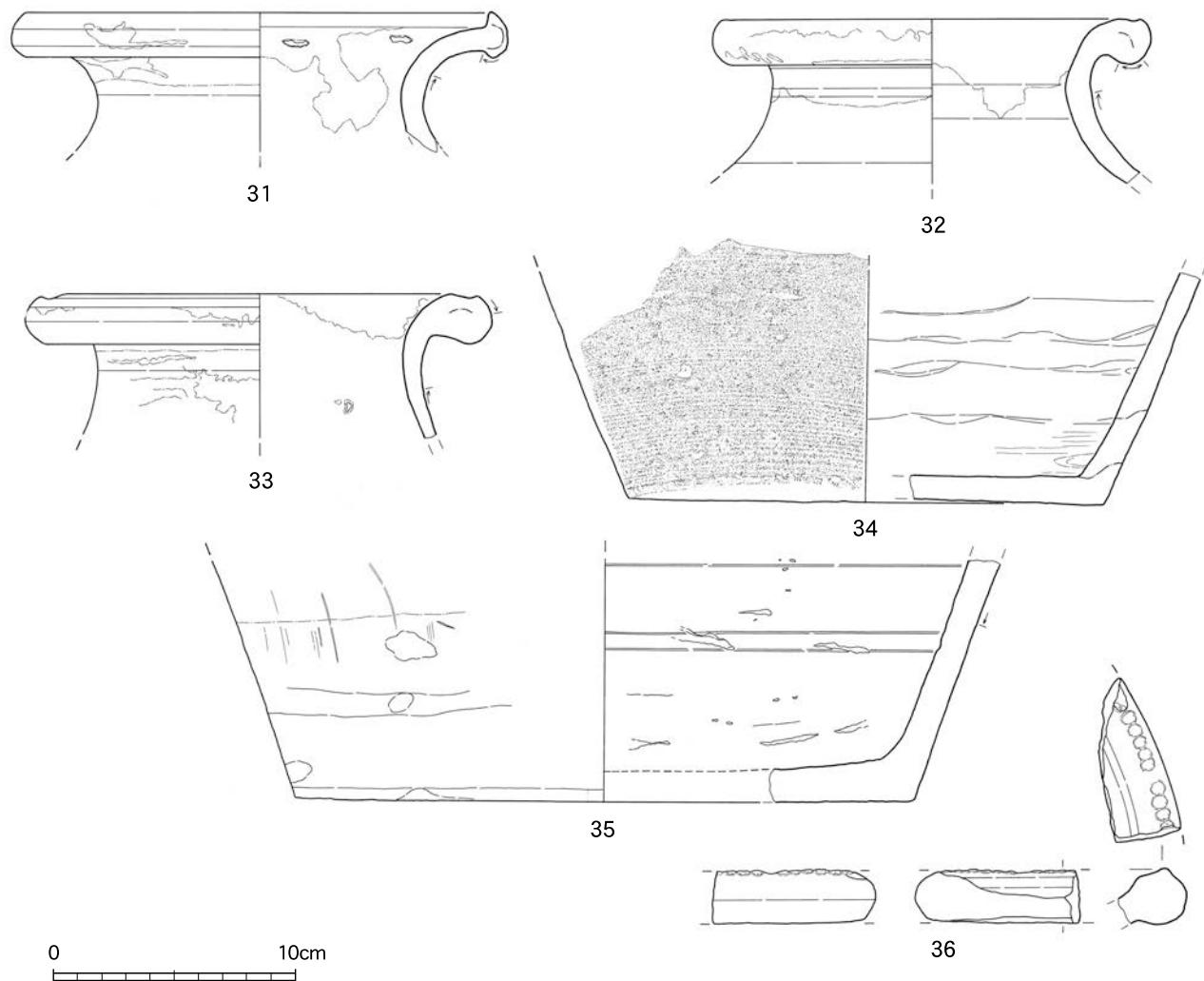
第29図 褐釉陶器（1）中国産 壺



第30図 褐釉陶器（2）中国産 壺



第31図 褐釉陶器（3）中国産 壺 18~29 瓶 30



第32図 褐釉陶器 (4) タイ産 壺 31~35 ミャンマー産 壺 36



図版1 参考資料: ミャンマー産褐釉陶器  
(HIMPUNAN KERAMIK INDONESIA THE CERAMIC SOCIETY OF INDONESIA 1984)

## 第6節 その他の輸入陶磁器

ここでは残存度の高い瑠璃釉3点、銅緑釉3点、紅釉2点、翡翠釉3点、釉裏紅1点、柿釉染付2点、彩釉陶器1点、白地鉄絵1点、ベトナム産染付2点、緑釉鉄絵1点、黒釉陶器5点、灰釉陶器2点、無釉陶器・朱泥2点、中国産陶器1点、高麗青磁4点、半練土器2点、ベトナム産陶器2点の総計37点を報告する。詳細は観察表にまとめる。

### 瑠璃釉(第33図1～3)

器種は杯が1点、瓶が2点確認されている。杯は1の口縁部資料で直口口縁となり器壁は薄い。瓶は3の口縁部と2の底部資料で何れも器壁は薄く、外面のみ瑠璃釉を施す。

### 銅緑釉(第33図4～6)

器種は全て蓋となる。4,6はその径から壺などの大型製品に伴うものと考えられる。5はその形態から瓶の蓋とも考えられるが、径が不明なため詳細は解らない。4,5は甲部に盛り上がりを有する蓮弁を配する。

### 紅釉(第33図7, 8)

器種は碗と皿が各1点確認されている。7の碗は薄手の直口碗で高台はやや高い。外底面には銘款が見られ、それ以外には文様が見られない。8の皿は口縁部資料であるが、外体面には白抜きの魚文を配する。薄手の外反皿で大振りとなる。

### 翡翠釉(第33図9～11)

器種は皿1点と水滴2点が確認されている。9は外体面に鎧蓮弁を配する輪花皿である。内外面共に翡翠釉が施される。10は水滴の注口部と11は底部資料である。何れも型作りの文様が外面に見られる。

### 釉裏紅(第34図12)

器種は碗の底部資料1点のみ確認されている。内底面には草花文が呉須と紅釉で描かれる。小振りな碗で外底面には銘款が見られる。

### 柿釉染付(第34図13,14)

器種は碗と杯が各1点確認されている。13の碗は薄手の小振りな外反碗で外体面には菊花文を配する。14の杯は底部から胴部への立ち上がりは急で内底面には呉須で文様が描かれる。

### 彩釉陶器(第34図15)

器種は鶴型水注で胴部片である。外面には緑釉と黄釉が施され、内面には型押しの際に押捺した指圧痕が明瞭に残る。

### 白地鉄絵(第34図16)

器種は小片のため不明であるが、壺などの大型製品の胴部資料と考えられる。器表は白化粧した後に鉄釉で絵付けされる。内面は露胎となる。

### ベトナム産染付(第34図17,18)

2点確認されているが小片のため器種は不明。袋物か。素地は灰白色のやや粗い粒子で全体的に黒ずんだ印象がある。

### 緑釉鉄絵(第34図19)

鉢が1点確認されている。口縁部が内彎し、器高は低い。高台は付かずベタ底状となる。内外面共に緑釉が施され、内底面には鉄釉で「井」の字状の文様を配する。

### 黒釉陶器(第35図20～24)

器種は碗が5点確認されている。25を除いて全て天目茶碗。口縁下部で角度を変えるものが多く見られる。22のように「く」の字状に折れるものや、21のように緩やかに折れるものが見られる。23,24は底部資料であるが何れも胴下部は露胎となり、高台の内割りは浅い。

### 灰釉陶器(第35図25,28)

器種は碗と瓶の各1点が確認されている。25の碗は底部資料で高台は低く、断面形は三角形状となる。外面は胴下部が露胎となる。28の瓶は全形が窺われる資料である。口縁部は外反し、胴部はほぼ直線上に立ち上がる。全体的に器壁は薄く、胴下部は露胎となり、工具による縦位の成形痕が見られる。

### 無釉陶器・朱泥(第35図26,27)

器種は蓋が2点確認されている。26は中央近くに孔が開けられており、その形態から中仕切のような蓋か。27は甲部に鍔状の突起が付く。水注もしくは瓶の蓋か。

### 中国産陶器(第35図29)

蓋が1点確認されている。撮みが2つ以上付く蓋で、器壁が厚く径もあることから壺などの大型製品に伴うものと考えられる。紫色の釉が内外面共に薄く施される。

### 高麗青磁(第35図30～33)

器種は碗が2点確認されており、残り2点は小片のため器種不明である。碗は全て外反口縁であり、象嵌で文様を内外面に配する。文様は31のように円弧を3つ一組にした文様を2段で横位に並べるものから、30のようにスタンプ状の花文を配するものも見られる。

### 半練土器(第35図34,35)

蓋が2点確認されている。先端に折り返しが見られる端部と宝珠状の撮みの部分が各1点確認されており、共に丁寧に成形され、器壁は滑らか。胎土には褐色粒子が多く含まれる。

### ベトナム産陶器(第35図36,37)

蓋が2点確認されている。36は花を象った長頸瓶等に付く蓋と考えられ、花弁中央の花心部分が褐色釉を表面に施す。37は円盤状の器壁の薄い蓋。甲頂部はやや上方へ膨らみが見られ、端部には身受けの段が見られる褐色釉を表面に施す。

第29表 その他の輸入陶磁器出土状況一覧

### 第30表 タイ産半練土器出土状況一覧

器種	出土地	蓋			合計
		縁部	頂部	甲部	
1 美福門		1		1	2
2 南力べ下		1	1		2
3 I-6		2			2
4 I-9		1	1		2
5 東南部		1			1
6 東南部西側		2			2
7 造成層		6		1	7
合計		14	1	2	19

第31表 その他の輸入陶磁器観察一覧( 1 )

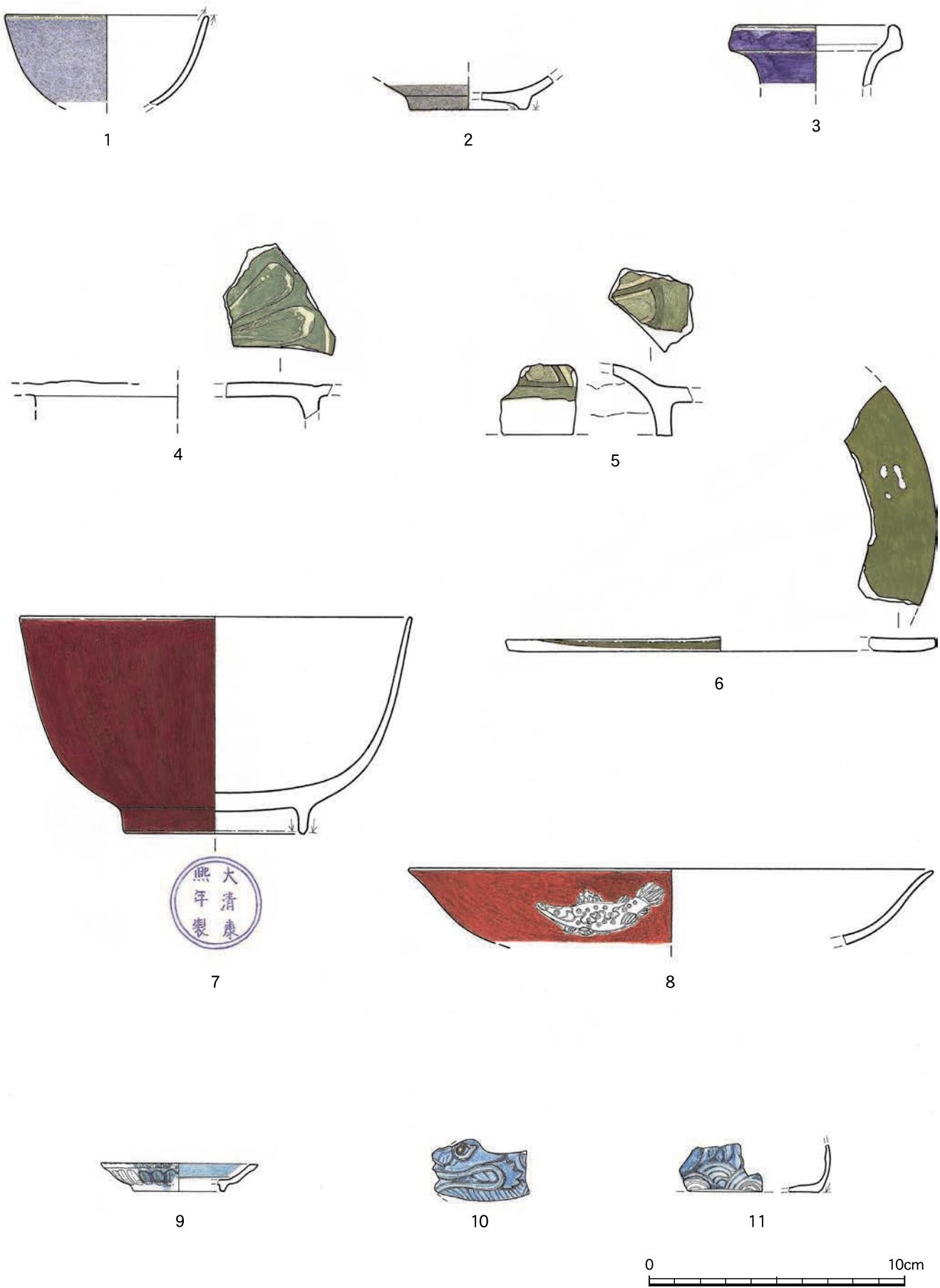
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第33図 図版31 1	瑠璃釉	杯	口～胴	8.0 — —	口唇部が舌状となる外反する小杯。素地は白色の微粒子。釉は外面が瑠璃釉、内面は透明釉を薄く施す。	東南 北穴
第33図 図版31 2	瑠璃釉	瓶	胴～底	— — 4.6	素地は白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。釉は外面が白みがかった瑠璃釉、内面は失透釉を薄く施す。	東南部
第33図 図版31 3	瑠璃釉	瓶	口～頸	6.5 — —	口縁部が垂直に立ち上がる長頸瓶の口縁部。素地は白色の微粒子で気泡が見られる。釉は外面が瑠璃釉、内面は失透釉を薄く施す。	I-3
第33図 図版31 4	銅緑釉	蓋	端～甲頂	—	甲頂が平坦となる蓋。素地は淡黄色のやや粗い粒子で褐・白色の砂粒が見られる。内面は露胎で外面は銅緑釉が施され、型押しの鎬蓮弁文が見られる。	美福門
第33図 図版31 5	銅緑釉	蓋	端～甲頂	—	甲部が盛り上がる蓋。身受け部は垂直につくる。素地は淡黄色のやや粗い粒子で褐色の粗粒子が見られる。内面は露胎で外面は銅緑釉が施され浮き彫りの蓮弁が見られる。	H-8
第33図 図版31 6	銅緑釉	蓋	端～甲頂	17.0 — —	平面形が円盤状となる蓋。端部はやや上方へ反る。素地は淡黄色で白・黒色粒子が多く見られる。内面は露胎となり、外面のみ銅緑釉が施される。細かい貫入が見られる。	東南部 西側
第33図 図版31 7	紅釉	碗	口～底	15.4 8.6 7.2	薄手の外反碗。素地は白色の微粒子。外底面に2条の界線内に「大清康熙年製」の銘が見られる。釉は外面が紅釉、内面は透明釉を薄く施す。疊付のみ露胎となる。	表採
第33図 図版31 8	紅釉	皿	口～胴	20.7 — —	薄手の外反皿。素地は白色の微粒子。外体面に白抜きの魚文が線刻で描かれる。釉は外面が紅釉、内面は透明釉を薄く施す。	東南部 西側
第33図 図版31 9	翡翠釉	皿	口～底	6.2 1.1 3.6	口縁部が外反する輪花皿で外体面には鎬蓮弁文が見られる。素地は白色の微粒子。釉は内外面共に施され、外面胴下部より露胎。	造成層
第33図 図版31 10	翡翠釉	水滴	注口	—	魚を象った水滴の注口部。目、鼻、口、髭が陽刻で描かれる。素地は白色の微粒子。釉は外面が翡翠釉、内面は透明釉を薄く施す。	東南部
第33図 図版31 11	翡翠釉	水滴	底	—	水滴の底部。底部近くに波状文が陽刻で描かれる。素地は白色の微粒子。釉は外面が翡翠釉、内面、外底面は透明釉を薄く施す。	東南 北穴
第34図 図版31 12	釉裏紅	碗	底	— — 4.4	内底面に草花文で、花部のみ紅釉となる。高台外面には圈線、外底面には「大明成化年製」の銘が見られる。素地は白色の微粒子で気泡が僅かに見られる。	表採
第34図 図版31 13	柿釉染付	碗	口～胴	9.8 — —	小振りな外反碗。外体面には菊花文で花弁は白抜き、茎は具須で描かれる。素地は白色の微粒子。釉は外面が柿釉、内面は透明釉を薄く施す。	南かべ下
第34図 図版31 14	柿釉染付	杯	胴～底	— — 3.3	内底面には2条一組の界線とその中に松葉文が見られる。素地は白色の微粒子。釉は外面が柿釉、内面は透明釉を薄く施す。	造成層
第34図 図版31 15	彩釉陶器	水注	胴	—	鶴型水注の胴部。把手の付け根部分が見られる。印刻で羽が描かれる。釉は緑釉と黄釉が外面に施され、内面は露胎となる。また、内面には型押しの際に押捺した指圧痕が見られる。素地は淡黄色のやや粗い粒子。	表土
第34図 図版31 16	白地鉄絵	壺・甕	胴	—	白化粧の上に筆描きで鉄釉の文様を施す。内面は露胎となる。素地は淡橙色の微粒子で褐、白色の粗粒子、気泡が多く見られる。	造成層
第34図 図版31 17	ベトナム産 染付	不明	不明	—	器種は不明。陽刻の文様と具須で円を描く文様が見られる。釉は外面のみ薄く施される。素地は浅黄色のやや粗い粒子で黒色粒子が多く見られる。	東南部 西側
第34図 図版31 18	ベトナム産 染付	不明	不明	—	器種は不明。具須で縦位の文様が描かれる。釉は全体的に薄く施す。細かい貫入が全体的に見られる。素地は灰白色で白色砂粒、気泡が見られる。	美福門
第34図 図版31 19	緑釉鉄絵	鉢	口～底	12.8 6.2 4.1	器高の低い小型の鉢。内底面には「井」の字状に鉄釉で筆書きされる。内外面共に緑釉を施し、全体的に細かい貫入が見られる。素地は灰白色のやや粗い粒子で褐色の粗粒子と気泡が見られる。	表採
第35図 図版32 20	黒釉陶器	碗	口～胴	12.2 — —	天目茶碗。全体的に直線上に開き、口縁は胴上部で角度を変えて立たせる。内外面共に禾目が見られる。素地は灰色のやや粗い粒子で微細な気泡が見られる。茶褐色の釉を施す。	G-5 造成層

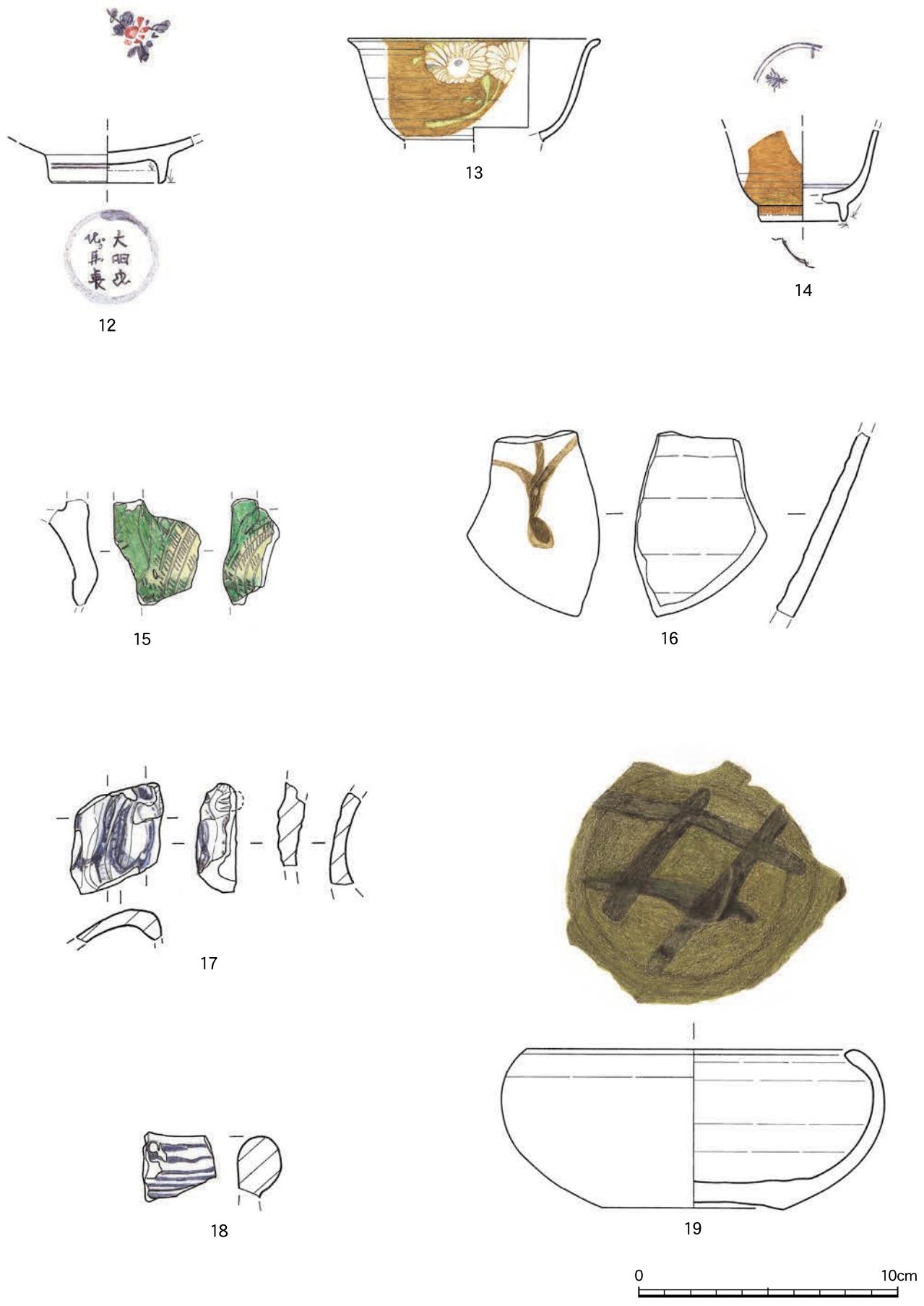
第32表 その他の輸入陶磁器観察一覧(2)

単位:cm

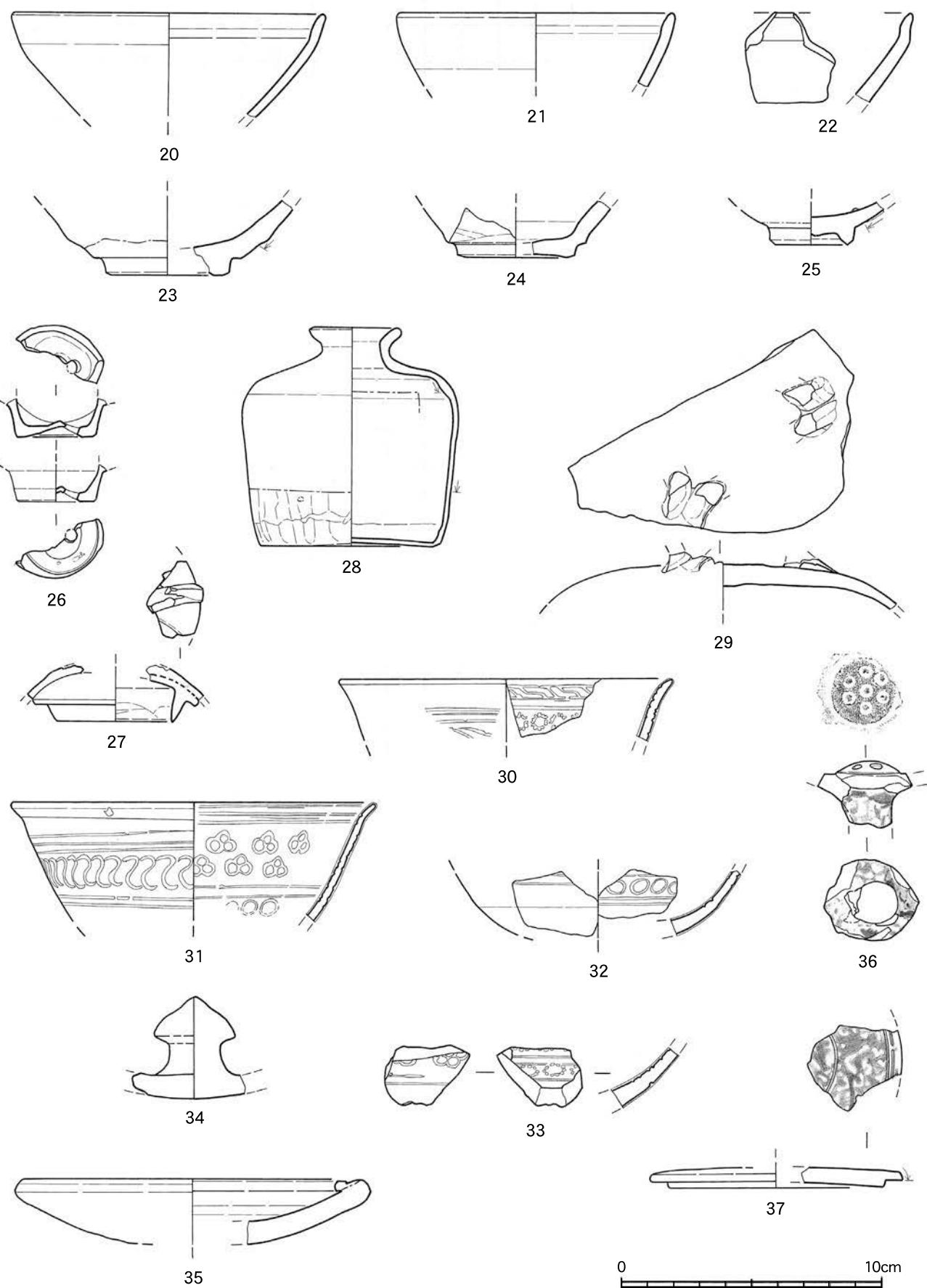
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第35図 図版32 21	黒釉陶器	碗	口～胴	10.8 — —	天目茶碗。全体的に直線状に開き、口縁は胴上部で角度を軽く変えて立たせる。口縁の外反は弱い。器表には油滴が見られる。素地は灰色の粗い微粒子で黒色粒子が見られる。黒褐色の釉を施す。	東南部
第35図 図版32 22	黒釉陶器	碗	口～胴	—	天目茶碗。全体的に直線状に開き、口縁は胴上部で角度を変えて立てたせる。素地は灰白色の粗い微粒子で気泡が見られる。器表は剥離が激しく、本来の釉色を窺うことができない。	H-6
第35図 図版32 23	黒釉陶器	碗	胴～底	— — 4.8	天目茶碗。高台は低く内割りは浅い。内外面共に禾目が見られる。素地は灰白色の微粒子で白色砂粒、気泡が見られる。黒褐色の釉が内外面とも見られるが胴下部から外底面にかけては露胎となる。とくに内底面には釉が溜まる。	表土
第35図 図版32 24	黒釉陶器	碗	胴～底	— — 4.6	天目茶碗。高台は低く内割りは浅い。素地は淡黄色の微粒子で微細な気泡が多く見られる。黒褐色の釉が内外面ともに均一に施される。油滴が全体的に見られ、胴下部から外底面にかけては露胎となる。	表土
第35図 図版32 25	灰釉陶器	碗	胴～底	— — 2.9	小振りな碗。高台は低く内割りは浅い。素地はやや粗く白・黒色粒子が見られる。透明の灰釉が内外面に施され。外胴下部から外底面にかけては露胎となる。内外面共に細かい貫入が見られる。	東南部
第35図 図版32 26	無釉陶器	蓋	甲～端	外径 13.8	凹状の蓋で中央に孔が穿たれている。素地は暗赤褐色の微粒子。一部に溶着物が見られる。	造成層
第35図 図版32 27	無釉陶器	蓋	甲～端	—	甲部に突帯の付いた蓋。また線刻も見られる。かかりは垂直に立ち上がる。素地はにぶい赤褐色の微粒子。	造成層
第35図 図版32 28	灰釉陶器	瓶	口～底	外径 9.75 内径8.2	薄手の、頸部の短い瓶。灰白色の微粒子で白・黒色粒子が見られる。灰釉を外面と内面上部に薄く施し、内面下部と胴下部は露胎となる。	造成層
第35図 図版32 29	中国産陶器	蓋	甲	—	撮みが付く蓋。素地は灰白色の粗い粒子で黒色粒子、気泡が見られる。暗赤褐色の釉を内外面に薄く施す。	造成層
第35図 図版32 30	高麗青磁	碗	口～胴	13.0 — —	口縁部外面直下に3条の圈線、内面には略化された雷文帶とその下にスタンプによる花文を横位に連続して配置させる。素地は灰色の微粒子で白色の粗粒子が僅かに見られる。釉は内外面共に薄く施す。	東南部
第35図 図版32 31	高麗青磁	碗	口～胴	14.2 — —	外体面には圈線と「S」字状の文様を横位に連続させる。内体面には圈線と三円弧文を横位に二段、配する。素地は灰色の微粒子で気泡が見られる。釉は内外面共に薄く施す。	東西階
第35図 図版32 32	高麗青磁	不明	不明	—	外体面には圈線、内体面には圈線と円弧文を横位に配する。素地は灰色の微粒子で白色砂粒、気泡がわずかに見られる。釉は内外面共に薄く施す。	東南部 西端
第35図 図版32 33	高麗青磁	不明	不明	—	外体面には界線と六円弧文、内体面には圈線とスタンプによる花文を横位に連続して配する。素地は灰色の微粒子で白・黒色の粗粒子が見られる。釉は内外面共に薄く施す。	東南部
第35図 図版32 34	半練土器	蓋	撮み	—	宝珠状の撮み。上面の器壁は滑らかであるが、下面には凹凸が見られる。素地は淡赤橙色のやや粗い粒子で白・褐色粒子が見られる。	美福門
第35図 図版32 35	半練土器	蓋	端	外径 13.8	端部を折り曲げ、そのまま先端に丸味を持たせて成形する。丸味のある先端近くに丸彫りの沈線を施す。下面には横位の成形痕が見られる。器壁は浅黄橙色で褐色粒子が見られる。素地は灰白色のやや粗い粒子。	造成層
第35図 図版32 36	ベトナム産 陶器	蓋	甲	—	小型の蓋。界線の中に竹管で刺突した文様が見られる。花芯と思われる。上下面共に褐釉が薄く施される。素地は灰白色の微粒子。	H-6 洞穴内
第35図 図版32 37	ベトナム産 陶器	蓋	端	外径 9.75 内径8.2	円盤状の蓋で上面に界線が2条見られる。褐釉が斑状に施される。下面是露胎となる。素地は灰白色の微粒子で気泡が見られる。	造成層



第33図 その他の輸入陶磁器 (1) 瑠璃釉 1~3 銅綠釉 4~6 紅釉 7,8 翡翠釉 9~11



第34図 その他の輸入陶磁器（2）釉裏紅 12 柿釉染付 13.14 彩釉陶器 15 白地鉄絵 16  
ベトナム産染付 17.18 緑釉鉄絵 19



第35図 その他の輸入陶磁器（3） 黒釉陶器 20~24 灰釉陶器 25,28  
 無釉陶器・朱泥 26,27 中国産陶器 29 高麗青磁 30~33  
 半練土器 34,35 ベトナム産陶器 36,37

## 第7節 本土産陶磁器

染付、色絵、銅緑釉、白釉陶器、褐釉陶器、黒釉陶器、印判手、銅版転写が確認された。産地は肥前系、関西系、南九州系が見られ、時期は17世紀～近代まで見られる。これらの資料が沖縄県内でまとまって確認されるのは首里城以外では稀である。一部、二次的に火を受けているものも見られ、年代を想定する上で格好の材料となり得るが、資料の大半が攪乱層からの出土である点のみ惜しまれる。

染付(第36・37図1～16)

今回は16点を図示した。ほとんどの資料は肥前系で、中には1のような波佐見焼、13のような有田焼と思われるものも確認されている。器種は碗、皿が主でその他には猪口、蓋、瓶が確認されている。時期は概ね17世紀から近代にかけてと幅広い。

色絵(第37・38・39図17～35,39)

今回は20点図示した。肥前系と関西系に大別することができる。肥前系には有田焼と思われるものが確認されており、23のように呉須と上絵で構成されるものも少数ながら見られる。時期は18～19世紀頃で、かなりまとまった数で出土している。関西系では京焼と思われるものが確認されている。とくに39のように、外底面に「樂」の字が印刻されたものが出土しており、その形から樂焼第五代に当たる宗入(1691～1708年)の作と考えられる。他の資料は概ね18～19世紀頃に収まる。とりわけこれらの色絵は2次的に火を受けており、かつて首里城内で遭った火災の痕跡を示す資料とも捉えることができる。ある程度時期が特定することができる39と文献資料を整合させると1709年正殿・南殿・北殿焼失に伴うものと考えられる。但し、これらは東のアザナ出土の資料でかつ、ほとんどが攪乱層からの出土であるので正殿・南殿・北殿焼失に伴うという決定的な資料として扱うことはできない。

銅緑釉(第39図36～38)

今回は3点図示した。全て肥前系で17～18世紀の時期に収まる。全て小片での確認であり、器種は直口碗のみである。37のように生産地は不明で近代まで下がるものも見られる。

白釉陶器(第39図40～42)

今回は3点図示した。何れも小片のため、色絵若しくは染付の破片資料である可能性も考えられる。肥前系と関西系、瀬戸・美濃系が確認されており、器種は主に碗、皿である。中には40のように鬢盥や41の段重といったものも見られる。概ね17～18世紀の時期に収まる。

褐釉・黒釉陶器(第39図43～47)

今回は5点図示した。主に薩摩焼系に入り、壺などの大型製品が多く見られる。壺以外に鉢や摺鉢が確認されている。46のように、口縁部に貝の目跡が見られたり、胎土には白色の砂粒が粗粒子を大量に含むものがある。また45,46のように口縁部を襞状に成形するものも見られる。時期は概ね17～18世紀である。

印判手・銅版転写(図版37-65～75)

今回は図版で11点を報告する。器種は碗、皿、香炉が確認されており、過去において首里城内並びにその周辺から出土したものと大差無い。今回は最も残存量が良いものを掲載した。時期は近代が主で肥前系砥部産、瀬戸・美濃系と考えられるものが出土している。

第33表 本土産青磁・染付出土状況一覧(肥前)

器種 分類 出土地	青磁	染付																									合計			
	不明	碗				小碗			皿			壺	猪口		蓋		瓶		印判		印判		小碗		皿				香炉	
		胴部	口底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口底部	口縁部	口縁部	縁部頂部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	口縁部	口縁部	縁部	底部	印判				
1 美福門		1		1	2	1			1	1									3	4	4		1	1	1	1	1	1	24	
2 洞穴内						1																							1	
3 南力ベ下					2											3													5	
4 G-10																													0	
5 H-5																			1				1						2	
6 I-4																													0	
7 東南部																			1	1								1	1	4
8 東南部北側						1														1									1	3
9 東南部西側				1	1							1																	3	
10 東南部西端				1																									1	
11 東南部東側									1																				1	
12 東西階	1				1																								2	
13 東南北穴								2				1					1												4	
14 造成層カク			6	3	2	1	1			1	2	1	1	2				2	1	1	1						1	26		
15 表土						3																							1	4
16 表採		1	1		1											1		1											5	
合計	1	2	9	11	7	2	1	3	1	2	1	2	2	1	3	3	1	4	9	6	1	2	2	1	1	1	1	1	85	

第35表 本土産陶器出土状況一覧

器種 分類 出土地	京焼			関西系焼			備前焼		唐津焼			薩摩焼						本土産陶器										
	碗		香炉	皿		香炉	摺鉢		椀	碗		壺	摺鉢	鉢	器種不明	褐釉	薩摩	碗	壺	蓋	合子	合計						
	皿	錦手		錦手	錦手		銅綠釉	銅綠釉		口縁部	底部	底部	口縁部	底部	口縁部	胸部	底部	口縁部	胸部	底部	口縁部	胸部	底部	口縁部	胸部	底部	蓋	蓋
	口縁部	口底部	口底部	口底部	口底部	口底部	底部	底部		口縁部	底部																	
1 美福門																1		1	1	16							19	
2 洞穴内																											0	
3 南カベ下																											0	
4 G-10																	1										1	
5 H-5																											0	
6 I-4																											0	
7 東南部																		1			5						6	
8 東南部北側																					1						1	
9 東南部西側																				11	1	1				13		
10 東南部西端																											0	
11 東南部東側																											0	
12 東西階																											0	
13 東南北穴																		1									1	
14 造成層	1	3	2				2	2	1	1	1		1	1	2			1	1	1	7	1			1	1	29	
15 表土																					3						3	
16 表採				1		1	1																			3		
合計	1	4	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	2	1	2	2	1	2	1	43	1	1	1	1	1	76	

第34表 本土産白磁 染付出土状況一覧 (瀬戸美濃焼)

器種 分類	白磁								染付																										合計								
	小碗				皿				杯				器種不明				碗				皿				小碗				小鉢		杯		角杯		瓶		合子		急須		蓋		
	印判	色絵	プリント	版	版	版	版	銅版	転写	印判	プリント	銅版	転写	青磁	銅版	転写	青磁	プリント	銅版	転写	青磁	プリント	銅版	転写	青磁	合子蓋	急須	蓋															
出土 地	口縁 部	底部	口縁 部	底部	不明	口縁 部	底部	底部	口 縁 部	底部	底部	口 底 部	底部	胴 部	胴 部	底部	口 底 部	底部	口 縁 部	底部	底部	口 底 部	底部	胴 部	口 縁 部	底部	口 底 部	底部	口 縁 部	底部	口 底 部	底部	口 縁 部	底部	つまみ 甲部								
1 美福門	1		1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2		1		1	1	1	2	2	3	2	1	1	2		1	1	1	2	1	1	1	40								
2 洞穴内																																		0									
3 南力ベ下																																		0									
4 G-10																																		0									
5 H-5																																		0									
6 I-4																																		1									
7 東南部	1		1							1																								4									
8 東南部北側																																		0									
9 東南部西側																																		1									
10 東南部西端																																		0									
11 東南部東側																																		0									
12 東西階																																		0									
13 東南北六																																		0									
14 造成層										1																								2									
15 表土																																		4									
16 表採																																		0									
合 計	1	1	1	1	2	1	1	1	1	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	3	3	3	1	1	2	1	1	1	1	1	53										

第36表 本土產色繪出土狀況一覽

器種 分類	碗		有田		皿	杯	香炉	蓋物	蓋		合子 蓋	合計
			碗									
出 土 地	口 緑 部	脣 部	口 緑 部	脣 部	底 部	口 緑 部	口 緑 部	甲 部	緑 部	つまみ 緑 部	緑 部	
1 美福門	1						1		1			3
2 東南部		1	1							1		3
3 東南部北側								1				1
4 東西階												1
5 東南北穴	1											1
6 造成層	2	1		1					1	1		6
8 表桿					1							1
合計	4	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	10

第37表 本土産陶磁器観察一覧( 1 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第36図 図版33 1	染付	碗	口～底	13.8 7.4 5.2	直口碗。外体面には略化した唐草文と高台外面に圈線、内底面には界線と筆描きの文様、略化した竜文と珠が見られる。17世紀前半頃で波佐見焼か。	表採
第36図 図版33 2	染付	碗	口～胴	12.2 — —	薄手の直口碗。外体面に薄が描かれる。器面にはあばたが少し見られる。肥前系で17世紀後半。	東南部西端
第36図 図版33 3	染付	碗	口～胴	11.6 — —	薄手の直口碗。口縁部内面直下には四方襷文、外体面には梅樹が描かれる。外面には細かい貫入と内面には粗い貫入が見られる。肥前系で18世紀後半頃。	造成層
第36図4 図版33 7	染付	碗	胴～底	— — 4.0	碗底部。高台は「ハ」の字状に開き、胴部へと緩やかに立ち上がる。内底面と外体面に文様が見られる。肥前系で19世紀前半。	美福門
図版33 5	染付	碗	口～胴	— — —	口縁部が直口する小振りな碗。外体面には草文、内面口縁部近くには四方襷文が見られる。肥前系で18世紀前半頃。	美福門
図版33 6	染付	碗	口	— — —	直口碗。外面全体に文様が見られるが文様構成は不明。内面口縁部近くには四方襷文が見られる。肥前系で18世紀末～19世紀前頃。	美福門
第36図5 図版33 8	染付	碗	胴～底	— — 3.3	碗底部。内底面には略化した十字花文、外体面には格子文とその下部、高台近くに「○」「×」の文様を配する。肥前系で1780年～1810年頃。	東南部西端
図版33 9	染付	碗	胴～底	— — —	碗底部。内底面には荒磯、外体面には波文が見られる。高台外面に「○」「×」の文様を配する。肥前系で18世紀前半頃。	造成層
図版33 10	染付	碗	胴～底	— — —	碗底部。内底面中央に菱形の文様が見られる。疊付には砂粒が付着する。外面に粗い貫入が見られる。肥前系で19世紀。	表採
図版33 11	染付	碗	胴～底	— — —	碗底部。高台径は小さく、小振りな碗と思われる。外体面に山水図か。肥前系で19世紀前半頃。	表採
図版33 12	染付	皿	口	— — —	直口皿。内体面には草文、外体面の口縁部近くにも墨弾きの文様が見られる。口唇部には褐釉が施される。肥前系で17世紀後半頃。	造成層
図版33 13	染付	皿	口	— — —	口縁部が直口する薄手の輪花皿。内外面共に唐草文が見られる。有田焼で17世紀末。	造成層
第36図6 図版33 4	染付	碗	口～底	10.6 6.0 4.5	薄手の外反碗。口縁部内面直下には中央で回転が反転する雷文を配する。内底面には松葉、薄を組み合わせた文様。外体面には華唐草文と七宝文を配する。肥前系で1820～1860年頃。	美福門
第36図7 図版33 14	染付	碗	口～底	14.5 4.5 8.7	器高が低くやや厚手の直口碗。外体面には唐草文、内体面には牡丹が配される。内底面には五弁花文、外底面には界線とその中に四角の枠内に渦巻文が見られる。肥前系で18世紀前～中頃。	造成層
第36図8 図版33 15	染付	皿	口～底	— — —	口縁部が直口する輪花皿である。内外面共に文様が見られるが小片のため全体構成は不明。肥前系で19世紀中頃。	東南北穴
第36図9 図版33 16	染付	皿	口～底	— — —	口縁部が直口する輪花皿である。口縁部外面には雲文と内面には四方襷文が見られる。内体面にも文様が見られる。肥前系で18世紀末～19世紀前頃。	東南西側
図版33 17	染付	皿	口～胴	— — —	口縁部が外反する薄手の皿。外体面には型紙摺りの梅花文が見られる。肥前系で19世紀中頃。	造成層
図版33 18	染付	皿	口～胴	— — —	薄手の直口皿。外体面には唐草文とその上部に三角文を組み合わせた文様が見られる。内面の口縁部近くには雷文が見られる。肥前系で1820～1860年頃。	美福門
第36図10 図版34 19	染付	猪口	口～底	7.5 5.5 5.0	筒形の蓄麦猪口。外体面には藤花とその下部には草文が見られる。胴部は「ハ」の字状に開く。肥前系で18世紀前半頃。	造成層

第38表 本土産陶磁器観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第36図11 図版34 20	染付	猪口	口～底	8.2 6.95 1.6	筒形の蕎麦猪口。外体面には唐草文が見られる。但し、呉須が滲み不明瞭である。口縁部外面直下には四方襷文が見られる。内底面には界線と五弁花文が見られる。肥前系で18世紀中～後半頃。	造成層
第37図12 図版34 21	染付	蓋	甲～端	10.4 3.1 4.4	上面觀が環状となる撮みを有する蓋。甲部は梅花文と松葉文を交互に配する。裏面は端部に四方襷文と中央に界線と梅花文が見られる。肥前系で18世紀後半～19世紀頃。	造成層
第37図13 図版34 22	染付	蓋	甲～端	8.4 7.4 2.5	側面が「へ」の字状となる撮みを有する蓋。甲部には丸文と松葉文がそれぞれ配される。身受け部のみ露胎となる。化粧品入れの蓋か。肥前系で18世紀末～19世紀頃。	造成層
第37図14 図版34 23	染付	瓶	胴～底	— — 5.0	高台は低く、内割りは浅い。外体面には文様が見られるが、全体構成は不明。肥前系で17世紀後半。	東南北穴
第37図15 図版34 24	染付	瓶	口～胴	5.9 — —	頸部と胴上部には圈線が見られる。内面は露胎となる。肥前系で17世紀後～18世紀前頃。	造成層
第37図16 図版34 25	染付	瓶	胴	— — —	梅花文と松葉文が外体面に配される。やや厚手の瓶であり肩は張らない。17世紀後半。	南カベ下
第37図17 図版34 26	色絵	碗	口～胴	9.6 — —	直口口縁の小振りな碗で、外体面には円内に牡丹唐草文、そして円の外には渦文を埋める形で配される。口縁部内面直下には四方襷文。18世紀前半で有田焼か。	造成層
第37図18 図版34 27	色絵	碗	口～胴	8.6 — —	直口口縁の小振りな碗で、外体面には朱で渦巻文を描き、その内部に呉須で文様を配する。口縁部外面下部には四方襷文。18世紀後半頃。	造成層
図版34 28	色絵	碗	口～胴	— — —	胴部の立ち上がりが急な碗。呉須で柳と山水を描き、その上に朱を上絵付けする。小片のため文様の全体構成は不明。肥前系で18世紀後半頃。	表採
第37図19 図版34 29	色絵	碗	口～胴	9.2 — —	上絵は剥落しているが、外面胴部に「三更明月 微風□□」の漢詩を読み取ることができる。19世紀頃で近代まで下がる可能性有り。肥前系か。口縁部に僅かな抉りが見られる。	美福門
図版34 30	色絵	皿	口～胴	— — —	直口皿。内面は朱の白抜きで文様を描くが全体構成は不明。外体面は唐草文か。有田焼で18世紀後半頃。	美福門
第37図20 図版34 31	色絵	皿	底	— — 9.0	高台は低くやや内傾する。内底面に葉文、外面には圈線が見られる。18世紀後半で肥前系か。	表採
第37図21 図版34 32	色絵	香炉	口～胴	9.8 — —	外体面に文様が見られるがほとんど上絵は剥落している。口縁部は内面に「く」の字状に折れる。18世紀頃か。	東南北側
第37図22 図版34 33	色絵	蓋	端	13.4 — 12.0	甲部には呉須で雲文、そして釉上には上絵で菊花文を配する。但し、ほとんど上絵は剥落している。身受けは露胎で細かい砂粒が付着する。	造成層
第37図23 図版34 34	色絵	蓋	甲～端	15.0 2.6 13.4	甲部には呉須と上絵で構成される文様が見られる。上絵は剥落しているが葡萄文が全体的に配される。	東南部
第37図24 図版34 35	色絵	蓋	端	13.4 2.65 12.0	甲部に呉須と上絵による文様が見られる。小片のため文様構成は不明。上絵は剥落している。肥前系で19世紀頃。	造成層
第38図25 図版35 36	色絵	碗	口～底	9.7 5.85 3.6	薄手の直口碗。外体面には金泥で三巴文が配される。内外面共に細かい貫入が見られる。全体的に2次焼成を受けている。京焼で18世紀前～中頃。	造成層
第38図26 図版35 37	色絵	碗	口～底	9.7 7.85 4.6	口縁部は一端窄まり、外反する。内外面共口縁部近くには瑠璃釉が施される。全体的に2次焼成を受けており、釉が剥がれ、白化粧が現れる。器面は剥落が激しい。18～19世紀頃。	造成層
第38図27 図版35 38	色絵	碗	口～底	10.0 7.8 4.7	口縁部は外反し、高台は低い。全体的に瑠璃釉が施されるが、全体的に2次焼成を受けているため、剥落が激しい。18～19世紀頃。	表採

第39表 本土産陶磁器観察一覧(3)

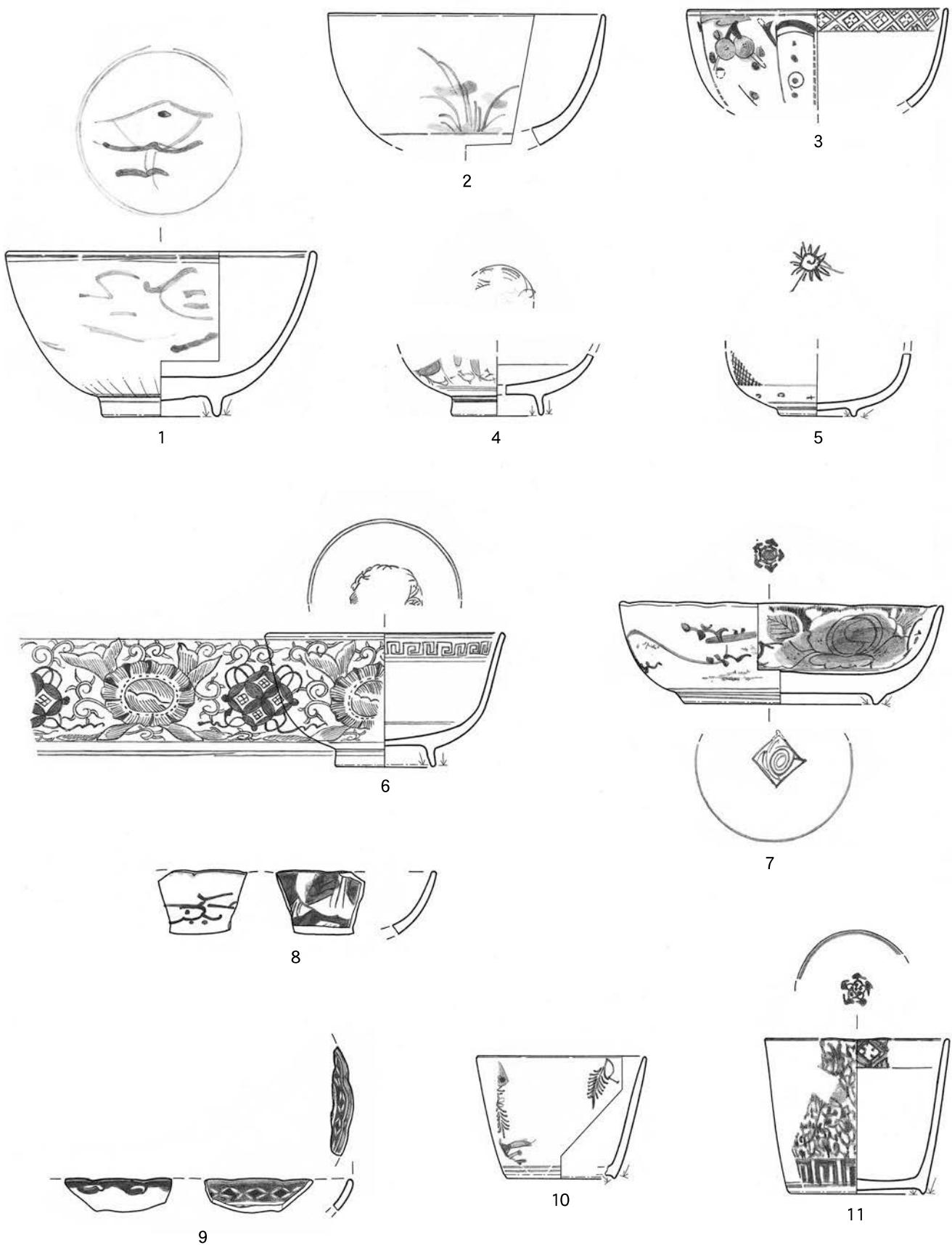
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第38図28 図版35 39	色絵	碗	口～底	10.0 7.85 4.85	口縁部は外反し、高台は低い。全体的に2次焼成を受けており、釉が剥がれ、白化粧が現れる。僅かに口縁部内外面に瑠璃釉が残存する。18～19世紀頃。	造成層
第38図29 図版35 40	色絵	皿	口～胴	9.5 — —	口縁部が直口する薄手の皿。内体面には草文を上絵付けで描く。内外面共に細かい貫入が見られる。関西系で18世紀頃。	造成層
第38図30 図版35 41	色絵	皿	口～底	12.7 — —	口縁部が内側に折れたり外側へ開いたりを交互に繰り返す変形皿。上面から見ると口縁部が波状となる皿。内底面には蔓状の植物と朱で銘款が描かれる。関西系で18世紀頃。	造成層
第38図31 図版35 42	色絵	皿	口～底	— 2.95 —	輪花形の角皿。内底面には上絵付けが見られるが、2次焼成が著しいため不明瞭である。内外面共に貫入が見られる。関西系で18世紀頃。	表採
第38図32 図版35 43	色絵	皿	口～胴	12.0 — —	口縁部が直口する薄手の皿。外体面には緑、茶褐色の上絵が見られる。器表にはあばたが多く見られる。京焼で18～19世紀頃。	表採
第38図33 図版35 44	色絵	皿	胴～底	— — 3.9	高台は低く、径も小さい。内底面全体に上絵で梅花文が描かれる。全体に2次焼成を受けている。内外面共に貫入が見られる。関西系で18世紀頃。	造成層
第38図34 図版35 45	色絵	皿	胴～底	— — 4.1	内底面には水上の蓮葉が全体的に朱、緑、瑠璃色の上絵で描かれる。内外面共に細かい貫入が見られる。一部、2次焼成を受ける。関西系で18世紀頃。	造成層
第38図35 図版35 46	色絵	香炉	口～底	10.1 8.15 5.8	外体面には笹葉が上絵で描かれる。全体に2次焼成を受けている。内外面共に細かい貫入が見られる。京焼で18世紀中頃。	造成層
第39図39 図版36 54	色絵	皿	口～底	15.3 2.45 10.7	底面が広く、胴部は垂直に立ち上がる器高の低い皿。高台は低く、高台径は広い。内底面に鷺と流水、オモタカが陰刻で描かれる。内底面には楽焼の5代「宗入」(1691～1708年)の刻印に類似した丸に「樂」の銘款が見られる。全体的に2次焼成を受けており、器面の剥落も激しい。細かい貫入が内外面共に見られる。	造成層
第39図36 図版36 47	銅緑釉	碗	口～胴	10.2 — —	直口碗で口縁部が若干、玉縁状となる。やや小振りで、外面のみ銅緑釉が薄く施される。肥前系で17世紀後～18世紀前頃。	造成層
第39図37 図版36 48	銅緑釉	碗	口～胴	10.2 — —	直口碗。外面のみ銅緑釉が施され、内面は透明釉が薄く施される。肥前系で17世紀後～18世紀前頃。	造成層
図版36 49	白釉陶器	碗	口～胴	— — —	口縁部が直口する小振りな碗。内外面共に輻輳成形痕が残る。施釉は雑で一部、露胎となる。肥前系で17世紀末～18世紀前頃。	造成層
図版36 50	黒釉陶器	鉢	口～胴	— — —	内彎鉢。黒釉を内外面共に薄く施す。胎土は褐色の粗い粒子で白色粒子が多く混入する。楽焼で17世紀～18世紀頃。	造成層
第39図38 図版36 51	銅緑釉	碗	底	— — 4.4	やや小振りで、外面のみ銅緑釉が薄く施される。風化により釉の剥落が激しい。肥前系で17世紀後～18世紀前頃。	C-10
図版36 52	白釉陶器	碗	胴～底	— — —	高台は低く、径は小さい。内外面共に白釉を薄く施し、畳付のみ露胎となる。一部に粗い貫入が見られる。18世紀頃で肥前系か。	表採
図版36 53	白釉陶器	碗	胴～底	— — —	高台は低く、径は小さい。内外面共に白釉を薄く施し、高台近くから外底面にかけて露胎となる。全体に細かい貫入が見られる。京焼で17世紀末～18世紀前頃。	東西階
第39図40 図版36 56	白釉陶器	鬚盥	口～底	4.9 2.25 5.0	文様は見られない。内外面共に細かい貫入が見られる。外底面のみ露胎となる。瀬戸・美濃系。	東南部西側
第39図41 図版36 57	白釉陶器	段重	胴～底	— — 10.6	高台は低く、畠付は水平である。器壁は薄く特に底部は薄い。外底面に回転輻輳成形痕が見られる。高台外側から外底面にかけてと内底面中央部が露胎となる。関西系で18世紀頃。	造成層

第40表 本土産陶磁器観察一覧(4)

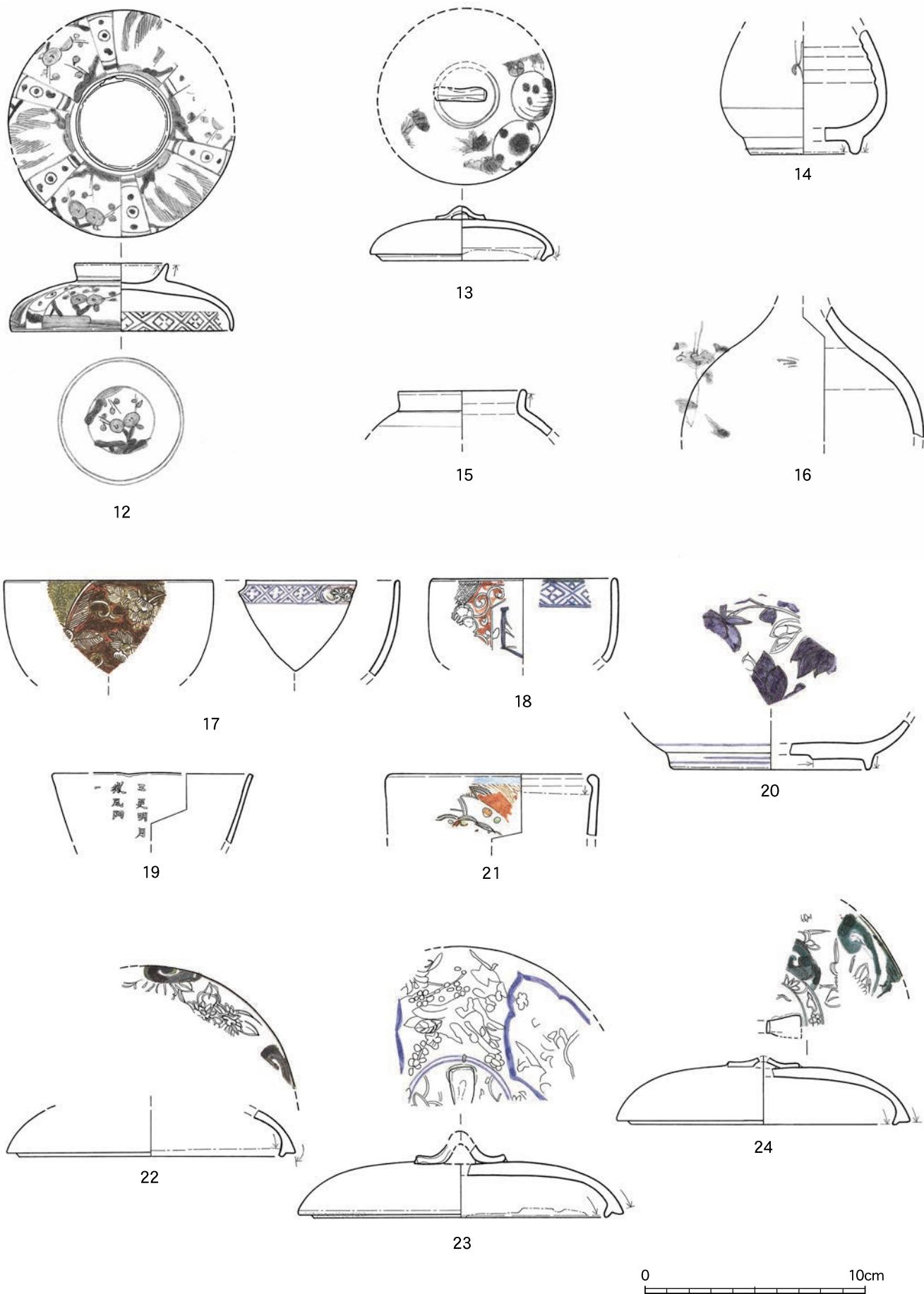
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 高台径	観察事項	出土地
第39図42 図版36 55	白釉陶器	皿	口～底	13.4 3.10 5.4	口縁部が屈曲する変形皿。内底面には界線状に段差が見られ、外底面には長円内に「岩倉」の銘が書かれた印刻が見られる。底部のみ露胎となり、全体的に釉を薄く施す。内外面共に細かい貫入が見られる。全体的に2次焼成を受けている。17世紀後～18世紀前頃で京焼か。	造成層
第39図43 図版36 59	褐釉陶器	壺	口	15.4 — —	口唇部が水平になり、口縁部内側端部が若干、突出する。胎土は褐色でやや粗く、白色粒子・砂粒、気泡が多く見られる。薩摩焼か。	東西北穴
第39図44 図版36 60	褐釉陶器	壺	口	18.0 — —	口唇部が水平になり、口縁部外側には折り込みが見られる。胎土は明褐色の微粒子で白色砂粒と気泡が多く見られる。器表にも白色砂粒が浮き出しており、霞状の文様に見える。薩摩焼で18～19世紀頃。	美福門
第39図45 図版36 61	黒釉陶器	壺	口～胴	26.2 — —	口唇部が水平となり、口縁端部が襞状となる。胎土は黒色でやや粗く、白色の粗粒子、気泡が多く見られる。釉は外面に施され、内面は露胎となる。薩摩焼。	美福門
第39図46 図版36 62	褐釉陶器	壺	口	32.2 — —	口唇部が水平となり、口縁端部が襞状となる。口唇部に貝の目跡が残る。胎土は褐色の微粒子で白色砂粒と大きい気泡が見られる。薩摩焼。	造成層
図版36 58	褐釉陶器	鉢	口～底	— — —	植木鉢。多角形の筒形で器壁は厚い。外面から内面の胴上部にかけて藁灰釉が全体的にやや厚く施される。19世紀～近代。	東南部北側
第39図47 図版36 63	黒釉陶器	摺鉢	口～底	35.9 18.3 17.2	口唇部が水平となり、外側へ広がって鍔状となる。胴部の立ち上がりは急でやや膨らみを有する。内体面には摺り目が密に施される。釉は外面胴上部と内面の口縁部近くのみ薄く施される。外面には回転成形痕が明瞭に残る。薩摩焼。	美福門
図版37 64	染付	碗	口～底	7.1 3.85 2.9	口縁部が直口する小碗。内外面共に仙芝祝寿文が配され、内底面には渦文が見られる。不透明の釉を内外面共に薄く施し、口唇部並びに畳付から外底面にかけては露胎となる。	美福門
図版37 65	印判手	碗	口～底	8.4 4.4 3.6	口縁部が外反する小碗。外体面のみの文様が見られる。	美福門
図版37 66	印判手	碗	口	14.2 — —	外反碗。外面に点描の地文。内体面は口縁部近く、外体面は全体に文様が見られる。	美福門
図版37 67	印判手	碗	口～胴	10.2 — —	直口碗。外面に点描の地文。内体面は口縁部近く、外体面は全体に文様が見られる。	東南部
図版37 68	印判手	碗	口～底	10.2 6.25 3.8	外反碗。外面に菱形の地文。内面は口縁部近くに三角文が配される。	美福門
図版37 69	印判手	碗	口～胴	9.8 — —	直口碗。外面に点描の地文が配され、白抜きで円形の窓が見られる。その中に丸文を描く。	美福門
図版37 70	印判手	碗	口～底	8.6 3.5 3.2	外反碗。外体面と内底面に文様が見られる。口唇部には褐釉が施される。	美福門
図版37 71	印判手	碗	底	— — 4.6	外体面から高台脇まで文様が見られる。内底面は界線のみ見られる。畠付のみ露胎となる。	東南部
図版37 72	銅版転写	皿	口～底	10.5 2.2 6.4	直口皿。内面は全体的に文様が見られる。外面は無文。器表にはあばたが見られる。	美福門
図版37 73	銅版転写	皿	口～底	12.4 2.3 6.4	口縁部が若干、玉縁状となる直口皿。内面は全体的に文様が見られる。	美福門
図版37 74	印判手	香炉	胴～底	— — 10.8	筒形の香炉で、外面のみ文様が見られる。内面は全体的に露胎となる。	美福門
図版37 75	印判手	香炉	胴～底	— — 10.8	筒形の香炉で、器壁は厚い。特に底面の中央部は1cm近くの厚みを有する。外面のみ文様が見られる。内面は全体的に露胎となる。	表採

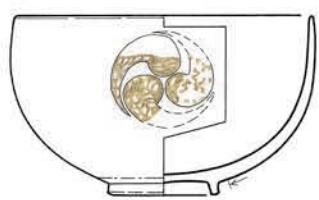


0 10cm

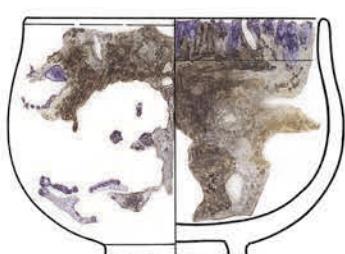
第36図 本土産陶磁器（1）染付



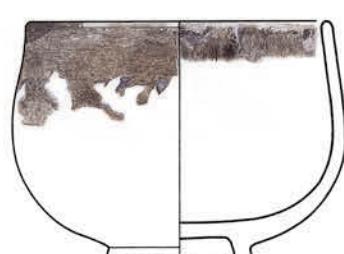
第37図 本土産陶磁器（2）染付 12～16 色絵 17～24



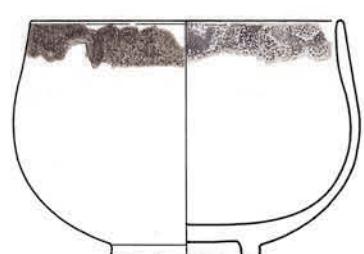
25



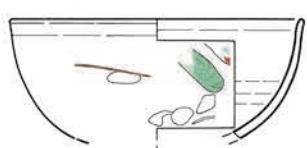
26



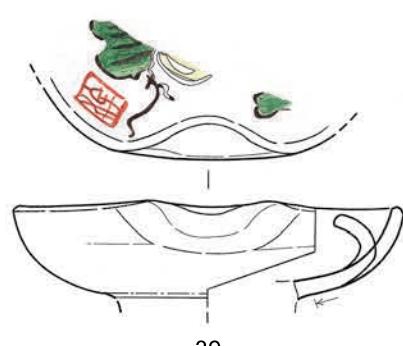
27



28



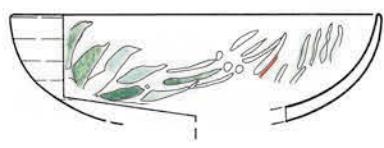
29



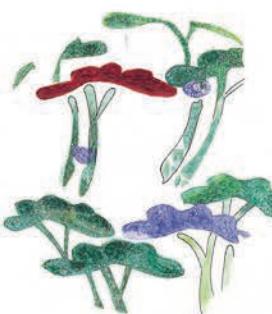
30



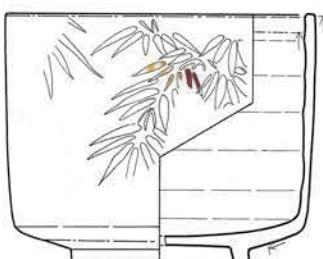
31



32



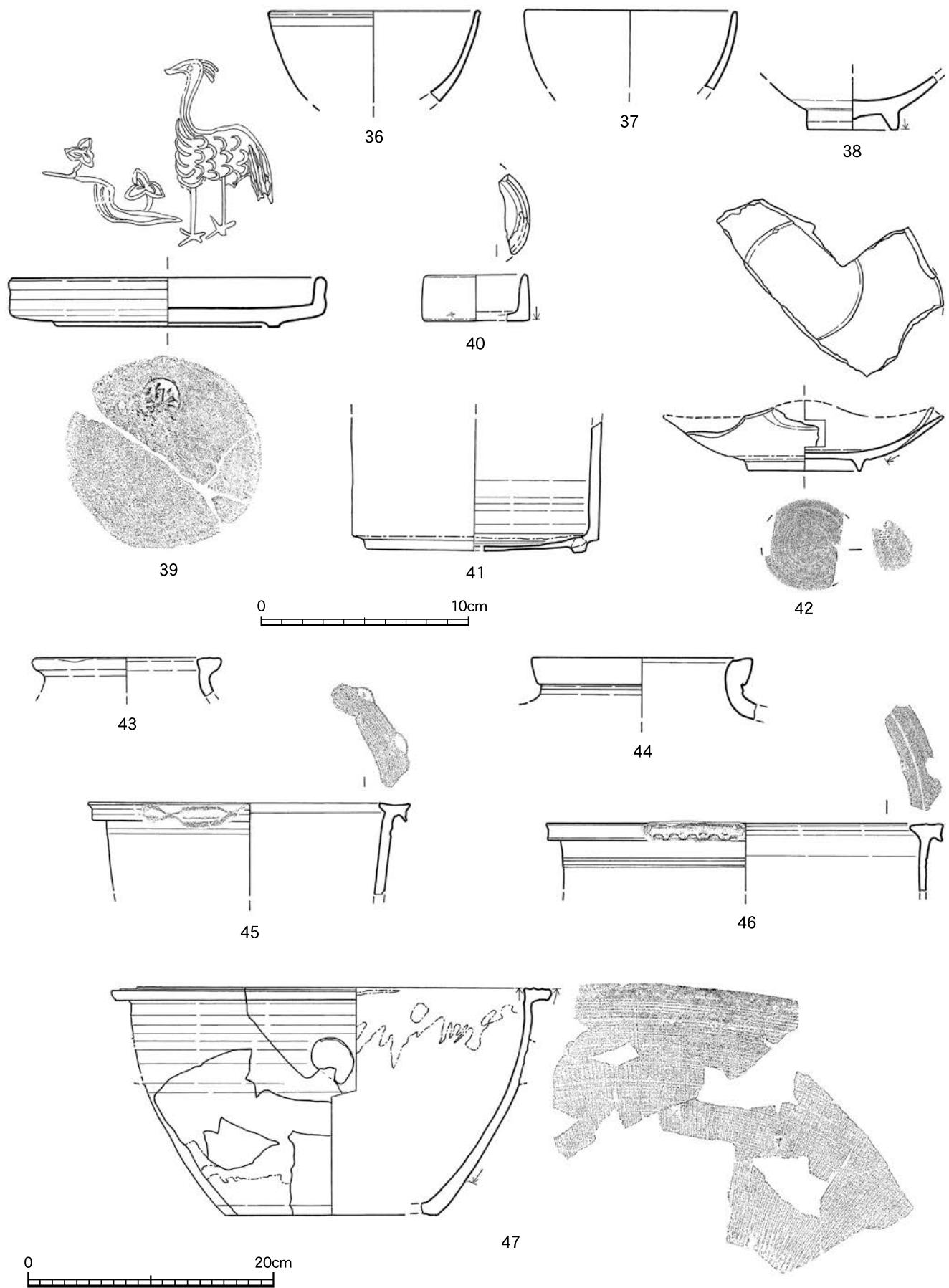
33



34

0 10cm

第38図 本土産陶磁器（3）



第39図 本土産陶磁器（4）

## 第8節 沖縄産施釉陶器

沖縄産陶器の中で「上焼（ジョウヤチ）」と称する器表に釉を施す焼物の一群である。器種としては碗、皿、鉢、蓋、瓶、急須、火取り、火炉、鍋、酒器を確認することができた。出土量は極めて多く、残存度の高いもの並びに特徴的なものを優先にして、各器種ごとに報告する。詳細については観察表に記した。

### 碗(第40図1～7・第41図14～18・図版40-32～39)

口縁部の外反する資料が大半を占める。口縁部が直口する資料も少数ではあるが確認されている。全形を窺うことができる資料3点3,17,18を図で掲げたが何れも小振りな碗である。1～4のように文様を配するものから、灰釉、黒釉を外面もしくは内外面共に施すものも見られる。文様は1のように花文を配するものや、2のように丸文を配するものが多く見られるが一方で、3や4で見られるように三巴文を配するものも見られる。

### 皿(第40図8・第41図20,21・図版40-40～43)

口縁部が直口するものと外反するものの2つに大別することができる。有文は8のみで三巴文、半菊花文等が内外面に配される。20のように底部が碁笥底でかなり小振りな直口口縁を有するものも見られる。41のみ内外面共に灰釉を施し、それ以外は透明釉を施す。43は高台径からやや小振りな皿になるものと考えられる。文様は線刻の上から施釉するものや、筆描きで絵付けされるものまで多様である。

### 鉢(第40図9～11・図版40-44・図版41-61)

9の口縁部が内彎するものと、高台径並びに口径が大きく、10のように口唇部が水平となるもの、61の高台は付かず、ベタ底となり、底部に孔が開けられるものの4つに大別することができる。11は10の高台に見られるように径がほぼ等しく、高台断面形が台形状となることから口縁部の形態も類似すると考えられる。

### 蓋(第40図12・第41図23～25,図版40-50)

23のように撮みが球形であり、端部が鍔状となるもの、25のように撮みの上面観が環状となり、端部が鍔状となるもの、24のように撮みの上面観が環状となり、端部に鍔が付かないものと3つに大別することができる。また、12のように線刻の上にコバルト釉を施すものも見られる。

### 瓶(第40図13・図版41-60)

胴部以下から底部にかけて形状が窺える資料と把手の2点を取り上げる。13は胴部は肩が張り、緩やかな角度を有して高台へ至る。高台は外側に開き、角度を変えて畳付へ至る。胴上部より上は破損しておりその形態を窺うことができないが、おそらく花生であったと考えられる。

### 急須(第41図22・図版40-45,46,49)

22のように口縁部から胴部にかけ、注口と把手が付くものが1点得られている。他は45の胴部資料、46,49の底部資料が確認されたが全体的に小片が多く、良好な資料は得られていない。

#### 火取(第41図27,28)

27のように口縁部が直口し、低い高台を有するものと28のように口縁部が内彎し、脚が3つ付くものの2つに大別することができる。何れも黒釉の単掛けであり、28は外面に釉垂れが見られる。

#### 灯明具(第41図29・図版39-29)

脚付きの灯明具の口縁部と思われる資料が1点確認されている。外面には丁寧な回転成形痕が見られる。

#### 把手(図版40-51)

黒釉単掛けの把手が1点確認された。断面形はカマボコ状となる。

#### 火炉(図版41-52,56)

胴部から底部にかけての資料2点が確認された。52は黒釉単掛けで円形の窓が見られる。

#### 酒器(図版41-56,57,58)

方言で「カラカラ」と呼称される酒器である。胴部資料が2点、底部資料が1点確認された。56はコバルト釉掛けで57はマンガン釉掛け、58は黒釉掛けである。

#### 壺(図版41-53,54)

黒釉の壺と褐釉の壺が3点確認された。器壁は共に薄く、内外面共に薄く釉が施される。何れも胴部から底部にかけての小片である。

#### 鍋(第41図26・図版40-47,48)

黒釉、褐釉、灰釉の鍋が各1点確認された。26は蓋を受けるために口縁が外反し、又注口が付く。47は口縁部に把手が付き48は胴上部で一担すぼまり、口縁部近くで「く」の字状に折れて外反する。

第41表 沖縄産施釉陶器出土状況一覧

第42表 沖縄産施釉陶器観察一覧( 1 )

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 底径 器高	観察事項	出土地
第40図 図版38 1	碗	口～底	13 6.4 6.6	外反碗。外体面には花文。全体的に粗い貫入が見られる。内底面には蛇の目釉剥ぎがなされる。	東南部西端
第40図 図版38 2	碗	胴～底	— — 6.9	外体面には印刻で丸文が描かれ、中に「弓」の字か。器表には砂粒が付着する。	美福門
第40図 図版38 3	碗	口～胴	9.1 — —	直口口縁の小振りな碗。外体面には朱で三巴文が見られる。内外面に透明釉を薄く施し、口唇部のみ錆釉が見られる。	東南北穴
第40図 図版38 4	碗	胴～底	— — —	内底面に緑色で三巴文が描かれる。蛇の目釉剥ぎがなされており、巴の尾の部分は露胎となり、頭の部分は透明釉が施される。	東南部北側
第40図 図版38 5	碗	口～底	12.4 6.15 6	外反碗で外面は黒釉、内面胴上部より内底面にかけて灰釉が施される。内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	東南北穴
第40図 図版38 6	碗	口～底	13.1 6.2 6.4	外反碗で外面は黒釉、内面には灰釉が施される。内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	東南北穴 東南西端
第40図 図版38 7	碗	口～底	10.0 5.0 3.7	小振りな外反碗。高台は高くないが外底面の内割りは深い。外面は黒釉が高台近くまで、内面には透明釉が内底面まで施される。内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	美福門
第40図 図版38 8	皿	口～底	14.6 4.2 8.4	直口口縁の輪花皿。高台は低く、外底面には段が見られる。外体面には三巴文が見られ、内体面には草文とその下にスタンプの半菊花が帶状に配される。	美福門
第40図 図版38 9	鉢	口～底	11 5.6 6.1	内彎鉢。高台は低く、僅かに外底面が上がる。外体面に朱で三巴文が見られ、その周囲に梅花が配される。内底面には青色の釉が付いた溶着物が見られる。文様は清代染付の影響を受ける。	造成層
第40図 図版38 10	鉢	口～底	19.4 10.3 7.9	口縁部が平坦となる鉢。内体面に青、褐色の飴釉で花文と縱位の筆書き文様を描く。内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	表土
第40図 図版38 11	鉢	胴～底	— — 10.0	外面には灰釉。内底面には黒釉で描かれた輪状の文様が見られる。外底面には墨書きがみられる。「御物方」か。	表土
第40図 図版38 12	蓋	甲～端	10.8 — 8.5	甲部の端近くには線彫りによる圈線と格子文。	美福門
第40図 図版38 13	瓶	胴～底	— — 7.7	外体面には花文が見られる。素地は粗く気泡が見られる。	東南部西側東南北穴
第41図 図版39 14	碗	口～底	14.7 6.5 6.5	外反碗。器表にはあばたが多く見られる。内底面には蛇の目釉剥ぎがなされる。全体的に白化粧の上に透明釉が施される。高台下部のみ露胎となる。	東南北穴
第41図 図版39 15	碗	口～底	13.05 5.9 6.7	直口碗。灰釉が内外面共に胴下部から口縁部にかけて施される。高台は削り出しで内割りは浅い。	東南北穴
第41図 図版39 16	碗	口～底	12.8 6.1 6.2	外反碗。内外面共に黒釉が薄く施される。内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。外面は胴下部から底部にかけて露胎となる。	東南北穴

第43表 沖縄産施釉陶器観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 底径 器高	観察事項	出土地
第41図 図版39 17	碗	口～底	8.9 4.3 4.1	口振りな直口碗。内外面共に黒釉が薄く施される。外面は胴下部から底部にかけて露胎となる。	東南北穴 東南部
第41図 図版39 18	碗	口～底	9.2 4.9 3.8	口振りな直口碗。畳み付けを除いて透明釉を施す。外体面に5条の圈線が見られる。	東南北穴
第41図 図版39 19	鉢	口～底	28.0 12.3 10.3	口唇部が鍔縁になる鉢。外面は黒釉で内面は白化粧の上に透明釉を施す。内面には細かい貫入が見られる。内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	美福門
第41図 図版39 20	皿	口～底	6.8 2.1 3.2	口縁部は直口し、底部は碁笥底となる。かなり小振りな皿で内外面共に透明釉が施される。畳み付けから外底面にかけて露胎となる。粗い貫入が見られる。	美福門
第41図 図版39 21	皿	口～底	13.7 4.1 7.0	外反皿。内外面共、白化粧の上に透明釉を施す。内底面には蛇の目釉剥ぎがなされる。細かい貫入が内外面共に見られる。	美福門
第41図 図版39 22	急須	口～胴	5.0 — —	注口、略三角形状の把手が付く。黒釉を外面は全釉し、内面は口縁部近くまで施す。	東南部西側
第41図 図版39 23	蓋	甲～端	7.4 2.9 5.9	球形状の撮みが付く蓋。端部は水平となる。甲部には黒釉、裏面は露胎となる。鍔の裏面に一部黒釉が付着している。	東南北穴
第41図 図版39 24	蓋	甲～端	11.4 3.5 —	平面形が環状となる撮みが付く。甲部は黒釉が施され、端部は露胎となる。内面は透明釉が施される。	造成層
第41図 図版39 25	蓋	甲～端	11.4 3.7 7.4	平面形が環状となる撮みが付く。甲部は黒釉が施され、輪状に釉が搔き取られる。裏面は露胎となる。	美福門
第41図 図版39 26	鍋	口～胴	14.0 — —	注口付きの鍋。口唇部が水平となり、胴部の張りは弱い。外面には灰釉のうえに白釉垂れが見られる。内面は白化粧の上に透明釉が施される。蓋受け部のみ露胎となる。	美福門
第41図 図版39 27	火取	口～底	9.7 9.05 6.8	口縁部が直口する。外体面に黒釉、内面も口縁直下まで黒釉が施される。器表にはあばたが見られる。	表土
第41図 図版39 28	火取	口～底	11.0 8.65 10.0	口唇部が水平となる火取り。外体面に黒釉、内面も口縁直下まで黒釉が施される。底部はやや盛り上がる。	表土
第41図 図版39 29	灯明具	口～胴	5.9 — —	口縁部が内彎する灯明皿。内外面共に黒釉が施される。下部に頸が付くものと思われる。	美福門
第41図 図版39 30	鉢	口～底	19.5 9.5 9.9	口縁部が内彎する鉢。外体面は黒釉、内体面から内底面にかけて透明釉が施される。内底面は蛇の目釉剥ぎされる。外面のみ釉垂れが見られる。	造成層
第41図 図版39 31	不明	胴～底	— — 13.3	胴球形となる器で胴上部に注口が付く。高台は低く、底部はやや盛り上がる。内底面には三日月状の突起が2つ見られる。内外面共に黒釉を薄く施す。器表にはあばたが多く見られる。	美福門
図版40 32	碗	口～胴	12.2 — —	外反碗で口唇部に黒釉が施される。外体面は白化粧の上に透明釉が施され、一部に青緑色の釉が施される。	東南北穴 南部西端

第44表 沖縄産施釉陶器観察一覧( 3 )

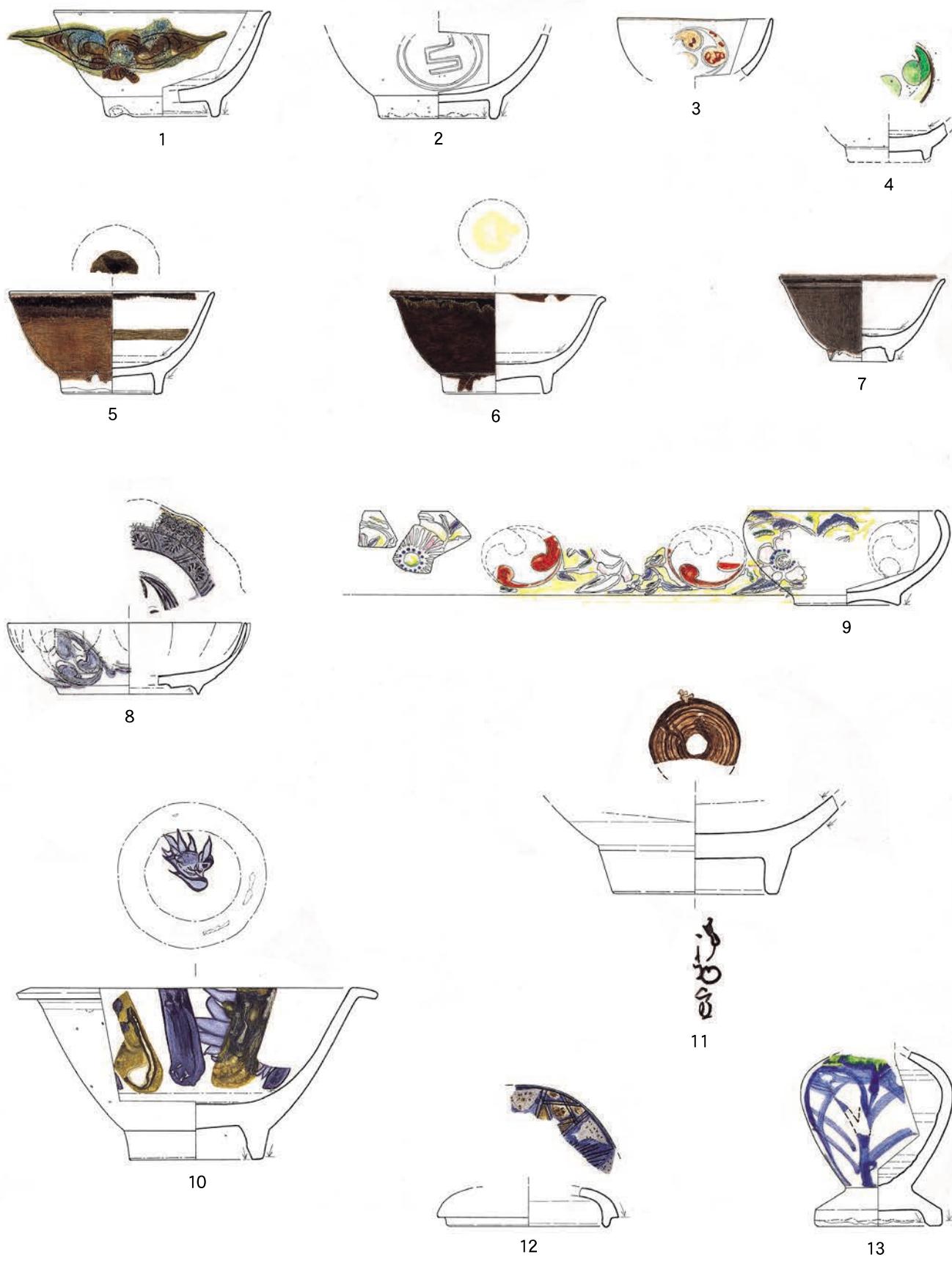
単位:cm

挿図番号 図版 番号	器種	部位	口径 底径 器高	観察事項	出土地
図版40 33	碗	口～胴	10.6 — —	直口碗で外体面には2条の圏線とその下に鋸歯状の線刻、その中に格子文を配する文様が見られる。口縁部は露胎で、内面は透明釉、外面は格子文には褐色、圏線と鋸歯文には青色の釉が施される。	美福門
図版40 34	碗	口～胴	8 — —	直口碗で外体面に黒釉で文字が描かれる。また線刻で4条の界線が見られる。	美福門
図版40 35	碗	胴～底	— 6.4 —	外体面には籠描きの文様が見られる。内外面には透明釉が全体的に施される。文様部分は灰釉が施される。内底面には蛇の目釉剥ぎがなされる。	造成層
図版40 36	碗	胴～底	— 6.8 —	外体面には花文が見られる。内外面共に透明釉が施される。内底面には蛇の目釉剥ぎがなされる。	美福門
図版40 37	碗	胴～底	— 6.6 —	外体面に花文か。内外面共に透明釉が施される。内底面には蛇の目釉剥ぎがなされ、露胎部分に釉が付着する。	美福門
図版40 38	碗	胴～底	— 5.2 —	高台の低い小振りな碗。外体面と内底面に文様が見られるが全体構成は不明。器表にはあばたが多く見られる。	美福門
図版40 39	碗	胴～底	— 3.4 —	高台の低い小振りな碗。外体面には縦位の文様が見られる。	東南北穴
図版40 40	皿	口～底	14.6 — —	口縁部は端部が上方へ少し撮み上げる。内面には青色の釉で界線を描く。内底面の釉は搔き取られる。	美福門
図版40 41	皿	口～底	—	大振りの直口皿。高い高台を有する。底部から胴部への立ち上がりは緩やかである。内外面共に褐釉が薄く施される。	南北穴
図版40 42	皿	胴～底	— 5.1 —	内底面には2条一組の界線が見られる。内外面共に灰釉が薄く施される。高台は露胎となる。	造成層
図版40 43	皿	胴～底	— 8.6 —	内体面には青色の釉を入れた格子文が見られる。内底面は釉が輪状に、2重に搔き取られる。	東南部
図版40 44	鉢	口～胴	25.0 — —	口縁部が水平となる大振りの鉢。縦位の文様が見られる。外面と口縁部内面上部に透明釉が施される。	美福門
図版40 45	急須	口～胴	6.0 — —	口縁部は内傾し、胴上部に略三角形状の把手が付く。把手には孔が開けられる。内外面共、白化粧の上に透明釉が施される。	美福門
図版40 46	急須	底	—	急須の底部で脚が付く。胴部外面には黒釉、内面には白化粧の上に透明釉が施される。内底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。	造成層
図版40 47	鍋	口～胴	16.4 — —	把手付きの鍋か。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部に把手が取り付く。器壁は薄く、外面には褐釉が施される。内面は口縁部近くまで露胎となる。	美福門
図版40 48	鍋	口～胴	14.2 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は平坦となる。外面は黒釉で内面には透明釉が施される。蓋受け部分のみ露胎となる。	造成層

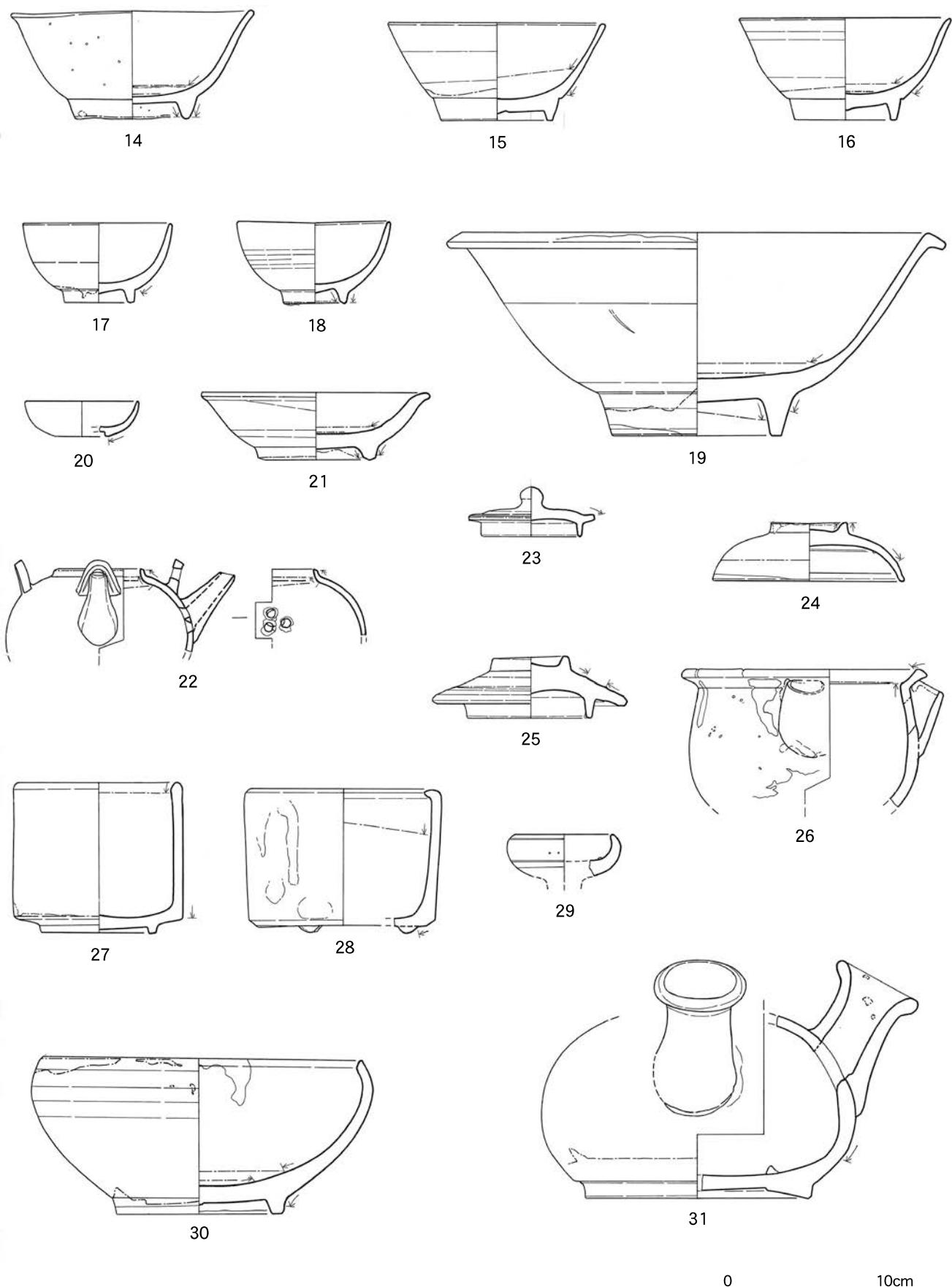
第45表 沖縄産施釉陶器観察一覧(4)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 底径 器高	観察事項	出土地
図版40 49	急須	底	— 5.6 —	急須の底部で脚が付く。内外面共に白化粧の上に透明釉が施される。底部は脚の一部まで釉が施される。	東南北穴
図版40 50	蓋	甲～端	6.6 4.8 —	小振りな蓋。急須の蓋か。甲頂部には孔が見られる。甲部には透明釉が施され、裏面は露胎となる。	美福門
図版40 51	急須	把手	4.2 — —	黒釉を全面に薄く施す。内面は露胎となる。	造成層
図版41 52	火炉	胴～底	—	底部が丸底となる火炉。円形の窓が見られる。内面上部と外体面には黒釉が施される。	造成層
図版41 53	壺	胴～底	— 18.2 —	大振りの壺で高台は低く、畳付は水平に切られる。内外面共に黒釉が施され、畠付から外底面まで露胎となる。また内外面の轆轤跡が明瞭に残る。	美福門
図版41 54	壺	胴～底	— 12.0 —	高台は低く、胴部はやや膨らみを有しながら立ち上がる。内外面共に黒釉が施される。	造成層
図版41 55	火炉	胴～底	—	高台は低く、ベタ底となる。外体面には飛鉢による沈線が見られる。	東南部
図版41 56	酒器	胴	— — —	外面にコバルト釉。頸部を中心に放射状に釉で文様を施す。	南北穴 東南部西側
図版41 57	酒器	胴	—	線刻で蓮弁と斜線が描かれ、その上にマンガン釉を施す。内面にも灰釉を施す。外面の器表には砂粒が付着する。	美福門 I-8
図版41 58	酒器	胴～底	— 8.2 —	高台は低く、内割りは浅い。外面に黒釉を内面には褐色の上絵を施す。底部は露胎となる。	美福門
図版41 59	壺	胴～底	— 10.4 —	胴部の器壁は厚く、底部は薄い。底部はやや盛り上がる。褐釉を内外面共に施す。	北カベ
図版41 60	瓶	頸～胴	—	長頸壺で砂粒が付着する。頸部の内面には釉垂れが見られる。胴上部には溶着物が見られる。	美福門
図版41 61	鉢か	口～底	28.0 23.0 —	底部から胴部へは直線上に、急に立ち上がる。胴下部には凸線が見られ、その上部に貼り付けの草文が配される。内外面共に黒釉が施され、外底面と内底面は露胎となる。	表土



第40図 沖縄産施釉陶器 (1) 碗 1~6 小碗 7 盆 8 鉢 9~11 蓋 12 瓶 13



第41図 沖縄産施釉陶器（2）碗 14~16 小碗 17,18 鉢 19,30 皿 20,21 急須 22  
蓋 23~25 鍋 26 火取 27,28 灯明皿 29 器種不明 31

## 第9節 沖縄産無釉陶器

本地区の沖縄産無釉陶器総数1,040点が出土した。器種は日用雑器類が目立ち碗、皿、鉢、擂鉢、急須、火炉、壺、壺、瓶、甕、坩堝等があげられる。特に擂鉢、壺、鉢、甕等の出土点数が多い。

碗(図版42-1,2)

小振りで低い高台を持ち、口縁は胴部から逆八の字に真っ直ぐ開くものと、胴下部に丸みを持ちながら開きやや真っ直ぐ胴上部まで立ちあがり、口縁が一旦内に寄り更に外反するもの等がみられる。

皿(図版42-3,4)

平底の直口口縁小皿が多く出土した。口縁周辺に煤を付着させているものが多いことから殆どは灯明皿と考えられる。

鉢(第42図1～5・図版42-5～11・43-12～16)

水鉢、植木鉢、擂鉢がみられるが擂鉢の出土量が圧倒的であり、水鉢、植木鉢とつづく。沖縄産陶器の擂鉢の形式分類と編年は宮城篤正の1974、1981を始めに安里進、上原政昌、家田淳一等1987によるものがある。今回その分類にあたって基本的には安里進、他1987に準拠するものである。

I類 胴下部から逆八の字状に外側に開きながら立ち上がる。口縁はくびれを持ち先端で外反する。口唇はやや尖る。口縁の一部に口縁上方より外側下方へ指で押し下げ注ぎ口を成形している。内体面の櫛目は間隔をあけ四ないし五目の櫛を用い施されている。底部の詳細は不明。第42図1 安里進他1987編年II類に相当すると考えられる。

II類 胴下部にやや丸みを持ち開きながら立ち上がるもの同図3と、直線状に外に開きながら立ち上がるもの同図2がある。口縁形態は鍔縁状を成し、水平に張り出すもの2とやや斜め下に張り出すもの3がある。2は口縁に口縁上方より外側下方へ押し下げた凹状の注ぎ口が認められた。いずれも鍔上面縁部付近に凹線を廻らし、内体面にまんべんない櫛目を施す。外体面には顕著な轆轤痕をとどめる。底部は平底の同図4と中空になる脚を持つ5とある。安里進他1987編年IV類に相当すると考えられる。

急須(図版43-17～19)

沖縄産施釉陶器の急須とほぼ同様な形態を示すが、注ぎ口が若干上向きであることや底面付近に煤を付着させたものが多数出土していることから土瓶として使用することもあったと考えられる。

火炉(図版43-20～25)

胴部が「く」の字状に屈曲内彎するものや、ほぼ円筒状に口縁に向かい立ち上がるもの、やや外に開きながら立ち上がるもの、方形状等様々な形態が認められた。底部は平底になるものと脚が付くものとある。

炉(第43図6,7・図版44-26,27)

炉が二点得られた。6は円筒状の胴部に口縁がドーナツ状に内側に向かい張り出し、胴中央部に二ヵ所円形の風穴が穿たれる。7は円筒状の胴部から外に向かい広がる口縁と、内に窄まる二重の口縁を成すものである。いずれも底部を欠く資料であることから詳細は不明であるが携帯できる炊事用の炉、こんろと考えられる。

壺(第43図8・図版44-28・45-29～32)

壺は44点が出土した。玉縁状の口縁をもつものが殆どであり、頸部は八の字状の短頸と円筒状にやや伸びた長頸とがある。中型壺は胴上部に二個の横位の耳を貼付するものが多かった。全て平底であった。

瓶(第43図9,10・図版45-33,34)

9は胴部に丸みをもち、頸部で窄み口縁がラッパ状に開くものである。10は9とほぼ同様な形態の瓶の底部である。

第46表 沖縄產無釉陶器出土状況一覧

### 甕(図版45-35,36)

35は口縁の断面形態がハブラシ状に肥厚、頸部に2条の圈線を廻らした甕の口縁部資料である。

36は甕の蓋である。深みのある甲部から、縁部に向かい朝顔状に緩やかに広がる。縁部は外側に水平に張り出している。頂部に宝珠状の撮みを持つ。

第47表 沖縄産無釉陶器観察一覧( 1 )

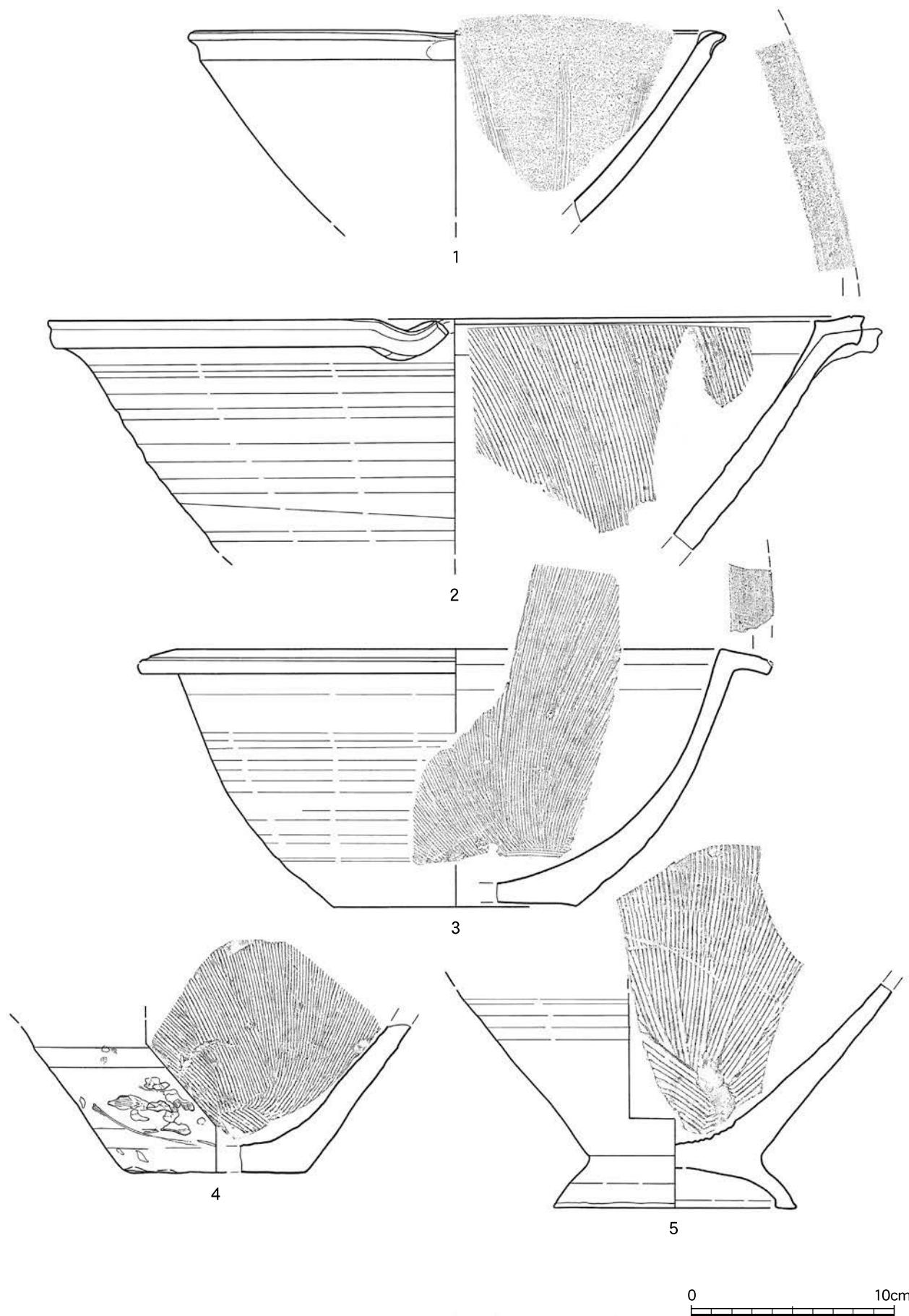
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
図版42 1	碗	口縁	— — —	胴下部に丸みをもち、やや開きながら立ち上がる。口縁部は外側に僅かに屈曲させ広がる。口唇は丸くおさめる。	南カベ下
図版42 2	碗	口縁	12.3 — —	胴から逆八の字状に外側に開きながら口縁に至る。口唇は舌状を成す。	南カベ下
図版42 3	皿	口 ～ 底	10.3 2.8 5.0	底部は平底を成し、胴部は開きながら口縁に至る。口唇は舌状を成す。口唇部に煤が確認できることから灯明皿と考えられる。	美福門
図版42 4	皿	底	— — 6.4	高台をもつ底部である。高台は低く小さめであるが丁寧な作りである。胴部は腰部から真っ直ぐ立ち上がるものと考えられる。	造成層
図版42 5	鉢	口縁	25.0 — —	胴部が逆八の字状に外側に開きながら立ち上がり、口縁で内彎する器形を呈する。口縁は僅かに肥厚し口唇は尖る。口縁に5条の櫛描きの波状文を廻らす。	美福門
図版42 6	鉢	口縁	12.2 — —	胴下部から逆八の字状に外側に開きながら立ち上がり、胴上部に丸みを持たせ口縁で内彎する。口縁は断面三角状に肥厚し上面を平らに整える。	造成層
図版42 7	鉢	口縁	36.0 — —	胴下部に丸みをもち、開きながら真っ直ぐ立ち上がる。口縁部は断面形態が逆L字状に外側に屈曲させた鍔縁状を成す。上面に二条の沈線文を施す。	美福門
図版42 8	鉢	口 ～ 底	19.0 10.0 11.5	底部は平底を成し胴下部から逆八の字状に外側に開きながら立ち上がる。胴上部は丸みをもち、口縁で内彎する。口縁は断面形が三角状に肥厚し上面を平らに整える。胴上部に八ないし九条の櫛描きの波状文を施し、更に上下端は撫で消すものである。	I-8
図版42 9	鉢	口縁	— — —	胴部は真っ直ぐ立ち上がり、口縁部は鍔縁状を成し縁の先端下部に粘土帶をひだ状に貼付するものである。頸部と鍔縁先端に沈線文を施す。	造成層
図版42 10	鉢	口縁	67.0 — —	胴部はやや真っ直ぐ立ち上がり、口縁部は鍔縁状を成すものと考えられる。胴部に草花を型取った板状の粘土を貼付するものである。	東南部 西側
図版42 11	鉢	底部	— — 9.3	外底中央が僅かに窪む平底であり、底面の器厚は均一でない。胴部にかけ逆八の字に開く作りは雑である。	表採
第42図1 図版43 14	擂鉢	口縁	26.8 — —	胴下部から逆八の字状に外側に開きながら立ち上がる。口縁は一旦窪み先端で反る。口縁の一部を口縁上方より外側下方へ僅かに指で押し下げ注ぎ口を成形している。内体面は間隔をあけ四ないし五目の櫛描きが施されている。	H-6 洞穴内
第42図2 図版43 12	擂鉢	口縁	41.0 — —	胴下部から逆八の字状に外側に開きながら立ち上がる。口縁は外側にやや水平に折り曲げ鍔状口縁を成す口唇の形態は四角状を呈し、鍔上面縁部付近と口唇に凹線を廻らしている。口縁の一部を口縁上方より外側下方へ指で押し下げ注ぎ口を成形している。外体部に顕著な轆轤痕を認める。内体面はまんべんなく櫛描きされている。櫛目上端は整然と揃えられ口縁内直下の櫛目は撫で消されている。八ないし十一目の櫛を使用したと考えられる。	東南部 西端
第42図3 図版43 13	擂鉢	口縁	31.9 12.9 12.2	胴下部にやや丸みをもち外側に開きながら立ち上がる。口縁は断面逆L字状を成し、外側に向かいやや斜め下に折り曲げられる。鍔縁口縁を成す。口唇の形態は四角状を成し鍔上面縁部付近に凹線を廻らしている。外体部に顕著な轆轤痕を認める。内体面の櫛描きはまんべんなく施され、口縁直下の櫛目は撫で消し櫛目の端を揃えたのがわかる。	美福門
第42図4 図版43 15	擂鉢	底部	— — 9.4	平底の底部である。底部から逆八の字に外に開き立ち上がる。内底面の櫛目はまんべんなく施される。	東南部 西側
第42図5 図版43 16	擂鉢	底部	— — 12.2	底部は中空を成し、皿を伏せたような脚をもつ。胴部は底部から逆八の字に外に開きながら立ち上がる。内底面の櫛目はまんべんなく施される。	表採
図版43 17	急須	口縁	10.6 — —	胴部に丸みをもち、内彎しながら立ち上がる。口縁は頸部を垂直に引き上げ、口唇を隅丸に仕上げる。円筒状の注ぎ口を胴上部に穿孔後貼付したものと考えられるが、注ぎ口はかなり上向きに付く。	I-8

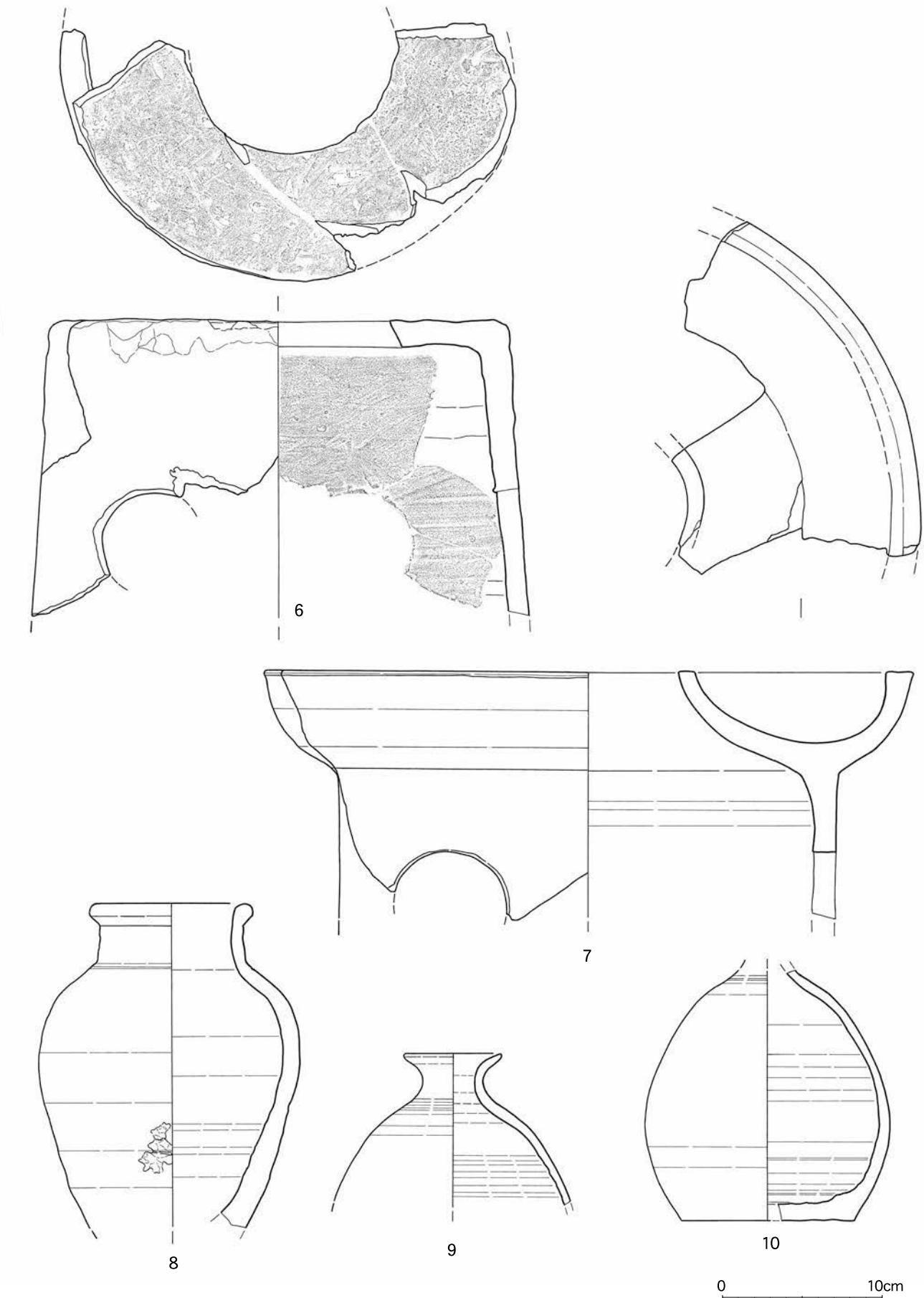
第48表 沖縄産無釉陶器観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
図版43 18	蓋	縁部	12.5 — 10.0	甲部から縁部まで残す蓋の資料である。急須の蓋が考えられる。	造成層
図版43 19	急須	口～底	— 13.5 11.3	底部は平底を呈し、胴上部にかけ丸みをもしながら立ち上がり内彎する。口縁は一旦頸部を垂直に引き上げる短頸状を示す。口唇は隅丸に仕上げる。	造成層
図版43 20	火炉	口縁	11.0 — —	胴部はほぼ垂直に立ち胴上部で内側に屈曲させ内彎する。口縁は頸部を垂直に引き上げ口唇は隅丸方形状を成す。更に口縁の内側に水平に張り出す鍔をもつ、胴上部に0.9ないし1cm代の風孔を数個穿つ。	造成層
図版43 21	火炉	口縁	— — —	胴部はほぼ垂直に立ち胴上部で内側に屈曲させ内彎する。口縁は複数の抉りが施され上面觀が三つ葉様になるものと考えられる。口唇は方形状を成す。	南カベ下
図版43 22	鉢	口縁	— — —	胴部はほぼ垂直に立ち上がり口縁で僅かに内彎、口唇は扁平状を成す。口縁外体面に縄目状の粘土紐を上下段に配し、更に1cm代の珠文をその間に貼付するものである。	表土
図版43 23	火炉	口～底	28.4 15.2 21.2	底部は平底を呈し、胴上部までほぼ真っ直ぐ立ち上がり、口縁で外反する。口唇は尖る。胴下部に丸い窓状の孔が認められる。底面にも孔が認められる。	美福門
図版43 24	火炉	底部	— — 13.0	底部から胴部まで真っ直ぐ立ち上がる。底部形態は平底に数個の脚が付くものである。	C-10
図版43 25	火炉	底部	— — —	方形状の形態を成すものと考えられ、類例資料から方形状火炉と推察できる。	美福門
第43図6 図版44 26	炉	口縁	29.0 — —	体部が円筒状を成し、口縁内側に向かい鍔の付く炉と考えられる。体部に風孔と思われる円形の孔を穿っている。	美福門
第43図7 図版44 27	炉	口縁	41.8 116 — —	体部が円筒状を成し、口縁は二重口縁を成す。内側に向かい八の字に窄む口縁と外側に上向きに碗状に立ち上がる鍔状から成る。体部に風孔と考えられる円形の孔を穿っている。	美福門
第43図8 図版44 28	壺	口縁	10.4 — —	胴下部から胴上部まで開きながらやや真っ直ぐ立ち上がる。肩で緩やかに窄まり円筒状に伸びる頸部に至る。口縁部は玉縁状に肥厚する。	北カベ
図版45 29	壺	口縁	— — —	口縁部は玉縁状に肥厚し、本来は円筒状に伸びた頸部から緩やかに張る肩に至るものと考えられるが焼成時の変溶なのか、かなり変形している。	造成層
図版45 30	壺	口縁	17.3 — —	口縁部は玉縁状に肥厚し、八の字状に伸びた頸部から肩部に至る。頸部下に「入」の名款が刻まれている。	美福門
図版45 31	壺	口縁	16.4 — —	口縁部は玉縁状に肥厚し、八の字状に伸びた頸部から肩部に至る。胴上部に横位の凹線文を二条廻らし頸部直下に横位の把手を貼付するものである。	美福門
図版45 32	壺	底部	— — 19.6	底部から僅かに外に開きながら立ち上がる平底の底部資料である。	美福門
第43図9 図版45 33	瓶	口縁	6.2 — —	肩が緩やかなカーブを描きながら窄まり頸部に至る。口縁はラッパ状に外側に向かい開き、口唇は先端が尖る。頸部直下に五条の凹線文を廻らす。	美福門
第43図10 図版45 34	瓶	底部	— — 11	底部は平底を成し、胴部は胴下部まで外側に向かい開き、緩やかなカーブを描きながら窄まる。頸部直下に五条の凹線文を廻らす。	美福門
図版45 35	甕	口縁	46.0 — —	口縁は外側に向かい水平に張り出すように鍔状を成し肥厚する。頸部直下と鍔側面下部に二条の沈線文を廻らしている。	美福門
図版45 36	甕蓋	丁部～縁部	— 14.2 26	頂部は宝珠状の撮みをもち甲部に向かい二重の段を有する。縁部は外側水平方向に鍔状に張り出す。	造成層



第42図 沖縄産無釉陶器（1）摺鉢



第43図 沖縄産無釉陶器（2）炉 6,7 壺 8 瓶 9,10

## 第10節 陶質土器

陶質土器にみられる器種別の形態は沖縄産無釉陶器とほぼ同様な器形を示すものが多い。そのため沖縄産無釉陶器と陶質土器との区別は主に焼成の違いを中心におこなった。

当該地区出土の陶質土器には火炉、急須、鍋、鉢、皿、壺などの器種がみられた。(第44図1~14・図版46,47)

火炉は総数74点が得られ、同図1~4を図化した。形態は2種に大別できる。

同図1,2,4,6は平底の底部からやや開きながらほぼ円筒状に立ち上がる。胴上部で一旦内側に「く」の字状に屈曲させ、口縁に至る。口縁は上面観が三葉様になる。肩部2ヵ所に方形の把手を貼付するものと考えられる。

同図2・図版46-3,7は底部に高台を持ち丸く開きながら立ち上がる。胴部から口縁にかけ内彎し、胴上部に上面観が三日月状の把手を貼付、更に口縁内体面から内側に向かう突起を有する。図版46-5は抉れ高台を有するものである。同図3,4・図版46-8,9は火炉蓋と考えられる。

急須は総数42点が出土した。中型と小型がみられ比較的残りのよかつた資料同図5~7を図化した。図版46-10~14は器壁が比較的薄い所謂「サークー」と呼称されるものである。土瓶として使用されたものと考えられている。

鍋は総数56点が得られ、両手鍋状同図8・図版47-15,16とフライパン状同図9・図版47-17の二形態がみられた。17は柄部を欠失しているものの類例資料から片手の柄が付くフライパン状と称されるものと考えられる。

鉢は図版47-20に示す浅鉢と同図12の植木鉢が出土している。

皿は同図14の1点が出土した。平底から開くようにして口縁に至る直口口縁皿である。灯明皿の可能性が大きい。同図13に示す小壺様の底部が出土している。

第49表 陶質土器出土状況一覧

器種	皿	小壺	火炉				鍋				(鍋 (フライパン 状))			鍋or急須			急須				鉢			植木鉢			水鉢			蓋もの 土瓶	器種不明				合計							
			底 部	底 部	口 縁	胴 部	底 部	蓋	把 手	口 底	口 縫	胴 部	底 部	蓋	注 耳	口 縫	底 部	蓋	口 縫	底 部																						
出土地	皿	小壺																																								
1 美福門	1		3	7	2						16	1	1	20	1	2			42	2		1	2									4		2	1	3	10	1	122			
2 南カペ	3	下																																		1		1				
3 北カペ																																						1		1		
4 F-7																																						1		1		
5 F-8																																						1		1		
6 G-5																																						1		1		
7 造成層																																						1		1		
8 G-6																																								1		1
9 G-9																																								1		1
10 H-5																																								1		4
11 H-6																																								1		1
12 H-8																																								3		3
13 I-6																																								2		3
14 I-7																																								1		3
15 I-8																																								1		2
16 東南部			4	1							2				10	1	2			1																	1		12			
17 東南部																																								34		34
18 東南部 北側																			1																					1		1
19 東南部 西側			2	1	2														6	4	1			1													6		25			
20 東南部 東側																			2																				5		7	
21 東西階			2	2	1						1								1																			1		12		
22 東南北 穴	1	1	5								2								1		32	4	8	2	1	2	9	2		1	5	6	2	1	1	1	5	2	2	31	1	162
23 造成層			12	7	4	10	2	1	1	2	1	2	1	1	32	4	8	2	1	2	9	2		1	5	6	2	1	1	1	5	2	2	31	1	162						
24 表土			2	1	1		1		1		1	1		1	10	3	2	1	1						1		1	1	1		1		3		34							
25 表様						1													1																				2		2	
合計	1	1	26	18	16	11	3	1	17	2	1	28	2	5	1	3	111	13	15	5	4	5	10	2	1	1	10	15	2	2	3	2	2	2	2	9	3	2	81	1	1	438

第50表 陶質土器観察一覧( 1 )

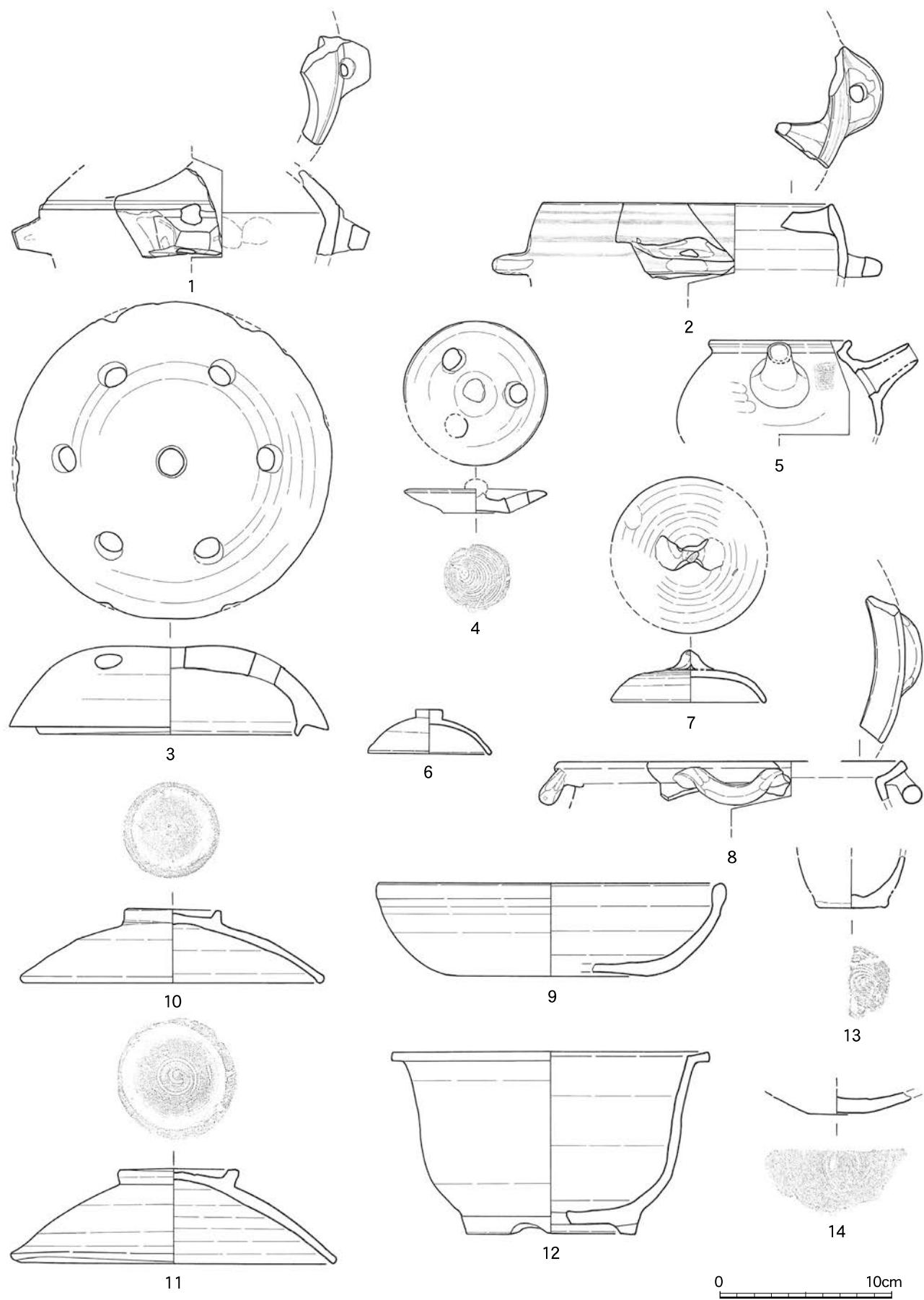
単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 (縁径) 器高 高台径 (撮み径)	観察事項	出土地
図版46 1	火炉	口	8.6	口縁は胴部から内側に「く」の字に屈曲し内彎する。口縁は上面觀が三つの円が重なり三葉様になる。	造成層
第44図1 図版46 2	火炉	口	— — —	口縁は胴部から内側に「く」の字に屈曲し内彎する。口縁の上面觀は三葉状に開くものと考えられる。横断面形が台形の把手を胴上部に貼付、把手は1cmの孔を縦方向に穿孔している。	美福門
第44図2 図版46 3	火炉	口	17.0 — —	口縁は内彎しやや肥厚する。口縁の内面に五徳と思われる突起がみられる。胴上部に上面觀半円形の有孔把手を貼付、外体面に化粧土を横縞状に塗布している。	美福門
図版46 4	火炉	口	13.6 — —	口縁は胴部から内側に「く」の字に屈曲し内彎する。口舌はやや肥厚し丸くおさめる。口縁の一部に箸支えのための挟りを設けている。胴上部に2条の沈線文を施す。	造成層
図版46 5	火炉	底	— — —	抉り出し高台を呈する。腰部は丸みをもち、立ち上がる。	東西階
図版46 6	火炉	底	— — 10.6	底部は平底を呈する。胴部は腰部からやや開きながら真っ直ぐ立ち上がり筒状を成す。	東南部
図版46 7	火炉	底	— — 10.6	低めの高台を削り出し腰部は丸みをもつ。高台脇に断面形が三角の凸帯を廻らす。	東南北穴
第44図3 図版46 8	火炉	蓋	18.5 5.1 15.0	甲部は饅頭状に丸くなり縁部は掛かりの突起を有する。甲部に6個頂部に一個の孔を穿っている。	造成層
第44図4 図版46 9	火炉	蓋	8.2 — 3.9	甲部が逆「八」の字状に外に広がり縁部の先端は舌状にやや尖る。内底面に糸切り痕が認められる。頂部に撮みを施しているが破損のため詳細は不明である。	表採
第44図5 図版46 10	急須	口	8.3 — —	胴の丸い薄手の急須である。口縁は「く」の字状に外側に折れ口を成す。注ぎ口はやや上向きに貼付、先端に向かい漸次細くなる。	東南部
図版46 11	急須	口	3.8 — —	薄手の胴の丸い急須である。口縁は一旦「く」の字状に外側に折り、更に先端を上に引き上げ折れ口を成す。口唇は丸くおさめ、やや肥厚する。把手は円筒状を成すものと考えられる。	表採
図版46 12	急須	口	— — —	薄手の胴の丸い急須である。口縁は「く」の字状に外側に折れ口を成す。口唇はやや肥厚し丸くおさめる。把手は円筒状を成しやや上向きに貼付、先端に向かい漸次広がる。	東南部
第44図7 図版47 13	急須	蓋	7.2 2.55 1.6	縁部は緩やかに窄みながら立ち上がり甲部に至る。甲部は扁平状を成し頂部に紐状の撮みを横位に貼付する。	造成層

第51表 陶質土器観察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 (縁径) 器高 高台径 (撮み径)	観察事項	出土地
第44図6 図版47 14	急須	蓋	9.0 2.95 —	八の字状に開く皿を伏せた様な形態を成し、甲部は丸味をもつ。頂部に円筒状の撮みを貼付する。	造成層
第44図8 図版47 15	鍋	口	20.4 — —	口縁部が外側に張り出す鍔をもつものである。鍔外面に横位に紐状の把手を貼付している。	美福門
図版47 16	鍋	口	21.8 — —	口縁部は胴部から「く」の字状に折れ外側に張り出す鍔をもつ。鍔は丸味をもちながら僅かに上向きに反る。先端を平らに整える。	美福門
第46図9 図版47 17	鍋	口～底	20.4 5.35 11.0	底部は大きめの平底を成し、胴部は腰部から丸みをもちながら立ち上がり口縁で内弯する。口縁は肥厚し口唇は舌状を呈する。浅鉢状を成す。	美福門
第44図10 図版47 18	鍋	蓋	17.8 4.3 5.6	甲部が「八」の字状に外に広がり縁部は先端を平らに整えている。頂部に管状の撮みを削り出す。	造成層
第44図11 図版47 19	鍋	蓋	19.0 4.4 7.0	甲部が「八」の字状に外に広がり縁部は先端を平らに整えている。頂部に管状の撮みを削り出す。	美福門
図版47 20	鉢	底	— — 8.6	底部は上げ底を成す平底である。胴部は腰部から丸みをもちながら立ち上がる浅鉢状を成す。	造成層
第44図12 図版47 21	植木鉢	口～底	18.6 10.55 9.9	胴部は腰部に丸みをもち口縁に向かい真っ直ぐ立ち上がる。口縁部は胴部から「L」字状に折れ外側に張り出す鍔縁状を成す。口唇は四角に整えている。底部は高台に数ヶ所抉りをもち、中央に孔を穿つ。	造成層
第44図14 図版47 22	皿	底	— — 3.8	平底から逆「八」の字状に開き立ち上がる。外底面に糸切り痕が認められる。	美福門
第44図13 図版47 23	小壺	底	— — 3.9	平底から一旦くびれた後開きながら立ち上がる。内底面に轆轤痕、更に外底面に糸切り痕が認められる。	東南北穴



第44図 陶質土器 火炉 1,2 蓋 3,4,6,7,10,11 急須 5 鍋 8,9 植木鉢 12 小壺 13 皿 14

## 第11節 瓦質土器

ここで扱う瓦質土器は本土産と沖縄産に大別でき本土産は近現代遺物も含まれる。更に産地の特定ができないものもあった。器種は火炉、炉、鉢、器種不明があり殆どが火まわりの道具である。

火炉は総数47点が得られた。全て平底であった。胴部から外側に逆八の字状に開きながら立ち上がり、口縁に至る。口縁から胴上部までの外体面に波状の凸帯文を二条ないし三条廻らし、直下に陽刻の牡丹唐草文を型押しにより施文されるもの第45図1～3や口縁が内彎形態を成し二条の凸帯文か沈線文の間に菊花の印花文を充填するもの同図4,5がある。

炉は円筒形と角形の二種がみられた。第45図6は口縁が鍔状を成し、外に向かい張り出すものである。同図7は角形に方形状の窓をもつものである。

鉢は本土産と考えられ、平底の胴部から口縁にかけ外に逆八の字状に開くものがある第45図8,9。いずれも象牙色の器色を呈し胎土は細かい。第45図8・図版48-10は胴下部に墨書きと思われる墨痕が認められる。

第45図10～13・図版48-14～18に示すものは器表面に彫刻を施すものであるが、小破片であることから本来の形態や用途などを窺うことができないものである。

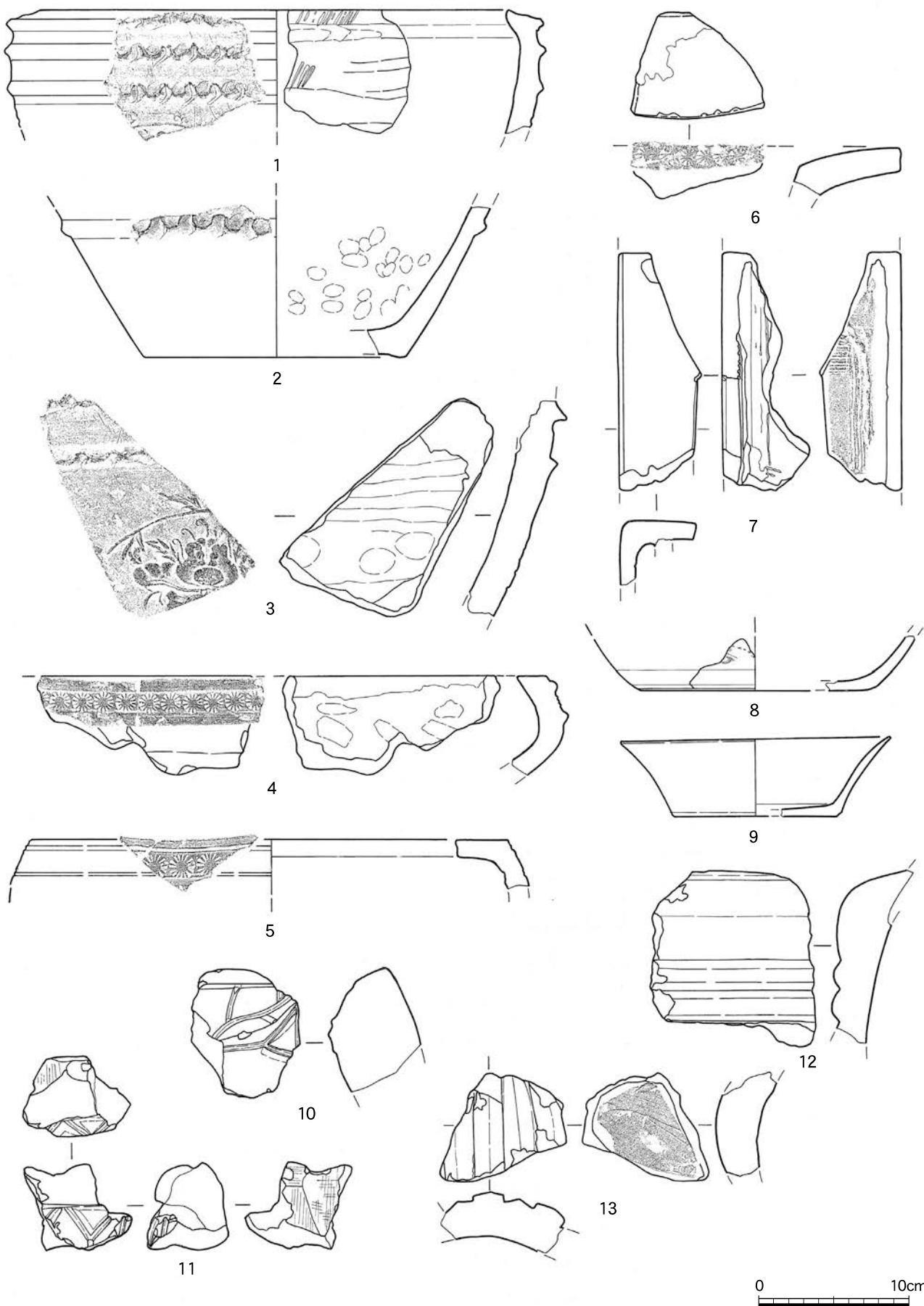
第52表 瓦質土器出土状況一覧

器種 出土地	鉢				火炉				摺鉢	蓋	炉	器種 不明	合計
	口～ 底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	脚部	底部	縁部	口縁部		
1 美福門			1				1						2
2 洞穴内					1		1						2
3 南カベ下		1	1			3							5
4 F-10						1							1
5 I-8						1	1						2
6 東南部		1	2	4	8	5						1	21
7 東南部北側					1								1
8 東南部西側					1		3		2				6
9 東南部東側						1							1
10 東西階					1	3							4
11 造成層	1		1		5	1	1		4	1	10		24
12 表土			1		2								3
13 表採				2	1	1			1		1		6
合 計	1	1	5	4	9	25	12	1	3	4	2	11	78

第53表 瓦質土器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 底径	部位	観察事項	出土地
第45図1 図版48 1	鉢	13.4 — —	口縁	口縁に粘土帯をひだ状に三条廻らす。	東南 壁下
第45図2 図版48 2	鉢	— — 17.6	底	底部は平底を成し、胴上部まで外側に開きながら真っ直ぐ立ちあがる。胴部にひだ状の粘土帯を廻らすが破損が著しいため詳細は不明。	表採
第45図3 図版48 3	鉢	— — —	胴	口縁から胴上部にひだ状の粘土帯を廻らし、その直下に型押しによる陽刻文を施す。	東南 壁下
第45図4 図版48 4	火炉	— — —	口縁	胴部は外側に急激に開くが、胴上部は丸みをもちながら内彎し口縁に至る。口縁は上面が平坦に整えられ、口縁外体面に印花菊文を横位に連刻し上下段に凸帶文を配する。	東南部 西側
第45図5 図版48 5	火炉	32.1 — —	口縁	口縁は内彎し、口唇は水平に面を成し内側に向かい張り出す。外体面に印花菊文を横位に連刻し上下段に沈線文を配する。	東南部
第45図6 図版48 6	火炉	— — —	口縁	頸部から外側にラッパ状に開き口縁に至る。口舌部の断面形は角張る。	表採
第45図7 図版48 7	火炉	— — —	口縁	角形の炉と考えられる。方形の窓状の孔を有していたと考えられる。	表採
図版48 8	火炉	— — —	底	平底の火炉に付く楕円形の脚部と考えられる。	造成層
図版48 9	火炉	— — —	底	炉の脚部と考えられる。	造成層
第45図8 図版48 10	鉢	— — 17.5	底	底部は平底状を成し胴から逆「八」の字状に開く鉢と考えられる。	東南部
図版48 12	火炉	— — —	底	平底の火炉に付く脚部と考えられる。脚の形状は底部に貼付する外側の付け根あたりに瘤状の突起を有する。	東南部 西側
第45図9 図版48 11	鉢	18.1 5.1 10.8	口～底	底部は平底を成し、胴から口縁に逆「八」の字状に開く鉢である。口唇は舌状に尖る。	造成層
第45図10 図版48 14	器種 不明	— — —	—	方形の台座様な物と推察できる。側面の断面形は稜線に丸みをもつ台形状を成す。側面はそれぞれ異なる文様により装飾されていたことが推測されるが、残っている側面は幾何学模様と草木の枝様なものが認められる。中央に方形の突起部があったと考えられ、折れ痕が認められる。	造成層
第45図11 図版48 15	器種 不明	— — —	—	方形の台座様な物と推察できる。10と同一の遺物と考えられる。	造成層
図版48 13	器種 不明	— — —	—	詳細不明	造成層
第45図12 図版48 16	器種 不明	— — —	—	外体面はドーム状を成し、側面にドーナツ状の突起が帶状に二条連なる。上面觀は円形になると考へられる。内面は中空となり図示上の上下端は破損し不明である。	造成層
図版48 17	器種 不明	— — —	—	方形の台座様な物の一部と推察できる。	造成層
第45図13 図版48 18	器種 不明	— — —	—	蓮弁状の彫刻を施す縦断面形は球状を成すものと思われる。	造成層



第45図 瓦質土器 鉢 1~3,8,9 火炉 4~7 器種不明 10~13

## 第12節 土器 (第46図1~6)

総数 160 点出土しており、胴部資料が大半を占める。器種としては壺、鉢、皿がある。器形が窺えるものは極めて少数であり、かつそのほとんどが小片であった。口縁部、底部といった特徴付けられる部位を優先的に図化した。

1,2 は口縁部を折り返して肥厚させる鉢で胴上部は直線的に開く。底部は1を見るとベタ底となる。何れも胎土は密で白色粒子を僅かに含む。気泡も多く見られ、焼成は良好で陶器に近い焼きとなる。器表はナデ消しされる。これらはグスク土器にはあまり見られない器形であり、今後の位置付けが検討されるところである。1,2 共に東南部西側出土。3 は壺で口縁部は外反する。胎土はやや粗く、大粒の赤色粒と黒色粒が混入する。外面にはナデ成形痕が見られ、器面はザラつく。表採。4は口縁部が内彎する皿で胎土は粗く、白色粒子や気泡が多く見られる。焼成は良好で底部はベタ底で器壁は厚い。東南階出土。5 は底部、壺もしくは鉢か。内面にはナデ痕が見られる。胎土は密で気泡、白色粒子が見られる。焼成は良好で陶器に近い焼きとなる。造成層出土。6 も底部で胎土はやや粗く黒色粒子が僅かに見られ、気泡が多く見られる。造成層出土。

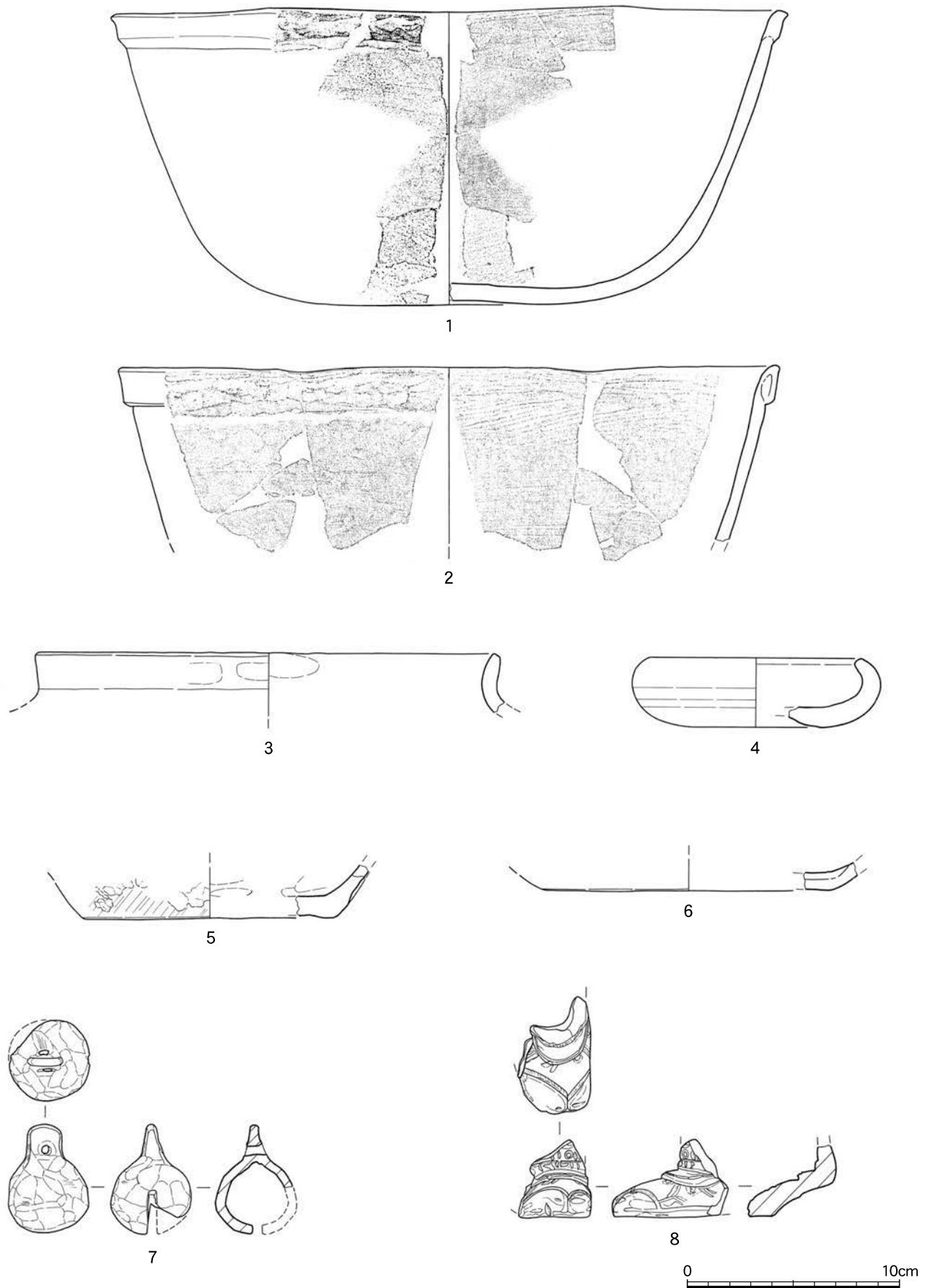
1,2,5 は非常に堅緻で 3,4,6 とは焼成が異なる。器表は1~4 は内外面共に褐色であるが、5,6 の内面のみ黒色となる。

第54表 土器出土状況一覧

出土地	器種	口~底	口縁部	胴部	底部	合計
1 美福門				1		1
2 南カベ下				2		2
3 D-10				8		8
4 E-8				3		3
5 E-9				3		3
6 E-10					1	1
7 F-4				1		1
8 F-7				1		1
9 F-8				1		1
10 F-9				4		4
11 F-10				1		1
12 G-5造成層				2		2
13 G-6				3		3
14 G-7				9		9
15 G-10				1		1
16 H-6				1		1
17 H-6洞穴内				1		1
18 H-7				3		3
19 I-8				1		1
20 I-9				14	1	15
21 東南部		1	21	1		23
22 東南階		1				1
23 東南部北側				2		2
24 東南部西側		1	1	3		5
25 東南部西端				1	1	2
26 東南部東側				15		15
27 東西階				6		6
28 造成層		1	32	2		35
29 表土				3		3
30 表採			1	5		6
合 計		2	4	148	6	160

## 第13節 土製品 (第46図7,8)

鈴、人形が出土している。第46図7 は身部が球状を成し鞍状の撮みをもつ、手びねりの鈴である。身部下半部に縦の切れ込みを一条施し、撮みに横位の孔を穿っている。縦 3.8 cm、横 3.5 cm、厚 1.2 cm。東西階段部分出土。同図8 は人形の左足の破片であるが、草鞋に膚当ての様子が見て取れる。型物と考えられる。縦 5.25 cm、横 3.9 cm、厚 1.1 cm。造成層出土。



第46図 土器 1~6 土製品 7,8

## 第14節 屋瓦

屋瓦は総数9,692点余出土した。完全な資料は後述の明朝系役瓦(丸瓦)の14点で、他は総て破片からなる。出土瓦を形態や文様、製作技術から朝鮮、日本、中国の三カ国に系譜をもつ瓦に分類される。時期別にはグスク時代に属する高麗・大和系両瓦と、近世及びそれ以降の明朝系瓦、近世大和瓦に分けられる。出土量では高麗系瓦97点(1%)、大和系瓦1,397点(14%)、明朝系瓦8,189点(84%)、近世大和瓦9点(1%以下)となり、近世以降の明朝系瓦を主として出土した。以下、各種類ごとに述べるが特徴的な資料は図化し報告する。種類別集計表は第55~61表に載せた。

### I. グスク時代の屋瓦

#### A. 高麗系瓦

高麗系瓦は総数97点で、内訳は平瓦(94点)と丸瓦(3点)の2種である。いずれも細片で、図化にたえうる平瓦の第47図1~7を掲載する。

##### 平瓦

平瓦は「癸酉年高麗瓦匠造」刻銘のある同図1~5である。1は厚さ約1.7cm。凹面は布目と糸切り痕が明瞭、凸面も刻銘のある部分に糸切り痕が鮮明にみられる。造成層出土。2は厚さ約1.6cm。本資料の糸切り痕は細かい目から徐々に粗い目になるディテールがある。造成層出土。3は器面の風化が著しく泥質化している。厚さ約1.8cm。造成層出土。4は焼成良好で、布目もシャープである。厚さ約1.8cm。造成層出土。1~4は色調が灰色である。5は刻銘部分は欠落してみられないが「格子」文様のある資料である。表裏面は灰白色で、素地中央は灰色を帯びる。前資料の刻銘瓦と若干ことなり厚さが約2.1cmとなる。造成層出土。6は厚さ約1.8cm。造成層出土。灰色を呈する。

同図7は厚手の平瓦片で、側面に半裁の断面が残る。瓦刀の深さは器壁の3分の1ほどに入る。長軸の一端部が残る。凹面は糸切り痕が明瞭。色調は表裏面は灰白色で、素地内面は灰色を帯びる。端部面の整形は比較的よい。厚さ約2.5cm。造成層出土である。これら資料には漆喰の付着はみられない。

#### B. 大和系瓦

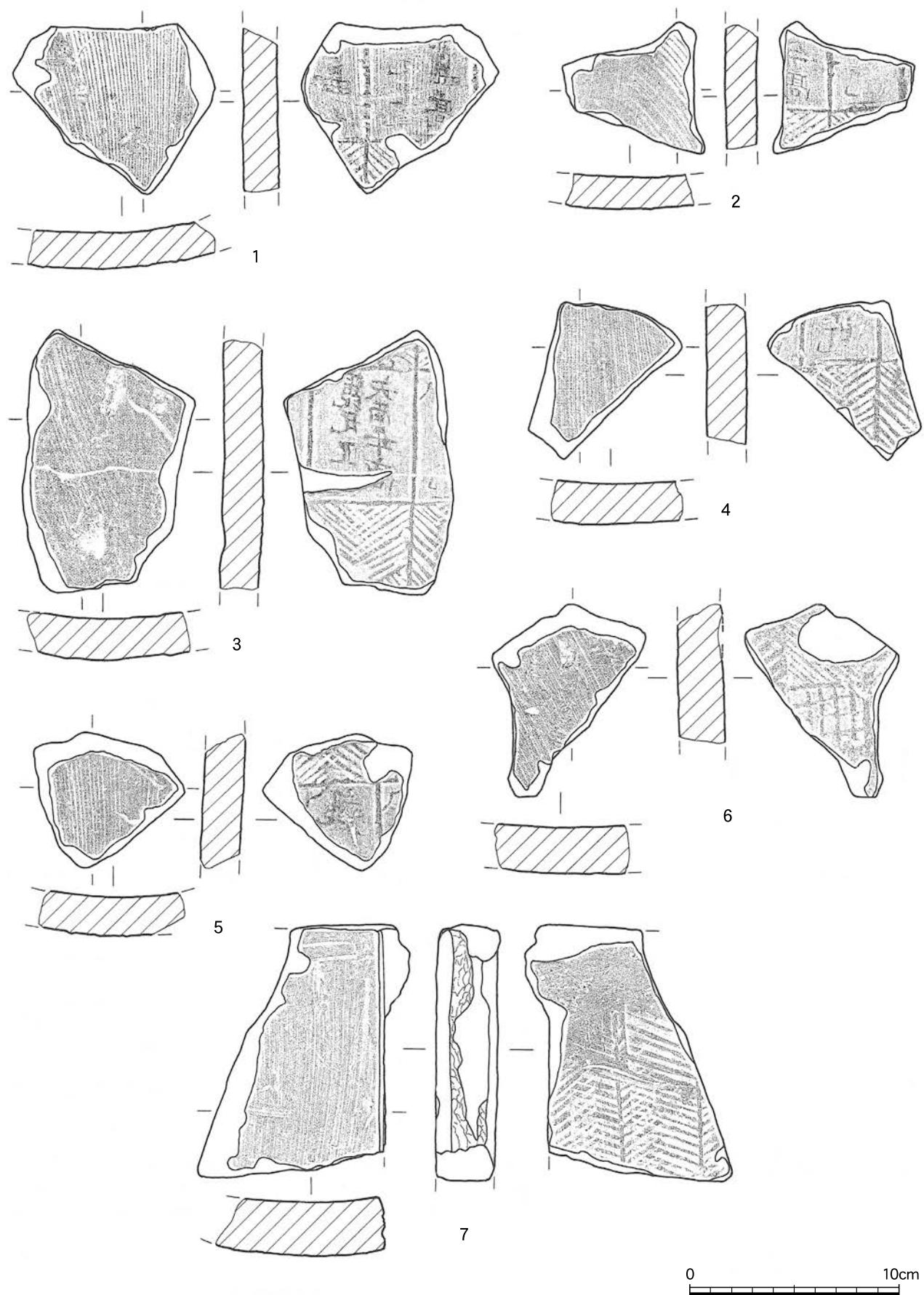
大和系瓦は総数1,397点で、その内訳は軒平瓦(8点)、軒丸瓦(1点)、平瓦(1,336点)、丸瓦(45点)、雁振瓦(7点)の5種類である。

##### a. 軒平瓦

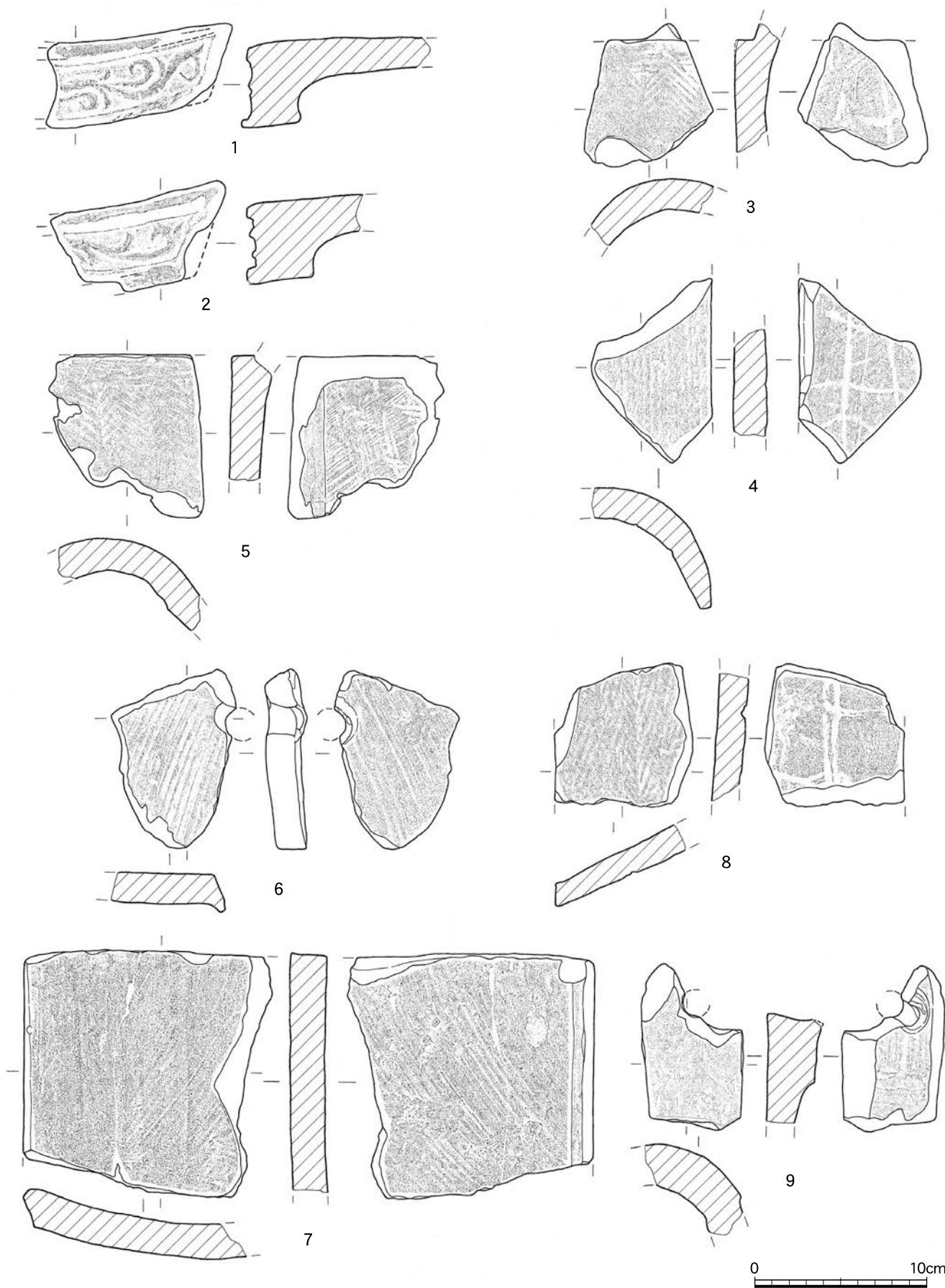
第48図1,2が軒平瓦の破片である。1の瓦当部は右側端部の破片で、文様は断面が三角をなす凸線の唐草模様がみられ、蔓が3回巻いている。右端では下向きに終わる。頸は貼り付けで、頸裏は撫で付けられている。灰白色瓦である。造成層出土。2は灰白色の右端部破片で、3本の蔓がみられる。ただし、1に比較すると単純な蔓になる。左端部は上向きで収められる灰色瓦である。造成層出土である。

##### b. 丸瓦

同図3~5である。3は玉縁側の破片で、凸面にはわずかに羽状文様が認められ、凹面には刺し網状の紐圧痕と布目が残る。紐圧痕の幅は約4mmである。凸面は灰色、凹面は白砂が付着したやや褐色を帯びる。焼成はややあまい印象を受ける。厚さ約1.5cm。南壁下出土。4は側面が残る筒部破片である。凸面は縄目の打捺痕があり、凹面には刺し網状の紐圧痕と布目がみられる。紐圧痕の幅は約3mm。全体に灰色を帯びる。厚さ約1.7cm。南壁下出土。5



第47図 高麗系瓦:平瓦



第48図 大和系瓦：軒平瓦 1,2 丸瓦 3~5 平瓦 6,7 雁振瓦 8,9

高麗系瓦出土状況一覽 第55表

第56表 大和系瓦出土状況一覧

※〇は有孔

は凹面に白砂が付着する玉縁側の資料である。紐圧痕は縦位のものが二本になるものがある。凸面は羽状文様が施文される。焼成は良好である。厚さ約2.0cm。造成層出土である。

#### c. 平瓦

第48図6,7が平瓦である。6は釘留めの孔が見られる資料で、おそらく軒平瓦の平瓦破片と推測される。釘穴は一方から穿たれている。口径約1.8cmである。凹面側は白砂が多く、糸切り痕が明瞭である。東南部出土。厚さ約1.7cmである。7は凹面に整形時につけた無紋の叩き板の痕跡がみられる。叩き板による平面の間隔は約4.3cmになる。凹凸面には白砂が多くみられる。灰色瓦で、厚さ2.0cmである。東西階段出土である。

#### d. 雁振瓦

同図8,9が本資料である。8は平瓦部分の破片で、平坦である。凸面には羽状の叩き痕があるが、撫で消され明瞭ではない。凹面側には刺し網状の紐圧痕が残る。縦間は約4.4cm、横間は約4.0cmを計測する。東南部出土。9は丸瓦部分の端部破片である。凸面には羽状叩き文、凹面には縦位の撫で痕が残る灰色瓦である。なお有孔資料で凸面側から釘穴を穿っている。孔径は1.1～1.5cmをはかる。造成層出土である。

## II. 近世及びそれ以降の屋瓦

### A. 明朝系瓦

明朝系瓦は本地区出土の瓦の主体瓦で、総数8,189点余りの破片からなる。瓦の種類は軒丸瓦(100点)、軒平瓦(80点)、平瓦(6,506点)、丸瓦(1,473点)、役瓦(26点)の5種類で、本瓦葺きの組み合わせは揃っている。これら瓦を焼成技術や文様構成、素地の視点で、軟質灰色瓦系と硬質の灰色瓦と赤瓦系の3種類に分類される。出土量は軟質灰色系瓦は総数5,032点、硬質灰色系瓦1,788点、硬質赤色系瓦1,316点である。以下、首里城西のアザナ跡出土の瓦に準拠し報告する。

#### 1. 軟質灰色系瓦

還元焼成炎で焼成された灰色瓦である。焼成がやや弱く、泥質を呈するものが多い。金属などの硬い器具で容易に傷がつく。色調は基本的には灰色であるが、まれに褐色を帯びるものもある。しかし、この褐色を帯びるものは、胎土中央においては灰色を帯びサンドウイッチ状を呈するものが普通である。軒丸瓦の瓦当文様は具象的な花文とそれを簡略化した花文がみられる。珠文は比較的小さく数が多い。瓦当と丸瓦の接合角度は、やや丸瓦の端部が瓦当面頂部よりは下がる位置で接合し、ほぼ90度でおこなわれている。一方、軒平瓦は接合は100度から115度の傾斜が付き、さらに軒丸瓦と同じく、瓦当裏の接合部分が厚く粘土が使用されている。平瓦の特徴は桶巻整形後、分割後に残る凹面側の紐圧痕がそのまま窪みとして残されるケースが殆どである。本瓦の種類は軒丸瓦(17点)、軒平瓦(22点)、丸瓦(979点)、平瓦(3,988点)の4種類である。

#### a. 軒丸瓦

瓦当文様はいずれも花文様で、花柄の配置構成から側視型と正視型に分類できる。この灰色系瓦は現時点では側視型が占める。花文様の分類は既報告2に準拠すると、I a類(2点)、I b類(7点)、III類(17点)、IV類(1点)の4種類が得られ、その内のIII類が多く出土している。

第49図1は瓦当縁部の一部残る資料である。外縁部にみられる大きさが約0.5cmの小さい珠文は約0.65cm間隔で外縁を巡り、その内側に花弁の髣が配されている。瓦当面は灰黒色を帯びる。文様は比較的シャープである。欠損状況では丸瓦部分の剥離痕がみられる。洞穴内出土である。I a02類。

同図2は風化の著しく進んだ資料で、瓦当文様の花文が僅かに残っている。瓦当外縁は約1.5cmと比較的幅がある。また、文様の珠文は大きさが約0.8cmと大きく、その間隔は密にみられる。瓦当裏面には瓦工の指圧痕が残る。B-1グリッド出土。I a12類。

同図3は先の2と同様の文様を施文する。珠文の大きさ約0.5cmと大きく、外縁の幅なども数字は近い。丸瓦との接合角度は僅かに傾斜がみられるもので、90~100度に近い。灰色瓦。造成層出土である。I b01-2類。

同図4は珠文の大きさが0.7cmで、間隔が広くなる。この瓦当は珠文の数が少ないタイプである。外縁の一部に漆喰の付着が認められる。前述の3,4と同様に整形の際に付けられた手の平の跡が瓦当裏に残っている。灰色瓦である。洞穴内出土である。I b02-1類。

同図5は先の4と同じ珠文が0.85cmと大きく、その数も少ないタイプである。文様の造形は大ぶりで、凸状の文様紐も角がとれてあまい。全体にレンガ色を帶びているが整形、胎土の特徴はこの灰色瓦グループにはいる。洞穴内出土である。I b04類。

同図6はIIIタイプの初原的花文を施文する花芯部の破片である。灰色瓦。瓦当裏には手の平が明瞭に圧痕として残る。美福門出土である。III02類。

同図7は瓦当文様の一部を残す細片である。花弁の先や、茎の部分がみられる。瓦当の特徴的に頸部分が細くなる。灰色瓦。南壁下層出土である。III04類。

同図8は瓦当径が推定約15.2cmの資料である。瓦当裏には前記にみられた手の平圧痕はみられない。灰色瓦で焼成は良好である。表面採集。III08類。

同図9は瓦当径が推算10cmの小型軒丸瓦である。文様は風化しているが花弁の形状からみると牡丹文様と判断される。灰色瓦。表面採集。類例文様は浦添城趾から出土している。III08類。

第50図4は花弁状の一部を残す軒丸瓦の瓦当破片である。同文様は数は少ないが、首里城内からすでに出土している。表面は褐色を帯びるが、劈開面は灰色を呈する。IV01類。

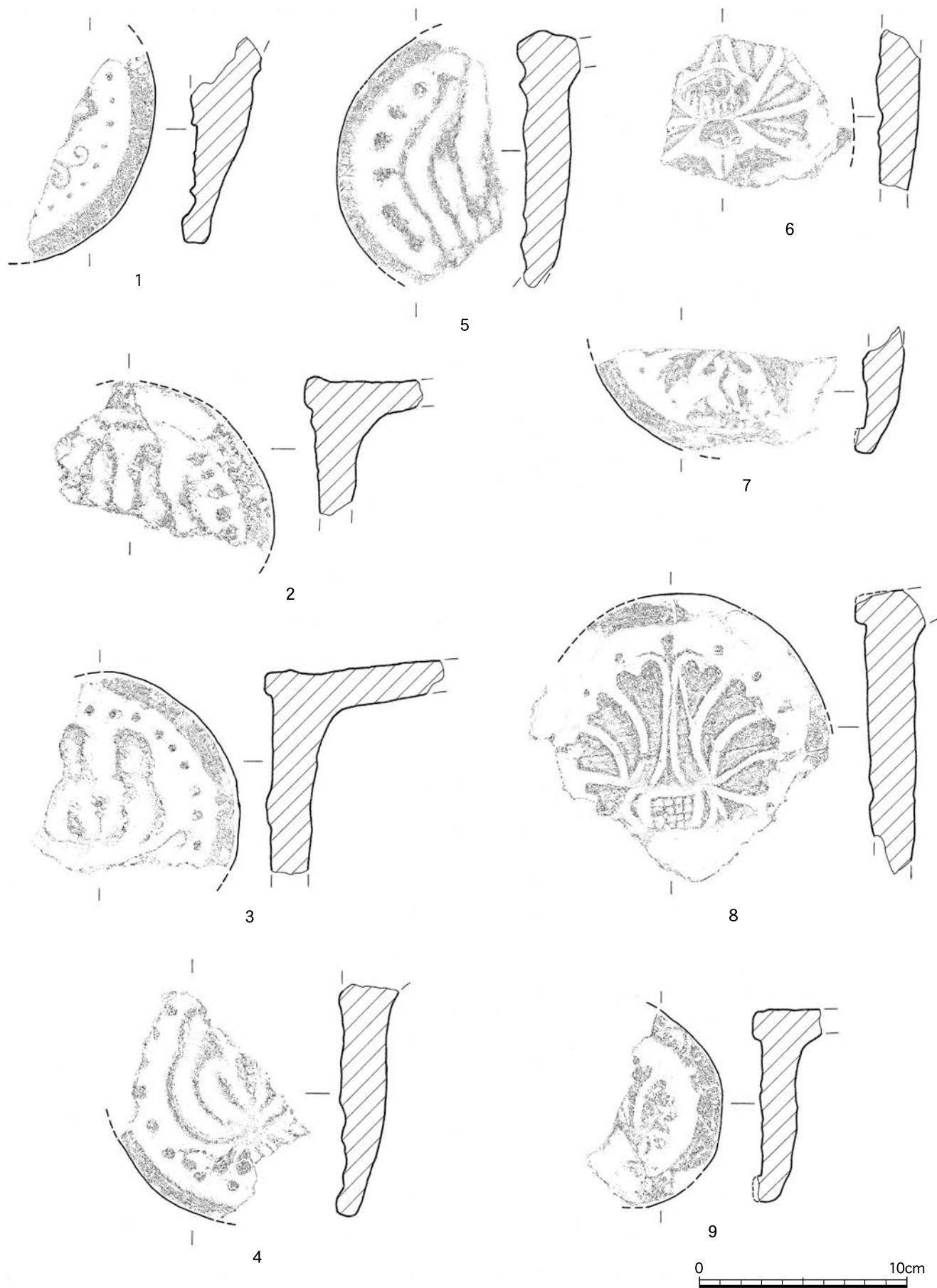
### b. 軒平瓦

本瓦の瓦当面は倒三角形を呈する。瓦当文様は牡丹やその他の草花文様でI、II、III類の3種類が出土している。

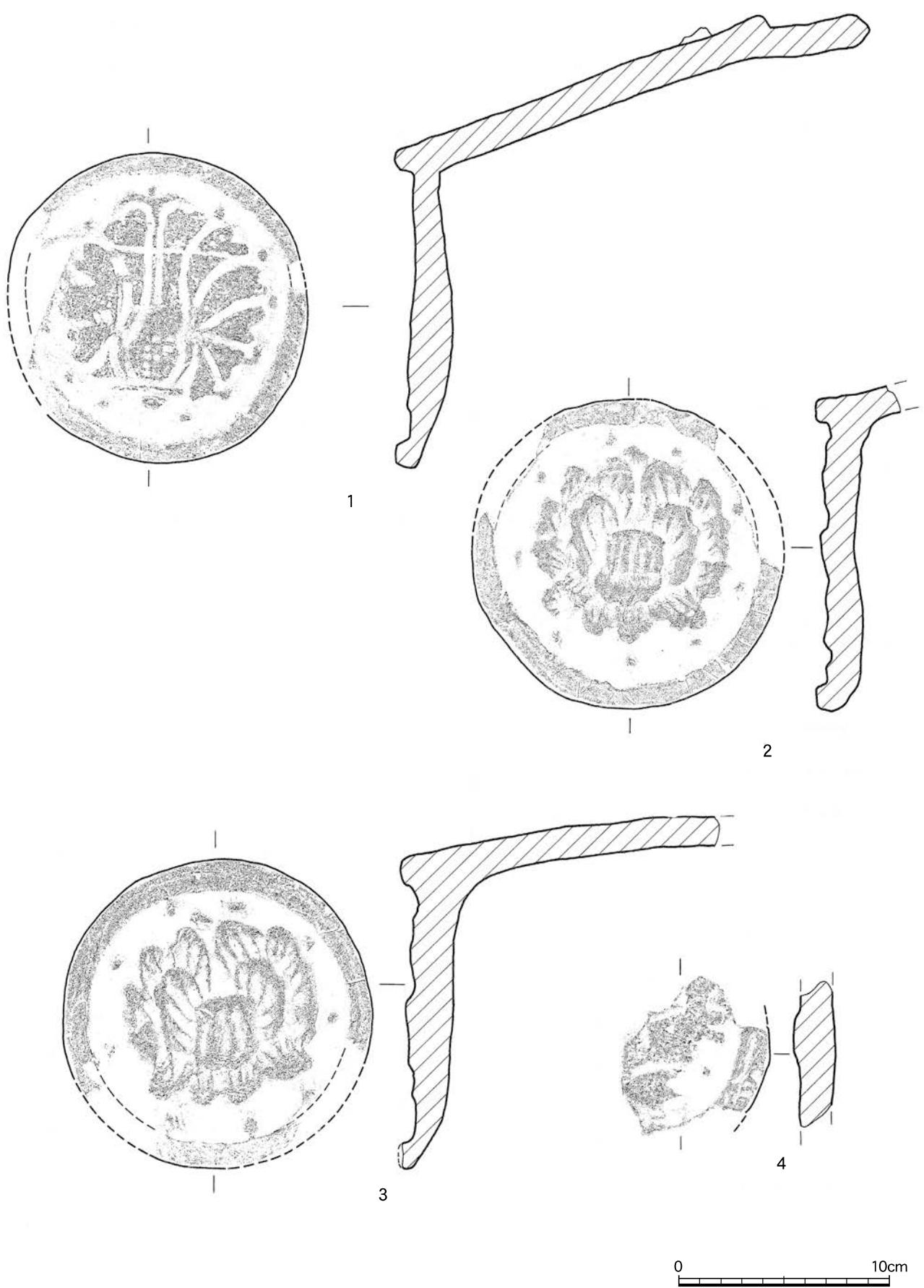
第51図1は最も具象的な花文様が施文されるタイプである。倒三角の端部を欠く。やや褐色を帯びる灰色瓦である。弦長さ22.1cm。I-8グリッド出土である。I類。

第51図2は瓦当面の資料であるが、著しく摩滅している。表面は褐色味を帯びるが胎土中央は灰色瓦である。瓦当裏の接合部分が著しく厚く粘土がつかわれ、漸次頸に向かい減じている。I-8グリッド出土。II類に相当する。

同図3,4は同一文様系とみられる瓦当資料である。3はIII01類で、4はIII B01類である。前者は瓦当の器厚が厚く、表面が褐色を呈するが胎土中央は灰色を帯びる。後者は前者に比較し薄い。焼成は灰色で、両資料とも表土層出土である。



第49図 明朝系瓦：軒丸瓦（1）



第50図 明朝系瓦：軒丸瓦（2）

### c. 丸瓦

第52図1は側面の一部を欠いた丸瓦で、筒部の中央がやや盛り上がる。玉縁の内側は面取りされ、側面は割り面になる。凹面は布目が覆う。凸面の両側には漆喰が付着し、その使用の一端が知られる。色調は灰色を呈する。長さ約33.4cm、玉縁側の筒部幅13.6cm、玉縁長さ4.0cm。残存重量1.22kg。H-6造成層出土である。

第53図1は玉縁を欠いた端部の破片である。筒部中央には釘穴が凸面側から穿たれている。穴の平面形はやや橢円形を呈する。側面はなで整形されているところをみると軒丸瓦の丸瓦破片と推定される。凸面は無紋である。器面には白い漆喰が付着する。表面採集である。

同図2は玉縁側のみの破片である。玉縁表面に搔きによる線が認められる。偶然ではなく意図的なものと判断し図化した。玉縁はほぼ垂直に段を形成していて、長さが5.0cmである。凹面は布目と紐圧痕が観察できる。I-8グリッド出土である。

同図3は表面が赤褐色を帯びるが胎土中央が灰色を呈する。玉縁側の破片である。玉縁の段はややルーズで長さが上場が6cm、下場が5cmをはかる。玉縁側面はヘラ削りがおこなわれている。また、玉縁表面に鎌道具による搔き傷で「×」がみられ、凹面は粗面を呈する。表面採集である。他に、丸瓦の四隅部分がそろったものを1枚として数え、破片数で割り出すと約54枚と、およその数が割り出せた。

### d. 平瓦

第52図2は一部の角を欠損するが平面形が台形を呈する平瓦である。明らかに桶巻技法で成形された製品である。凹面の広端部側には桶の紐圧痕がみられる。また、使用を示す漆喰が認められる。凸面の狭端側には整形時につけた囲繞する指の凹線が残る。また、中央部はナデ工具を用いた縦位の撫でが幅約4.5cmの面が並んでいる。長さ24.8cm、幅22.2cm、厚さ1.7cm。残存重量1.6kg。造成層出土。

同図5は端部破片である。凸面側に線描きされたもので、すだれ状に引っかき線を描く。意図は不明。内面は布目と桶の紐圧痕がみられる。厚さ約1.4cm。表土層出土である。

同図6は珍しい例であるが、凸面側の端部に「大と二」のスタンプ文字がみられる資料である。博瓦と共に通するスタンプである。灰色を呈し、一部に漆喰の付着が認められる。大きさが約2.8cm、厚さ約1.4cm。造成層出土である。

平瓦の枚数を割り出すため、四隅の破片数を4点で推算すると、約244枚の個体数量が出せる。これはおよその枚数をだす一つの方法である。

### e. 役瓦

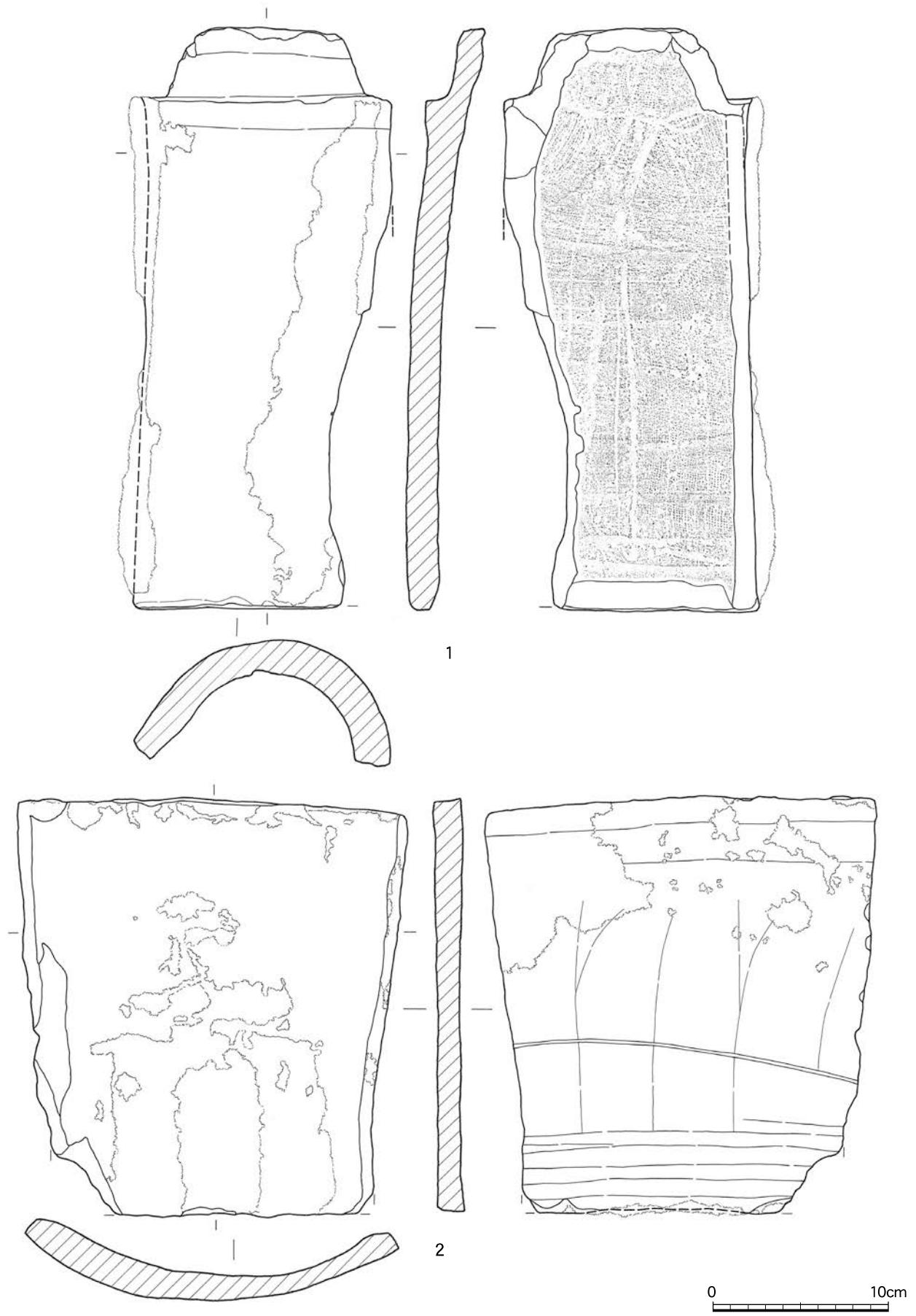
第53図7は手づくねによる雲形の飾り瓦である。瓦当に付された波状文様は断面が三角形で表現されている。裏面は割れ落ちているため、本来の厚みについては不明。色調は赤褐色を帯びる。表土層出土である。

通常の丸瓦を製作途上の段階で、二分割した製品をここでは、役瓦として報告する。ほぼ完全形が14点得られている。第54図1・図版55-1～3は玉縁側の完製品で、端部面には切断に糸切り技法が使われたことが明瞭に残っている。全長約17.3cmで、玉縁が約5cm、筒部が約12.3cmである。4は玉縁状の製品であるが、両端面に糸切り痕がみられる特殊な製品である。長さ約4.4cmである。第54図3・図版55-5～7は端部側の筒部資料である。端部の凹面には面取りが残されている。このことから整形途中においてほぼ丸瓦の整形が終了した時点で、一個体の丸瓦を分割したことが理解される。全長約13.3～13.8cmである。

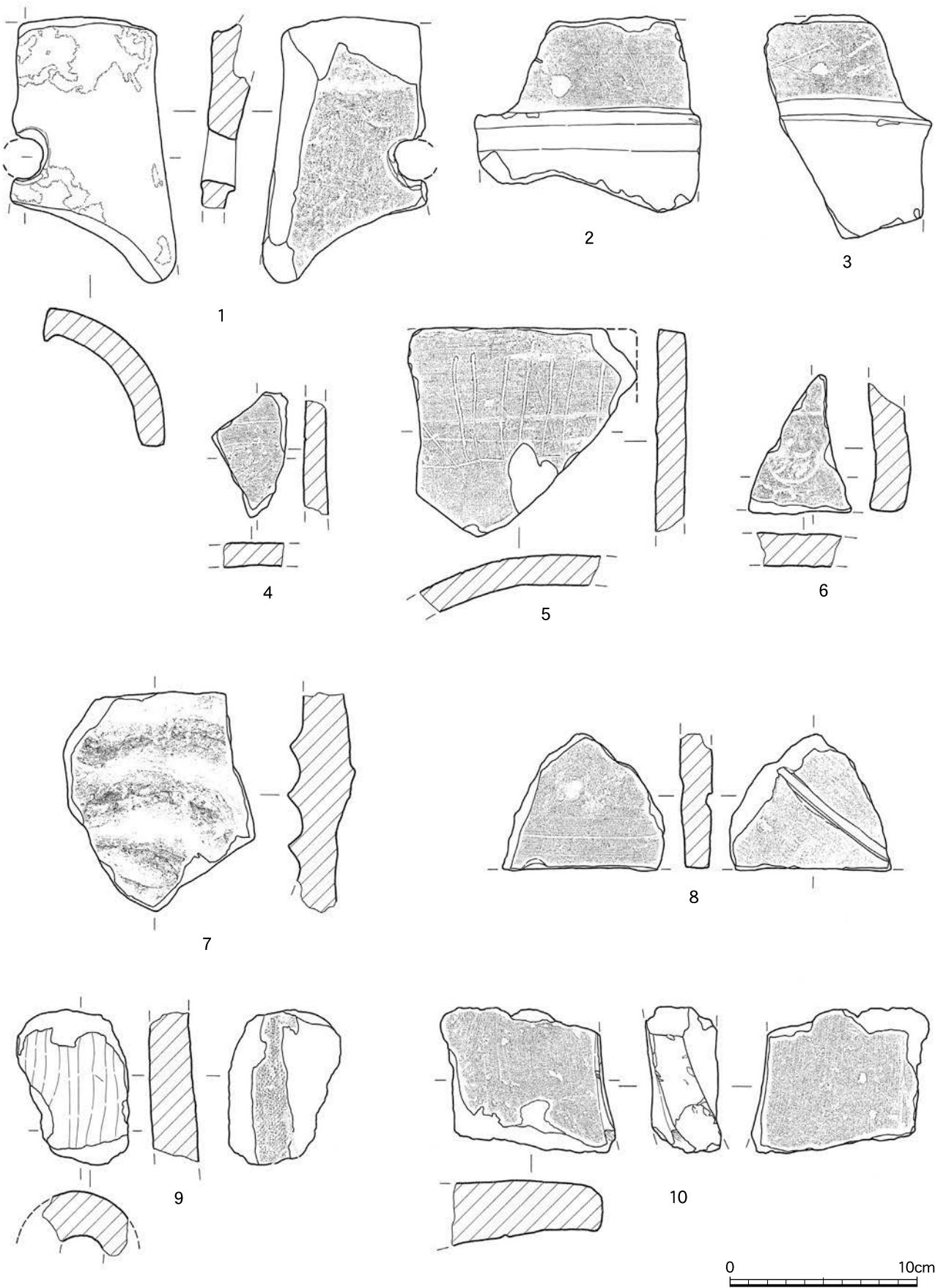
第55図は巻毛を形づくるもので、表面にガラス質の緑釉を施釉する。右巻に立体的である。素地ははだ色。



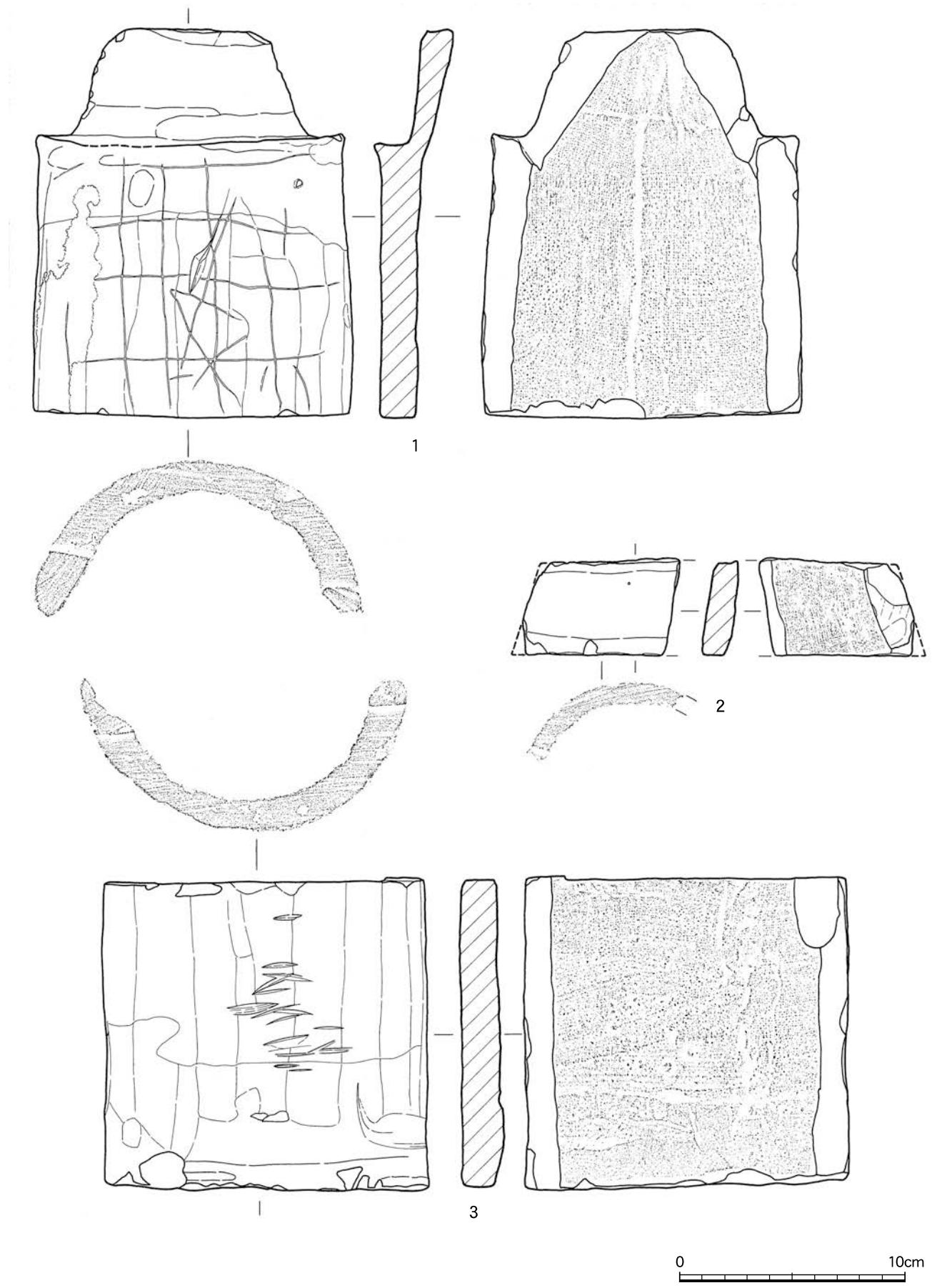
第51図 明朝系瓦：軒平瓦



第52図 明朝系瓦：丸瓦 1 平瓦 2



第53図 明朝系瓦：丸瓦 1~3 平瓦 4~6 飾り瓦 7 その他 8,9,10



第54図 明朝系瓦：丸瓦（役瓦）

## 2. 硬質灰色系瓦と硬質赤色系瓦

軒丸瓦(55点)、軒平瓦(37点)、丸瓦(494点)、平瓦(2,518点)、役瓦(26点)の5種類と微細不明片からなる。前述の灰色系瓦に比較して、明らかに焼成が良好の一群である。焼成が還元焼成炎の灰色瓦と酸化炎の赤色系瓦が認められる。前項の灰色系瓦と異なるところは、焼成では本類が良好で、胎土中央まで灰色を呈している。全体に薄手の器厚である。赤色瓦は赤～明褐色の瓦質タイプと陶器質に焼き占められた暗褐色を帶び、部分的に自然釉がかかり光沢をもつものである。軒瓦の瓦当文様は花文が施され、抽象化がかなり進んだものが多数を占めている。軒丸瓦の珠文は一粒が大きく、その数も少なくなる傾向がみられる。また瓦当面と丸瓦の接合角度も、互いの段差がなく、105度に傾斜が付され、軒平瓦の傾斜角度とほぼ同じになる。また、軒丸、軒平両瓦とも、接合部分の粘土の量が少なくなるよう、薄手に整形されている。平瓦では、桶巻に付着した紐圧痕の窪みがみられなくなる。

### a. 軒丸瓦

第50図1は側視型の牡丹の花を描く。瓦当部の一部を欠損するが丸瓦部分もよく残った完全形の資料である。珠文の大きさは0.6cmで低い粒を成形する。瓦当と丸瓦の接合角度は110度をはかる。瓦当径約15cm、丸瓦の厚さ約1.5cm。丸瓦の長さ30.5cm。丸瓦の凸面には漆喰の付着がある。瓦当裏の粘土は中央が凸レンズ状に厚く整形されている。色調は明褐色である。III類タイプである。

同図2は花文が正視型を呈する。珠文は0.6cmで明瞭でない。瓦当裏の粘土は接合部分から瓦当頭に向かい漸次薄く整形されている。瓦当径15.3cm、厚さ1.35cm。瓦当と丸瓦の接合角度は100度をはかる。

同図3は瓦当部のみの資料である。明褐色を呈する。瓦当径約15cm、厚さ約1.35cm。瓦当裏は横ナデがおこなわれ、平均した厚さに整形されている。瓦当と丸瓦の接合角度は約98度をはかる。2,3両資料ともIXCタイプである。

### b. 軒平瓦

第51図4は明らかに灰色瓦である。文様はIII類タイプである。瓦当裏の粘土量は前記灰色系瓦に比較すると極めて薄くなる。表土層出土である。

同図5は赤色系瓦で、文様は前記4と類似する。花芯の形状がやや異なる。瓦当裏にある接合面は粘土の占める割合は薄くなる。表土層出土である。VII類タイプである。

### c. 丸瓦

細片で、特徴的なものがいたため、図は割愛した。出土量は494点である。四隅の破片数は172点である。四隅の破片で割り出し個体数を推算すると、約43枚が推定される。

### d. 平瓦

細片のため丸瓦と同様に図は割愛したが、第53図4は凸面側に釘状の尖るもので線描した特徴が残るためとりあげた。厚さは約1.2cmと薄い。小片のため全体の構図は不明である。表土層出土。類例として歓会門・久慶門内側地域から出土している。丸瓦同様に、四隅の破片から個体数を推算した結果、237枚になる。

## B. 近世大和瓦

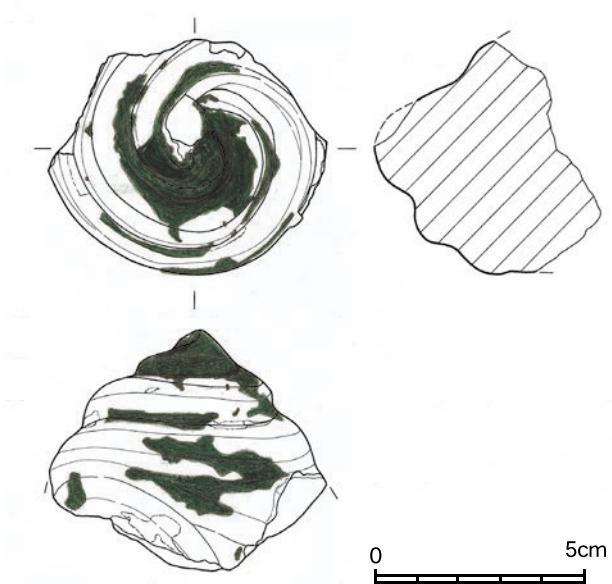
この種の瓦は燻し銀色を帶び、光沢のある器面を特徴とする。丸瓦3点、平瓦6点の僅かな量が得られた。細片のため図は割愛した。

### 不明資料

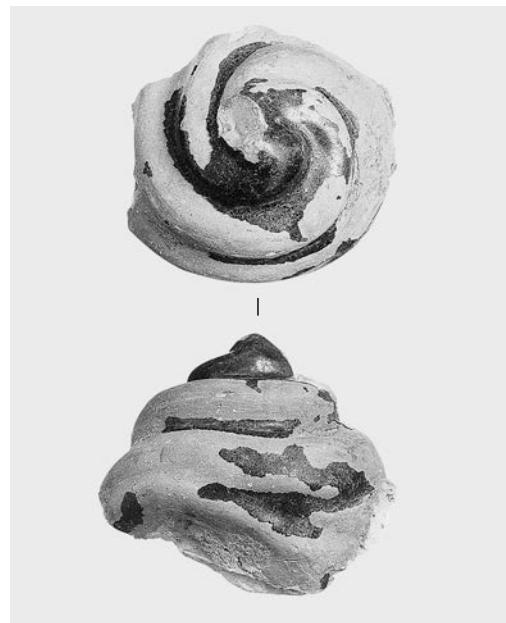
第53図8は平瓦の端部側破片で、凹面に幅約0.6cmの深い斜位の線がみられる資料である。厚さ約1.5cm、色調が灰色である。F-10グリッドである。

同図9は大きく破損しているが、轍の羽口状にも似る瓦製品である。口径とする部分を推定復元すると径約6.3cmを計測する。造成層出土である。

同図10は側面に緩やかなカーブをもつ製品で、瓦質であり、器の破片の可能性を有する。厚さ約3.3cmである。I-8グリッド出土である。



第53図 役瓦



図版2 役瓦

第57表 近世大和瓦出土状況一覧

種類・分類		出土地	南カベ下	東南部	東南北穴	造成層	合計
丸瓦	玉縁左片		1			1	2
	端部左片	端部右片					
	側面破片	上下端破片					
	筒部破片			1			1
	小 計		1	1	0	1	3
平瓦	広端左片	広端右片					
	狭端左片	狭端右片			1		1
	側面破片	上下端破片					
	筒部破片				1	4	5
	小 計		0		1	4	5 1

第58表 明朝系：丸瓦（役瓦）出土状況一覧

種類 分類		出土地	洞穴内	H-6 洞穴内	造成層	I-8	合計
灰色 II a	完形	玉縁有	0	4	0	1	5
		玉縁無	1	8	0	0	9
	小計		1	12	0	1	14
破片	角	0	5	0	2	7	
	玉縁	0	4	1	0	0	5
小計		0	9	1	2	12	

明朝系：軒瓦出土狀況一覽  
第59表

種類・分類	出土地		美福門		洞穴内		南力べ下		C-10		F-10		H-8		I-8		東南部		東西西端		東西西側		東西階		東南北六		造成層		表深		表土		合計	
	軒丸瓦	軟質 灰色瓦	I	a 02	a 12			1								1																	合計	
			01-2																														1	
	軒丸瓦	硬質 赤色瓦	b 02-1		1	1		1																								1		
			04		1																										4			
	軒丸瓦	軟質 灰色瓦	02	1																											2			
			04																											1				
	軒丸瓦	硬質 赤色瓦	07																											1				
			08																										1					
	軒丸瓦	軟質 灰色瓦	IV	01																									1					
			III	09	5																							1						
	軒丸瓦	硬質 赤色瓦	01	19																								1						
			02	9																							1							
	軒丸瓦	軟質 灰色瓦	分類不可	3																							1							
			小計	37	3	3	2	0	1	1	7	5	2	1	1	1	5	11	10	11	100	1												
	軒丸瓦	軟質 灰色瓦	I																								2							
			II																							2								
	軒丸瓦	硬質 赤色瓦	III	01																						2								
			b01	4																					2									
	軒丸瓦	硬質 赤色瓦	III	b02	22																				2									
			VII	02-2	1																			2										
	軒丸瓦	軟質 灰色瓦	分類不可	5																				1										
			小計	32	0	2	0																	1										
	軒丸瓦	飾り瓦																					1											
			その他																				1											
	合計		69	3	5	2	1	2	1	1	13	10	3	1	3	5	22	18	18	26	184	1												

第60表 明朝系丸瓦の焼成(色調)別分類状況一覧

※※○△は有孔	軟質灰色系五…灰色la. 硬色lb	硬質灰色系五…灰色 II a	硬質赤色系五…赤色 II b. 赤色 II c
---------	-------------------	----------------	-------------------------

明朝系平瓦の焼成色調)別分類状況一覧 第61表

## 第15節 塚

塚は総数159点余出土した。得られた資料はすべて破片であるものの、既報告の首里城跡京の内地区出土資料からすると、平面形が三角形、四角形、長方形、多角形があり、さらに長方形や多角形のものにかみ合わせの段や、下駄状の突起を付すものなどバリエイションが認められた。現時点では形態的に6種類に分類される。焼成は基本的に還元焼成炎で、灰色を帯びるものが一般的であるが、中には表面のみ褐色を呈するものもある。塚の表裏面は明瞭に区別され、表面(踏み面)は概して丁寧にナデ整形がおこなれ、他方、裏面は僅かに凹面し、粗面のままにおいたものが普通である。既報告に準じ、新たなものも加えて以下に略記する。

A類 平面形が長方形で、同一の平面の対応する側辺側に抉りを設けるタイプである。抉りが短辺側に付き、厚さが約10cmのもの(a)、長辺側に抉りがあり、約3cmと薄手のもの(b)、短辺側に抉りがあり、3cmから5cmのもの(c)の3種に細分される。第56図1に示すように側面に抉りのある破片資料で、厚約3.2cmとc類に相当する。同図2は出土資料中最も厚さが約9.8cmで厚いものである。長軸の両側に抉りが付され、裏面は短軸側に抉りがみらる灰色の資料である。抉りの位置からAa類にあたる。

B類 同図3は同一平面の長辺側にまず抉りが施され、短辺側では同一面ではなく、表裏面で抉り加工がされた資料である。厚さ約6.2cmで中間的な器厚をなす。色調が褐色を帯びる。造成層出土である。

C類 下駄状の突起を施すタイプである。塚の平面形態、この突起の形態により4種類に細分される。平面形が長方形で、突起が二本下駄状にあるもの(a)、平面形は同じであるが、突起に返りがつくもの(b)、三角状を呈し、下駄状になるもの(c)、前者同様に三角状になるが、下駄に返りがつくもの(d)である。第57図1は灰色を帯び、最厚部で約8.0cmで、下駄部分では長さ4.8cmを計測する。3は三角状の破片で、返りのある下駄状突起を有する。厚さ約8.0cmで、灰色を呈する。2は対応する辺の表裏側に抉りが造られ、広い平面にも抉りの突起がみられる。面厚さ3.2cmで、灰色を呈する。図版57-4はcタイプ、同図版5はdタイプに当たる。

E類 平面形が正四角形を呈するものである。第58図1は一辺側が欠落しているが、ほぼ正四角形を呈するものと判断される。表面はやや光沢が残り、裏面は表面ほどには整形がおこなわれてない。側面は平面に対し垂直ではなく、裏面側に内傾するように造形されている。おそらく、施工の際にはめ込みを容易にする工夫の成形であろう。色調は灰色。一边の長さ約24.8cm、厚約4.2cm。造成層出土である。

F類 同図2は平面形が三角形を呈するものである。本資料も角の一部を欠くが、全体の形状は容易に再現できる。一边の残存長が約24.8cm、厚約4.3cm。褐色を呈する。H-6グリッド洞穴出土である。

G類 第56図4,5は側面が斜めに成形され、抉りが付されたものである。4は平面の一部に角を有するものである。側面において互い違いの段を成形している。厚さは約3.2cm。5は蓋かもしくは棟瓦状をなすもので、中央部分に屋根状の折が付けられたもので、その角度は125度である。両側面には抉りが付されている。厚さは約3.2cmで、灰色を呈する。類例が湧田古窯跡から出土している。

### その他の資料

第58図5,6は整形に特徴があるため取上げた。いずれも裏面に櫛状の削りがみられる。前者は淡褐色で造成層出土。後者は灰色、厚さ4.1cmを計測する。造成層出土である。

第57図4は明らかに前述のような瓦ではないが、材質、焼成が同じであることから、敷き瓦に関連するものとして本項目で報告する。概観は束柱の一部を成すようなものにみられる。とくに基部らしき突起が成形されている。柱部分は成形は丁寧で、器面の保存も良好である。

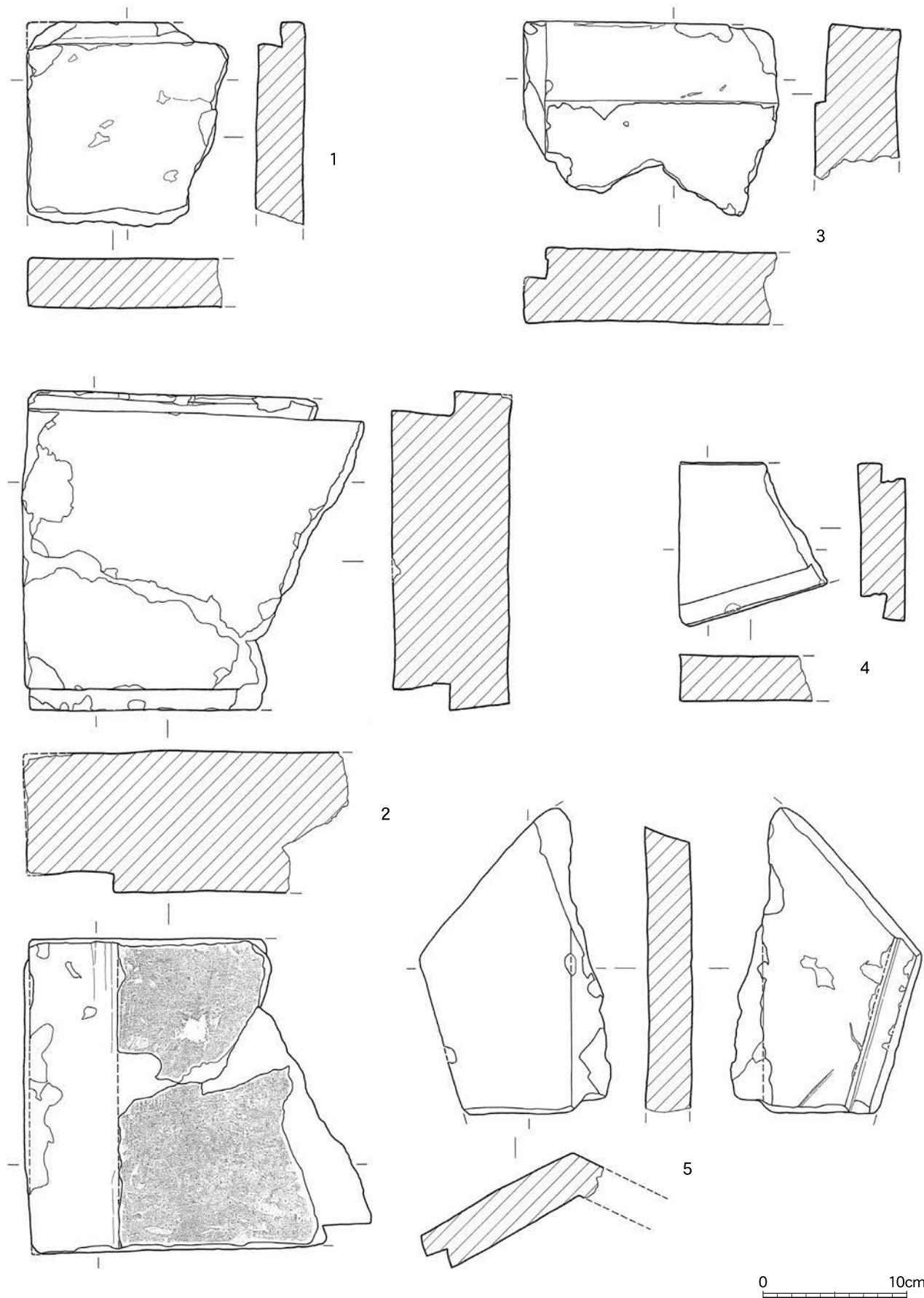
### 第62表 塚出土狀況一覽

出土地		美福門		測穴内		南壁下		C-10		G-5 造成管		H-6 洞穴内		H-7		I-8		I-9		東南部		東南部 北側		東南部西側		東西端		造成層		表深		表土		合計	
長方形	A a	赤		1/4	破片	破片	1/2	1/4	破片	1/2	破片	破片	1/2	1/4	破片	破片	1/4	破片	1/4	破片	破片	破片	1/2	1/4	破片	1/4	破片	1/4	破碎形	1/2	1/4 瓦片				
	A b	灰																																	
	A c	赤	前後	灰	1	1	1																												
		5.5cm	赤																																
		前後	灰																																
長方形	B	赤	前後	灰	1	1	1																												
	C b	赤	前後	灰	1	1	1																												
	C c	赤	前後	灰	1	1	1																												
	C d	赤	前後	灰	1	1	1																												
	Cタイプ不明	赤	前後	灰	1	1	1																												
正方形 (削り無)	E	赤	3cm~ 4cm	灰																															
	F	赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	2	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
		赤	3cm~ 4cm	灰	1	1	1																												
三角形	L	赤	5cm	灰																															
	M	赤	5cm	灰																															
	N	赤	5cm	灰																															
		赤	5cm	灰																															
		赤	5cm	灰																															
		赤	5cm	灰																															
		赤	5cm	灰																															
		赤	5cm	灰																															
		赤	5cm	灰																															
		赤	5cm	灰																															
不規則 (削り無)	刻銘	赤	5cm	灰																															
	擦痕	赤	5cm	灰																															
	不規則 (削り無)	赤	5cm	灰																															
	合計	赤	5cm	灰	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1				
総合計		4	1	1	12	2	5	6	1	1	20	1	1	10	3	2	1	6	1	1	10	3	2	1	69	7	7	159							

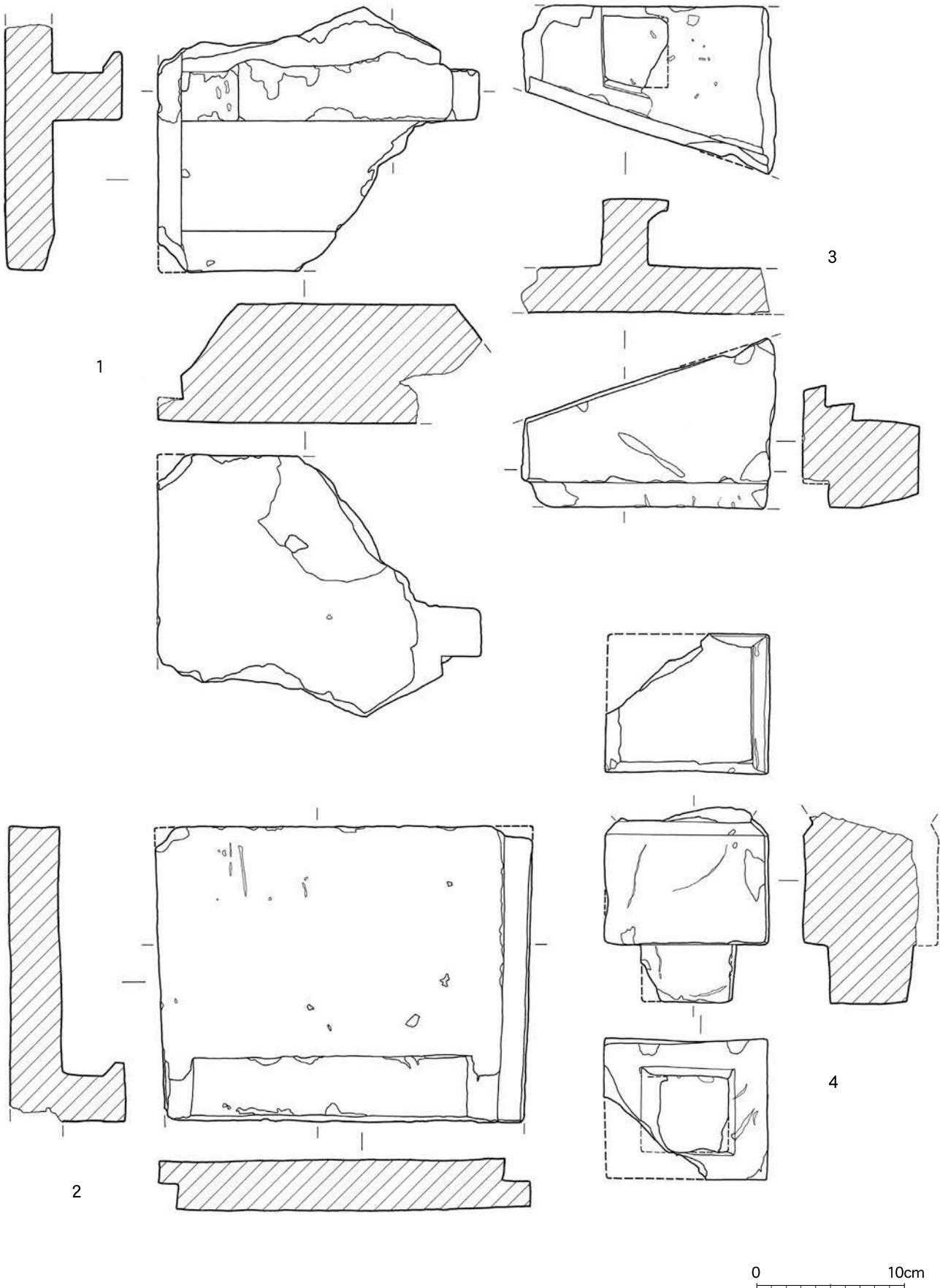
\*厚さに関しては該当する欄のみ記載した

第59回 3.4 江博

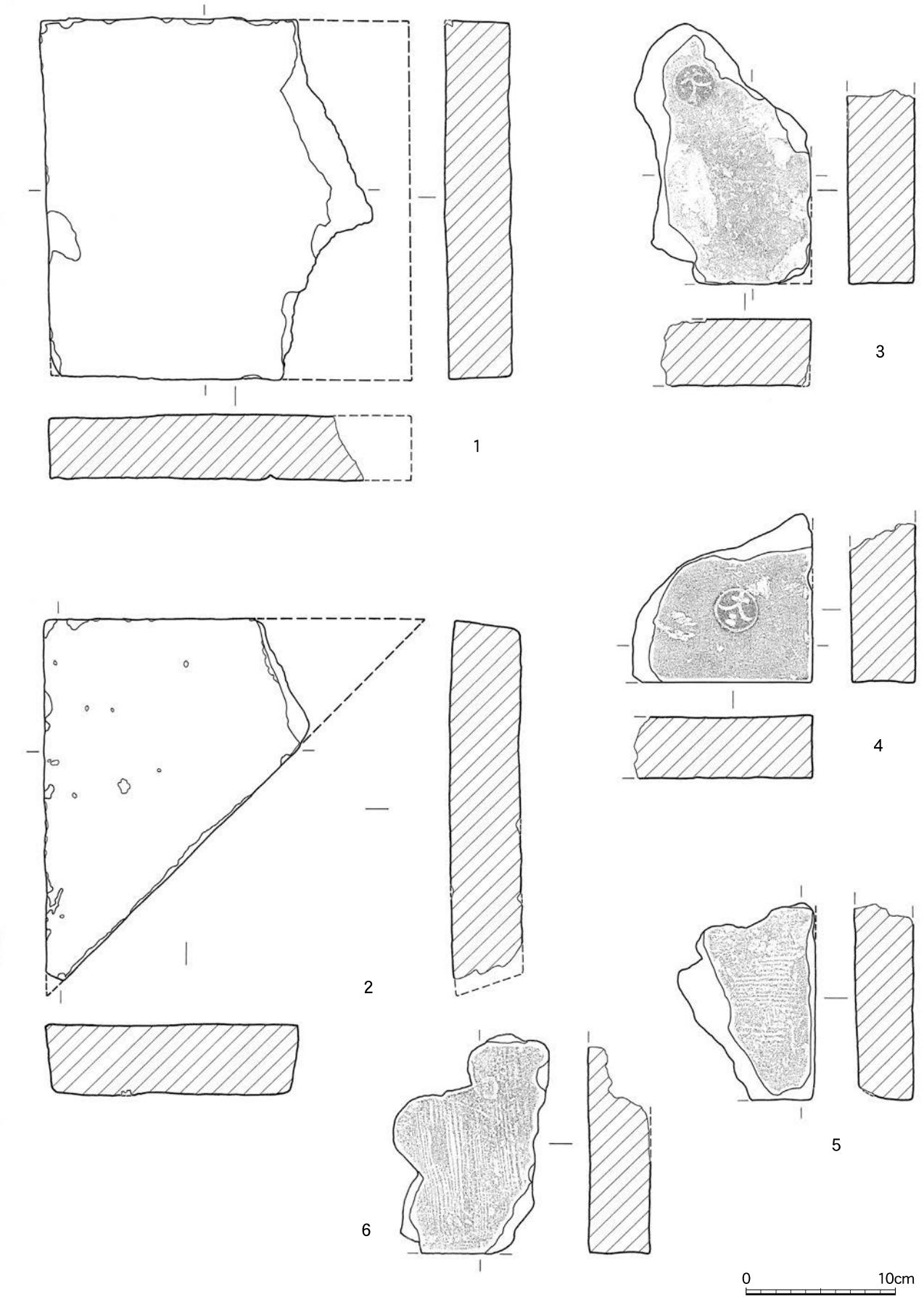
第35図5、1は寺門下面側、2は側の資料で、2種類記された。1は「一」の下に「大」と記し、2は「一」の下に「大」とその下に「二」を加えたもので、いずれも灰色を呈する。本地区からは屋瓦にも同様な「大と二」のスタンプ文がみられた。「大」字の丸の半径は2.9cm、美福門出土。後者の「大と二」の文字の大きさは半径3.0cmである。造成層出土である。これら同様の押印は湧田古窯跡で出土していて、消費地と生産地との有機的つながりを示す貴重な資料である。



第56図 塚 (1)



第57図 塚 (2)



第58図 塚 (3)

## 第16節 金属製品

### 1. 鉄鎌(第59図・図版59-1)

鑿頭と呼ばれる先端の幅が順次、幅が広く、そして薄くなるタイプの鎌。全体的に鎧が付着するが全形は窺うことができる。茎の部分は方柱状となり先端は破損している。全長は7.3cm、茎部は2.6cm、身部は4.7cm、残存量は28.9g。東南部出土。

### 2. 鉄釘(第59図2~11・図版59-2~6,9~11,13,14)

鉄釘は小片が多く出土し、うち全形を窺うことのできる10点をここで報告する。長さや厚さは多様であるが、断面の形態から3つに分類することができる。ほとんどの資料は鎧が付着し、残存状況は良好ではない。

#### I類

断面形態が正方形状になるもの。

第59図2は頭部がL字状となる。先端は破損している。縦径×横径は11.4×11.6mm、残存量75.7g。造成層出土。

同図6は頭部が一方に下がり、斜めに面を有する。先端は破損している。縦径×横径は4.6×4.5mm、残存量8.7g。東南部出土。

同図7は頭部が一方に下がり、斜めに面を有する。頭頂部は丸味を有する。縦径×横径は4.0×4.7mm、残存量2.9g。南カベ下出土。

同図9は頭部が3方へ広がる。前の2資料と比べて短く、そして断面も小さい。長さは3.3cm、縦径×横径は3.0×3.0mm、残存量1.7g。南カベ下出土。

#### II類

断面形態が長方形状になるもの。

第59図3は頭部がやや傾く。本来の形態か、頭部が打たれて曲がったのかは不明。縦径×横径は4.0×7.0mm、残存量14.8g。美福門地区出土。

第59図4は頭部が僅かにT字状に開く。先端は曲がる。縦径×横径は4.5×9.5mm、残存量16.6g。美福門地区出土。

同図5は頭頂部が平行で左右には張り出さない。縦径×横径は5.1×7.0mm、残存量11.2g。東南部出土。

同図8は頭部がT字状となる。先端部分の断面のみ正方形状となるものの、全体的に断面形は長方形状となる。縦径×横径は5.5×12.3mm、残存量42.3g。I-8グリッド出土。

#### III類

断面形態が円形になるもの。

第59図10は頭部が笠状となる。全長は短く、頭頂部は平坦となる。径6.3mm、残存量12.4g。I-6グリッド出土。

同図11は頭部が笠状となる。先端は曲がる。径7.5mm、残存量9.2g。I-6グリッド出土。

### 3. 飾り金具(第60図14,16,18,19・図版60-21,23,25,27)

第60図14は孔が5つ開けられ、その周囲に蹴彫りの略された唐花文と魚々子が配される。輪郭に沿って縁取りがなされておりその中に、全体的に唐花の花弁を描き、隙間を魚々子で埋める。魚々子は横位に、列状に打たれるが列

間に隙間が見られることから沖縄本島で制作された金具と考えられる(巻首図版12)。時期は不明であるが中世的様相を色濃く有する資料とされる。文様が見られる面には全体的に金箔が貼られている。端部については一方は丸く收まり、もう一方は魚尾状となる。用途は不明であるがベルトの先端に付属する金具か。縦4.1cm、横4.6cm、残存量8.5g。表土層出土。

同図16は用途不明の菊を象った金具。花弁は浮き上がるようにして表される。厚さは1mmと一定である。残存量は4.6g。美福門地区出土。

同図18は座金具。端部が輪花状となり、表面に中央の円形孔に向かってS字の線刻が見られる。厚さは1mmと一定である。直径2.8cm、孔直径6mm、残存量は2.3g。造成層出土。

同図19は座金具。円形で中央に方形の孔が開く。表面には線刻が見られるが不明瞭である。厚さは1mmと一定である。直径2.3cm、孔径7×6mm、残存量は1.9g。美福門地区出土。

#### 4. 簪(第60図22～25・図版60-31～34)

第60図22は銅製の簪。頭部は破損していて詳細は解らないが、花弁状の平板を冠したものと思われる。首とムディと竿から成る。全長8.2cm、残存量は3.9g。表土層出土。

同図23は銅製の簪。頭部は匙状となる。竿とカブから成る。全長11.9cm、残存量は4g。造成層出土。

同図24は銅製の簪。頭部は細長い耳搔き状となる。竿の断面形は上部が円形、下部が六角形状となる。全長18.1cm、残存量は8.2g。表土層出土。

同図25は銅製の簪。頭部は細長い耳搔き状となる。竿の断面形は上部が円形、下部が六角形状となる。全長18.8cm、残存量は9g。東南北穴出土。

#### 5. その他の金属製品(第59図12,13・図版59-19,20、第60図15,17,20,21・図版60-22,24,29,30)

第59図12は鉄製の鎌。刃は反りが見られず、直線状となる。先端は破損する。鋸化が進んでおり、かろうじて原形を窺うことができる。刃部全長13cm、残存量46.1g。東南北穴出土。

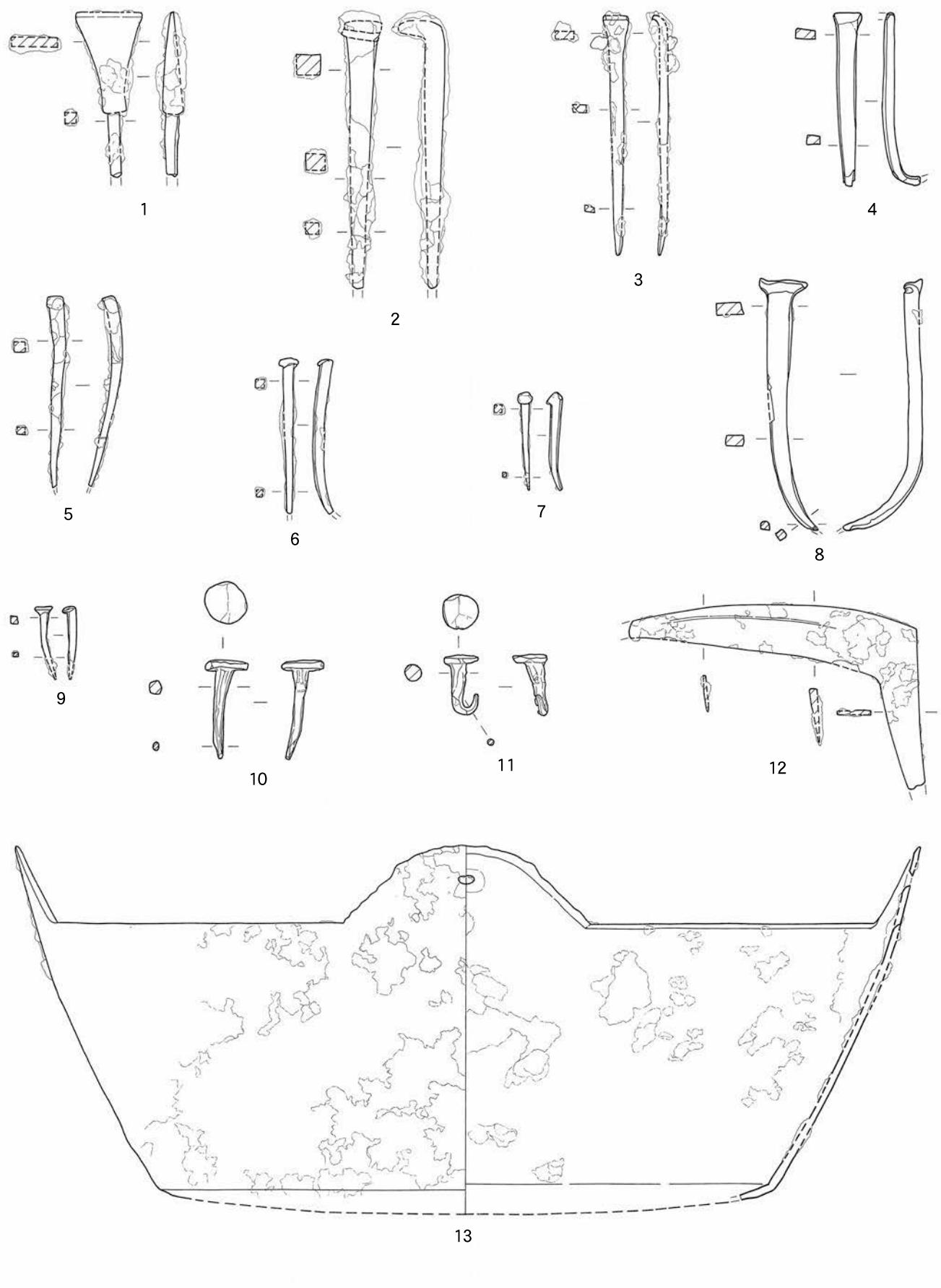
第59図13は鉄鍋。略三角形状の把手が4ヵ所付き、円形の孔が穿たれる。胴部の立ち上がりは直線的で、底部はやや下方へ膨らみを見せる。口径28cm、器高17cm、残存量687.5g。表土層出土。

第60図15は円形の板状製品。縁に沿って大小の円孔が穿たれている。中央にも小孔が見られる。厚さは1mmで銅製。残存量は12.1g。造成層出土。

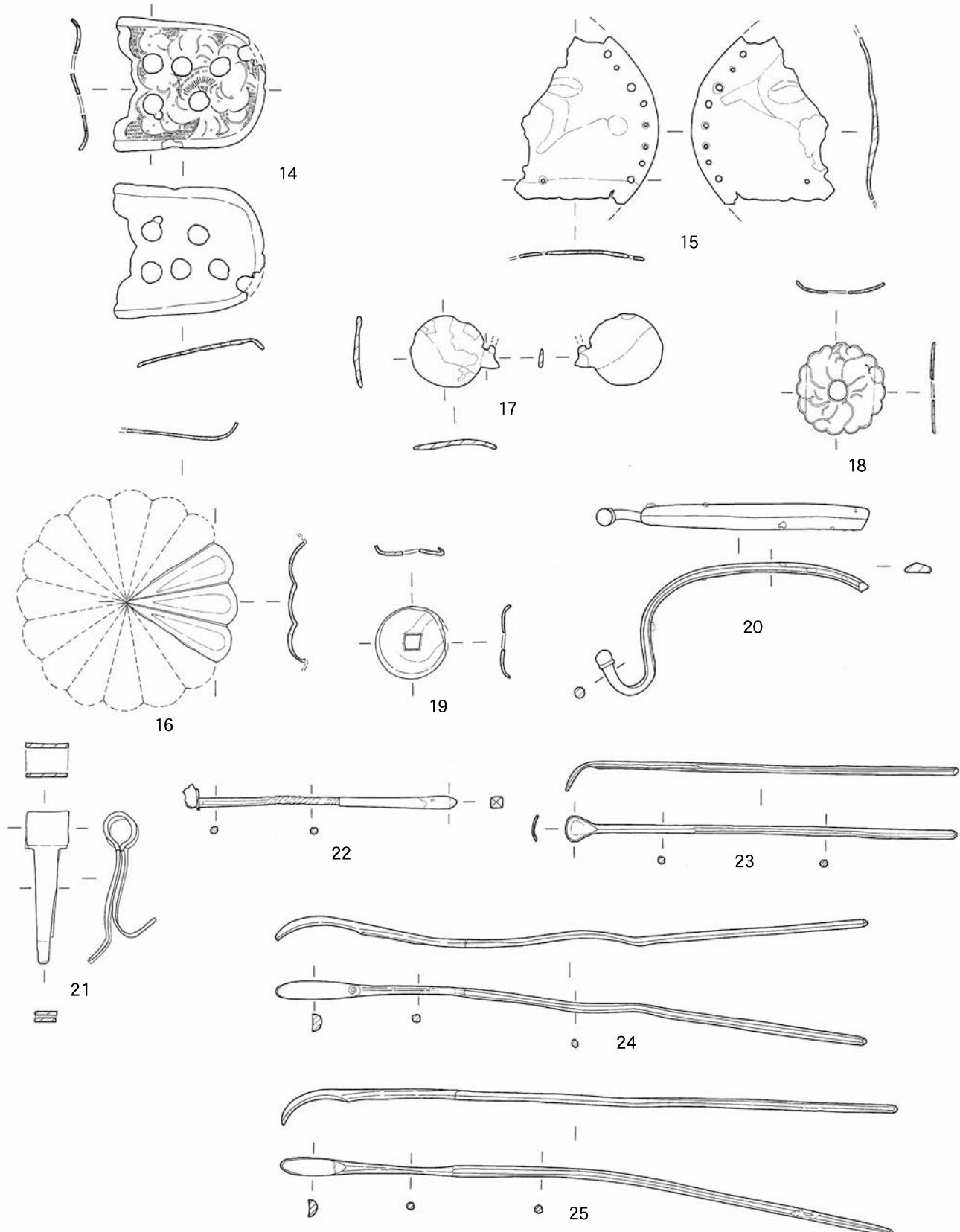
同図17は円形の板状製品で枝が付く。真円に近いが一部、破損が見られる。厚さは1mmで銅製。残存量は2.8g。南カベ下出土。

同図20は簾筈などの引き手金具か。銅製で先端近く断面形は細く、丸くなり、先端は球形となる。一方の断面形は楕円形となる。残存量は11.3g。造成層出土。

同図21は留金具か。銅製で先端が屈曲しており、原形を窺うことができない。残存量は8.1g。東南部出土。



第59図 金属製品（1）



第60図 金属製品（2）

## 第17節 錢貨

錢貨は総計201点出土している。内訳は近世以前の有文錢が75点、無文錢が59点、判読不明が67点であった。有文錢の完形資料は19点で全体数の約27%、無文錢のそれは30点で全体数の約47パーセントを占める。この数字から明らかであるが有文錢は破片資料が多く、無文錢は完形資料が多いのが注目される。中国錢は開元通寶（初鋤年代621年）が最も古く、あとは北宋～清代にかけて鋤造されたものが続く。第61図11に見られるように端平元寶が2枚溶着した資料も1点確認されている。韓半島から持ち運ばれた錢貨は朝鮮通寶が1点、日本から持ち運ばれた錢貨も寛永通寶（III期）が1点のみ出土している。他に在地の錢貨である世高通寶が1点出土している。無文錢は外径が23mmを越えるものから12mmに満たないものまでその大きさはバリエーションに富む。

第63表 錢貨法量観察一覧(1)

単位:mm, g, %

挿図番号・図版番号	錢名	初鋤年代	法量				背文	残存率 %	備考	出土地
			錢径 mm	内径 mm	錢厚 mm	重量 g				
第61図1 図版61	開元通寶	621	23.76	6.47	1.21	3.2	—	100	—	I-3
第61図2 図版61	開元通寶	621	23.66	6.99	1.58	3.2	—	100	—	I-6
第61図3 図版61	乾□□□	—	—	—	—	(0.5)	—	17	—	南カベ下
第61図4 図版61	至道□□	995	(17.72)	—	1.38	(1.2)	—	35	至道元寶	南カベ下
第61図5 図版61	太平□寶	970	24.78	5.82	1.24	(1.9)	—	75	太平元寶	南カベ下
第61図6 図版61	淳化□寶	990	24.46	5.44	1.38	(2.3)	—	76	淳化元寶	東南部西側
第61図7 図版61	景德元寶	1004	24.28	6.23	1.34	(2.9)	—	97	—	造成層
第61図8 図版61	□符通□	1009	20.64	1.66	1.30	(2.1)	—	50	祥符元寶	東南部西側
第61図9 図版61	天聖元寶	1023	25.01	7.18	1.25	(2.8)	—	99	—	I-3
第61図10図版61	皇□通寶	1038	23.91	7.87	1.39	(1.8)	—	75	皇宋通寶	南カベ下
第61図11図版61	□平元寶	1234	24.80	5.59	3.16	(5.5)	—	90	端平元寶 (二枚溶着)	造成層
第61図12図版61	熙寧元寶	1068	23.22	6.12	0.81	1.7	—	100	—	北カベ
第61図13図版61	元豐通寶	1078	24.30	5.68	1.45	3.8	—	100	—	北カベ
第61図14図版61	聖宋元寶	1101	23.79	5.71	0.82	2.5	—	100	—	北カベ
第61図15図版61	政和通寶	1111	139.49	6.51	1.68	(3.0)	—	85	—	南カベ下
第61図16図版61	嘉定通寶	1208	22.99	6.20	1.18	2.5	—	100	—	北カベ
第61図17図版61	洪武通寶	1368	23.99	5.36	1.63	3.5	—	100	—	造成層
第61図18図版61	洪武通寶	1368	23.33	6.23	1.30	(2.4)	浙	99	—	造成層
第61図19図版61	永樂通寶	1408	24.96	4.91	1.6	3.6	—	100	—	造成層
第61図20図版61	永樂通寶	1408	25.44	5.10	1.67	3.7	—	100	—	I-8
第61図21図版61	乾隆通寶	1736	18.59	5.12	0.60	0.9	—	100	—	美福門
第61図22図版61	朝鮮通寶	1423	24.12	5.27	1.36	3.4	—	100	—	I-8
第61図23図版61	寛永通寶 III期	1697～1747 1767～1781	24.81	5.76	1.32	3.5	—	100	—	東南部西側
第61図24図版61	世高通寶	1461	23.73	5.24	1.10	2.3	—	100	—	I-8
第61図25図版61	無文錢	江戸	22.50	6.00	0.73	1.8	—	100	—	北カベ
第61図26図版61	無文錢	江戸	17.72	8.05	0.69	0.6	—	100	—	造成層
第61図27図版61	無文錢	江戸	14.5	7.91	0.67	0.4	—	100	—	洞穴内H-6
第61図28図版61	輪錢	江戸	10.83	6.66	0.53	0.2	—	100	—	洞穴内H-6

第64表 錢貨法量観察一覧(2)

単位:mm、g、%

計測番号	錢名	初鑄年代	法量				背文	残存率	備考	出土地
			錢径	内径	錢厚	重量				
			mm	mm	mm	g				
29	開□□寶	621	12.59	5.19	1.19	(1.2)	—	50	開元通寶	南カベ下
30	□平□□	970	(9.99)	—	1.37	(0.5)	—	10	太平元寶	南カベ下
31	□□元寶	995	(18.42)	—	1.53	(1.7)	—	25	至道元寶	南カベ下
32	至□□□	995	(17.46)	—	1.36	(0.8)	—	20	至道元寶	南カベ下
33	景德□□	1004	(19.41)	—	1.53	(1.2)	—	25	景德元寶	南カベ下
34	景德□□	1004	24.43	5.73	1.14	(1.5)	—	50	景德元寶	南カベ下
35	天聖□寶	1023	25.34	6.73	1.47	(2.7)	—	70	天聖元寶	東南部
36	景□通寶	1034	25.39	7.28	1.17	(1.7)	—	65	景祐通寶	表土
37	□宋□□	1038	(15.71)	7.25	1.08	(0.9)	—	20	皇宋通寶	表採
38	□宋通□	1038	(14.24)	—	1.26	(1.1)	—	30	皇宋通寶	南カベ下
39	皇□通□	1038	(18.76)	—	1.47	(1.3)	—	25	皇宋通寶	南カベ下
40	皇□□寶	1038	24.46	6.22	1.39	(1.7)	—	50	皇宋通寶	南カベ下
41	皇□□寶	1038	(18.53)	—	1.79	(1.8)	—	25	皇宋通寶	南カベ下
42	皇□□寶	1038	(16.33)	—	1.70	(1.4)	—	25	皇宋通寶	南カベ下
43	皇□通□	1038	(17.99)	7.84	1.32	(1.4)	—	25	皇宋通寶	南カベ下
44	治□□□	1064	(14.92)	—	1.29	(0.6)	—	10	治平通寶	南カベ下
45	熙寧□□	1068	21.83	7.18	1.47	(2.2)	—	50	熙寧元寶	東南部分西側
46	熙□□寶	1068	(18.70)	—	2.10	(1.5)	—	50	熙寧元寶	南カベ下
47	熙寧元寶	1068	(23.65)	6.97	1.01	(1.3)	—	50	—	南カベ下
48	□□元寶	—	(20.34)	—	1.21	(1.6)	—	25	—	南カベ下
49	元豐通□	1078	25.37	7.48	1.20	(2.1)	—	60	元豐通寶	東南部分西端
50	元豐□□	1078	25.09	7.07	1.64	(1.9)	—	50	元豐通寶	東南部分西側
51	□宋□□	1101	(14.77)	—	1.87	(0.9)	—	7	聖宋元寶	南カベ下
52	□宋□□	1101	(10.86)	—	1.42	(0.6)	—	10	聖宋元寶	南カベ下
53	政□□□	1111	(22.83)	—	1.25	(1.2)	—	40	政和通寶	造成層
54	政和通□	1111	(25.11)	—	2.15	(3.2)	—	50	政和通寶	南カベ下
55	政□□□	1111	(21.71)	—	2.38	(1.3)	—	25	篆書 政和通寶	南カベ下
56	政□通□	1111	(16.03)	—	1.35	(1.3)	—	25	政和通寶	南カベ下
57	政□通□	1111	(24.49)	—	1.62	(1.7)	—	50	政和通寶	南カベ下
58	洪□□□	1368	24.43	5.63	1.54	3.6	—	100	洪武通寶	東西階
59	洪武通寶	1368	24.23	4.94	1.77	4.4	—	100	—	東南部西側
60	洪武通寶	1368	24.78	—	5.52	(4.1)	—	99	—	東南部分西側
61	□武通寶	1368	(17.11)	—	1.72	(0.8)	—	10	洪武通寶	東南部分西側
62	洪武□□	1368	(23.13)	6.90	1.28	(1.4)	—	50	洪武通寶	造成層
63	□武通寶	1368	24.75	5.15	1.84	(3.3)	—	75	洪武通寶	南カベ下
64	□武□寶	1368	(23.15)	5.80	2.16	(2.4)	—	50	洪武通寶	南カベ下
65	□武□寶	1368	24.56	6.82	1.72	4.4	—	100	洪武通寶	南カベ下
66	□武通寶	1368	23.86	5.72	1.85	(2.1)	—	50	洪武通寶	南カベ下
67	□武通寶	1368	(23.89)	—	2.19	(1.1)	—	25	洪武通寶	南カベ下
68	□武通□	1368	25.17	4.28	3.25	8.2	—	(二枚溶着)	洪武通寶	南カベ下
69	洪□□□	1368	(12.77)	—	2.24	(1.0)	—	10	洪武通寶	南カベ下
70	□武□寶	1368	(20.95)	—	1.85	(1.6)	—	40	洪武通寶	南カベ下
71	永樂通寶	1408	25.42	4.89	1.77	3.7	—	100	永樂通寶	東西階
72	□樂通寶	1408	25.85	5.44	1.46	(2.7)	—	75	永樂通寶	造成層
73	永樂通寶	1408	25.25	4.83	1.74	(3.1)	—	75	—	造成層
74	永樂通寶	1408	23.72	6.43	1.17	2.0	—	100	—	南カベ下
75	□樂通□	1408	(18.17)	—	1.37	(1.4)	—	25	永樂通寶	南カベ下
76	無文錢	—	20.72	7.30	1.08	1.8	—	100	—	I-3

第65表 錢貨法量観察一覧(3)

単位:mm, g, %

計測番号	錢名	初鑄年代	法量				背文	残存率	備考	出土地
			錢径	内径	錢厚	重量				
			mm	mm	mm	g				
77	無文錢	—	21.52	7.94	0.87	1.7	—	100	—	I-3
78	無文錢	—	13.31	6.90	0.60	0.4	—	100	—	I-3
79	無文錢	—	21.77	7.61	0.72	1.6	—	100	—	東南部分北側
80	無文錢	—	20.96	8.16	1.12	1.7	—	100	—	造成層
81	無文錢	—	22.86	6.24	1.25	3.0	—	100	—	造成層
82	無文錢	—	18.56	6.58	0.6	0.6	—	100	—	表採
83	無文錢	—	(17.70)	—	1.2	(1.0)	—	25	—	表採
84	無文錢	—	22.77	6.11	1.10	2.7	—	100	—	造成層
85	無文錢	—	21.87	6.21	1.04	2.3	—	100	—	造成層
86	無文錢	—	19.24	8.61	0.89	1.4	—	100	—	造成層
87	無文錢	—	23.37	5.71	0.89	2.5	—	100	—	造成層
88	無文錢	—	17.87	7.74	0.72	0.7	—	100	—	造成層
89	無文錢	—	(21.81)	—	0.92	(0.7)	—	50	—	東南部分西側
90	無文錢	—	22.61	6.73	1.15	2.6	—	100	—	北カベ
91	無文錢	—	22.70	6.13	0.97	2.1	—	100	—	北カベ
92	無文錢	—	22.68	5.37	0.89	2.7	—	100	—	北カベ
93	無文錢	—	23.15	6.98	1.05	1.9	—	100	—	北カベ
94	無文錢	—	22.87	5.99	1.07	2.4	—	100	—	北カベ
95	無文錢	—	18.71	7.36	1.19	1.2	—	100	—	I-8
96	無文錢	—	(15.86)	6.49	0.56	(0.2)	—	50	—	洞穴内H-6
97	無文錢	—	(15.80)	—	0.61	0.2	—	50	—	洞穴内H-6
98	無文錢	—	17.35	7.18	0.55	0.5	—	100	—	H-6
99	無文錢	—	(14.59)	—	1.71	(0.8)	—	10	—	南カベ下
100	無文錢	—	20.02	5.68	0.67	1.1	—	100	—	南カベ下
101	無文錢	—	21.99	5.70	1.05	(1.5)	—	50	—	南カベ下
102	無文錢	—	20.79	6.06	0.77	0.9	—	100	—	南カベ下
103	無文錢	—	20.39	6.29	0.66	1.0	—	100	—	南カベ下
104	無文錢	—	19.42	6.14	0.71	1.1	—	100	—	南カベ下
105	無文錢	—	22.11	5.56	0.87	1.9	—	100	—	南カベ下
106	無文錢	—	6.81	6.56	0.89	1.1	—	100	—	南カベ下
107	無文錢	—	20.81	7.26	0.66	0.9	—	100	—	南カベ下
108	無文錢	—	21.27	6.32	1.05	1.0	—	100	—	南カベ下
109	無文錢	—	19.37	6.62	0.73	(0.6)	—	75	—	南カベ下
110	無文錢	—	18.19	7.94	0.57	(0.5)	—	75	—	南カベ下
111	無文錢	—	(23.89)	5.72	1.0	(0.9)	—	50	—	南カベ下
112	無文錢	—	(20.56)	5.72	0.75	(0.6)	—	50	—	南カベ下
113	無文錢	—	20.96	6.99	0.92	(0.8)	—	50	—	南カベ下
114	無文錢	—	(21.42)	—	1.12	(0.9)	—	50	—	南カベ下
115	無文錢	—	(18.69)	—	0.96	(0.7)	—	40	—	南カベ下
116	無文錢	—	(22.32)	—	1.1	(0.8)	—	40	—	南カベ下
117	無文錢	—	(19.61)	6.21	0.74	(0.4)	—	50	—	南カベ下
118	無文錢	—	(17.85)	5.78	0.55	(0.3)	—	25	—	南カベ下
119	無文錢	—	(16.89)	—	0.7	(0.3)	—	25	—	南カベ下
120	無文錢	—	(17.23)	—	0.7	(0.4)	—	25	—	南カベ下
121	無文錢	—	(17.99)	—	0.96	(0.5)	—	—	—	南カベ下
122	無文錢	—	(18.25)	—	0.87	(0.4)	—	25	—	南カベ下
123	無文錢	—	(17.98)	—	0.66	(0.3)	—	25	—	南カベ下
124	無文錢	—	(11.23)	—	0.79	(0.3)	—	30	—	南カベ下
125	無文錢	—	(11.51)	—	0.8	(0.3)	—	25	—	南カベ下

第66表 錢貨法量観察一覧(4)

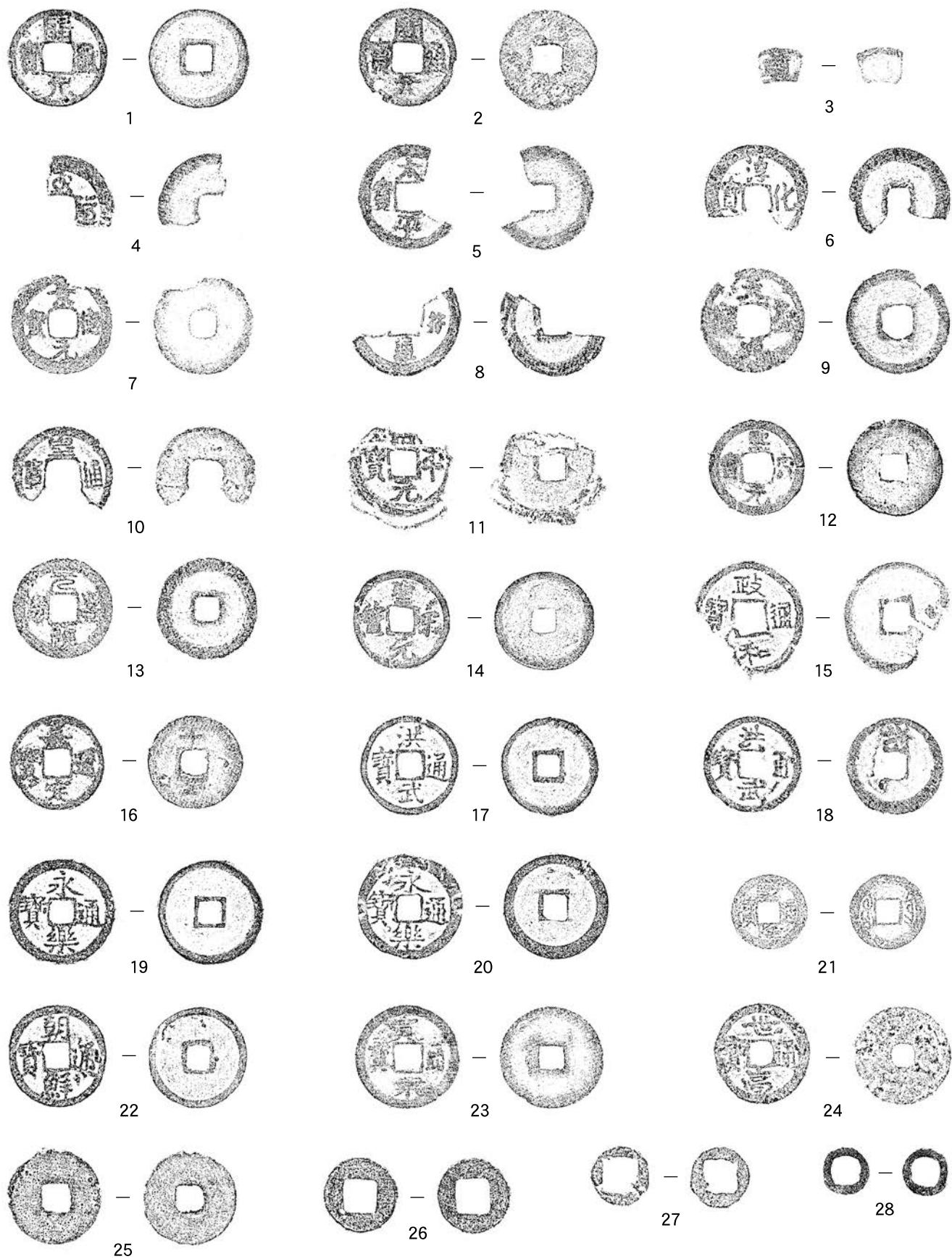
単位:mm、g、%

計測番号	錢名	初鑄年代	法量				背文	残存率	備考	出土地
			錢徑	内径	錢厚	重量				
			mm	mm	mm	g		%		
126	無文錢	—	(12.13)	—	0.65	(0.2)	—	25	—	南カベ下
127	無文錢	—	(14.76)	—	0.86	(0.3)	—	25	—	南カベ下
128	無文錢	—	(16.22)	—	0.71	(0.3)	—	25	—	南カベ下
129	無文錢	—	(11.74)	—	0.43	(0.2)	—	20	—	南カベ下
130	無文錢	—	(16.90)	—	0.83	(0.3)	—	10	—	南カベ下
131	無文錢	—	(15.05)	—	0.78	(0.3)	—	10	—	南カベ下
132	無文錢	—	(11.79)	—	0.79	(0.4)	—	10	—	南カベ下
133	無文錢	—	(12.13)	—	0.84	(0.3)	—	10	—	南カベ下
134	無文錢	—	(9.93)	—	1.66	(0.1)	—	5	—	南カベ下
135	—	—	24.92	6.46	1.15	3.3	—	100	判読不明	I-3
136	—	—	22.21	6.92	1.13	2.6	—	100	判読不明	I-3
137	—	—	21.88	6.24	1.09	2.3	—	100	判読不明	I-3
138	—	—	22.76	6.46	1.03	2.0	—	100	判読不明	造成層
139	—	—	23.25	6.59	1.07	2.7	—	100	判読不明	東南部分
140	—	—	(21.57)	6.75	1.03	1.4	—	75	判読不明	造成層
141	—	—	20.03	—	1.17	(1.3)	—	50	判読不明	造成層
142	—	—	22.64	5.78	1.38	3.4	—	100	判読不明	造成層
143	—	—	23.27	6.32	1.15	3.0	—	100	判読不明	北カベ
144	—	—	(21.13)	—	1.74	2.0	—		判読不明	南カベ下
145	—	—	(21.86)	—	1.18	(1.5)	—	50	判読不明	造成層
146	—	—	23.04	8.30	1.38	(2.1)	—	70	判読不明	造成層
147	—	—	(21.04)	—	1.06	(1.3)	—	50	判読不明	東南部
148	—	—	(14.20)	—	1.43	(0.7)	—	10	判読不明	表採
149	—	—	(16.59)	—	1.87	(1.0)	—	50	判読不明	東南部西側
150	—	—	(11.64)	—	1.57	(0.7)	—		判読不明	表採
151	—	—	(17.24)	—	1.24	(0.8)	—	20	判読不明	東南部西側
152	—	—	(13.04)	—	1.87	(1.2)	—	25	判読不明	造成層
153	—	—	(22.54)	—	2.15	(1.9)	—	50	判読不明	造成層
154	—	—	(17.78)	—	1.43	(1.2)	—	25	判読不明	造成層
155	—	—	(23.34)	5.73	1.48	(1.38)	—	50	判読不明	表採
156	—	—	(16.43)	—	1.35	(0.7)	—	20	判読不明	造成層
157	—	—	(23.09)	5.48	1.60	(2.1)	—	50	判読不明	南カベ下
158	—	—	25.13	—	5.90	(2.6)	—	50	判読不明	南カベ下
159	—	—	(23.33)	—	1.85	(1.8)	—	50	判読不明	南カベ下
160	—	—	(21.11)	—	1.86	(1.7)	—	50	判読不明	南カベ下
161	—	—	(20.36)	—	6.47	(1.7)	—	50	判読不明	南カベ下
162	—	—	(22.63)	—	1.61	(1.5)	—	50	判読不明	南カベ下
163	—	—	(19.48)	—	1.48	(1.5)	—	50	判読不明	南カベ下
164	—	—	(20.02)	—	1.96	(1.9)	—	10	判読不明	南カベ下
165	—	—	(10.51)	—	1.39	(0.3)	—	10	判読不明	南カベ下
166	—	—	(10.86)	—	1.56	(0.5)	—	10	判読不明	南カベ下
167	—	—	(13.14)	—	1.31	(0.6)	—	10	判読不明	南カベ下
168	—	—	(8.95)	—	1.83	(0.6)	—	10	判読不明	南カベ下
169	—	—	(15.54)	—	1.83	(0.9)	—	20	判読不明	南カベ下
170	—	—	(15.55)	—	1.49	(0.7)	—	25	判読不明	南カベ下
171	—	—	(15.35)	—	20.8	(0.7)	—	10	判読不明	南カベ下
172	—	—	(20.12)	—	1.45	(1.0)	—	25	判読不明	南カベ下
173	—	—	(17.32)	—	1.42	(0.8)	—	10	判読不明	南カベ下
174	—	—	(13.32)	—	1.94	(0.9)	—	10	判読不明	南カベ下
175	—	—	(14.53)	—	1.80	(0.6)	—	10	判読不明	南カベ下

第67表 錢貨法量観察一覧(5)

単位:mm、g、%

計測番号	錢名	初鑄年代	法量				背文	残存率	備考	出土地
			錢径	内径	錢厚	重量				
			mm	mm	mm	g		%		
176	—	—	(19.69)	—	1.64	(0.9)	—	25	判読不明	南カベ下
177	—	—	(14.76)	—	2.71	(1.2)	—	20	判読不明	南カベ下
178	—	—	(14.58)	—	2.27	(0.9)	—	20	判読不明	南カベ下
179	—	—	(21.14)	—	4.54	(1.36)	—	50	判読不明	南カベ下
180	—	—	25.39	7.28	1.17	(1.7)	—	10	判読不明	表土
181	—	—	(13.95)	—	1.56	(0.8)	—		判読不明	南カベ下
182	—	—	(13.76)	—	1.14	(2.4)	—	50	判読不明	南カベ下
183	—	—	(23.16)	—	1.16	(1.7)	—	25	判読不明	南カベ下
184	—	—	(25.57)	—	1.79	(2.5)	—	50	判読不明	南カベ下
185	—	—	(24.16)	—	1.77	(1.7)	—	30	判読不明	南カベ下
186	—	—	(16.08)	—	1.36	(1.3)	—	25	判読不明	南カベ下
187	—	—	(19.64)	—	1.38	(0.9)	—	5	判読不明	南カベ下
188	—	—	(14.80)	—	1.26	(0.5)	—	5	判読不明	南カベ下
189	—	—	(12.03)	—	1.78	(0.5)	—	5	判読不明	南カベ下
190	—	—	(14.78)	—	1.44	(0.4)	—	5	判読不明	南カベ下
191	—	—	(15.65)	—	1.17	(0.4)	—	5	判読不明	南カベ下
192	—	—	(10.61)	—	1.51	(0.4)	—	5	判読不明	南カベ下
193	—	—	(7.73)	—	1.43	(0.5)	—	5	判読不明	南カベ下
194	—	—	(14.95)	—	1.65	(0.5)	—	5	判読不明	南カベ下
195	—	—	(11.51)	—	1.79	(0.5)	—	5	判読不明	南カベ下
196	—	—	(12.23)	—	1.43	(0.4)	—	5	判読不明	南カベ下
197	—	—	(8.56)	—	1.47	(0.2)	—	3	判読不明	南カベ下
198	—	—	(14.16)	—	1.21	(0.2)	—	5	判読不明	南カベ下
199	—	—	(10.41)	—	1.45	(0.3)	—	5	判読不明	南カベ下
200	—	—	(17.76)	—	1.38	(0.9)	—	10	判読不明	南カベ下
201	—	—	(16.79)	—	1.34	(0.7)	—	25	判読不明	造成層



0 5cm

第61図 錢貨

## 第18節 貝製品

貝製品は総数65点が得られ、これらはおむね装飾品と実用品に大別できる。

装飾品は、玉が1点のみ出土したが、実用品としては、ヤコウガイ製杓子状製品、貝製魚網錐、ヤコウガイ螺蓋製敲打器、の3種がある。

1はイモガイ製玉であるが殻頂部を敲打し、穿孔したうえ孔周辺及び縁部を研磨し整えたものである。

2はヤコウガイ製杓子状製品、3～6はその未製品である。2は身部を欠失した柄部のみの資料である。柄部の形態は先端を水平に切った方形状を成す、沖縄の中・近世期に一般的にみられる魚の尾鰭状をなさず、器表は研磨が行き届き玉虫色の光沢を放す。

7～9は貝製魚網錐であるが、いずれも二枚貝の殻頂部及びその周辺部に2cm前後の粗孔を穿つた製品である。貝種別にはシャコガイ科シラナミ、フネガイ科リュウキュウサルボウの2科2種がある。

ヤコウガイ螺蓋製敲打器は総数54点が得られ剥離痕の数・位置により分類し類別に4点を図化した(10～13)。

I類：蓋の内側に1ないし2回の打撃による剥離痕がみられる。

II類：蓋の内側に4ないし6回の打撃による剥離痕がみられる。

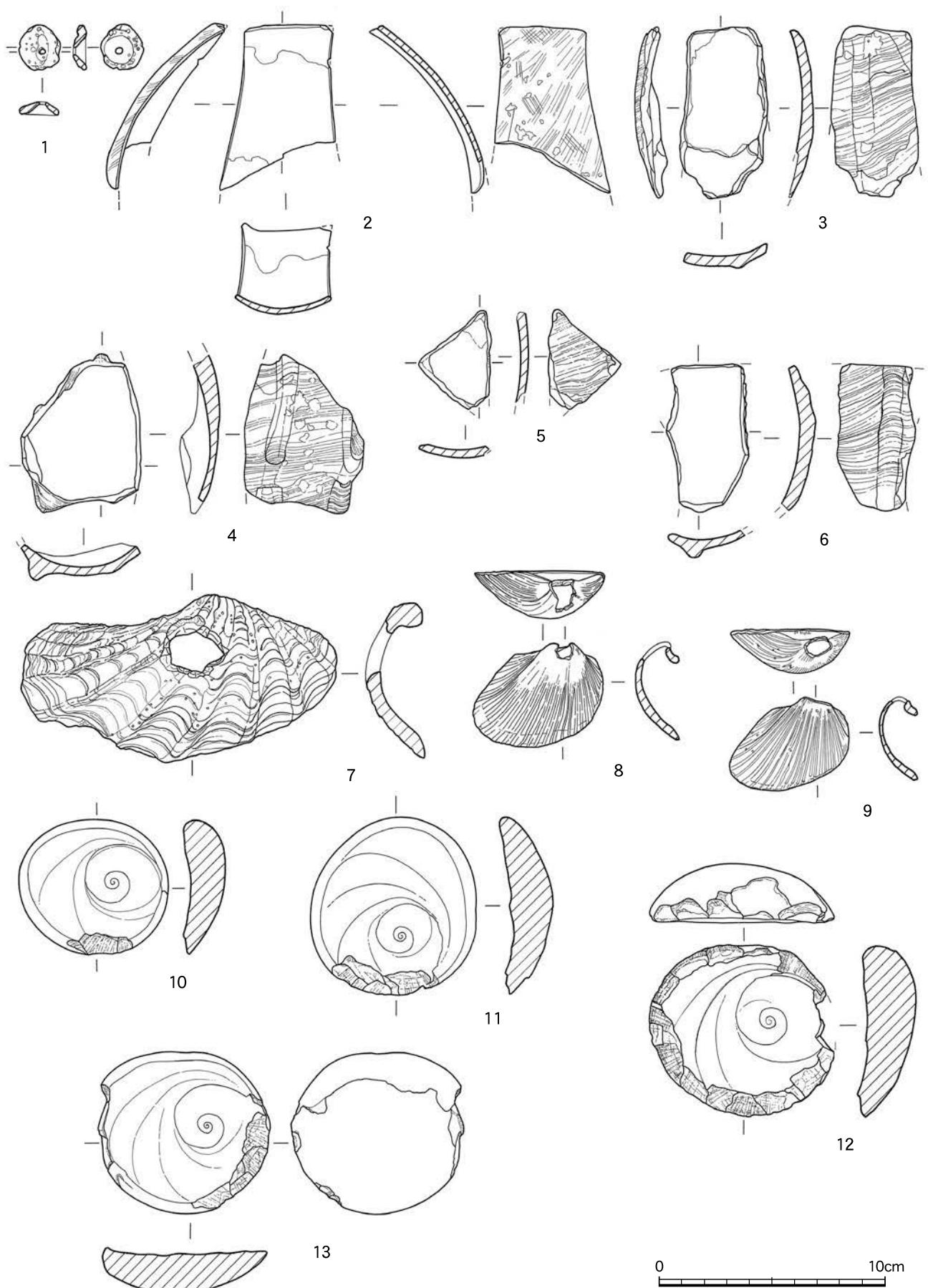
III類：剥離痕が蓋の縁部全体に及ぶもの。

第68表 貝製品法量一覧

挿図番号・図版番号	種類名	出土地点	分類	法量					
				長さ	幅	厚	孔径		
							縫径	横径	
第62図1 図版62-1	イモガイ製玉	造成層	—	1.9	1.8	0.5	2.0	2.0	2.5
〃 2 〃 2	ヤコウガイ製杓子状製品	南側	—	(7.0)	(4.5)	0.3	18.2	—	—
〃 3 〃 3	ヤコウガイ未製品	美福門	—	7.5	3.7	0.6	24.6	—	—
〃 4 〃 4	ヤコウガイ未製品	美福門	—	6.5	5.3	0.9	31.4	—	—
〃 5 〃 5	ヤコウガイ未製品	造成層	—	4.3	3.1	0.4	6.9	—	—
〃 6 〃 6	ヤコウガイ未製品	H-6洞穴内	—	6.4	3.5	0.7	18.7	—	—
〃 7 〃 7	シラナミ製魚網錐	H-6洞穴内	—	7.4	13.9	0.6	138.0	2.2	2.3
〃 8 〃 8	リュウキュウサルボウ製魚網錐	I-6	—	4.6	5.7	0.4	18.2	1.1	0.8
〃 9 〃 9	リュウキュウサルボウ製魚網錐	造成層	—	4.1	5.3	0.35	15.4	0.7	1.1
〃 10 図版63-10	螺蓋製敲打器	表土	I類	5.95	6.6	1.7	87.4	—	—
〃 11 〃 11	螺蓋製敲打器	表土	II類	7.7	7.8	2.0	156.9	—	—
〃 12 〃 12	螺蓋製敲打器	表採	III類	7.1	7.5	1.7	144.5	—	—
〃 13 〃 13	螺蓋製敲打器	東南部	IV類	7.5	8.2	2.3	185.2	—	—
〃 14	ヤコウガイ 有孔	造成層	—	16.7	14.9	4.5	778.9	76.3	52.3
〃 15	ヤコウガイ 有孔	造成層	—	17.1	14.9	3.7	751.4	13.6	10.9

第69表 螺蓋製敲打器類別出土状況一覧

出土地 類別	美福 門	洞穴 内	造成 層	東南 部	東南 部西 側	東西 階	南カ ベ下	F-4	I-6	表土	表採	合 計
I類	3	5	1		1		10	1		8	1	30
II類		1	1							2		4
III類										1	1	2
IV類			1	1		1						3
不明	2		6		1		2		1	3		15
合計	5	6	9	1	2	1	12	1	1	14	2	54



第62図 貝製品 マガキガイ有孔製品 1 ヤコウガイ製杓子状製品 2 ヤコウガイ未製品 3~6  
貝錘 7~9 螺蓋製敲打器 10~13

## 第19節 骨製品

骨鏃、ハブラシ、棒状製品の3種類があり、計4点が得られている。

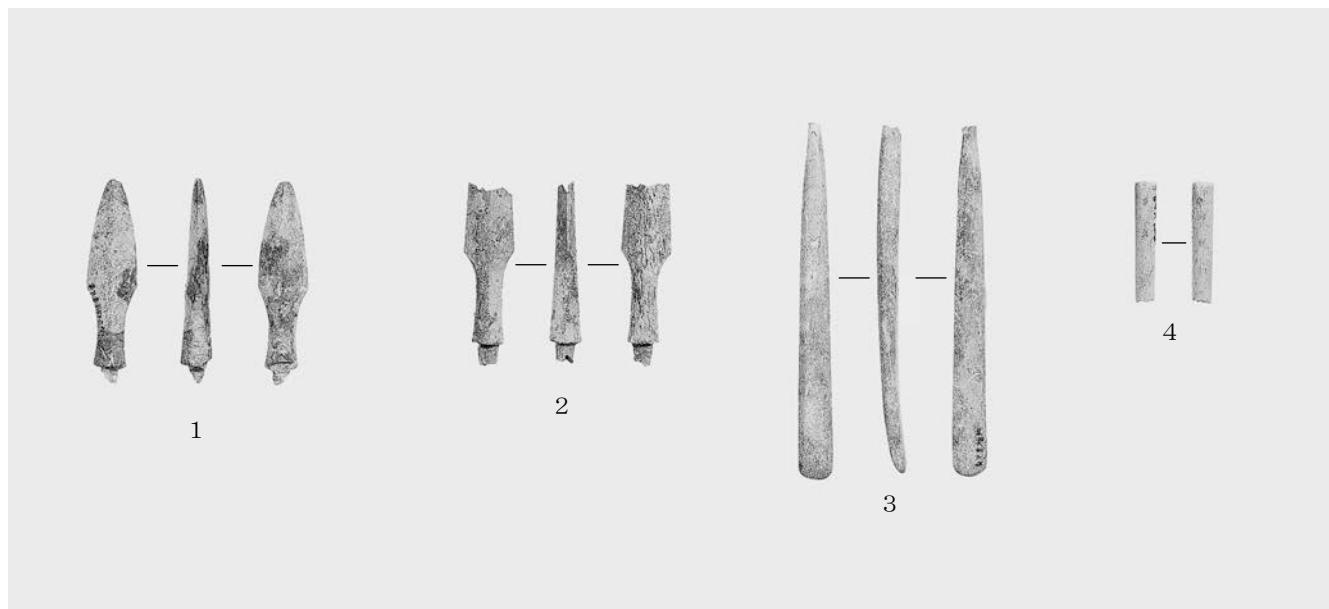
第64図1・図版3-1,2は、ウシの脛骨？を素材とした有茎の骨鏃である。1は鏃身尖端部と茎を、2は鏃身の尖端約三分の一と茎の約三分の二ほどを欠失するが、全形は窺える資料である。

両者とも素材の厚みのある平坦部を利用し、両面から斜位に削り取って鏃身・茎を整形した後、研磨によって仕上げている。鏃身の表裏面中央部には鎬を作出しており、断面形が菱形状を呈している。1は残存長5.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.95cm、残存重量5.0gを測る。東南部西側出土。2は残存長4.8cm、最大幅1.5cm、最大厚0.85cm、残存重量2.3gを測る。南東部階段上部出土。

同図3・図版3-3は、ハ布拉シ様製品の毛孔部との境目のくびれ部あたりで折損した柄部のみの資料である。入念な研磨によって仕上げられているため、利用素材については判然としないが、形状等からウシの脛骨を利用か？

全体形状は、折損箇所付近から柄尻部にかけて緩やかに傾きながら立ち上がりしていく形状をなし、柄尻部は舌状を呈する。断面形状は、柄尻部は角が取れた不正な楕円形状を、毛孔部は長方形形状を呈する。残存長9.45cm、最大幅0.95cm最大厚0.65cm、残存重量6.8gを測る。美福門地区出土。

同図4・図版3-4は、断面形を略円形状に仕上げた棒状製品の碎片である。碎片のため、全体形状は判然としないが、針若しくは箸などのような機能・用途を有したものであったのかも知れない。また、入念な研磨加工によって仕上げられているため、利用素材も判然としない。あるいは、ウシ若しくはウマの脛骨？等を利用したかもしれない。残存長3.3cm、最大幅0.6cm、最大厚0.5cm、残存重量1.0gを測る。美福門地区出土。



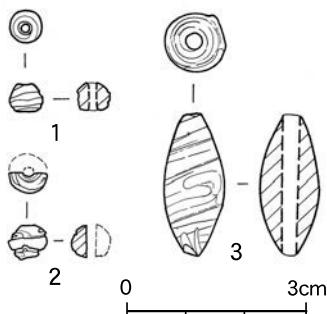
図版3 骨製品

## 第20節 玉類

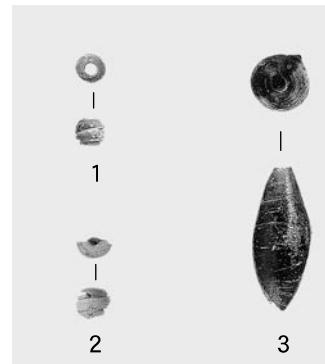
ガラス製玉が3点得られた、第63図1,2は球状、3は紡錘状を呈する。いずれも孔は直に開けられ、器面には巻き痕を確認できるが特に3は顕著である。巻き付け技法による製作が考えられる。

第70表 玉類観察一覧

遺物番号	形状	色	完形・破損	法量				出土地
				高さ	外径	内径	重量	
第63図1 図版4-1	丸玉	水色、透明	完形	0.5	5.5	1.5	0.2	南側
第63図2 図版4-2	丸玉	水色、透明	破損	0.6	0.6	1.5	0.1	南側
第63図3 図版4-3	菱玉	緑、透明	完形	2.3	1.0	0.3	3.1	南カベ下



第63図 玉類



図版4 玉類

## 第21節 煙管

陶器製の雁首10点、壇の転用品の雁首1点、銅製の吸口1点の計12点が出土した。第46図5は中国産瑠璃釉煙管の雁首である。火皿部は碗状を呈し、縁部は扁平をなす。胴部は徳利状に丸みを持ち、小口縁部は扁平、露胎している。6は中国産の可能性がある三彩煙管の雁首である。火皿部は碗状を呈する。9は中国産無釉陶器煙管の雁首である。火皿は胴部付け根から上面にやや開き取り付くが胴部からの立ち上がりは殆どない。煙管の表面は箆で整形した様な細かい多角面を残す。7,8は沖縄産無釉陶器煙管の雁首である。いずれも棒状の粘土から削り出しにより製作したものと考えられる。火皿部から胴部まで表面は八面体に面取りされ、火皿部分は縁部に向かい開き、胴部分は小口に向かい孔を穿っている。8の側面に十の字状の刻みがみられる。10は壇を二次転用した雁首の未製品と考えられる。側面を方柱状に面取りし、底面となる端部を丸く整形し、火皿部に丸い抉りを入れている。11は銅製の煙管、吸口である。吸口は断面形態が円形の棒状を成し胴部に至る。小口から胴部の3分の1までの表面を六面体に面取りし断面形態が六角形を示す。

第71表 煙管観察一覧

挿図番号 図版番号	種類		部位	完形 破損	法量								出土地
					全長	高さ 幅	火皿径 外 内	接続部径 外 内	吸口径 外 内	重量			
第64図5 図版64-1	陶器製	中国産瑠璃釉	雁首	破損	(2.1)	-	-	-	-	-	-	-	2.5 東南部
第64図6 図版64-2	陶器製	中国産陶器	雁首	破損	(1.6)	1.6	-	-	-	-	-	-	1.5 美福門
第64図7 図版64-3	陶器製	沖縄産無釉陶器	雁首	破損	4.3	1.6	2	1.25	-	-	-	-	8.1 造成層
第64図8 図版64-4	陶器製	沖縄産無釉陶器	雁首	破損	4.2	1.6	1.8	1.4	1.2	0.8	-	-	7.9 表土
第64図9 図版64-5	陶器製	中国産無釉陶器	雁首	破損	3.3	1.4	14.5	1.05	1.4	0.9	-	-	5.8 東南部西端
第64図10 図版64-7	壇転用	未製品	雁首	破損	2.2	3.95	6.5	0.8	-	-	-	-	20.2 造成層
第64図11 図版64-6	銅製	—	吸口	完形	8.15	1.1	-	-	0.9	0.7	0.6	0.3	14.5 美福門

## 第22節 石器

石斧、石球、円盤状製品、石錘の4種5点が得られ、第64図12～16を図示した。

12に示す石斧は基部と頭部のみを残すものであるが、上面、裏面、側面を平面に研磨した扁平なつくりである。沖縄先史時代に属する遺物と考えられる。石球は3点が出土し、内2点を図化した。13,14は全面を敲打により球状に整形している。石質はいずれも石灰岩であり硬度等を考慮すると石弾としては適さない可能性がある。首里城跡に隣接し建立された円覚寺跡の龍淵殿の基壇部に同様な軟質な石球(砂岩)を裏込めとして使用した報告例があることから裏込めの可能性もある。

15は表裏面を打割により扁平に整形、更に縁部を敲打剥離し円盤状に仕上げている。

16は元々扁平で有孔である自然石を利用し、部分的に敲打や研磨を加えたものと考えられる。石質は石灰岩であるが、類例資料に1978年石垣市、吹通川河口遺跡出土の石錘の報告がある。

第72表 石器観察一覧

単位:cm,g( )は残存長

挿図番号 図版番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	口径		出土地
						縦径	横径	
第64図12 図版64-8	石斧	(5.7)	3.3	1.1	41.3	—	—	東西階
第64図14 図版64-10	石球	3.5	3.4	3.4	46.5	—	—	東南部東側
第64図13 図版64-11	石球	3.7	3.6	2.9	48.6	—	—	造成層
第64図15 図版64-9	円盤状製品	(3.2)	5.5	0.9	27.1	—	—	美福門
第64図16 図版64-12	石製錘	11.4	8.3	4.9	420	3.1	2.9	造成層

## 第23節 石造製品

形象物、礎石、構造物の一部など全6点が得られた。比較的残りの良い4点第65図・図版65を図示した。

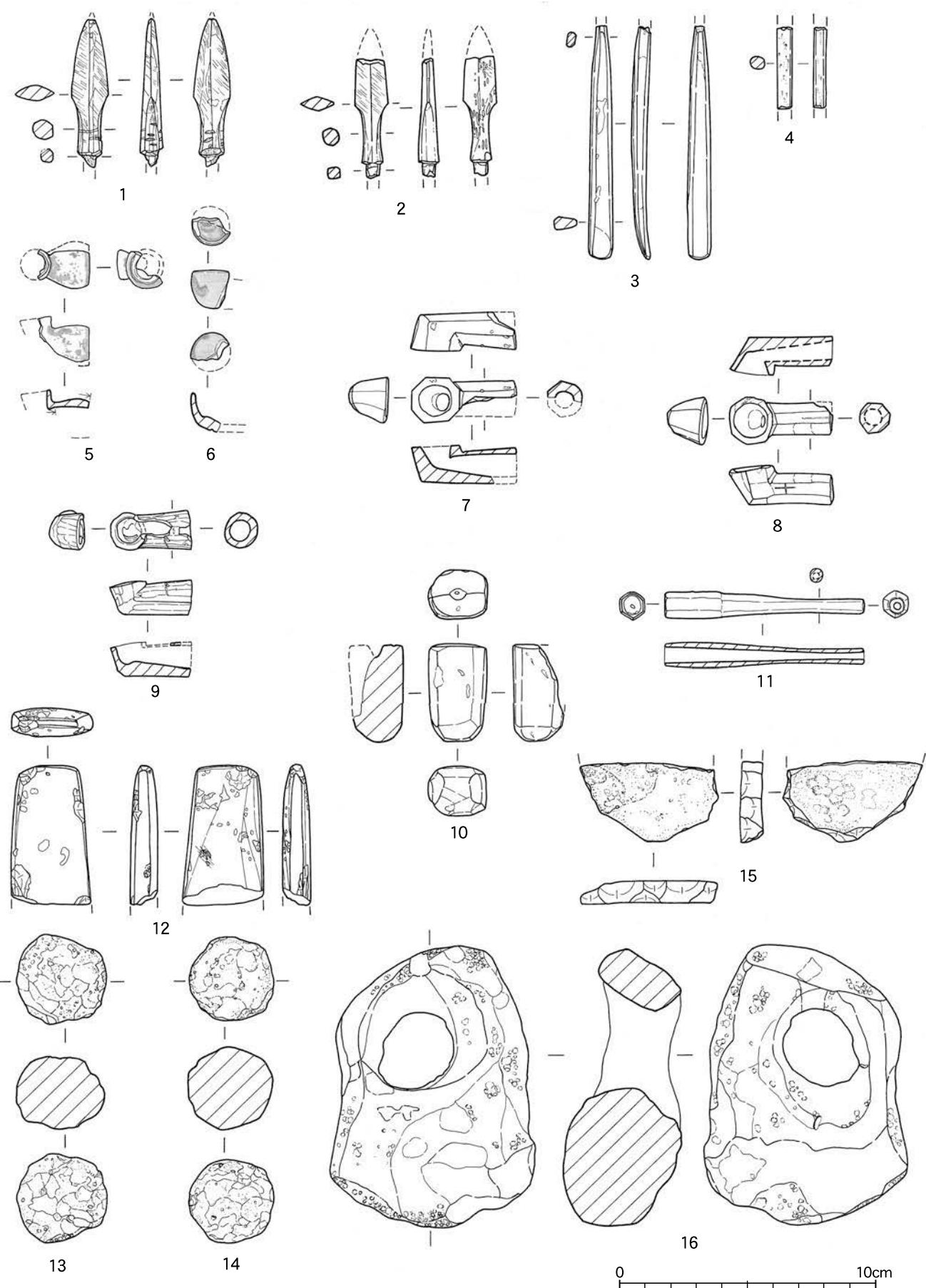
1に示すものは阿形の金剛力士像である。頭部は小型の冠を頂き、顔の大きさに比較して大きめの目、鼻、耳、口、眉をもつ、目はアーモンド状で赤色の彩色を施す。石質が沖縄では得られない安山岩質凝灰岩であることから当時入取可能な薩摩産の可能性が高い。片腕と足首を含む台座部分を欠くがほぼ全体を把握できるものである。縦21.5cm、横9.4cm、厚5cm、重量360g。出土地不明。

2は石灰岩を切り妻屋根状に削り出し、裏面は中央に向かい窪ませる。類例に同石質の石棺の蓋がある。

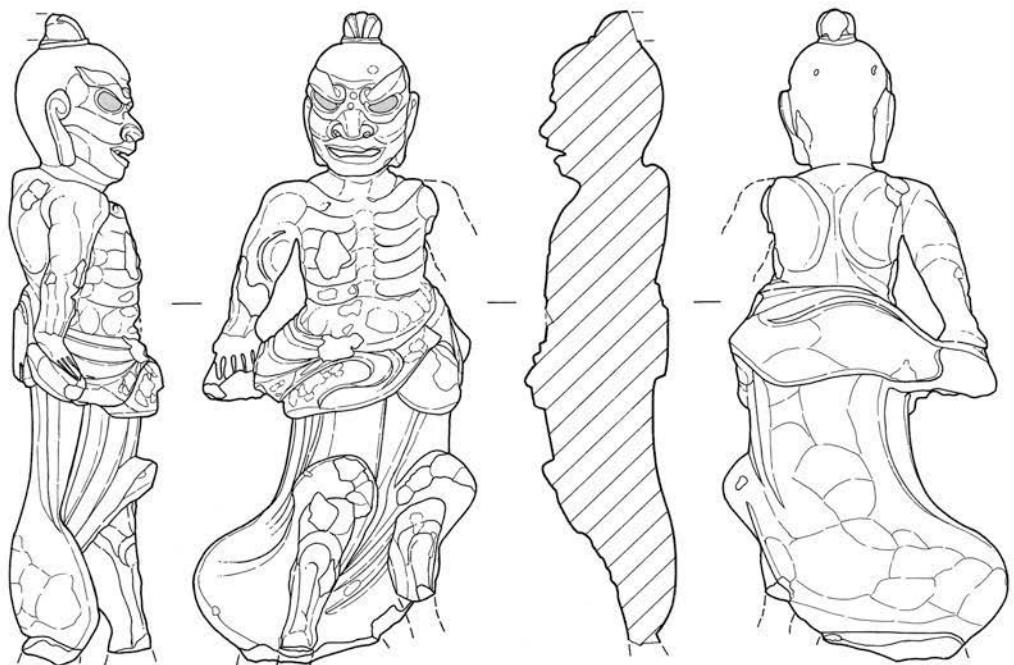
サイズの違いが大きい事もありそれらとは別の用途を考えるべきであろう。何れにしても物入れの蓋部分と推察できる。縦15.4cm、横21.2cm、高さ9.3cm、重量2,280g。東南北穴出土。

3は高欄石柱の宝珠と思われる。縦22.0cm、横径16.6cm、重量4,440g。I-8グリッド出土。

4は石灰岩を方形状に捌る、更に上面中央に縦の溝状の窪みを施したものである。一般的な城郭の積石とは違うがその中で使われる物の可能性がある。縦12.2cm、横12.4cm、厚7.1cm、重量1,300g。I-8グリッド出土。

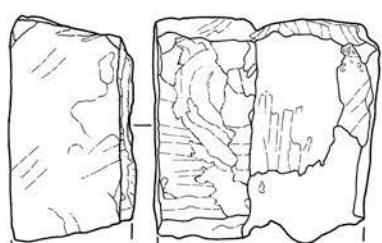
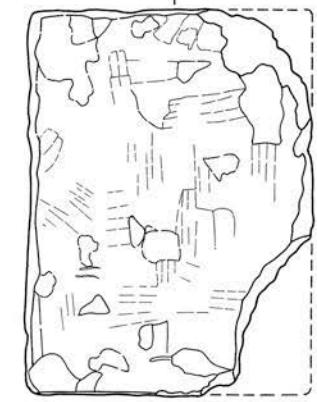
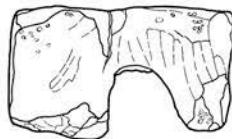
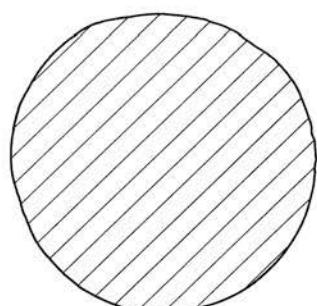
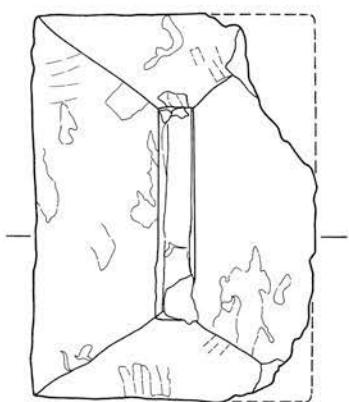


第64図 骨製品 1~4 煙管 5~11 石器 12~16



1

0 10cm



3

0 10cm

2

第65図 石造製品

## 第24節 円盤状製品

青磁や白磁、染付などの日常雑器や瓦、埠などの建築部材の碎片を、主として打ち欠きによって略円形状に整形した二次利用製品である。

総計65点が得られているが、うち11点を図示した(第66図)。

これらの出土状況は、そのほとんどが旧琉球大学及び那覇市管理の貯水タンク建設に伴った造成工事等により敷き均された造成層に伴出したものであり、遺構などに伴ったものは1点もない。

その製作方法をみた場合、大半は器表面からの打ち欠きにより製作されたものであり、他の製品も表面からの打ち欠きが裏面の打ち欠き数(2~4回)に比べ圧倒的に多い。

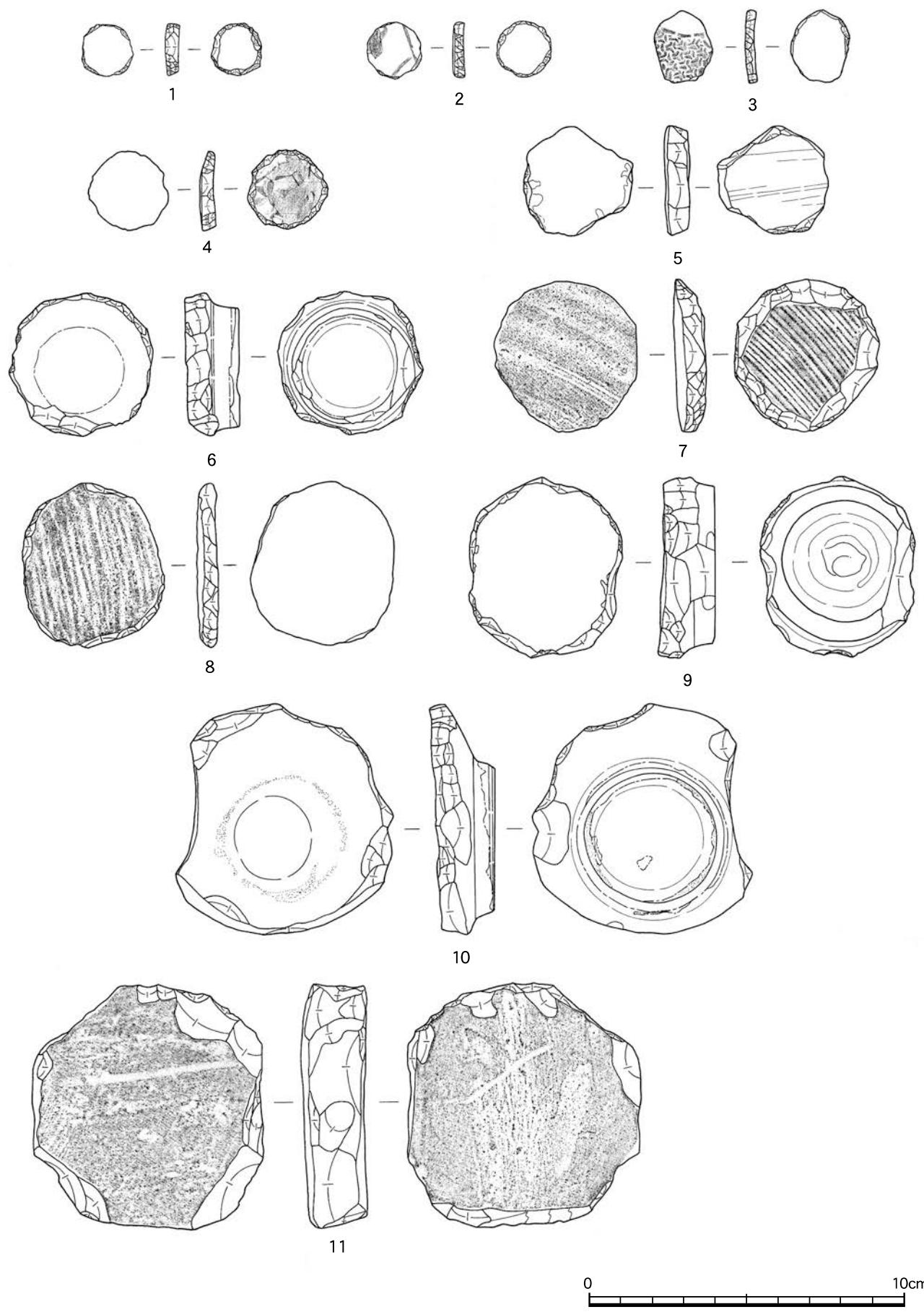
これらを、完形品について、その径を1cm単位でみた場合、4cm以下のものが総数全体の37%を占める。

10は、高台の接地面に磨耗が観察された製品である。

第73表 円盤状製品観察一覧

長径・厚さ(mm)、重量(g)

挿図番号 図版番号	完・破	長径	短径	厚さ	重量	素材	出土地	備考
第66図 図版66 1	完	16.6	15.0	4.2	1.5	沖縄産施釉陶器・胴	表採	表面から15回、裏面から15回の打割調整
" 2	完	17.3	16.7	3.17	1.4	青花・胴	H-5	表面から11回、裏面から11回の打割調整
" 3	完	22.29	17.88	2.71	1.8	本土産陶磁器・胴	表採	表面から11回、裏面から5回の打割調整
" 4	完	24.71	22.55	4.34	3.5	青花・胴	美福門	表面から21回、裏面から3回の打割調整
" 5	完	35.53	31.59	7.25	11.4	褐釉陶器・胴	造成層	表面から7回、裏面から6回の打割調整
" 6	完	45.92	42.07	16.87	28.0	沖縄産施釉陶器・底	東南北穴	高台を残し表面から15回、裏面から14回の打割調整
" 7	完	48.47	44.37	8.22	23.0	沖縄産無釉陶器・胴	H-6	表面から26回の打割調整
" 8	完	52.22	42.82	5.56	16.2	半練土器・胴	美福門	裏面から19回の打割調整
" 9	完	56.25	44.55	16.83	53.7	中国産陶器・底	I-6	高台を残し裏面14回、表面から16回の打割調整
" 10	完	72.77	61.53	16.3	82.1	白磁・底	東南部西側	裏面から12回、表面から10回の打割調整し 高台先端を研磨
" 11	完	77.73	72.57	20.22	126.4	明朝平瓦	造成層	凸面から12回、凹面から15回の打割調整



第66図 円盤状製品

## 第25節 貝類遺存体

貝類遺存体は、下記の一覧リストに示したように、a. 腹足綱(巻貝) 20科53種以上、b. 斧足綱(二枚貝) 14科31種以上の計34科84種以上を同定しているが、これらのすべてが食料の対象となったという点については検討を要する。

腹足綱と斧足綱を比較した場合、種類数、出土量とも腹足綱が圧倒的に主体をなし、棲息地別では鹹水産が最も多く、全体の約98%を占める。他に汽水産、陸産、淡水産も見られるが1～3種で、量的にも僅少である。

圧倒的主体を占めている鹹水産を海岸地形区分でみると、潮間帯岩礁が50%と最も多く、これに次ぐのが潮間帯下岩礁の20%となっており、他は28%である。

さらに、これらを個々の種別でみると、腹足綱(巻貝)では潮間帯から水深20mまでの砂礫底に棲息するマガキガイが各地区及び層とも最も多く、主体を占めている。これに次ぐのが、潮間帶中・下部の岩礁のウミニナカニモリ、チョウセンサザエ、カンギクなどがある。斧足綱(二枚貝)では潮間帯下砂底に棲息するアラスジケマンガイが全体の約25%以上を占め、他種を圧倒的に凌駕している。

このようなことから、食料としての主対象はほぼこれらに限定されていたものと考える。

### 貝類遺存体一覧

#### 軟体動物門 MOLLUSCA

##### a. 腹足綱 POLYPLACOPHORA

###### ニシキウズガイ科 Trochidae

1. ニシキウズ *Trochus maculatus* (LINNÉ)
2. ギンタカハマ *Tectus pyramis* (BORN)
3. サラサバティ *Tectus (Rochia) maximus* (PHILIPPI)

###### リュウテンサザエ科 Turbinidae

4. ヤコウガイの蓋 *Lunatica marmorata* (LINNÉ)
5. チョウセンサザエ *Marmorostoma argyrostoma* (LINNÉ)
6. チョウセンサザエの蓋 *Marmorostoma argyrostoma* (LINNÉ)
7. カンギク *Lunella coronata granulata* (Gmelin)
8. カンギクの蓋 *Lunella coronata granulata* (Gmelin)

###### アマオブネ科 Neritidae

9. マルアマオブネ *Nerita (Theliostyla) squamulata* RECLUZ
10. アマオブネ *Theliostyla albicilla* (LINNÉ)

###### ヤマタニシ科 Family Cxclophoridae

11. オキナワヤマタニシ *Cyclophorus turgidus* PFEIFFER
- トウガタカワニナ科 Family THLARIDAE

12. スグカワニナ *Thiara uniformis*

###### ゴマフニナ科 Planaxidae

13. ゴマフニナ *Planaxis sulcatus* (BORN)

###### オニノツノガイ科 Cerithiidae

14. オニノツノガイ *Cerithium nodulosum* (BRUGUIERE)

15. カヤノミカニモリ *Clypeomorus humilis* (DUNKER)

16. ウミニナカニモリ *Clypeomorus Batillariaeformis*

HARE et KOSUGE

17. コゲツノブエ *Clypeomorus coralia* (KIENER)

18. クワノミカニモリ *Clypeomorus chemnitzianus* (PILSBRY)

ウミニナ科 Potamididae

19. カワアイ *Cerithideopsis diadjariensis* (Martin)

20. センニンガイ *Telecopiun Telescopium* (LINNAEUS)

リュウキュウウミニナ *Batillaria flectosiphonata* Ozawa  
ソデボラ科 Strombidae

22. オハグロガイ *Canarium urceum* (LINNAEUS)

23. マガキガイ *Conomurex luchnanus* (LINNÉ)

24. ネジマガキガイ *Gibberulus gibberulus gibbosus* (RÖDING)

25. クモガイ *Lambis lambis* (LINNÉ)

タカラガイ科 Cypraeidae

26. ヤクシマダカラ *Arabica arabica* (LINEÉ)

27. ハナマルユキ *Ravitrona caputserpentis* (LINNÉ)

28. キイロダカラ *Monetaria moneta* (LINNÉ)

29. ハナビラダカラ *Monetaria (Ornamentaria) annulus*  
(LINNÉ)

30. ホシダカラ *Cypaea tigiris* (LINNÉ)

31. ホシキヌタ *Ponda (Mastaponda) vitellus* (LINNÉ)

32. タカラガイ科不明 Cypraeidae

- フジツガイ科 *Cymatllidae*

  33. シオボラ *Gutturnium muricum* (RÖDING)
  34. オキニシ *Bursa dunkeri* KIRA
  35. ガンゼキボラ *Chicoreus (Triplex) brunneus* (LINK)
  36. ウネレイシダマシ *Cronia margariticola* (BRODERIP)
  37. ツノレイシ *Menathais tuberosa* (RÖDING)
  38. シラクモガイ *Mancinella armigera* (LINK)

エゾバイ科 *Buccinidae*

  39. シマベッコウバイ *Japeuthria cingulata* (REEVE)

イトマキボラ科 *Fasciolariidae*

  40. イトマキボラ *Pleuroploca trapezium trapezium* (LINNAEUS)
  41. ナガイトマキボラ *Pleuroploca filamentosa* (RÖDING)

マクラガイ科 *Olividae*

  42. ジュドウマクラ *Oliva (mimiaceoliva) miniacea*
  - ショクコウラ科 *Harpidae*
  43. ショクコウラ *Harpa major* (RÖDING)

オニコブシ科 *Vasidae*

  44. オニコブシ *Vasum ceramicum* (LINNAEUS)
  45. コオニコブシ *Vasum turbinellum* (LINNÉ)

イモガイ科 *Conidae*

  46. マダライモ *Virroconus ebraeus* (LINNÉ)
  47. イボカバイモ *Virgiconus distans* (HWASS)
  48. イボシマイモ *Virgiconus lividus* (HWASS)
  49. ソウジョウイモ *Conus Darioconus episcopatus da Motta*
  50. ロウソクガイ *Cleobula quercina* (LIGHTFOOT)
  51. イモガイの一一種 *Conidae*
  52. イモガイ科不明 *Conidae*

キセルガイ科 *Clausiliidae*

  53. ツヤギセル *Nesiophaeduse praeclara praeclara* (GOULD)

b. 斧足綱 PELECYPODA

フネガイ科 *Arcidae*

  1. エガイ *Barbatia (Abarbatia) decussata* (SOWERBY)
  1. リュウキュウサルボウ *Anadara antiquata* (LINNÉ)

タマキガイ科 *Glycymeridae*

  3. ソメワケグリ *Glycymeris (Veleluceta) reevei* (MAYER)

ウグイスガイ科 *Pteriidae*

  4. ミドリアオリガイ *Pinctada panasesae* (JAMESON)

- ウミギク科 Spondylidae

  5. メンガイ *Spondylus squamosus* Schreibers
  6. カバトゲウミギク *Spondylus butleri* Reeve

ツキガイ科 Lucinidae

  7. ウラキツキガイ *Codakia paylenorum* (IREDALE)

キクザルガイ科 Chamidae

  8. キクザルガイ科の一種 *Chamidae*
  9. キクザルガイ科不明 *Chamidae*

ザルガイ科 Cardiidae

  10. リュウキュウザルガイ *Vasticardium (Regozara) flavum* (LINNÉ)
  11. カワラガイ *Fragum unedo* (LINNÉ)

シャコガイ科 Tridacnidae

  12. シャゴウ *Hippopus hippopus* (LINNAEUS)
  13. ヒメジャコ *Tridacna (Chametrachea) crocea* LAMARCK
  14. ヒレジャコ *Tridacna (Flodacna) squamosa* LAMARCK
  15. シラナミ *Tridacna (Vulgodacna) maxima* (RÖDING)

バカガイ科 Mactridae

  16. リュウキュウバカガイ *Mactra maculata* (GMELIN)

チドリマスホウ科 Mesodesmatidae

  17. イソハマグリ *Atactodea striata* (GMELIN)

ニッコウガイ科 Tellinidae

  18. ヒメニッコウガイ *Tellinella staurella* (LAMARCK)
  19. リュウキュウシラトリ *Quidnipagus palatum* IREDALE

シオサザナミ科 Asaphidae

  20. リュウキュウマスホウ *Asaphis dichotoma* (ANTON)

シジミ科 Corbiculidae

  21. シレナシジミ *Geloina papua* (LINNÉ)

マルスダレガイ科 Veneridae

  22. ヌノメガイ *Periglypta puerperal* (LINNÉ)
  23. アラヌノメ *Periglypta reticulata* (LINNÉ)
  24. ホソスジイナミガイ *Gafrarium pectinatum* (LINNÉ)
  25. アラスジケマンガイ *Gafrarium tumidum* (RÖDING)
  26. ユウカゲハマグリ *Pitar striatum* (GRAEY)
  27. イオウハマグリ *Pitar (Pitarina) sulfureum* Pilsbry
  28. オイノカガミ *Bonartemis histrio* (GMELIN)
  29. スダレハマグリ *Katelysia (Hemitapes) aponica* (GMELIN)
  30. ハマグリ *Meretrix lusoria* (RÖDING)
  31. オキシジミ *Cyclina sinensis* (GMELIN)

第74表 貝類出土状況一覧( 卷貝)

番号	科名	種名	生息地	出土地			表土			II層			洞穴内			美福門			合計			
				完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	
1	ニシキウズ科	ニシキウズ	I-3-a				13	1	12			1							13	1	13	
2		ギンタカハマ	I-4-a				2	2	3	1		1							3	2	4	
3		サラサバティ	I-4-a				3	6	9	1		3				1	7	6	10			
4	リュウテン科	ヤコウガイのフタ	I-4-a	3	1		14	10	10	1		1							18	11	11	
5		チョウセンサザエ	I-3-a	2			1	68	43	21			9	4	3	79	47	25				
6		チョウセンサザエのフタ	I-3-a				8	0	0									8	0	0		
7		カンギク	II-1-b				44	16	11			1						45	16	11		
8		カンギクのフタ	II-1-b				1	0	0									1	0	0		
9	アマオブネ科	マルアマオブネ	II-1-b				1	0	0									1	0	0		
10		アマオブネ	I-1-b				3	0	1									3	0	1		
11	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8				9	3	0									9	3	0		
12	トウガタカワニナ科	スグカワニナ	IV-6				2	0	2									2	0	2		
13	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	I-1-a				2	0	0									2	0	0		
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c				6	9	5									6	9	5		
15		カヤノミカニモリ	I-0-a				3	0	0									3	0	0		
16		ウミニナカニモリ	I-1-a				83	16	15									83	16	15		
17		コゲツノエ	III-1-c				0	0	1									0	0	1		
18		クワノミカニモリ	I-1-a				23	5	1									23	5	1		
19	ウミニナ科	カワアイ	III-1-c				2	5	1									2	5	1		
20		センニンガイ	III-1-c				0	0	0									1	0	0		
21		リュウキュウウミニナ	0-c				2	0	2									2	0	2		
22	ソデボラ科	オハグロガイ	II-2-c				15	1	1									15	1	1		
23		マガキガイ	I-2-c	1			1	90	124	6		2		3	2			94	128	7		
24		ネジマガキガイ	I-2-c				0	0	1									0	0	1		
25		クモガイ	I-2-c				0	2	4			1						0	2	5		
26		ヤクシマダカラ	I-2-c				3	0	2									3	0	2		
27	タカラガイ科	ハナマルユキ	I-3-a				2	1	1									2	1	1		
28		キイロダカラ	I-1-a				2	0	0									2	0	0		
29		ハナビラダカラ	I-1-a	4			6	0	0									10	0	0		
30		ホシカラ	I-2-c				0	1	1									0	1	1		
31		ホシキヌタ	I-2-a				3	0	0								1	3	1	0		
32		タカラガイ科不明	—				0	0	1									0	0	1		
33	フジツガイ科	シオボラ	I-1-a				0	0	1									0	0	1		
34	オキニシ科	オキニシ	I-3-a				2	0	0									2	0	0		
35	アクキガイ科	ガンゼキボラ	I-4-a				1	0	0									1	0	0		
36		ウネレイシダマシ	I-1-b				1	0	0									1	0	0		
37		ツノレイシ	I-3-a				4	0	0									4	0	0		
38		シラクモガイ	I-3-a				6	0	1									6	0	1		
39	エゾバイ科	シマベッコウバイ	I-1-a				14	1	1									14	1	1		
40	イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a	1			10	1	2								4	1	15	1	3	
41	マクラガイ科	ナガイトマキボラ	I-2-a				0	0	0			1						0	1	0		
42	ショクコウラ科	ショクコウラ	I-c				1	0	0									1	0	0		
43	オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a				1	0	0									1	0	0		
44	オニコブシ科	コオニコブシ	I-1-c				3	0	1									3	0	1		
45	イモガイ科	マダライモ	I-1-a				2	0	1									2	0	1		
46		イボカハイモ	I-2-c				0	0	1									0	0	1		
47		イボシマイモ	I-2-a				3	3	0									3	3	0		
48		ソウジョウイモ	I-1-c				0	0	0								1		1	0	0	
49		ロウソクガイ	I-1-c				1	0	0									1	0	0		
50		イモガイの一種	—				2	0	0									2	0	0		
51		イモガイ不明	—				0	0	1									0	0	1		
52	キセルガイ科	ツヤギセル	V				2	0	1									2	0	1		
53							11	1	2	463	251	121	3	3	4	22	7	5	499	262	132	

## 貝の生息地の分類

外洋～内湾	水 深	底 質
I:外洋・サンゴ礁域	0:潮間帯上部(Iではノッチ、IIIではマングローブ) 3:干潮(Iにのみ適用)	a:岩盤
II:内湾・転石地域	1:潮間帯中・下部 4:礁斜面及びその下部	b:転石
III:河口干潟・マングローブ域	2:亜潮間帯上縁部(Iではイロー)	c:岩礫底、砂泥底、砂底
IV:淡水域	5:止水 6:流水	
V:陸域	7:林内 8:林内・林縁部 9:林縁部	

第75表 貝類出土状況一覧(二枚貝)

番号	種名			出土地			表土			II層			美福門			合計						
	科名	種名	生息地	完形			殻頂			破片			完形			殻頂			破片			
				L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
1	フネガイ科	エガイ	I-1-a					1										1	0	0	0	
2		リュウキュウサルボウ	II-2-c					1	2	1	3	1						1	2	1	3	
3	タマキガイ科	ソメワケグリ	II-2-c					1			1							1	0	0	1	
4	ウグイスガイ科	ミドリアオリガイ	II-2-c								1							0	0	0	1	
5	ウミギク科	メンガイ	I-2-a					2	1									2	1	0	0	
6		カバドゲウミギク	I-2-a						1									0	1	0	0	
7	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c					22	44	3	2	1						22	44	3	2	
8	キクザルカイ科	キクザルガイ科の一種	—						1									0	1	0	0	
9		キクザルガイ科不明	—						2									0	2	0	0	
10	ザルガイ科	リュウキュウザルガイ	II-2-c					1	2		1	1						1	3	0	0	
11		カワラガイ	II-2-c					2	2	1								2	2	1	0	
12	斧	シャゴウ	I-2-a						1	1	1	1						0	1	1	1	
13	シャコガイ科	ヒメジャコ	I-2-a								1	4						0	0	0	1	
14		ヒレジャコ	I-2-c			1		1	2	5	3	11			1		4	1	2	6	4	
15		シラナミ	I-2-a					1	1									1	1	0	0	
16	足	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	I-1-c					1	1		1						1	1	0	0	
17	チドリマスホウ科	イソハマグリ	I-1-c					7	4	1	1		1					8	4	1	1	
18	ニッコウガイ科	ヒメニッコウガイ	II-2-c								1							0	0	0	1	
19	網	リュウキュウシラトリ	II-1-c						1									1	0	0	0	
20	シオサザナミ科	リュウキュウマスホウ	II-1-c							1	3							0	0	1	3	
21	シジミ科	シレナシジミ	III-0-c					2		3		1						2	0	3	0	
22	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	II-1-c					20	12	3	4	10						20	12	3	4	
23		アラヌノメ	I-2-c								2							0	0	0	0	
24		ホソスジイナミガイ	II-1-c					1	9									1	9	0	0	
25		アラスジケマンガイ	III-1-c					177	175	21	26	5	1	2		1	178	177	21	27		
26		ユウカゲハマグリ	II-1-c					2	1									2	1	0	0	
27		イオウハマグリ	II-1-c						1									1	0	0	0	
28		オイノカガミ	II-1-c						1									0	1	0	0	
29		スダレハマグリ	II-1-c					5	5	1								5	5	1	0	
30		ハマグリ	II-1-c					13	15	17	16	7	2	1	2	2	15	16	19	18		
31		オキシジミ	III-I-c					8	13	6	6	3						8	13	6	6	
32	二枚貝科 不明	—	—									1					1	0	0	0		
合 計				0	0	0	1	0	270	295	64	69	49	4	4	3	3	5	274	299	67	73
																					54	

第76表 有孔ヤコウガイ集計表

種名		出土地			表土			II層			洞穴内			美福門			合計		
種名	生息地	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破	完形	殻頂	破
ヤコウガイ	I-4-a	1	4	1	23	92		6	23		10	35	0	40			154		

## 第26節 脊椎動物遺存体

本地区で出土した脊椎動物遺存体は、I. 軟骨魚綱 1目 1科、II. 硬骨魚綱 2目 8科 7種、III. 爬虫綱 1目 1科、IV. 鳥綱 1目 1科、V. 哺乳綱 5目 7科以上が検出されている。

以下に、種名の一覧を示し、その内容を概述する。

脊椎動物遺存体種名表

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

I. 軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

- 1.メジロザメ目 Order Carcharhiniformes
- a.メジロザメ科 Family Carcharhinidae
- 属・種不明 Gen.et sp.indet.

II. 硬骨魚綱 Class Osteichthyes

- 1.スズキ目 Order Perciformes
  - a.ハタ科 Family Serranidae
  - 属・種不明 Gen.et sp.indet.
- b.タイ科 Family Sparidae
  - クロダイ *Acanthopagrus* sp.
- c.フエダイ科 Family Lutjanidae
  - 属・種不明 Gen.et sp.indet.
- d.フエフキダイ科 Family Lethrinidae
  - ハマフエフキ *Lethrinus nebulosus*
  - ヨコシマクロダイ *Monotaxis grandoculis*
- e.ベラ科 Family Labridae
  - コブダイ *Semicossyphus reticulatus*
  - タキベラ *Bodianus perditio*
- f.ブダイ科 Family Scaridae
  - ナンヨウブダイ *Scarus gibbus*
  - ブダイ *Leptoscarus japonicus*
  - 属・種不明 Gen.et sp.indet.
- 2.フグ目 Order Tetraodontiformes
  - a.モンガワカワハギ科 Family Balistidae
  - b.ハリセンボン科 Family Diodontidae
  - 属・種不明 Gen.et sp.indet.

III. 爬虫綱 Class Reptilia

- 1.カメ目 Order Chelonia
- a.ウミガメ科 Family Chelonidae
- 属・種不明 Gen.et sp.indet.

IV. 鳥綱 Class Aves

- 1.キジ目 Order Galliformes
  - a.キジ科 Family Phasianidae
  - ニワトリ *Gallus gallus var. domesticus*
  - 属・種不明 Gen.et sp.indet.

V. 哺乳綱 Class Mammalia

- 1.食肉目 Order Carnivora
  - a.イヌ科 Family Canidae
    - イヌ *Canis familiaris*
  - b.ネコ科 Family Felidae
    - ネコ *Felis catus*
- 2.クジラ目 Order Cetacea
  - a.イルカ科 Family Delphinidae
    - イルカ類 *Delphinidae* Gen etst. indet
- 3.海牛目 Order Sirennia
  - a.ジュゴン科 Family Dugongidae
    - ジュゴン *Dugong dugong*
- 4.奇蹄目 Order Perissoda ctyla
  - a.ウマ科 Family Equidae
    - ウマ *Equus caballus*
- 5.偶蹄目 Order Artiodactyla
  - a.ウシ科 Family Bovidae
    - ウシ *Bos taurus*
    - ヤギ *Capra hircus*
  - b.イノシシ科 Family Suidae
    - ブタ *Sus scrofa var. domesticus*

## 1. 魚骨

第77表 魚類出土状況一覧

魚骨の出土は多くはなかった。首里城跡内郭地区の特徴のように思われるが、これも地区ごとによる違いがあるかも知れない。

### メジロザメ科の一種

脊椎骨が2点得られている。いずれもさほど大きくななく、どちらかと言えば小形の部類に属する。

### ハタ科の一種

II層で3点の歯骨の出土があるのみである。標本の大きさは、平均的に残存長49.30mmである。他にハタ類の鋤骨、口蓋骨の標本が各1点ある。

### クロダイ

歯骨(R)、主上顎骨(R)が1点づつある。

### フエダイ科／フエダイ科の一種

前上顎骨、前鰓蓋骨が各1点ある程度であるが、種名をあきらかにすることはできなかった。

### ハマフエフキ

魚類の中では最も多いとともに、前上顎骨4、歯骨4、主上顎骨2、口蓋骨3、舌頸骨2、前鰓蓋骨3、主鰓蓋骨1、角骨2と、多くの部位骨がある。

メジロ サメ目	メジロザメ科	メジロザメ科の一種	脊椎骨	出土地			II層	美福門	合計
				種目	部位				
ス ズ キ 目	ハタ科	ハタ科の一種	歯骨	R	L	3			3 0
			鋤骨			1			1
	タイ科	クロダイ	口蓋骨			1			1
			歯骨	R	L	1			1 0
	フエダイ科	フエダイ科の一種	主上顎骨	R	L	1			1 0
			前上顎骨	R	L		1		0 1
	フエフキダイ科	ハマフエフキ	前鰓蓋骨	R	L		1		0 1
			前上顎骨	R	L	2	2		2 2
			歯骨	R	L	2	2		2 2
			主上顎骨	R	L		2		0 2
			口蓋骨	R	L	1	2		1 2
			舌頸骨	R	L	2			2 0
			前鰓蓋骨	R	L	3			3 0
			主鰓蓋骨	R	L	1			1 0
			角骨	R	L	1	1		1 1
			ハマフエフキ(A)	歯骨	R	L	1		1 0
ブ ダイ 科	ベラ科	コブダイ	ヨコシマクロダイ	前上顎骨	R	L		1	0 1
			前上顎骨	R	L		2		0 2
			歯骨	R	L	1	2		1 2
			上咽頭骨	R	L	1			1 0
			下咽頭骨			6			6
モ ン ガ ラ カ ワ ハ ギ 科	モンガラカワハギ科	ナシヨウブダイ	タキベラ	下咽頭骨		1			1
			上咽頭骨	R	L	1	1		1 1
			前上顎骨	R	L	1	2		1 2
			歯骨	R	L	1			1 0
ハ リ セ ン ボ ン 科	ハリセンボン科	モンガラカワハギ科の一種	前上顎骨	R	L	1			1 0
			ハリセンボン科の一種	棘		1			1
科・種不明			主上顎骨	R	L		4		0 4
			方骨(A)	R	L	1			1 0
			方骨(B)	R	L		1		0 1
			前鰓蓋骨	R	L	1			1 0
			角骨	R	L	1			1 0
			背鰭棘			3			3
			臀鰭血管間棘			1			1
			脊椎骨			38			38
			尾椎			2			2
			合計			106	1		107

他に、当該種とは若干形態的に異なると見られたハマフエフキ(A)としたものの歯骨1もある。

### ヨコシマクロダイ

前上顎骨左1点が得られているのみである。

### コブダイ(カンダイ)

前上顎骨2、歯骨3、上咽頭骨各1、下咽頭骨6がある。下咽頭骨幅は平均幅48.07mmである。体長30～50cm前後の個体になる。

### タキベラ

下咽頭骨1があつたのみである。

## ナンヨウブダイ

上咽頭骨 2 (歯部幅 4.01mm. 7.77mm)がある。体長 30 ~ 40cm 前後の個体になるものであろう。  
ブダイ科の一種

前上顎骨 3、歯骨 1 があった。

## モンガラカワハギ科の一種

前上顎骨 1 があったのみである。体長 20cm 前後のカワハギ類であったであろうか。

## ハリセンボン科の一種

棘 1 があったのみで、詳細は不明である。

## 2. 爬虫類

### ウミガメ類

橈骨 1、尺骨 2、指骨 9、縁甲板 5、腹甲板 4、背甲板 19、剣状突起 2 などがある。縁甲板、腹甲板、背甲板などは碎片になっているものが多い。個体としては、中型ぐらいのサイズの大きさになると思われる標本である。

第78表 ウミガメ出土状況一覧

部 位	右/左	出土地	個数
橈骨	右	II層	1
尺骨	右	II層	2
指骨	不明	II層	9
縁甲板	不明	II層	5
腹甲板	不明	II層	4
背甲板	不明	II層	19
剣状突起	右	II層	1
	不明	II層	1

## 3. 鳥綱

### ニワトリ

鳥口骨 1、椎体 1 以外はほとんどが四肢骨で、骨の総数では 28 点と多くなく、日常的に食べたというほどの量ではないと思われる。ほとんどの標本は、骨端を残しているものは少ない。解体時の破損によるものであろうか。骨格のサイズに多少の大小の標本があるところをみると、いくつかの品種があったのであろうか。

第79表 ニワトリ出土状況一覧

部 位	出 土 地			表 土			II 层			洞穴内			美福門			合 計		
	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明
鳥口骨 遠位端							1									1	0	0
胸椎 (棘突起が融合したもの)							1									0	0	1
椎体																		
近位部				1												0	1	0
上腕骨																1	0	0
近位部～遠位部				1														
骨体				1												1	0	0
遠位端							1		1							2	0	0
橈骨																1	0	0
近位端																0	1	0
近位端～骨体				1												1	0	0
尺骨																2	0	0
完存	1		1													0	1	0
近位端					1											0	1	0
近位端～骨体							1									1	0	0
骨体					2	1										2	1	0
大腿骨																1	0	0
近位端							1									1	0	0
近位部											1					1	0	0
骨体					1											0	1	0
遠位骨端のみ				1												1	0	0
脛骨																1	0	0
近位端					1											1	0	0
近位部～骨体					1											1	0	0
遠位部					1											1	0	0
中足骨																0	1	0
完存									1							0	1	0
近位端～骨体	2															2	0	0
遠位部					2											0	2	0
合 計	3	0	0	10	6	1	4	1	0	2	1	0	19	8	1			

## 4. 哺乳綱

### イヌ

イヌの遺骸は 8 点と極少であるうえ、椎体以外は四肢骨のみで、顎骨などの特徴をうかがえる。標本は皆無である。

### ネコ

四肢骨のみの標本が 6 点あり、うち脛骨で完存する標本が左右各々 1 点含まれる。

イルカ

II層より腰椎の出土が1点のみある。

ジュゴン

骨格の検出は多くない。下顎臼歯1と頭骨、上顎骨、肋骨などの破片があったのみである。肋骨の骨端は、骨製品の素材の目的で折られたり、切り付けた痕跡を他遺跡では見られることが少くないが、首里城跡内郭地区という遺跡の性格上、1点のみの限られた標本ではこのようなことがあったかということについては判然としない。

ウマ

四肢骨は、そのほとんどが破片資料でサイズ等をうかがえるような標本は含まれない。なお、基節骨全長73.64mmで、比較的小型の部類に属する標本であった。

ブタ

もっと多くの骨格を残しており、食肉の主体をなしていたことがうかがえる。すべての骨格は解体され、壊されて食されていたのであろうか。

椎体・肋骨片：49点があるが、1体分の数量を鑑みると決して多い数ではない。肋骨を切断したような痕跡を残す標本も多くない。

頭骨：頭頂骨、側頭骨、後頭頸があるが、いずれも碎片資料である。接合できた標本は多くない。

下顎骨：下顎骨は8点あるが、いずれも碎片である。上顎骨の出土はない。

四肢骨

肩甲骨：骨体～遠位端を残す標本が3点得られたのみである。

上腕骨：比較的多く残されている。遠位及び近位などの骨端は、ほとんどが外れ、また壊されている標本が多い。

橈骨：計6点の標本があるが、1点は遠位骨端はずれの標本である。

尺骨：少なくない標本がある。II層出土の左骨体標本に切裁痕が認められるものがある。

寛骨：臼部で割れた標本が5点ある。

大腿骨：近位及び遠位とも骨端が未骨化のためか、破損標本が多い。骨体最小径23.45mmが最大である。大形の大軽骨では骨中央付近で割られているものが目立つ。

脛骨：比較的多くの標本が残されていた。II層出土の近位部～遠位部及び近位部～遠位端の標本に切裁痕が認められるものが各1点づつある。

ウシ

大形の家畜としは、ウマに比して多くの骨を残していた。グスク時代

第80表 イヌ出土状況一覧

部位	右/左	出土地	個数
椎体		II層	1
肩甲骨	遠位端	左	II層
上腕骨	完存	左	II層
	骨体～遠位部	左	表土
橈骨	骨体～遠位骨端はずれ	右	表土
尺骨	近位端～骨体	左	II層
寛骨	完存	左	II層
脛骨	骨体～遠位端	左	II層

第81表 ネコ出土状況一覧

部位	右/左	出土地	個数
上腕骨	骨体	左	II層
肩甲骨	遠位端	右	II層
寛骨	坐骨～臼骨	右	II層
大腿骨	骨体～遠位骨端はずれ	左	II層
脛骨	完存	右	II層
	完存	左	II層

第82表 ジュゴン出土状況一覧

部位	右/左	出土地	個数
頭骨破片	不明	II層	1
上顎骨	右	II層	1
下顎臼歯	不明	II層	1
肋骨	不明	II層	1

第83表 ウマ出土状況一覧

部位	右/左	出土地	個数
P <sup>3</sup>	左	II層	1
上顎骨 P <sup>4</sup>	左	II層	1
歯骨	不明	II層	1
歯骨 破片	不明	II層	1
橈骨 近位端	右	II層	1
	骨体～遠位端	右	II層
手根骨橈側	左	II層	1
基節骨	不明	II層	1

第84表 ブタ歯出土状況一覧

部位	右/左	出土地	個数
P <sup>3</sup>	右	II層	1
上顎骨 P <sup>3.4</sup> M <sup>1.2</sup>	右	II層	1
M <sup>1.2</sup>	右	II層	1
M <sup>2</sup>	左	II層	2
M <sup>3</sup>	右	II層	1
M <sup>3</sup>	左	II層	2
I <sub>2</sub>	右	II層	1
下顎骨 I <sub>2</sub>	左	II層	1
P <sub>4</sub>	右	II層	2
P <sub>4</sub>	左	洞穴内	1
M <sub>1</sub>	左	II層	1
M <sub>1.2</sub>	左	洞穴内	1
M <sub>3</sub>	右	II層	1

以降において最も重要な家畜であるとともに、食肉であったと思われる。標本からして、個体のサイズにおいても、大小があったものと思われる。

頭骨・顎骨：角、前頭骨、下顎骨が各1点ある。上顎歯、下顎歯とも出土量は、ほぼ類似している。上顎歯ではM<sup>2</sup>左1があるが、下顎歯はP<sub>2..3..4</sub>右のみである。

椎体：2点のみの出土がある。

#### 四肢骨

肩甲骨：6点がある。骨体を残すものは4点のみである。

上腕骨：遠位骨端幅 46.40mmの計測があり、中形のサイズの個体になる。骨体及び遠位部標本に切裁痕の認められるものがある。

橈骨：近位骨端幅 56.96mmは小形サイズ部類に属するようである。

第85表 ブタ出土状況一覧

部 位	出 土 地			表 土			II層			洞 穴 内			美 福 門			合 計		
	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明	右	左	不 明
頭骨	頭頂骨					3										0	0	3
	側頭骨			1												1	0	0
	後頭頸					1										0	0	1
下顎骨	破片			4		2	1	1							5	1	2	
椎体	棘突起					4									0	0	4	
	破片					1									0	0	1	
	肋骨	破片		3	6	4	30						1		6	5	33	
肩甲骨	骨体～遠位端	1		1	1										1	2	0	
	近位骨端のみ					1									0	1	0	
	近位部					1									0	1	0	
	近位骨端はずれ～骨体			2											2	0	0	
	近位部～骨体					1									0	1	0	
	近位部～遠位部					①									0	①	0	
	近位骨端はずれ～遠位端			1											1	0	0	
	骨体					1	1								0	1	1	
	骨体～遠位部			1	2										1	2	0	
	骨体～遠位端					1									0	1	0	
上腕骨	骨体～遠位骨端はずれ			2											2	0	0	
	遠位部					2									0	2	0	
	遠位端			2	1										2	1	0	
	遠位骨端のみ			1	1										1	1	0	
	近位端～骨体					1									0	1	0	
橈骨	近位部～骨体					1									0	1	0	
	骨体			2			1								3	0	0	
	骨体～遠位骨端はずれ					1									0	1	0	
	近位骨端はずれ～骨体					1									0	1	0	
尺骨	近位部～骨体					1									0	1	0	
	骨体			3	①										3	①	0	
	骨体～遠位部			1											1	0	0	
	破片			1											1	0	0	
	III					3									0	3	0	
中手骨	V					1									0	1	0	
	寘骨			1	4										1	4	0	
大腿骨	近位骨端はずれ						1								1	0	0	
	近位骨端はずれ～骨体			1											1	0	0	
	近位部			2											2	0	0	
	近位部～遠位部					1									0	1	0	
	骨体					1			2						0	1	2	
	骨体～遠位部			1											1	0	0	
	遠位骨端はずれ			1											1	0	0	
	遠位骨端のみ			2											2	0	0	
	破片			1	1										1	1	0	
	近位骨端はずれ					1									1	0	0	
脛骨	近位部～遠位部					①	2								①	2	0	
	両端はずれ	1													0	1	0	
	骨体			3	3										3	3	0	
	近位部～遠位骨端はずれ			1											1	0	0	
	近位部～遠位端				①										①	0	0	
	遠位骨端のみ			1											1	0	0	
	骨体					2				1					1	2	0	
腓骨	骨体～遠位端			1											1	0	0	
	距骨					1									0	1	0	
踵骨						5									0	5	0	
	II					2									2	0	0	
中足骨	III(近位骨端のみ)					1									0	1	0	
	IV				1	1	1								1	1	1	
基節骨						1	1								1	1	0	
	合 計	0	2	3	49②	50②	43	3	1	2	1	1	0	53②	54②	48		

注 ○:切裁痕

尺骨：近位部を残す標本が主をなす。

骨体1は切裁痕が認められる。

中手骨：全長162.80mmの標本があり、中形のサイズになるものと思われる。

寛骨：腸骨部1、臼部1があるのみである。

大腿骨：数量的に少ないが、その中でも近位部を残す標本が多い。近位骨端幅は48.28mmは小形に属するサイズかと思われる。

脛骨：多くない標本がある。近位端幅は1.47mmを測る。II層出土の骨体1には、切裁痕が認められる。

距骨：1点あった。破片である。

中足骨：近位端1がある。碎片となっており、食するために叩き割っている可能性がある。

踵骨：距骨同様1点のみである。

この他に、中手・中足骨、基節骨、中節骨、末節骨、尾骨などの標本が1～5点ある。

ヤギ

上下の顎骨や四肢骨が出土している。ブタやウシなどに比べると少なくて、食肉のウェイトとしてはそれほど高くなかったようである。

第86表 ウシ出土状況一覧

部位	出土地			表土			II層			洞穴内			合計			
	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	
頭骨	角				1					0	1	0				
	前頭骨			1						1	0	0				
下顎骨	破片			1						1	0	0				
椎体					2					0	0	2				
棘突起					2					0	0	2				
肋骨	破片					17				0	0	17				
	骨体			1	3					1	3	0				
肩甲骨	骨体～遠位部			1						1	0	0				
	遠位端				1					0	1	0				
上腕骨	近位骨端はずれ			1						1	0	0				
	近位部			1	1					1	1	0				
	近位部～骨体			1						1	0	0				
	骨体				①	2				0	①	2				
	遠位部			1					①	1	0	①				
	遠位骨端はずれ			2						0	2	0				
橈骨	近位端				1					0	1	0				
	近位部			2						2	0	0				
	近位部～骨体			1						1	0	0				
	骨体				2					0	2	0				
尺骨	近位部			1						1	0	0				
	近位部～骨体			1						1	0	0				
	骨体			1(①) 1						1(①)	1	0				
手根骨	第4			1						1	0	0				
	橈側			1						1	0	0				
	近位端			2						2	0	0				
中手骨	近位端～骨体							1		0	1	0				
	近位部～骨体			1						1	0	0				
	近位部～遠位端				1					0	1	0				
寛骨	腸骨部			1						1	0	0				
	臼部			1						1	0	0				
大転骨	近位骨端のみ					2 1				1	0	2				
	近位端				1					0	1	0				
	近位部～遠位部			1						1	0	0				
	骨体				1					0	1	0				
	遠位部			2						2	0	0				
脛骨	近位骨端のみ			1 1						1	1	0				
	骨体	1		1(①) 1						2(①)	1	0				
	骨体～遠位部				1					0	1	0				
	遠位部			1						1	0	0				
	遠位骨端のみ				1 1					0	1	1				
距骨				1						1	0	0				
果骨				1						0	1	0				
足根骨	第2・3			1						1	0	0				
踵骨				1						1	0	0				
中足骨	近位端				1					0	1	0				
中手・中足骨						1				0	0	1				
基節骨				3	1					3	1	0				
中節骨				3	1		1			4	1	0				
末節骨				1						1	0	0				
尾椎						1				0	0	1				
	合計	1	0	0	37(2)	23(1)	28	2	1	①	40(2)	24(1)	28(1)			

注 ○:切裁痕

第87表 ウシ歯出土状況一覧

部位	右/左	出土地	個数
上顎骨	P <sup>2</sup>	右	II層 1
	M <sup>2</sup>	左	II層 1
	破片	不明	II層 1
下顎骨	切歯骨	右	II層 1
	P <sub>2</sub>	右	II層 1
	P <sub>3</sub>	右	II層 1
	P <sub>4</sub>	右	II層 1
	破片	II層	8

第88表 ヤギ出土状況一覧

部位	出土地			II層			洞穴内			合計		
	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
上顎骨	M <sup>3</sup>			1						0	1	0
下顎骨	dm <sub>3</sub>			1						0	1	0
	dm <sub>4</sub>						1			0	1	0
上腕骨	近位部～骨体					1				1	0	0
	両端はずれ					1				1	0	0
	近位部～遠位部						1			0	1	0
	骨体～遠位骨端はずれ						1			1	0	0
	近位骨端はずれ～骨体							1		0	1	0
中手骨									1	0	0	1
中足骨									1	0	0	1
	合計	0	2	0	2	4	2	2	6	2		

※橈骨 1個ヤギ?

## 第6章 結語

前章までに調査の内容及び成果などについて述べてきた。終章の本章では、調査によって明らかになったことなどについて整理し、結語としたい。

すでに述べたように、調査は1992年(平成4)11月に一部開園した国営沖縄記念公園首里城地区の未開園部分の整備計画に伴う事前の遺構調査として、1994・95年(平成5・6)に実施したものである。

調査地区は、正殿東側に位置する「東のアザナ」郭と周辺一帯で、対象地点は去った大戦によって壊滅を受けた後、旧琉球大学や那覇市の貯水タンクなどの設置のための、造成等によって敷き均され、旧地形は損なわれ、比較的平坦を呈していた。

かかる状態からして、当該地点に所在していた寝廟殿や白銀門などの建造物群の遺構については、良好な保存状態は望めないであろうことは調査着手前から予測された。調査の結果、建物群が位置していた一帯は大きく削り取られ、表土層を除去すると琉球石灰岩の岩盤が露出した状況であった。従って、調査によって得られた出土遺物のほとんどは岩盤の間隙や断片的に残存していた遺物包含層中から出土したものである。

検出された主な遺構には、「東のアザナ」郭の略コ字状に延びた石積みの根石と中込め(裏込め)遺構、石敷遺構、美福門に接続する階段の一部、穴状遺構、隅丸方形状石積みなどがある。

「東のアザナ」郭の略コ字状に延びている石積みの根石と中込め(裏込め)遺構は、東西ライン方向の石積みの根石は比較的良好に残存していたものの、東端部については根石まで除去され、全く残っていないかった。美福門への接続階段は、橙道形式をなすもので、蹴上げ、踏幅が左右異なる構造をなすものである。規模などは若干異なるが、類似の構造を有するものは、中城城跡の追手門を入って南の郭へ上がっていく階段にも見られる。石敷遺構は、「東のアザナ」郭の西寄りにて検出されたものであるが、残存状態が良好でなく、プランや性格などに関しては判然としなかった。穴状遺構は、基盤の琉球石灰岩下に、横位に蛇行して延びる自然洞穴の壁面の一部に石積みを行ったものである。その構築目的、帰属時期などについては、判然としない遺構である。隅丸方形状石積みは、美福門への接続階段の東側にて検出されたもので、比較的小振りの石材を隅丸方形状に囲繞させて積み上げたものである。吉絵図(図版81)には、一帯に御嶽の表現が見られるが、あるいはそれに充たるものかも知れない。

出土遺物は、中国産陶磁器を主体とし、タイ、ミャンマー、朝鮮などの周辺諸国や本土、さらには地元・沖縄産の陶磁器をはじめ、カムイヤキ、土器、土製品、瓦類、博、円盤状製品、石器、石製品及び石造製品、錢貨、玉、金属製品、骨製品、貝製品、貝類遺存体、獸類遺存体などの多種の遺物が検出されている。

紙幅などの関係もあり、個々の遺物についての詳細についてはふれられないが、特徴的なものを抽出し、若干コメントしたい。

出土遺物の種類及び内容などは、大勢として従前に調査、報告されている内郭地区と類似しているものが少なくなっている。その中でも注視されるものとして、ミャンマー産褐釉陶器が確認されたことである(第32図36)。標品は口縁端部の小片資料ではあるが、端部に特徴の一つである鉢文を囲繞させていることや胎土等からミャンマー産と同定されたものである。県内において、ミャンマー産の確認例は3例目で、他例も首里城跡一下之御庭地区-(西銘他2001)、同一右掖門及び周辺地区-(片桐他2003)である。

かかる資料の詳細な時期については判然としないが、いずれにせよ、3例とも王宮・首里城跡よりの出土であり、中世相当期における琉球王国の対外交易史を考えていぐえで貴重な資料と言えよう。

他に注目される資料として、高台内側に「大清康熙年製」の銘入の紅釉碗(第33図7)や鶴型水注器形の彩釉陶器

資料(第34図15)、白地鉄絵(第34図16)、ベトナム産染付(第34図17,18)などの優品資料が検出されている。

産地別に見ていくと、中国産陶磁器は青磁、白磁、青花(染付)、色絵等の磁器類と、褐釉陶器、量的には極少であるが、瑠璃釉や銅緑釉、紅釉、翡翠釉、釉裏紅、柿釉染付、彩釉陶器、白地鉄絵などがある。青磁は13C後半代を上限とし、16C前半代を下限とする資料が含まれ、年代的には時間幅が認められる。生産窯では、龍泉窯系を主体にし、僅かではあるが泉州窯系も含まれる。

年代的な位置づけとしては、青磁は13C後半～14C前半代のわずかな鎧蓮弁文碗以外は、14C後半～16C前半代の碗や皿、盤、壺等を主体とする。白磁は碗や皿を主体とし、若干の鉢と水滴が含まれる。14C代に位置づけられている資料(第18図1～4)を古とするが、以降近世に至るまでの時期差を有している。青花(染付)も、15C後半から近世にかけての年代幅が大きい。色絵は14点を図示したが(第27・28図7～14)、他遺跡に比すればまとまった量であり、王宮・首里城跡ならでの様相を反映していると言えよう。褐釉陶器は、大小の四耳壺などがあるが、これらは当該城跡以外の比較的規模の大きいグスクにはポピュラーに見られるものである。

中国産以外の外国産陶磁器類としては、タイ産の褐釉陶器や半練土器、ベトナム産染付、高麗青磁などがある。

タイ産の褐釉陶器は中国産同様、大小の四耳壺で、半練土器はこれらの褐釉陶器の蓋としての機能を有するものである。ベトナム産陶器は、蓋に褐釉を施されたもの(第35図36,37)ある。朝鮮産としては、高麗青磁が4点ある。うち、1点は器形が窺えるもので、大きく開いた口縁形状をなす碗器形をなすもの(第35図31・図版32,31)、同図30も類似した器形をなす。

これらの外国産に伴って、中世末から近世にかけての本土産陶磁器も多く出土している。特徴的な資料として、近世以前の資料では肥前系、関西系に大別することができる。特に楽焼に比定される資料が比較的揃って出土しており、その多くが2次的に火を受けているのが目立つ。これらは、五代「宗入」<sup>そうにゅう</sup>(1691～1708年)の作品に類似する「樂」の刻印が認められることから、17C終末～18C初頭の年代を与えることができる。ちなみに、首里城は1709年に正殿をはじめ、南殿・北殿が火災に遭っていることから、楽焼も含めて火災に遭った年代を考えていくうえで重要な資料となり得るものであろう。

陶磁器以外の資料として注目されるものとしては金属製品がある。とりわけ、ベルトの先端に付属する飾り金具と見られる製品は(第60図14、図版60-1)、馬蹄形状を呈した扁平な素材に5個の穿孔と線彫りの唐草文及び魚々子文を配した後、全面とも鍍金された資料で、彫金技術などから国王若しくは王族クラスの帶を飾る金具であったであろうことは想像に難くないであろう。

動物遺存体では、ウシやウマなどの他、他のグスクに比して若干ではあるが、海棲哺乳類が目立つということが指摘できる。首里城跡という特殊性であろうか。今後に残された課題である。

## 参考文献一覧

- 上田秀夫 1983 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1983 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『同上』 日本貿易陶磁研究会
- 那覇出版社 1984 『写真集 沖縄』
- 沖縄総合事務局開発建設部ほか1986 『旧首里城関係写真資料集』
- 安里進 上原政昌 家田淳一 1987 「播鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじまわ』名護博物館紀要・3 名護博物館
- S. Adhyatman&Abu Ridho 1984『TEMPAYAN DI MARTAVANS INDONESIA』HIMPUNAN KERAMIK INDONESIA THE CERAMIC OF INDONESIA
- 沖縄県土木建築部1988 『首里城公園基本設計』
- 又吉真三 1993 『首里城の建築』『甦る首里城』首里城復元期成会
- 上原靜 1994 「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』理工学社
- 永井久美男編1996 『日本出土錢總覽 1996年度版』兵庫埋蔵錢調査会
- 真栄平房敬 1997 『首里城物語』ひるぎ社
- 野々村孝男 1999 『首里城を救った男』ニライ社
- 山本正昭 2000 「グスク土器の基礎的研究」『地域文化論叢』第3号 沖縄国際大学大学院地域文化研究科
- 久手堅憲夫 2000 『首里の地名』第一書房
- 久手堅憲夫2001 『ガイドブック 首里城－なりたちから今まで－』あけぼの出版
- 那覇市役所 2001 『那覇市統計書 平成13年度版』
- 久保智康2002 『飾り金具』『日本の美術』No.437 至文堂
- 京都国立博物館編 2003 『金工の技法』『特別展示会 金色のかざり』

## 引用報告書一覧

- 安里嗣淳1978「沖縄県石垣島吹通川河口遺跡の調査概要」沖縄県教育委員会
- 島尻勝太郎他1986 『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書－』那覇市教育委員会
- 當眞嗣一 上原靜 1988 「首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査」『沖縄県文化財調査報告書』第88集 沖縄県教育委員会
- 大城慧 1993 「湧田古窯跡(Ⅰ)－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査」『沖縄県文化財調査報告書』第111集 沖縄県教育委員会
- 沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 1995 『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』
- 金城亀信他 1998 「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第132集 沖縄県教育委員会
- 盛本勲他 2001 「首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第1集 同センター
- 西銘章他 2001 「首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第3集 同センター
- 島袋洋他 2002 「天界寺跡(Ⅱ)－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第8集 同センター
- 山本正昭他 2002 「円覚寺跡－遺構確認調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第10集 同センター
- 片桐千亞紀他 2003 「首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第14集 同センター

# 図 版



検出された南側石積み（南東より）



同上（南より）

図版5 遺構検出状況（1）



遺構等の発掘状況(西より)



同上 北側部分(西より)

図版6 遺構検出状況（2）



遺構等の完掘状況(南より)



同上 中央部付近(南より)

図版7 遺構検出状況（3）



美福門に至る階段及び方形状囲い検出状況(南より)

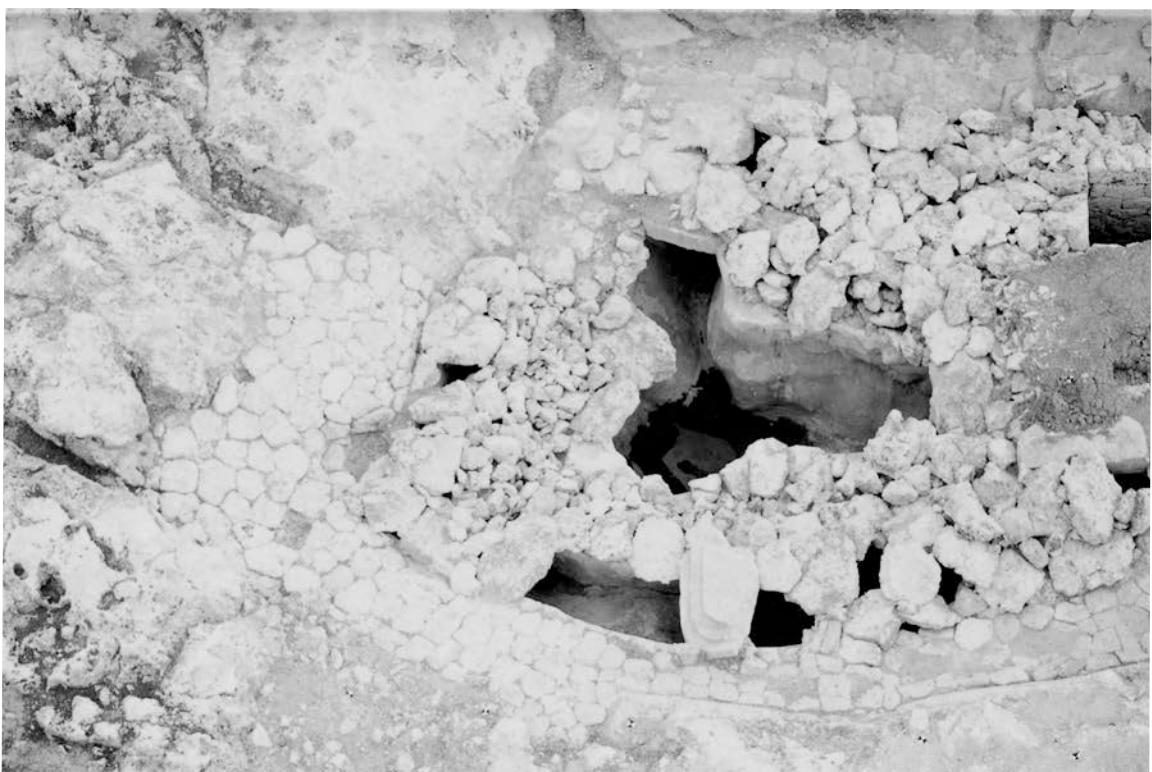


美福門に至る階段の検出状況(南より)

図版8 遺構検出状況（4）



検出された穴状遺構(北より)



同上 (北より)

図版9 遺構検出状況 (5)

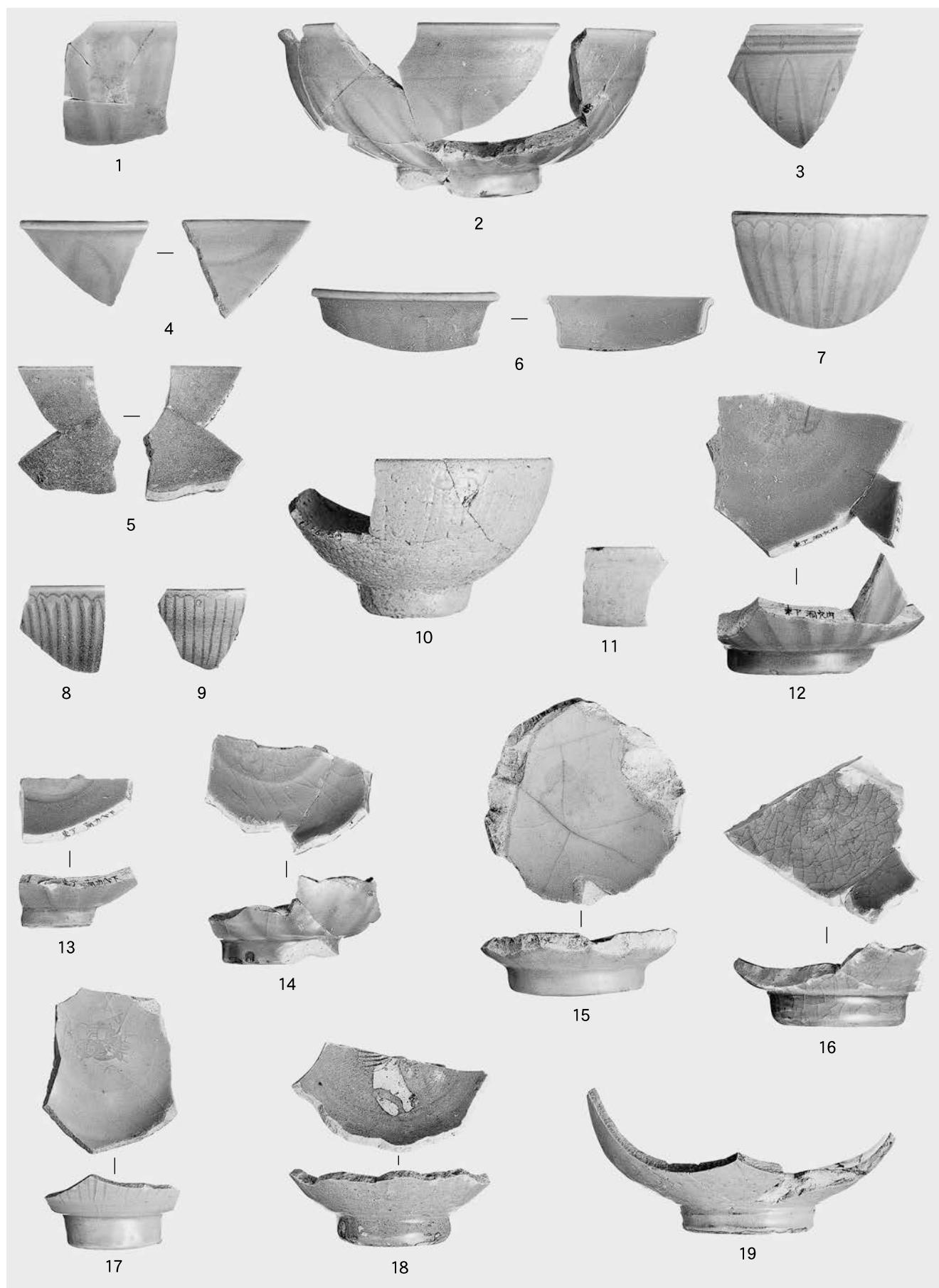


実測調査状況（南西より）

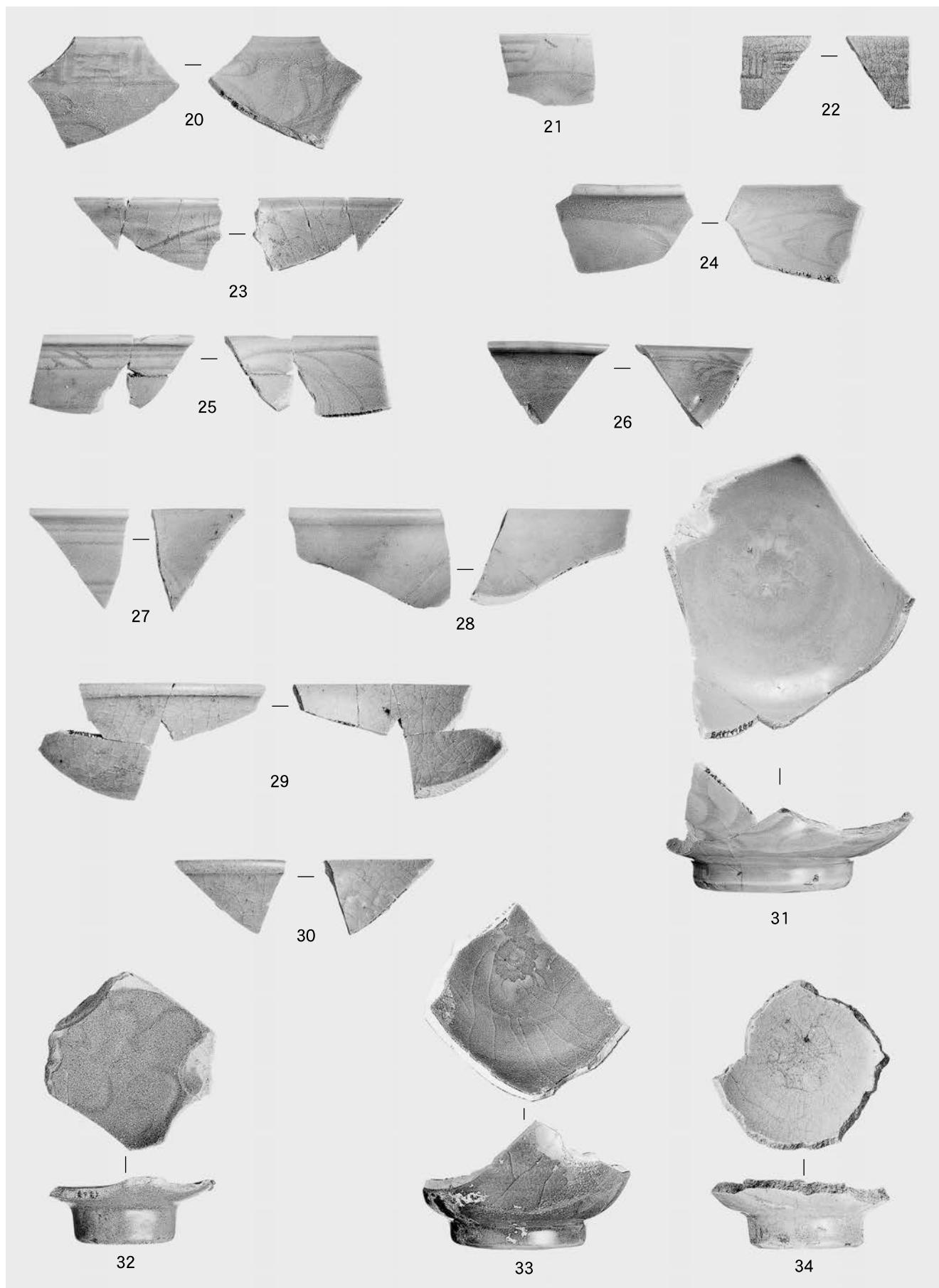


発掘調査光景

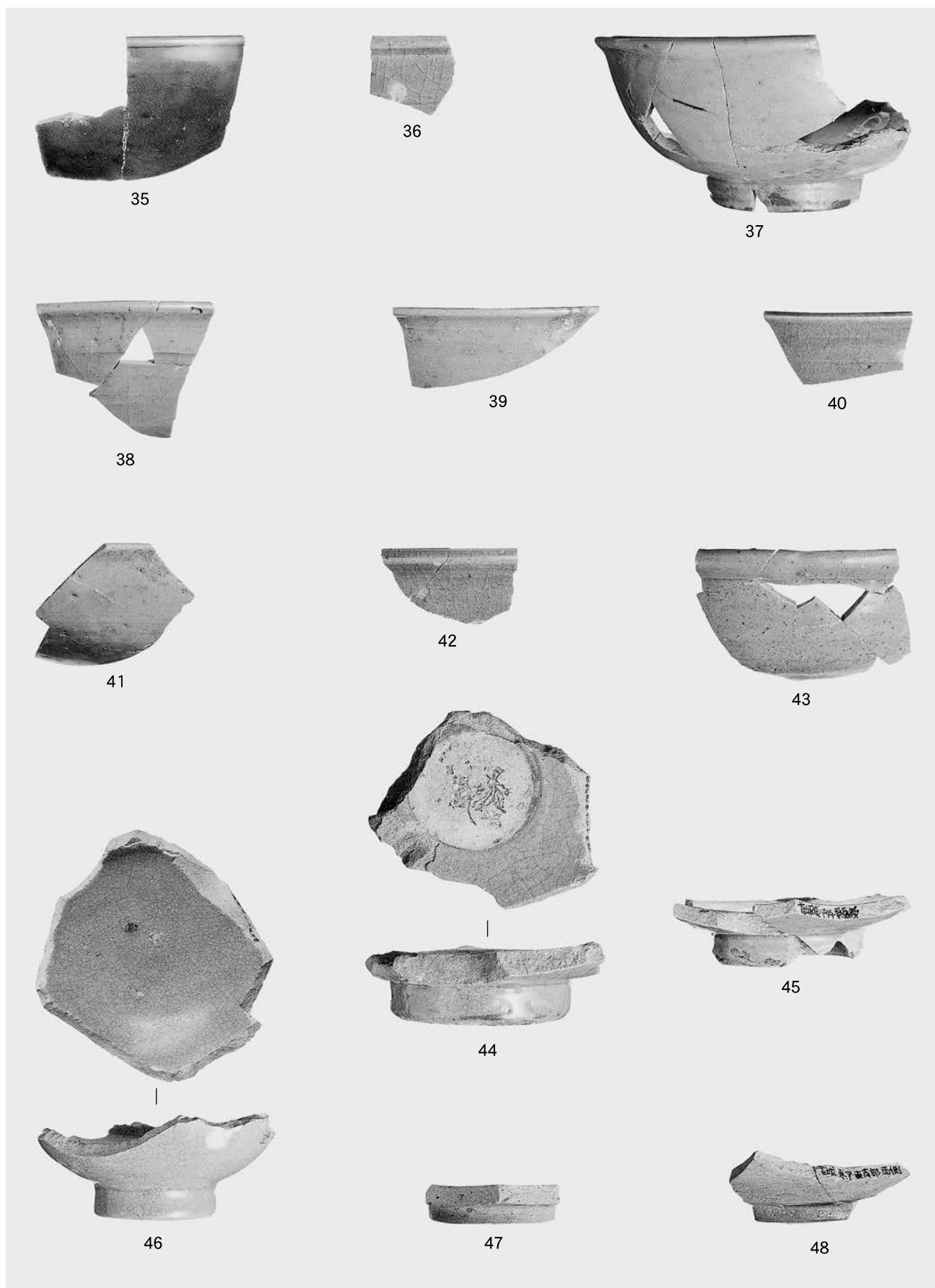
図版10 遺構検出状況（6）



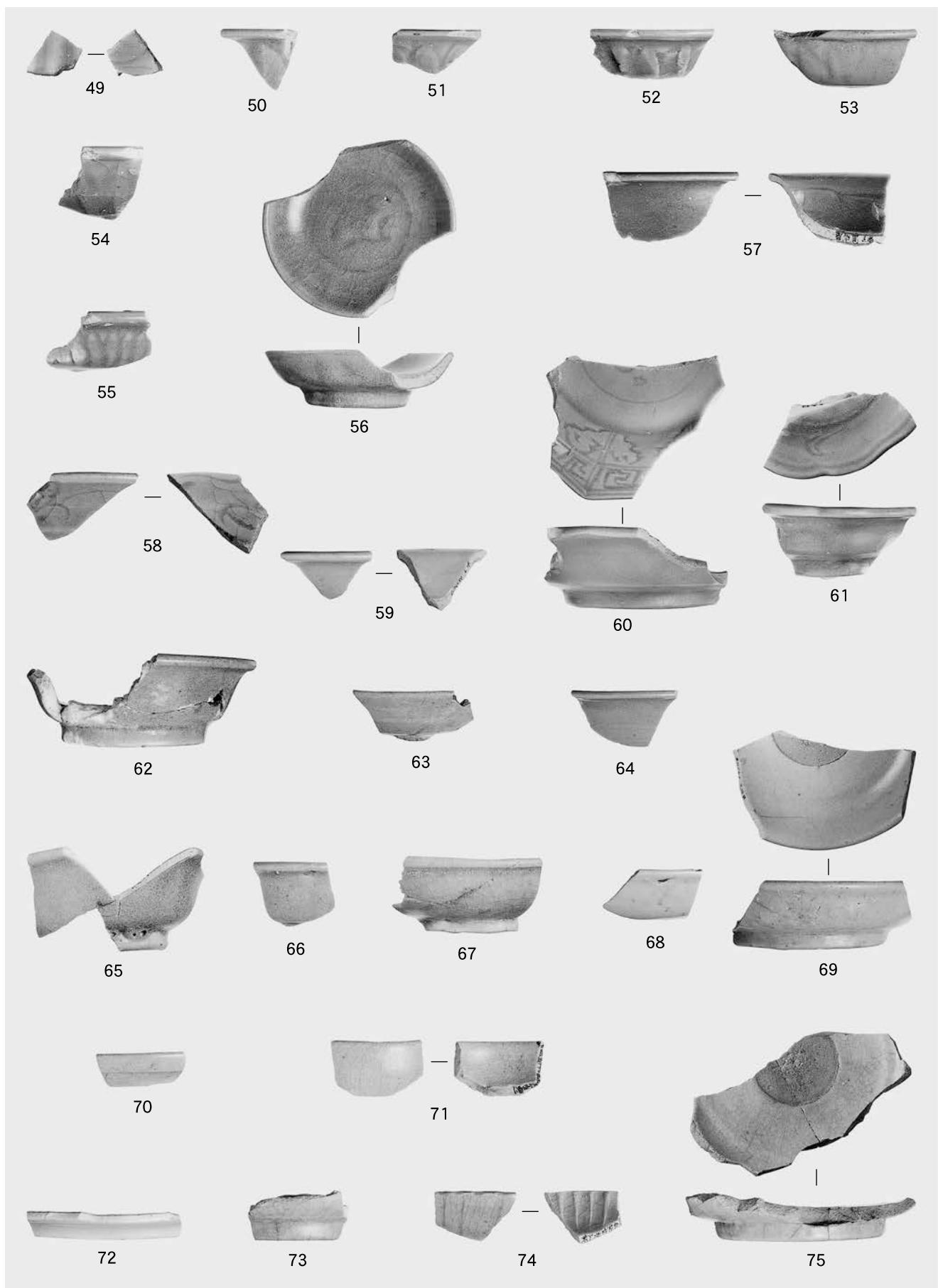
図版11 青磁（1）



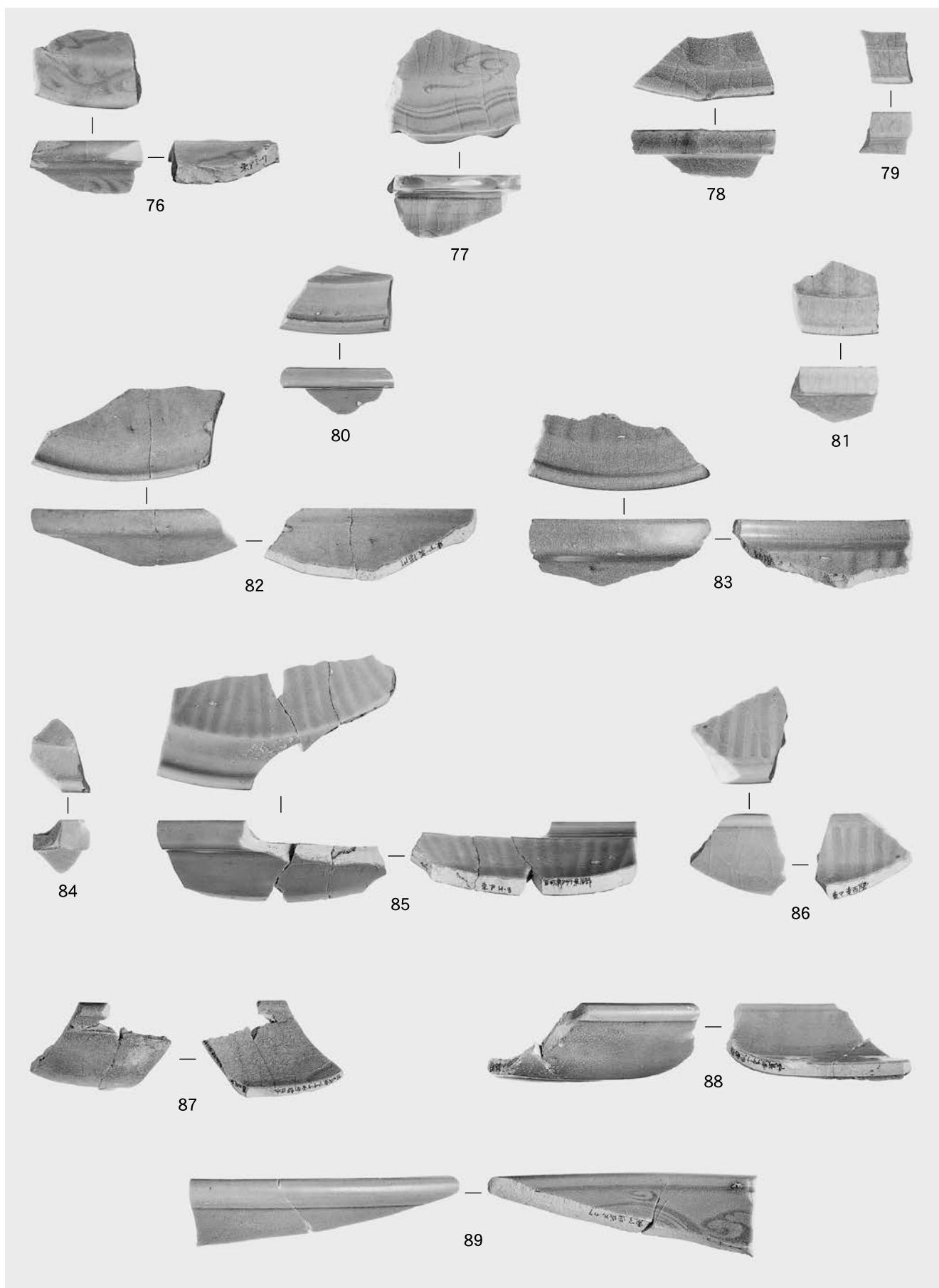
図版12 青磁（2）



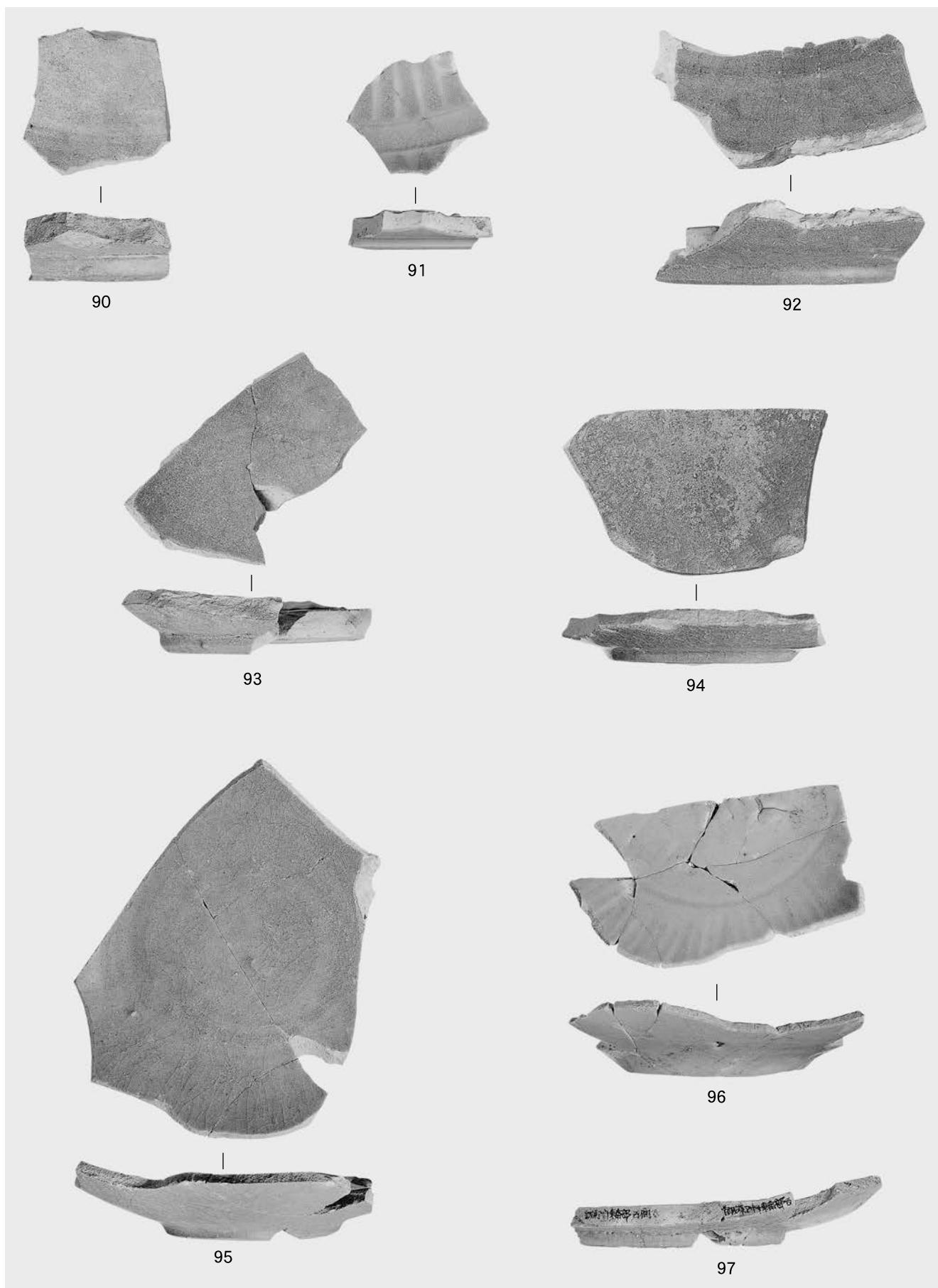
図版13 青磁（3）



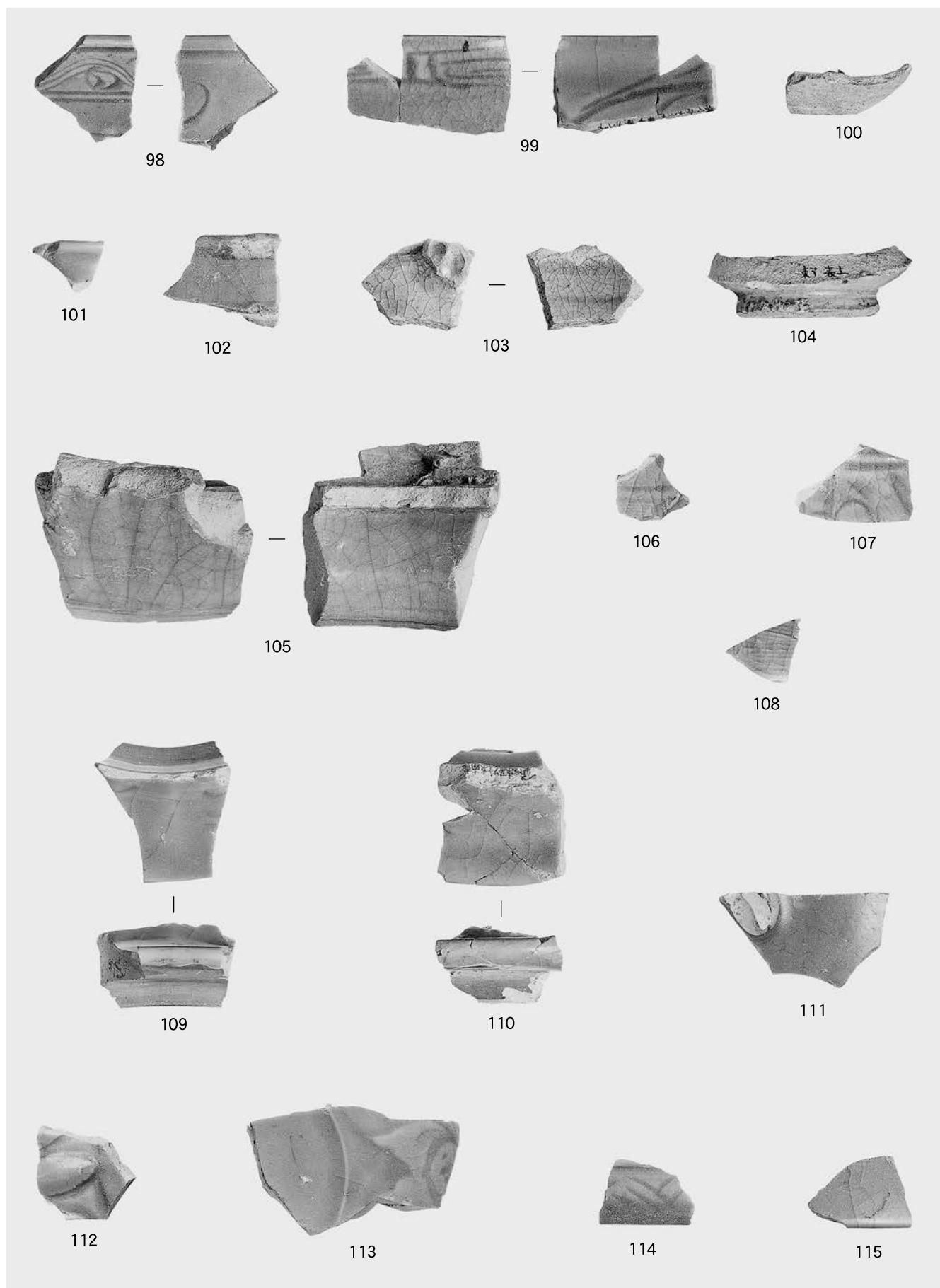
図版14 青磁(4)



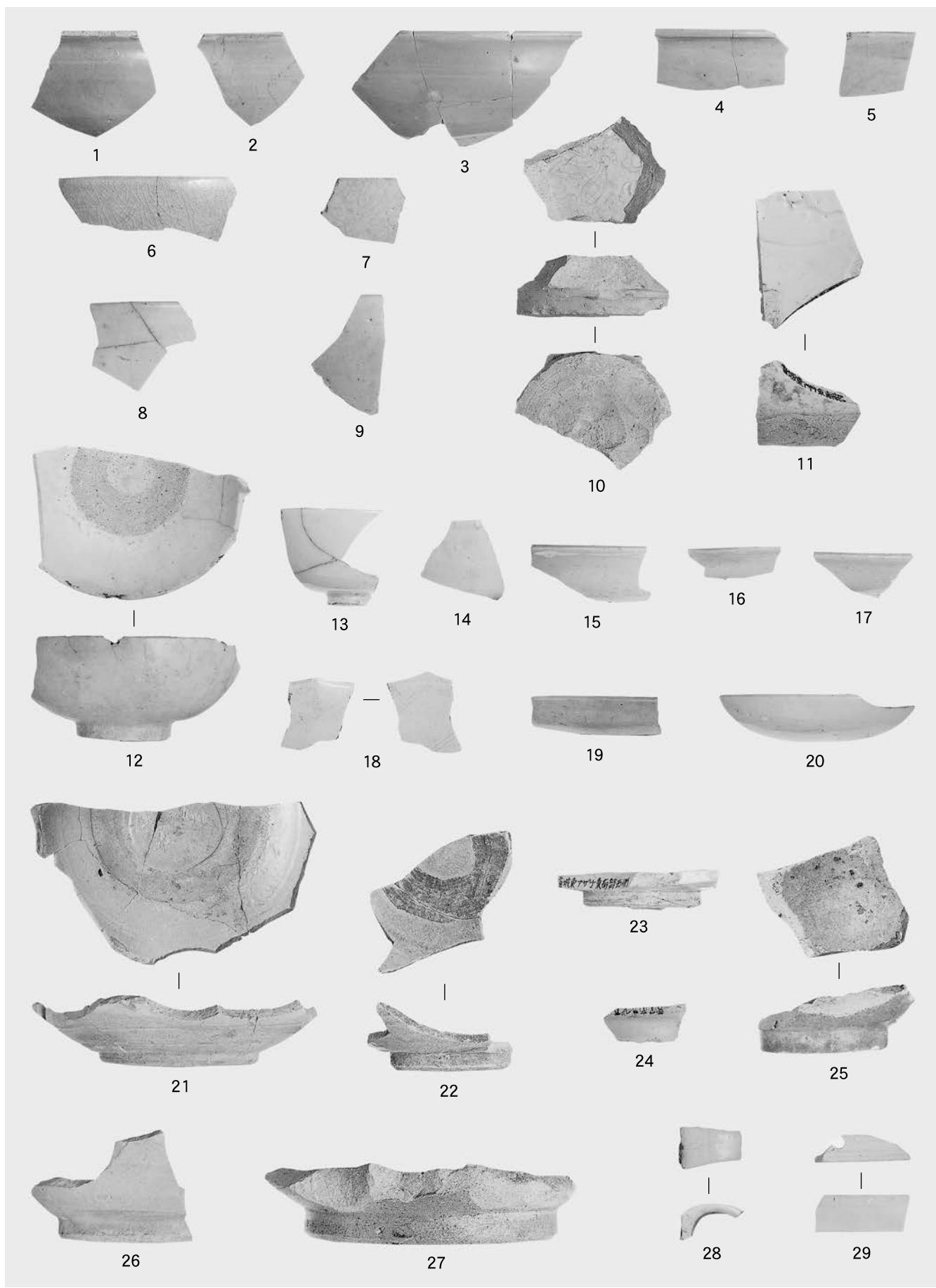
図版15 青磁（5）



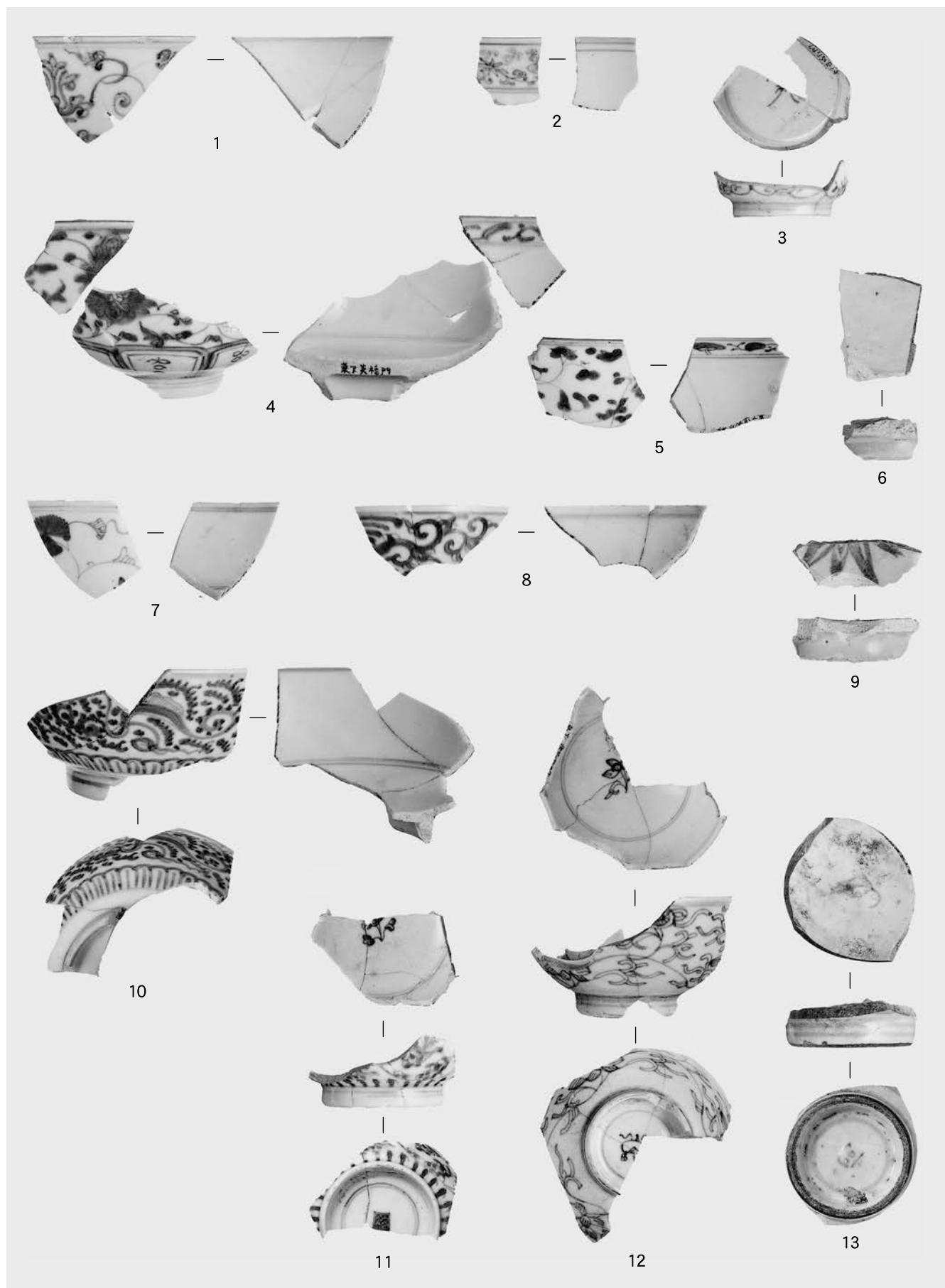
図版16 青磁（6）



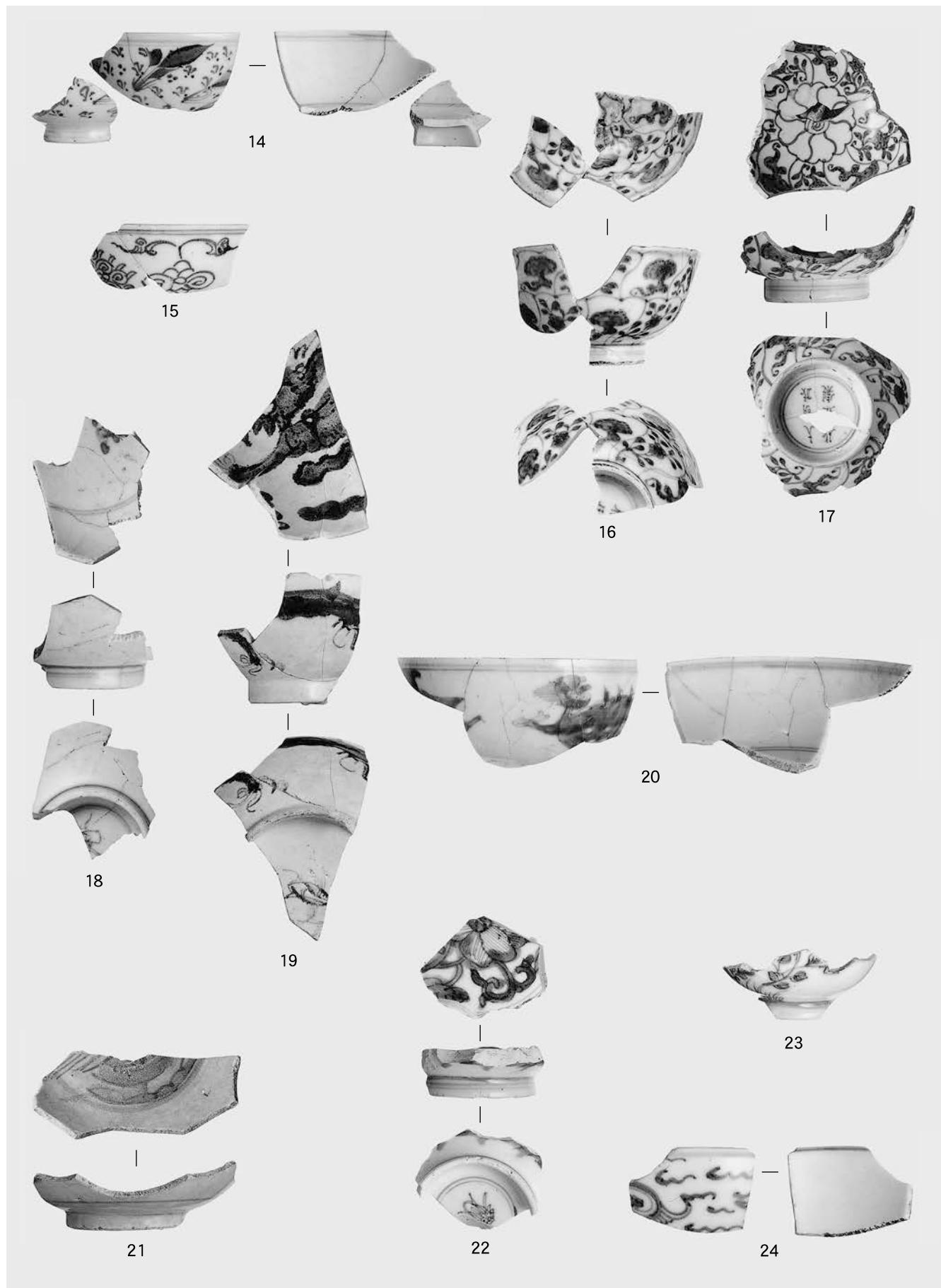
図版17 青磁（7）



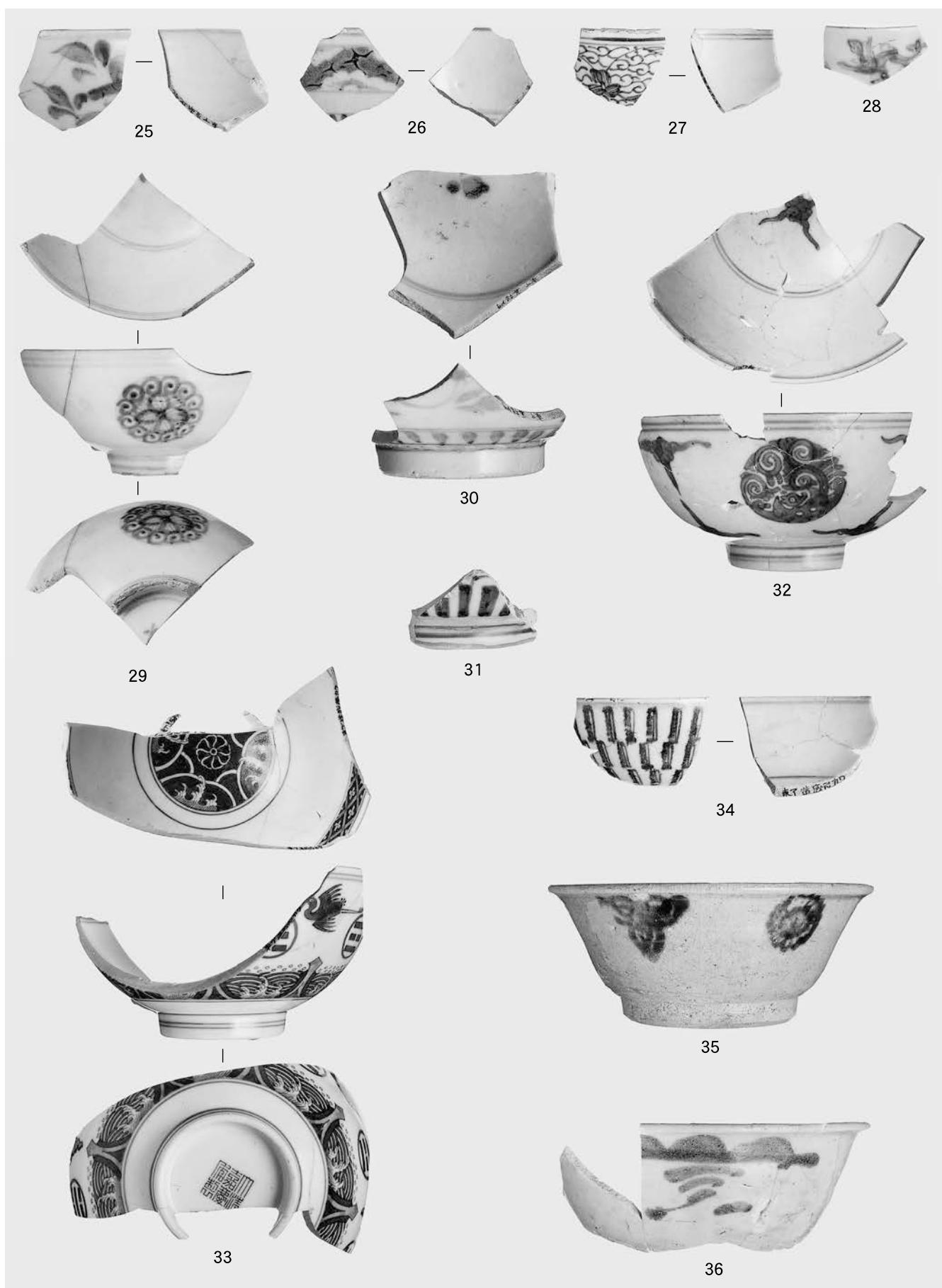
図版18 白磁



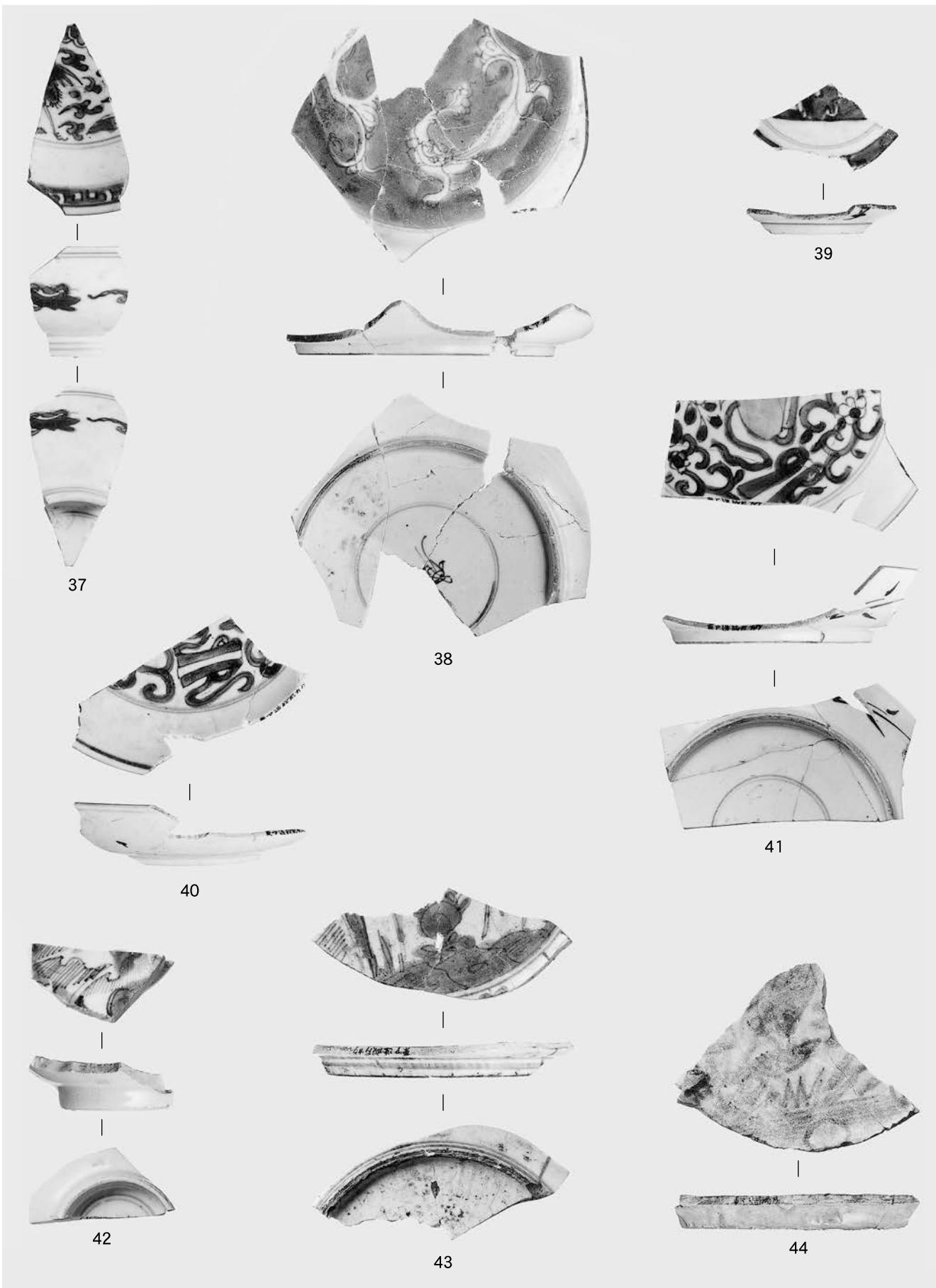
図版19 染付（1）



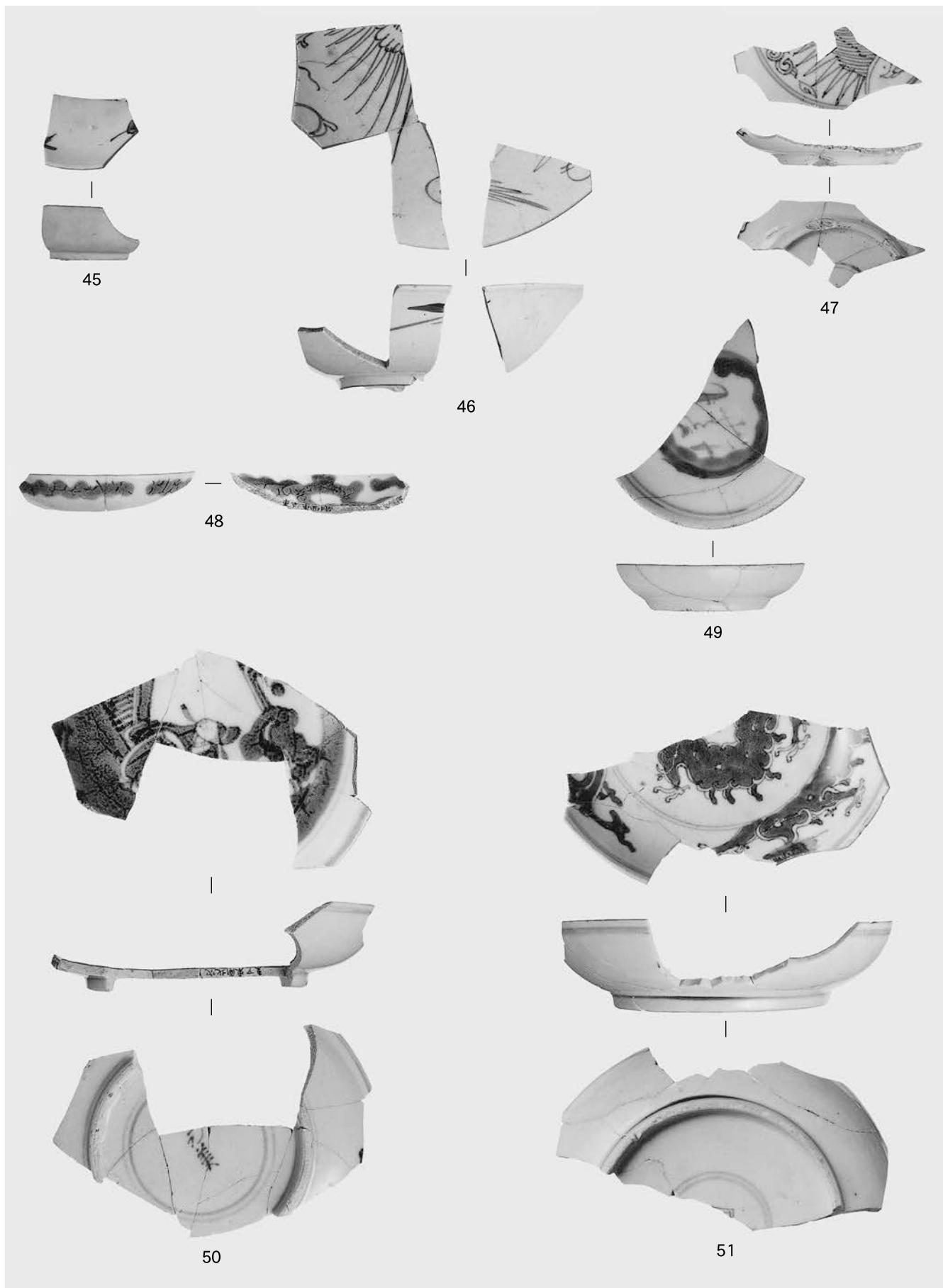
図版20 染付 (2)



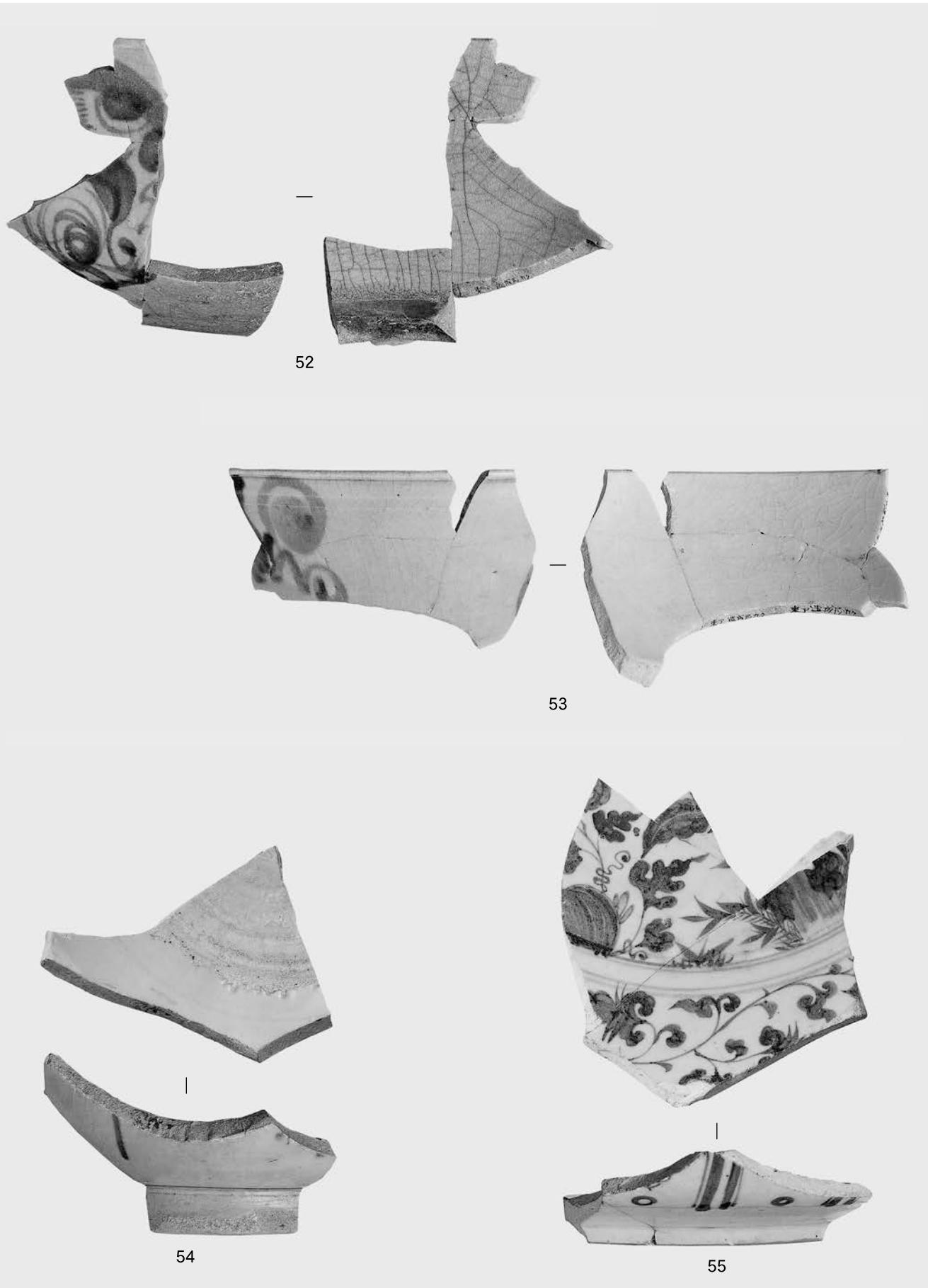
図版21 染付 (3)



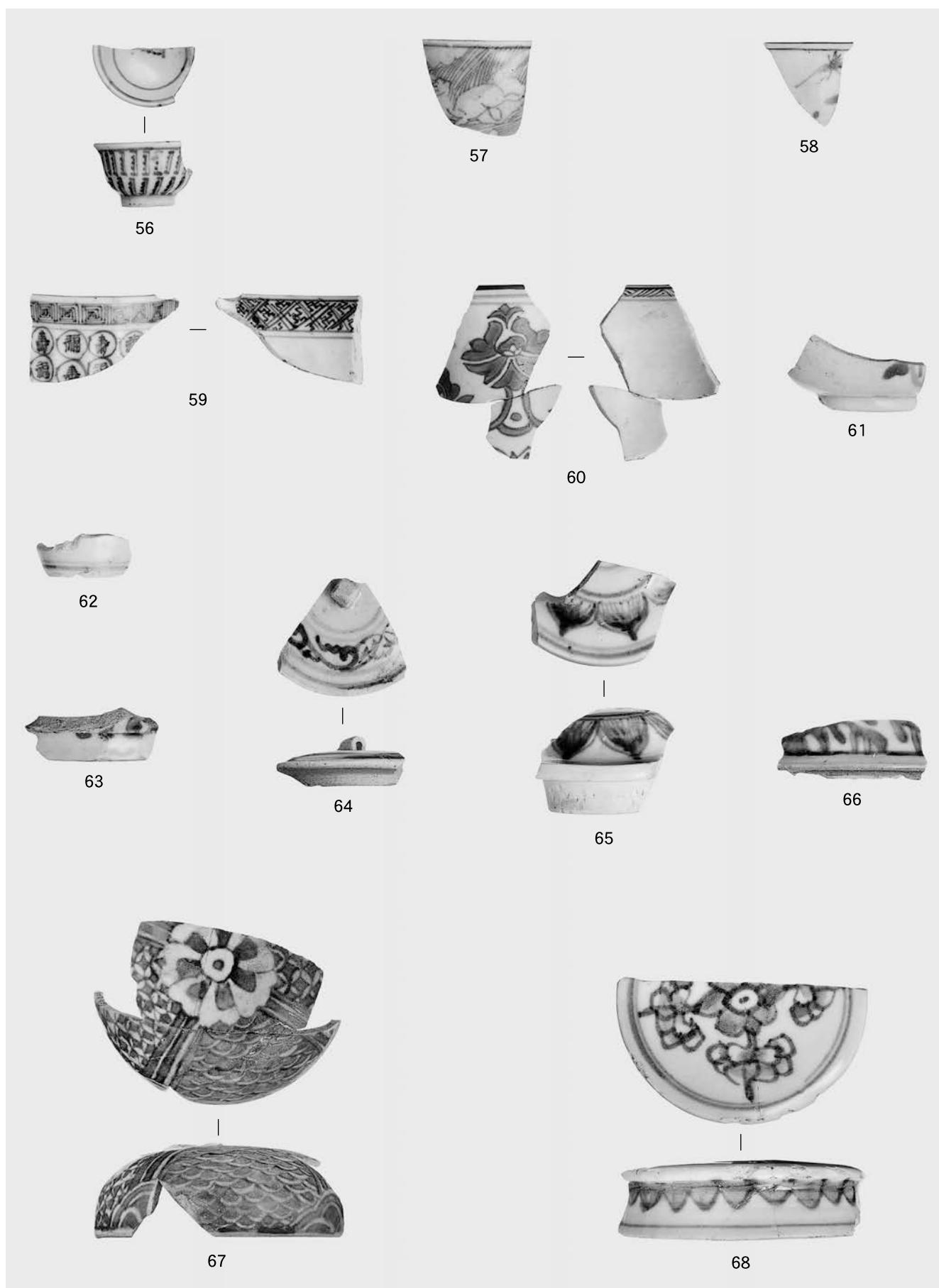
図版22 染付 (4)



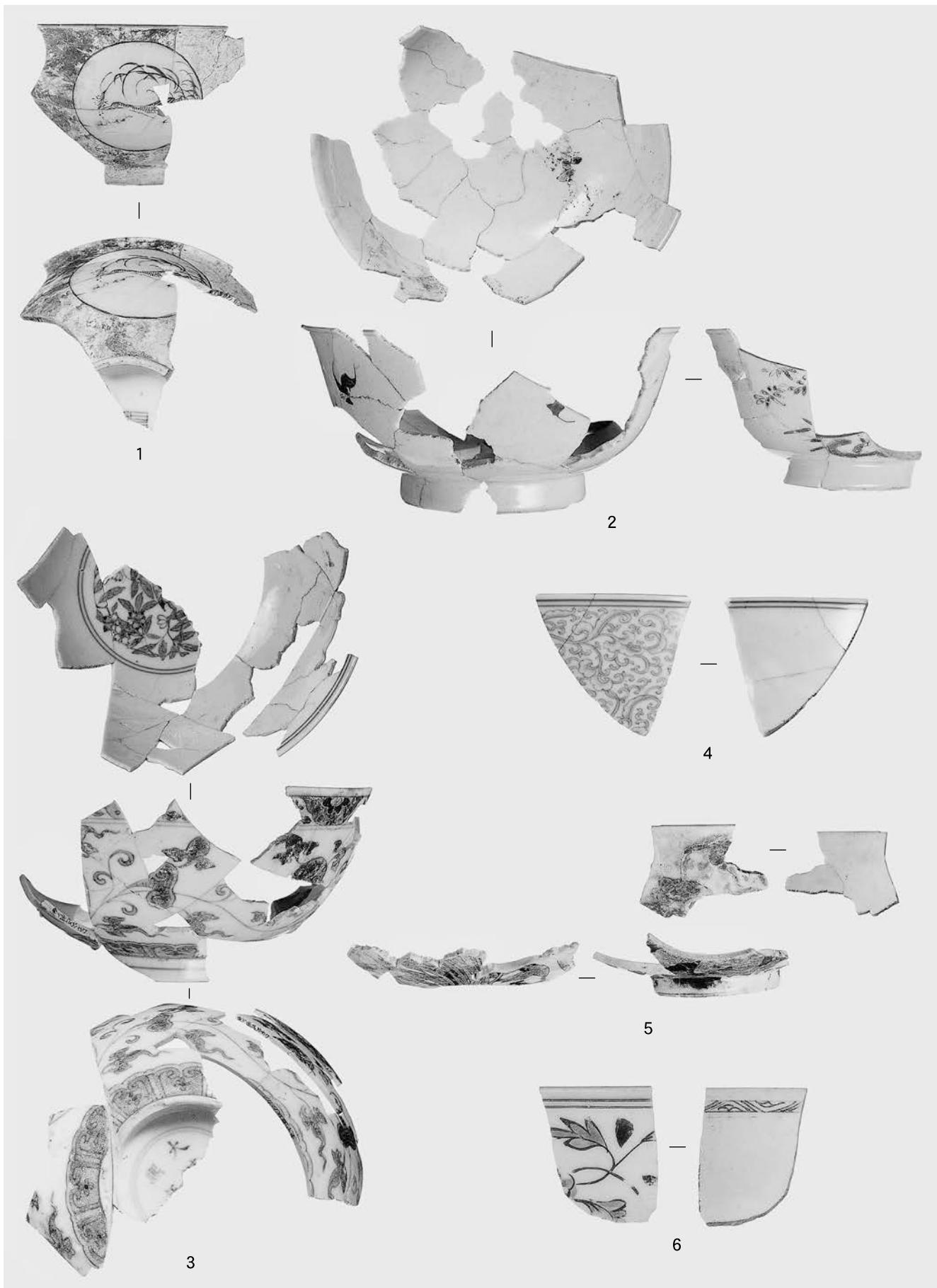
図版23 染付 (5)



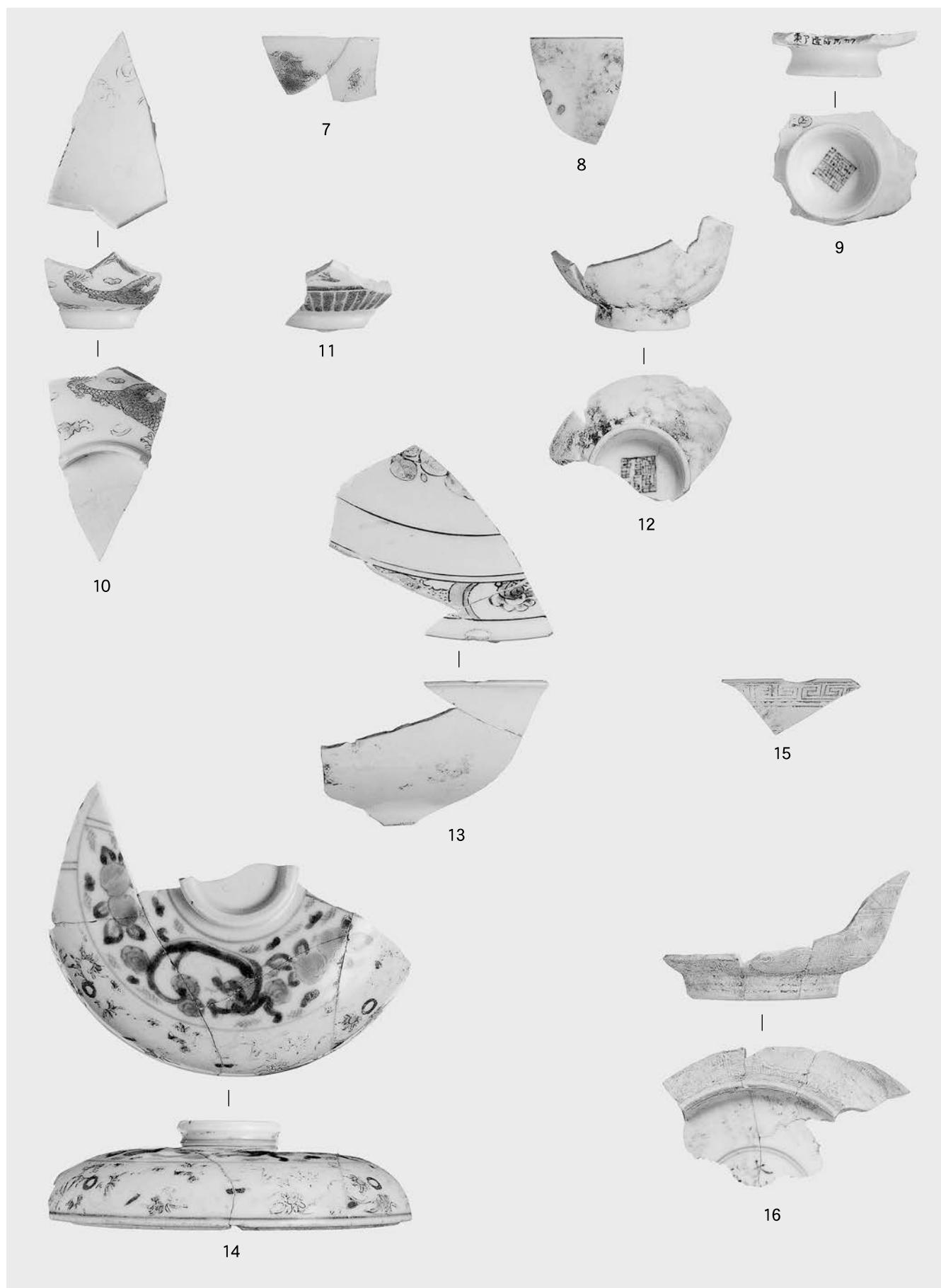
図版24 染付 (6)



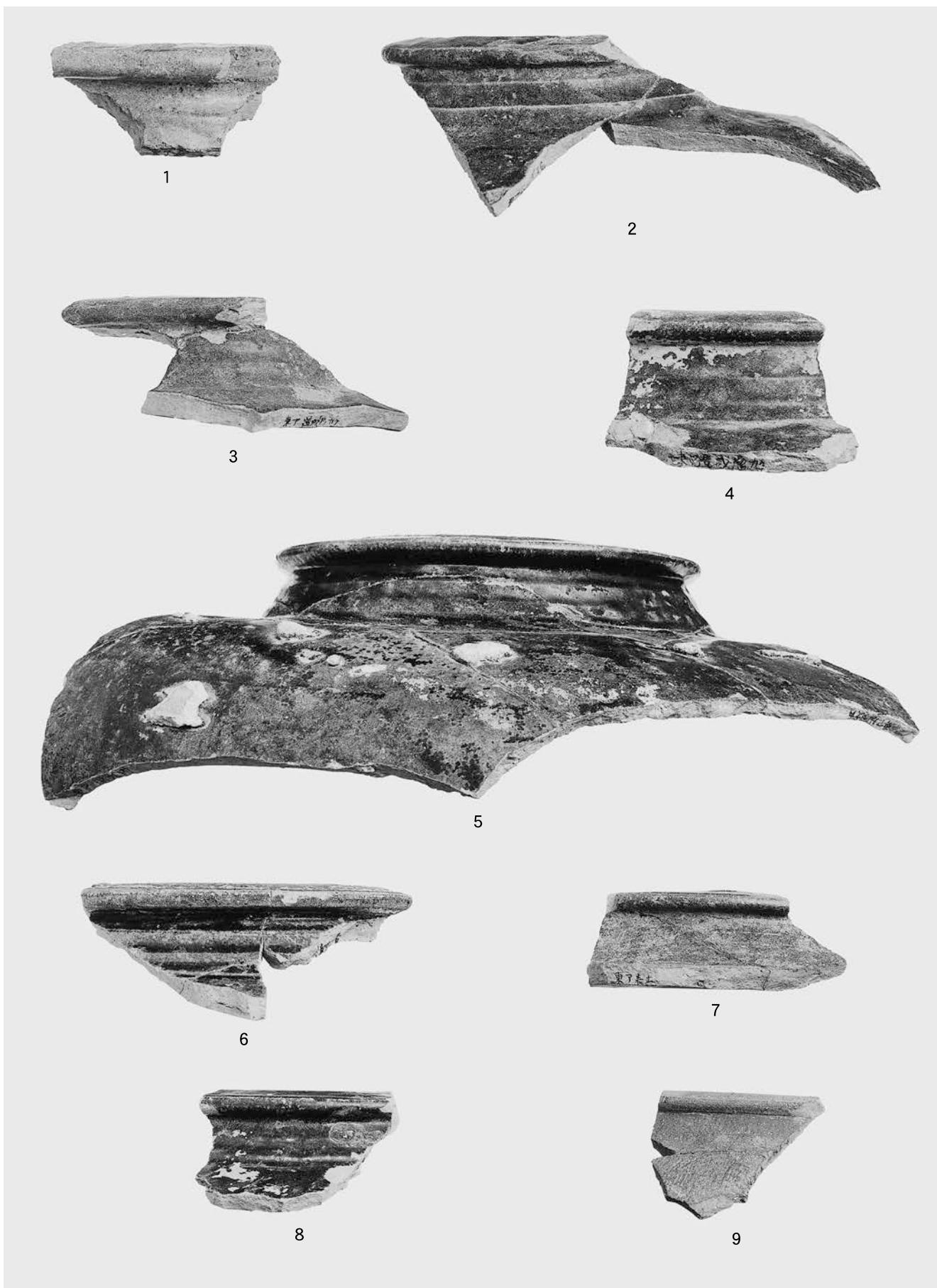
図版25 染付 (7)



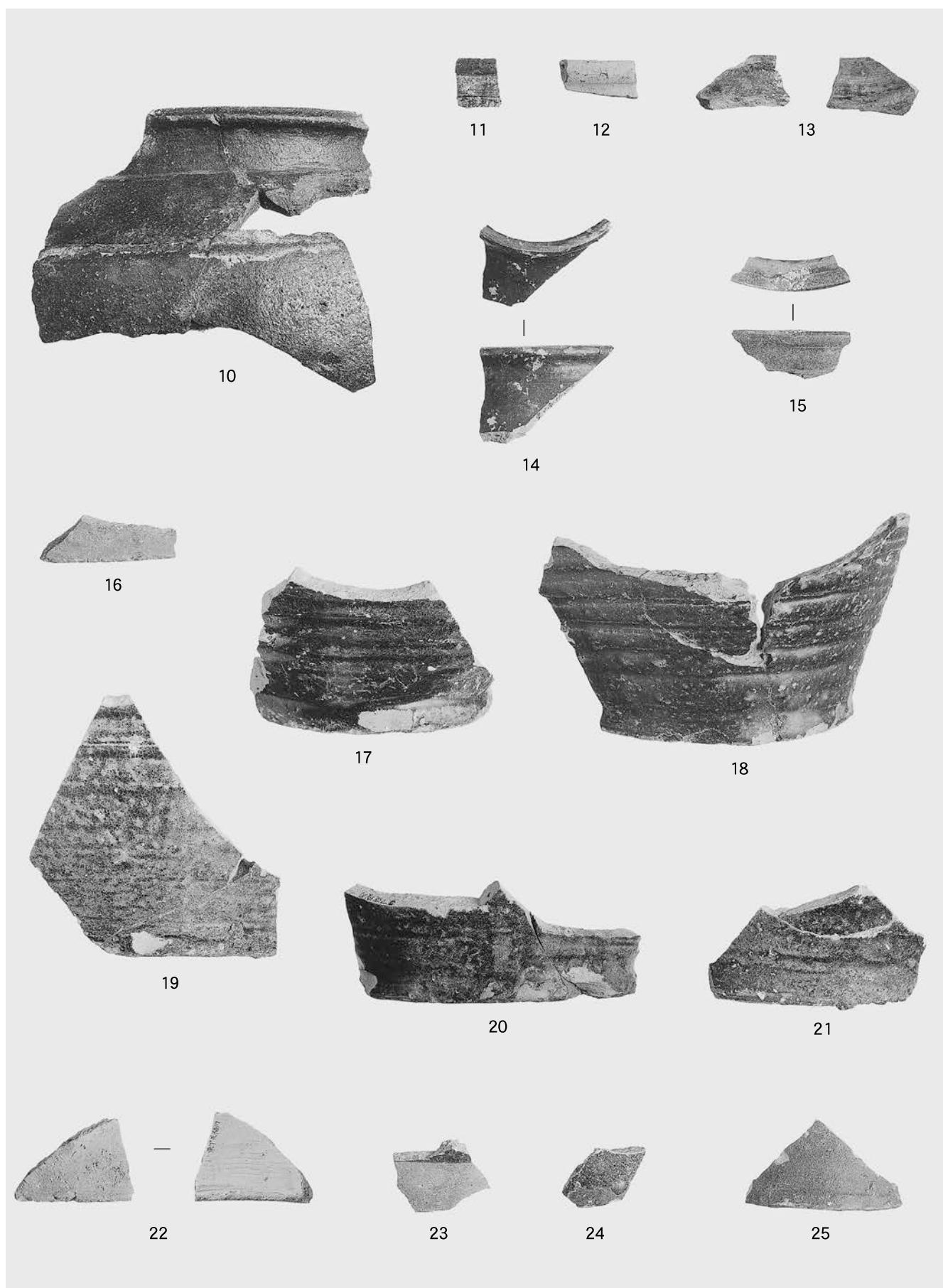
図版26 色絵（1）



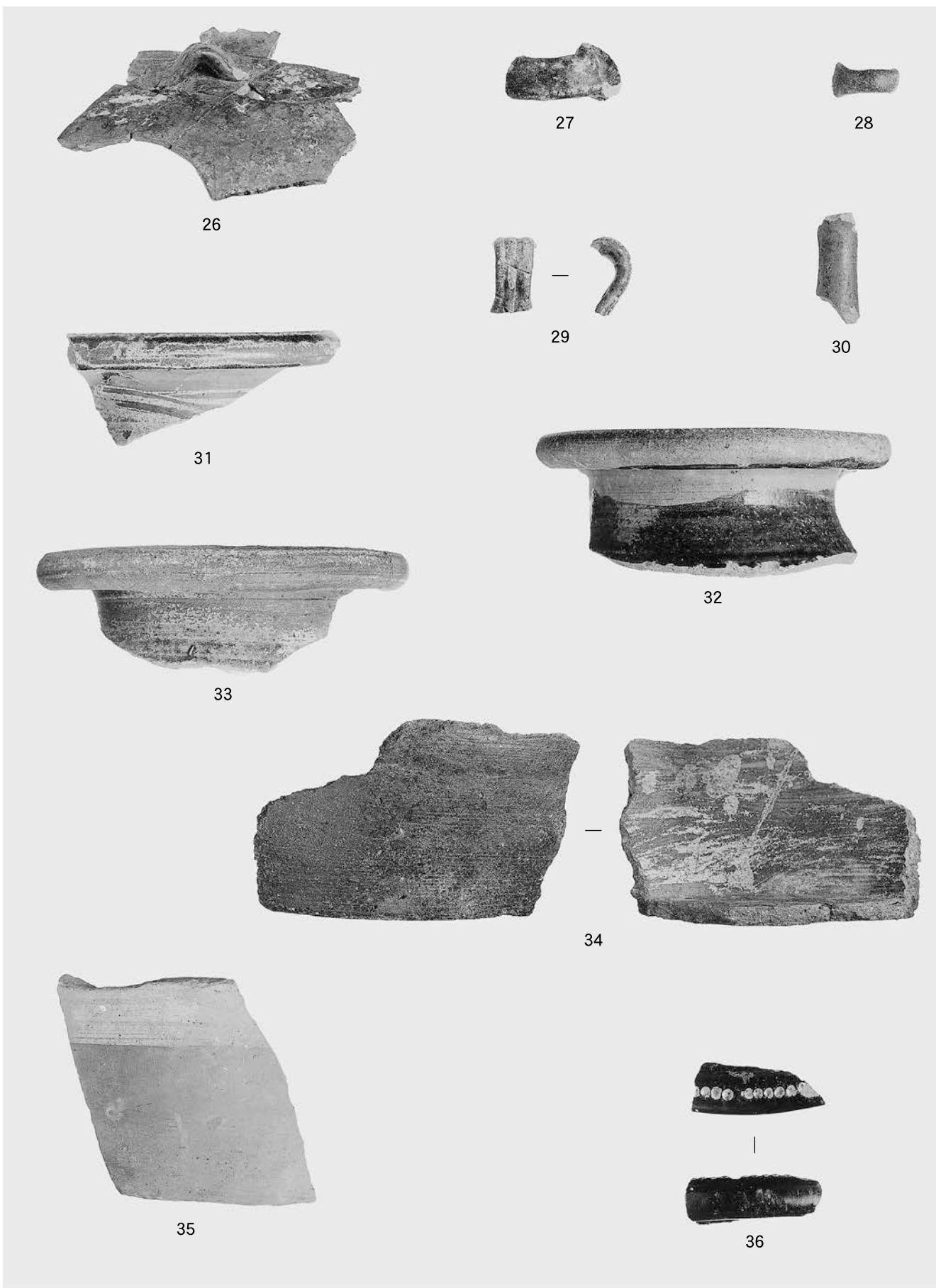
図版27 色絵 (2) 7~14 素三彩 15,16



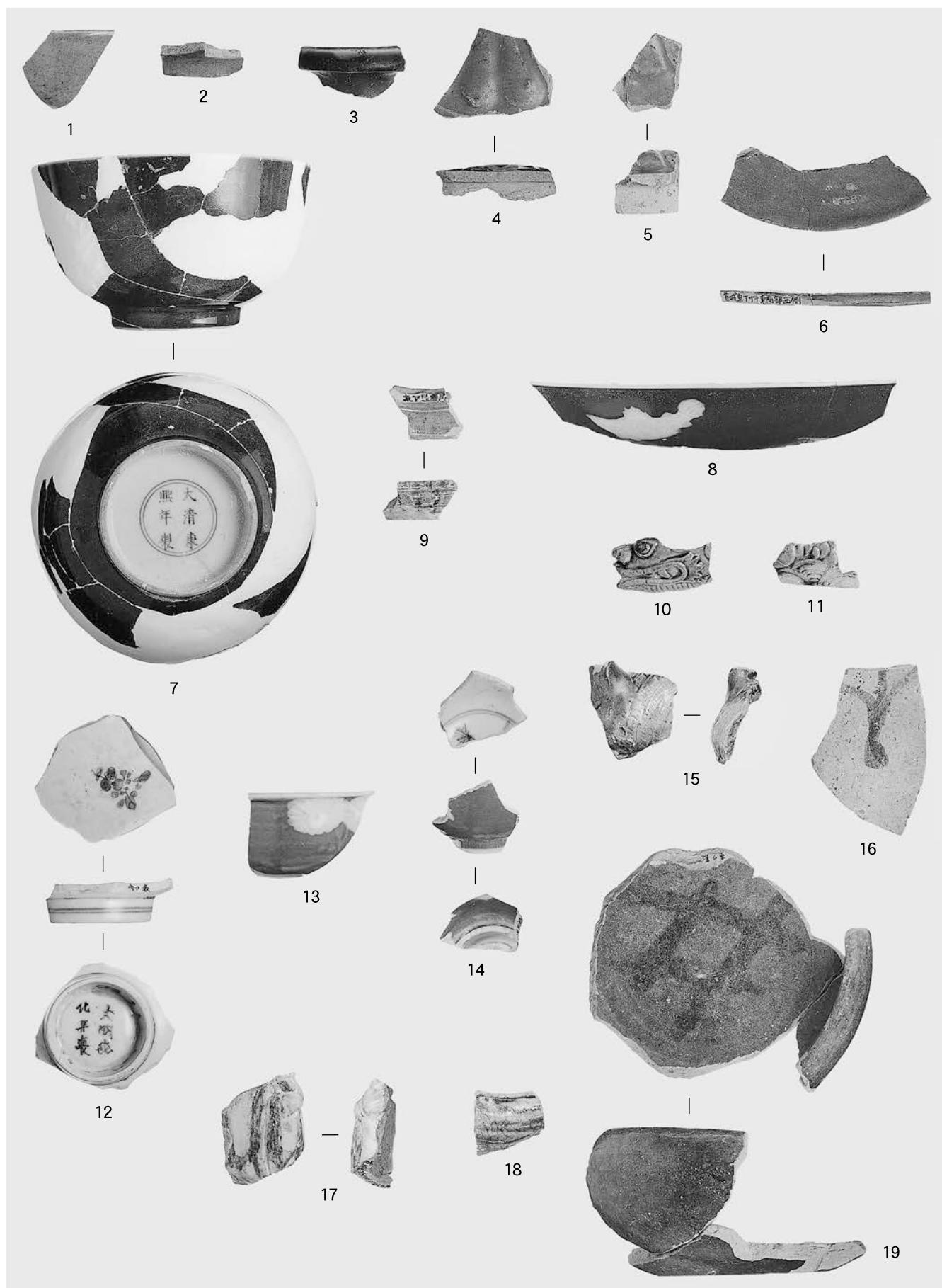
図版28 褐釉陶器（1）中国産



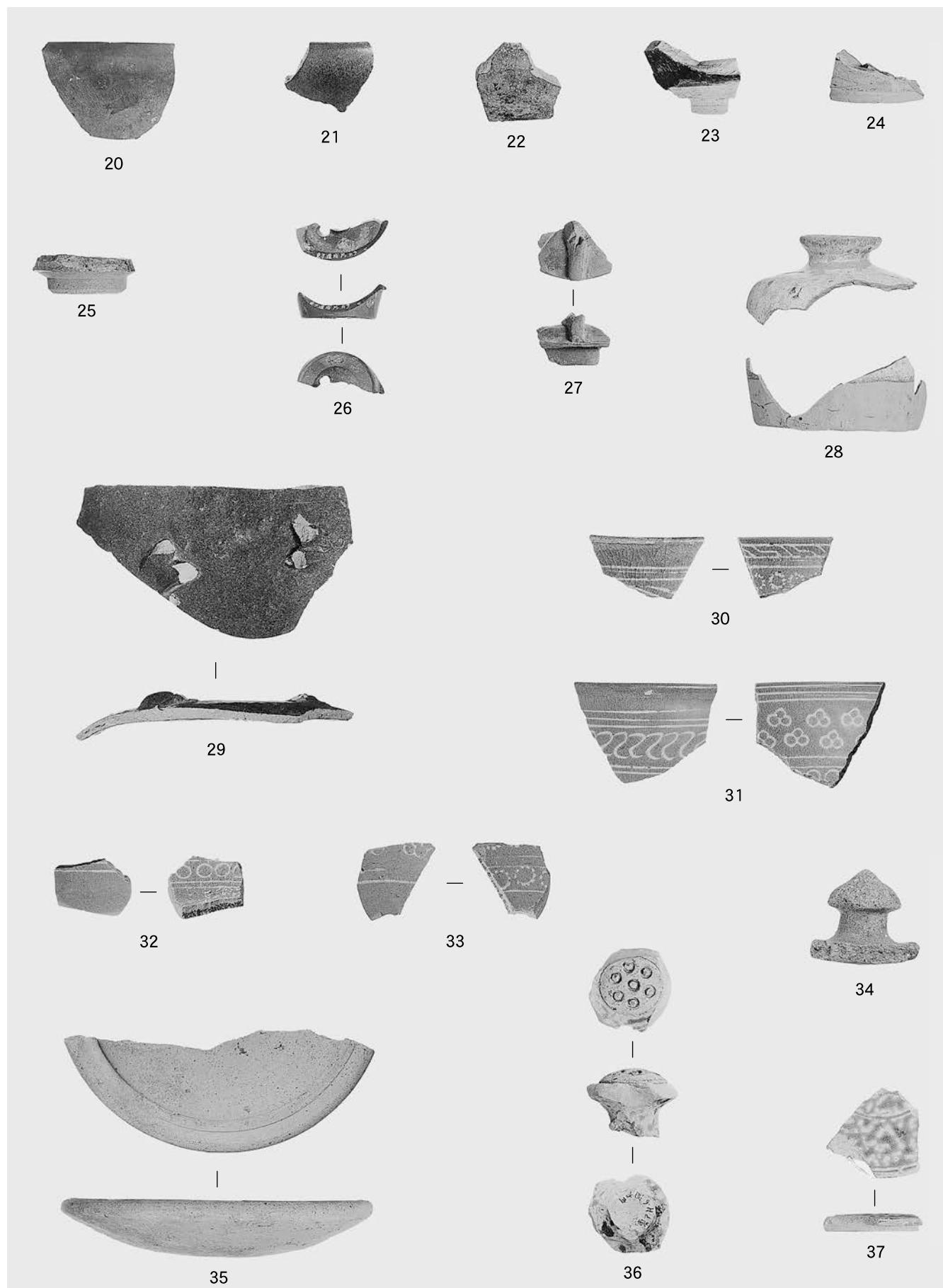
図版29 褐釉陶器（2）中国産



図版30 褐釉陶器（3）中国産 26~30 タイ産 31~35 ミャンマー産 36



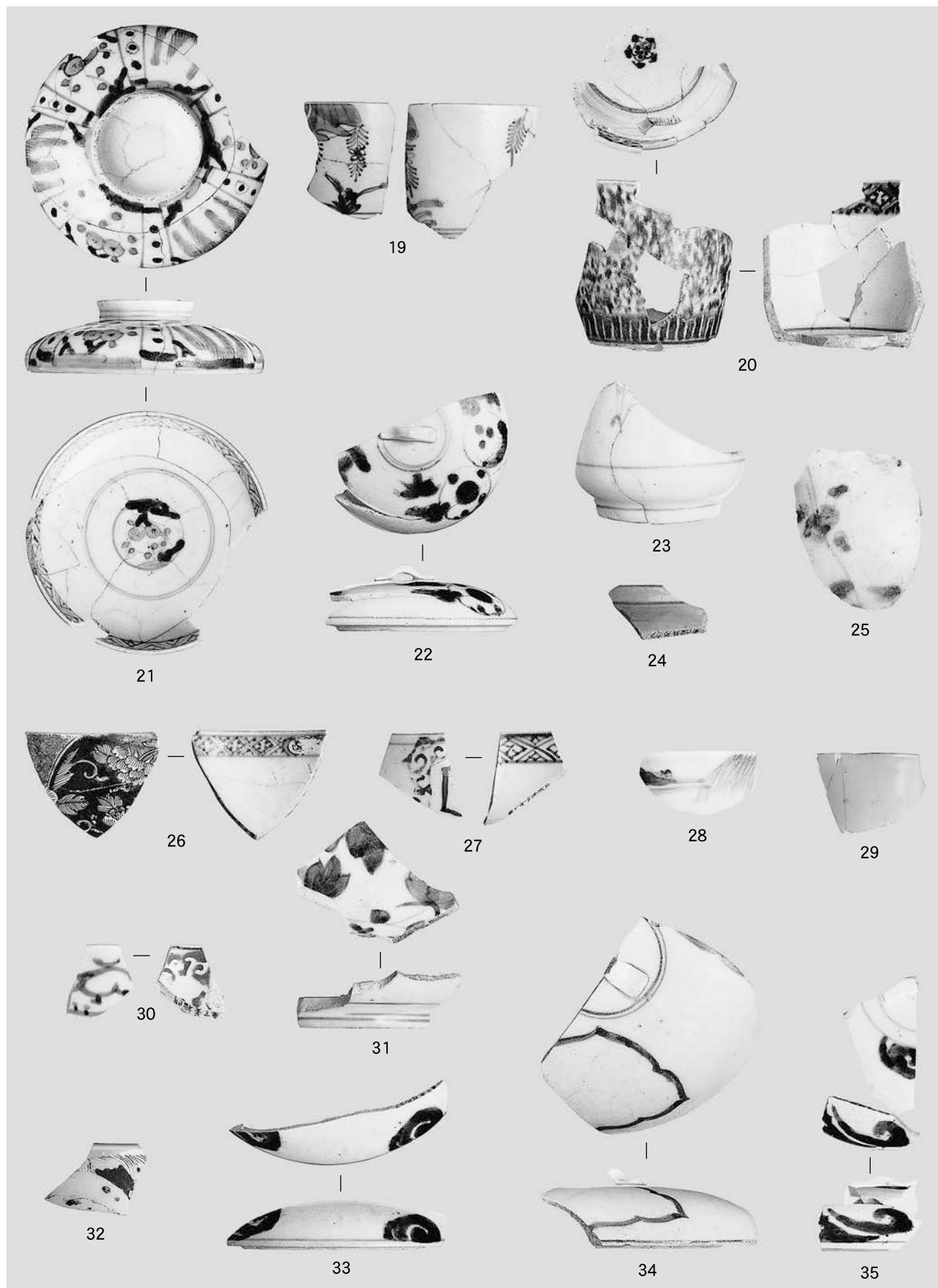
図版31 その他の輸入陶磁器（1）



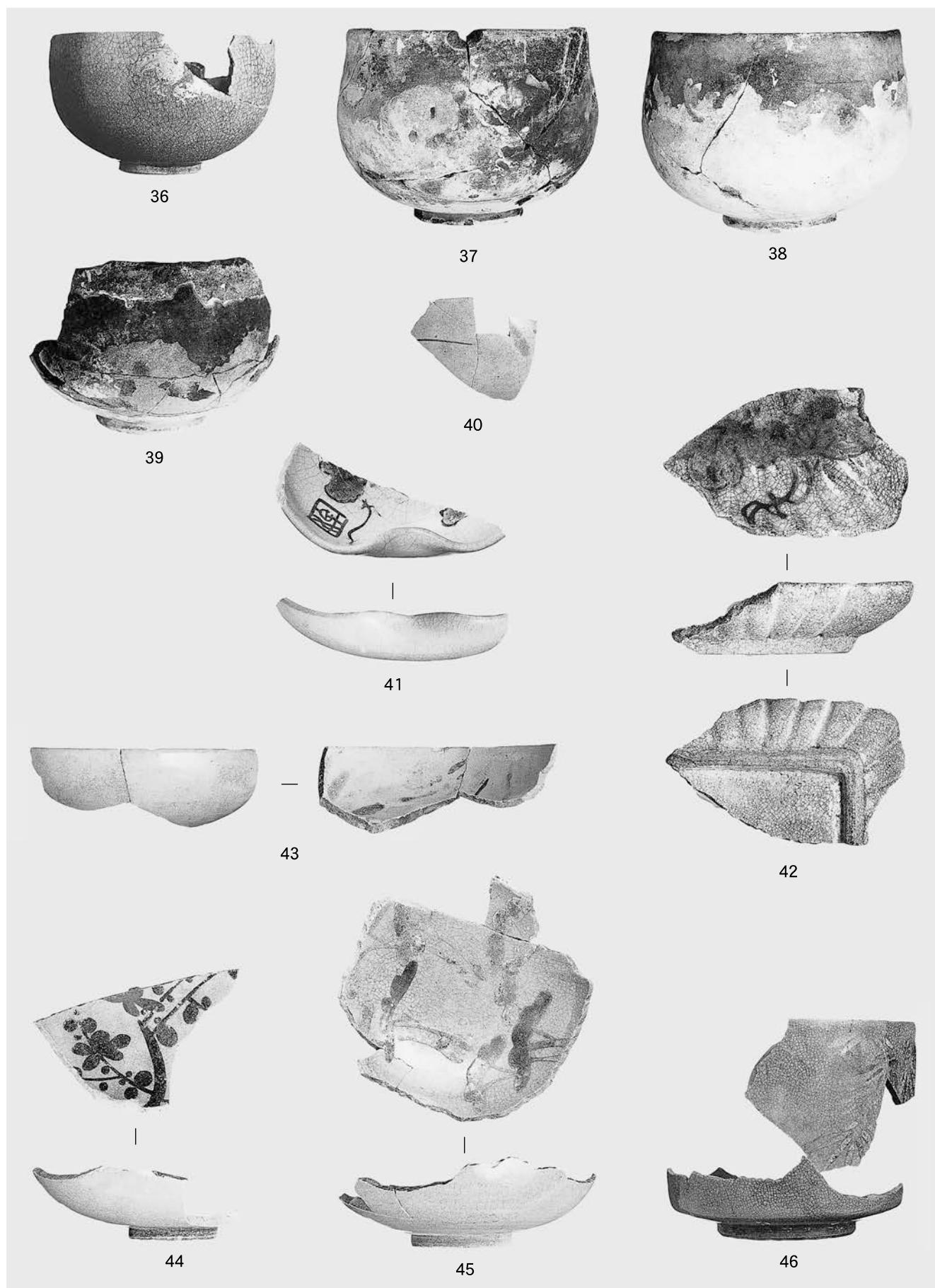
図版32 その他の輸入陶磁器（2）



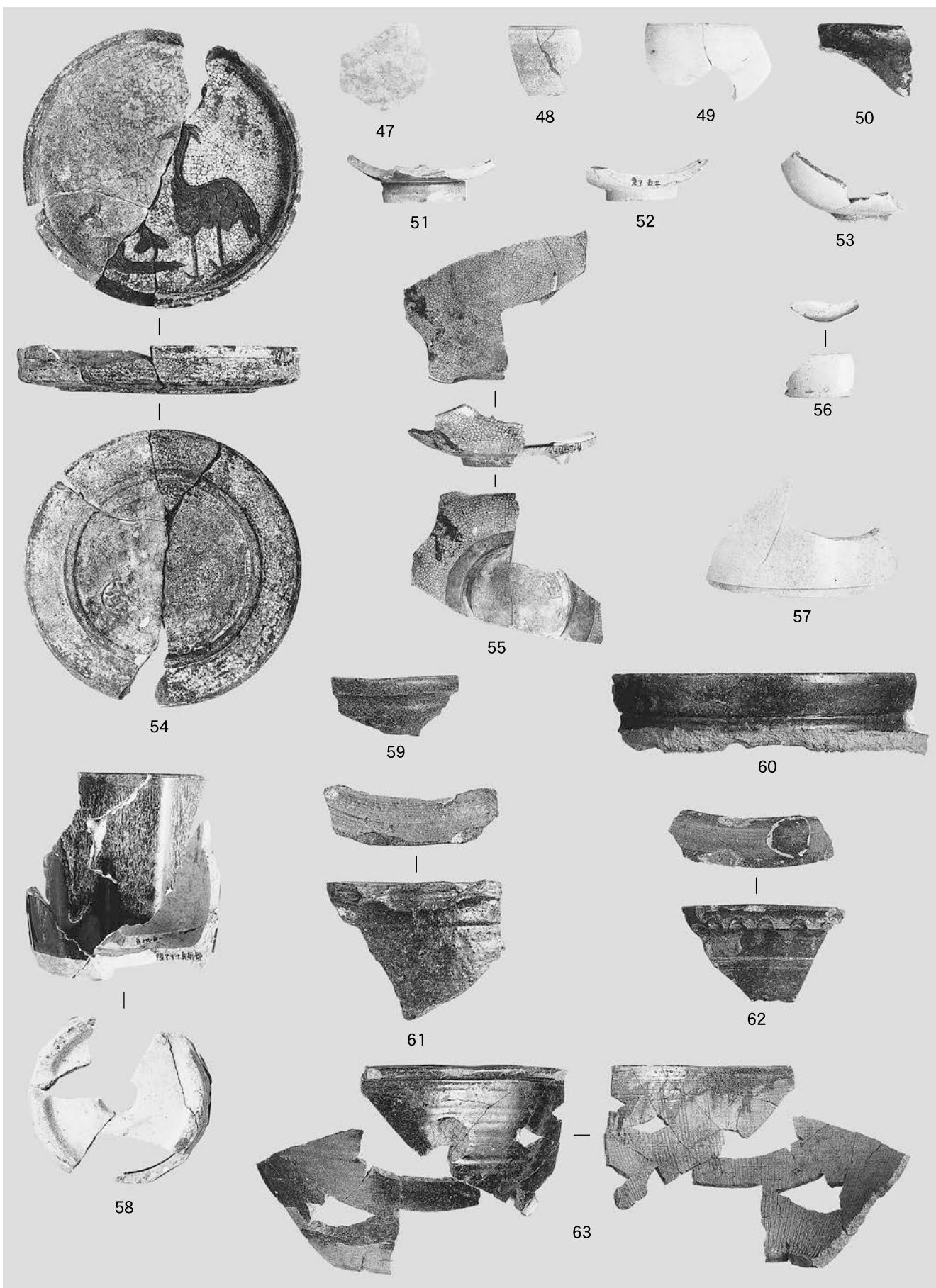
図版33 本土産陶磁器（1）



図版34 本土産陶磁器（2）



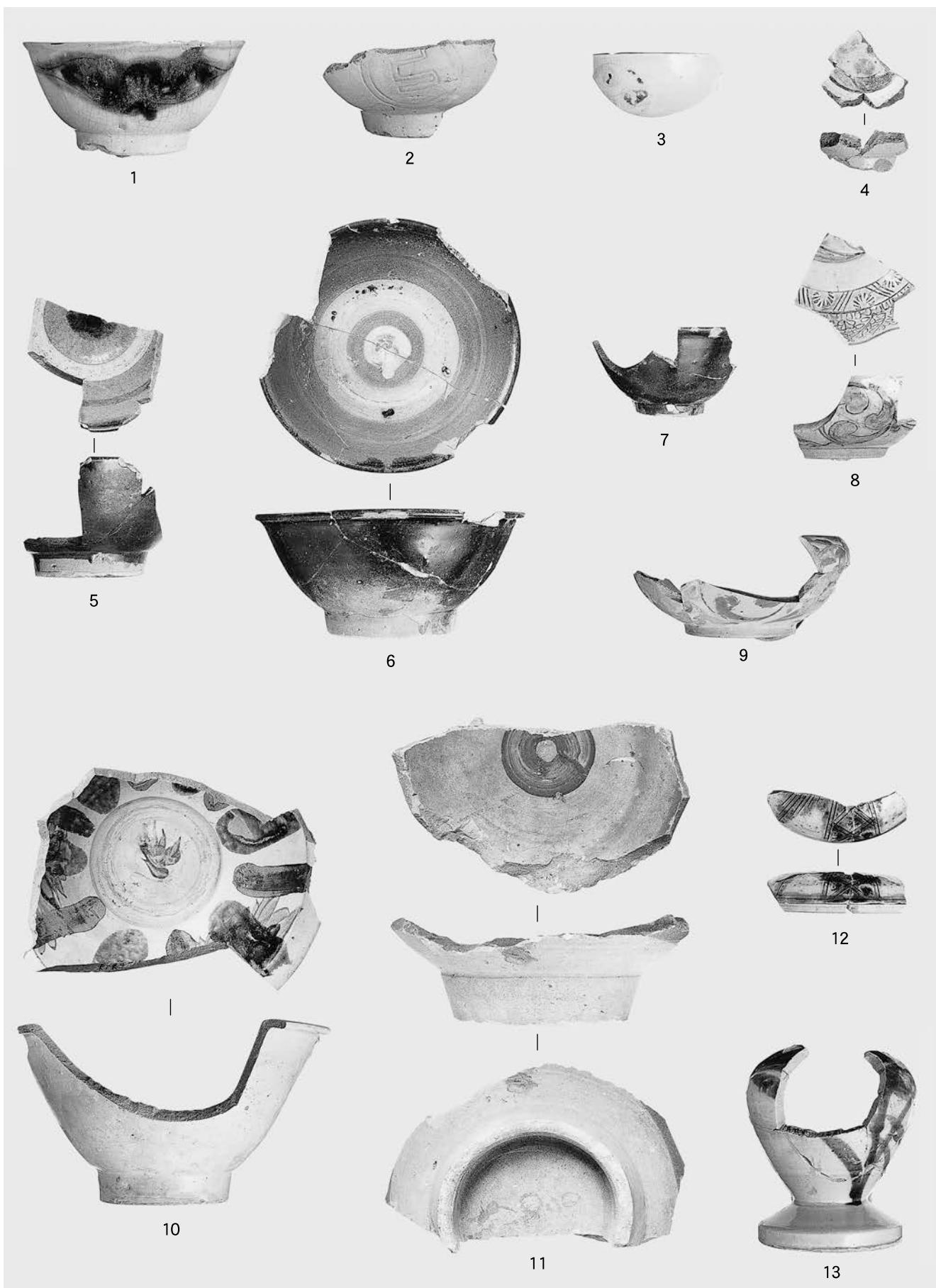
図版35 本土産陶磁器（3）



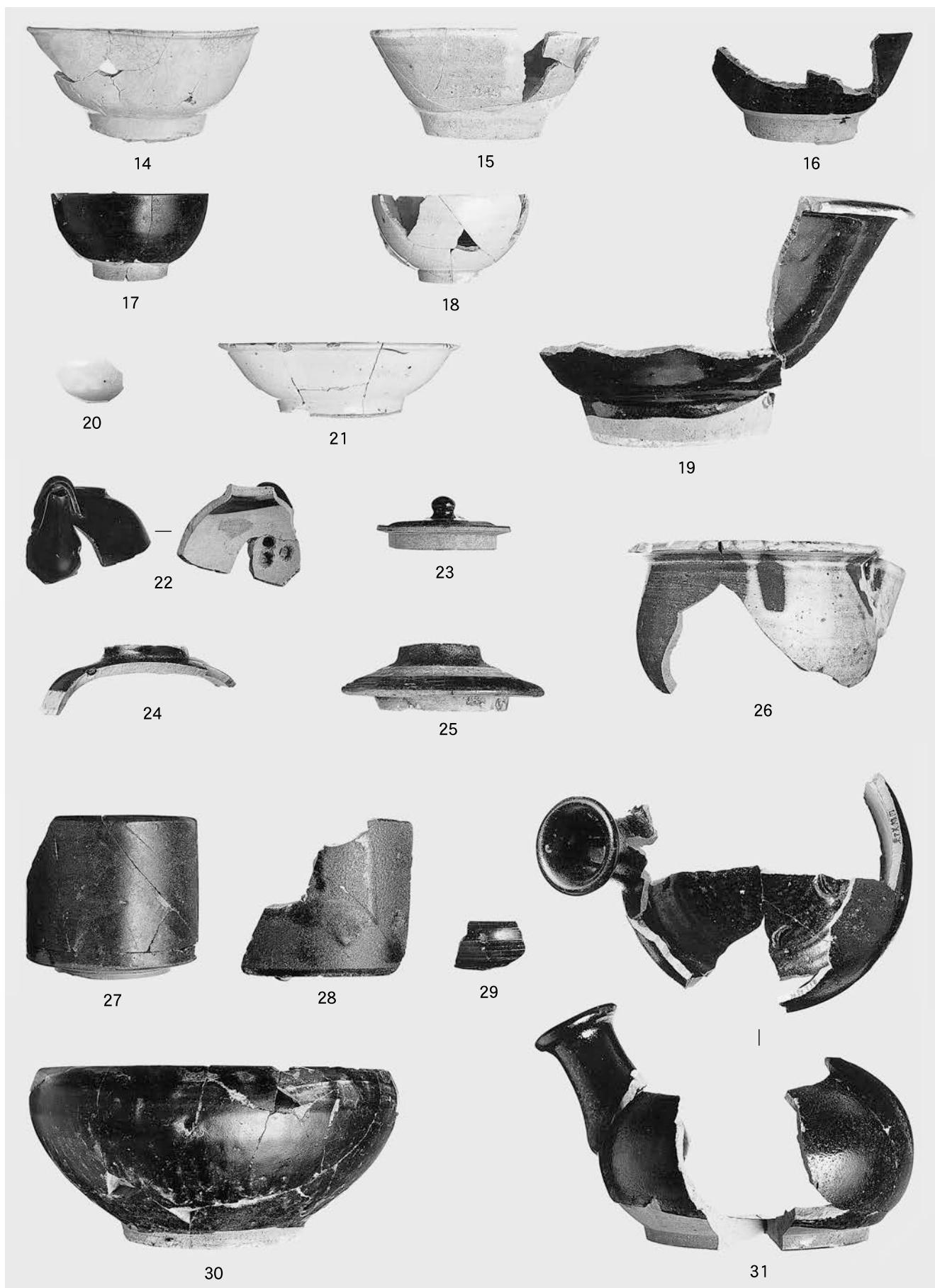
図版36 本土産陶磁器（4）



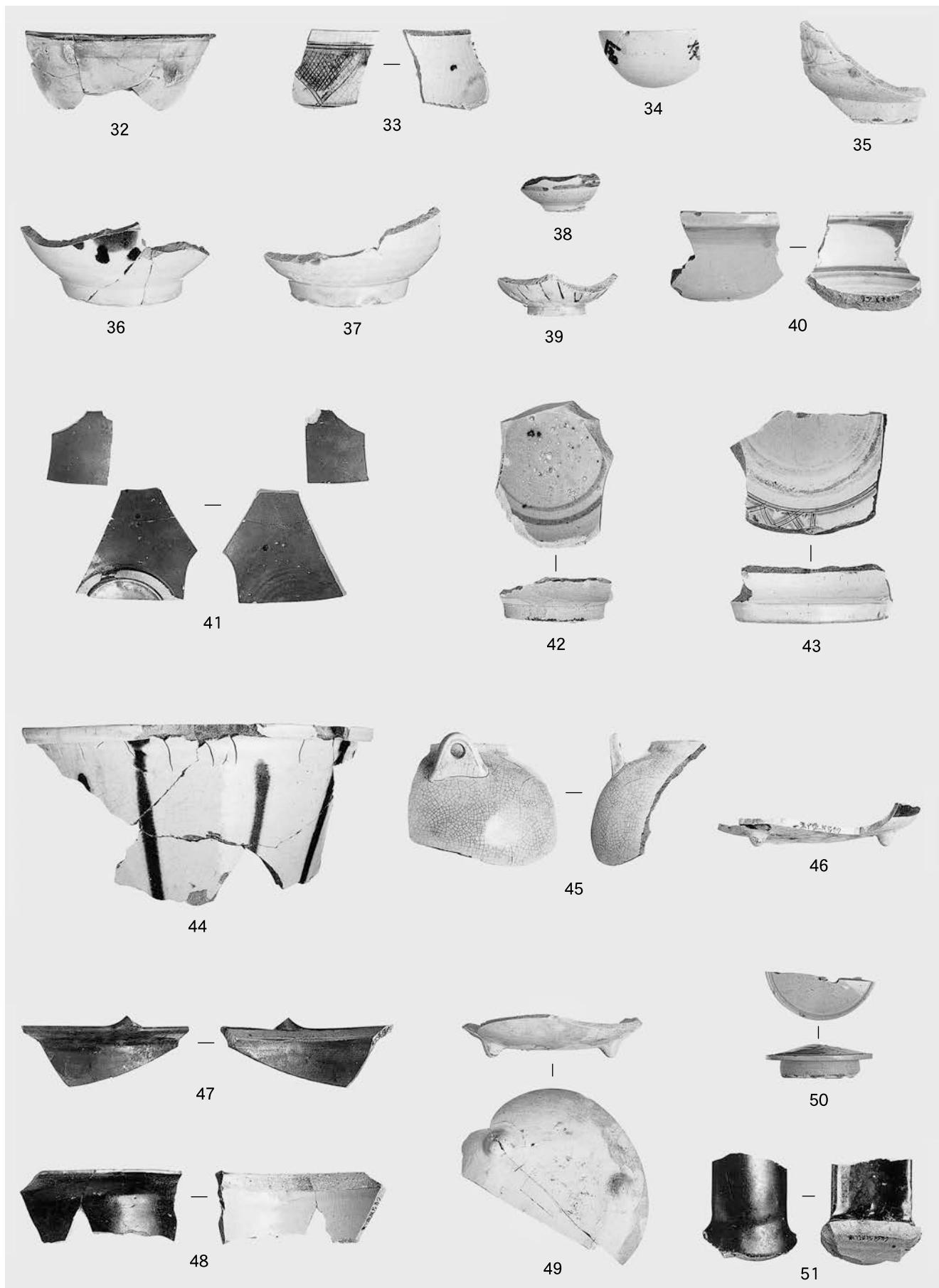
図版37 本土産陶磁器（5）



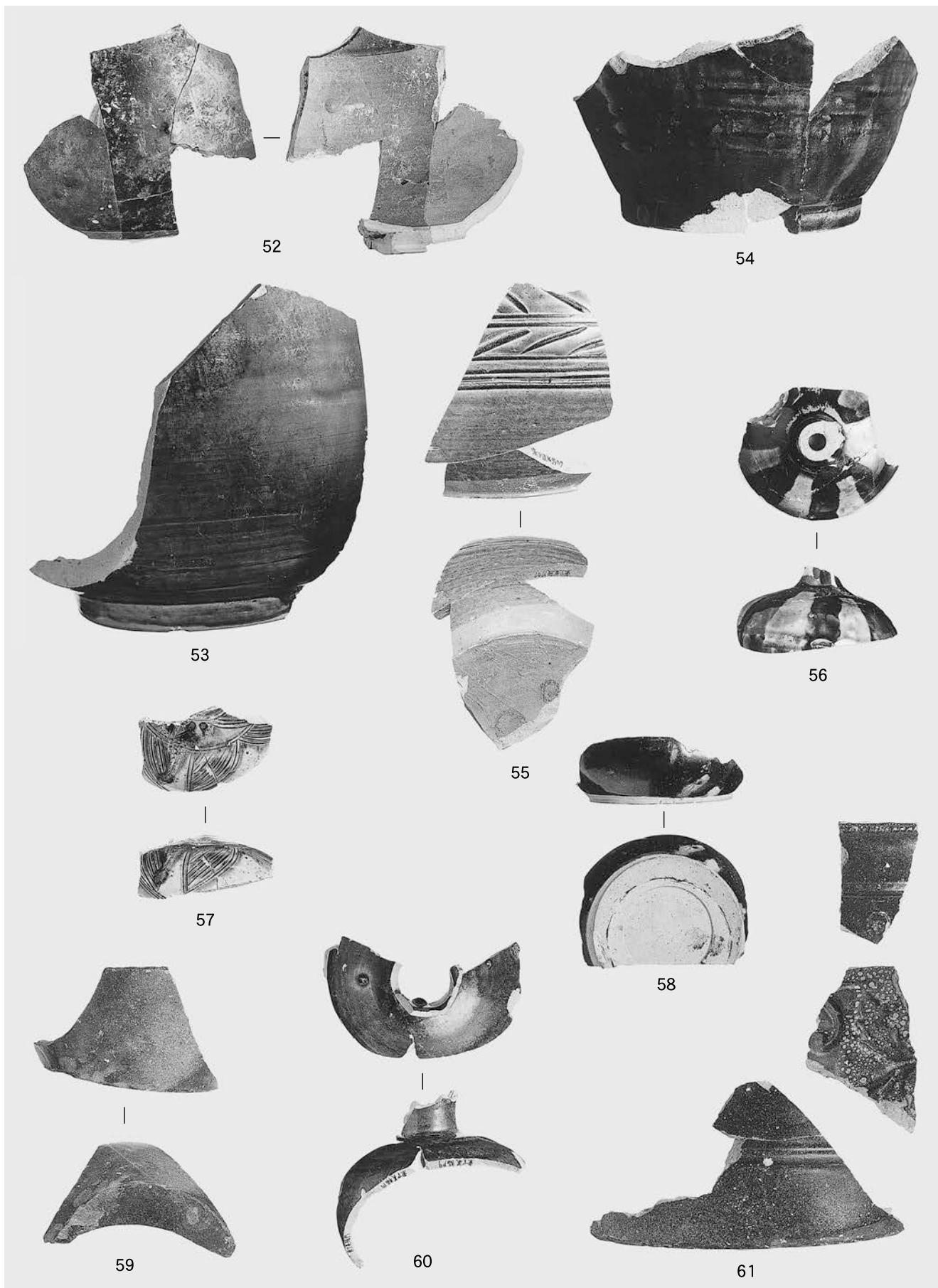
図版38 沖縄産施釉陶器（1）



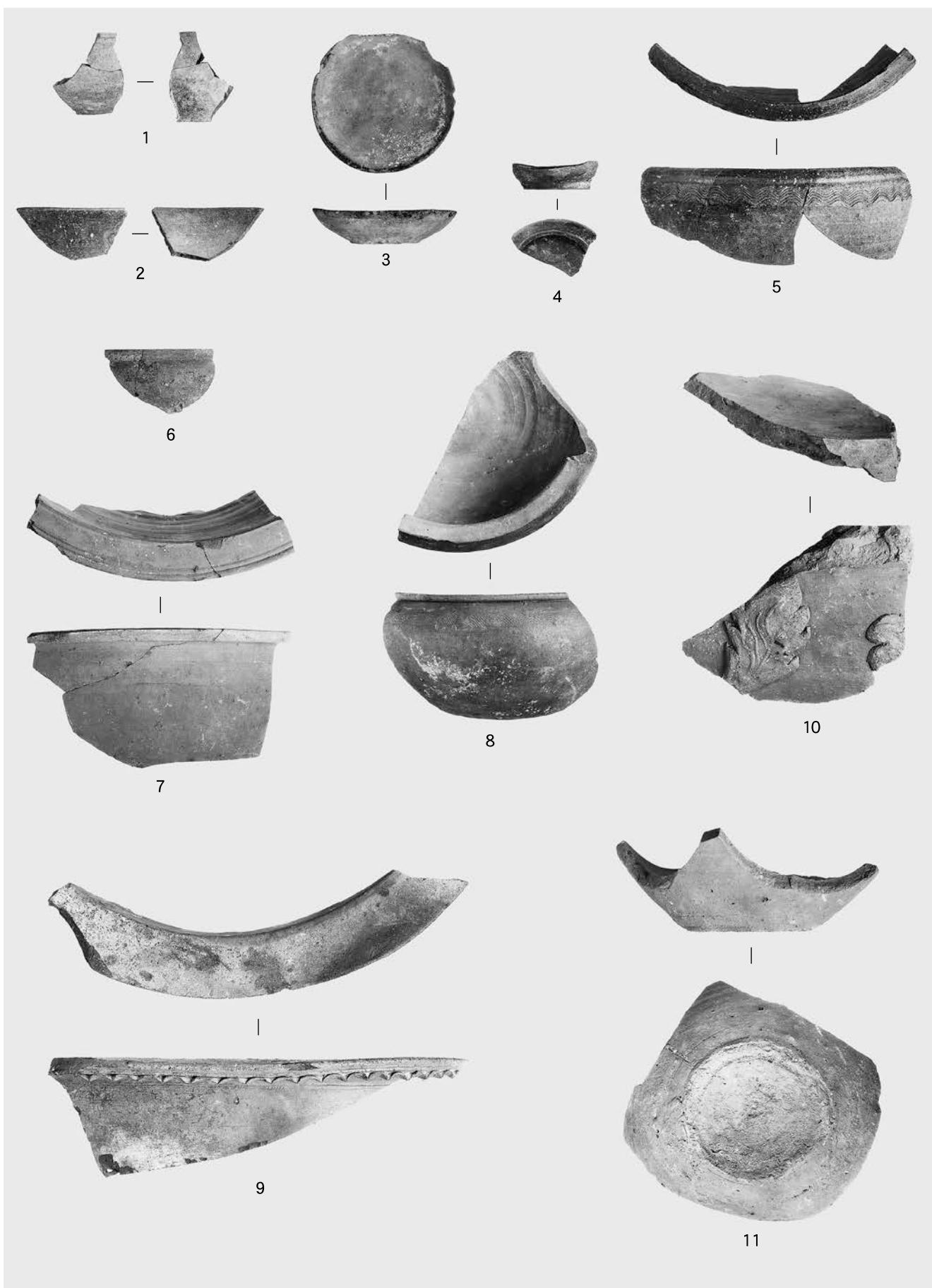
図版39 沖縄産施釉陶器（2）



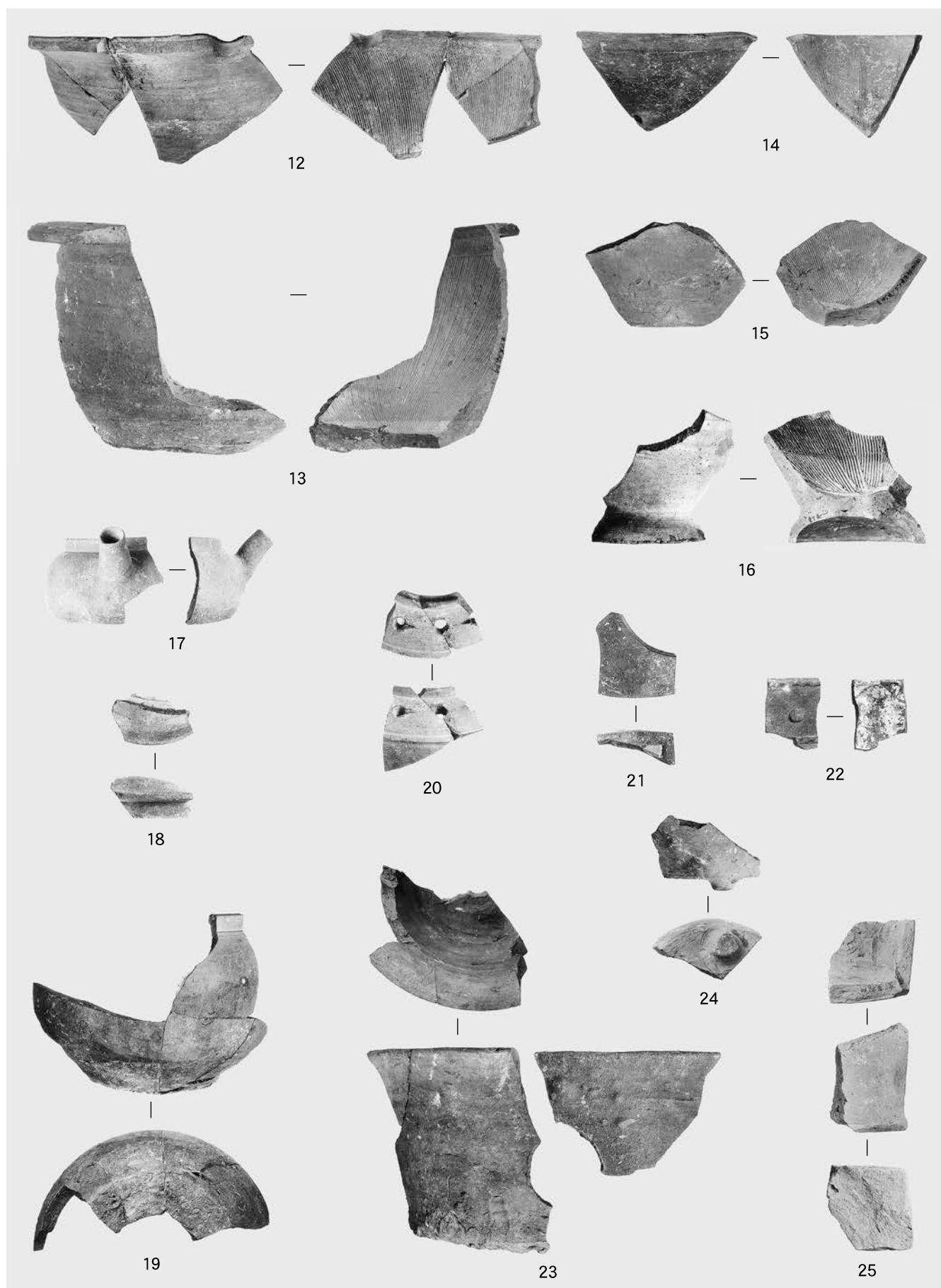
図版40 沖縄産施釉陶器（3）



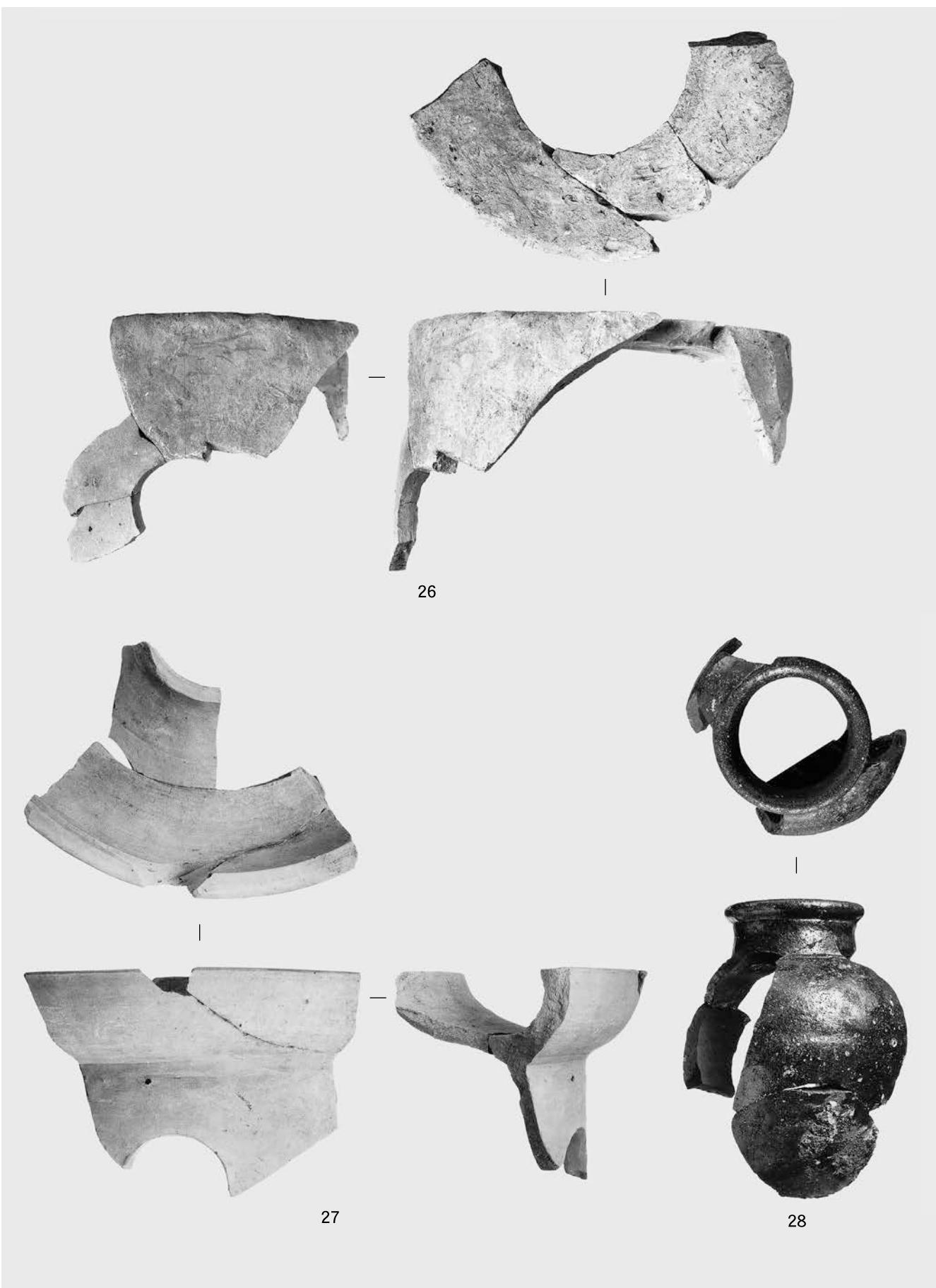
図版41 沖縄産施釉陶器（4）



図版42 沖縄産無釉陶器（1）



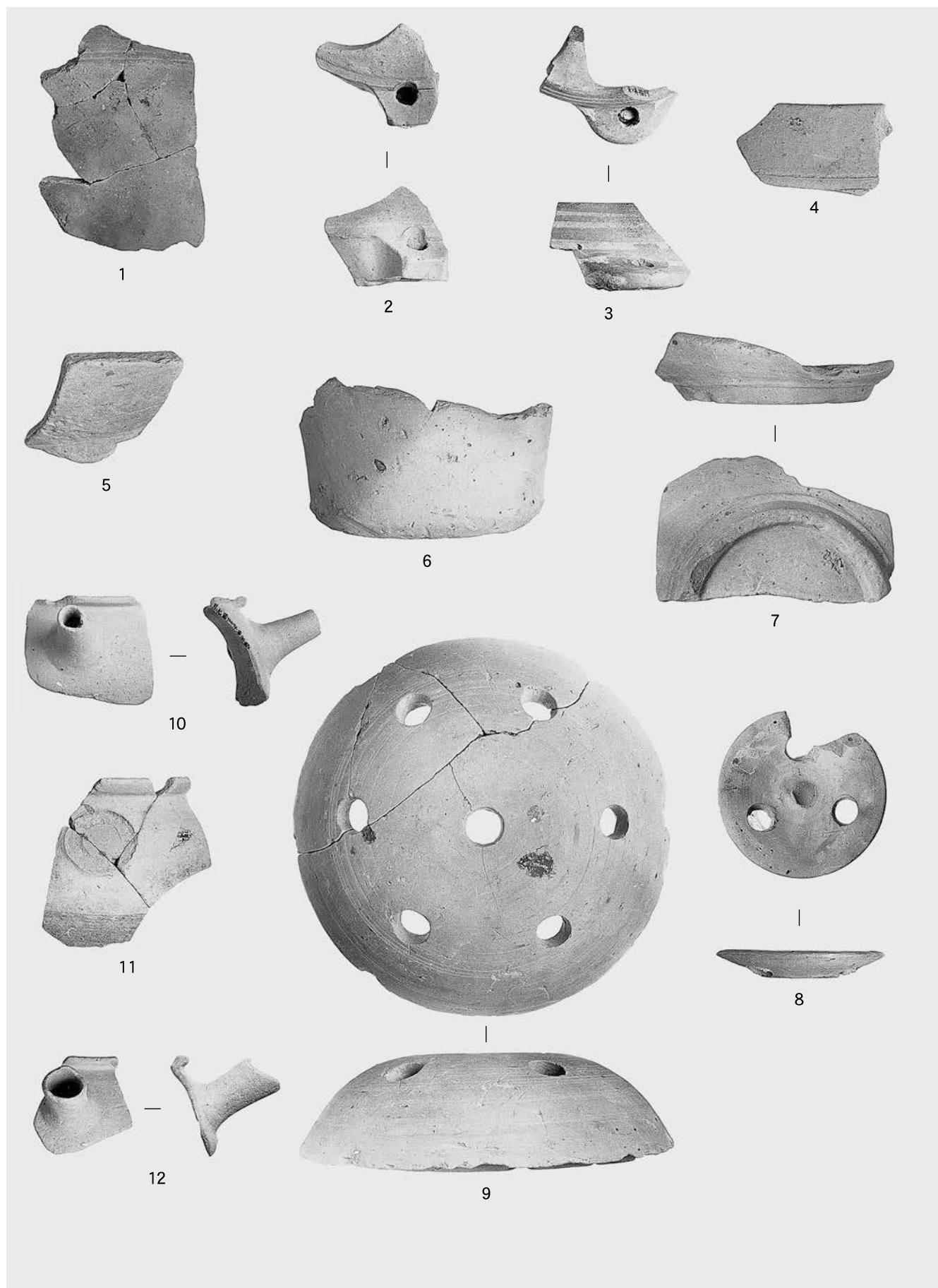
図版43 沖縄産無釉陶器（2）



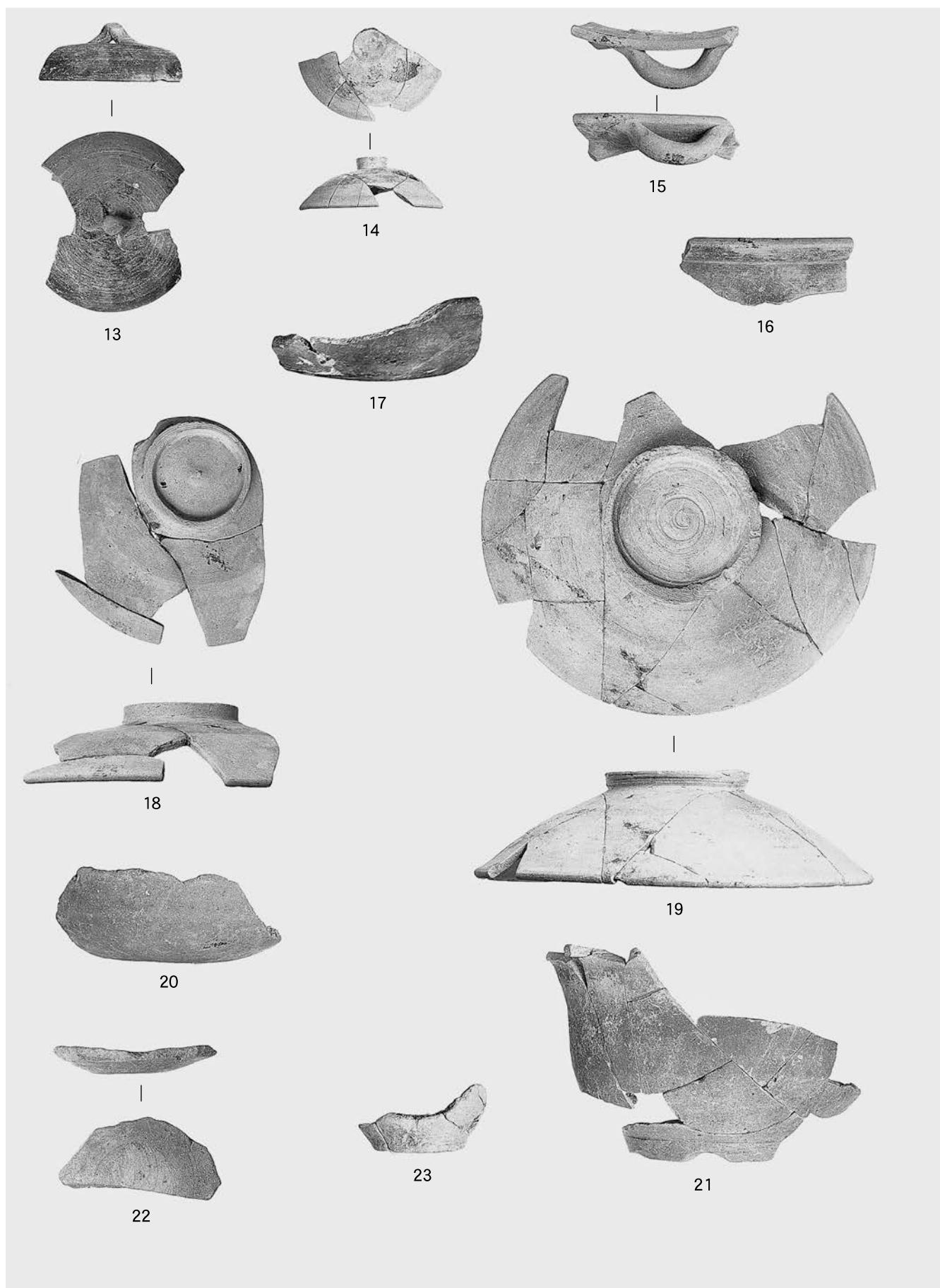
図版44 沖縄産無釉陶器（3）



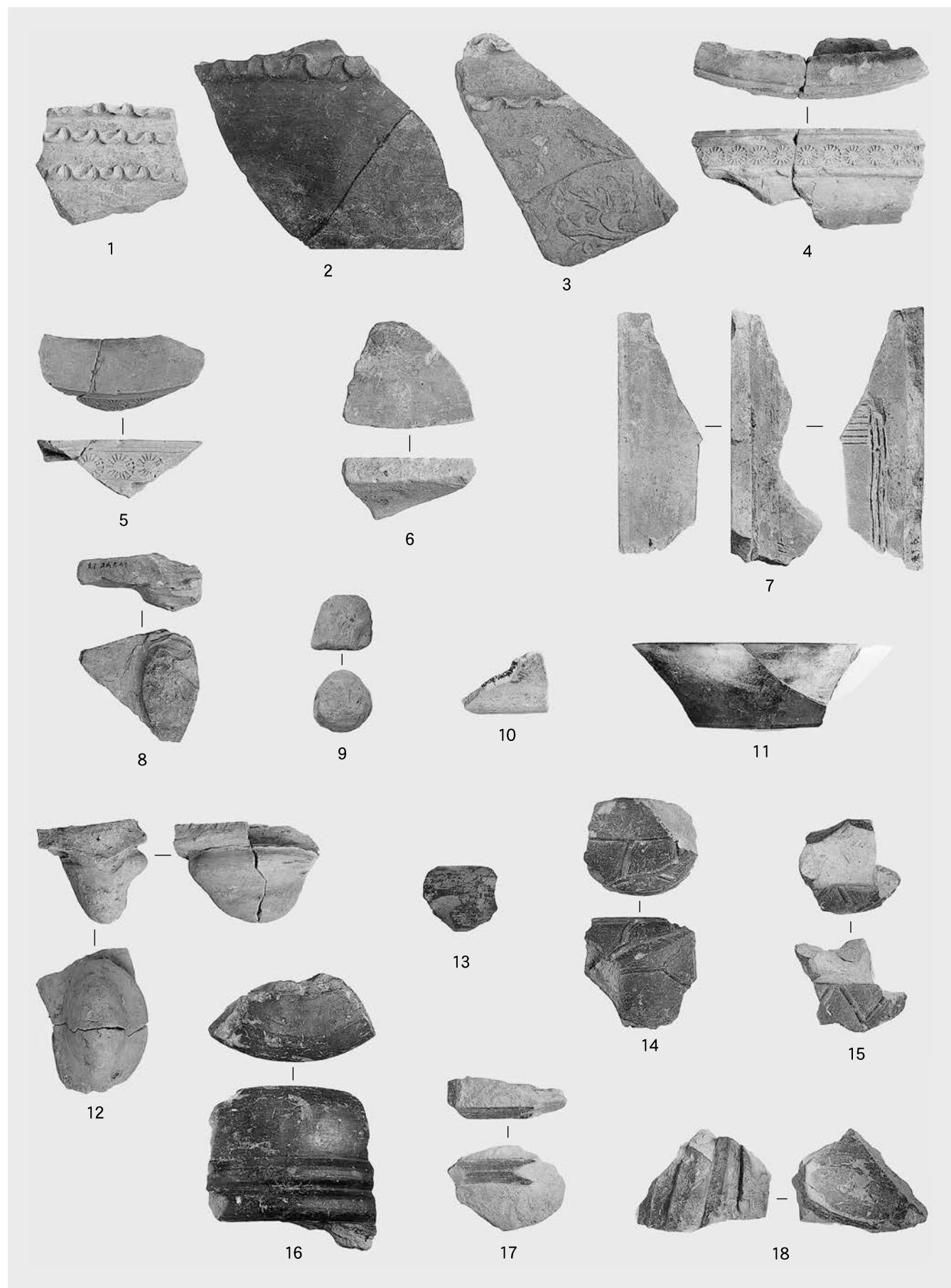
図版45 沖縄産無釉陶器（4）



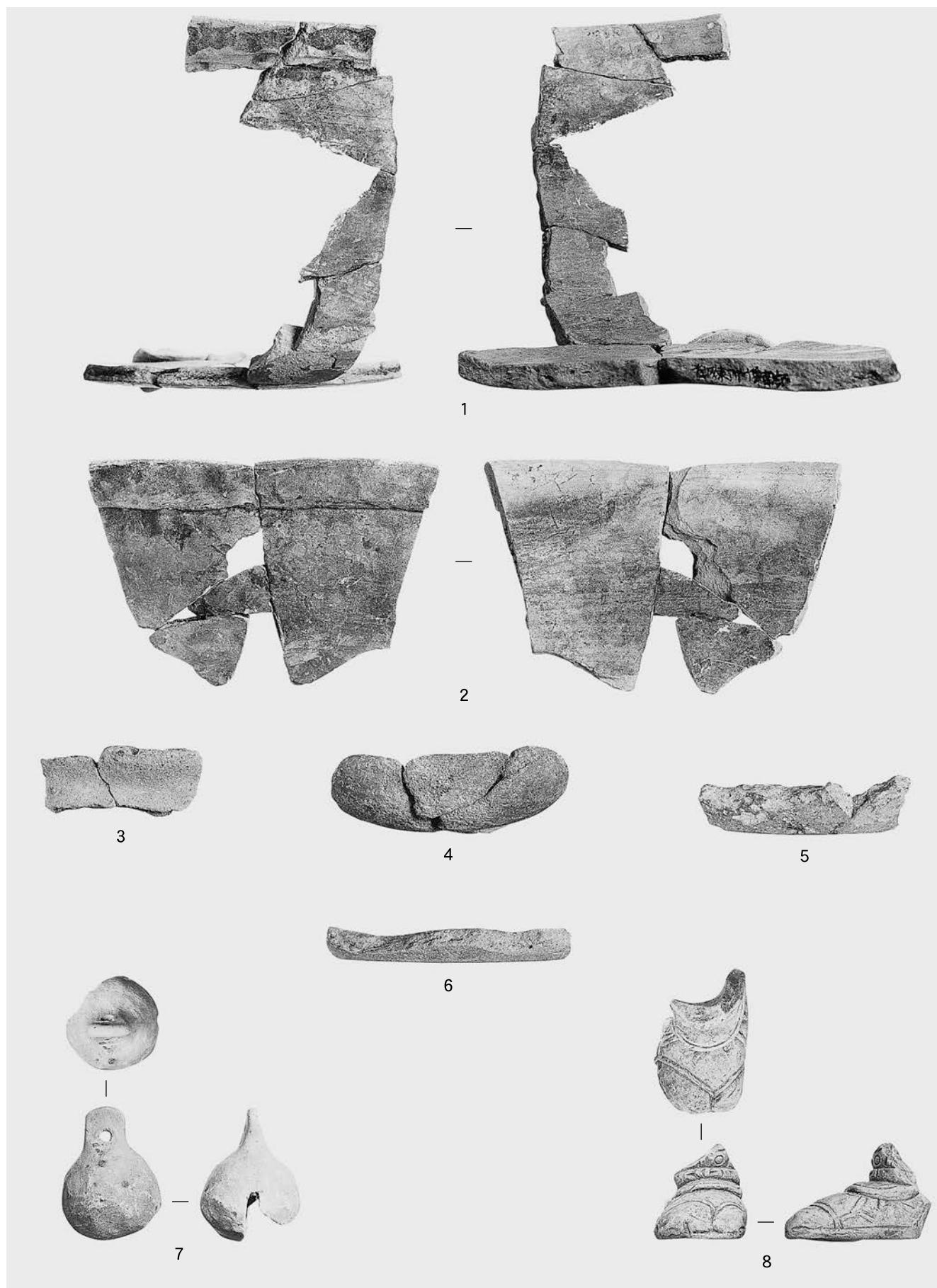
図版46 陶質土器（1）



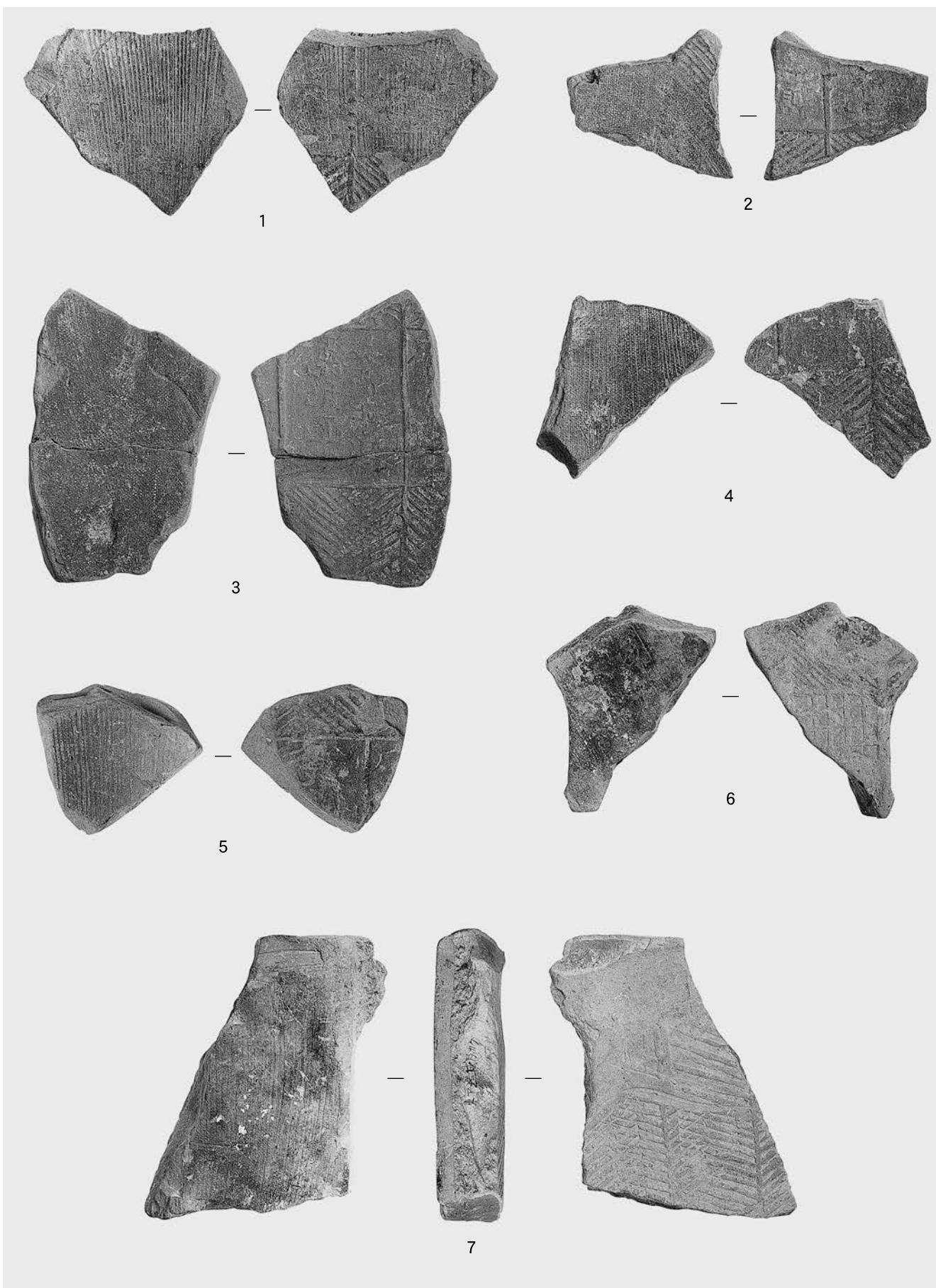
図版47 陶質土器 (2)



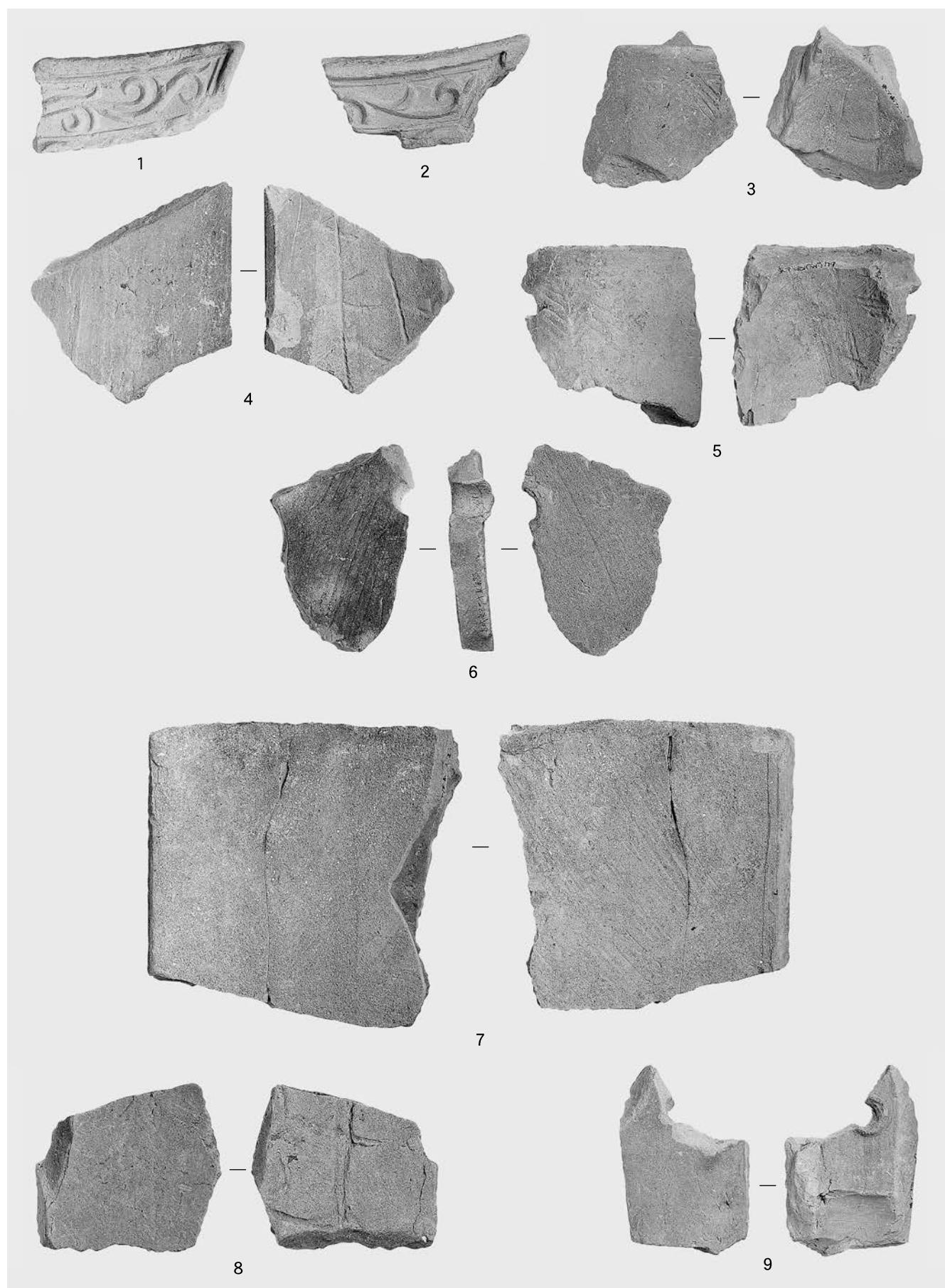
図版48 瓦質土器



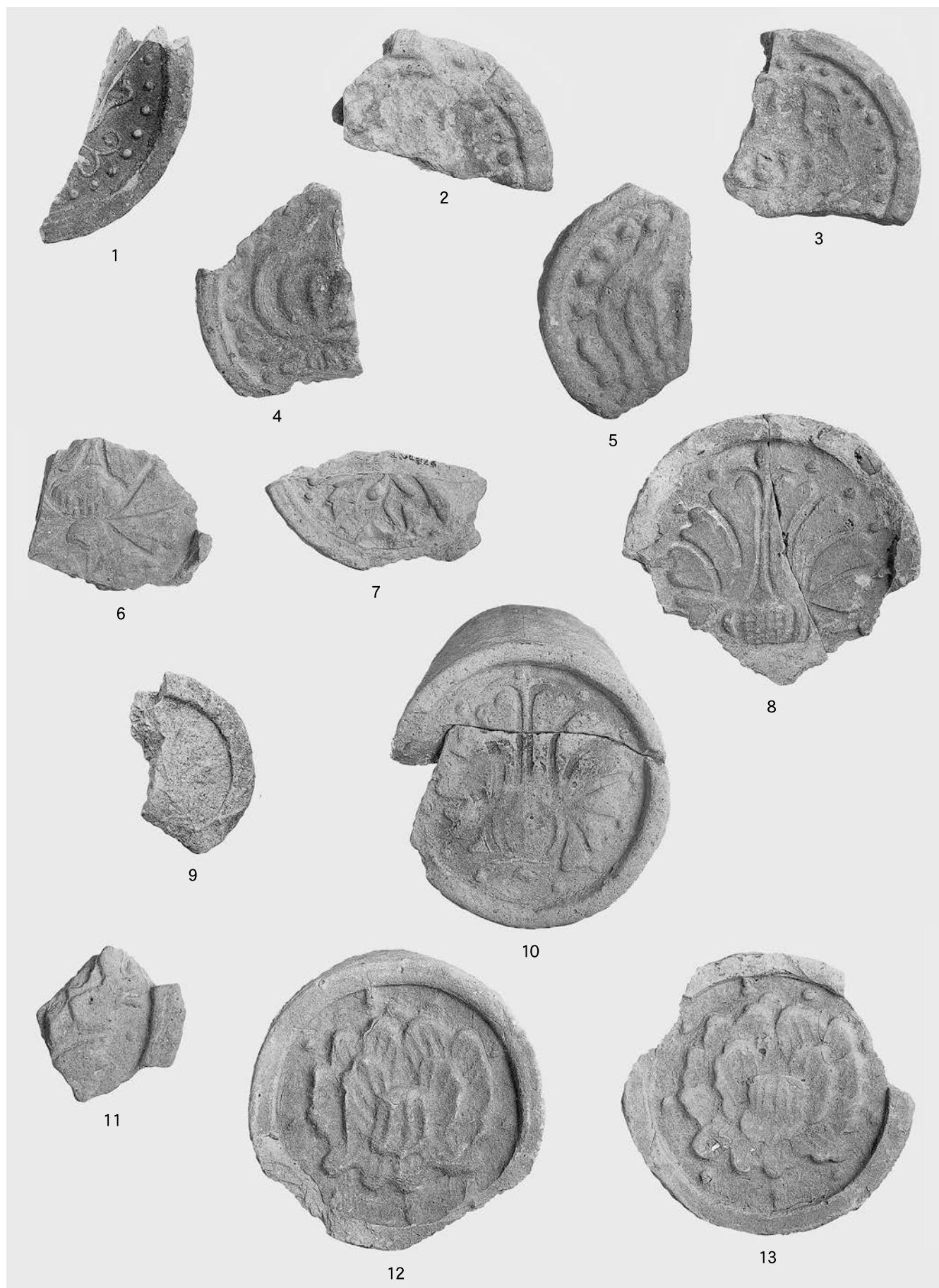
図版49 土器 1~6 土製品 7,8



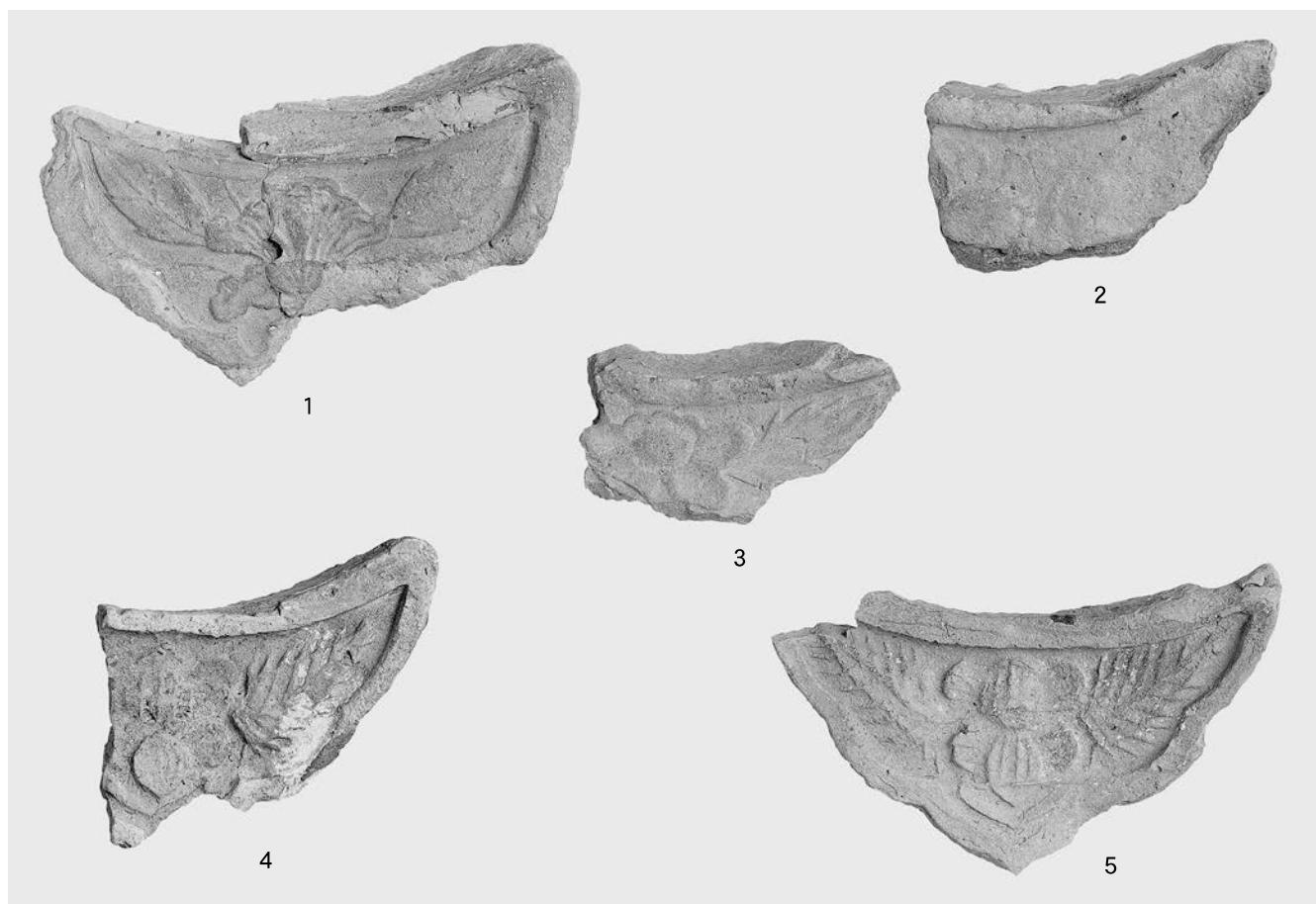
図版50 高麗系瓦：平瓦



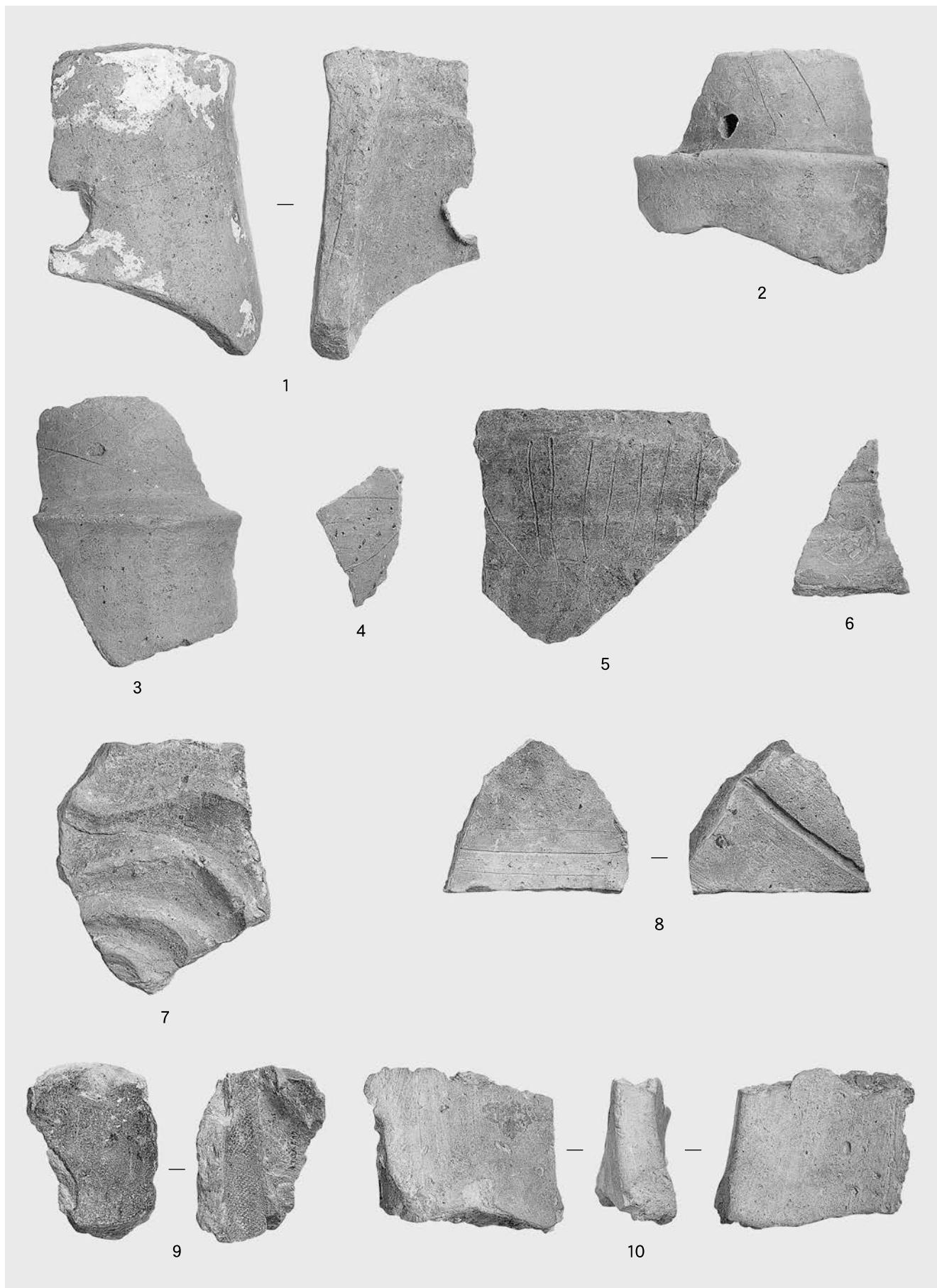
図版51 大和系瓦：軒平瓦 1,2 丸瓦 3~5 平瓦 6,7 雁振瓦 8,9



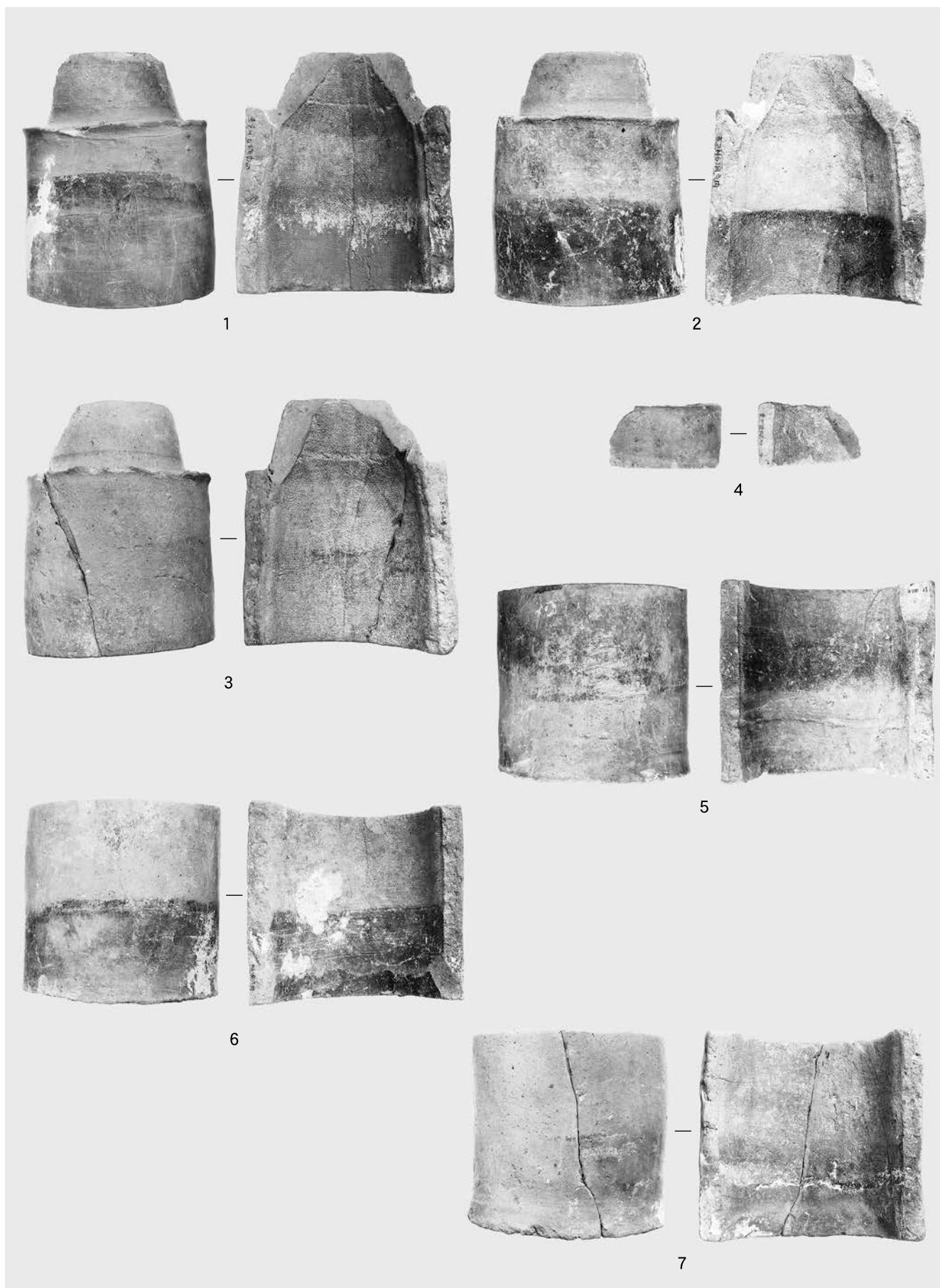
図版52 明朝系瓦：軒丸瓦



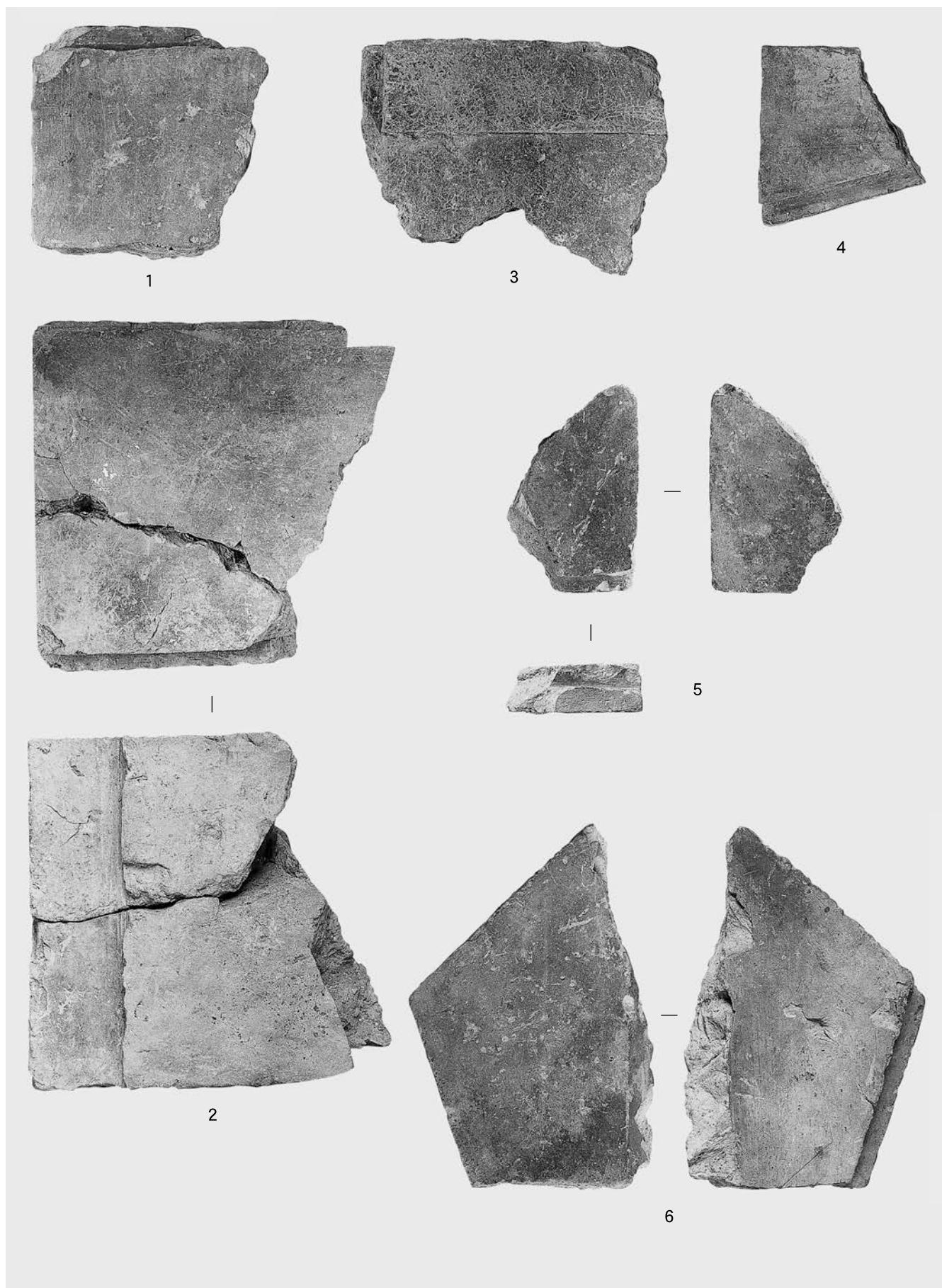
図版53 明朝系瓦：軒平瓦 1~5 丸瓦 6 平瓦 7



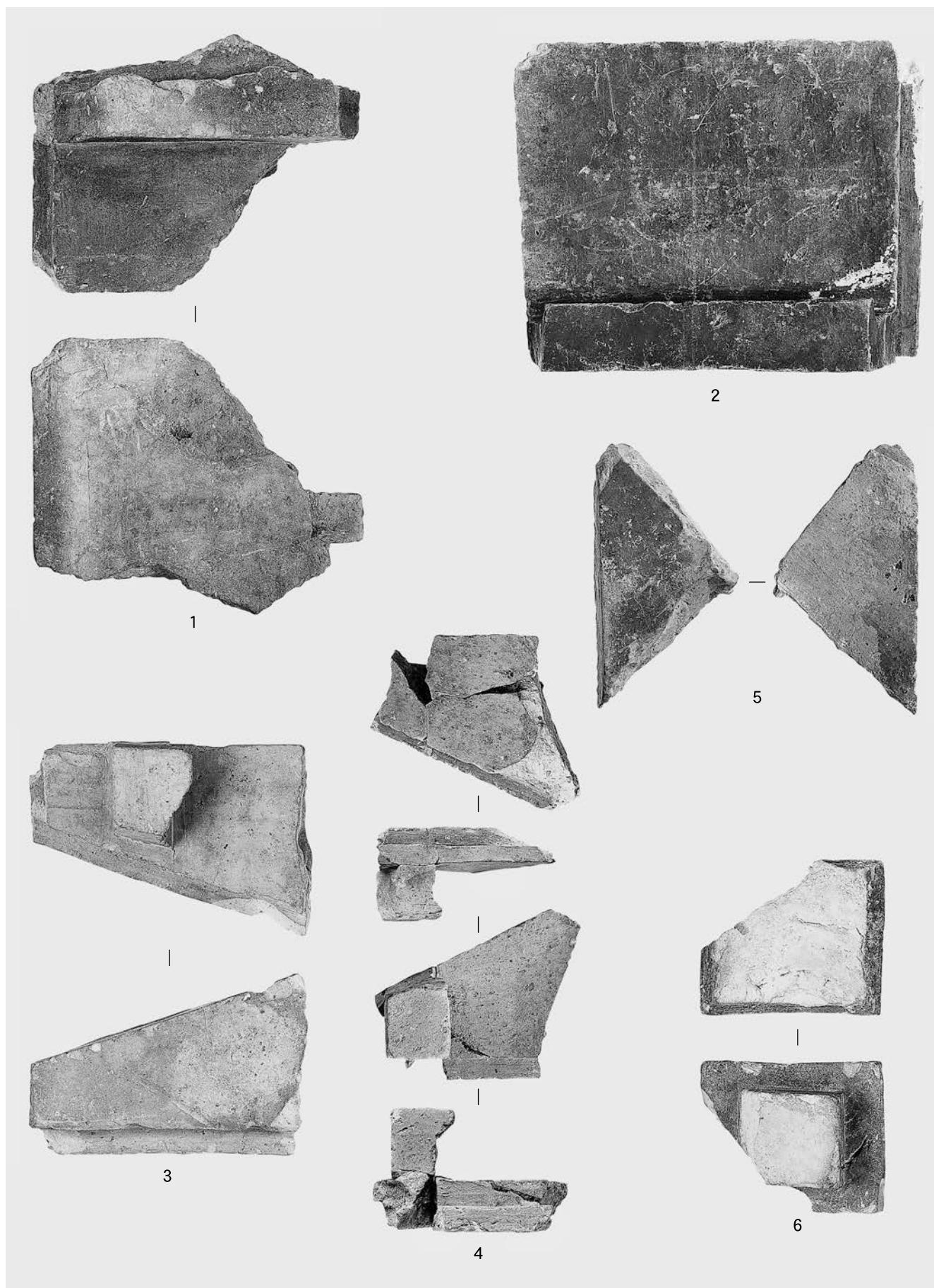
図版54 明朝系瓦：丸瓦 1~3 平瓦 4~6 飾り瓦 7 その他 8,9,10



図版55 明朝系瓦：丸瓦（役瓦）



図版56 塚 (1)



図版57 塚 (2)



1



3



2



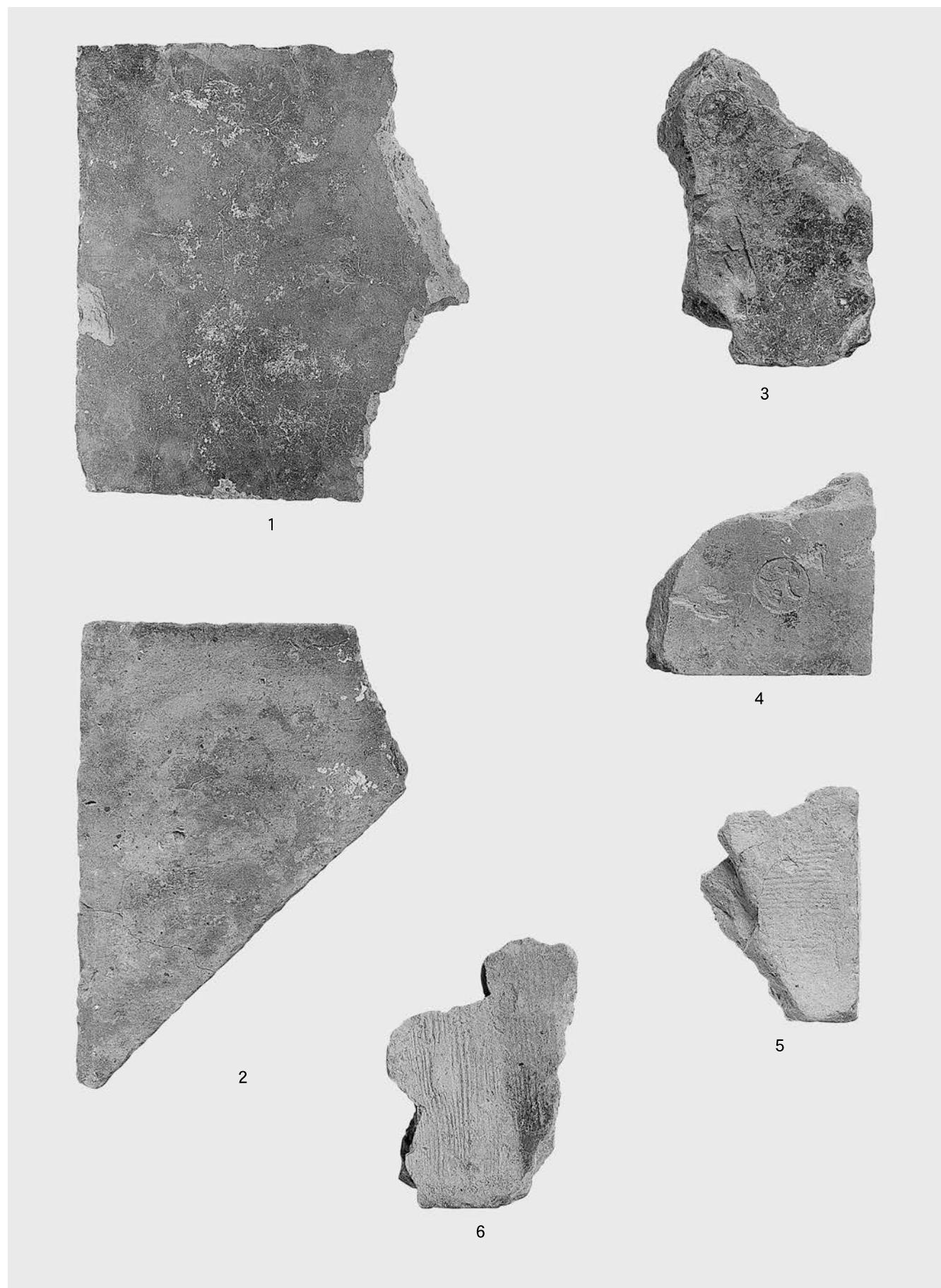
4



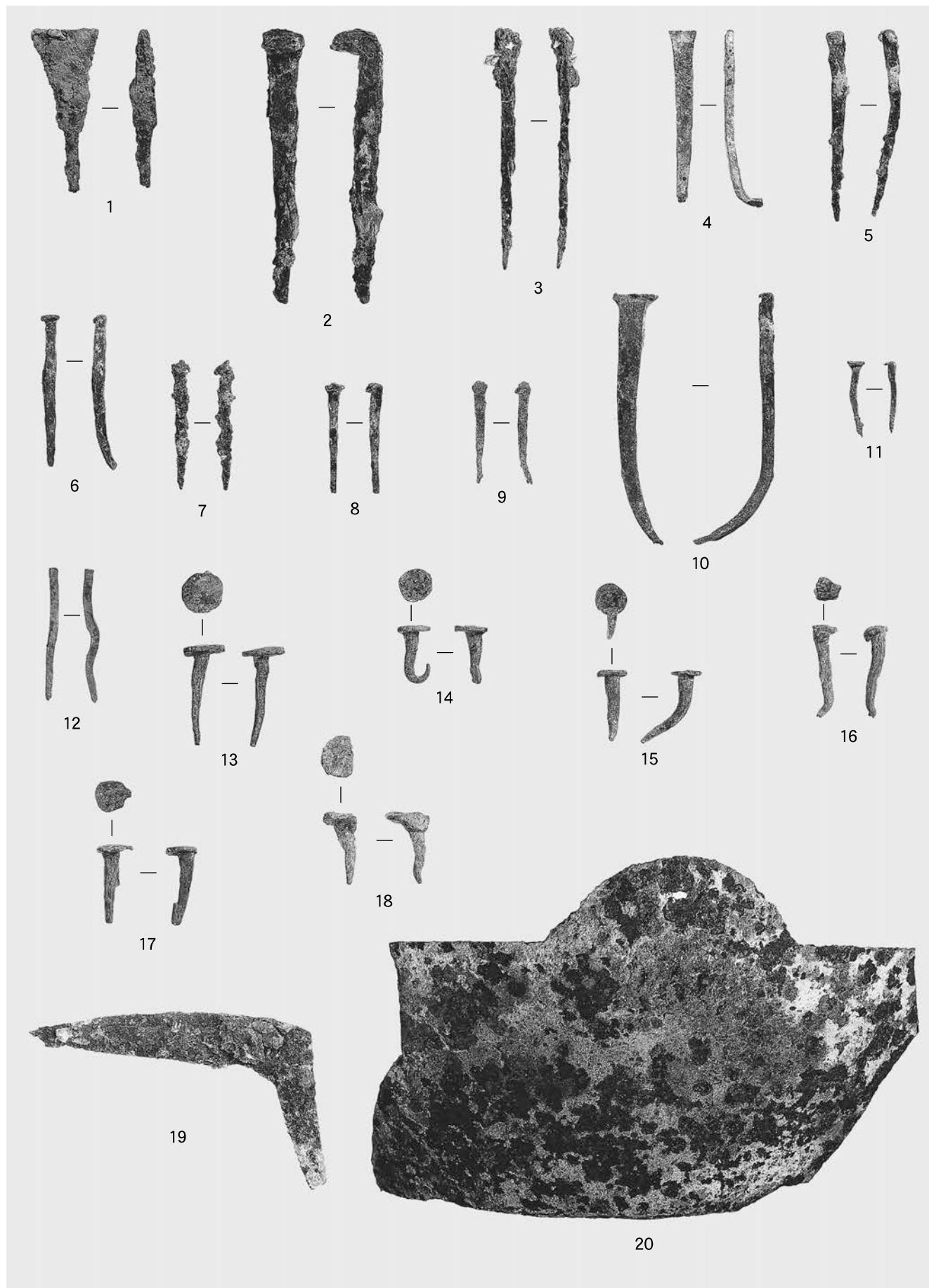
6



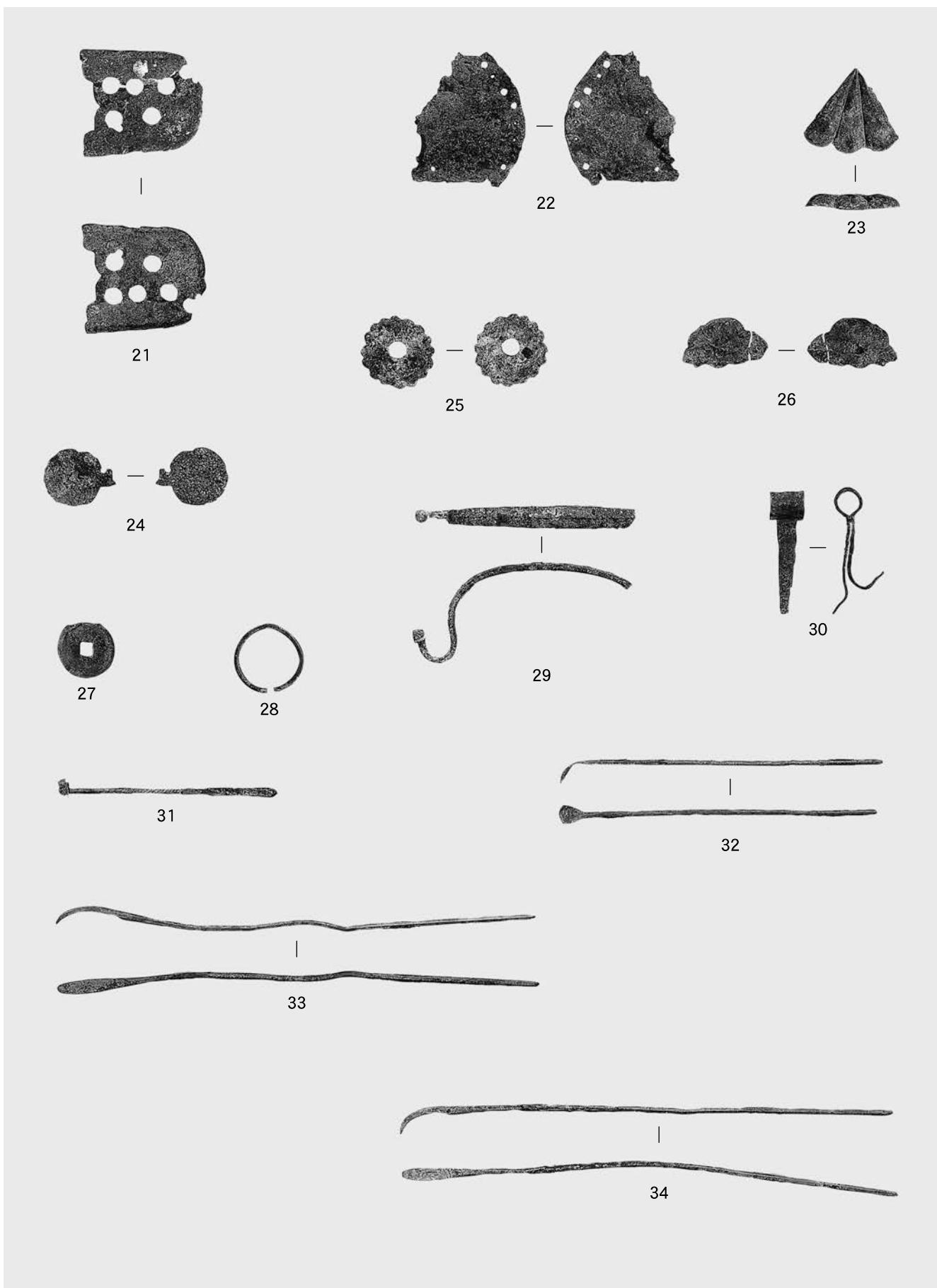
5



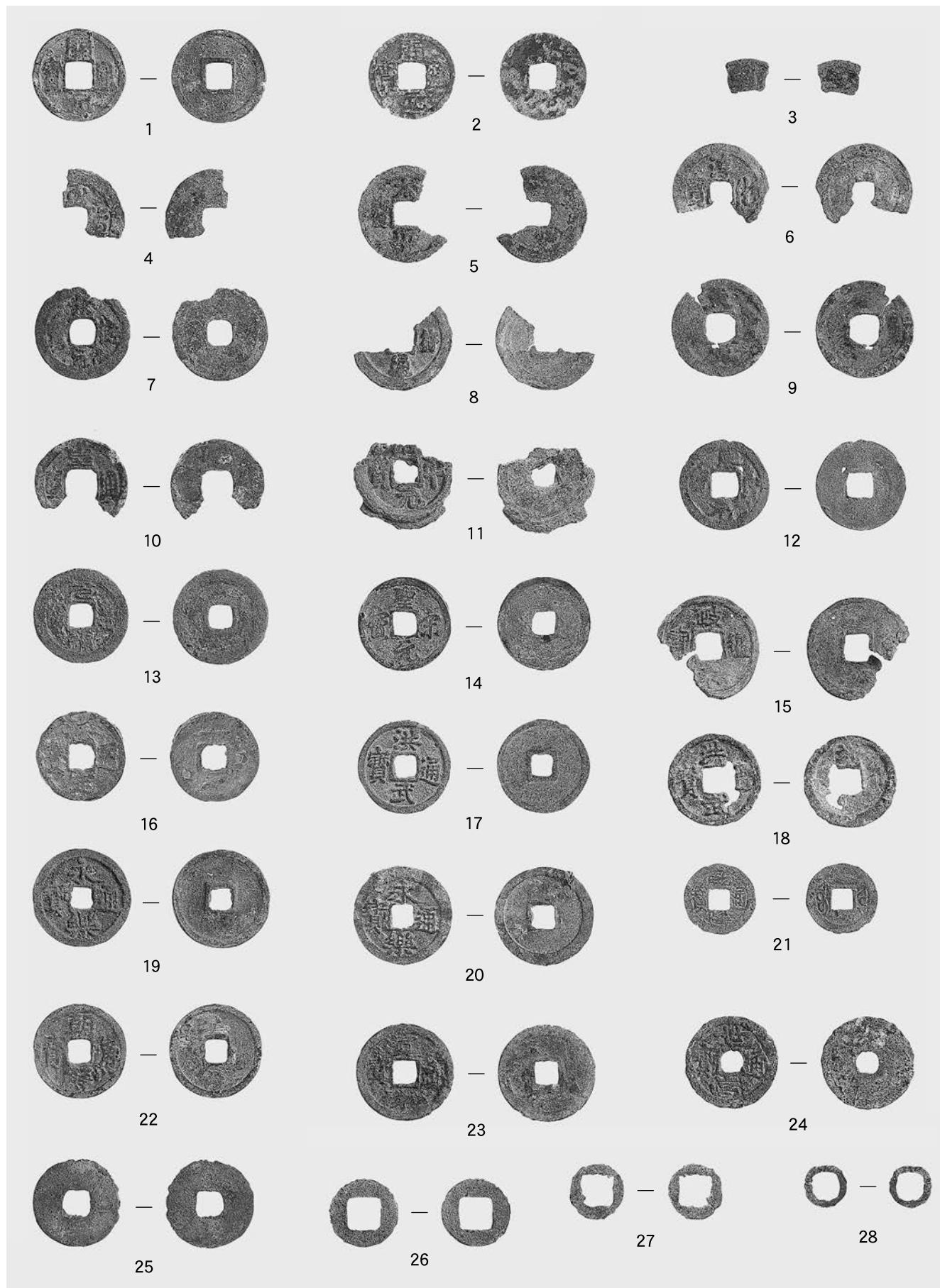
図版58 塚（3）



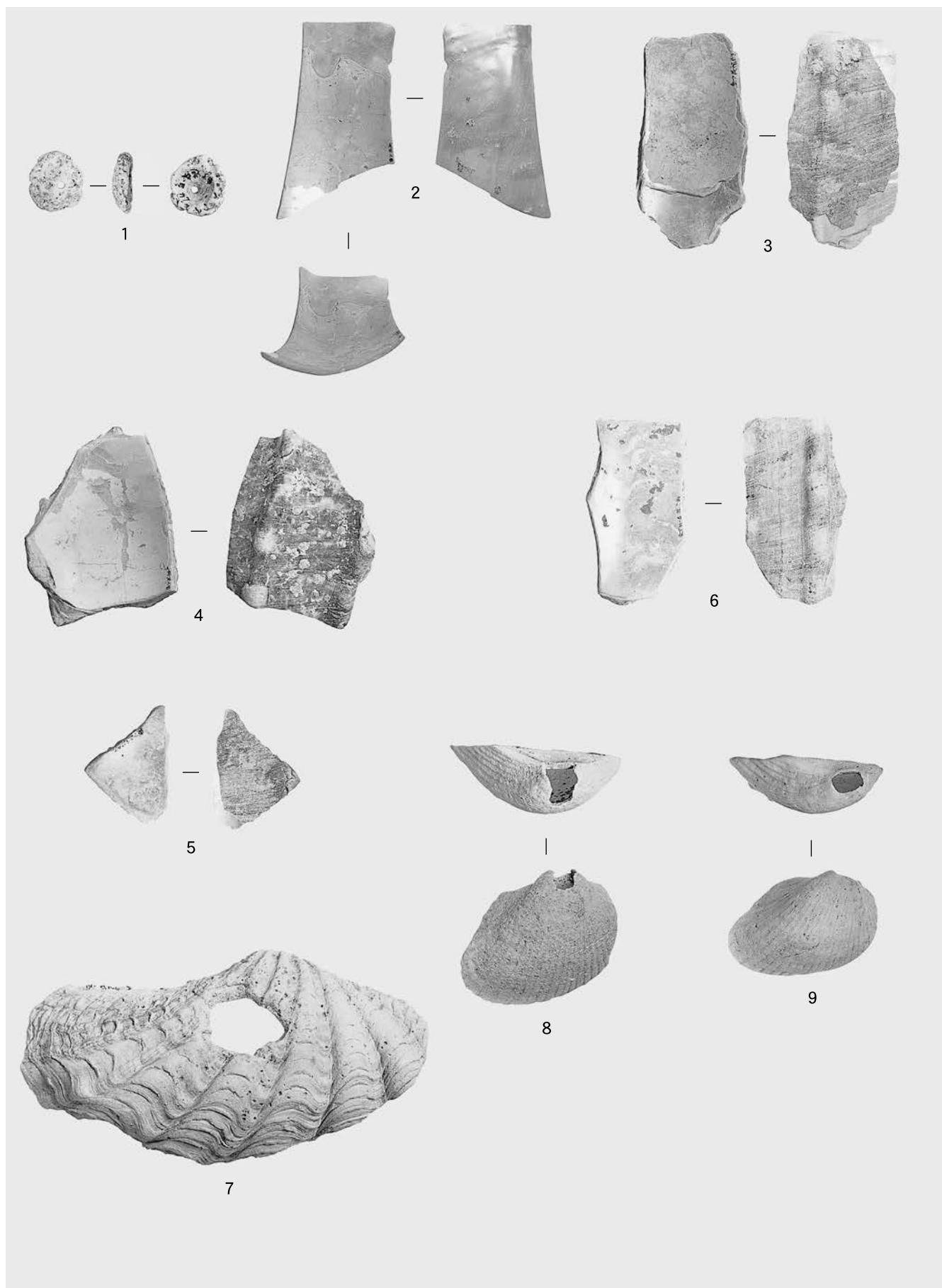
図版59 金属製品（1）



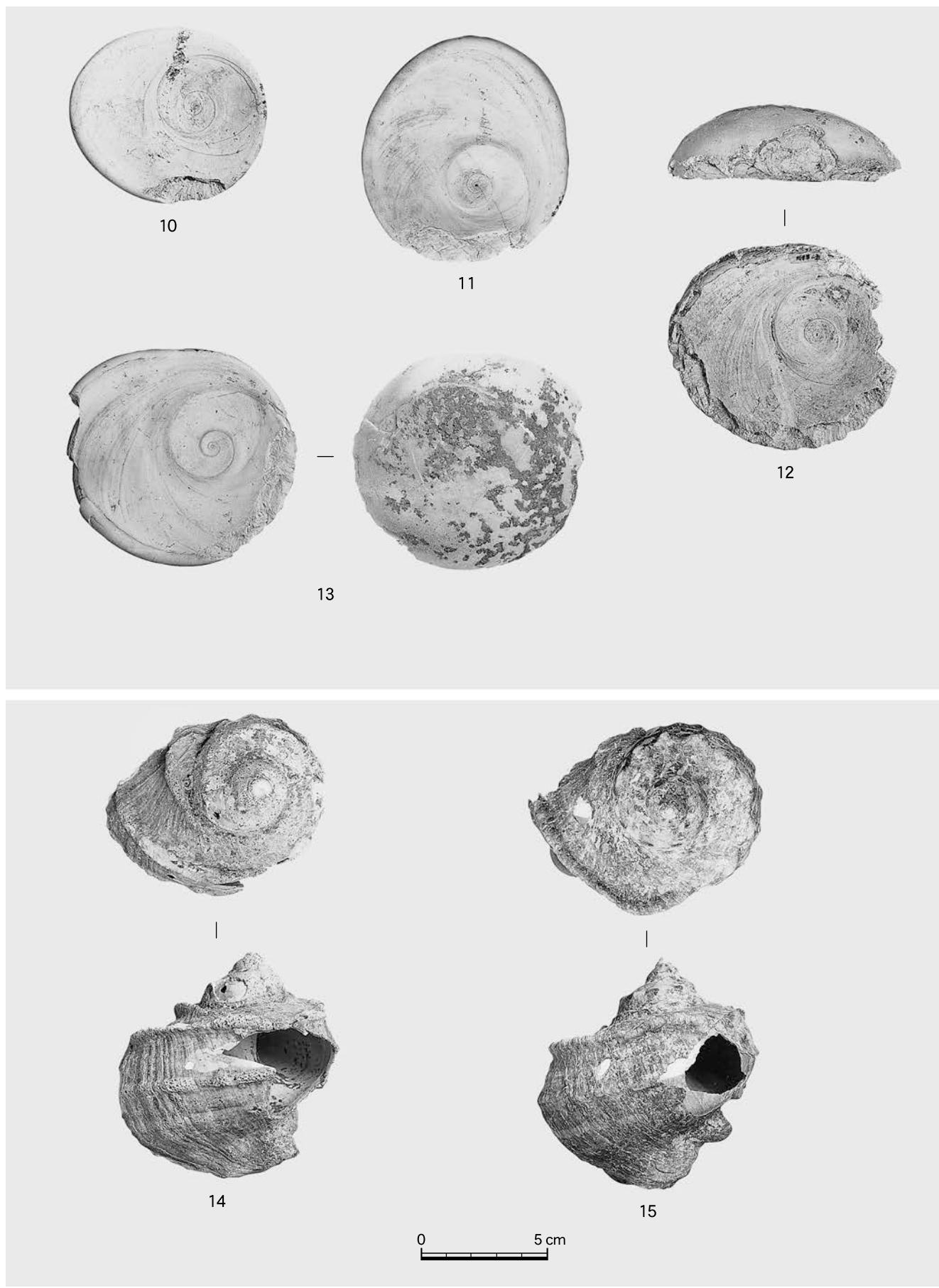
図版60 金属製品（2）



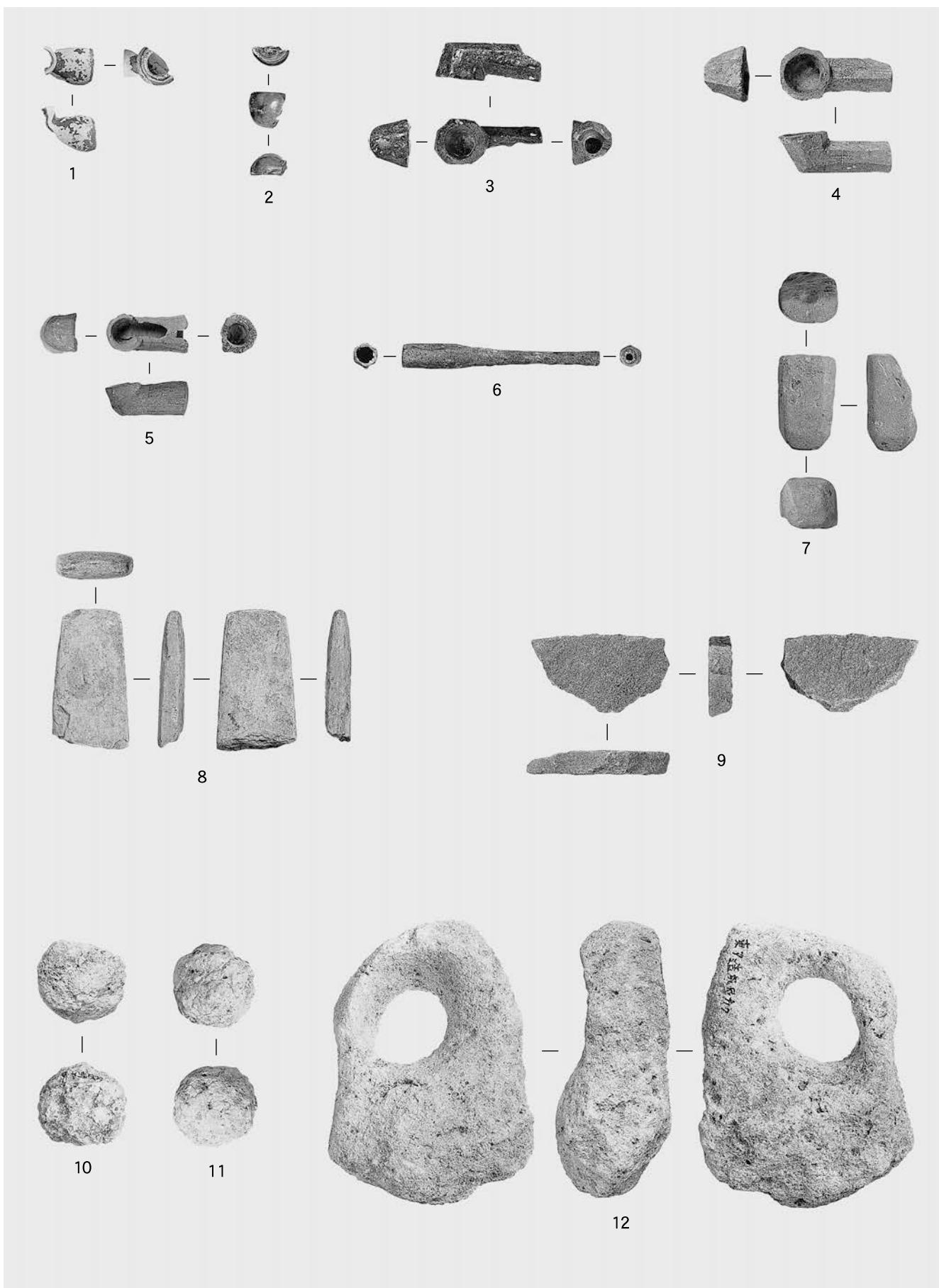
図版61 錢貨



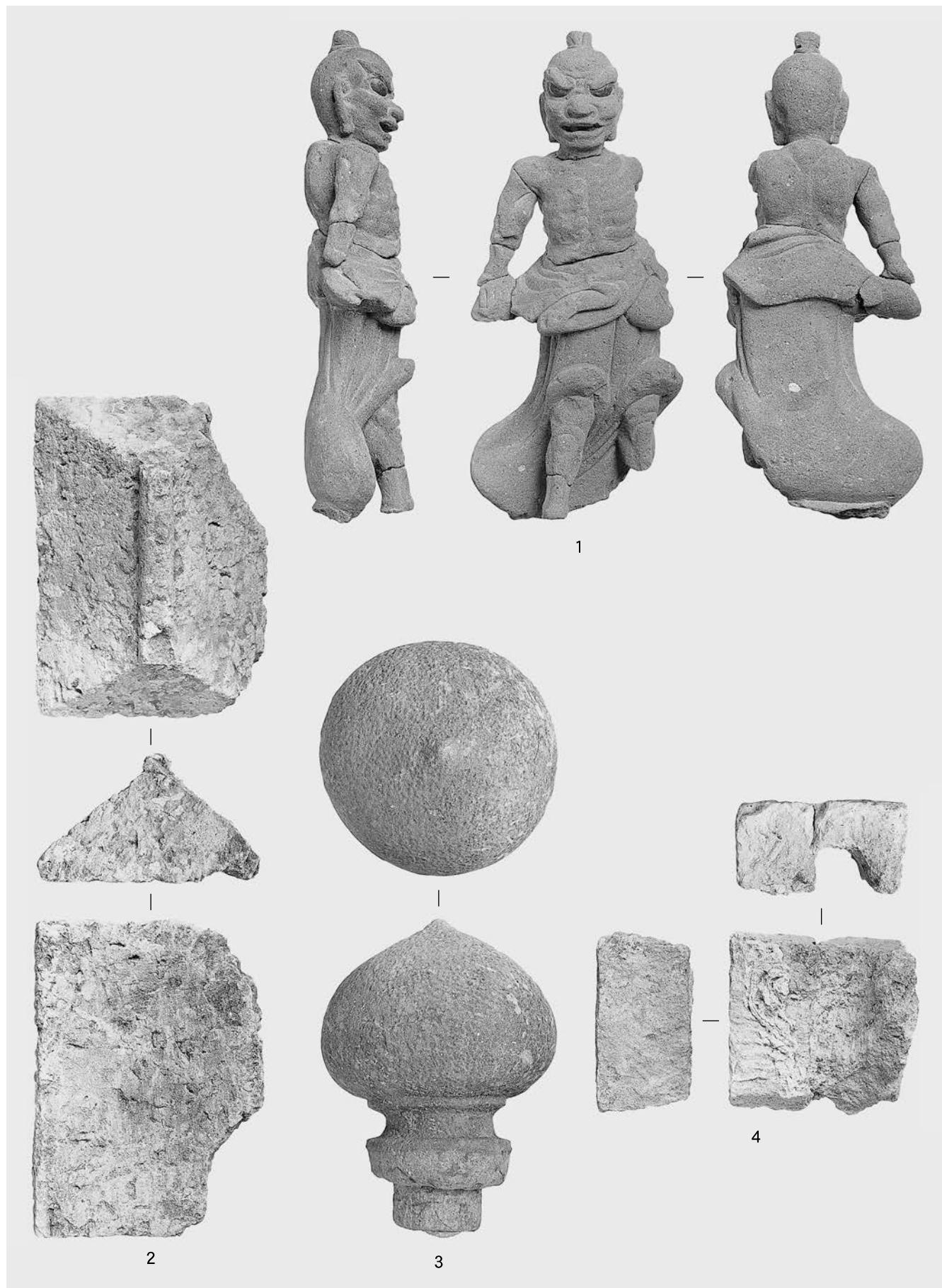
図版62 貝製品（1）



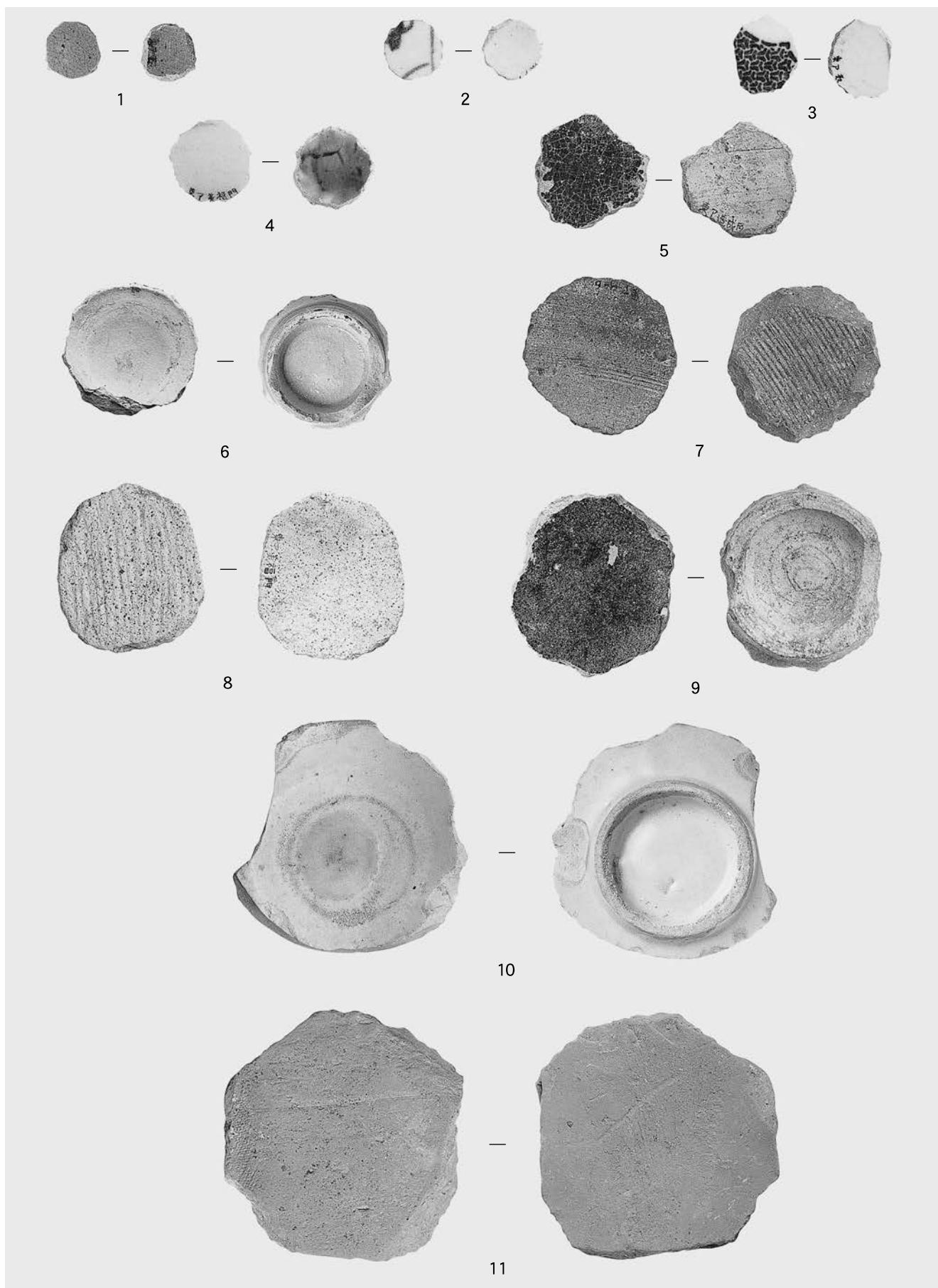
図版63 貝製品（2）有孔ヤコウ貝 14,15



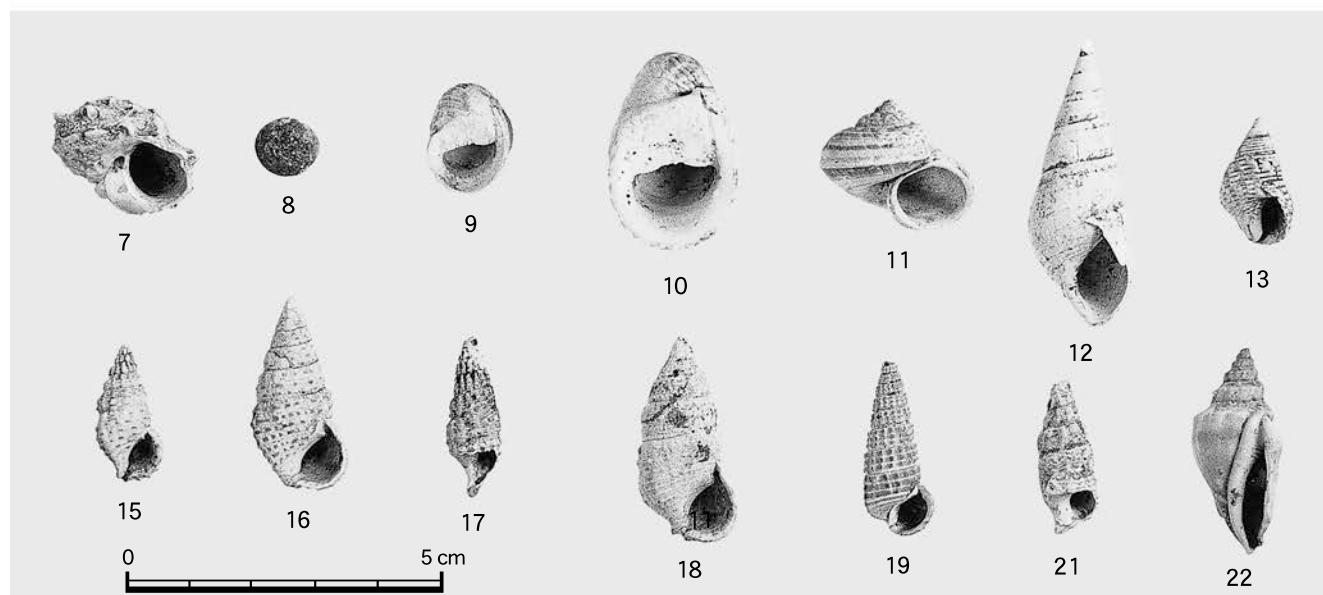
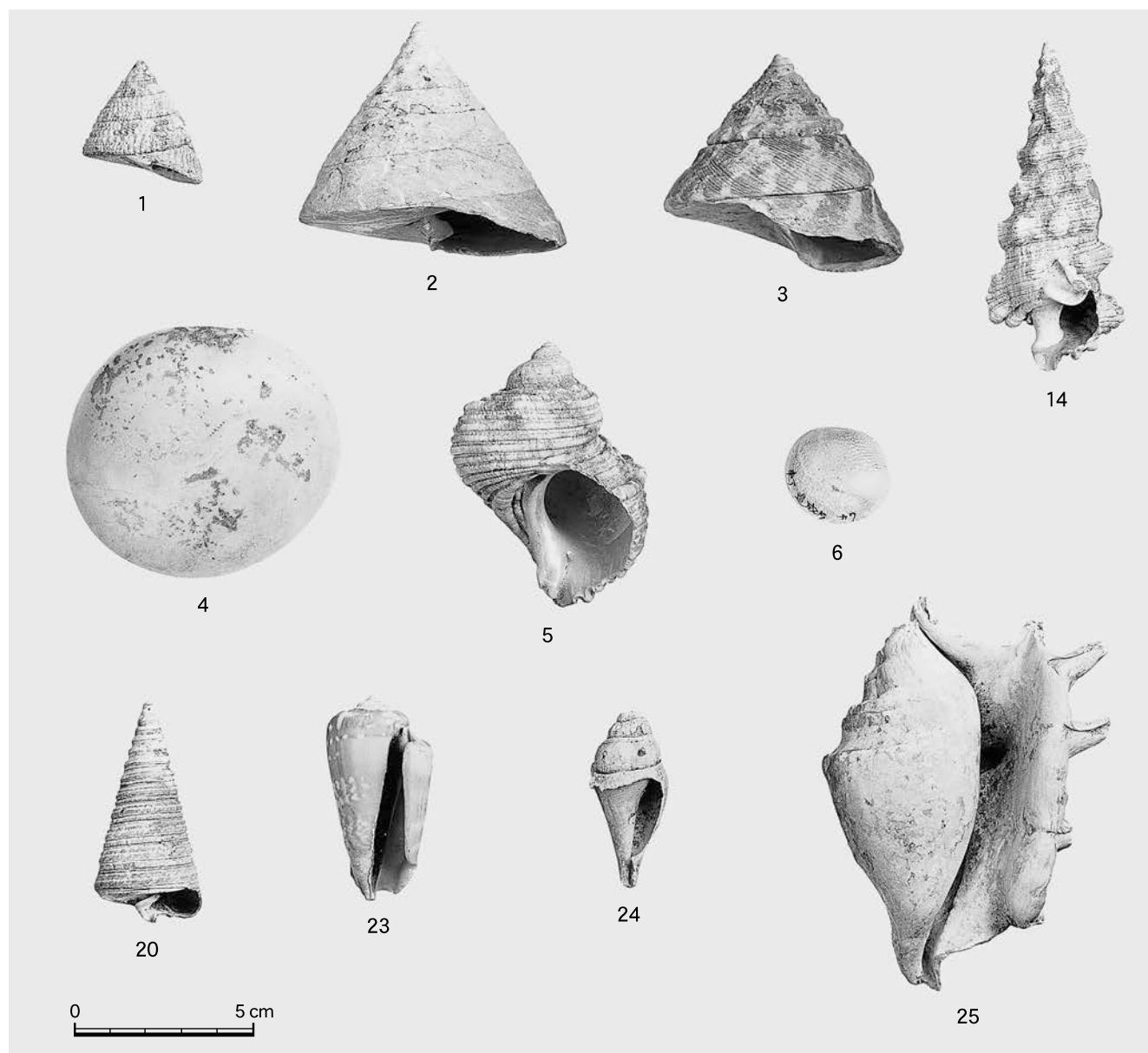
図版64 煙管 1~6 石器 7~12



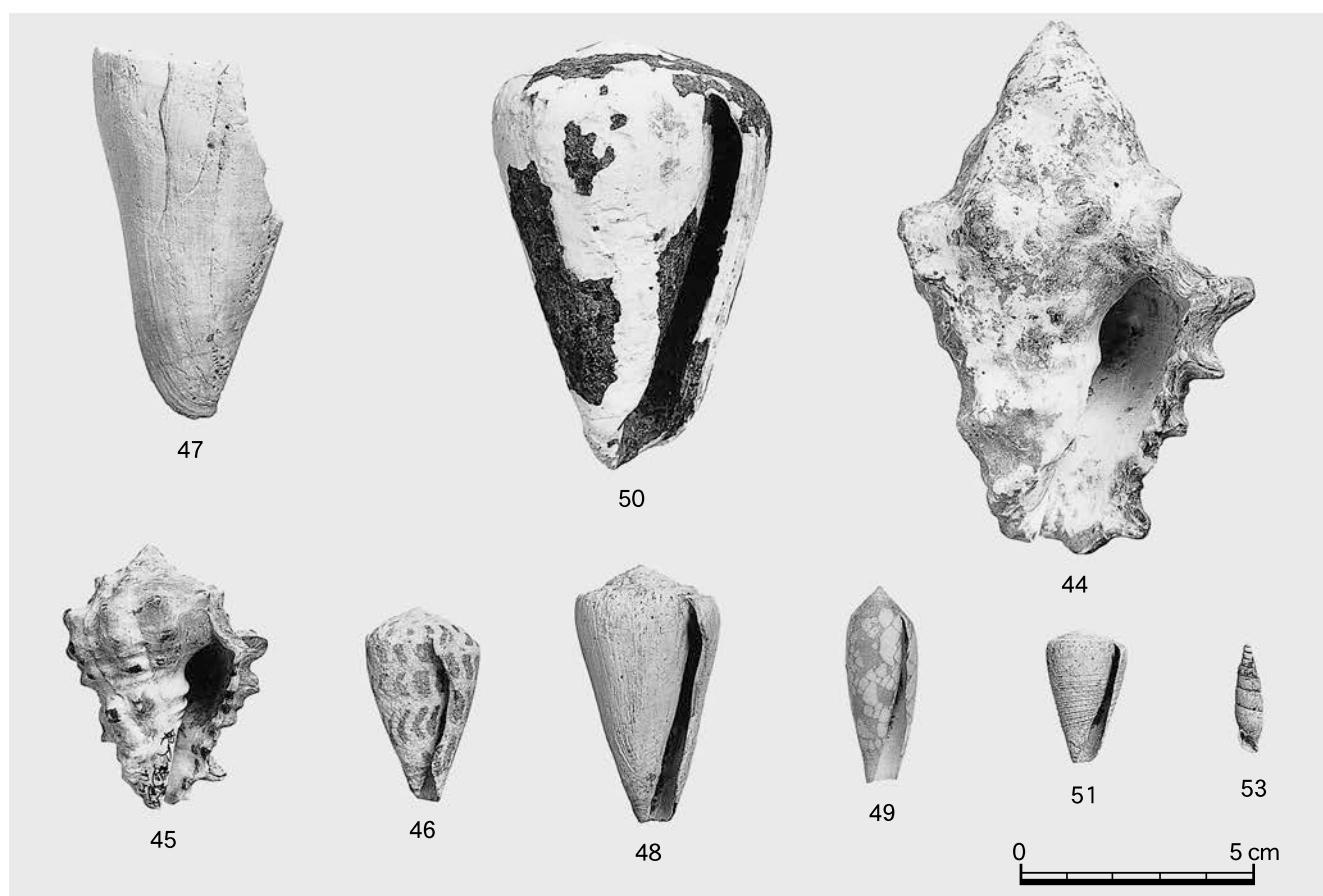
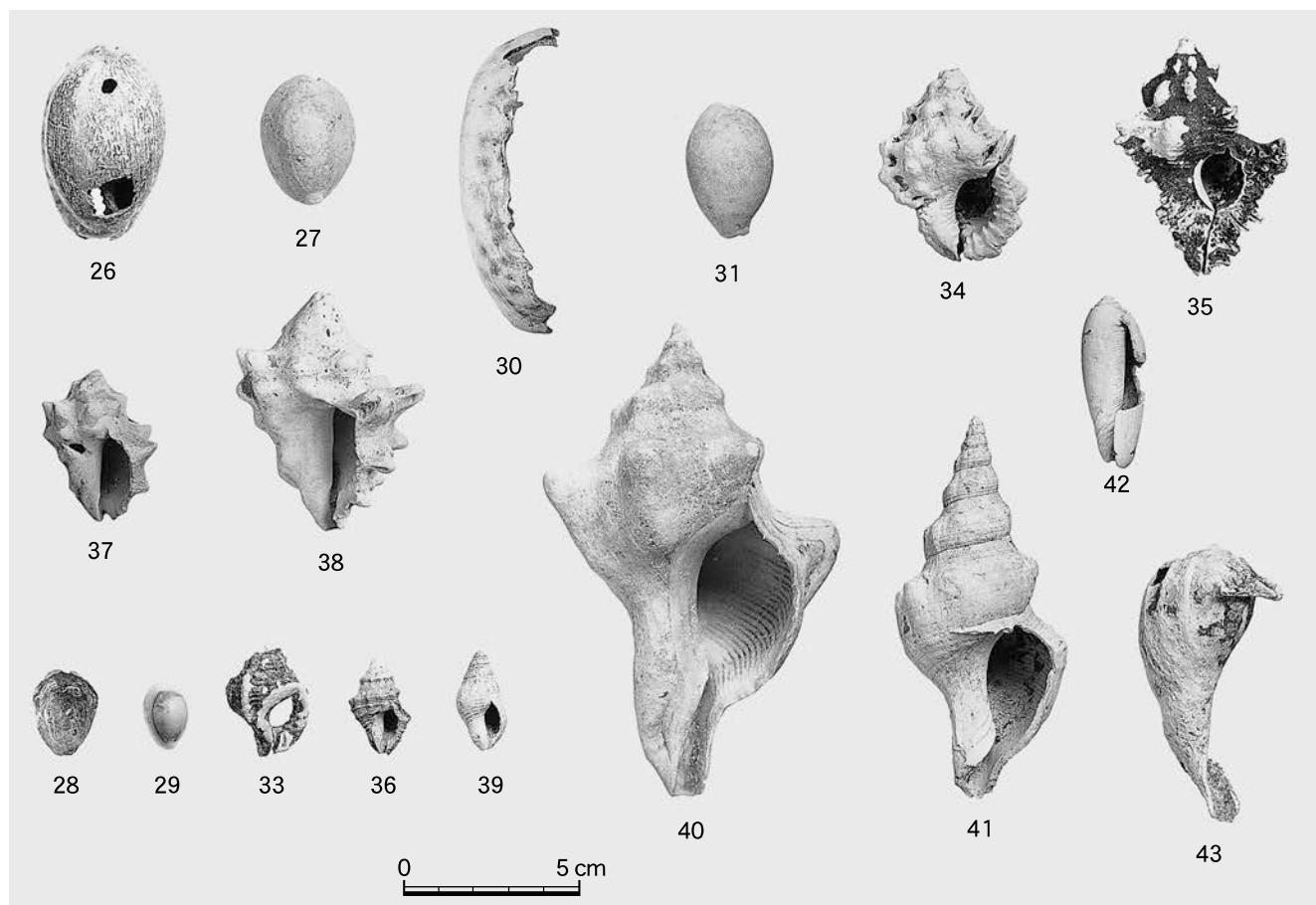
図版65 石造製品



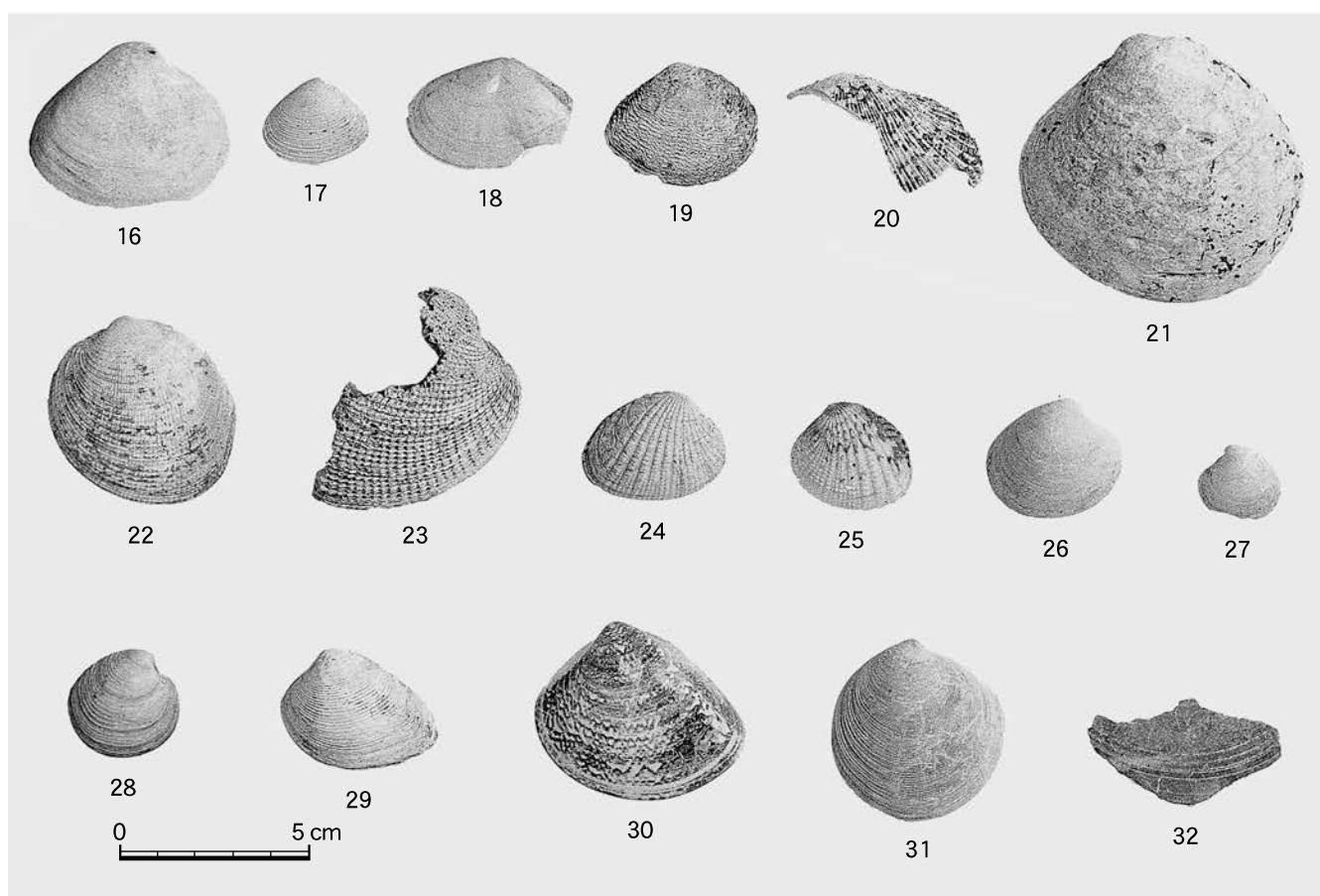
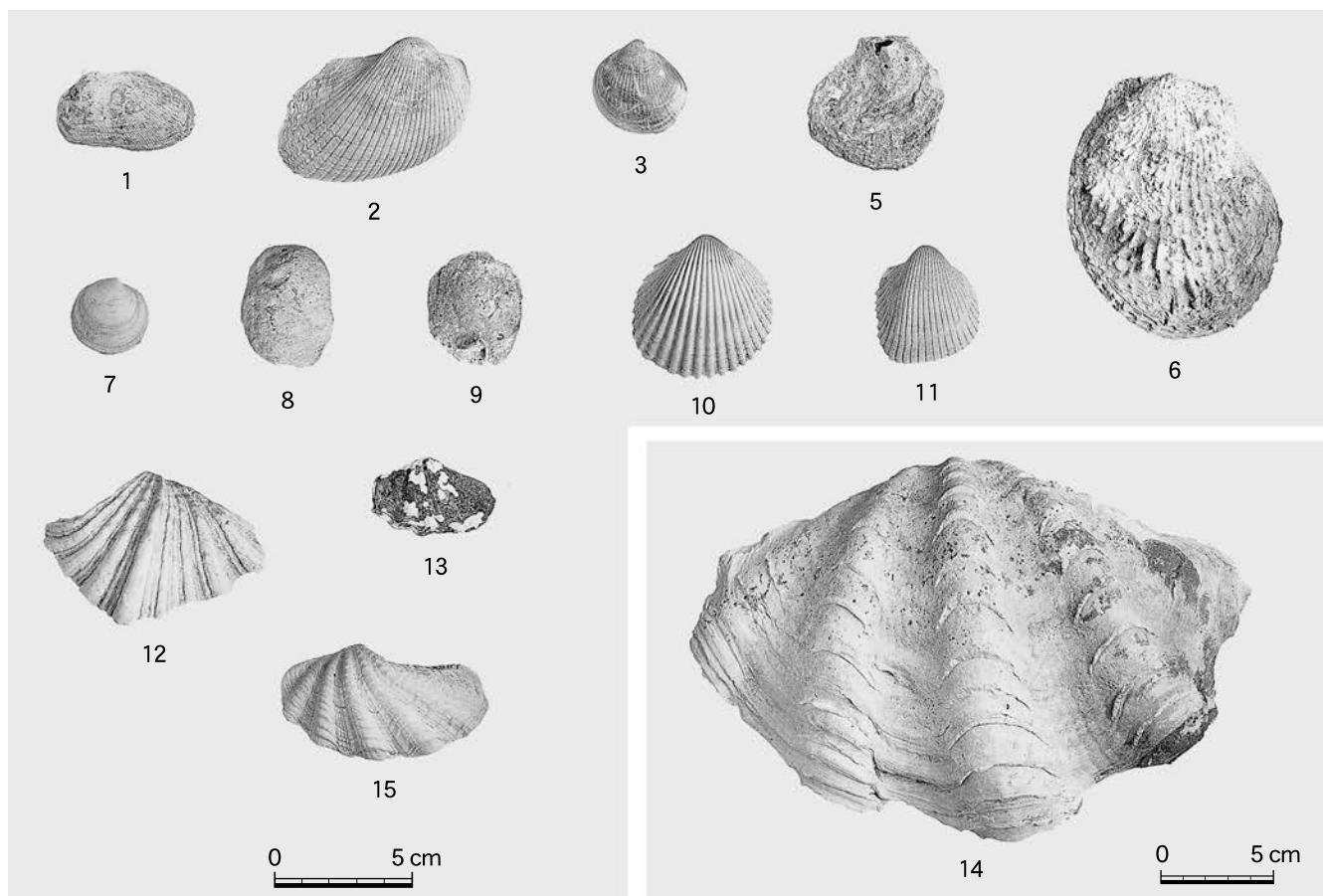
図版66 円盤状製品



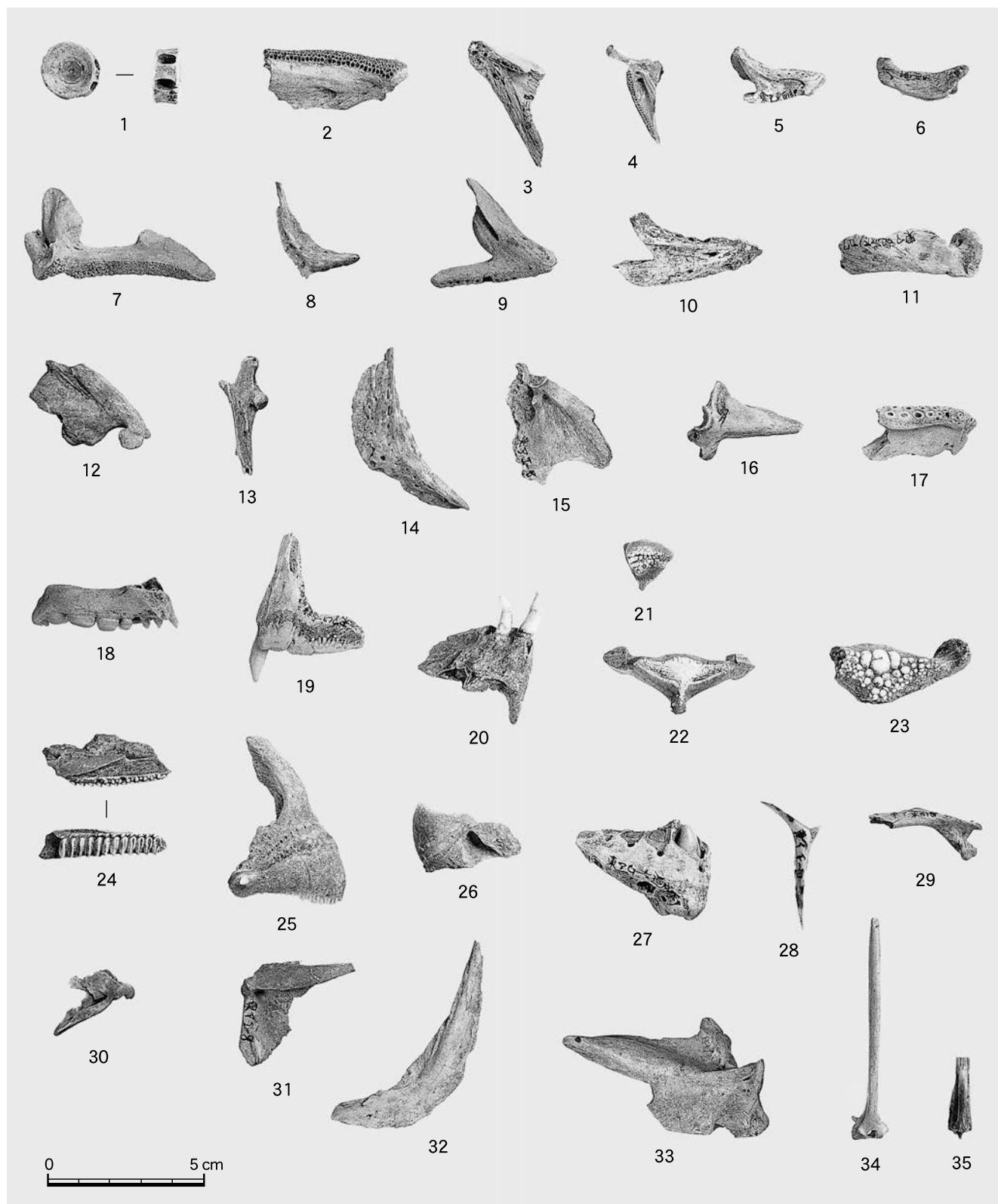
図版67 貝類遺存体：巻貝（1）番号は表と一致



図版68 貝類遺存体：巻貝（2）番号は表と一致

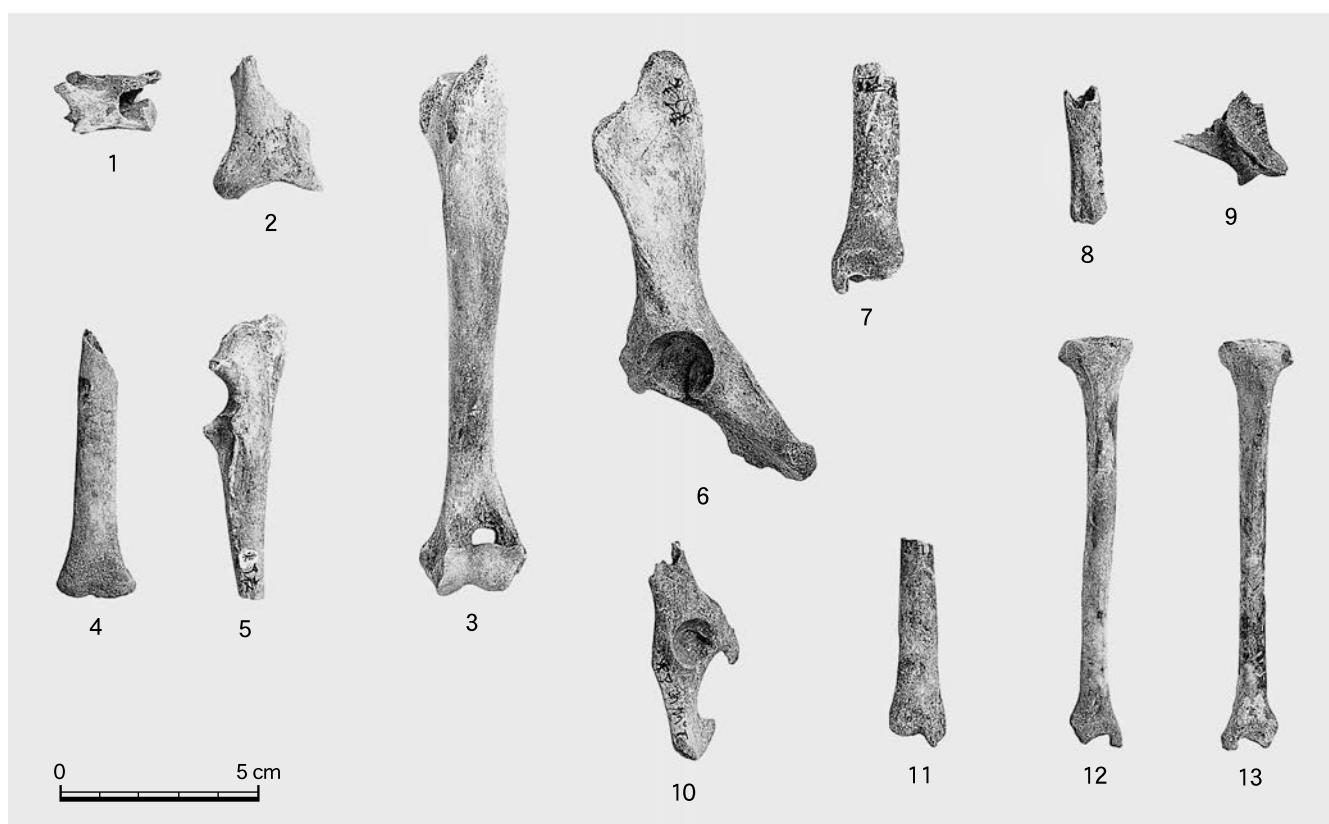
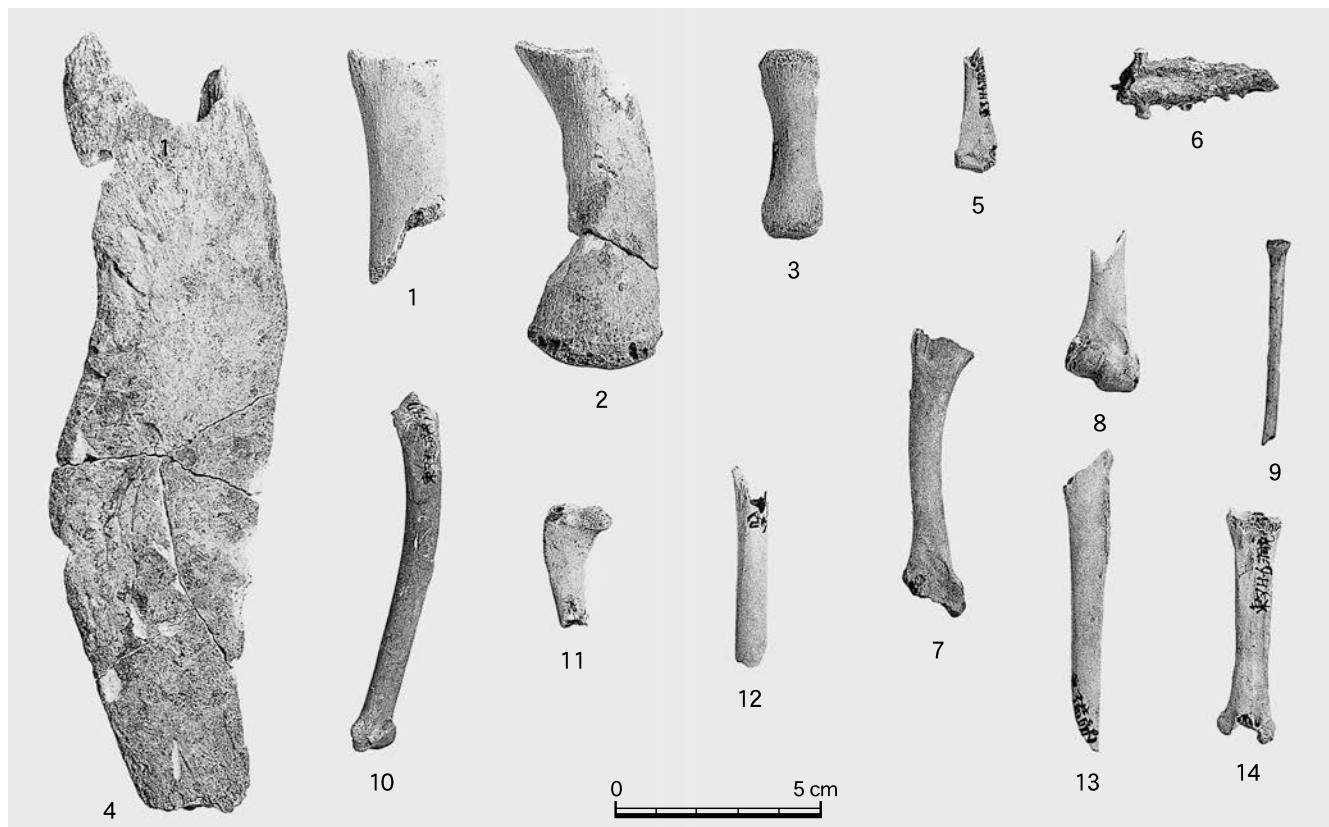


図版69 貝類遺存体：二枚貝 番号は表と一致



図版70 骨(1)

サカナ:メジロザメ科 1.脊椎骨 ハタ科 2.左歯骨 ハタ類 3.鋤骨 4.口蓋骨 クロダイ 5.左歯骨 6.左主上顎骨 フエダイ科 7.右前上顎骨 8.右前鰓蓋骨 ハマフエキ 9.左前上顎骨 10.左歯骨 11.右主上顎骨 12.右口蓋骨 13.左舌顎骨 14.右前鰓蓋骨 15.左主鰓蓋骨 16.右角骨 17.左歯骨(A) ヨコシマクロダイ 18.右前上顎骨 コブダイ 19.右前上顎骨 20.右歯骨 21.左上咽頭骨 22.下咽頭骨 タキベラ 23.下咽頭骨 ナンヨウウブダイ 24.左上咽頭骨 ブダイ科 25.右前上顎骨 26.左歯骨 モンガラカワハギ科 27.左前上顎骨 ハリセンボン科 28.棘科・種不明 29.右主上顎骨 30.左方骨(A) 31.右方骨(B) 32.左前鰓蓋骨 33.左角骨 34.背鰓棘 35.臀鰓血管門棘



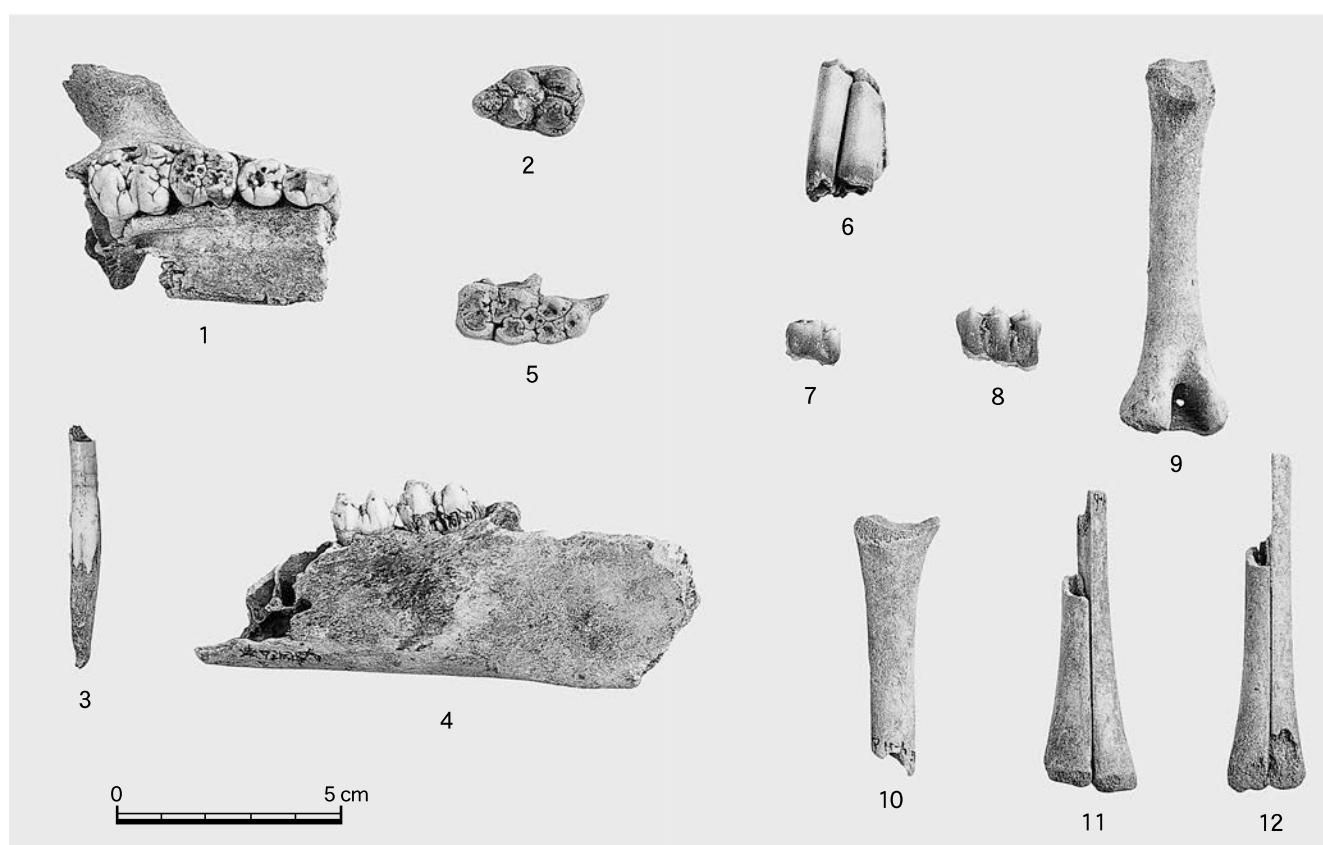
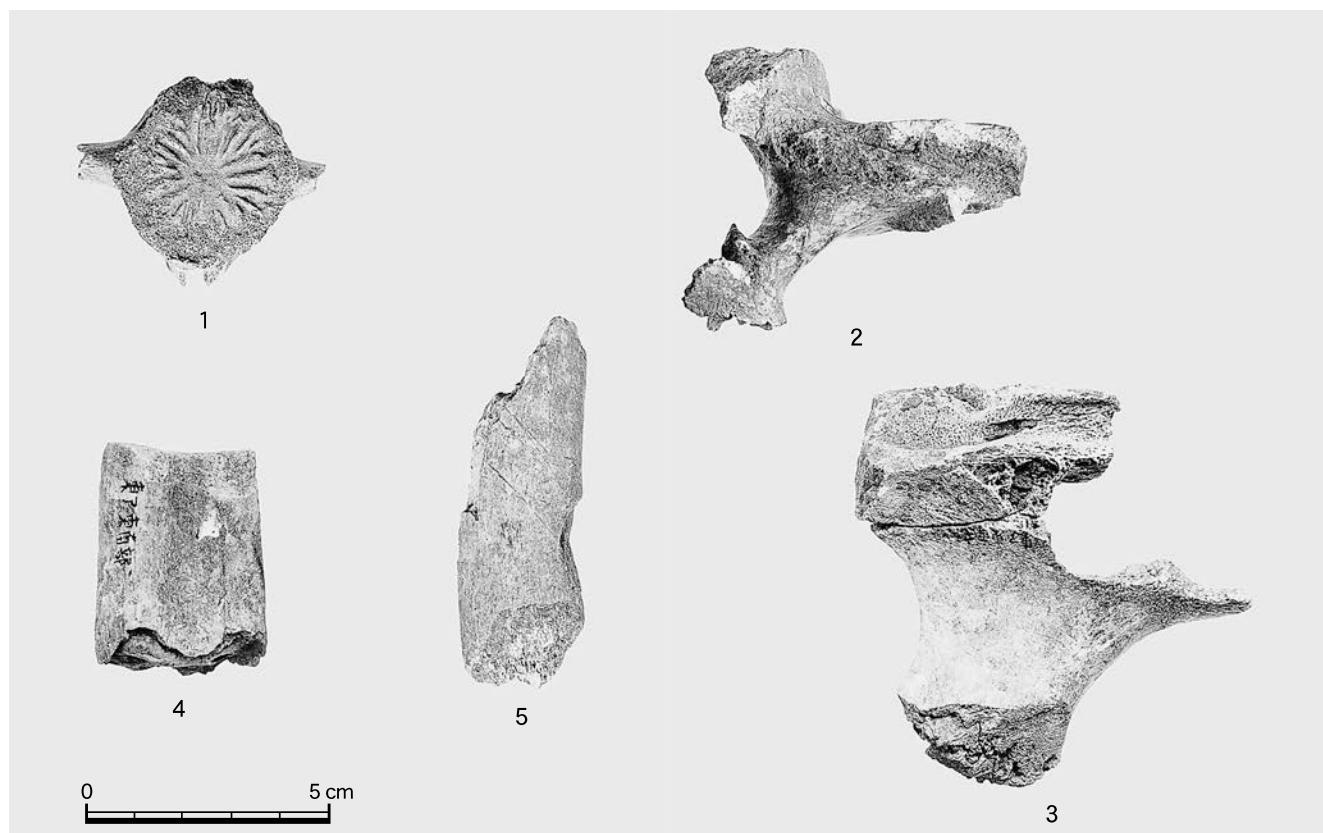
図版71 骨 (2)

上 ウミガメ:1.右 楪骨 2.右 尺骨 3.左右不明 指骨 4.右 劍状突起

ニワトリ:5.右 鳥口骨 6.胸椎 7.右 上腕骨 8.右 上腕骨 9.右 楪骨 10.右 尺骨 11.右 大腿骨 12.左 大腿骨 13.右 胫骨 14.左 中足骨

下 イヌ:1.椎体 2.左 肩甲骨 3.左 上腕骨 4.右 楪骨 5.左 尺骨 6.左 寬骨 7.左 胫骨

ネコ:8.左 上腕骨 9.右 肩甲骨 10.右 寬骨 11.左 大腿骨 12.右 胫骨 13.左 胫骨

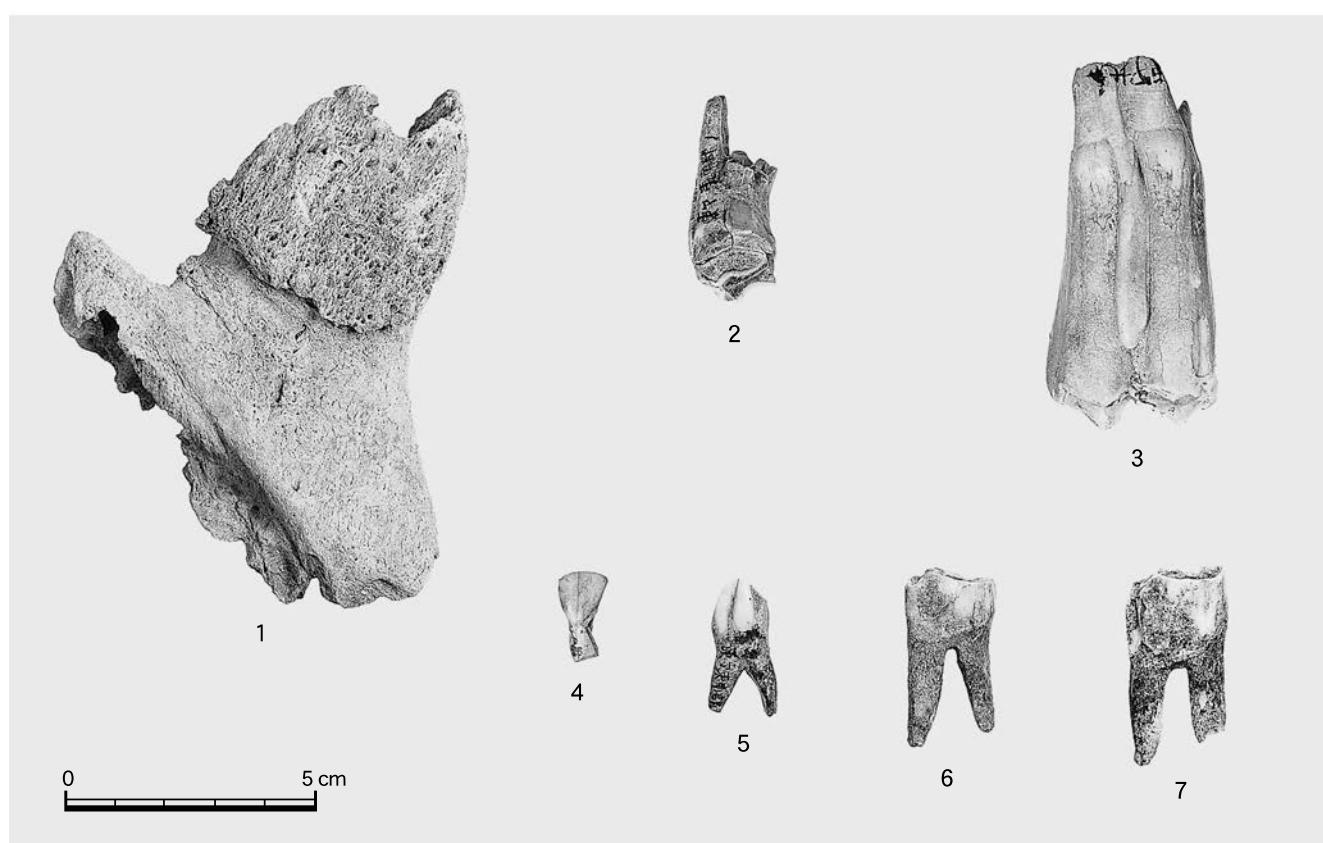
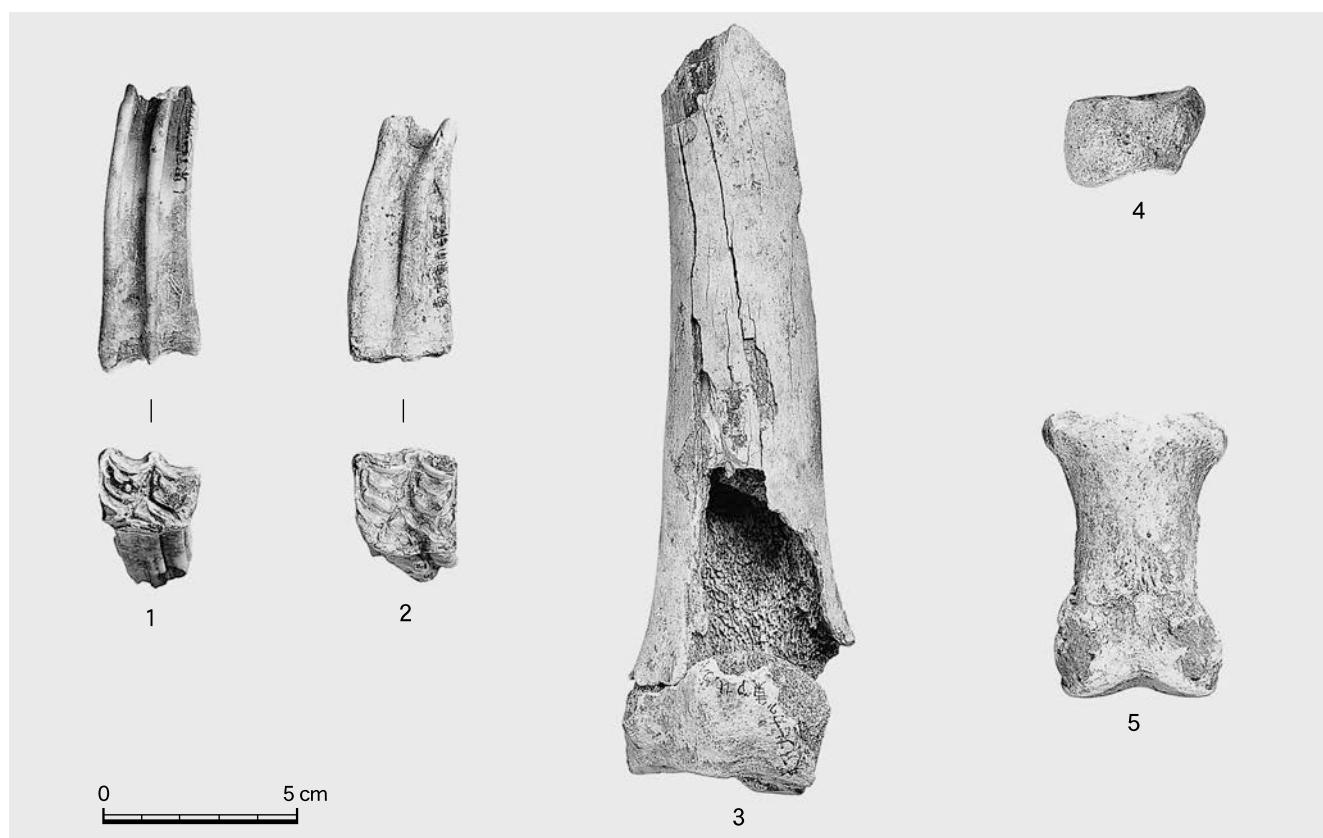


図版72 骨 (3)

上 イルカ:1.腰椎 ジュゴン:2.頭骨破片 3.右 上顎骨 4.下顎臼歯 5.肋骨

下 ブタ:1.右 上顎骨 $P^{3,4} M^{1,2}$  2.右 上顎骨 $M^3$  3.左 下顎骨 $I_2$  4.左 下顎骨 $M_{1,2}$  5.右 下顎骨 $M_3$

ヤギ:6.左 上顎骨 $M^3$  7.左 下顎骨 $dm_3$  8.左 下顎骨 $dm_4$  9.右 上腕骨 10.左 構骨 11.左右不明 中手骨 12.左右不明 中足骨



図版73 骨 (4)

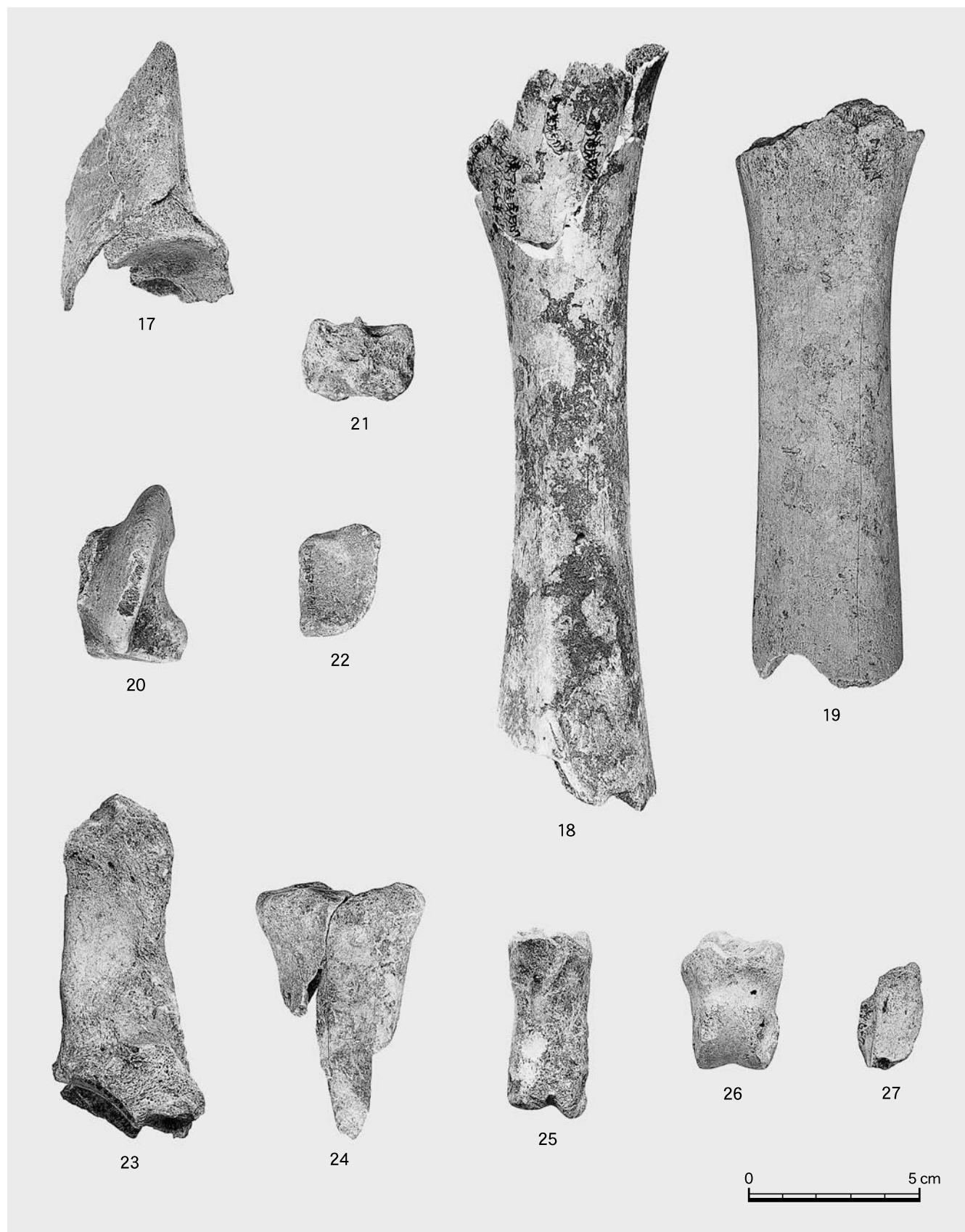
上 ウマ:1.左 上顎骨P<sup>3</sup> 2.右 上顎骨P<sup>4</sup> 3.右 橫骨 4.左 橫側手根骨 5.基節骨

下 ウシ:1.左 角 2.右 上顎骨P<sup>2</sup> 3.左 上顎骨M<sup>2</sup> 4.右 切歯骨 5.右 下顎骨P<sub>2</sub> 6.右 下顎骨P<sub>3</sub> 7.右 下顎骨P<sub>4</sub>



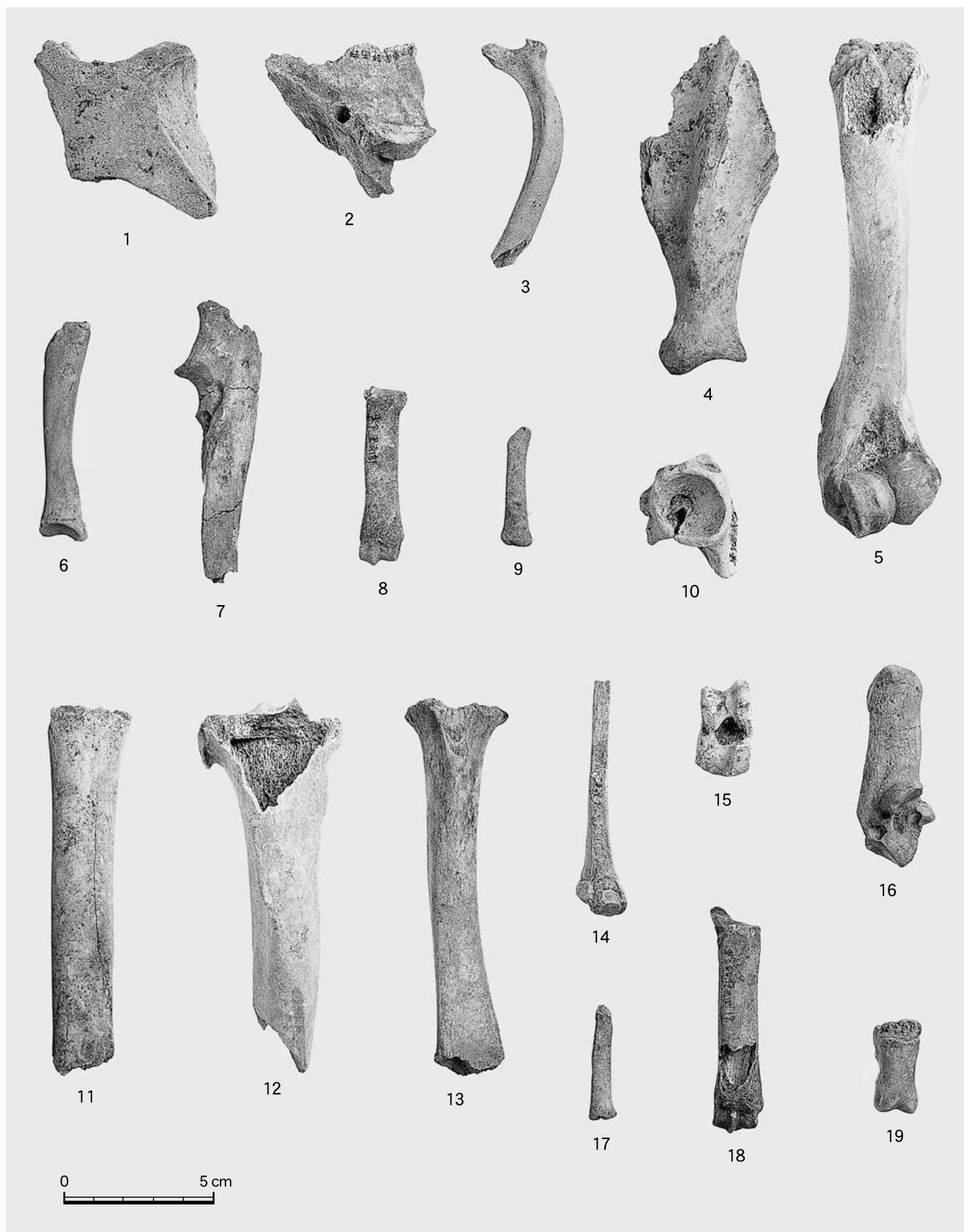
図版74 骨（5）

ウシ:8.肋骨 9.左 肩甲骨 10.右 上腕骨 11.右 桡骨 12.右 尺骨 13.右 第4手根骨 14.右 桡側手根骨 15.右 中手骨 16.左 中手骨



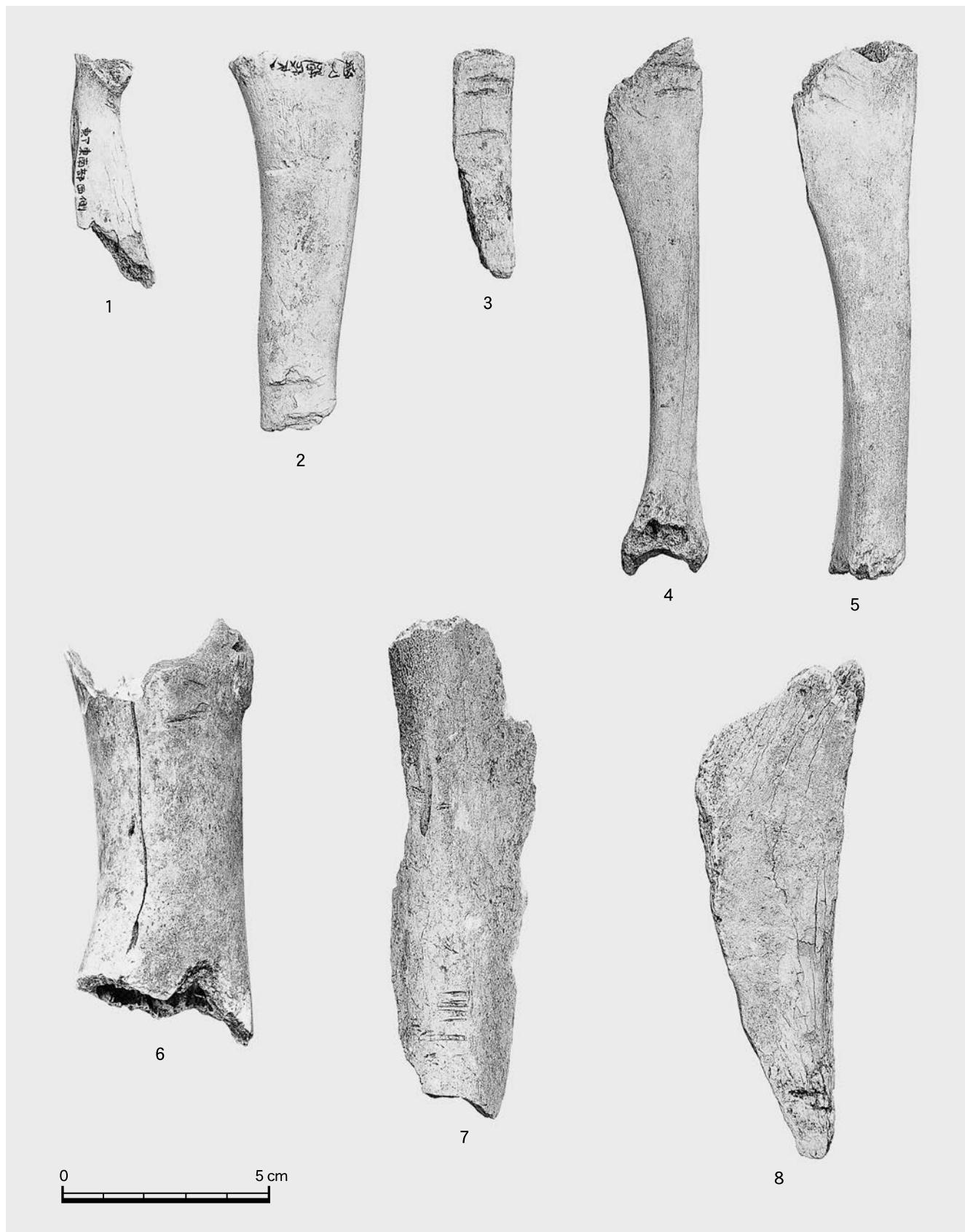
図版75 骨(6)

ウシ:17.右 寛骨 18.右 大腿骨 19.左 脛骨 20.右 距骨 21.左 果骨 22.右 2+3足根骨 23.右 跖骨 24.左 中足骨 25.右 基節骨  
26.右 中節骨 27.右 末節骨



図版76 骨 (7)

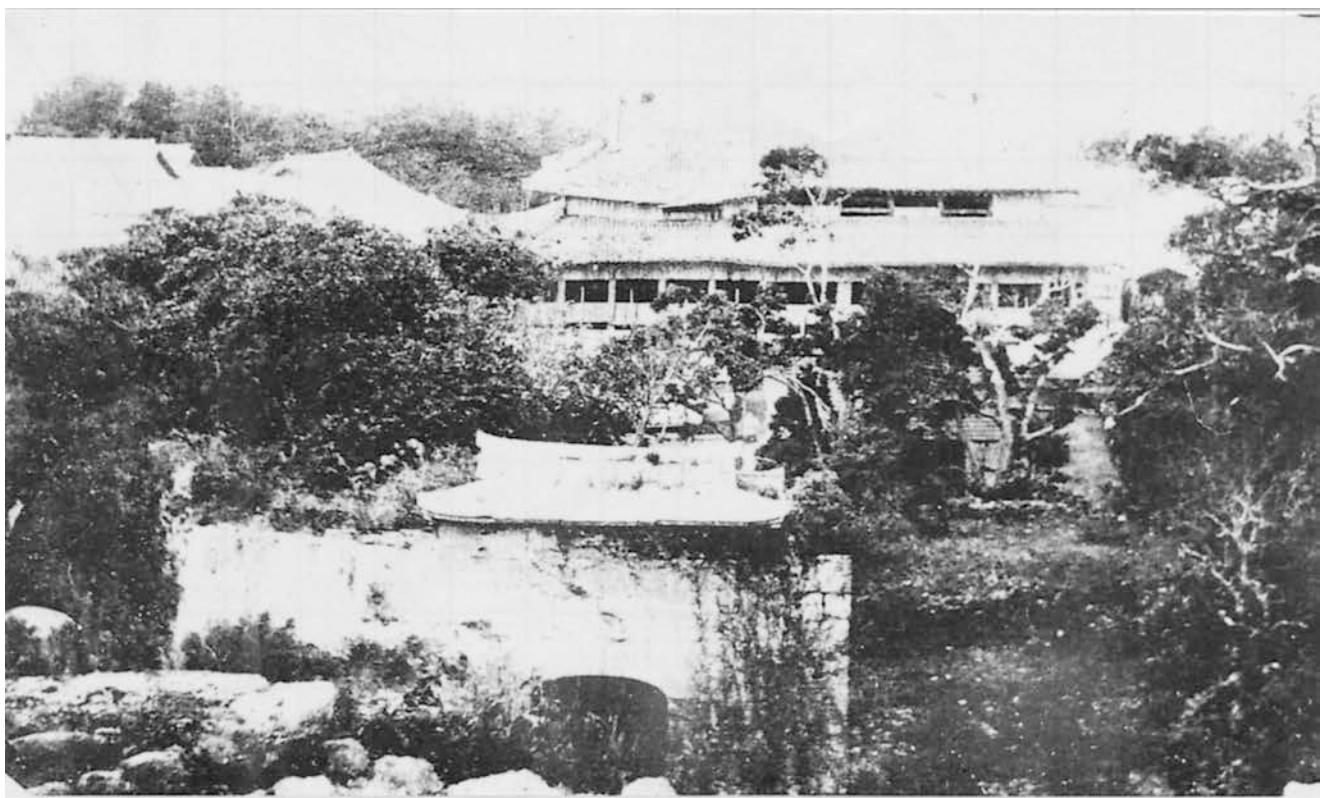
ブタ:1.頭頂骨 2.右 側頭骨 3.左 肋骨 4.左 肩甲骨 5.右 上腕骨 6.左 桡骨 7.左 尺骨 8.左 中手骨IV 9.左 中手骨V 10.左 寬骨  
11.左 大腿骨 12.右 脛骨 13.左 脛骨 14.右 腓骨 15.左 距骨 16.右 距骨 17.左 中足骨II 18.左 中足骨IV 19.左 基節骨



図版77 切裁痕のある骨

ブタ:1.左 肋骨 2.左 上腕骨 3.右 尺骨 4.右 脛骨 5.右 脛骨

ウシ:6.左 上腕骨 7.右 脛骨 8.右 尺骨

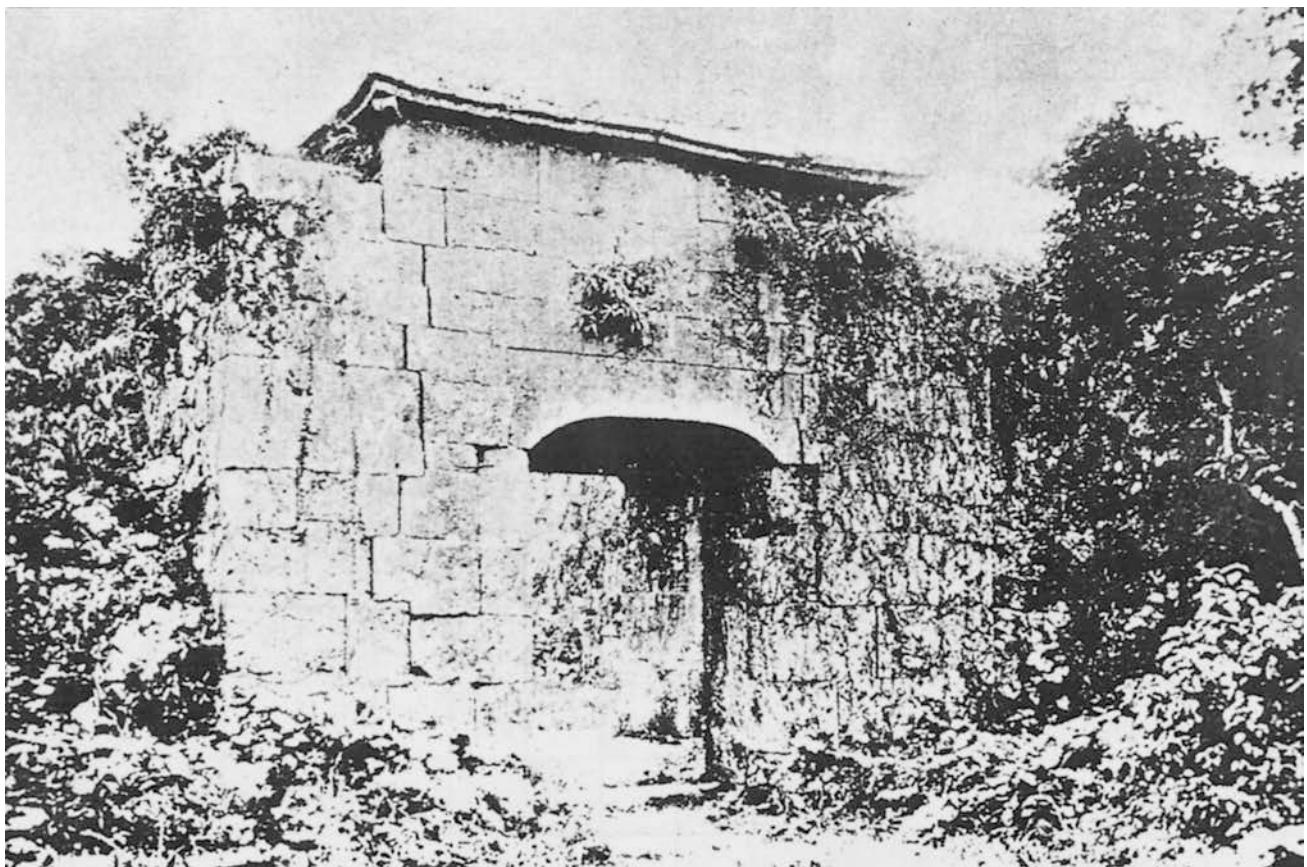


東のアザナから白銀門と正殿を望む(沖縄総合事務局開発建設部ほか1986)

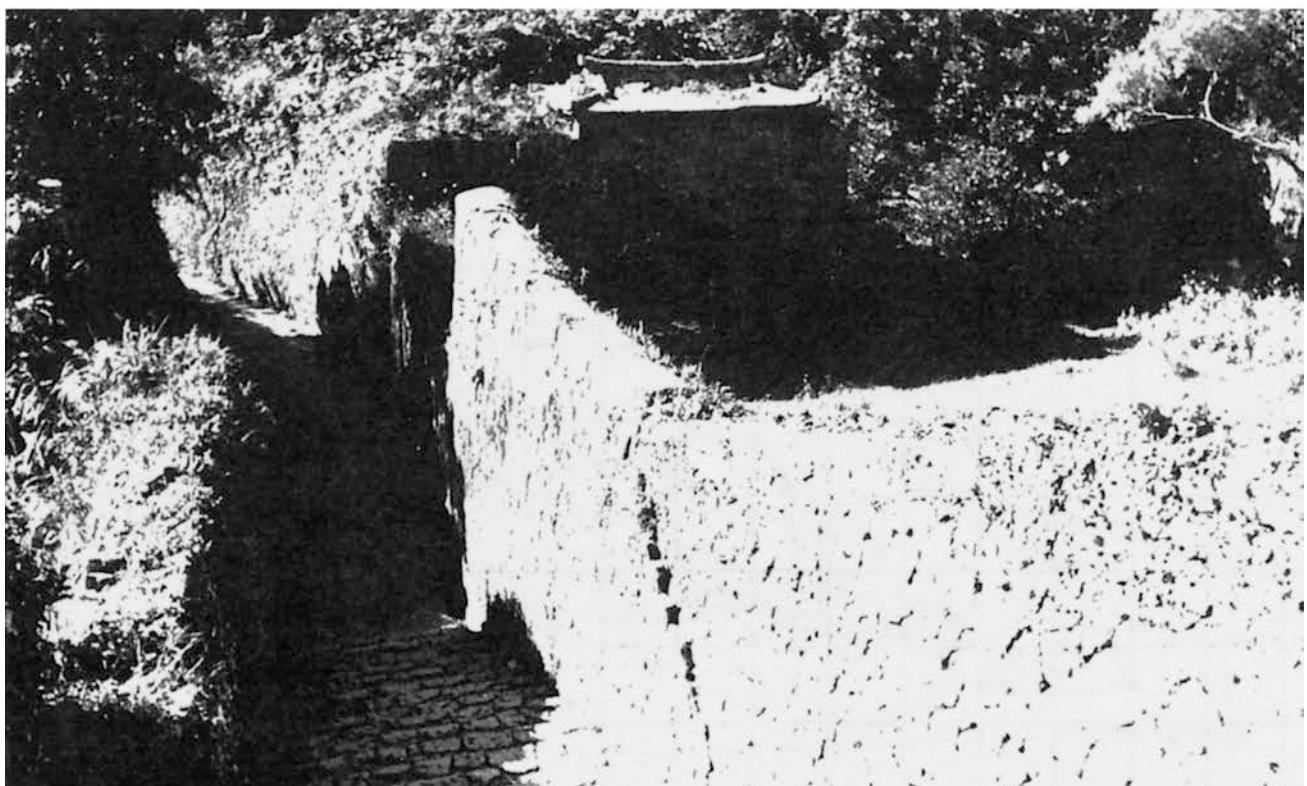


東のアザナから白銀門を望む(沖縄総合事務局開発建設部ほか1986)

図版78 参考資料（1）



白銀門(沖縄総合事務局開発建設部ほか1986)



首里城白銀門(内側)と東のアザナへ昇る石段(昭和10年頃那霸出版社1984)



東のアザナへ昇る石段 左の石門内は寝廟殿跡(那覇出版社1984)

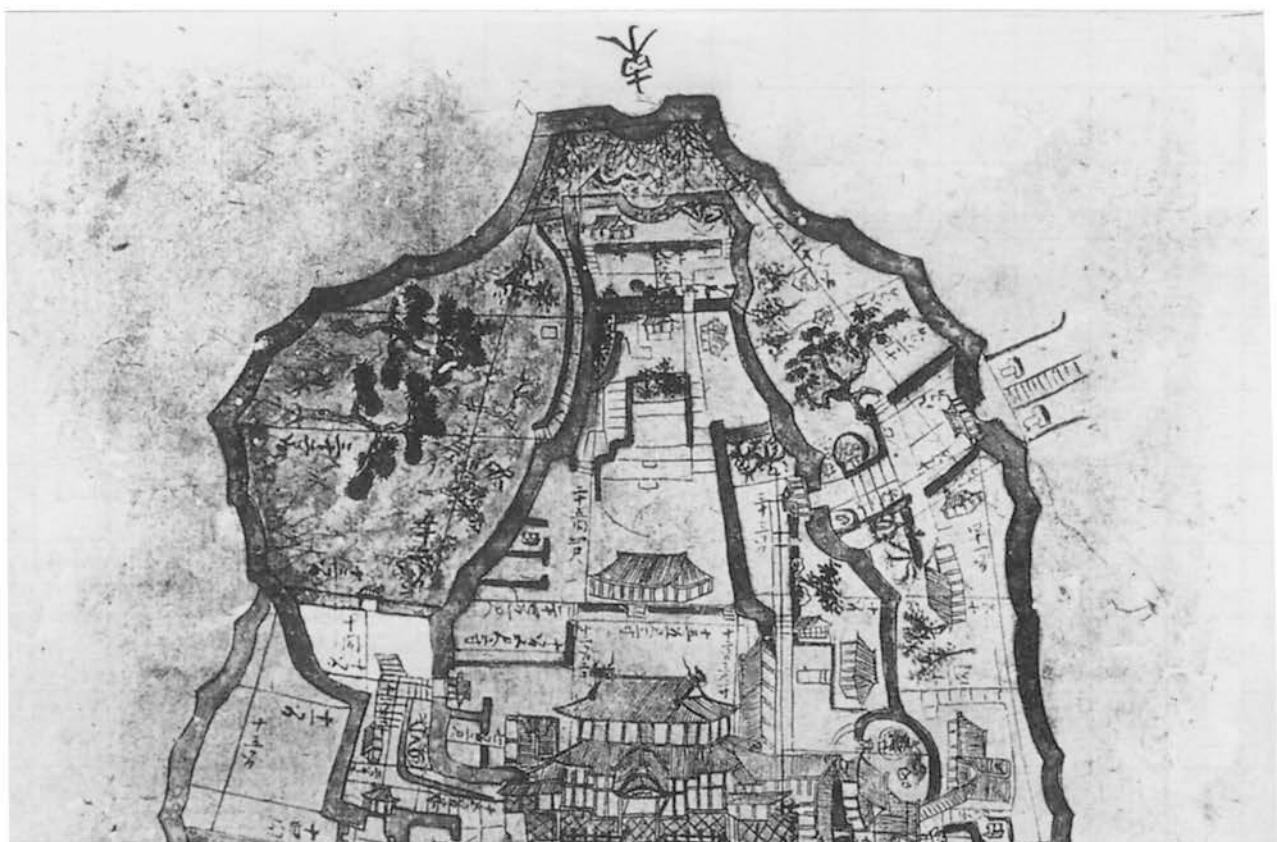


旧琉球大学開設当初 (西側から 沖縄総合事務局開発建設部ほか1986)

図版80 参考資料（3）



首里古地図(沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所1995)



首里城古絵図(沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所1995)

図版81 参考資料 (4)

第89表

首里城関係主要年表( 1 )

年代	王統	主な事項	中国	中国歴	日本	和歴	主な事項
607年		隋の煬帝、朱寛を琉球に派遣。	629年	舒明1			このころ『隋書』(琉球国伝)編集(~656年)
753年		鑑真ら阿児奈波に漂着する。					
1187年	舜天1	舜天王即位と伝わる。			1192年	建久3	鎌倉幕府創立。
1260年	英祖1	英祖王即位と伝わる。	1271年	至元8			蒙古、国号を元とする。
1296年	英祖38	沖縄本島に元軍襲来という。	1274年	至元11	1274年	文永11	元軍日本襲来(文永の役)。
1350年	察度1	察度王即位(浦添按司から王となり首里へ~)	1281年	至元18	1281年	弘安4	元軍日本襲来(弘安の役)。
			1333年	元統1	1333年	元弘3	鎌倉幕府滅ぶ。
1372年	察度23	中山王察度、はじめて明に入貢。	1338年	至元4	1333年	延元3	室町幕府成立。
1389年	察度40	察度、朝鮮(高麗)と通好する。	1368年	洪武1			元滅び、明建国。
1392年	察度43	高世層理殿で遊観する。	1369年	洪武2			景德鎮朱山山麓に御器廠を設け監督官を置き焼造一説に景德鎮御器廠はこの年に設けられる。
1404年	武寧9	冊封使、はじめて来疏。シャム(タイ)船渡来し交易。	1392年	洪武25			
1406年	尚思紹1	察度王統亡び、尚思紹、中山王となる。(第一尚氏)					
1416年	尚思紹11	尚巴志、山北王攀安知を討つ。					
1421年	尚思紹16	パレンバン(インドネシア)と交易はじまる。					
1427年	尚巴志6	龍潭を堀り安国山を築く。					
1428年	尚巴志7	国門(中山門)を創建。					
1429年	尚巴志8	尚巴志、山南王他魯毎を滅ぼし全島を統一する。					
1430年	尚巴志9	ジャワ(インドネシア)との交渉はじまる。					
1453年	尚金福4	志魯・布里の乱、首里城炎上。					
1454年	尚泰久1	琉球銭貨、大世通宝が初めて鋳造。					
1458年	尚泰久5	護佐丸・阿麻和利の乱。万国津梁の鐘を鋳造。					
1459年	尚泰久6	王府失火で倉庫などを焼く。					
1461年	尚徳1	琉球銭貨、世高通宝が初めて鋳造。					
1463年	尚徳3	マラッカ(マレーシア)へ使者を派遣。					
1466年	尚徳6	室町幕府に使いを遣わし、京にて「鉄砲」を試射する。	1467年	成化3	1467年	応仁1	応仁の乱始まる。
1470年	尚円1	尚円(金丸)即位。(第二尚氏)。					
		琉球銭貨、金圓世宝が初めて鋳造。					
1477年	尚真1	首里城歓会門、久慶門創建。与那国に朝鮮	1477年	成化13	1477年	文明9	応仁の乱終わる。
		濟州島漁民金非衣ら漂着する。					
1490年	尚真14	パタニ(タイ)と初めて交易。					
1494年	尚真18	円覚寺を創建。					
1500年	尚真24	八重山、アカハチ・ホンガワラの乱。					
1501年	尚真25	玉陵を築く。					
1506年	尚真30	久米島、具志川按司を征討。					
1508年	尚真32	首里城北殿創建。					
1522年	尚真46	与那国、鬼虎の乱。					
1529年	尚清3	首里城守礼門創建。					
1532年	尚清6	「おもろさうし」巻1編集。			1531年	享禄4	一向一揆、越前朝倉氏を破る。
1534年	尚清8	陳侃、来琉。					
1546年	尚清20	首里城東南の城壁工事完成。	1543年	嘉靖22	1543年	天文18	鉄砲伝来。
1554年	尚清28	倭寇を防ぐため屋良座森城竣工。					
1556年	尚元1	倭寇を擊退する。	1572年 1600年	隆慶5 萬曆28	1572年 1600年	元亀3 慶長5	室町幕府滅ぶ。 関ヶ原の戦い。
1605年	尚寧17	湧田窯にて「萬曆33年」銘入りの瓦器が焼成される。					
1609年	尚寧21	慶長の役、薩摩軍侵攻。					
1616年	尚寧28	薩摩より朝鮮陶工、張一官、安一官、安三官をつれ帰り、湧田窯を開く。	1616年 1634年	萬曆44 崇禎7	1634年	寛永11	後金国(後の清国)。
							鎖国令。

第90表

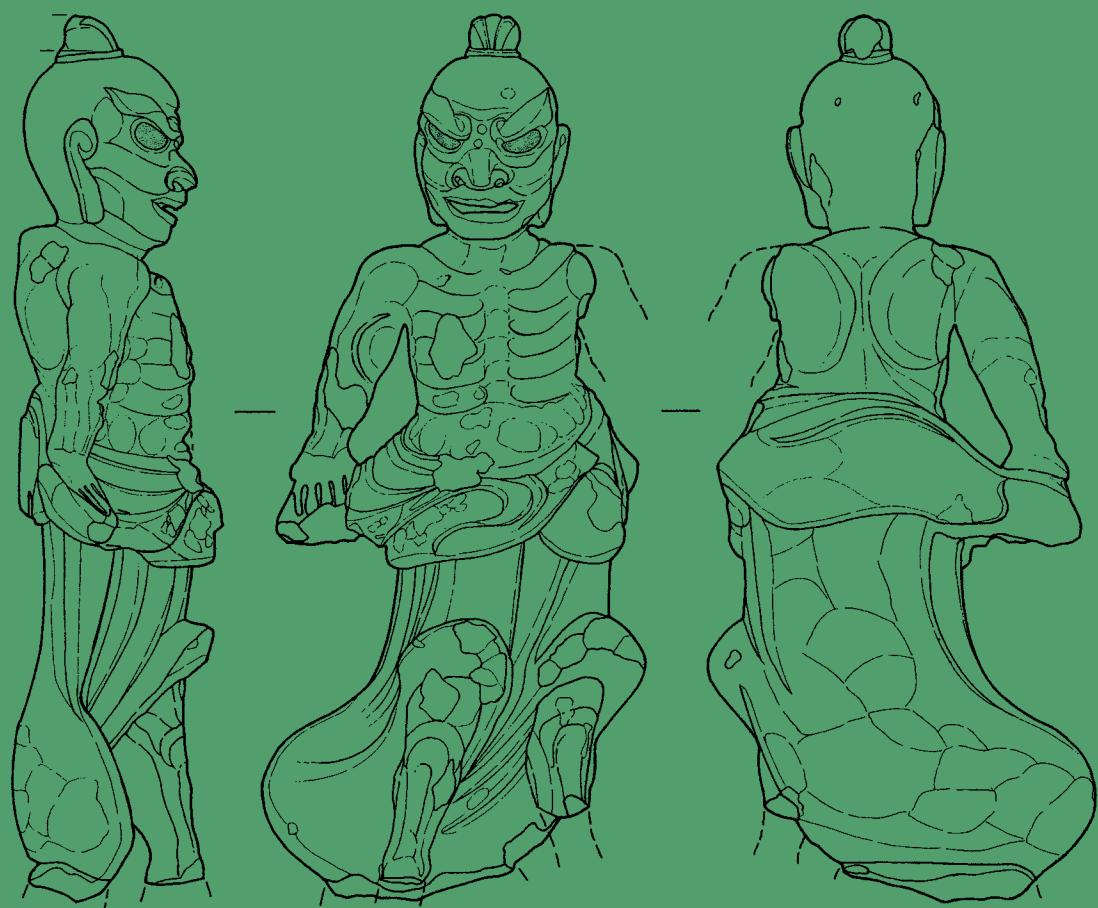
首里城関係主要年表(2)

年代	王統	主な事項	中国	中国歴	日本	和歴	主な事項
1623年	尚豊3	「おもろさうし」巻3以下となる。	1636年	崇禎9		→	後金国、国号を清とする。
1628年	尚豊8	首里城南殿創建。		崇禎10	1637年	寛永14	島原の乱(～1638年)。
1633年	尚豊13	杜三策、来琉。		順治1		→	明朝滅亡。
1660年	尚質13	首里城正殿焼失。	1662年	康熙1		→	明王殺害完全滅亡。
1665年	尚質18	平田典通ら諫方仲左衛門より上焼物秘伝書を譲り受ける。					
1671年	尚貞3	首里城正殿の再建工事始まり、瓦葺に建て改められる。					
1672年	尚貞4	平田典通、中国から「五色玉諸焼物葉掛け」の法を学び帰国。					
1682年	尚貞14	陶工を牧志村壺屋に集住させる。					
1709年	尚貞41	首里城正殿、南殿、北殿焼失。					
1712年	尚益3	首里城北殿、南殿再建。					
1724年	尚敬12	仲村渠致元、八重山山田平等に窯を作り窯および上焼を伝授。					
1726年	尚敬14	八重山、山田平等窯より「雍正4年丙午」銘入り無釉陶器が焼成。	1726年	雍正4			
1729年	尚敬17	首里城正殿重修される。					
1730年	尚敬18	仲村渠致元、薩摩の立野と苗代川において陶器の陶法を伝授。					
1731年	尚敬19	仲村渠致元、湧田にて磁器を焼く。					
1739年	尚敬27	漏刻門に日時計を置き時刻を計る。					
1753年	尚穆3	首里城内に寝廟殿、世添御殿を創建。					
1768年	尚穆17	地震の被害にあった首里城正殿を重修。			1776年	→	アメリカの独立宣言。
1846年	尚育12	首里城正殿重修。	1840年	道光20	1789年	→	フランス革命。
1853年	尚泰6	ペルリ提督来琉、首里城訪問。				→	アヘン戦争。
1854年	尚泰7	ゴンチャロフ、来琉。					
1857年	尚泰10	中城御殿(世子殿)を当蔵へ移転。			同治6	1867年	慶応3 江戸幕府倒れる。
1874年	尚泰27	琉球王国最後の進貢船渡清。			同治7	1868年	明治1 王政復古。
1879年	尚泰32	首里城明渡し、熊本鎮台遣隊駐留。	1894年	光緒16	1894年	明治27	日清戦争おこる。
1897年	明治30	沖縄県師範学校、首里城から当蔵に移転。					
1908年	明治41	中山門、腐朽のための壳却撤去。			光緒30	1904年	明治37 日露戦争おこる。
1909年	明治42	首里城跡、首里区に払い下げる。	1911年	宣統3		→	中国に辛亥革命おこる。清朝滅亡。
1912年	明治45 (大正1)	首里城に第一小学校ができ、広福門、奉神門が撤去される。	1912年		1912年	明治45	中華民国成立。
1924年	大正13	沖縄神社創建し正殿を拝殿とする。			1914年	大正3	第1次世界大戦はじまる。
1925年	大正14	正殿国宝指定。			1917年	大正6	ロシア革命。
1927年	昭和2	国補助による正殿の解体修理実施。					
1931年	昭和6	正殿の解体修理工事完成。			1931年	昭和6	満州事変おこる。
1933年	昭和8	欽会門、瑞泉門、白銀門、守礼門等国宝指定。					
1936年	昭和11	伊藤忠太・鎌倉芳太郎の両氏による首里城跡ほかの発掘調査(～1937)。守礼門修理着工。			1939年	昭和14	第2次世界大戦はじまる。
1937年	昭和12	守礼門修理完了。					
1944年	昭和19	首里城跡、地下に第32軍指令部壕が構築。					
1945年	昭和20	首里城の建物や石垣等、沖縄戦で焼失。守礼門全焼。綾門大道は破壊を受ける。			1945年	昭和20	第2次世界大戦終る。
1958年	昭和33	琉球政府により守礼門復元。					
1992年	平成4	首里城正殿ほか復元される。					

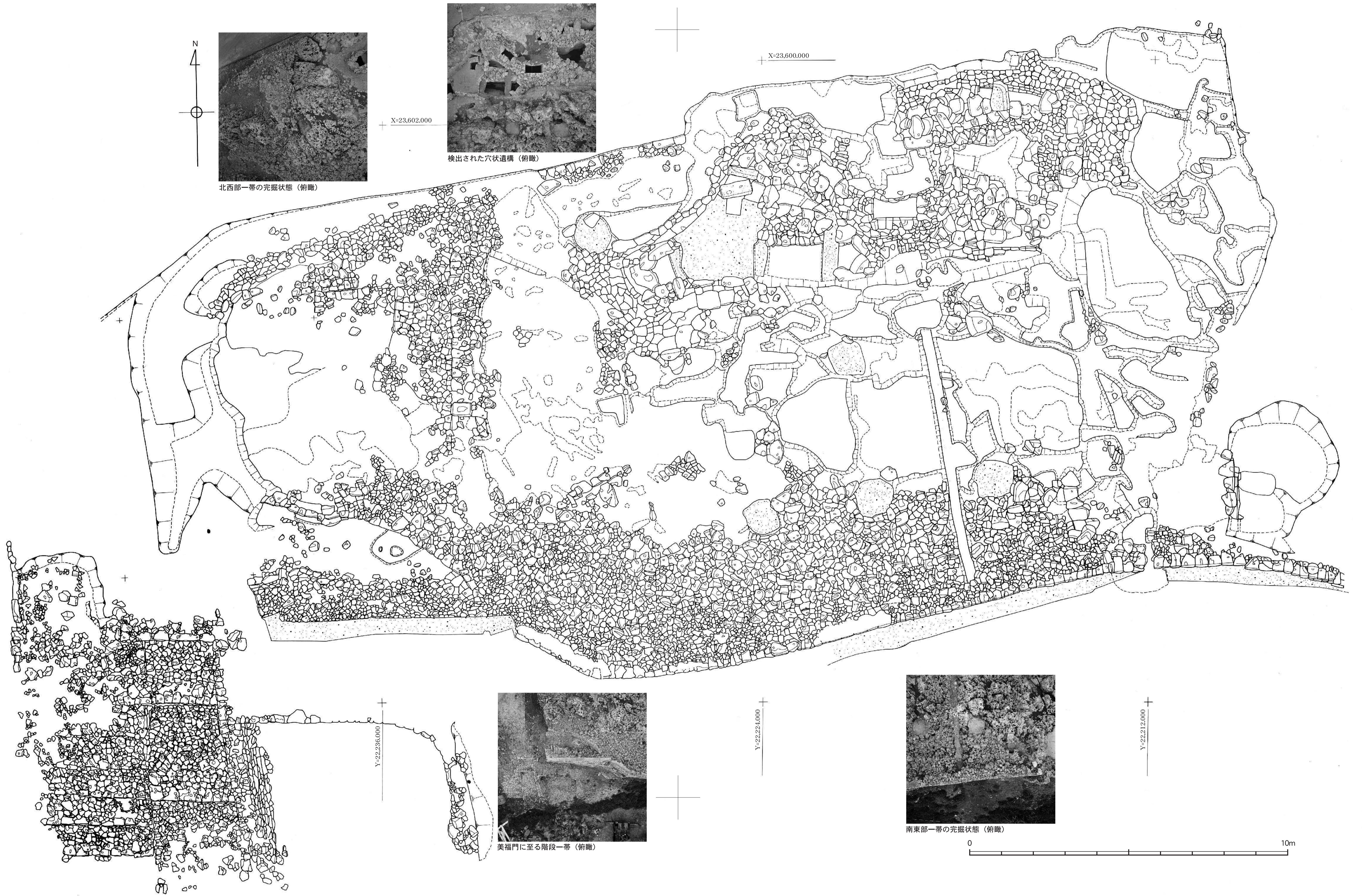
## 首里城跡

—東のアザナ地区発掘調査報告書—

発行年 2004年（平成16）3月26日  
発行 沖縄県立埋蔵文化財センター  
編集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒901-0125  
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7  
印 刷 TEL098(835)8751  
（株）池宮商会  
〒900-0015  
沖縄県那覇市久茂地2-4-23  
TEL(098)861-4005(代)



第36~39・65図より



附図1 東のアザナ検出遺構等平面図

